THE CENTRAL REVIEW

中央公論

11-1930

十一月號

第四十五年 第十一號 第五百四十四號

オリエンタルの
乾板と印画紙

國産奨勵は先ず
寫眞工業の完成より
既に、完全に舶来品を
駆逐せる國産印画紙
今又、卓越せる
オリエンタル乾板の出現

東京　落合町
オリエンタル寫眞工業株式会社
電話大塚(86)三四二五・三四二七

戀愛の立體的形相……新居格

戀愛の階級性……江馬修

外人に交際を求められた女へ……丸木砂土

言葉の始期……山木德治

戀愛プロムナード……よし子

支那の新しい女……室伏高信

秋怨帖……吉井勇

病癒えて必勝のプレートへ……小川正太郎

父を獄舍に奪はれた坊や

人も知る××黨の闘士の妻は何を語らんとす？

難波清子

男の戀・女の戀

戀愛遍路行を了へた筆者が語る、すずろ戀心。

宇野千代

マルクス・ガール物語……貴司山治

荷馬車輓の娘の手記……杉内いち

女早慶野球座談會

既婚者との戀愛受難記……岡田彩子

良人の秘密……辰野九紫

お千代の兄より

小林倉三郎

再び——人妻の双のたもとは短しやあはれと詠じて大谷崎の妻千代氏との心のもつれに衰を嘆じた春夫氏は「僕等の結婚」によつて甦つた。賢愚、糟糠の妻であつた千代氏は眞によき妻であり乍ら何故、大谷崎のもとを去つたか。千代氏の實兄小林氏が謙讓なる熱情をこめてこの妻君讓渡の妥當性を說く珠玉の篇。

好評連載小說

肉身の殺人……濱尾四郎

極光……里見弴

女給……廣津和郎

漸く本筋に入つたこの壓篇は近く終回せんとする。作者の筆は秋刀の如く冴ゆ。

街の旋風……谷崎精二

貯藏醱酵に年を經たこの小說はまさに旋風の如く巷路の人氣をあふつてゆく。

モダン戀愛

こゝに友あり……水谷準

斷髮と結婚……楢崎勤

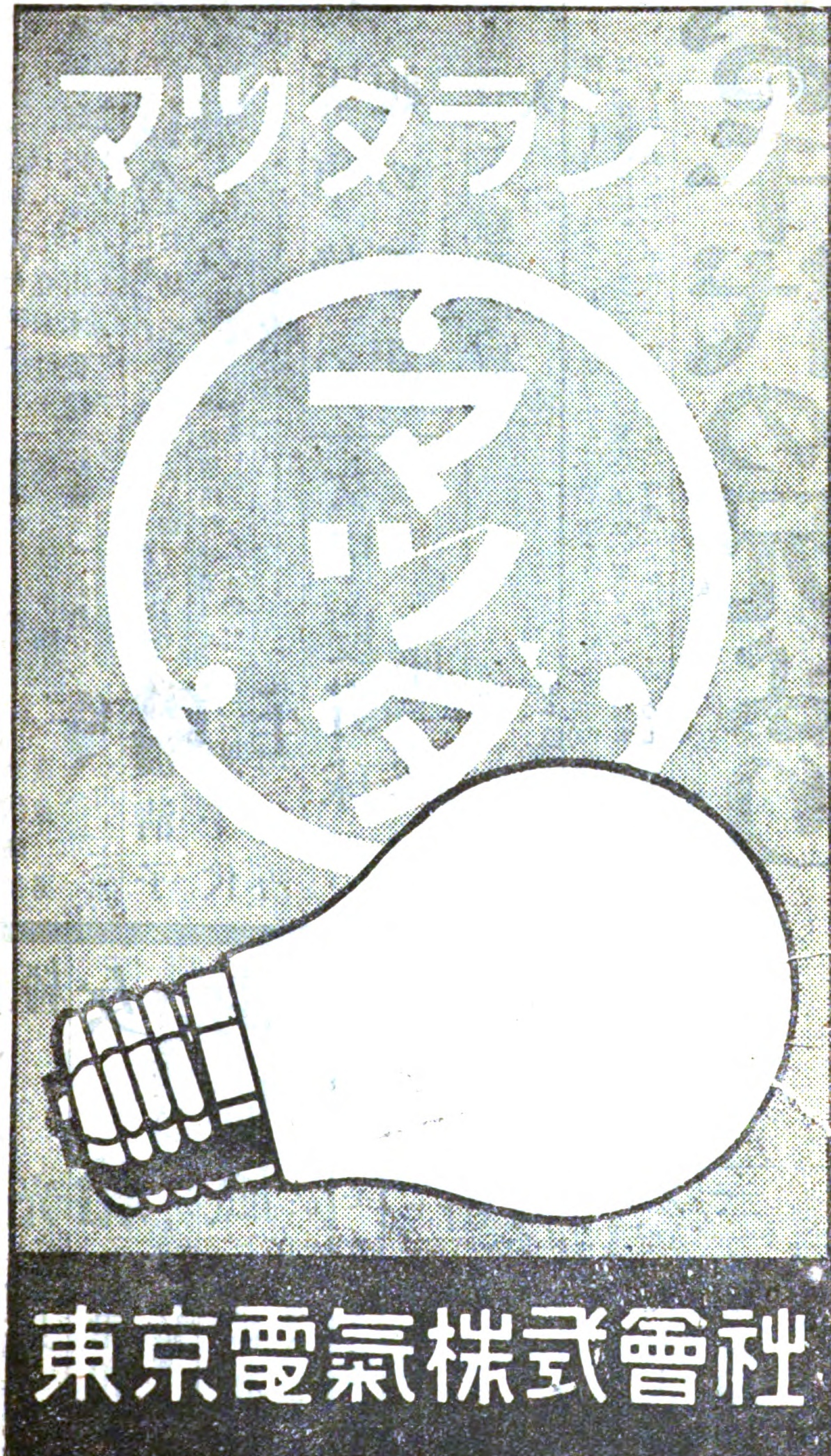
陷し穴……陶山密

ナンセンス

東京・大阪・京都

三都名物

料理粋


マツダランプ
マツダ
東京電氣株式會社



小春日　　　　森田恒友作

研究社

英文學叢書

第五輯

立教大學英文學科々長 岡倉由三郎先生
東京帝國大學文學部教授 市河三喜先生
主幹

（全廿巻）

豫約募集

我國民本位の英文學

特に近代の精華を蒐む

本叢書が大正昭和の讀書界を光被する大照明燈たる事は萬人之を認める。洵に古今の英文學は詳註本叢書によつて完全に我國民の魂の糧となつた。而して弊社は新たに第五輯廿巻を江湖に送る。卽ち既刊八十巻に冠する大ドオムとして最近代の八大家**ハーディ**、**ショー**、**ベネット**、**キップリング**、**ウェルズ**、**チェスタトン**、**グレゴリー夫人**及び**オニール**の代表作を中心に併せてクラシックの名篇大作を提供する事とした。實に前四輯の各書目にも優れる偉觀である。冀くば前會員並に知識階級諸賢、速に豫約に應ぜられて更に深く英文學の滋味を掬み給へ！

■豫約締切 十一月十日限

會期 昭和五年十一月下旬配本開始 同六年十月を以て全廿巻完結

體裁 清新四六判・上等クロース天金 印刷鮮明・製本頗る堅牢典雅

會費 一時拂金五拾圓前納・毎月拂四圓五拾錢宛・他に要送料

申込金 金貳圓 最終會費に繰入る

■詳細解說 內容見本贈呈

東京麹町區富士見町六丁目

研究社英文學叢書部

電話九段四〇二四・〇三 振替東京二八六〇一番

罌粟は何故紅い

宇野千代著

寥々たる女流作家群中唯一人爛々と光る氏が報知紙上初めて世に問ふた長篇小説

私は私の優しい蔓を、彼の巨大な梢のてつぺんまでも伸ばさう。彼にまつはりまつはり、夏は花咲き秋は紅葉して私の唄を唱ふであらう ―― 宇野女史は斯く宣言する。何と率直に大膽に彼女のうたふことよ。此處には現代女性の思想・心理・傾向・行動の悉くがある。男も讀め女も讀め。時代を知らずして徒らに臆し逡巡するを已めよ。裝幀は彼女をして愛すべき蔓草たらしめた巨大なる梢、彼東郷靑兒氏の熱作である。

四六判四六〇頁
定價一圓二十錢

東京驛前丸ビル
振替東京三四番
中央公論社出版部

爭議調停に對する事業主の不平

——(巻頭言)——

近く政府が勞働爭議調停官會議を招集すべきの報あるに際し、頻りに新聞を通じて調停官に對する事業主側の不平不滿なるものが放送される。調停官に其人を得ないとか爭因の探究に疎かだとかは事實の問題として我々の論ずる限りでないが、調停條件と調停方針とに關するものに付ては、考へ樣に依ては、稍々不問に附し能はざるものあるかに感ぜられる。

調停條件に付ては、從來の實例の大半が勞働者側の言分を取上げ唯々之を事業主に強いるに傾いて居ると云ふのが不平の要點らしい。併し調停條件の當否は一方の言分のみを取つたか如何に依て定まるのではない、理否を判ずる規準は別にある筈だ。個々の事實に就てはいろ〱文句もあらうが、概して云ふに、調停官の與ふる條件すらが今日の社會的正義の立場から觀て未だ可なり甘いものだとは識者間の定論のやうである。

調停方針が單に警察上の目的に出で毫も産業上の立場を顧慮せぬとの非難に至ては、吾人は寧ろ事業主側に此際大に反省すべき必要あるを思ふものである。或者は曰ふ不景氣で損が立つ損をしてまで勞働者の言分を聽く理由はないと。併し雇主と雇人とは、日用品の賣主と買主との關係の如く勝手に取引をやめることの許さるべきものではない。或者は曰ふこの上勞働者の言分を聽いて居ては株式の配當が減ずると。此抗辯を目して一概に株主偏重の僻論とするは當らないかも知れない、額面に對する配當率は高くとも高い株を買つた株主に取ての利廻りは必ずしも不當の暴利と限らぬからである。併し株式が配當を多くすることに依て其價を鎚棒に吊り上げると云ふが經濟界の不健全なる徴證として極めて憂ふべき現象たることは云ふ迄もない。民衆一般の利福には換へられぬ、一時少數者の拂はせらるる多大の犠牲は氣の毒だが、株價の下り又配當の減じた方が結局世間の爲にいゝのである。又或者は曰ふ然う利益が減つては産業が不振に陥ると。利益の減少に依て資本家が投資を控へるなら、勞働者が代つて大に産業を振はして見せる。今日の勞働者に此位の意氣込あり又已に之に應ずる準備を養ひつゝあるは、眼ある者の必ずや見遁さぬ所であらう。

産業の振興、之に基く國運の隆盛。之は國家の外構へが立派になり中に棲む少數家族の懐が肥えたと云ふ事ではない。無知の田舍者は地主が勳章を買つたとか其の伜が大學を卒業したとか云つては身錢を切て祝賀會を開いた、之が村の發展であり又自分達の名譽だと喜んだ。暫くして彼等は地主のふとるに逆比し自家の窮所の益々さびれるに氣付いて、之が本當の隆運かと疑ふ樣になつた。之と同じく唯少數資本家の懐が肥えるだけなら産業の振興が何になる。

勞働者の中には資本家側の讓歩を待たず一擧に其の本壘を屠らんと謀る者もある。それには下層階級全衆を奮起させるを急務とする。さうなると所謂福利の増進などは最早問題ではない、階級的闘爭心の擴大強化を唯一の旗印とし、勝利を近きに期して一時の慘苦を忍び決死的熱情を以て勇往邁進する者ある所以である。

理論から云ても勢から云ても、事業主諸君よ、今は女々しい不平不滿をならべる場合ではあるまい。

中央公論



第四十五年第十一號
十一月號
第五百四十四號

大學の自由とは何か

河合榮治郎

（一）

大學が現社會に於ていかなる地位を占めるかに就て、漸く學議が高まりつゝある。此の問題を逸早く提起して、社會の關心を促した功績は、マルクス主義者に歸せねばなるまい。苟くも身を大學に置くものは、自己の所屬する大學なるものに就て、夙に一定の見解を保持すべきであつた、又その見解に基いて大學をば「あるべき」大學に改革すべく、夙に努力を

牽制すべきであつた。若しそれが爲されてゐたならば、マルクス主義者の大學論の擡頭するや、響きの聲に應ずるが如くに、卽座の解答を爲しえたであらう。然るに大學に職を奉ずるもの、多くが、夙に爲すべき準備を缺いた所に、平生の用意の足らざることを示した。凡そ現代日本の缺點は、その地位に在るものが晏如として閑を貪る所に在る、その故に何れの問題にもマルクス主義者に先鞭を附けられ、後手に後手に廻はされてゐる點に在る。大學論の如きその一つの適例であらう。私は色々の點にマルクス主義者の功績——殊に日本に於けるマルクス主義者の特殊的功績——を認めるものであるが、彼等に採るべきは、問題を提起することの敏速さに在る。彼等はその問題に對する解答に就て必ずしも正當性を持たないが、論議せらるべき問題を逸早く提起する所に特徵がある。マルクス主義に與せざるものといへども、此の點は彼等に學ぶべきであり、彼等の提起する問題に不斷の注意を注ぐべきである。偸安の夢に耽つて眠りを貪れる現代人の、必すべきことが此に在ると思ふ。

(二)

今日の大學論に於て論ぜられる問題は、凡そ三種の內容に分れるやうである。その第一は大學とは何ぞやと云ふ大學本質論である。その第二は大學はいかなる自由を持つかと云ふ大學自由の限界論であり、その第三は大學は將來に何を爲すべきかと云ふ大學政策論である。大學の本質は第二第三の問題の必然の前提となるべきもので、先づ始めに明かにされねばならぬ重要な概念なるに拘はらず、此の問題に就てマルクス主義者からは充分なる檢討がなされてゐない。彼等の好んで論ずる所は主として、第二の大學自由の問題である。大學に自由なしと云ひ、大學に自由なき理由は大學も亦資本主義の制約を受けざるをえないからと云ふ所に、彼等の大學自由論の特徵がある。だが大學も亦資本主義經濟組織の制約を受けざるをえないと云ふ以上は、大學が資本主義經濟社會と異別なものだと云ふ前提の上に立たざるをえない、何故なれば

同一物の上に制約被制約の關係は成立しない、既に制約被制約の關係を認める以上は、兩者は異別性を持つものと認めざるをえない。然らば大學をして資本主義經濟社會より異別たらしめるものは何か。換言すれば大學の本質たる科學をして經濟より區別せしめる特異性は何か。之に答へることが大學本質論の核心でなければならない。之を充分に究明するものは、文化の一種相としての科學の特質を把握することを必要とする。同じ問題は教會に就て云へば、宗教の文化としての特質如何と云ふことになる。彼の唯物史觀は科學や宗教が、いかに經濟關係により制約されるかを云ふに止まつて、科學や宗教自體の說明は唯物史觀だけからは導き出されない。それをマルクス主義者は說明せねばならない。然るに此の問題の究明に深入りして、科學や宗教の特自性を明にすることは、他面に於て科學や宗教が經濟關係より制約を受けると云ふ唯物史觀の立場と、ある點に於て矛盾を來さゞるをえまい。かくしてマルクス主義者は大學本質論を深めることにより、自己破綻に陷ることなきや否や。此にマルクス主義者の大學本質論に難點があり、彼等が大學本質論の究明を忽にするは自己のイデオロギーよりの制約を受けつゝあるからではないかと思ふ。

大學政策論に於てマルクス主義者は顯著にその弱性を曝露する。彼等は云ふ、大學も亦資本主義に制約される、故に大學に自由なしと。然し大學內に於けるマルクス主義者は大學の復興を企圖せねばならないと。若し大學に自由なきことが因果必然の歸結であるならば、いかにして大學の復興が可能なのか。大學は必然に自由なしと云ふ認識と、大學が復興の可能性を持つと云ふ認識とは、それ自身に於て矛盾し反撥する觀念である。兩者の何れかを犧牲とするより外ありえない。兩者の二つながらを正當とすることは有りえない。なるほど大學に必然に自由なしと云ふ認識から、大學を制約する資本主義自體の變革を企圖することはありうるだらう。然し資本主義自體の變革がなされない限り、大學の復興は停止されねばならない。資本主義自體の變革が今明日に爲されると思ふものにとつて、大學復興は手近い希望かも知れないが、資本主義の變革をかく考へないものにとつて、大學復興を說くことは痴人の夢である。結局マルクス主義者の必然論より出來

する論理的歸結は、資本主義の存續する限り、大學をあるが儘に放任せよと云ふ宿命論とならざるをえぬ。更に既に政策と云ふ以上は、事は將來に關係する。マルクス主義は時間と空間との中に存在を有する現象間の因果關係の說明はなしうるかも知れない。然し未だ時間と空間との中に存在を有せざるもの、將來に於てかゝる存在を附與せんとすることに就ていかなる解答を與へうるか。未來に於て存在を附與せんとするが爲めには、用語の好惡は別として、當爲とか理想とかの概念を豫定せねばならないが、マルクス主義からいかにしてそれを産みうるか。若しマルクス主義自體に徹底せんか、未來の對策を講じえない、若し未來の對策を講じえんか、人はマルクス主義以外のイデオロギーも恐らくそれは理想主義――より、之を援用し盜用したものと云はねばならない。從つてマルクス主義者の大學政策論は、必然に越ゆべからざる難關に逢着する。之が彼等の大學政策論の空疏なる所以である。

私は此に私の大學論を開陳しやうと云ふのではない。又マルクス主義者の大學論の詳細なる批判を企てやうとするのでもない。若しマルクス主義者の大學論に一應の說明が成立する部分ありとすれば、それは大學自由論だけであることを云ふ爲めに、以上の記述は爲されたに過ぎない。彼等は云ふ、大學も亦資本主義に制約される、故に大學に自由なしと。私は之に對して敢て云ふ、大學に自由ありと。だが大學に自由ありと云ひ自由なしと云ふ論爭は、何の自由があると云ふかないと云ふか、に自由の種類に懸つて來る。之を明確にせざるが爲めに、無用なる論爭が繰返されてゐる。大學はいかなる自由を有すると敢て云ふか、大學に於ける自由の限界は何か、之を明確にすることだけが本文の目的である。

(三)

私によれば大學とは學問の研究と教育を爲す部分社會である。大學が他の部分社會例へば教會とか組合とか更に國家とかより區別される特異性は、學問の研究と教育を爲すと云ふことに在る。此の概念を詳述することは、今は必要ではない。

何故なれば私は此に大學本質論を爲すのでなくて、大學自由論に對する照應の伏線としてのみ、大學の特異性に觸れたに止まるからである。唯此の概念に於て注意すべき二三を舉げるならば、大學は學問の研究のみを爲す所ではない、學問の教育を爲す所である。大學以下の學校に於ては教育的職能のみが主要であるが、大學には教育の外に研究が重要さを加へる、然し尚大學は教育の場所でもあることは看過されてはならない。既に教育と云ふ以上は、學問の收得に於て程度の差別ある教師と學生との對立あることを前提とする。之が大學自治と云ふ議論をする人が、先づ念頭に置かざるべからざる問題である。

學問の研究と云ふ時に、單に書齋や研究室に於て、單獨に讀書し思索し實驗することのみを指すのではない、當然に研究の結果を、筆と口とに於て公表することを包含する。從つて此に研究とは所謂研究と言論とを併有する。研究され教育さるべき學問は、科學と哲學とを含み、現存社會秩序を維持することに根據を與へる學問のみならず、之を變革せんとする科學や哲學をも含むことは云ふまでもない。之を現今の日本に於て具體的に云へば、マルクス主義の科學と哲學とを包含する。以上の大學の概念が大學令に云ふ大學の目的と調和しうるや否やの問題は、此に論ずる必要はない。大學令あるが故にとて、大學の研究と教育とを拘束せんとする保守主義者と、大學令あるが故に大學に自由なしと速斷するマルクス主義者とは、何れもが條令の文字に膠着するものとの非難を免れない。同一の條文は日に日にその解釋を新にし、その精神を生かすが爲めに、その形式を蟬脫しつゝあるからである。

以上の大學の概念よりして、大學が有せざるべからざる自由と、大學が主張しうる自由の限界とが發生する。何をか大學の有せざるべからざる自由と云ふか、それが學問の研究及び發表の自由である。たとへ學問の内容が現存社會制度の變革を根據付けやうとも、そのことは毫も大學の研究と發表とを阻止すべき理由にはならない。大學以外の社會に於ても研究と發表との自由は望ましい、だが特に大學に於ては、それが確守されねばならない、何故なればそれこそが大學の本質

であり、それを制限することは大學の自己矛盾であり、大學の自殺を意味するからである。何故大學に於て研究と發表との自由が確守されねばならないかに就て、私は既に幾多の機會に於て述べたから、今は再び此には縷返さない。（特に昭和三年の九月號「改造」誌上「大學に於ける自由主義の使命」參照）

だが口に研究發表の自由といふが、自己の思想に反對する思想をして、學園の中に自由なる研究發表を爲さしめることは、決して容易なことではない。若し人あつて研究發表の自由を輕々に口にするものあらば、その人は實は却て自由の眞諦を解せざるものである。人間は自己の思想のみを絶對的に眞理とし、それに反對する思想を迫害し壓迫せんとする固有の素質を有する、かゝる素質あるに拘はらず、反對説の存在を認容し、自由なる研究發表を擁護することは、少くとも人間固有の凡惱を克服したものでなければならない。研究發表の自由を主張する所謂言論自由主義とは、自己と鬪へる後に産れるイデオロギーである。言論自由主義に反對するものは、必ずしも保守主義者のみではない、マルクス主義者は今こそは自己が少數派なるが故に、研究發表の自由を主張するが、その心理に於て反對思想の憎惡と壓迫とに傾き易い。保守主義者とマルクス主義者との双方に對立して、眞に反對思想を寛容しその存在を擁護する言論自由主義は、單一思想政策の原理たるのみではない、凡そ人間に固有する野性と鬪ふ意味に於て、永遠に眞理たるに値する。

更に細微な議論をするならば、色々の問題が踵を接して起るだらう。例へば研究の發表と後述の實踐とはいかに區別されるか、その限界に曖昧な點はないではない、然し區別の不明瞭なことは、單に此の問題のみではない、いかなる問題にも同じく起りうる、要するに社會の通念に從つて專斷的に決定するの外はあるまい。又發表は絶對的に自由であるかどうか。言論自由主義を唱へた古來の思想家も、決して無制限の自由を認めてはゐなかつた、例へばミルトンの如きは「アレオパヂティカ」の中で、他人に對する誹謗と神に對する冒瀆は處罰されても止むをえないと云つたが、かゝる細微の檢討を試みるならば、現代の日本に於ても自由の例外たるべきことは絶無ではあるまい。又發表の自由は大學の教授も學生も同

等に有しうるか、發表が學內に於て爲された場合にのみ自由があるのか、學外に於て爲された場合にも尙自由があるか、學外にも自由ありとすれば、いかなる種類の會合にもいかなる發表の形式に於ても自由があるのか、之等の問題が相次いで答へられねばならない。だが之等は他日に期するとして、先づ明かにされねばならぬのは、大學は硏究と發表の自由を持つと云ふ原則である。此の原則を確立することにより、幾多の問題は之を基準として解決しうる、大學が此の原則を確立することこそが、先づ爲さるべき急務である。

然し此に帝國大學にとつて看過すべからざる問題がある。それは文官分限令第十一條第一項の規定である。それによれば官吏は起訴又は告訴をされた時に、當然に休職處分を受けねばならない。從つて若し出版法その他によつて檢事が大學の教授を起訴した場合には、後に裁判に於て無罪とならうとも、先づ休職にはならねばならない。若し有罪の判決を受けるならば、同令第二條により當然に免官となり、刑の種類によつては再び官吏となるの資格を失ふこととなる。從つて帝國大學の教授が官吏である限り、而して檢事が起訴手段を採る限りに於て、事實上大學の教授はその地位を剝奪されなければならない結果となる。今から十年以前の森戶辰男氏の場合が之に該當する適例である。實際上は今日の帝國大學は一種の自治權を持つてゐる爲めに、大學內に於ける講義、講演硏究會に於ける硏究の發表等が、法律上の問題を惹起することは有りえない、從つて事は大學教授が一般公衆に讀まるべき新聞雜誌に硏究を發表した場合に限られる。此の場合にも大學教授を起訴することは、裁判所がよほどの愼重さを累ねることが從來の慣例ではあるが、若し檢事局が斷然起訴を決意したならば、教授は上述の運命に出會ふものと考へねばならない。

之に對する方策は二つしかないと思ふ。一つは帝國大學の教授は官吏たることを止めて、文官分限令の適用を受けないこととすることである。官吏としての位階勳等を辭すると共に、言論の自由を確守するのである。さうすれば刑事被告人たるも休職の必要なく、確定判決あるも服役後に現職に復することが出來る譯である。だが此の方法の實現は、先づ不可

能と云ふの外あるまい。此に於て殘る方法は一つしかない。それは大學の教授が一致結束して、當該教授を擁護し、若しそれが聽かれずば重大なる社會的結果を惹起するの虞れがあり、司法當局が刑事政策上起訴を斷念すると云ふ徑路を採ることである。此まで事態を導くには、先づ大學内に於て微妙にして複雜な經緯を辿ると思ふが、若し問題の焦點となる教授が眞面目な學徒であり、係爭の題目が純粹に研究發表の自由と云ふことに在るならば、學内の一致結束は可能であると信ずる。然し多くの場合に問題の焦點に立つ教授が、後節に述べるやうな別個の立場より反對される種類の人であるか、係爭の題目が單に研究發表の自由でなしに、他の題目が混入する時に、學内の一致結束は困難である。之れ私が學内の急進思想家がその行動を愼重にし、他をして乘ぜしめる口實を與へない必要があると云ふ所以である。(昭和四年十月號「改造」誌上「嫌惡すべき學界の一傾向」參照)。此のことは必然に後節に述べる所と關連するから、後に再び之に觸れるであらう。之を要するに大學は研究と發表の自由を確守すべきであり、それを確守することは可能である。

(四)

だが現今の日本に於て論爭の中心は、大學に於ける研究發表の自由が正當であるかどうかと云ふ命題にはなくて、大學が今現に研究發表の自由を持つか否かと云ふ現實の事實に在る。既に事實を論ずる以上は、私は自己の最も熟知する東京帝國大學に就てのみしか語れない。各私立大學や地方の帝國大學の事實を論ずるほど、私は通信網も持たなければ調査機關も持ち合はさない。從つて東京帝國大學に事を限定するならば、東京帝國大學に於ては研究及び發表の自由は確保されてゐると私は敢て云ふ。小野塚總長は幾度か公會の席上に於て、大學は可能の最大限度の研究及び發表の自由を與へると明言し、現に大學教授の大多數は此の方針を聲援してゐると思ふ。之に對する從來の反對論者の材料は、一は昭和三年四月の大森義太郎助教授の辭職であり、一は學生の社會科學研究の爲めの會合、例へば讀書會等の名を以て呼ばれるものが、

大學内に於て禁止されてゐるとのことである。此の二つの材料が大學に研究發表の自由なしと云ふ斷定の根據とされてある。他は近來大學の教授に採用されるものに、マルクス主義者が尠いとか等々の、唯他人の心理を邪推するに過ぎない材料の外何ものでもない。私は大森助教授の辭職は、大學の毫も要求したのでないこと、從つて大學に自由あるや否やと毫も關係を持たないことだと敢て云ふ。所謂讀書會の存在が學内に消えたことに就ては、幾多の誤解が作つてゐる。此の二つに就ては説明の便宜上後述に讓ることとする。

大學は學問の研究と教育とを爲す社會である。大學の此の本質よりして、研究と發表との自由は、必然に導き出される歸結である。いかに現存社會秩序に不利なる内容であらうとも、それが研究と發表との對象である限りに於て、大學は敢て自由を固守せねばならない。此の種の自由失はれんか、そは大學の滅亡であり消失である。だが之こそは大學が要求せざるべからざる自由であり、而して之が大學の要求しうべき自由の限界たることを知らねばならぬ。從來大學に自由を要求するものが、要求しうべき自由と然らざるものとを漫然として混同し、要求しうべからざる自由を大學に求めて、その容れられざるに會するや、忽ちにして大學に自由なしと云ふ。抑々大學に自由あるか否かの問題を論ずるに際して、論者はいかなる種類の自由が、大學に存ると云ふか存らざるべからずと云ふか。大學沒落の論者は宜しく自由の種類を整理するの必要があるであらう。

(五)

それでは大學が要求しうべからざる自由とは何か、言葉を換へればいかなる場合に、大學の教授はその地位を去らざるべからざるか。私は尠くともその場合が二つあると思ふ。一は不法なる實踐的運動に參加した場合であり、他は大學と云ふ共同團體の規律に違反した場合である。兩者に就て順序を辿つて述べることとする。

抑々大學の教授には四つの職能があると思ふ。一は專攻學問の研究と云ふ職能であり、二は學生を指導し教育する教師としての職能であり、三は大學と云ふ共同社會の問題を關心事とし、學内に於ける廣義の行政に參加することであり、四は若し餘暇あらば大學以外の活動に參加することである。第一第二第三の職能は、大學が學問の研究と教育との社會であることより來る當然の職分である。既に大學が學問研究の場所であるならば、此に職を奉ずる教授は、當然に研究者でなければならぬ。大學は學問教育の場所であるから、教授は教育者でなければならぬ。大學が特異の目的を持つ社會であるならば、その社會の維持と改善とは、教授の關心事であるべきであり、之が第三の職能である。之だけは教授が必然に爲さざるべからざる職務であるが、第四の職能はその教授の餘暇と性格とに依り、爲すも可爲さざるも可であらう。例へば教授が行政官吏を兼任し、政府の各種の調査會の委員となり、民間團體の顧問となるが如き、又一般公衆の爲めに寄稿し講演を爲すが如き、現に多數の教授の爲しつゝあることであり、又爲すをも妨げざる活動である。

私の考へる所に依れば、現代日本の大學の缺陷は、教授が前三者の職能を充分に果してゐないことに在る。研究者たるかどうかは從來大學が教授を採用する重點であつた。その資格は確かに教授としての必要なものではあるが、それのみでは研究所の所員としては充分ではあらうが、大學の教授としては充分ではない。大學が自らを研究所と混同して、教授の資格を顧慮しなかつた結果は、大學の教授をして殆ど擧げて研究所の所員たらしめて、教育者として又大學と云ふ社會の成員としての意識を忘却せしめた。歐米の大學の教授が眞に學生の伴侶となり、食事に御茶に學生を招いて共に談笑すると云ふ制度は、日本に於ては殆ど例外的にしか行はれない。固より學生數の多少にも依らう、然し眞に學生の人としての成長を關心事とし、若き學徒の成長に手を貸さうと云ふ熱意が缺けてゐる。又職を大學に奉ずるものの中で、大學と云ふ共同社會を愛護し、いかに大學の組織を改革すべきか、いかに大學に起りつゝある問題を解決すべきかに、日夜腐心しつつあるものが何人あるか。私立大學への出稼ぎに奔勞し、學外の餘業の爲めに南船北馬日も足らざるものが無いと云ひ切

れるか。總じて現代日本の缺點は、各自が自己の立ちつゝある地盤を意識し反省し、その理念の示す所に徹底しないことに在る。イデオロギーが何であるかは後の問題として、自己のイデオロギーに於て自信を以て行動しつゝあらざることに在る。現代の大學の如きも亦その例に漏れない。若し大學の沒落と云ふならば、大學はプロレタリア的ならざるの故に沒落してはゐない、が然し充分にその理念を實行しつゝあらざることの故に沒落しつゝあるとは云へる。大學はマルクス主義者の攻撃は之を撃退しうるだらう、然し大學はそれ自身の立場に於て眠つてゐると云ふ非難は、恐らく之を撃退しえないだらう。

（六）

偸安の夢を貪る大學に、惰眠を覺まさせたのは、最近に於けるマルクス教授の出現である。彼等はその獨自のイデオロギーを提げて、學生の指導を爲すことに於て熱心な教師であつた。又大學制度の改革に關心する活潑なる成員であつた。彼等のイデオロギーはたとへ吾々の首肯しえないものであらうとも、彼等が大學に一道の活氣を鼓吹し、大學をして自己の依る立場を意識し反省せしめた功績は、沒却してはならない。だが之だけならば反マルクス主義者も夙に爲さざるべからざる職能であつた、さうしてマルクス主義者の功績を感謝するに吝かではなかつた。然しマルクス教授をして教師として又成員として活動的たらしめた根據、即ちマルクス・イデオロギーは、やがて彼等をして大學の自由の限界を超えしめた、而して大學に一個の重大なる波紋を生ぜしめた。それは彼等が現存社會秩序變革の實踐に參加することであつた。

私は前に大學教授の第四の職能として、學外に於ける活動を擧げた。然し此の職能は前の三個の職能と異つて、爲すも可爲さざるも可であり、それは各自の餘暇と性格とに依ると云つた。何故なれば前三個の職能は大學の本質が當然に職員に要求する職能であるが、此の職能は大學の本質と毫も關係のないものであり、その教授が大學教授として爲さざるべか

らざるものではないからである。いかなる程度で學外の活動が許されるかは、その人の前三者の義務を果しつゝ、ある程度に從つて異る。若し大學教授としての義務に支障を生ぜないならば、社會の公益となるべき活動を阻止すべき理由はない、大學は各自の賢明な判斷に放任して然るべきである。

同時に大學が義務として要求するのでない學外の活動に就て、大學はその教授の言動に就て、その教授に對して責任を負ふべき理由はない。若し今行政官廳の官吏を兼任しつゝある教授、又は民間團體の爲めに奔走しつゝある教授が、その大學以外の活動に於て何等かの不始末を惹起して、社會より身を退かなければならない事態になつた時、大學の同僚は個人として配慮をするであらう、然しその場合は大學が大學の問題として取り擧げる事柄でもなければ、全大學の教授が自己の關心として配慮すべく義務付けられる事柄でもない。啻に大學はその教授に對して擁護を爲す責任がないのみではない、若しその教授の不始末がたとへ市民としては許される程度のものであらうとも、教授が教育者であると云ふ立場から進んでその教授の進退をさへ議するかも知れない。例へば破廉恥罪を犯した教授があつた場合に、檢事局は不起訴に決定するほどの微罪であつても、大學はそれを自己の問題として取り擧げるかも知れない。之れ大學が研究所ではなく、教授が研究所員でないと云ふ前提より來る止むをえない結果である。

三

此まで述べ來つて漸く、當面に切迫した問題に移る。今此に大學教授にして無産政黨の運動に參加したものがあるとする、若しその政黨が國家の認めた合法的なものであるならば問題は生じない、學外の活動は教授の義務としての職能ではない、然し爲すも妨げない活動であるからである。然し若しそれが非合法的の團體であり、それの活動を國法が禁止してゐる場合にはどうなるか。尠くとも現在の法律の範圍內に於ては、起るべき結果は極めて明瞭である。假りに檢事局がその教授を起訴するとする。前に述べた文官分限令第十一條の適用により、刑事被告人は休職とならねばならぬ。若し公判に於て有罪の判決を受けたとする、休職官吏は當然に免官とならねばならない。刑罰の種類によつてはその人は永久に官

吏たることをえない、即ち帝國大學の教授となることをえない結果となる。之が現行法の下に於て必然に惹起される事態である。帝國大學の教授が官吏たる以上は、誠に止むをえない結果である。

だが吾々の問題は法律の解釋や適用の說明に在るのではない。此の法律の適用をば吾々大學の教授は甘受しなければならないかどうかに在る。前に研究と發表とに就ても之と同樣の結果が發生するのであつた、それにも拘はらず大學は司法當局を動かしてまでも、同僚教授を擁護せねばならないと云つた。然るに此の場合に何故同樣の行動に出ないかと云ふことが、問題の主要點でなければならない。私は此の場合に大學はその教授を法律の適用より擁護する權利もなければ、義務もないと思ふ。何故なれば大學の本質は學問の研究と教育をなす社會であつて、實踐を爲す場所ではない。大學教授が義務付けられる職分は、研究と教育と大學自體への關心とに在る。

然し學外に於ける實踐は教授の義務でもなければ權利でもない、教授がその職務以外の活動に於て爲したる結果に就て、大學は自己の問題として取り擧げる理由もなければ、同僚教授は身を挺して之を擁護すべき義務もない。研究と發表とは大學の本質に伴ふ必然の任務である、此の任務を忠實に履行する同僚を擁護することは、同僚教授の當然の義務であり、大學がその存在を賭して彼を死守することは大學の本質に徵して最小限度の責任である。然るに學外の活動は大學の本質と何等の交渉を持たない、それを擁護する理由は大學の本質の奈邊にも見出しえない。大學の本質は一面に於て一般市民以上の研究發表の自由を要求せしめるが、他面に於て一般市民以上の實踐の自由を附與しない。之れ一に於て自由であり他に於て自由ならざる所以である。

若し此に人あつて、社會變革の實踐が即ち社會の研究である、故に實踐の自由も亦研究の自由の中に包含されねばならぬと云ふならば、私は問ひたい、抑々實踐とは何を意味するのかと。實踐は當然に眞理を前提とする、何が眞理なるかが不明なる時に實踐はありえない、而して何が眞理たるかが研究の内容である、研究あつて眞理あり、眞理あつて實踐があ

る。然るに實踐が研究なりと云ふは、物の本末前後を顚倒せるものである。少くとも私に實踐を以て研究の中には包含しない、又研究と云ふ言葉の用語例も私の解釋に反對ではない。若し又實踐が研究だと云ふならば、所謂實踐を企てざるマルクス主義者は多數あるが、その人々はマルクス主義の研究を放擲してゐるのであらうか。又若し自分等には眞理は旣に分つてゐるのだ、唯實踐のみが殘されてゐるのだと云ふならば、私は答へたい、眞理が旣に分つてゐるならば、今更何の研究の必要があるのかと。寧ろ直截に研究などの必要はない、實踐の必要があるのだと云ふべきである。研究の美名に隱れて實踐を要求するのは、徒に用語を濫用して事態を糊塗するに過ぎない。

之を要するに非合法の實踐は、大學に於ける自由の限界外である。大學は此の種の自由を主張する權利もなければ義務もない。大學に之を求めるのは大學を特色付ける本質に反する。恰も勞働組合に消費組合的活動も要求し、陸軍の軍人に海軍の任務を要求するが如くである。大學は何が自己の有する自由であるかを反省し、守るべきに守り捨つべきに捨てねばならない。その守りうべからざる所にまで戰線を擴張し、結局戰線を維持し難きの故に、守るべき戰線をも拋棄するは賢明なる大學當局の採るべき態度ではない。

大學は曾てかくの如き自由を主張したことはなかつた。自由主義はかゝる自由が大學に在りと云つたこともない。此の種の自由がないからと云つて、大學は頽落したのではない、始めよりして存在しないものに頽落は有りえない。自由主義が始めより有ると考へない自由がないからと云つて、自由主義者は無能を責められる理由はない。若し不法なる實踐を不法ならしめる法律が惡いと云ふならば、或はさうかも知れない。然しそれならば大學に自由がないのではなくて、國民に自由がないのである。論者は宜しく法律改正運動に着手すべきである、人はそれを政治社會に於ける活動に屬するであらう、大學は政治社會ではない。政治社會に求むべきことを大學に求めるのは、馬に求めるに牛を以てすることである。

以上は大學の敎授の實踐に關することであるが、學生の實踐に就ては、たとへ非合法でなくとも、大學は制限すべきで

ある。之は現に學修の過程に在ると云ふ學生の自分より來る、之に就ては曾て述べたこともあり、此には省略する。（昭和三年十二月三日、十日の「帝國大學新聞」紙上拙稿「大學の自由」參照）

(七)

大學に於ける自由の限界の第二は大學と云ふ共同社會の規律から結果する。苟くも多數人が集合して共同生活を爲す限り、そこに共同社會を維持するが爲めに規律が必要である。それなくば共同社會は崩壞するであらう、共同生活を營むものが共同生活の崩壞を防がないのは自己矛盾である。若し大學は共同社會ではない、依然として二つの階級イデオロギーに分裂する二個の社會の對立があるのみだと云ふならば、それはその論者の見解たるに止まつて、かく信じないものを拘束する力を持たない。大學の成員が大學を共同社會と看做さうと看做すまいと拘はらず、大學の成員たることに於て共同生活の規律に服すべく義務付けられる。マルクス主義者の集團である無産政黨の間に於ても、黨規を紊亂するものは多數決に依り處罰され除名される事實を吾々は目撃してゐる。何が共同生活の規律であるか、何が規律の違反と目さるべきかは結局に於てその社會の多數者の見解に依り決定するの外はあるまい。之を餘りに廣義に擴張して教授の地位を不安ならしめることは不當であるが、同時に又規律を無視して學園を無政府狀態に化せしめることも亦不當であると云はねばならない。

吾々は不幸にして近時大學の中に、共同生活の規律に反するものを往々にして見出す、例へば教授會の成員は會議の内容を外間に洩らさないと云ふ約束があるに拘はらず、間もなくそれが外部に漏洩されて、新聞雜誌に掲載される。若し會議を公開すると云ふ方針が始めよりして採られるならば、私は問題によつて公開することも適當であると思ふが、公開の方針が採られないで、秘密と云ふ約束の下に居るものが、之を漏洩するのは同僚に對する違約である。同僚の秘密を拘束し

ながら自らは拘束を受けないのは公正ではない。況んやある種のイデオロギーの者の爲めに有利に、反對イデオロギーの者に不利ならしめるやうに事實が虚構されてゐるに至つては、單に不公正なるのみではない、狡猾であると云はねばならない。更に又同僚教授との學問上の論爭に藉口して、相手を傷つけ陷れんとし、教育者にあるまじき亂暴な惡口を投ずることも啻に同僚に對する禮節を缺くのみでなく、靜なるべき學園に感情を激昂せしめ、學生をして興行物を觀賞するが如き氣持で學問上の論爭を眺めしめることは、學問の正常なる發達を阻止するものといふべきである。私は學問上の論爭が進歩の刺戟となることを高く評價するものであるが、近時の論爭の形態に至つては、徒に私憤を洩すに止まつて、學界を毒するものが多いと嘆ぜざるをえない。その他共同生活を攪亂する幾多の事例を持合せるが、不快なる此の種の事例を枚擧することは私の省略したい所である。

大學の教授は共同社會の成員として、その社會の規律に服せねばならない。此の點に於て若し規律の違反が重大なものならば教授の地位も亦影響を受けることあるは止むをえまい。之が大學に於ける自由の限界の第二である。帝國大學の教授が官吏たる限り、官吏服務規律は當然に適用されるのではあるが、法律の有無を問はず大學は當然に教授の行動を統制する權利がある。由來此の種の問題は久しく大學に起らなかつたのであるが、之を新な問題として提起せしめたのは、マルクス主義の出現である。大學を資本主義の一部と看做し、資本主義の變革に從ふものは大學に於ても變革運動を爲さねばならないと考へる。マルクス主義者を同志として結束し、反對思想の學徒を資本家の走狗とし、資本家階級に對すると同じく之を敵視する。階級鬪爭の理論を大學内に於て實行せんとする。いかなる情誼も禮節もその鬪爭の爲めには捨てねばならない。虚言を吐くことも他を誹謗することも人を陷れることも、すべて社會變革の爲めの必要な手段である。之を否定することこそブルジョアーのイデオロギーであると云ふ、鬪爭の爲めにあらゆることが是認される、是認されるのみならず、それを爲すべく義務付けられる。かく考へるに非ずんば、その人はマルクス主義者より異端者として排斥される。

之が學内に於けるマルクス主義者の心理である。之は私の推量した解釋ではない、現にマルクス主義者が明言してゐる所なのである。

マルクス主義の學内に於ける出現が、いかに大學の生活の體樣を變更したか。學問はそれ自身として價値ありとは考へられなくなつた、唯階級鬪爭の用具と看做さるるに至つた。學問の批判はその理論的内容に依つて決定されずして、反動的とか小ブルジョアとかの投げ言葉に依つて決定されて來た。學園は政治鬪爭の巷と化した。靜なる研究と教育との場所ではなくなつて、怨恨と反抗との修羅場と化したのである。私共も亦眞理が資本主義に背きつゝあることを信ずる。又眞理が結局に於て勝利を歌ふことを信ずる。また眞理は人を驅る實踐的價値を持つことを信ずる。だが然しそれは眞理が明かにされた時に當然に伴ふ結果である。此結果の發生を學外に期待して、大學は唯その眞理を闡明することのみに、落着いた滿足を爲すべきである學問の神聖を擁護し、學園を鬪爭より防止することこそ、現代の大學の正に爲すべきの任務である。此の任務の遂行に支障となるものを除去することは決してマルクス主義を壓迫することではない。マルクス主義が研究と發表の對象たる限り、決して學園を攪亂することにはならないし、大學は視野を廣め内容を豐かにすることを感謝こそすれそれを排斥する理由は少しもない。故に吾々はマルクス主義の研究と發表とを厭ふのではない、唯マルクス主義者の學園の攪亂に反對するのみである。それは思想言論の壓迫とは區別さるべき全然別個のものである。若し然し上述の行動こそがマルクス主義より來る必然の結果だと云ふならば、その限りに於てマルクス主義への壓迫にはならう、然しかゝる壓迫ならば、大學は寧ろ之を務むべきである。大學の本質が學問の研究と教育とに在るならば、斯る行動を許容することは大學の本質からは導き出されない、否寧ろ大學の本質はかゝる行動を阻止することを義務付けるであらう。

以上に於て私は、大學の學徒が持たざるべからざる自由は、研究と發表との自由であることと、持つことをえざる自由が非合法の實踐と共同規律の違反に在ることを述べた。後の二者は往々にして前者と混同されるが、實は嚴格に區別さるべきであると云つた。だが大學の持つべき自由としての研究と發表とが果して現に東京帝國大學に存在するか否かが屢々問題とされた、さうして大學に研究發表の自由なしとの論據としては、大森助教授の辭職と、讀書會の消滅とが擧げられる。之に就て語ることを私は留保して來たが、今漸くそれを語るの時に來た。

話は昭和二年の暮に遡る。當時東京帝國大學に於ては、自由過ぎるほどの自由が、マルクス主義者に與へられてゐた。マルクス主義者は順風に帆を揚ぐるの勢を以て、思慮なく反省なしに學內に活動してゐた。大多數の人々が胸に反感を抱いてゐたに拘はらず、彼等が之に氣付かずして止まる所を知らなかつたのは、誠に遺憾であつた。その一例は當時マルクス學生が演說會場で反對思想の演說に對して聞くに堪へざる野次妨害を續けたことである。演說會講演會の前夜彼等は必ず會合して翌日の野次妨害の打合せをした、さうして一團として入場し、マルクス主義者の講演を聲援し反對者をして壇上に語るをえないほどの妨害をした。私は當時辯論部長として實狀を目擊して來たが、それは何人もの憤激を買ふべきものであつた。此に於て學內の右傾團體と云はれた七生社員が、遂に昭和三年一月下旬の演說會場でマルクス學生と毆り合ひ、演說會を解散せしめるに至つた。當日私は會場に不在であつたが、たとへ演說の妨害は卑怯であるにしても、腕力を以て對抗する七生社の態度は、先づ何よりも吾々の反對せねばならないことであつた。私共が學內に於ける言論の自由を唱へたのは之が最初である。然し七生社をして此の暴擧に出でしめたに就ては、マルクス學生も當然その責任の一半を負はねばならなかつた。彼等こそ寧ろ言論の自由を尊重しなかつたからである。私は今も尚マルクス主義者が眞に言論の自由を解するものでないことを考へざるをえない。七生社事件は大學に於ける思想史上に一轉機を劃した。今までマルクス主義者の行動に不滿を抱いてゐた多數の人々から一齊に反抗の聲が揚げられた。マルクス主義者を抑へよと云ふ要求が壓倒

的の多數を以て大學に瀰漫した。此の潮に乘じて大森助教授と山田盛太郎助教授との地位に、不安の影が掩うて來たのである、之は昭和三年二月である。

固より之は正式に學內の問題となつたのではない。唯學內に於ける輿論の一部であつたに過ぎないが、その輿論は無視すべからざる勢力であつた。だが何故に大森氏と山田氏とが俎上に立たねばならないかは、當然に私共の問題とならざるをえない。やがて山田氏は純學究的の學徒であるから、當然に問題から除かるべきだといふことに決着した、だが大森氏の場合は少し複雜な事情があつた。大森氏は前年十月の「改造」誌上に土方教授を反駁した「マテリアリスムス・ミリタンス」を掲げた、その論文は學問的の論爭と云ふには、餘りに亂暴であつた、之は學內の道德律に反すると云ふのが、大森氏に反對する一つの論據であつた。更に同氏が無産政黨の運動に關係してゐたことが、その次の論據であり、加ふるに大森氏のイデオロギー自體に反對することも手傳つたことは事實である。然しイデオロギーの如何は大學の本質よりして問題となるべきことではない。無産政黨の運動に參加したことも、所謂非合法の實踐に亙らない限り、大森氏の地位に關係あるべきではない。唯「ミリタンス」の一篇は、大學の共同規律の違反として、問題として取り擧げらるべきことにはならう、然しそれは何らか輕微な處分を以て足ることで、敢て助教授の地位を不安ならしめる程度のものではない。かくして大森氏の問題は「ミリタンス」の處分を後日に殘して、その地位から不安が一掃されたのである。之が三・一五事件の起る前一ヶ月である。

同年四月二日私は小野塚總長を訪うて、大學に於ける研究發表の自由に關して、總長が牢固の決意を持つことを確めて旅行に立つた。當時三・一五事件の餘波の大學に及ぶことは豫知されなかつたが、大森氏を始め學內マルクス主義者に對する大學當局の態度は既に確定してゐたのである。田中內閣が大學に攻勢を開始するも敢て驚くの必要はなかつた、既に用意は整へられてゐたのである。四月十五日私は旅行から歸京した、不在中大森氏が二回私を訪ねられた。歸京の當夜始め

て同氏とゆつくり話すことが出來た。同氏は學内の事情を私に尋ねられたから、私は今日までの經過を以上書いたやうに話した。同氏は更に自分の爲めに職を賭して戰つて呉れるかと私に問はれた。私は之に答へた、此の場合には戰ふ戰はないの問題は起らない。總長が必ず強硬な態度を採られたことを確信する。然し「ミリタンス」の論文に就ては、曾て君にも話したやうに何等かの處分は止むをえないと思ふ、でもそれは地位に關するほどの事柄ではない。萬一政府と大學との交渉が一轉して學内の問題となつた時には、君の思想に關する限り、自分は最後までやる、然し職を賭するか賭しないかは何人に對しても自分は約束しないと。此の場合に職を賭すると云ふ言葉を、事成らざる時に辭職すると云ふ意味に私が解したことは云ふまでもない。私は今でも自分の主張の通らない時に辭職するかしないかを人に約束しない。辭職する場合もあらうし、しない場合もあらう、一律に答へるべき事柄でもないからである。次で私は同氏に向つていかなる場合に於ても首を延べて悠然として他の決定を待つべきで決して自ら辭職などすべきでないと語つた。之が大森氏と私との對話である。

翌十六日、同僚某教授と山田盛太郎氏とが私を訪ねられ、大森氏の爲めに飽くまで擁護することを求められた、之に對して私は大森氏に語つたと同じことを答へた。大學の採るべき方針は夙に確定してゐるのではあるが、特に政友會内閣が特別議會切り拔けの爲めに、大學のことを政略的に使ふことを私共は不快に思つた、斷じて政府の要求を排拒すべきであると思つてゐた。翌十七日私は小野塚總長を訪ね、大學と政府との交渉の經過を伺つた、そして私の信じてゐたやうに、事の進行したことを喜んだ。そして一回も大森氏と會はれたことのない總長に大森氏を紹介することが、今後の爲めにもなることと思ひ、歸途私は鎌倉の大森氏に電報を打つて、翌日正午研究室で會ひたいと云つた。然しその時同氏は既に鎌倉を立つてその夜を東京で過ごされたので、その電報を落手しなかつた。

私が總長を訪ねてゐた時分に大森氏は辭職の決心をしたらしい、それがいかなる經過に依つてであるかは私は知らない。

同時刻に同氏が前日私を來訪された兩友人と、辭職するかしないかに就て、激論數刻に及んだことは後に聞いた。兩君が大森氏を引留めたことは云ふまでもない。然し同氏は辭職を決心して同日深夜總長を訪うた、その會話がどうであつたかは總長からも大森氏からも聞いてはゐるが、此に書く必要はあるまい、唯總長が大森氏に辭職の必要のないことを切言したことだけは云つて置く必要があらう。次で大森氏は河津學部長を訪うて辭意を述べたが、學部長も必要のないことを云つたことは事實である。私は同氏が辭意を決したことは知らなかつた、そして爲すべき任務を果して、總長の御宅から戻つて眠に就いた。翌朝の新聞が同氏の辭職を傳へた時に、それが虛傳であると信じて疑はなかつた。學校で同氏から事實だと聞かされた時に、腕を扼して長嘆之を久しうした。

（九）

以上が大森助教授辭職の經緯である。固より私は此の外に書くべきことを持つてゐる、然し個人的に亙る叙述は必要がないから省略した、唯大學に有利なるべきやうに、事實を隱蔽してはゐないことを確言する。何故同氏が辭職したかと云ふ心理の分析に就ては、私にも一應の解釋がある、然しそれは本論と關係がないから云はない。同氏の辭職が毫も大學の自由と關係のないと云ふことだけは云はざるをえない。大學に自由なしと云ふ斷定を産む爲めには、教授會が免官の決議をしたか、學部長總長が辭職を勸說したかの實證が、最小限度の要件として必要である。之だけの要件が具はらなければ、大學に自由なしと云ふ斷定は成立しない。而して上述の交渉のどこに大學が辭職を強要したと云ふ事實を見出しうるか、況んや大森氏辭職後に於て、大森氏と同じイデオロギーの教授が大學に晏如たることは、大森氏辭職が決してマルクス主義の壓迫から來てゐるのでないといふ好個の證據である。客觀的狀勢が同氏の辭職を強要したと云ふが、その所謂客觀的狀勢の意味も不明であるが、若し同氏の辭職と多少なりとも關係ある客觀的狀勢があるとすれば、それは政府の宣傳に乘

せられて、新聞が盛に同氏の免官を書き立てた外にはない。然しかゝる客觀的狀勢に對して大學が責任を負ふべき理由があらう筈がない。たとへ客觀的狀勢が辭職を強要したとしても、それを以て大學に自由なしと云ふ論理は成り立たない。寧ろマルクス主義者として大森氏が、大學の沒落を叫ぶが爲めには、教授會が免官の決議をしたと云ふ實證を握まねばならない。その時始めて同氏は大學に自由なしと云ふ資格がある。それなくして自ら辭職したことは、大學沒落を叫ぶ資格を自ら拋棄したのである。之を要するに大森助教授の辭職は、大學に研究發表の自由なしとする資料にはなりえない。

學内に於ける讀書會の消滅に就ては、私は直接その衝に當つたのではないから、確信を以ては云ひ切れないが、私が學生側と大學側との双方から集めた材料に依れば、次のやうな事情であるらしい。讀書會は名義はマルクス主義の研究の會合であるけれども、事實は學外に於ける團體と連絡して、實踐に對する戰術の協議會であつた。戰術の研究も亦學問の研究であると云ふのが學生側の主張であるが、大學側に於ては實踐運動の打合せは、學問の研究の中に包含されないと云ふ解釋を採り、戰術研究の會合の爲めに學内の室を使用することを許さなかつた。他方で學内の團體はいかなる種類でも成員の屆出を爲す規定があり、學内の會合にはいかなる會合でも代表者の署名捺印が必要である。所がマルクス學生は讀書會を作るが爲めに、その氏名が當局に知られ、會合をする爲めに代表者の氏名が知られることを恐れて、自ら讀書會を開くことを厭ふやうになり、昭和三年九月から段々減少し、昭和四年一月から三月にかけては殆ど數へる程しかなくなつた。三年四月に曾て學内に解散された新人會は、學外に於て事實上存續してゐたのが、昭和四年十一月之も自ら解散するや學内の讀書會も亦之と時を同じくして消滅したと云ふのである。以上の事實が眞相に反するならば、私は反對材料を手に入れたいと思ふが、此に重要なことは具體的實踐の戰術の研究が學問の研究の中に含まれるかどうかの點であらう。研究と實踐との區別を爲さないならば、暫らく別であるが、苟くもその區別を許すならば、戰術の研究は研究の中に入らない、若し之を入れるならば、實踐と研究の區別を沒却せしめるからである、何故なれば戰術の研究は實踐の準備行爲に過ぎな

いからである。要するに戰術の研究は許されなくとも、研究自由の問題とは關係がない。のみならず經濟學部の經友會主催の學生の討論會や學生の研究發表會に於て、マルクス學生のマルクス主義の言論が、現に自由な發表を許されてゐることは、反面に於て大學に發表の自由ありとする證據たるに足るだらう。

(十)

非合法の實踐と共同規律の違反とが、大學の自由の限界外だと、私が云ふ時に私は單にマルクス主義者のみを考慮の中に入れてゐるのではない。その人のイデオロギーの何たるを問はず、此の二つに觸れた時に、人は大學を退くの外はないと思ふ。だが現今に於て之に觸れる場合は、マルクス主義者に多いだらう。その時は彼がマルクス主義者たるが故に大學に居られないのではなくて、此の二つの項目に觸れたが故にのみ、大學に居られないのである。私はマルクス主義を奉ずる教授が單に研究と發表との自由に滿足して、永く大學に居られんことを衷心から希望する。私自身はマルクス主義者ではないが、吾々はいかに多分の刺戟を彼等から受けるであらう。反對思想のない時に吾々は往々にして眠りがちである。吾々の惰眠を覺ますものは、實にマルクス主義者の存在である。かくして眞に自己の成長を希求するものは、何人も反對説の出現を愛護しないものはあるまい。又マルクス主義の學徒が大學に根據して、少き勞働時間と豐かな俸給と確定した地位を利用して、マルクス主義の洗練彫琢に專念するもののあることは、マルクス主義の運動から云つても、缺くべからざる必要であらう。若しマルクス主義者の全部を擧げて、實踐と原稿書きとに沒頭するならば、マルクス主義の理論は發展はすまいと思ふ。マルクス主義が今日まで勢力を占めたのは、實にその理論的內容に在る。若し眞にマルクス主義の永久的生命を思ふならば、たとへ同志から反動と呼ばれやうとも、プチブルジョアーと云はれやうとも、大學の地位に晏如として研究に沈潛すべきである。彼等が研究と發表とに安住する限り、私共は微力を提して彼等の地位を擁護するであらう。

此に問題は提出されるに違ひない、非合法の實踐は、マルクス主義より來る必然の歸結なのだ。又學閥を階級鬪爭の巷と化し、鬪爭の手段を選ばないことは、マルクス主義の斷言的命令だ。之なくして人はマルクス主義者ではないのだと。之が果してマルクス主義の論理的歸結であるか否かは、私は擧げてマルクス主義者間の決定に委ねやう。若し之がマルクス主義の歸結ならば、苟くもマルクス主義に依る限り、以上の歸結に忠ならざるをえないこととなる。若しそれを實踐しないとすれば、唯その場合の利害の打算から來るだけで、理論的に歸結が此に來ないからではない。若し果してさうならば、マルクス主義者たる限り大學に永住は不可能であり、大學に居られる限り、その人は眞正のマルクス主義者ではないこととなる。此の兩者の何れを選ぶかの岐路に、マルクス教授は立たされてゐると思ふ。

大學(敢て東京帝國大學のみを云はない)に於けるマルクス教授は、今や數個の問題に就て立場を明白にすべく迫られてゐる。第一にその人々は眞正にマルクス主義者であるのかどうか。第二にマルクス主義の必然的歸結は共産主義にはならないのかどうか。若し歸結が共産主義でないならば、どの點で共産主義に反對するのか。第三に若し歸結が共産主義であるならば、何故に非合法の實踐と學内に於ける階級鬪爭とを躊躇するのか。第四に單に研究と發表とのみで、マルクス主義者たるに充分であると云ふならば、研究と發表との限りに於ては、遺憾なくマルクス的の活動を試みてゐるのかどうか。第五に若し現在の大學に自由なきが故に、遺憾なくマルクス的たるをえないと云ふならば、かゝる大學に職を奉ずることはマルクス主義者として何の所詮がありうるか。最後に抑々その人々はマルクス主義者が本で大學教授が末か、教授が本でマルクス主義者が末か、本末は何れに在るのか。聞くならく大學のマルクス教授はその去就に關して多くの惱みを持ちつゝあると。吾々非マルクス學徒の知らざる惱みを味ひつゝあることは、吾々の同情に堪へない所ではあるが、公人として以上の諸問題を明白にする必要がある。然らずんばマルクス主義者としての頽廢か、學徒としての破綻か、何れかに終るの外はあるまい。

（十一）

以上に於て私は所謂大學論の中で、大學自由の限界に就ての私の見解を略述した。之が私一個の見解に止まることは云ふまでもない。私は東京帝國大學の一教授としての外何物でもない。以上の所説は一教授の所説たるに止まつて、それ以上の何ものを代表するのではない。と同時に私が教授會の一員として、私の所信に從つて一票の投票を行使することは公人として云ふを俟たない。

大學論は近時マルクス主義者の好んで筆にする題目であるが、彼等は筆を揃へて大學が顚落せりと云ひ、大學に自由なしと云ふ。然し論者の所謂自由とは果して何を意味するのか、非合法の實踐を爲すも、共同社會の規律に反するも、尚大學の教授は自由であると云ふのであらうか。或は又研究と發表との自由のみを意味するのか。若し前者をも含めるならば大學は始めよりしてかゝる自由を持たない。後者のみを意味するならば、現に東京帝國大學は自由である。大學論者の多くは概念を整理せざる頭腦の混亂を示すか、或は又故意に事態を曖昧にして、讀者を知らざる裡に錯覺に導くかである。又大學に研究發表の自由すらなしと云ふものは、徒に架空の想像に基き、事實に根據してはゐない。彼等は屢々科學的とか實證的とかを口にするに拘はらず、他を誹謗する場合に於ては、科學的でもなく實證的でもないのは私の怪訝に堪へざる所である。更に許し難きは、他を誹謗するものが、本名を隱蔽して假名を用ひ、而して事實を虛構することである。社會變革者の心すべきは、正道を踏んで過たざることである。たとへ保守主義者は何を爲さうとも、新興學徒はその轍に倣つてはならない。曾て河上博士は「反動學派窮餘の一策としての事實の虛構」と題する論文を書いたが、願はくば人をして「左翼思想家窮餘の一策としての事實の虛構」を難ぜしめる勿れ。近時マルクス主義者の言動にして、却てマルクス主義を過たしめるものが尠くない。社會變革運動をしてその手の潔からしめんことを祈るものは、獨り筆者のみではあるまいと思ふ。

世界經濟に於ける金と銀との意義

友岡久雄

貴金屬金及び銀は單なる商品以上のものである。蓋し『資本家的生産は、富を單一物の形態に於ける呪物として結晶せしめねばならない』（マルクス『經濟學批判』宮川實氏譯二三四頁）が故に、金及び銀は『それに適應する富の權化』（同上）として貨幣だからである。世界市場に於ては金及び銀は相竝んで『總ての商品の轉化せる姿容』世界貨幣である。併し其本質上金價格と銀價格とは兩立し難い。從つて資本の支配の下に、商品の世界的流通が擴大、深化するに伴ひ、金と銀とは世界商品界に對する支配を爭つて來た。從來の世界貨幣史は兩貴金屬金銀が、其相對的價値變動を通して抗爭して來た歷史であり、そしてより適當した『價値の獨立なる姿態』たる金の獨制の歷史である。マルクスの教へる所に據れば、最初、自然によつて煉金術者の所謂處女狀態に於て生産される金が唯最も粗朴な勞働を必要とするのみであるに反し、銀の生産は鑛山勞働及び一般に技術の相對的に高度の發展を前提するから、其絕對的稀少性は、金よりも少ないにも不拘、銀の價値は最初は金の價値より相對的に大である。併し社會的勞働の生産力が發達し、從つて『單純勞働の生産物が複雜勞働の生産物に較べて高價となるに比例して、そしてまた地殼がより全面的に掘り起されて金の供給の最初の表面的な源泉が涸渇するに比例して』銀の價値は金の價値に比して下落する（『經濟學批判』宮川實氏譯二三六―二三七頁）。既に最近代迄に金及び銀の同じ體積の表はす經濟的比重は金一に對する銀一五乃至一六であつた。金に對する銀の決定的敗退、ルードウィッヒ・バムベルガーの所謂『一世界支配者の廢位』は、資本主義の最近段階への躍進時代一八七〇年代から始まつた。此時以後世界貨幣銀は、益々其價値下落の故に其位を奪はれ、愈々其位の剝奪の故に其價値を失つて行つた。一八七〇年の金銀比價一對一五・五七に對し一八八〇年のそれは一對一八・〇五、一

八九〇年は一對一九・七五、一九〇〇年は一對三三・三三、一九一〇年は一對三八・二二である（アメリカ造幣局長官年次報告に據る）。今や先進資本主義諸國の法律上或は事實上の金本位制に對して銀本位制は後進資本主義國の、殊に前者の植民地乃至半植民地の本位制として殘り、それすら二十世紀に入つては、例へば英國の印度（一九〇〇年）・海峽植民地（一九〇二年）・米國の比律賓（一九〇三年）、和蘭の瓜哇（一八七七年）、英國の半植民地シヤム（一九〇八年）・米國の半植民地墨西哥（一九〇五—一九〇七年）巴奈馬（一九〇四年）の如き、從來銀本位國として知られた其本位制は、一見銀本位制に似て非なるもの、即ち現實に無制限法貨として流通する銀貨は現實に流通せざる金の章標に外ならぬ所の金爲替本位制となつた——尤もこれは其本位制の合理性の爲よりも、寧ろ母國の或は支配國の利益の爲であつたことは云ふ迄もない。併し猶ほ東洋に於ては、少くとも支那、佛領印度支那、波斯等に於ては銀は依然として價値尺度として、流通手段として、支拂手段として作用したし、金と對等に世界貨幣たり得た。然るに世界大戰中交戰國は、「國內流通の銀貨需要の增加の爲許りでなく、それ以上に、所謂「商品飢饉」に惱まされた、東洋諸國の物資の供給に依頼する必要から、金と同様に、一般的購買手段並に支拂手段として銀をも渇望した。他方に於て生活必需品の騰貴、勞働力の缺乏に基づく生産費の增加、當時既に世界銀産額の三割餘を生産した墨西哥の政變（一九一〇—一九一三年）による銀生産額の激減が、銀に對する需要の激增と相俟つて銀價を暴騰せしむるに至つた。一九一三年の金銀比價は一對三四・一九、一九一六年には一對三〇・一六、大戰直後の一九二〇年には實に一對一五・三一、倫敦相場の最高價格は一オンス八五ペンス、紐育のそれは一三三セントに達した。其結果從來の銀貨の多くは鎔解點に達し、交戰國並に中立國は金と同様に銀の鑄潰乃至輸出を禁止した。印度に於ては一九一七年以降印度省手形の賣却は「銀の買價を基礎として定むべく」發表せられ事實上一八九三年前の銀本位制に立ち返つた（矢内原忠雄氏『印度幣制の植民政策的意義』（一）國家學會雜誌第四十三卷第十二號二八頁參照）斯くて銀は世界幣制の混亂中に再び金と相並んで世界商品界に君臨するかに見えた。

然るに大戰後に於ける世界資本主義の「崩壞の危機」から再組織への過程は、從來それが有つた二つの貨幣商品金銀の中銀をその地位から追放して一元的に金基礎の上に行はれた。銀は既に戰前からその傾向を充分に有つてゐたが、戰後に於ては益々其金に對する相對的價値下落が甚だしく、到底最近段階の世界市場に於てはそれ自身價値尺度たるに適しない、金本位の下に金の價値章標たる役割を演ずるより外ないからである。一九二〇年の最初倫敦の八五ペンスは既に年末には四二ペンスに暴落

した。紐育のそれも年初の一三二セントから六四セントへ暴落した。併し、猶ほ以下の表に示す如く、爾來銀塊相場は大體下落し續けて居り、殊に一九二六年以後は落調著しく、一九二九年以後は月毎に加速的に低落し、年初紐育相場の五七・〇一九セントは年末四八・四七五セントへ、倫敦相場の二六・二五七ペンスは二二・二五七ペンスへ、本年に入るや更に落調加はり、六月紐育相場は四〇セント臺を割つて三四・五九六セントへ、倫敦相場は二〇ペンス臺を割つて一六・〇四九ペンスへ實に歷史上空前の暴落を現出した。(詳しくは次表參照)

年月	紐育單位セント(純銀一オンスに就き)	倫敦單位ペンス(一標準オンスに就き)	金銀比價
一九一四年	五四・八一	二五・六二	三七・三七
一九一五年	四九・七〇	二三・七七	三九・八四
一九一六年	六五・七〇	三一・三三	三〇・一一
一九一七年	八一・四〇	四〇・九〇	二三・〇九
一九一八年	九六・八〇	四七・五四	一九・八四
一九一九年	一一一・一〇	五七・〇八	一六・五三
一九二〇年	一〇〇・九〇	六一・九五	一五・三一
一九二一年	六二・六六	三六・八九	二五・六〇
一九二二年	六七・五八	三四・四一	二七・四一
一九二三年	六四・八八	三一・九三	二九・五二
一九二四年	六六・七八	三三・九五	二七・七六
一九二五年	六九・〇七	三二・〇九	二九・三八
一九二六年	六二・〇一	二八・六九	三二・八八
一九二七年	五六・三八	二六・〇五	三六・二二
一九二八年	五八・二〇	二六・七五	三五・二六
一九二九年 一月	五七・〇一九	二六・二五七	三四・五〇
二月	五六・二一〇	二五・九〇八	三六・七八
三月	五六・三四六	二六・〇〇〇	三六・七一
四月	五五・六六八	二五・七三七	三七・一一
五月	五四・一二五	二五・〇八六	三八・二一
六月	五二・四一五	二四・二五七	三九・四五
七月	五二・五一九	二四・二八九	三九・三七
八月	五二・五七八	二四・二八八	三九・三〇
九月	五一・〇四一	二三・七〇四	四〇・五三
一〇月	四九・九一三	二三・〇四三	四一・四二
一一月	四九・九一四	二二・六八九	四一・四二
一二月	四八・四七五	二二・二五七	四二・四二
年平均	五二・九九三	二四・四五九	三九・〇〇
一九三〇年 一月	四五・〇〇〇	二〇・八七二	四五・六二
二月	四三・一九二	二〇・〇〇七	四七・八五
三月	四一・六四九	一九・二九八	四九・六九
四月	四二・四三九	一九・五五四	四八・七五
五月	四〇・九〇〇	一八・八三三	五〇・五四
六月	三四・五九五	一六・〇四九	五九・七四
半年平均	四一・三二九	一九・一〇二	五〇・〇五

註　以上一九二八年迄の銀塊相場はサミュエル、モンターギュ商會「地金通信」、一九二九年以後は正金銀行「正金週報」に據る。金銀比價はアメリカ造幣局長官報告に據る。一九二九年以後は純金一オンスに付き二〇・六七弗の割合で計算したるもの。

斯かる銀價格低落の最も重要なる原因は、何よりも銀の生産の大部分が、近來益々他の金屬生産上の副産物として生産せられ、其生産の多寡は寧ろ他の金屬の價格の騰落に依存してゐるによると云はれる。「ミネラル・インダストリー」に從へば、世

界銀産額の二六%だけが、銀鑛から生産され、爾餘の七四%は他の金屬生産過程の副産物であつて、その内鉛鑛石から約二八%、銅鑛石から約二七%、其他銅、鉛、亜鉛等の混合鑛石から一八%生産せられると云ふ(G.A. Roush: Mineral Industry, 1929.)

(一) 銀の世界産額 (單位キロ瓦)

1913	6,964,361
1914	4,995,951
1915	5.767,844
1916	5,246,859
1917	5.417,972
1918	6,139,810
1919	5,488,000
1920	5,520,000
1921	5,328,000
1922	6,642,000
1923	7,540,000
1924	7,449,000
1925	7,624,000
1926	7,875,000
1927	7,814,000
1923	7,844,000
1929*	8,000,000

* 1929 年は Handy and Harman の推計を換算したもの

(二) 鉛の世界産額 (單位英噸)

1913	1,162,374
1914	1,178,183
1915	1,055,521
1916	1,109,562
1917	1,128,150
1918	1,162,566
1919	884,412
1920	907,926
1921	879,442
1922	1,077,640
1923	1,218,025
1924	1,330,841
1925	1,548,928
1926	1,602,773
1927	1,688,000
1928	1,675,272
1929	——

(三) 銅の世界産額 (單位英噸)

1913	1,002,284
1914	934,838
1915	1,071,290
1916	1,364,690
1917	1,438,291
1918	1,401,943
1919	1,009,031
1920	953,177
1921	556,594
1922	866,976
1923	1,245,720
1924	1,266,745
1955	1,434,716
1926	1.482,578
1927	1,525,586
1928	1,708,646
1929	——

(Mineral Industry, 1929 に據る)

然るに鉛も銅も大戰以後好況を持續し、殊に銅の如きは、アメリカ合衆國の銅輸出組合と銅協會の二大勢力の大トラスト結成によつて戰後の不況に面しても一九二九年迄米銅の生産原價の約二倍に當ると云はれた一八セントの公定相場を維持し得たので、銅の生産額は年々約六%づつ増加し續けたので、銀の生産も自ら増加せざるを得なかつた。從つて銀の生産がそれ自ら統制し難いものであり、又其七四%が他の金屬の副生産物である爲に其價値は當然低落を免れ難い。而も斯かる銀價の低落は、戰後に於ける本位制の再建、確立に當つて金基礎の採用を決定的ならしむると共に、銀の貨幣廢位を伴ひ、銀の最大消費部面たる貨幣用銀の消費を制限した。戰後印度の金地金本位制の施行を始め、植民地、半植民地に於ける金爲替本位制の再建は多かれ少かれ之に與つた。更に一九二九年末以來問題になつてゐた佛領印度支那が本年五月三十一日から一ピアステル一〇フラン(千分の九百の純金六五五ミリグラム)の金爲替本位制を新規に布き、ペルシヤも亦本年一月以來銀の輸入禁止、クラン爲替の統制を企てると共に、一レヨール(純分千分の九百の金〇・三六六一一九一瓦)を單位とする金本位制採用に決定した。のみならず、他方には一九二〇年銀價騰貴時代イギリス政府は補助銀貨の純分を〇・九二五から〇・五〇〇に引下げ、アメリカ政府はマック・ファデン法案によつて千分の九百の銀弗の純分を千分の八百に減じドイツ政府は一九二四年インフレーション後の銀貨

鑄造に際して從來の九〇%の純分を五〇%に切下げた。

總て是等の事は柄商品銀の貨幣用消費への道を閉し或は狹め銀價を低落せしめたが、啻にさうある許りではない。貨幣用消費から追はれた銀の供給が在來の供給に加はるから、生産に對する消費の均衡は益々破壞されざるを得ない。夫に更に各國の銀輸入禁止或は課税が益々事態を悪化せしめる。ハンディ・アンド・ハルマンの所謂「銀市場回顧」(The Review of the Silver Market) に從へば、一九二八年中フランス及びベルギーの銀本位貨廢止に伴ふ前者の銀供給千九百萬オンス、後者のそれは千三百萬オンスに達し、イギリスの銀鑄貨純分引下げによる銀供給は五百五十萬オンスと推定され、又インド政府の銀賣却は何等の聲明をも伴はないが、恐らく其が爲めと推察される倫敦及び上海の銀ストックの增加は二千五百五十萬オンスと計算されてゐる。フランス、イタリーの通貨安定は、銀の本位貨から銀の補助貨を改鑄する事によつて銀に對しては何等の銀に對する需要も喚起しなかつた。アメリカ合衆國及びカナダの工藝用銀消費は三千三百五十萬オンス、イギリスのそれは六百萬オンス前年より五〇萬オンスの減少と推計され、總て以上の事あるにも不拘、一九二八年の銀塊相場の騰貴は、全く世界唯一の銀本位國支那に於て國民軍の北京內薄、山東事件による日本政府對國民政府の關係切迫に基づく銀の騰貴見越の投機、及び上海に於ける銀行券發行、貨幣鑄造、外債內債の募集、政府銀行等の任務を帶びた支那新中央銀行(The new Central Bank of China) の設立に伴ふ銀需要の增加の爲であつた。同じくハンディ・アンド・ハルマンの「銀市場回顧」に從へば、一九二九年中イギリスは銀貨改鑄によつて更に一千萬オンスを、フランスは銀貨鑄潰によつて同じく一千萬オンスを賣却したと推定され、印度政府は例によつて、二千五百萬オンスを賣却したと信ぜられ、前年より遙に少い譯である。之に反し工藝用銀の消費はイギリス六百五十萬オンス、アメリカ合衆國及びカナダ三千七百萬オンスにて前年より增加し、鑄造用銀の需要も前年より增加したに不拘銀塊相場の著しい低落は、佛領印度の幣制改革に伴ふ銀處分五千萬オンスに達した爲め、又上海に輸入された銀が內地の經濟不況、軍閥の抗爭の爲に需要なく上海に滯貨となつてゐる爲である。

斯る銀價格の暴落は、直接には二重に影響した。先づ銀生産者に對しては利潤減少、利潤喪失を齎した。例へば世界産銀額の四割、年々約一億オンスを産する世界最大の産銀國メキシコは其の銀生産額の約四分の三を銀鑛から直接採取する爲に、銀價崩落の打擊は他の産銀國に較べて最も甚しかつた。メキシコに於ける最大の産銀業者の一人ウォルター・バーマーの云ふ所に據れば、メキシコの産銀業者にとつて純銀一オンスに付き四

六セント$\frac{7}{8}$乃至四七セント$\frac{1}{8}$の相場は致命的であると云ふ。(Financial and Commercial Chronicle, Jan. 1930.) 然るに本年六ヶ月間の紐育銀塊相場半年平均は四一・三二九セントである。從つて多數の鑛山が閉鎖され、數萬の鑛山勞働者が街頭に投げ出された。『クロニクル』誌 (Financial and Commercial Chronicle, June 21, 1930.) の報ずる所に從へば、「既に六月迄に二千の鑛山が中止され、猶ほ續々と多數の鑛山が全部或は一部操業中止、勞働者解雇の許可を申請しつゝあることを報じてゐる。或鑛業會社 (The Santa Maria de la Paz Y Co. Anexus) の如きは、鑛山の完全閉鎖と從業員四千五百人の解雇を請願して許されず、平均一日二ペソの勞賃を二五%切下げることに依て辛ふじて操業を繼續しつゝあると云ふ。又銀價の低落は金ペソに對する銀ペソの打歩を生じ、今や四・三〇%に達するに至つたが、之は今猶ほ銀ペソ貨を使用しつゝある少額取引及び地方取引に對して重大なる打撃を與へた。斯くてメキシコは本年三月以來恐慌狀態に陷つたので、オルティヅ・ルビオ大統領は失業者救濟の爲に政府内に新に一局を設けると共に、他方には銀價安定の爲に金の輸出を禁止し、銀の輸入を禁止した。猶ほ『銀價崩落によつて惹起された恐慌に伴ふ世界市場の狀態改善の方法調査の爲に』政府によつて國際鑛業會議（インターナショナル・マイニング・コングレス）開催が計劃され、來る十一月世界の關係業者に向つて招請狀が發せられる筈である。メキシコに

次で世界産銀額の約二割五分年々約六千萬オンスを生産するアメリカ合衆國、世界産銀額の約八分年々約二千萬オンスを生産する第三位のカナダ、其他ペルー、オーストラリア等も其産銀の大部分が銅、錫、鉛等の副生産物である爲に銀價格低落の影響はメキシコの如く直接でないにしても猶ほ相當の打撃を免れなかつたのは云ふ迄もない。

アメリカ合衆國の如きは、直接國内のネヴアダ、コロラド及びユター諸州の銀鑛業の打撃に加ふるに、メキシコの鑛業（主として銀鑛）に對する三億九千弗の投資に於て間接の打撃を蒙つた。之は其アメリカン・スメルティング・アンド・リファイニング會社、ユナイテッド・ステーツ・スメルティング・アンド・リファイニング會社、アナコンダ・コッパー會社、セロ・デ・パスコ會社等の利潤減少となつて現はれた。上院議員ピットマン（米國第一の銀鑛業者）によつて銀價安定の爲に提案された純銀一オンスに就き三〇%の課税案は、議會の決戰投票に敗れたが、銀の工業的使用を促進する案、米國に於ける現行の銀貨を改鑄して更に小型になし、其携帶を便利にして一般の使用を促進せんとする案が米議會に提出すべく研究せられ、商務卿ラモントが銀問題研究費として五萬弗支出案提出の意ありと傳へられ、或は上院に於けるピットマン決議に基づく米支貿易關係の調査委員會組織の如き、銀生産國並に對銀本位國輸出國として銀價低落の影響が鮮少でないことを語るものである。

他方に於て銀塊相場の急激なる低落は銀を以て價値尺度とする銀本位國に對しては、先づ輸入物價の騰貴、輸出物價の下落

そして一般的物價騰貴を齎し、銀本位國の對金本位國債務を加重する。現在世界に於ける唯一の銀本位國支那は其好適例を示してゐる。輸入物價は一九二五年以來連續して騰貴し一九三〇年五月までに四五ポイント約三割の騰貴を示した。輸出物價も

年月	輸入物價	輸出物價	卸賣物價
1925	153.4	148.9	159.4
1926	151.2	153.6	164.1
1927	164.8	168.4	170.4
1928	169.1	168.0	160.7
1929	178.5	173.1	163.7
1 月	169.2	168.7	160.1
2 月	174.8	169.0	162.4
3 月	177.2	169.7	164.2
4 月	175.4	166.3	161.2
5 月	174.3	173.1	161.7
6 月	175.7	175.0	162.6
7 月	176.1	177.1	162.7
8 月	181.6	175.3	164.7
9 月	185.4	178.3	167.1
10月	185.6	178.7	168.0
11月	183.4	173.2	164.7
12月	183.2	172.2	164.7
1930			
1 月	186.5	175.5	169.6
2 月	189.5	182.0	174.7
3 月	190.8	179.8	173.9
4 月	192.1	180.7	174.2
5 月	198.4	176.7	173.4

（國定稅則委員會「上海物價月報」に據る）

一割八九分騰貴した。輸出物價の低落に伴ふ輸出増進が其低下に反作用したからだ。卽ち純輸入額が一九二六年來停滯してゐる

年	純輸出（海關兩）	純輸入（同上）	總額（同上）
一九二五年	七六[illegible]・[illegible]九七	九四七・六八四・九四四	一・七二四・[illegible]七・八[illegible]
一九二六年	八六四・二九[illegible]・七七[illegible]	一・[illegible]四・[illegible]・[illegible]	一・九八八・六[illegible]・[illegible]四
一九二七年	九一八・六九九・六五三	一・[illegible]二一・九五一・六四	一・九[illegible]・[illegible]・八六
一九二八年	九九一・三五四・九八八	一・一九六・九八九・[illegible]七[illegible]	[illegible]・八七・[illegible]四・[illegible]九
一九二九年	一・〇一五・〇〇〇・〇〇〇	一・[illegible]五五・〇〇〇・〇〇〇	一・[illegible]八・〇〇〇・〇〇〇

（國定稅則委員會「[illegible]出入統計」に據る）

るに反して純輸出は連年増進してゐる。蓋し、銀塊相場が一九二五年以來二九年迄約二四%を下落してゐるに反して輸出物價も輸入物價も一六%內外の騰貴を示したに過ぎなかつた。それは兎に角、他の金本位諸國の卸賣物價指數が大なり小なり下降してゐるのに支那のそれが却つて騰貴してゐるのは價値尺度たる銀の價値低落の結果と見る外はない。而もそれが必しも支那の好景氣を意味しないことは以下記述する所によつて明である。本年五月二十七日の時事新報の記事に從へば、本年初頭以來の銀價暴落の爲に輸出入貿易商、及び內地問屋筋の破産が續出し、又『クロニクル』誌（Financial and Commercial Chronicle Jan. 11, 1930）の報ずる所に從へば本年初め上海の五銀行は既に破産し、猶ほ十銀行が破産に瀕しつゝあると云ひ、「七月十一日上海「民國日報」の記事に從へば、最近上海の失業者は二十五萬七千人、上海總人口の約一百五十萬人に對する六分の一に上ると云ふ。又銀價低落に伴ふ輸入物價の騰貴は、最近支那內地に於ける未曾有の米荒饉の爲に益〻多く輸入外米に依賴しつゝある支那大衆の生活を一層惡化せしめ饑餓に瀕せしめた。上海「時事新報」七月廿八日の記事に從へば本年初頭よりの外米輸入高は例年の約三倍以上、上海に於ける輸入高だけでも七百五十一萬三千八百十五俵に達する。猶ほ七月廿六日の「民國日報」に從へば、最近上海市價は米一石（日本の五斗餘）二十四元（一元は最近の相場で日本の六十錢）であり、米の産地たる蘇州、無錫、松江地方に於てさへ二十元を越してゐる。之を世界大戰

當時の一石五元に比較すれば殆ど四倍餘の殺人的奔騰振である云々。(以上『時事新報』『民國日報』共に東亞經濟調査局『東亞經濟通信』に據る)又本年中に支拂ふべき外債が七千八百萬磅の巨額に達することも銀價暴落の際に堪へ難き苦痛であるに相違ない。國民政府の損失はその爲に本年一月五百萬海關兩に達したと云はれ、北京天津時報(Peking and Tiensin Times, Jan. 17, 1930)に從へば其爲に財務、商務、工務各部の聯合協議會が開催され恐慌對策として次の諸項が決議されたと云ふ。即ち(一)金本位制を採用すること、其前提手段として各部援助の下に速に國際爲替銀行を設立すること(二)工務、商務、農務、鑛務及び財務の各部の協力努力の下に速に支那内地の鑛山を開發すること(三)人民に對する重課を廢止すること(四)國産品の愛用を勸誘すること(五)交通運輸を促進し勞資の協働を助長すること之である。更に『クロニクル』誌(F. and C. Chronicle, May 17, 1930)に從へば、國民政府は銀價安定の爲に遂に一方に金の輸出を禁止し他方に銀の輸入を禁止するに至つたと傳へられる。

一九二七年四月所謂「レーシオ・ビル」によつて金地金本位制を採用したが、今猶ほ銀の世界在高の約三分の一を保有すると云はれる印度は、固より銀價格の騰落に對して多大の利害關係を有するは云ふ迄もないが、印度政府は一九三〇年二月銀價安定の目的を以て一オンスに付き四アンナ(二十七セント)の關税を課した。然るに其後財務長官サー・ジョージ・シャスター更に銀塊一オンスに付き八セントの輸入税の徴課を聲明した。之より先ペルシア政府も一月三十一日銀の輸入を禁止した。

現在唯一の銀本位と云はれる支那ですら、ケムメラー委員會の勸告を何等かの形式で成立せしめんとしつゝある國民政府によつて金本位制の制定が一の目標として掲げられ、既に海關の金建に於て銀の輸入禁止、金の輸出禁止に於てその一歩を踏み出してゐる。銀は世界の有ゆる部面から排斥せられ、唯獨り金のみが追求爭奪の的となつた。所で金の生産は、銀の生産が累年著しく増加して新記録を作りつゝあるに反して金の生産は次のジョセフ・キッチンの統計に從へば、近年寧ろ相對的減少を示した。

世界の金産額は一九一五年に於て歴史上の最高記録九千六百六十萬磅に達し、爾來漸減し一九二二年には最近二十年來の最低記録六千五百五十萬磅、一九一五年の世界産額の約六割八分に低落した。之は一部は當時既に世界産額の半分を産出しつゝあつたトランスヴァール地方に白人鑛夫の罷業が起り、前年の金産額三千四百五十萬磅(世界産額の五割一分)から二千九百八十萬磅(世界産額の四割五分)に激減した爲であつたが、猶ほ一部は十九世紀の後半から二十世紀の始め十五年頃迄著しいテンポで増産傾向にあつたアメリカ、オーストラリアの諸金鑛が

年次	トランスヴアル	全英國	外國	世界
1914	35.7	56.5	33.9	90.4
1915	38.6	60.6	35.8	96.6
1916	39.5	59.5	34.0	93.5
1917	38.3	56.1	30.2	86.3
1918	35.8	51.0	28.0	79.0
1919	35.4	50.1	24.9	75.0
1920	34.7	48.1	20.9	69.0
1921	34.5	47.4	20.6	68.0
1922	29.8*	44.6	20.9	65.5
1923	38.9	53.4	22.1	75.5
1924	40.7	56.0	25.0	81.0
1925	40.8	56.1	24.9	81.0
1926	42.3	57.5	24.5	82.0
1927*	43.0	58.6	23.9	82.5
1928	44.0	59.4	24.1	83.5
1929*	44.3	59.6	23.9	83.5

fine ounce 當 84s11$\frac{1}{2}$d の計算單位百萬磅

* 白人勞働者の罷業による一時的減少

* 概算 (Economist, Feb.15,1930 に據る)

既に涸渇して來たのと、大戰中及び直後の物價騰貴の爲に生産手段及び勞働力の價格昂騰して企業利潤を減少したに因る。しかし既存の鑛脈の涸渇がもつとも根本的であつたことは、其後アメリカ及びオーストラリアの金生産額が一般に物價水準の下落にも不拘、既に永く停滯し或は寧ろ減退しつゝあるのを見ても判る。其後の世界金生産額の恢復は、キャナダのオンタリオ地方の生産增加、革命の爲に中絶してゐたロシアの金生産復活等々もあるが、殆ど全く南アフリカのランド地方の產出增加に基づく。それでも一九二九年の世界金産額は八千三百五十萬磅、一九一五年の最高記録に較ぶれば猶ほ一四%低い。ランド地方の産出額は四千四百三十萬磅、正に世界金産額の過半約五二%に當り、これに全イギリスの金産額を合すると五千九百六十萬磅に上り、世界金産額の七一%がイギリス帝國内に於て生産せられる。爾餘の二割九分の中ではアメリカが最も多く九百萬磅臺を維持し、キャナダ、ロシア、メキシコが之に次ぐ。それは兎に角世界金産額は一九二三年以來漸次增加の傾向にあるとは云へ、猶ほ一九一五年の水準とは遙に隔たつてゐることは事實である。

所で此金の相對的生産減少を以て世界的物價水準低落の一原因である見解が行はれてゐる。此見解は殆ど例外なしにカッセル教授の有名な説明方法に基づいてゐるものであるがカッセル教授に從へば、次表の如く、ザウエルベックの物價指數は一八

年	ザウエルベック物價指數	實際的金量(單位百萬マルク)	相對的金量*
1850	77	10000	1.00
1855	101	12680	1.11
1860	99	15370	1.17
1865	101	17795	1.18
1870	96	20335	1.17
1875	96	22555	1.13
1880	88	24735	1.08
1885	72	26650	1.02
1890	72	28775	0.96
1895	62	31885	0.93
1900	75	36975	0.94
1905	72	43366	0.96
1910	78	52603	1.00

* G. Cassel: Theoretische Sozialökonomie, 3. Aufl.に依る

五〇年と一九一〇年とに於て略〻同一の水準を示してゐる。從つて此期間に於ける金保有量の增加は、當時のヨーロッパの經濟的發展の進度と略〻一致してゐたことを語つてゐる。そこで六〇年間に於ける金の增加率を計算すると二・八%（$\sqrt[30]{2.28}=1.0279$）になるから、これによつて吾々は五〇年以後の年々の正常なる金量を算出することが出來る。此正常なる金量によつて實際的金量を除して其商、カッセルの所謂相對的金量を算出して見ると、六〇年の期間に於て相對的金量が、一、〇〇を超へる始めの約三〇年間は物價指數も亦七七以上を指し示し、相對的金量が一、〇〇に及ばない後の約三〇年間は物價指數も亦七七以下に下つて居る。從つて經濟的發展の進度が同一であるならば、ヨーロッパの金保有現在高は年々二・八%增加するを要する。猶ほ金の年々の磨損率を〇・二%とすれば、貨幣側からの物價水準に對する影響を排除する爲には年々前年の金現在高の三%が新に追加せられねばならないことになる（カッセル著『理論的社會經濟學』第三版第十一章五四節以下參照）。カッセル教授がこれを直ちに戰後の金生產額にも適用して一九一五年以後の世界金產額は到底所要の三%を滿すに足らず、從つて『世界が無限の將來まで、緩慢ではあるが、累進的な通貨收縮過程の桎梏に陷り、企業及び生產竝に公共財政に對して、あらゆる害毒を蒙る』（田村、毛里氏共譯『世界の貨幣問題』一七二頁）ことを防がんとするならば、金の貨幣用需要を滅ずべく、諸中央銀行の間の計畫的行動が必要であり、そしてかゝる計畫的行動の最理的なる方法は即ち「本位貨幣として金を使用することを自然即時に廢止すること」（同上一七二——一七三頁）に外ならぬとしたことはよく知られてゐる。このカッセル教授創造する所の三%說——以下便宜上さう呼ぶことにする——がいかに一般的な人氣を博したかは其後一定圏の人々を除いてケインズを始め殆どあらゆる經濟學者及び經濟雜誌記者によつて最近の世界的物價水準の低落の說明竝にその將來への豫測に好んで援用せられてゐるのを見れば判る（尤もストラコシユー——サア Hery Strakosch: gold and the Price Level, Supplement to the Economist, July 5,1930——に從へば、カルル・シナイダーやジヨセフ・キッチンは最近の世界の主要生產物の增加率を年三%と計算して必要なる金の生產增加率三%に到達したと云ふが、筆者にとつてはそれは何方でも本質に於て渝りはない）。吾國に於ても御多聞に漏れず例へば東洋經濟新報記者は次の如く述べてゐる。「要するに世界全體としての貨幣用金は、統計に現はれた所では別段憂ふべきものを發見せぬが、引續く米國への金集中とフランスの金本位に伴ふ金吸收とが、部分的に金不足を生ぜしめつゝある。加之金產額から推察すると、貨幣用金の純增加高は、多分カッセルの標準とした年率三%よりは餘程少い。物價の世界的漸落は蓋し免るべから

ざる勢である（同誌一四〇二頁）と。併しカッセル教授にあつては果して最近の金の價値騰貴を說明してゐるであらうか。カッセル教授の戰前と戰後の資本主義世界經濟に於ける生產及び流通の著しい歷史的變化に全く無頓着な抽象的な方法——これだけでも三％說の似て非なる科學的性質を窺ふに足りる——を暫く除外しても、三％說が僅かに據つて立つ所の基礎理論は極めて單純なる通貨數量說乃至は通貨原理に過ぎないのである。カッセル教授の所謂相對的金量に現はれる所の所謂正常なる水準を超へた金量、正常なる水準に達せざる金量の概念は貨幣學說史上通貨數量說の建設者そして又通貨原理の父と云はれるリカアドオの極めて素朴な祖述に外ならない。リカアドオが貨幣商品金から流通手段としての機能より以外の一切の機能を抽出することによつて產出せられる或は流入する金を排他的に流通手段に轉化し、以て流通する商品の價格總額に對して或は過剩なる或は過少なる金の概念を形成したことはよく知られてゐる所である。從つてリカアドオにとつて金が流出し或は流入するのは、金が過剩であり或は過少である爲めである、換言すれば、金がその國に於てはそれ自らの交換價値より低い交換價値の章標となり或はその國に於てそれ自らの交換價値より高い交換價値の章標となる爲である。金はいつの間にか一價値の獨立な姿態一から「價値の章標」に、本來の紙幣に轉化してゐた。此基礎の上に立つ[illegible]すれば、通貨[illegible]る。金が流出すれば通貨は過少となるのだから銀行家をして緊縮せしめ、金が流入すれば、通貨は未だ過少なのだから銀行家を膨脹せしめねばならない。リカアドオ及び其の信奉者の間に於けるかゝる觀念の困難、混淆を助けたものは、當時ナポレオン戰爭及び直後に於ける英蘭銀行の兌換停止、不換紙幣の濫發、物價騰貴爲替逆調等の相並んで起つた諸現象であつた。カッセル教授にとつて三％說に對する自信を一層強めたものは世界大戰及び直後の未曾有のインフレーションであつた事はリカアドオに於ける貨幣數量說の形成は勞働價値說からの逸脫であつたが、最初から價値論を有たぬカッセル教授は稀少性原則と抽象的計算速度を操つて紙幣であると金であるとに頓着なく簡に無二數量說によつて說明するより外に術がなかつただけである。併し純金屬流通の場合に於てすら、金の價値は流通する金の數量によつて決定せられるのではなくして、流通する商品の價格總額が與へられ商品の變形の速度が與へられてゐるならば、流通する金の數量は金自身の價値によつて定まるのである。だからこそ一流通手段の分量が增加すれば、物價が一般的に下落し、流通手段の分量が減少すれば、物價が一般的に騰貴するのは商品價格に於て最も確かめられたる現象の一つである」（經濟學批判邦譯一四六頁）と云ひ得るのである。流通する金の數量が金の價

値を決定するとする數量說的見解は金の價値尺度の機能と流通手段の機能との間の區別に對する全くの無理解に由來する。金自身の價値は其再生產に社會的に必要なる勞働時間によつて定まる。其勞働時間それ自體は『その相對的な自然的稀少性に、竝にそれを純粹なる金屬狀態に於て獲得することの難易に依存する』（『經濟學批判』邦譯二二六頁）新に發見される金鑛が貧鑛であるとか其他の理由によつて社會的必要勞働時間が增加すれば、金自身の價値は騰貴し、價値尺度の機能を通じて同一價値量の商品の貨幣的表現價格は下落する。從つて必要なる金の流通數量が減少する結果は從來よりより少い金の流通數量とより低い價格が與へられる。反對の場合は逆となる。最近に於ける世界產金額の相對的減少が、金の生產部門に於ける勞働の社會的生產力の變化に基づくものであるならば、それと世界的物價水準との關係は正に金の價値尺度の機能から說明せらるべきで、金の流通手段の機能から說明せらるべきではない。況や近代資本主義經濟に於て金が作用しつゝある職能は最早流通手段の機能よりは寧ろ支拂手段の機能であり、而もそれは大戰後に於ては殊に著しく專ら國際的支拂手段としての機能に集中してゐる。而もカッセル教授及び其追隨者達にとつて不幸なことには通貨數量說乃至通貨原理の祖述者の例に漏れず、支拂手段の機能と流通手段の機能とが全く等一視せられ、銀行券、小切手の信用貨幣價値が不換紙幣の章標とが等置せられてゐる。カッセル教授に劣らずノフィッシャー教授の「貨幣の錯覺」に述べる所の信用統制、金鑛山の統制、金本位の廢棄の主張も同じ「錯覺」に基づいてゐる。從つて「資本論」の次の文句は此場合にも直に當て篏めることが出來る。「一八四四年の銀行條令は國內に存する一切の貴金屬を流通要具に轉化せしめんとしたものであつて、その故にこそ、この條令は效果の上で興味あるものとなつてゐる。それは、金の流出を通用要具の收縮と同一視し、金の流入を通用要具の伸張と同一視せんとしてゐる」（『資本論』第三卷（下）邦譯一〇六頁）金の流出入を通用要具の伸縮と同一視することが一八四四年の「銀行條例」の形で如何なる效果を擧げたかは既にマルクスが「資本論」第二卷に於て指摘した所であつて、「銀行條例」施行の結果は「市場利子率の上に不斷の諸激變が生ずるに至り」（『資本論』第三卷（下）一〇〇頁）「貨幣の價を高くすること」（同上）を目標とする貸付資本家の利益に貢獻したと謂はれる（猶は櫛田民藏氏『通貨原理に關するマルクスの書簡』大原社會問題研究所雜誌第六卷第一號二〇三頁以下參照）。然らば夫自ら三%の世間的價値にも乏しいカッセル教授の三%說が如何なる利益に奉仕し、如何なる利益の擁護に役立たうとするのであるかを云ふ必要はあるまい。兎に角三%說そのものは如何にあらうとも、資本主義經濟にとつて、

貨幣用金に對する需要を合理的に節減することは必要である。流通手段としても支拂手段としても貨幣用金は資本主義經濟にとつて一の空費であり、其獲得の爲に現在世界經濟の擔當者達が其支配する總勞働と資本の相當巨額の一定可除部分を充用せねばならぬことは彼等にとつての「デッド・ウェイト」であらねばならない。從つてあらゆる努力が國內流通から金を引上げて中央銀行の庫中に集中せしめ、預金の拂出及び銀行券の兌換に充用する爲に必要なる、可能なる最少限度の金準備に止めやうとする。猶ほ戰後に於て殊に同じ努力が金の鑄貨たる形態を廢ひ、金を排他的に國際的支拂に充用すべき準備金、所謂世界貨幣の準備金として集中せしめる。更に其國際的支拂に於ても國際的決濟の集中による金使用の節約がバーデンの國際決濟銀行の形式で工夫せられてゐる。併し斯の如き金使用の「合理化」が如何に企てられやうとも資本の「合理化」にとつて資本自身が常に其の限界となつてゐる如く、其基礎の上に立つて金の限界のみを超えて「斷然卽時に廢止する」ことは勿論出來ない。吾敎科書が敎へてゐる樣に、金銀が一社會的過程の一般的生產物それ自體、あるひは生產物としての社會的過程それ自體が一の特殊なる自然的生產物、卽ち土地の內臟に藏されて居り、それから採掘され得る金屬」だとすれば、物神金に對する呪咀は、あたかも天に向つて唾すると同樣に「富を單一物の形態に於ける呪詛として結晶せしめねばならない」所の呪咀者達自身の上に戾つて來るであらう。從つて現今世界經濟の擔當者達が金の存在を呪ふ筈はない。否反對である。彼等は金が對外收支の支拂手段としての外、天災、凶作そして戰爭等の場合に一般的購買手段として役立つことをよく知つてゐる。而も戰爭への危險と誘惑とは絕ず存在し、最近の世界的不況の深刻化と共に一層それへの刺戟は强い。次の世界各國中央銀行並に政府金保有高が示す樣に、國內的及び國際的信用制度の著しい發達に基づく金使用上の經濟の著しい增進にも不拘、四十四ヶ國の中央銀行及び政府の金保有高は一九一三年に比して一九二九年は四十九億弗から百三億弗へ二倍以上に增加した。其中アメリカ合衆國の金保有高は戰前の丁度三倍三十九億弗に上り、總額の約四割に相當する。之に次ではフランスが十六億弗世界最大の產金國イギリスは七億弗の第三位に在る是等の諸國を中心に世界の資本主義諸國が其金保有高の維持と增大の爲に如何に焦慮し、大なる犧牲をも敢へて忍ばうとしてゐるかは最近の國際金融史の何の頁に於ても覗ひ得る。次に前掲ストラコッシュに從ひ最近五ヶ年間の各國中央銀行の金保有高の變化を示す統計表を揭げて置く。英・米・獨・佛諸國の間に於ける目まぐるしい金の移動を知ることが出來る。殊に英佛の間に於ける金の爭奪戰は益々激烈さを加へんとしつゝある。それは一九二七年に既に火蓋が切ら

れた。四月と五月に、フランス銀行は國へ流れ込む大量のポンド・スターリングの爲替を金に換へることを續けた。（ヴアルガ

各國中央銀行及び政府金保有高

年末	44ヶ國合計	北米合衆國	英國	佛蘭西	獨逸	伊太利	日本
1913	4,932,445	1,290,420	170,245	678,858	278,687	265,476	64,963
1914	5,419,867	1,206,487	428,223	802,583	498,508	269,584	64,062
1915	6,226,898	1,706,922	389,203	967,950	582,443	263,278	68,[illegible]87
1916	6,618,404	2,202,157	402,071	652,886	600,377	223,400	113,411
1917	7,125,340	2,523,084	422,592	639,682	573,249	260,721	229,[illegible]80
1918	6,783,361	2,657,885	523,689	664,069	538,685	202,403	225,622
1919	6,768,245	2,517,722	583,211	694,847	259,519	200,098	242,971
1920	7,205,805	2,451,182	762,911	685,517	260,028	204,372	556,475
1921	7,994,314	3,221,215	763,719	690,141	237,102	210,173	610,822
1922	8,380,754	3,505,551	751,597	708,403	239,354	217,284	605,573
1923	8,612,199	3,833,735	754,400	709,480	111,247	215,699	602,228
1924	8,933,486	4,090,067	757,033	710,394	180,939	218,382	585,738
1925	8,925,922	3,985,399	703,482	710,908	287,763	218,825	575,768
1926	9,191,219	4,083,380	735,421	711,106	436,235	200,752	561,810
1927	9,516,366	3,977,181	741,698	954,000	444,158	239,177	541,870
1928	10,010,178	3,746,111	749,767	1,253,500	650,127	265,732	540,803
1929	10,200,638	3,900,160	710,645	1,633,402	543,838	273,001	542,475

(Federal Reserve Bulletin に據る單位千弗)

(各國中央銀行及政府金保有量變化)

國名 ＼ 各年末及變化	1925	1926及變化		1927及變化		1928及變化		1929及變化		4年間の變化
アメリカ合衆國	819	836	+19	818	—20	770	—48	802	+32	—17
フランス	164	(175)	+11	(2[illegible]2)	+27	258	+56	336	+78	+172
イギリス	145	151	+6	1[illegible]2	+1	153	+1	146	—7	+1
ドイツ	59	90	+31	91	+1	134	+43	112	—22	+53
日本	12	118	—5	115	—3	109	—6	110	+1	—13
スペイン	101	101	....	102	+2	101	—2	102	+1	+1
アルゼンチン	95	95	....	111	+16	127	+16	91	—36	—4
イタリー	68	66	—2	69	+3	75	+6	76	+1	+8
小計	1.574	1.634	+60	1.661	+27	1.727	+66	1.775	+48	+201
オランダ	37	34	—3	33	—1	36	+3	37	+1	....
ブラヂル	11	12	+1	21	+9	30	+9	31	+1	+20
ベルギー	11	18	+7	21	+3	26	+5	34	+8	+23
キヤナダ	46	4	+1	47	....	39	—8	31	—8	+15
スウイス	18	19	+1	20	+1	21	+1	24	+3	+6
オーストラリア	26	22	—4	22	....	22	....	18	—4	—8
ポーランド	5	5	....	12	+7	14	+2	16	+2	+11
ジヤヴア	15	16	+1	15	—1	14	—1	14	....	—1
ウルグアイ	12	12	....	12	....	14	+2	14	....	+2
スヱーデン	13	12	—1	13	+1	13	....	13	....	....
デンマーク	12	12	....	10	—2	10	....	10	....	—2
南アフリカ	9	9	....	9	....	9	....	8	—1	—1
チエツコスロヴアキア	6	6	....	6	....	7	+1	8	+1	+2
ノールウエイ	8	8	....	8	....	8	....	8	....	....
其他諸國	78	85	+7	91	+6	93	+2	102	+9	+24
合計	1.881	1.951	+70	2.001	+50	2.083	+82	2,14[illegible]	+6[illegible]	+262

世界經濟年報第一輯一九二七年第二期五一頁） その結果英蘭銀行の金準備が著減して英蘭銀行の金融上の操作を困難ならしめたので、七月初めイギリス、ドイツ、フランスの中央銀行の代表者は紐育準備銀行總裁の斡旋によつて紐育に集り、ロンドン市場の金購買は英蘭銀行の諒解の下に行ふことを協定するに至つた。然るに一九二九年に至つてフランス銀行は其下半期を通じてさらでだにアメリカ及びドイツへの金流出によつて困つてゐるロンドン市場から巨額の金約三千萬磅を引上げることによつて同年九月英蘭銀行をして遂に公定率五・五%を六・五%に引上げることを餘儀なからしめ、それが惹てはハットリ恐慌の動因となり、世界取引所恐慌の端緒となるに至つた。之は流石のイギリス人を極度に昂奮せしめ、ヘーグ會議に於けるイギリス代表を牽制せんとする政治的陰謀であると迄極論せしめた。然るに一九三〇年に入つてフランスは最近又もイギリスから金を引上げ始め、最近六月十一日までの四週間に六百二十萬磅の金をフランスへ輸送し、遂に英蘭銀行をして金地金の缺乏の口實の許に金貨兌換を開始せしむるに至つたと云ふ。斯くて純分〇・九九五の金地金の代に純分〇・九一六七の金貨が兌換せられる結果はフランス銀行への輸納に於て標準純分に轉化する爲に費用と利子の損失を惹起し、對佛金輸出點は一二三・八五フランから一二三・六五——一二三・七〇フランとなり、フランスへの金輸出上に一の困難が加へられるに至つたと云ふ（「ヴィルトシァフツ・ディーンスト」六月二十日）即ち現在に於て咏嘆される金の不足は金の絶對的不足よりは斯かる諸國間の金に對する飽くことなき貪欲に因る相對的不足であり、カッセル教授の三%説は正にその迂遠なる表現に外ならない。

俸給・生活者大衆論

河野密

一、沒落する「新」中間階級層

一

未曾有の經濟的受難時代は至る所に悲喜劇を生産して行く。頃日東京朝日新聞紙の報道するところに據れば、多年の傳統を誇り、因襲の奥に生きて來た歌舞伎王國の中にも、荒れ狂ふ生活不安のあらしは容赦もなく吹き入つて、懇志會、協和會、さては勞働組合の組織すら現はれて來たと言ふ。俳優もまた人である。先づ飯を食はねばならぬ――と、宜べなる哉。脂粉の香も、五彩の脚光も、裏口からのぞいて見れば生のたつきだ。ひたすらに藝道を思ふ彼等にしても、一度赤裸にすれば一個の俸給生活者に過ぎぬ。その生活が脅かされ打ちのめされるときに、「働かせろ、食はせろ、俸給を上げろ」と叫ぶのに何の不思議があらう。けれども――歌舞伎王國と勞働組合、ブルジョアの殿堂とプロレタリア戰線。皮肉と言へば皮肉、痛快と言へば痛快。然しこれもまた必然におち行くべき命運を辿りつゝあるに過ぎないのだ。綺羅錦繡に飾られても充されざる胃袋には何の變りがあらう

歌舞伎王國に於ける勞働組合の組織は、現下の經濟的不況の有つ「破壞力」を如實に示すものでなければならぬ。一葉落ちて天下の秋を知る。階級闘爭の警鐘は、今、中間階級層に向つて亂打されつゝあるのだ！

二

謂ふところの階級闘爭が、勞働者と資本家の階級闘爭であることは言ふまでもない。然しこの對立せる二階級の間には、何れの階級にも屬しない一個の中間地帶が介在してゐる。人これを名づけて中間階級と言ふ。或は緩衝地帶となり、或は資本家

階級に與し、或は勞働者階級の味方となり、階級鬪爭に極めて複雜な形相を與へてゐるのはこの階級である。

我々は一口にこれを中間階級と言ふ。けれども、その名は「階級」であるが決して統一的な經濟的利害を反映する一個の「階級」を構成してゐるのではない。それはむしろ勞資何れの階級にも屬しないもの、包括的な名稱に過ぎない。コールはこの『中間階級』に極めて有彈力的な定義を與へ、「一方に於ては産業の指導者、他方に於ては一般勞働者」この兩者間に介在するものを以てこれであると言つてゐる。或は收入を標準として線を劃し、一定の限界内を中間階級と定めんとするものもあるが(シュモラー)、歸するところは大同小異に過ぎない。從つてこれは、一方に於ては手工業者、小賣商人、農業者等の獨立の經濟主體を含み、他方に於ては官吏、技師、教員、商業使用人、その他の使用人等の非獨立的な經濟主體を併せ含むでゐる。而して醫師、藥劑師、辯護士、藝術家等の自由業者もまたこれに屬する。

通常、中間階級を分つて新舊の二つとする。獨立の經濟主體をなしてゐる前者を舊中間階級と稱するに反して、非獨立的の經濟主體をなす後者を「新」中間階級と言ふのである。所謂自由業に從ふ人々に對しては、これを「新」中間階級層の中に組み入れるのが通例であり、また當然である。

舊中間階級は、過去に於て一定の役割を果した階級の餘殘である。それの發生は遠く中世に溯るべく、封建時代の經濟に對して極めて重要な役割を演じた。然し今日に於ては衰滅と沒落の一途を辿るのみである。勿論我々は我が國の舊中間階級が有する特殊な意義と、その重要性とを看過してはならない。けれども階級鬪爭の一般的考慮に於て、第一次的に問題とするのは「新」中間階級層である。

III

「新」中間階級層は、或は頭腦勞働者、知識階級、俸給生活者、使用人等の多少出入を有するいくつもの名稱を以て呼ばれてゐる。それ等は主として精神的勞働をなす意味に於て筋肉勞働者と區別せられ、俸給に依存する意味に於て利潤を目ざす資本家その他の獨立經營者と區分せられる。然しながら中間階級の限界の極めて不明確なる如く、俸給生活者、使用人、知識階級、頭腦勞働者何れの名稱を採るも、科學的に判りした限界を與へることは出來ぬ。唯、精神的勞作に從ひ、生計維持の費用を專ら「それに依つて得てゐるもの」であると言へば、略〻その概念はつかめやうかと思ふ。それ等のものは、その數に於て益〻增大する許りでなく、その經濟的利害に於て次第に筋肉勞働者に近づきつゝあるが故に、その動向が極めて重要性を有つのである。

ヒルファーディングは既にその金融資本論の中に於て、資本の

有機的構成の高度化は、勞働者の相對的減少を導くが技術者に就ては却つて逆であると、獨占資本主義の形成過程に於てサラリー・マンが屢々帝國主義政策の追隨者となると、それと同時に『新』中間階級の必然的沒落が彼等の下級者を驅つて勞働者階級に接近せしめることを述べてゐる。(第二十三章金融資本と諸階級)。このことはその後に於ける俸給生活者の動向に依つて事實上に立證せられた。然し俸給生活者の問題に關する限り、シュモラー教授の資本主義的烱眼は、より的確にその將來を言ひ當てゝゐる。何となれば、彼は既に一九〇〇年に於て、俸給生活者が必然的に、勞働者階級に接近すべき傾向を恐れ、それを重大な社會問題の一つとして提起してゐるから。

IV

所謂俸給生活者が如何なる勢を以て增大しつゝあるか、これを的確に表示すべき數字の我が國にないことは言ふまでもない。第一回國勢調査の結果の未だ完成されない今日に於ては、その全豹を知る由もない。唯頼りになる統計を綜合して約三百五六十萬と推定するのみである。然し俸給者の運動の最も發展したドイツに徴するに、俸給生活者階級の增大は實に目覺しきものがある。一九二八年十月一—四日にハムブルグに開かれた『一般自由使用人同盟』(Allgemeine Freien Angestelltenbund 略して Afa—Bund)の大會に於て、オットー・ズール(Otto Suhr)の試みた講演に據れば、曰く、

一八八二年に三十萬に過ぎなかつた使用人は一九二五年には三百五十萬となつてゐる。この間筋肉勞働者は八二%を增加したに過ぎないのに、使用人は四二九%を增加してゐる。またこれを一九〇七年と比較するも、同年に百五十萬であつたものが一九二五年に三百五十萬——すなはち一三三%の增加である。然かもこの間筋肉勞働者は二四%、勞働人口は二七%、全人口は一四%を增加したに過ぎない、と。

尚これを各産業例に見るならば、(全從業者に對する使用人の百分比)

	一九〇七年	一九二五年
化學工業	一六・一%	二六・五%
電氣工業	九・一	一九・六
機械器具製作工業	一一・二	一八・〇
鐵及金屬工業	四・六	一三・四
製紙工業	七・九	一二・四
食料品工業	六・一	一二・二
纖維工業	七・三	一〇・四
鑛業	四・九	七・〇

然かも此使用人の數は、産業合理化に伴つて益々增大の傾向にありと傳へられるならば、その數の增大は正に驚くべきものでなければならぬ。然かもこれ等の使用人は、今や、『獨立者しくは昇進の希望』から全くふり離され、『給料の增額と勤務時間

の短縮」と言ふことに主たる關心を向けなければならなくなつて來たのである。カルテル化やトラスト化の進むに連れて、最高給の地位は資本家階級層に獨占」せられ、その地位の低下に伴つて「資本との對立を尖鋭化」せしめられざるを得なくなつて來たのである。これ等使用人の運動が次第に階級的の色彩を採り、それが勞資の階級闘爭に重要な役割を演ずるに至ることは當然と言はねばならぬ。

V

我が國に於ける俸給生活者の問題が、經濟不況を中心として俄に社會の耳目を惹き、何よりも先づ俸給生活者自身の反省を促すに至つた最大の理由は、俸給生活者自身の地位の沒落と、其失業不安——就職難でなければならぬ。

俸給生活者の地位が如何に沒落したか、その生活不安が如何に增大したか、に就ては多くのことを述べる必要はないであらう。中央職業紹介事務局の公報に據れば、昭和四年度銀行會社採用者の初任給は左の如くである。

		最高	最低	普通
大學卒業生	銀行	八五	五五	六九・八八
	會社	一〇〇	四五	六四・九七
專門學校卒業生	銀行	七五	四五	五三・七〇
	會社	一〇〇	三〇	五五・七七
中等學校卒業生	銀行	四〇	二五	三三・四七
	會社	六五	二二	三六・四一

需要供給の關係に依つて定まる勞働力の價値が、今日の如く供給過剩の際に、特殊の事情なき限り、最低若しくは最低に近く決定せらることは明かである。然かもこれすら、尚ほその他の緣故を辿るのでなければ萬に一つも得られないのが今日の實狀である。のみならず、かくして得られた地位も、かつての華やかな未來を約束するものではなく、唯「腰辨」の稱號を墓場にまで擔ふその第一步であるのが最近の趨勢である。

然し俸給生活者の意識を急劇に變化せしめたものはその失業不安——就職難である。

大正十四年十月一日の我が國の失業調査に據れば、俸給生活者の失業狀態は左の如くである。

	調査數	失業者	失業率
總數	六三四、四一二	二〇、一七八	三・一八
東京市及其附近	二五四、七三〇	八、三六七	三・二八
大阪市及其附近	一三一、七七五	三、六五八	二・七八
神戸市及其附近	四四、一七七	一、六三六	三・七〇
橫濱市及其附近	二四、八二四	一、〇九三	四・四〇

これは我が國に存する唯一の失業統計であるが稍古きに失する。

內務省社會局は失業者の推定月報を昭和四年九月から發表してゐるが、これはその推定方法に信頼をおきかねるものである、然し尙大勢を知るよすがとすることが出來るであらう。

	全國調査人口	全國失業者	全國失業率
昭和四年九月	一、五七二、二一九	五九、一五八	三・七六%
十月	一、五九九、七一七	六二、五五〇	三・九一
十一月	一、六〇〇、〇九〇	六一、八〇八	三・八六
十二月	一、六四三、八七三	六三、四一〇	三・八六
昭和五年一月	一、六三五、七四〇	六五、八三六	四・〇二
二―三月	一、六三九、七一六	六八、二六三	四・一六
四月	一、六六一、六三三	七八、六〇三	四・七三

すなはち俸給生活者の失業者は次第に増加し、內務省の調査に依るも尚八萬。それに新就職戰線に送り出された者を加へれば優に十二三萬に及ぶであらう。かくして俸給生活者の失業は、一般勞働者の失業に比するも、はるかに高率を示してゐる。のみならず、職業紹介所の窓口を通じて見るならば、更にその急迫狀態が判りする。(俸給生活者の職業紹介所に於ける求職者は、大正十年の三萬三千二百八十五人から、昭和三年の七萬七千六百六人に增加し、就職率は前者の二八・三%から後者の九・九%に低下してゐる)。が最も悲慘を極めてゐるのは各大學專門學校卒業生の『就職難』であらう、昭和四年に於て既にそれは五〇・二%の就職率、約半數の未就職者であつたが、昭和五年度の卒業生に就て內務省社會局並に中央職業紹介事務局の調査したところは更に惡化してゐる。

	總數	就職口數率	未就職率	學術研究
大學卒業生(三十六校)	五、二八八人	四一・八%	四一・九%	一六・三%
專門學校卒業生(百十九校)	一五、七一四	五一・〇	四〇・六	八・三

學術研究、上級入學等もその大半は「就職戰線」からの落伍者と見るならば、正に驚くべき就職難ではないか。『就職戰線異狀あり』の聲の高いのも強ち無理でない。

かゝる大勢におされて、俸給生活者階級が、次第に尖鋭な階級意識に目覺めて行くのに、何の不思議があらう。かくして俸給生活者大衆の問題は、一個の社會問題として次第に社會の前面におし出されて來るのだ。

二、伸び行く俸給生活者運動

一

『社會科學及び社會政策資料』の第六十三卷第一號(一九三〇年一月號)に、ハンス・ユーベルシャール(Hans Überschaar)が日本の學生運動に就て書いてゐる。それは「日本の學生運動の歷史を報告する以上に多く出てゐないが、尚我が國の社會狀態の不安動搖の眞只中にあつて、學生がかゝる運動に興味を感ずるのは極めて當然だと說く。この觀方は、學生運動を以て單なる『マルクス・マニア』の如くに考へてゐる多くの大學敎授の所說と選を異にしてゐる。然し私に言はしむるならば、學生大衆を驅つて社會科學運動をなさしむるに至つた最大の原因——我が國の

社會狀態の不安動搖は、俸給生活者の沒落、と密接に結びついてゐるのである。

既に私は、シュモラー教授の資本主義的炯眼が、俸給生活者大衆の中に、反資本主義的に生長すべき重大なる要素を發見したことを述べた。然し同じやうな洞察をなしたのは單にシュモラー教授のみではない。多かれ少なかれ資本主義的な經濟學者、俸給生活者の大量生産を以て使命とする我が國の大學專門學校當局は、俸給生活者大衆運動の恐るべきことをはるかによく知つてゐたのである。例へば上田貞次郎氏は言ふ、

『私は前に明治の士族實業家が當時一般の思想たりし國家主義の立場から、自己の事業のために、獻身努力する風のあつたことを述べたが、今日でも對外的事業に於て、此心理的要素の働いてゐることは歷歷として指摘し得ると思ふ。併し今後此思想に多くを期待し得るとは思へない。……私はむしろこの氣風を助長することが、世界に於ける商科大學の實際的使命になると考へてゐるのである。』（企業と社會大正十五年八月）

俸給生活者は「新」中間階級として稍もすれば勞働者と結んで資本家に當らんとする傾向を有つ。これは由々しき社會問題である。具體的にかゝる事實が現はれて來てからではもう遲い。

それ故に「新」中間階級の動向に就て、それが反資本主義的勢力に與みすることを避けなければならぬ。恰も我が資本主義の發展過程に於て、多くの使用人が士族の「清廉」を保持したと同じやうな教養を今後の俸給生活者に與へなければならぬ。――

それが上田氏の所言である。こゝに我々は我國に於ける大學の頽落、學生社會科學運動に對する當局の、不穩當を見せつけられはしないであらうか？

II

我が國の果敢なる學生社會科學運動は、俸給生活者大衆運動の前奏曲であつた。それは表面踏みにじられたかの如くに見ゆるけれども、俸給生活者の急激なる沒落を前にして、決して立ち消えるはずがない。それと同時に現下の經濟不況がもたらした俸給生活者の恐慌時代は、必ずやその大衆的運動を出現せしめなければ止まないであらう。

然り、俸給生活者大衆の運動は必ず起るに相違ない。それは必然である！

今日俸給生活者大衆運動の最も發展してゐるのはドイツである。今一般自由使用人同盟の委員長アウフホイザーの說くところに依つてその發展の跡を一瞥するならば次の如くである。

ドイツに於ける使用人階級運動の先驅と目すべきものは商人の間から起つた。それ等は既に一八六〇年代より一種の組合を有つてゐたが、一八九〇年代に至つてその中央組織を育ち、多數の商業手助人、店員をその中に包擁してゐた。この商人組合

に勞働組合の意識を注入せんと努めたのはマックス・クアルクスであり、商人の自由勞働組合を組織せんとしたのはカール・ローゼンタールである。この兩者の運動は相合して一八九七年商業使用人の中央同盟を組織し、その本部をハムブルグに置いた。これと同じ頃官吏の間にも組合組織の運動が起り、一八九四年ベルリンに『ドイツ官吏組合』が組織された。この兩者は戰前既に勞働組合に加盟してゐたもので、まさに今日の使用人運動の先驅と目すべきものである。

續いて一九〇四年には技術家が勞働組合を組織し、それ等は合して『技術家及技師同盟』を創立した。その他にも思想傾向を異にする多くの組合が組織され、ドイツに於ては戰前既に使用人の組合は著しく發展してゐた。帝國統計局の發表に據れば、當時中央組織を有するもの二十、地方的組合を合すれば七十七に及んでゐたのである。

一九一四年一月、勞働組合主義を奉ずる使用人組合は第一回の全國會議を開催し、『使用人法』の獲得を期したが、この運動は更に一般社會政策の要求にまで擴大せられ、使用人組合の共同委員會が作られた。これ等の組合は、戰後使用人階級の利害が益々重大化するに鑑みて、一九二一年十月相合して『一般自由使用人同盟』を組織した。この同盟は、(一)現資本主義制度を變革すべきこと、(二)使用人組合を以て全勞働者運動の一翼たらしむべきこと、をその指導理論として採用した。爾來『一般自由使用人同盟』は、ドイツ使用人運動の中心として、この指導理論の下に進みつゝある。それは『全ドイツ勞働組合同盟』(A・D・G・B)と密接な聯繫を保ち、勞働組合運動と相呼應してその運動を進めつゝある。今このAFA同盟に屬する主なる組合の成員を見るに次の如くである(一九二八年)。

A、技術使用人同盟		一五三、〇〇〇
B、1. ドイツ職工長組合		一二九、〇〇〇
2. 建築職工長組合		一三、〇〇〇
C、使用人中央同盟		一五二、〇〇〇
D、ドイツ銀行員一般組合		一三、〇〇〇

而してAFAの同盟に屬する全組合員數は一九二八年に於て七十三萬と言はれてゐる。

AFA同盟は、最も明確なる階級意識の下に立つものであるが、この外にキリスト教勞働組合と密接な關係を有つ『ドイツ使用人組合總聯合』(Gesamtverband deutscher Angestelltengewerkschaft 略して Gedag と言ふ)があり、また勞資協調のヒルシュ・ヅンカー組合と密接な聯絡を保つ『使用人組合聯合』(Gewerkschaftsbund der Angestellten 略して G.d.A. と言ふ)が存してゐる。何れも相應の勢力を持してゐると言へば、ドイツに於ける俸給生活者運動の盛況を見るべきである。

III

ドイツに次いで俸給生活者運動の發展を示してゐるのはオーストリアであると言はれる。(ロシアに於ける知的勞働者運動は暫く視野外に置く)この國の使用人組合が中心となつて、後に述ぶる『國際私吏同盟』が成立してゐる。

イギリスに於ける所謂俸給生活者の組合運動は、ドイツ、オーストリアに比して著しく後退してゐる。蓋し、イギリスは、勞働組合の古典國であり、所謂使用人階級も全て勞働組合に組織せらるが故に、それが獨自の發達の見るべきものがないからであると言ふ。唯勞働組合に屬するものゝ中に、俸給生活者の組合と目すべき『全國店員、倉庫番、書記同盟』、『全國書記同盟』、『鐵道書記組合』、『炭坑下級管理者組合』等が早くより組織されてゐたが、その組合の發展を見るに至つたのは最近のことと言はれてゐる。蓋し、イギリスに於ても、俸給生活者の重要性と自覺が問題となつたのは戰後のことに屬するからであらう。

俸給生活者獨自の組合としては早くより教員の組合があつた。之は最初各種の組合に分散してゐたが、合して下級教員組合會議を組織した。同じく技術家の組合運動も促進せられ(『技師組合』、俳優組合、全國新聞記者組合等も組織されるに至つた。この他、生命保險會社員の組織したる『全國生命保險會社員組合』、官吏の間に於ける『黒い服のプロレタリアート』の組合化を物語る『公職者同盟』、更にこれ等の自由職業者、技師、官吏等をうつて一丸となさんとする『全國同盟』の組織すらなさるゝに至つたのである。かくしてイギリスに於ても所謂『黒い服のプロレタリアート』の運動は、最近に至つて飛躍的の發展を遂げたと言ふことが出來る。(ウェッブ著『勞働組合運動史』、五〇三頁以下參照)

IV

俸給生活者の運動が發展するに連れて、その國際的團結の運動も促進せられるに至つた。『萬國の勞働者團結せよ!』と云ふ言葉が正しいとするならば、萬國の俸給生活者の團結運動の進展することも極めて當然でなければならぬ。

今日俸給生活者——所謂知的勞働者の國際的團結は殆んど各種の職業に及び、郵電職員、醫師、辯護士、大學生、記者、教員、劇作家その他一般俸給者等に及んでゐる。勿論それ等の全てが階級的利害と自覺の上に立つのではないが、かゝる傾向にあることは見のがすことが出來ぬ。今これ等のものを一々列擧するの煩に堪へないから、その主なるものを摘出するに止めやう。

知的勞働者國際聯合 『The International Federation of Intellectual workers. Intellektuelle-Internationale これは知的勞働の國際的團結として最も大きな、且つ包括的のものである。

業の如何を問はず、各國の一切の知的勞働者を結合せんとするものであつて、その目標とするところは、(一)國際勞働機關内に於て知的勞働者が當然占むべき地位を獲得すること、(二)知的勞働者の一切の職業團體間、殊にその國際聯合間に恆久的關係を設定すること、(三)藝術、文學、科學上の創作の著作權を設定し擴大するため共同動作を採ること、(四)知的勞働者のための標準契約を作成すること等である。パリに本部を有する。

國際私吏同盟 Internationales Bund der Privatangestellte 略して I.B.P. と言ふ)これは一九二二年ウィーンに於ける第一回の會議に依つて創立せられたものであり、一九二五年コッペンハーゲンに於て、一九二六年モントルー、一九二八年九月十五日ー八日ドレスデンに於て大會を開いた。知的勞働者國際聯合が寧ろ超階級的と見ゆるに反して、これは明確なる階級意識の上に立つのである。從つてその組織、運動方法に就ては屢々大會の席上に於て議論を生じた。然し一九二八年の大會に於ては、國際勞働會議と提携し、國際勞働機關内に於てその要求を貫徹すべきことを決定した。

この外、階級協調の立場に立つキリスト教的インテルナチオナーレがあり、中立のそれがある。更に教員のインテルナチオナーレの如く(教育勞働者インターナショナル)直接第三國際の指導下にあるものもある。今日總てを合して五十を下らざる知的勞働者の國際團結が存してゐる。

V

世界大戰後に於ける使用人、知的勞働者の發展に伴つて、諸國の無產階級政黨はこの問題に留意するに至つた。例へばドイツ社會民主黨のゲルリッツ綱領の如き、イギリス勞働黨の新政策の如き、共に黨の組織運動をこれ等の「新」中間階級層にのばすべきことを明瞭にしてゐる。ドイツ社會民主黨のゲルリッツ綱領は、一八九一年のエルフルト綱領が一般經濟社會の發展傾向の敍述から始つてゐるに反して、直に社會民主黨の本質並に目標を掲げてゐる。曰く、

『ドイツ社會民主黨は都市及田舍に於ける勞働民衆の黨派である。其の努力するところは、民主主義と社會主義とのための闘爭團體てふ共通の認識と目標とに於て、自己の收入に依頼せざるを得ざる總ての肉體的及び精神的生產者を團結せしむることである。』

これに對してカール・カウツキーはその綱領解説に於て次の如く言ふ。

『既に戰前に於て知識階級中の多くの階層は、プロレタリアの階級闘爭に結合し始めてゐた。革命はこの過程を非常に促進した。そしてこゝに革命の最も重要な成果の一つがあるのである。

知識階級は早くよりプロレタリアの階級闘爭にとつて極めて重要であつた。然し最初それは、プロレタリアートが自分の力を以てしては得ることが出來ず、然かも階級闘爭をなす上に絶對的に必要な知

義を供給する個人としてであつた。……

「然しながら知識階級は、過ぐる數十年の發展に依つて勞働運動に新しき重要性を獲得した。今や彼等は個々人として重要であるのみならず、集團として重要となつた。この新しい集團は卓越した知識を輸入することに依つて問題となるのでなく、彼等の間に於けるプロレタリア思想の發展、新しい生活及び勞働條件の結果に依つて問題となるのである（「プロレタリア革命とその綱領」二七—八頁）

資本主義經濟秩序の最近の發展は、知識勞働者の集團を生み出した計りでなく、これを驅つてプロレタリアートの盟友たらしむるに至つた。この傾向は産業の合理化、企業の機械化及び科學化と共に益々發展して行くであらう。知識階級の沒落の意義は益々重要性を有つ。

三、俸給生活者よ、立ち上れ！

一

既に述べた如く、一口に俸給生活者と言ふも、その中には多種多様の要素を含むでゐる。今その主なるものを摘出すれば、

一、官吏、公吏、教員
二、商業使用人（販賣員、店番、書記等）銀行員、保險會社員等
三、技術者（職工長、機械技師、化學技師、鑛山役員等）
四、辯護士、公證人等
五、俳優、音樂家等
六、醫師、藥劑師等

等の廣汎なる分野に亙つてゐる。從つて知識階級と言ひ、頭腦勞働者と言ひ、使用人と言ひ、何れの名稱が最もよくその階級的特質を言ひ表はしてゐるか、私は知らない。私も上來屡々それ等の言葉を混用して來た、蓋しこれ等の階級層の有つ特質のあるものを強調するに、夫れ〳〵長所を有つと考へられたからである。けれども、いかなる言葉を用ひるにしても、この階級層に含まれてゐる社會的意義は一つである。「俸給」に依食する彼等の社會的地位が一般勞働者のそれに共通し接近すると云ふことは動かすべくもない。

かくして俸給生活者の階級的使命はその沒落を通じて判りと認識せられて來る。戰後に於ける歐洲諸國の俸給生活者運動はこれを語るものでなくて何であらう。

然し俸給生活者はまた「中間階級」を以て呼ばれることを忘れてはならない。それは勞働者階級と資本家階級の何れにも屬しないと云ふ意味に於て「中間階級」であるが、屡々階級鬪爭の間に於て左顧右眄し、浮動する意味に於てもまた「中間階級」である。否、それは屡々、その抱持するプチ・ブルジョア的意識と、傳統的な優越感とに依つて、反動の陣營に身を投ずるのである。ドイツに於ける「使用人組合總聯合」、「使用人組合聯合會」の存在はそれを如實に示してゐる。イギリスの鐵道從業員罷業の際

に於ける中間階級同盟、或は物品供給維持同盟（O・M・S）の組織等、またこれを雄辯に物語るものではないか。我々もまたかつての大阪市電の爭議、東京市電の爭議等に於て、『市民の名に於て』、中間階級者の有つ混濁せる反階級的イデオロギーの表明をまざ〲と經驗しなかつたであらうか？

II

我が國に於ける俸給生活者の團體、その運動、勿論あるにはあつたがその成果に於て多くの見るべきもの、なかつたことは世人の知る通りである。官吏公吏に結合せられたる封建思想の名殘もそれには預つて力があつたであらう。澁澤子爵の所謂「士魂商才」も重要な役割を演じたであらう。けれども最も大きな理由は、我が國の若々しい資本主義が、所謂中間階級の間から、『産業の指導者』を生み出す機會を與へ、高級吏員、高給重役たるべき機會――一言にして蔽へば、この階級の功名心たる『立身出世』の機會を與へることが出來たからである。

然し社會の狀勢はこゝ十數年の間に一變した。新舊中間階級層の沒落は急劇なテンポを以て發展した。

今や俸給生活者は永久にその『腰辨』より解放される時がない。輕い『月給袋』の惱みは常に彼等を憂欝にするであらう。知識階級の大量生産は絕えず彼等をおびやかし、失業苦、就職難は益々深刻さを加へるであらう――。「知識」は彼等に「生活」を保證すべきパスポートではなくなつた。「黑き服のプロレタリアート」は「菜つ葉服のプロレタリアート」よりも尙悲慘でないと誰に言ひ得やうか。

私は言ふ、今や俸給生活者が多年の迷妄から醒むべき時である。知識階級が勇敢にその矜持を投げ棄てるべき時であると。勞働組合法の制定を見むとする今日に於て、何故彼等俸給生活者は起つて『團結の自由』を叫ばないのであるか、何故一般無產階級と同一の利害に目覺めないのであるか。無產階級は今個々人としての知識階級を要求してゐるのではない、集團としての知識階級を求めてゐるのである。一九三〇年は俸給生活者の恐慌時代である、が同時にそれが社會的轉向の第一年でなければならぬ。

對立的社會感覺の表現としてのヂャーナリズム

長谷川如是閑

一

ヂャーナリズムそのものに對する一般の不滿は、人々が嚴正にヂャーナリズムの意味を理解しないところから來てゐるのである。今日のヂャーナリズムに現はれてゐる諸缺陷のうちには、無論、本來のヂャーナリズムの必然の性質から來てゐるものもあるであらう。たとへばヂャーナリズムが科學的意識と一致しないとか、哲學思惟を缺いてゐるとか、政治的公正を失つてゐるとか、藝術的精練をもつてゐないとか、等々の事情は、ヂャーナリズムの本來の機能からいつて已むを得ないことである。

然し、それは元來ヂャーナリズムが科學とか哲學とか政治とか藝術とかいふものそれ自體を完成せしめるために發生したものではなく、それらの叡智的又は感情的完成の態度とは全く目的と方法とを異にする社會的態度の產物だからである。

ヂャーナリズムは、一言にしていへば對立社會感覺の表現であつて、それはある社會形態に必要な對立的關係から當然要求される態度である。そのことを明かにするのが此の小篇の目的であるから、それは追つて詳しく說きたほされる問題であるが、とにかくさういふ根本的性質をもつヂャーナリズムは、それが重要な社會機關としての機能をもつことのために、自つからそれ自體を發展せしめる間にヂャーナリズムの根本性質よりは、それの末梢的性質の發展を來たし、對立的社會感覺の具象すべき認識及び判斷の態度といふ重要な點は却つて背後に沈められ、その表面の感覺的性質——ヂャーナリズムの刺戟性、即ちヂャーナリズム的ニュースの好奇心を刺戟する性質、從つてそれが感覺的享樂の道具たるに至る性質が發展し、ヂャー

ナリズムは次第に今日多くの人々に考へられてゐるやうな變態的のものとなるのである。然しそれはヂャーナリズムの發展ではなく喪失である。

ヂャーナリズムは、この方向に進むことによつて、益々對立的社會的感覺を失ふ代りに、一般的感覺——寧ろ官能的の——に投ずることによつて、愈々その支配力を逞うすることを得る。それは頽廢期に於て官能的藝術が最も猛威を振ふことを得るのと同じである、それは惡貨が良貨を驅逐する一つの例である。

この奇怪なる事相を説明するためには、屢々現代の商業主義卽ち資本主義的商品經濟の支配が持ち出される。この支配のために、ヂャーナリズムは恰も資本主義があらゆる攻撃の下にその征服事業を完成せしめたやうに、現代を征服したのであると説明される。確かにそれに相違ない。

然しこの説明には多少の註釋が要る。ヂャーナリズムは資本主義商品經濟の手段となつて始めて有力となつたのではなく、ヂャーナリズムの有力であることが、それを商品ならしめたのである。無論、ヂャーナリズムが商品化したことは、それ自體ヂャーナリズムの總括的支配を成立せしめる現在の方法であつたに相違ないが本來のヂャーナリズムは決してこの商品的性質に運命を委ねらるべきものではない。ヂャーナリズムそのものはその今日もつてゐる商品價値によつて批判さるべきものではなく、それ自體の性質によつて判斷さるべきものである。

人々も亦商品としてのヂャーナリズムのみを攻撃してゐるのではなく、本來のヂャーナリズムそれ自體を非難してゐるのである。彼等によればヂャーナリズムの墮落は無論問題であるが、本來のヂャーナリズムも亦問題なのである。さればそれが攻撃される標的はヂャーナリズムそのものである。然しそれはヂャーナリズムそのもの丶性質に對する無理解から來てゐるのである。

ヂャーナリズムとは、いろ〱の意味における、對立的關係から始めて發生する態度なのである。それは客觀的に所謂公正に、事物を觀る態度ではなく、一定の社會的立場による特殊の關心から事物を見る態度である。ヂャーナリズムは、一つの事相をもつ社會群の孤立的存在からは發生するものではなく、たとへ同一社會形態に包括される場合にもそのうちに必ず對立的關係の發生し存在するところからヂャーナリズムが生ずるのである。

ヂャーナリズムとは畢竟、關心の態度、いひかへれば興味のもち方に於ける一つの特徵である。而してそれは一定の事相を有する群自體の態度ではなく、それと反對の立場にある群がそ

の事相に對する場合の態度である。即ち事相を對立的理解から觀る場合の態度がヂャーナリズムである。故にこの意味の「對立的」といふことがなければ決してヂャーナリズムといふことはあり得ない。かゝる根本的の理論をこゝに詳述するわけに行かないので、たゞ次ぎの例によつて說明するに止める。

たとへば、工學者の群が建築物を工學的に觀るのは、それ自體の觀方で卽ち一つの專門的態度であつて決してヂャーナリズムはあり得ない。然るに一人の工學者が、自己の群の見方を離れて、言ひかへれば、工學者的立場を離れて建築物を見て、その感覺を工學者的關心からでなく、專門家以外の社會的關心をもつて表現したならば、それはヂャーナリズムの元素的性質をもつものである。又摩天樓の設計者の作つた建築仕樣書は、それ自體ヂャーナリズムとは沒交涉の產物であるが、もしそれを工學者的關心からでなしに、非專門的の社會的關心から受取つて、その感觸を加へて再現すれば、その摩天樓の仕樣書がヂャーナリズム的形式を獲得したものとなるのである。かういふ關係はそれ自體ヂャーナリズムの發生を說明するものであるが、それと同じ關係が、社會統制に對して發生し、ある統制狀態——政治的のそれでも道德的のそれでも、宗教的のそれでも、文化的のそれでも——の成立した場合に、何等かの意味で多少ともそれと對立關係をもつもの、存在しないといふ社會はあり得ないから、その對立的社會關係による特殊の感覺に基づく認識及び判斷の態度からヂャーナリズムが産れるのである。之れは當然科學でもなければ哲學でもない。ヂャーナリズムが科學化し哲學化すればその社會的機能は却つて失はれる。

二

社會的に最高の標準に立つ人々がヂャーナリズムを非難するのは、右の例についていへば、工學者がその仕樣書のヂャーナリズム化されたことを非難するのと同じことである。さればこの非難は、元來ヂャーナリズムが、それの對象たる客觀的事實をもつ群自體の意識ではなく、それと對立する——その事實に働きかけられるといふ意味で——群の意識であるといふと、それ故に、ヂャーナリズム的意識はある事實に働きかけられる、特定の立場をもつ群の意識であるといふことを知らないところから來てゐるのである。

ある哲學的又は科學的態度をもつ者が、ヂャーナリズムを非難するのは、ヂャーナリズム的態度が哲學的でも科學的でもないからであるが、ヂャーナリズムは元來、一つの智的態度ではなく一定の智識を特殊の社會的立場から受取る態度である。特

殊の社會的立場は、客觀的事實を鏡のやうに反映するものではなく、人間的神經と同じく、それを選擇し、批判するものである。たとへ客觀的事實をそのまゝ採取する場合でもチャーナリズムは、その事實に對する特殊の社會的立場からの感覺をもつてそれを採取するのである。哲學や科學にも、さうした採擇の存することは拒まれないが、然し、哲學や科學は出來るだけその特殊の社會群の感覺から離れやうとするのであるが、チャーナリズムはその反對に、その特殊の群感覺を出來るだけ强めやうとするものであり、その强ければ强いほどチャーナリズム的である。

　それはチャーナリズムの弊害ではなく、その存在理由である。今日のチャーナリズムが『嚴正中立』とか『不偏不黨』とか稱する看板を掲げてゐるのは、チャーナリズムが資本主義的商品となつた爲めに、出來るだけその特殊の群的感覺を避け、普遍的の一般感を捉へることによつて、商品の普及性を擴大せしめんとするものに外ならない。本來のチャーナリズムは決して萬國共通萬人共通の趣味に投ぜんとする資本主義的大量生産による商品のやうな性質をもつものではなく、ある社會群の特殊の地位に必然の『立場』をもつものであり、もたねばならぬものである。

　その意味に於て、古代の童謠、詩歌、諺言、浮說等はチャーナリズムの元素的性質をもつたものであつた。然しその童謠、諺言、浮說等が客觀的事實の正確な認識を缺いてゐることがチャーナリズム的なのではなく、ある事實に對する特殊の感覺を表現してゐることがチャーナリズム的なのである。チャーナリズムは決して、必然に認識不足であらねばならぬ理由はない。正しい認識は、それ自體チャーナリズムを無くする力は持つてゐるものではないから、科學がいかに發達し、哲學がいかに普及しても、チャーナリズムは決してその存在理由を失ふものではない。社會は必ず客觀的事實に對して一定の立場をもつものである限り、その特殊の立場による特殊の感觸を失ふことはない。チャーナリズムはその特殊の感觸をもつ社會群の態度であるから『審判の日』の過ぎ去らぬ限りチャーナリズムは存在する。『中立』『不偏』のチャーナリズムといふことは、『無感覺の人間』といふことゝ同じく意味をなさない。

　但し商品化した、即ち商業主義と結びついたチャーナリズムが、本來の意味に於けるチャーナリズム的感覺を失つたものであることは既にいつた如くである。それは新聞紙を商品化するために、それからチャーナリズム的要素を抽き去つて、一般社會的感覺又は個人的感覺の刺戟といふ、單に官能的の作用をも

つ刊報物——一種の享樂品——に作りかへられたヂャーナリズムである。それはわれ〳〵の見地からいへば、ヂャーナリズムの喪失である。

三

然るに多くの人々のヂャーナリズム觀は、この享樂品としての新聞紙を對象として成立してゐる。無論今日の新聞紙と雖も、全體的には決して單なる享樂品と化してゐるわけではなく、その重要なる部分にヂャーナリズムを包含してゐることは確かである。それが商品價値をもつのも、決して、その享樂品としての部分に依るものではなく、やはり嚴正な意味に於けるヂャーナリズム的内容を持つことによつてゐることも疑ひない。然し、商品化した新聞紙に現はれてゐる享樂品製作の方法、態度等が、ヂャーナリズムの本質として一般に受取られてゐることも事實である。

强烈な特殊の社會群的感覺をもつことがヂャーナリズムの本質であるといふ事實は少しも注意されることなく、特殊の社會群的感覺は出來るだけそれを避けて、あらゆる社會群の人間を通じて普遍的な、一般的感覺を捉ふることがヂャーナリズムであるといふ見解が一般に行はれてゐる。その結果、ヂャーナリズムが支配的勢力を占むるといふことは、何といつても社會的弊害であると感じる。

そのうちに、政治に於けるヂャーナリズムの勢力は最も寬大に扱はれ、ヂャーナリズム以外に、政治に對する社會的要求を表示するものはないとさへ考へられてゐる。

それはヂャーナリズムが近代に起つた新聞紙といふ機關を通じて産れたものであつて、しかもその機關は主として一定の政治的見地を表示するものとして起つたものであることに原因するのである。新聞紙は、決してある社會群の意見を表示するものとして起つたのではなく、ある社會群が一定の事實を認識する機關として起つたもので、ニュースとは「意見」の發表ではなく「事實」の報道であることはいふまでもないが、然し新聞の起原は自己の社會群に起つたニュースの要求ではなく、他の社會群に起つた事實の認識から始まつたのである。すべて初期の新聞紙は「海外」の事實の報道を主としたものであつたことはこの事を說明してゐるものである。それは元來、ニュースの關心は、自己にとつて謎である所の他の社會群の存在に刺戟されるものだからである。イギリスの新聞紙の初期のものは主として大陸からの報道を記載したものであり、日本の新聞紙の最初のものは德川政府の發行した「バタビア新聞」でこれは歷然

と外國新聞の飜譯であつた。而してかゝる事實の採取は、必然に一定の社會的背景に基づくもので、從つて必ず特殊の政治的立場による認識の態度である。イギリスの新聞紙は舊軍國々家に對する近代商業國家の經濟的自由主義の立場をもつたものであつたが、日本のそれは鎖國主義國家に對する開國主義の立場をもつたものであつた。

四

新聞紙が政治的見地を表現する機關として發達したのは右のやうな事實に基づいたものであるが、その結果、あらゆるものはヂャーナリズムと結びつくことを非難されるに反し、政治とヂャーナリズムとの結びつきだけは肯定されてゐるのである。

ヂャーナリズムが政治的態度の表現として有力であるといふことは、自づからヂャーナリズムの本來の性質を説明してゐるのである。ある社會群がその態度を表明する必要を最も適切に感ずるのは、その統制に對して要求をもつ場合である。古代のヂャーナリズムであつた童謠、詩歌の類は概して當時の統制に對する態度の表明で即ちヂャーナリズム的性質のものであつた。殊に孔子が選んだ詩三百篇は、悉くその性質をもつたもので、それの對象とするものは、對立的階級の相手方であつて、詩歌はそれの批判であり、その意味で、嚴格にヂャーナリズムの立場をもつたものであつた。

今日の新聞紙が、所謂「御用新聞」となつた場合に、大に新聞の機能を減殺されると考へられてゐるのも右の事情に基くものである。ヂャーナリズムは元來、對立的立場に於て、相手に對する自己の態度を表現するものであるから、御用新聞と雖も、その意味では新聞紙の機能をもつものに相違ないのであるが、一般にそれが新聞紙として有力でないと考へられるのは、ヂャーナリズムはもと〳〵、統制者に必要な機能ではなく、統制に對して要求をもつものに必要な機能だからである。徳川政府のバダビア新聞は統制者の機關であつたが、それは徳川政府自身が、當時の國家的原則であつた鎖國主義を破るべく企てた「要求者」だつたからである。すべて本來のヂャーナリズムは社會的要求をもつものの態度であるが故に、統制的地位にある階級は概して有力なヂャーナリズム的態度をもち得ないのは當然である。

古代支那に於ける政治論の發達は所謂『處士横議』といはれた、前朝の遺臣や失職官吏やの論議を有力の動機としたのであつたが、さういふ場合の態度が即ちヂャーナリズム的である。それは政治の科學の構成ではなく、一つの政治的態度の表現で

ある。ヂャーナリズムは、社會的感覺を伴ふ認識であるから、認識の態度として單に客觀的であらねばならぬことを主張するのはヂャーナリズムの抑制である。ヂャーナリズムが科學と異る所以はそこにある。商品新聞の『不偏不黨』の宣言はその意味で自から新聞紙の機能を持たない新聞紙たることを宣言してゐるやうなものである。

五

無態度のヂャーナリズムは、特殊の病氣に對する『效能』を持たない藥品と同じで、たゞ味覺に對する快感によつて廣く賣らんとする賣藥のやうなものである。近代に起つたヂャーナリズムが、一つの完成された資本主義時代の現出に伴つて特殊の病氣に對する治療效果よりは一般感覺を刺戟する官能的效果をより多くもつものとなつたのは、近代的要求の熾烈であつた時代が既に過ぎ去つて、資本主義社會の統制が一般に行き亙つたためであるともいへる。

かういふ時代に於ては、すべての新聞は多少とも『御用新聞』である。その機能は對立的社會意識の表現ではなく、統一的階級意識の表現である。この時代のヂャーナリズム的態度の對象となるものは、それと對立する世界ではなく、それ自からの世界である。かゝる場合に、新聞紙がヂャーナリズム的關心を失ふのは當然のことで、それは戰ふべき敵を失つた軍隊に興奮のなくなるのと同じである。

ヂャーナリズムが今日一般に考へられてゐるやうな、社會的對立の感覺をもたない、階級的關心を失つた、味覺的享樂品に過ぎないものとなつたのは、劃時代的の變化をもつた近代初期に於けるやうな社會的緊張の失はれたことの當然の結果である。それは武家の天下が泰平となつた場合に、その武術が小笠原流の舞踊に近かいものとなり、その武器が美術家の玩賞の對象たる藝術品と化してしまつたのと同じである。

日本のヂャーナリズムの進化——又は退化——もこの形勢を如實に示してゐる。明治初年の新聞、雜誌は、當時まだ近代化に於て不充分であつた國家に急激な刺衝を與へんとする政治的企圖を含んだ群意識の表現であつた。さればそのヂャーナリズムは、先進近代國家の歴史的事實の認識とそれから産れた觀念形態の我邦への移植とが、當時のヂャーナリズムの主たる機能であつた。而してそのことは、本來、日本の近代化の過程に於ける社會的意圖であつたが、それが國內に於ける政治的對立の群意識に結びついて、猛烈な對立的鬪爭狀態を生じてゐたので、當時のヂャーナリズムは自然的に以後の我邦の新聞紙の歴史に

於て、最もよくその根本的特徴を具象したものであり、從つてチャーナリズム的機能を最も有力に發揮したものであつた。

六

然るにかゝるチャーナリズムの傾向は、我邦の近代化の次第に進捗するに從つて減退し、それに伴つて、所謂ニュースの意識は、特殊の社會群的態度による動機を失つたゝめに、多くの新聞に共通のものとなる傾向を生じ、特殊の立場をもつ新聞の切實の必要を失ふべき兆候は既にその時に生じたのであつた。然し明治二十年代までは一般に初期の形勢の惰力があつて、從つて日清、日露の兩戰役を經て我が近代國家的地位の確立するまでは、新聞紙はそのチャーナリズム的本質を少くとも形式的に保つてゐて、それぞれの特殊の「立場」が認められてゐた。然し三十年代の末に及んで、一般に新聞紙は、その特殊の立場を高調することの不利益を感ずるに至り、さういふ新聞記者は續々新聞界を退くの已むなきに至つた。明治初年より十年代にかけて新聞記者であつた人々は既に死去し又は退隱してゐるであらうが、それらの人の多くは、三十年代までに記者としての生活を終らざるを得なかつたのであつて、今の犬養毅、尾崎行雄の諸氏もその例に洩れなかつた。それは我邦のチャーナリズムは既に當時に於て、そのチャーナリズムの最も根本的の性質を失つたものだからである。

かくして今日の資本主義的商品生産の過程としてのチャーナリズムが發達したのである。そこでは特殊の社會群の意識即ち對立社會のそれぞれの觀念形態による根據は失はれて、チャーナリズムは單なる一つの商品的感覺技術として發達して、香水に於ける嗅覺の問題、嗜好品に於ける味覺の問題と同じやうな性質の感覺的技術問題が、チャーナリズムの中心問題を爲すに至つた。

今日の多くの人々はこれをチャーナリズムの本質と認めてゐるのである。そんなことは西洋に於ける資本主義初期の近代的新聞記者には思ひよらぬことである。維新後二十年の間の新聞運動の熾烈であつた時代、我が明治初年より十年代にかけての雜誌は、恐く明確な特殊の社會的立場をもつた人々を中心として成立してゐたのであつて、福澤諭吉、中村正直、加藤弘之、福地源一郎、西周、森有禮、沼間守一、田口卯吉、その他今も世人の記憶に新たな堂々たる學者政治家の群は何づれも日本初期のチャーナリスト名籍を賑はしたものであつた。これらの人々の誰れがチャーナリズムを、今日の人々の考ふる如き、一種の感覺技術とするものがあつたであらうか。

七

ヂャーナリズムが今日理解されてゐるやうに、あらゆる人間的弱點を備へた『缺陷』それ自體のやうに云はれ、『高級』の人々の輕蔑の的となつてゐるのは、決してヂャーナリズムの當然の性質ではなく、現代に於ける社會的形勢が、ヂャーナリズムをしてその根本的性質を失はしめた故に、その機關としての新聞紙が、ヂャーナリズム以外の性質をもつて發展したためである。新聞紙はその本來のヂャーナリズムの機能の爲めに社會的感覺機關として絕對的に要求されるものであるため、その機能を『效用』としてそれが商品化し、その商品は元來資本主義大量生產に適するものであるために、資本主義商品として發達するに至つて、そこに新聞紙が全く別箇の機能をもつて社會を征服するに至つたのである。

故に今日のヂャーナリズムが、社會の絕對に要求するそれでないことは、軍國時代の泰平期に於て文化的に發生した刀劍の裝飾が、殺人器具として絕對に要求されたものでないのと異らない。今日のヂャーナリズムはわれ〳〵が繰返し說明した對立的社會感覺による認識や判斷の機關たるヂャーナリズムの性質よりは、さういふ要求から發程しながら、それが逆に『昇華』した官能的要求を充たす機關としてこれを生かさうとしてゐる。それは最近に發達した文化的諸傾向が感覺的傾向に應じて、最も多數の人々に共通の官能要求を充たす方向に發展して行く性質のものである。資本主義企業としての新聞紙は、ヂャーナリズムをさう改造することによつて、アメリカのノールムが世界に頒布されると同じ理由で、そのサーキュレーションを增大せしめ得るのである。

かゝる傾向はヂャーナリズムといふのは性的本能のそのまゝの要求を充たす、肉感的意義の外に何もない裸形を『藝術』とするのと同じ錯誤である。

哲學者とか科學者とかいふ、常識的判斷から超越することを職業とする人々さへ、今日ではヂャーナリズムが右に言つたやうに、常識的——或は非常識的——見解によつて理解し、彼等自身の哲學者科學者が斷じてヂャーナリズムに墮すべからざることを強調してゐるのは滑稽である。それは言葉を通用のまゝで使用したに過ぎないといへばそれまでだが、その一面には、彼等が眞正の意義に於けるヂャーナリズムの要求に當つてゐない、無感覺人であるといふことを暴露してゐるのである。

苟も對立的社會狀態の存在する限り、ヂャーナリズムはその

本來の性質をもつて常に絶對に要求さるべきものである。故に眞正の意味に於けるチャーナリズムを理解しないものは、對立的社會感覺を否定するものであるといへる。哲學者や科學者が眞の意味におけるチャーナリズムを理解しないのは、彼等が社會的感覺に乏しい機械的、技術的奴隷的人間であることを證明してゐるのである。

かゝる現代の傾向を必然に矯正するものは、現に發展しつゝある階級闘爭の事實である。資本主義社會の絶對的統制は、資本主義そのものゝ崩壊過程の進展するに應じて薄弱となり、經濟的に最高潮に達した時に、そこに文化的感覺の爛熟された表現を觀ると共に、やがて下向期に於ける一般的混亂を生じ、所謂世紀末的諸現象を發生せしめるが、今日のヂャーナリズムもその末期的現象の一つの具象的現はれであるが、それを整理して再び確然たる社會的感覺を取り戻さしめるものは階級的對立の發展その外のものに何もない。

ヂャーナリズムは、この形勢に應じて近き將來に於て、ブルジョア的イデオロギーを具象するそれと、プロレタリア的イデオロギーのそれとの對立となり、再び明治初年における如きヂャーナリズムの意識内容とその形式とを取り戻すに至るであらう。(完)

統計に於ける階級性

野村二郎

一

今年の秋は統計界から言ふと、いつになくお賑やかな年だつた。九月十五日からは、第十九回國際統計會議が開かれて、世界第一流のえらい統計學者たちが一堂に會して、國際統計の諸問題を討論された。國際統計會議が終るか終らないに、十月一日午前零時を期して鳴り物入りで第三回國勢調査が行はれた。當局者は言ふに及ばず、大方の學者たちは、この會議及び調査について宣傳これつとめてゐる有様である。日本の經濟統計、社會統計の貧弱さは從來かなり大きなものがあつた。ところが世界的不景氣の襲來、失業の激增等々の現在の情勢は、諸統計の充實を要求すること非常に切實である。今次の會議及び調査は庶幾くばこの方面に大きな役目を果すであらうと。これが學者たちの會議や調査に献げる歡迎の言葉である。例へば經濟往來十月號に汐見三郎博士は次のやうに書かれてゐる。

「第三回國勢調査を前二回の國勢調査に對照することにより、我國人口の靜態動態はもとより、職業の分布が明かにせられ、失業の程度や住宅の内容や「？」經濟活動の範圍に至るまで知る事ができるのであるから、今秋の國勢調査は吾が社會生活の將來に方向を與ふる最も信頼すべき事業なりと言はねばならぬ。」（「經濟往來」昭和五年十月號「國際統計協會會議」）。

吾々は國勢調査、現在の官廳統計一般にしかく滿腔の信頼を捧げるわけには行かない。住宅の内容などはとにかくとして、「失業の範圍」の究明の如きは到底覺束ない仕事と考へる。なぜならば日本に於ける——一般に資本主義生産様式の國々に於ける——統計の事實上の作用は、遍く闇を照す光りといふよりは寧ろ、一部を照し、一部を隱すことによつて社會の眞の姿を歪

めて見せるものだからだ。なぜさうなのか？　それに答へるには、資本主義社會で統計がどんな目的に役立つてゐるかを究明してかゝらなければならぬ。

高野岩三郎博士は資本主義社會に於ける統計の重要さについて次のやうに言はれてゐる。

『然るに現代我國の資本主義的經濟社會は見込生産の世の中、所謂無政府的經濟狀態である。投機の巧拙が事業の成否を決定するのである。併し眞の投機は必ずや其の基を冷靜なる計算的考慮に置かなければならぬ。大膽なる投機と冷靜なる計量とは誠に良く兩立する。計量なき投機は無鐵砲の擧である。之と共に又投機なき計量は高利貸的行動である。諸方面の事實殊に統計を集め、之に冷靜なる考察を施こし、ここに大膽なる計畫を樹て、然る後勇敢に其の實行を計つてこそ眞に現代的事業家と言へるであらう。されば資本主義の旺盛を極むる近時の我國に於て調査や統計の重んぜらるゝに至つたのも決して偶然ではない』。（高野岩三郎、『最近の本邦社會統計資料』大原社會問題研究所パンフレット）。

資本主義社會に於ける統計の役割は資本家の利潤獲得の道具たることにある。これは高野博士の正しく指摘されてゐる通りだ。だが博士の正しいのはこの點だけだ。それから一歩突つ込んだ肝腎の資本主義社會の利潤の意義には少しも觸れてゐない。資本主義社會に於ける利潤は『大膽なる投機』とか、『冷靜なる計量』とか、そんな資本家の個人的手腕によつて獲得されるものだと思ふならそれこそ大間違ひだ。紀の國屋文左衛門の蜜柑船が代表してゐるのは、昔の商業資本家の儲け方だ。現在資本主義の利潤はそんな偶然的なものや個人的なものではない。現在資本主義社會の利潤は階級對立に根ざしたものだ。あらゆる工場、あらゆる職場に於て二つの階級が對立してゐる。資本家と勞働者とである。資本家は企業の持主である。建物も機械も道具も原料も、勞働者が勞働をするに必要なものはすべて資本家のものである。資本家は無制限に經營を支配してゐる。他方に賃銀、俸給を貰つて企業家のために働く勞働者と使傭人とがある。彼等は賣るべく彼等の勞働力以外の何物をも持たない。彼等の貰ふ賃銀は、やつと生計を立てゝゆくことのできるだけのものだ。つまり勞働者はその生産した生産物價値のうち、自分ではただ僅かな分前を賃銀の形で受取るに過ぎないが、他方生産物價値の大部分は資本家の懐に流れ込んでゆくのである。この部分は株主配當となり、利子となり、重役賞與となる、つまり資本家階級一般の儲けとなる。かうして資本主義社會の利潤は、まづ階級的の關係によつて決定される。勿論利潤が個々の資本家の手に歸屬する場合には、殊に流通部面を通じる場合には、個人的の手腕、掛け引きが決定的に働くかも知れない。しかし全體としての資本家の階級的取り前はやまや目

先きやでどゝにもなるものではない。それ故にこそ、大量的觀察にもとづく客觀的認識が利潤獲得の要具として必要視されるので、『資本主義の旺盛を極むる近時の我國に於て調査や統計の重んぜらるゝに至つたのも決して偶然ではない』のだ。

しかしながら資本主義社會が統計から要求する客觀的認識は、飽くまで階級的に必要な限りの客觀的認識である。資本家階級にはその利潤獲得に必要な客觀的認識と不必要な客觀的認識とがあり、有益な客觀的認識と邪魔になる客觀的認識とがある。勞働者階級は、資本家階級から見れば、利潤を獲得するための生產の道具に過ぎない。彼等の汽車を動かし、機械を運轉し、商品を作り出すに十分な勞働者の一定數があるといふことそれだけが資本家階級の要求するすべてだ。その勞働者階級がどんな生活をしてゐるか？　腹一ぱいに食つてゐるか？　人間らしい生活をしてゐるか？　そんなことは資本家にとつてはどうでもいゝことだ。また勞働者階級のうち何人が失業してゐるか、何人が短時間勞働を餘儀なくされてゐるか？　そんなことも資本家にはどうでもいゝことだ。否、寧ろ一定數の勞働者階級が絕えず失業してゐるといふことは、資本家階級にとつて必要事でさへあるのだ。饑餓に耐えられなくなつた失業勞働者はいくらでも安い賃銀で働かうとする。資本家たちはこの失業勞働者群――產業豫備軍――を利用して、賃銀を法外に引き下げることができるのだ。かういふ風に一定の失業者の存在は、資本主義生產方法の前提をなすとさへ言はなければならない。）だから失業などは、資本主義社會の營利精神から見れば最後の關心事だ。勞働者の賃銀や生計費の問題はいづれも資本家にとつては風馬牛も相及ばざるところのものだ。資本主義社會の統計中で失業統計、生計費指數、賃銀指數が最も遲れてゐるのは當然のこと、言はざるを得ない。しかしもう一歩つゝ込んで考へると、資本家は勞働者階級の狀態について決して無關心ではない。たゞその關心は、販賣市場、金融狀態等について持つ關心とは反對の方向をとつてゐる。失業、勞働者階級の貧困は資本家にとつて一つの甚だ困難な問題を惹起する。生產要具としての勞働者は、機械や牛馬のやうにしかく溫順ではない。彼等は踏んだり蹴たりされても默々として働くといふ譯にはゆかない。彼等は賃銀の値上げを、勞働時間の短縮を求めて爭議をやる。職と食とを與へよといふスローガンを掲げてデモンストレーションをやる。のみならず、勞働者は勞働組合、勞働者政黨といふ厄介極まる組織をもつてゐる。これらの組織の持つ勢力は看過し難きものがあり、その要求は資本家の利潤を脅かすことが著しい。これらの問題は資本家の利潤を犧牲にすることなしには、

解決されず、しかも資本家の利潤を犠牲にすることは、資本主義社會の本來の目的に逆行することになる。つまり資本家は失業と勞働者の貧困とを解決する力を持たないのだ。このことは戰後の資本主義社會には最も著しく現はれてゐる。戰後の資本主義が、とにかく曲りなりにも暫定的安定を實現し得たのは、八時間勞働制、社會保險、工場委員會等の勞働者階級の經濟的既得權をじりじりに取上げ、合理化を强行するといふ方策によつたものであつた。合理化の結果は、勞働の過度の緊張と大衆的失業とである。戰後の資本主義社會では好景氣のときでも戰前の恐慌時と同じ失業が存在してゐる。況んや現在の世界恐慌では、主要資本主義諸國の失業は二千萬を越えてゐる。資本家階級はかういふ狀態を勞働者にさらけ出して見せることを好まない。失業統計、賃銀指數、生計費指數はもう勞働者階級の眞の狀態を明らかにすることを許されない。逆にこれを糊塗し、欺瞞して勞働者階級の眞の狀態を蔽ふことに使はれてゐる。マルクスは資本論第一卷の序文で、當時のドイツについて、「ペルシウスは怪物を追跡するために魔法の笠を用ひて、自らの姿を晦ました。ところが吾々ドイツ人は、怪物の存在を否認し得るために、魔法の笠を目深に被つて眼と耳とを蔽ふ」と言つてゐる（『資本論』第一卷第一版の序文）。ただに當時のドイツばかりではない。現在の資本主義社會はいづれもさうでないものはなく、また、情勢が切迫して來れば、切迫して來るほど資本主義社會の統計は、益々事實から背離して來るものなのだ。

二

理屈よりも、實例を擧げて說明しやう。各國の官廳失業統計は上の意味から言つて、まづ第一に槍玉に上るべきものだ。資本主義の諸統計のうち、失業統計は最も不完全なものだ。アメリカ合衆國のやうな世界資本主義の最尖端に立つ國に失業統計がないといふことだけでもこの事情を說明するに餘りある。他の經濟統計、殊に景氣研究の如きでは、世界中で最も進んだこの國が、失業統計を作らうといふ關心を持たないのは驚くべきことではないか。聯邦準備局の工場工業就業度指數といふものがある。だがこれは失業狀態について正確な記錄を與へるなどは思ひもよらない。なぜならば、この指數は、月々賃銀名簿に載つてゐる勞働者數を悉く計上してゐるからである。つまり勞働者が一つの月に二十五勞働日全日働いても、また操短で十二日しか働かなくても統計數字の上には少しも現はれてこないのだ。合衆國の當局は好景氣の時代には合衆國には失業なしと言つて頑張つてゐた。また恐慌が開始して失業が激增してきたと

きも之を否定しやうとした。しかし今年の三月六日の失業者デモンストレーションを初め、各地に起る失業者の運動を前にしては、官邊も澁々ながらも大衆失業の存在を認めぬわけには行かなくなつた。三月十一日に勞働大臣デーヴィスは失業を三百萬人なりとした。四月一日に御用組合アメリカ總同盟會長グリーンは、二月に於ける失業者數を三百七十萬と推算して發表した。ところが『東京日々新聞』六月三十日によると、六月二十六日に商務大臣ラモントは國勢調査に基く數字だと言つて二百二十九萬八千五百八十八人といふ計數を發表した。國勢調査の材料をどう使つたのか知らないが、こんなべらぼうな結果を引き出したのだ。(第三回國勢調査から失業についての結論を引き出さうと期待する人々よ、注意し給へ)グリーンはこれに反對して三百九十萬だと言つた。七月六日の『東日』はもう一つの報道を傳へてゐる。アメリカ失業救濟聯盟の『科學的』調査による結果は、六百六十萬と發表されたといふのだ。右發表の日付は『東日』には明記してないが、恐らくラモントの二百二十九萬說と時を同じくしたものだらう。殆んど同時に二百三十萬から六百六十萬までの計數があるのだ! いかにブルヂョア失業統計が出鱈目だかを明白に物語つてゐるではないか。

もつともこれはブルヂョア統計の足竝が最もしどろもどろになつた時の一失態だ。資本主義社會の統計について警戒を要することは、ブルヂョアジーから見て都合よく歪められた計數が、幾百の新聞幾百の雜誌を通じて異口同音に繰り返され、いかにも客觀的事實にもとづいた科學的な一致があるかのやうに人を籠絡する點である。アメリカ合衆國の統計はアメリカ繁榮の宣傳について、さういふ役割を立派につとめ了せた。しかし今度の恐慌では、恐慌隱蔽の役割はあまり見事につとめられさうには見えない。さしづめ失業にまづ馬脚を現はしたといふわけなのだ。

失業統計についての出鱈目さにかけては日本の官廳統計も決して人後に落ちるものではない。内務省の社會局は最近毎月の失業統計を發表し初めた。その數字を見本に一寸掲げて見ると、

社會局失業統計總括表

昭和五年	調査人口	失業者數	失業率
一月	六、九一一、三四八	三四〇、四八八	四・九三%
二月	七、〇二一、三三三	三五〇、三七二	四・九九%
三月	七、〇〇九、二〇七	三五一、五八九	五・〇二%

一見して客觀的な調査の體裁を備へてゐる。しかし現在の恐慌時に三十五萬やそこらの失業とは、何うしても受け取れない事實だ。新聞や雜誌あたりでも優に百萬を越えてゐると見てゐる

るではないか。果して『東洋經濟新報』の五月十七日號はこの統計作成のからくりを物語るものとして四月二十六日の安藤正純氏の議會に於ける質問を掲載してゐる。

『是はどういふ標準によつてこの統計を取つてゐるかと云ふと、大正十四年の人口と其年の失業者との比率を出しまして、其後は年々人口の增加した部分に對して、この失業率を乘じたものを失業者の增加數と看做して、各地方廳、警察署であるとか知事であるとかいふ方面から報告を取つて、茲に昨年九月以來失業統計といふものをやつたのでありますから‥‥內務省で發表する失業統計などといふものは、洵に信を置くに足らない、實數より遙に少い〳〵數を出してゐるといふことは確かであるのであります』。

そして內務大臣は、『‥‥‥組閣以來直ちに失業統計をいかにして取るかといふことを考へまして止むを得ず安藤君のお話の通りの手續で統計を取つたのであります』と手もなく社會局統計の出鱈目さを承認してしまつてゐる。內務大臣は同じ答辯で『實は前內閣の頃は失業統計なるものはなかつたのでありまして十四年の十月一日に調べたものだけであつて其後は失業統計は無かつたのです。それだから失業對策の根本を究むるに付きまして頗る困難でありますからして、それで‥‥‥』と言つてゐる。そんならこの『止むを得ず』して作つたぼろ統計で何をやらうといふのだ。失業を胡魔化すこと以外の何ができるといふのだ。

ブルヂョア統計のごまかしてゐるのは失業ばかりではない。生計費指數も亦た眉に唾して見なければならぬものだ。日本でも最近商工省が生計費指數の作成に着手し初めたといふことだが、生計費指數は日常必需品の物價指數であつて、これを賃銀指數と對照することによつて、勞働者階級の生活狀態を知るのに缺くべからざる用をなしてゐる。しかも生計費指數は、これに加へる品目を取捨することにより、重み(ウエイト)を加減することにより、容易に細工ができて、勞働者階級の生活狀態の眞相を蔽ふことができる。現在の世界恐慌の一つの特徵は、卸賣物價の激甚な下落である。資本家階級は、この卸賣物價の下落を理由に賃銀引下げを敢えてしてゐる。しかし勞働者階級は物價崩落から何らの利益も享受してゐない。といふのは生計費指數は、卸賣物價指數に比べて極く僅かしか下落してゐないか、或は却て騰貴さへしつゝあるからだ。これは官廳生計費指數についても看取できる傾向だ。しかし卸賣物價と生計費との開きは官廳統計のやうな生やさしい程度のものではない。例へばドイツについて言ふと、一九二九年の上半期の官廳生計費指數は一五四だつた。ドイツ金屬勞働者組合の機關紙『金屬勞働者新聞』は、右の生産費指數をもつて勞働者の不利になるやうにごま

かされたらのとし、これと自身の材料にもとづく推算とを對照してゐる。その指數は同年同期二〇〇だ。ドイツ金屬勞働者組合は『穩健なる』改良主義組合だ、しかも自ら自分の指數はまだあまり内輪すぎると言つてゐる位だ。官廳生計指數がどの程度の客觀性を要求し得るものであるかは明かである。

三

以上に吾々は二つ三つの例を擧げたばかりだ。だがこれをもつてしても、ブルヂョア統計の信頼し難さははつきりとわかる。吾々はブルヂョア統計の利用に當つては、まづできる限り嚴重な批判をやらなければならぬ。結論として、次にクーシネンの言葉を引用しやう。これはコミンターン第十回執行委員會プレナムのとき、ヴァルガの誤謬を指摘して言つた言葉だ。

『勿論吾々はブルヂョア統計を利用せねばならぬ。マルクスやレーニンも彼等の勞作に於てそれを利用した。吾々もさうする。けれども必要なすべての用意をもつてさうするのである。吾々はいつも、統計の數字が本當に何を證明し、そして何を證明しないかを檢討せねばならぬ。吾々は最も愼重に、吾々自ら、ブルヂョア經濟家の結論と一般化とによつて誘惑されないやうに注意せねばならぬ。而して特に、同志ヴァルガのやうに、職責上ブルヂョアの經濟家の仲間と交游せざるを得ないものは、彼が常にイデオロギー上の穢物で汚され、毒素を受ける危險に晒されてゐることを知らねばならぬ。レーニンの如き人が持つてゐた最高のマルクス主義的批判力のみが、ブルヂョア經濟學の穢物を防ぐ絕對的保證となり得るだけである。……そこでもう一度。ブルヂョア經濟家の不潔な社會との接觸には、最も嚴格に科學的なマルクス主義的な衞生法が必要である。殊に、頭腦を清潔にしておかなければならぬ』。

洋モス爭議の實戰報告

―亂舞する白色テラー―

加藤勘十

第一信＝先づ流血

東洋モスリン龜戸（第一、三、四）工場二千六百の全從業員は蹶起した。階級意識に鍛冶せられ、團體行動に訓練された全從業員は暴力團の威嚇的仲介に反撥して鬪爭に奮起した。

洋モスは現在大倉財閥の統制下にあるボロ會社である。大倉財閥はさきに甲州財閥若尾一族没落に關聯して掠取してこれを自己の統制下におくに至つたが、整理の進捗意の如くに運ばず遂これをモスリン產業獨占に結びつけ、日毛會社（川西一派）に合併統一せしめんと計畫した。この計畫は日本のモスリン產業の現勢下に於て成功的に進捗した。其の進捗過程卽ち大資本の獨占形式への發展過程に妨害となり足手纒ひとなるものは、洋モスの綿紡部である。かくして綿紡部の閉鎖廢止は必至の勢ひであつた。卽ち知る、今度の爭議の發端が帝國主義的段階に於ける獨占形成への過程における全犧牲を勞働者階級に轉嫁せんとする資本家の貪慾と壓制にあることを。

會社は一切の陣立を完了した上で、組合——全從業員は全國勞働組合同盟日本紡織勞働組合に加盟してゐた——並に從業員代表に對して、綿紡部の廢止の已むを得ざる事情、從つて、閉鎖に伴ふ失業者に對する給與規定を告げて諒解を求めた。兩者幾折衝の後、結局會社側は綿紡部廢止に因る過剩人員を綿紡部のみから出さんとするに對し、組合側は失業者絕對反對の立場から、過剩人員は全從業員中から「嫁入り其他の家庭的事情をもつ退職希望者を募れ」と主張し、停滯を見るに至つた。交涉が斯の困難に陷るや、先き（二月）い爭議——第二工場閉鎖による爭議で、このときは、組合の組織は締付工場とはなつてゐなかつた——の場合、仲介に立つて味を占めた反動團體正義團は、再び姿を現はして勞働者の前面に敵對的示威を始めた。

勞働者は成長する。春の爭議に彼の正體を見定めた勞働者殊に鬪爭の鐵火の試煉を經、全工場に組織力を擴大した勞働者は、正義團の出現に一層の硬化を見せ、彼れ退かずんば斷じて戰ひやめずの氣魄を以て鬪志を全工場に溢らせた。正義團の凶暴化せる敵對的示威と勞働者側の溢ふるゝばかりの鬪志と、凄慘の氣は全工場に立ち罩めた。斯る形勢下に交涉は中斷せられ、交涉に代ふるに其の連鎖として白色テラーの凶暴なる亂舞と赤色自衞團の活潑なる行動とが交錯して展開された。白色テラーの凶刄閃く處赤色自衞團の鐵腕は唸りを生じて飛び、彼れ傷くかと見れば、われまた傷く。かくして爭議は同志の鮮血に彩られて開始するに至つた。

第二信＝鬪爭に輝く彼女等の瞳

呪はれた彼女等、彼女等の日常生活こそ悲慘そのものである。餓狼に覘はれた小羊の如くに、彼女等を鞭つ酷使の手は、彼女等から青春を奪ひ、健康を奪はねば已まぬ。見よ、色褪せたる彼女等の青春を、これぞ彼女等のありのまゝの生活を寫し出す鏡である。だが、今こそ見よ！彼女等の奪はれた一切は奪還されたのだ。彼女等の失はれた青春は彼女等の鬪爭に甦り、奪はれた健康は彼女等の生きる反逆の血潮の中に復活した。紅潮頰に漲り、口唇熱氣を集め、瞳は復讐に燃ゆる。これぞ鬪爭に競ふ彼女等のプロレタリア的英雄的姿相である。

彼女等が作業服に輕裝し、工場毎に色別のハチ卷をまいて集團的行動の勇敢さを誇らんとする樣は、洵にプロレタリア女軍の前衛として颯爽たるものがある。彼女等は工場内外のデモの場合、一歩も男性に後れを取らじと果敢に第一線に進出せんとする。彼女等のこの勇敢なる態度が、如何に男性の鬪爭力強化のために強力なる拍車の任務を演じてゐることだらう。流石に凶暴化した白色テラーもこの女軍の勇敢なる鬪爭にタヂ〳〵となる場合が鮮くない。殊に、外部との連絡が遮斷された後の第一、三工場——今では四工場も——内に於ける彼女等の勇ましきデモは懦夫をして立たしめるに足るものがある。

晝となく夜となく、工場内外であげられる彼女等の叫びこそ、彼女等の肺肝を突いて出る切實なる訴へである。彼女等が寄宿において一時をあかじと歌ふ勞働歌こそ、寄宿にとぢ込められた鬱憤を晴らす情熱の現れであり男性の鬪爭への拍車でありコーラスである。

然も彼女等の一擧一動は整然たる秩序を保つて行はれる。彼女等ははち切れんばかりの彼女等の感情的興奮を、よく團體的統制に從屬せしめて常軌を逸することがない。卽ち爭議團の統制は一糸紊れず保持されてゐる。のみならず、彼女等の敏活なる行動は時に嘆賞に價ひするものがある。某夜（十月四日夜）筆者等先づ檢束せられ、其の奪還隊再び檢束せられ、第三隊また亂鬪の結果として檢束者を出し、對策本部まで遂に官憲の泥靴に蹂躙せられ、亂鬪又亂鬪、檢束者三十八名を算へたるときの如き、第一回の指令に接するや、百數十名の一隊は足袋ハダシの儘で男性と伍して警察署に殺到した。また第二回の指令に接するや、僅か十五分の短時間內——第一回の指令で用意しつゝあつたとは云へ——に、第一、三工場の寄宿全員は指定の場所に集合して同志を驚嘆せしめ、白色テラーを戰慄せしめたるが如き、如何にプロレタリア意識が彼等に浸透してゐるかを語るものではないか。

洋モス爭議が、帝國主義的反動下に、凶暴極る彈壓を浴びつゝ、倘釋々たる餘悠をもつて戰術を練り、鬪爭を擴大せしめ得られる所以のものは、この爭議主體の强靭性あるが故に他ならない。

第三信＝爭議の發展性

第一歩を同志の鮮血に彩られて出發したこの爭議はそれに適はしい發展を遂げ、今後もまた其のコースを進展しやうとしてゐる。爭議發生以來、工場を中心とせる龜戸町一帶は血迷へる×××の沒常識なる警備の爲に彌が上に凄慘の氣を漲り溢らしてゐる。而して朝となく晝となく夜となく彼等の極端な彈壓の故に、爭議團との亂鬪を生み出してゐる。

彼等は爭議發生當時從業員が自由に通

た第一、三工場を資本家のために勞働者から奪つて、内外の連絡を遮斷して、資本家の雇人の如くに××の如くに門扉を警備してゐる。彼等がいかにいかめし氣に拵へても、彼等の存在は、高々××程度でそれ以上に一歩も出てはゐない。彼等はまた四工場をも、勞働者の手から奪つて會社直轄の暴力團の手に渡した。洵に彼等の行動は會社に忠勤を努めるものと云はざるを得ない。

彼等は何故にかくも凶暴を恣にせるか。彼等は何故に斯くも資本家に忠勤を努めなければならないのか。何が彼等をして斯の如き態度を取らしめるのか。吾等は一應の考察を試みねばならぬ。而してこのことの究明は卽ち爭議の發展性を規定するが故に。とは云へ、本稿は爭議の現實過程を報告するのが任務であるし、所定の紙數も已に竭きやうとしてゐるから、簡單に一言を費やすに留める。

彼等の一切の行動は國家の本質に出發してゐる。ブルジョアジーは國家を抽象的に規定して××の階級超越性を說くが、吾等はそれを信じない。國家××としての警察官憲の現實の行動は、抽象國家說では理解出來ないことで、階級國家說をとつて初めて理解されるのである。帝國主義的段階に突入した資本主義は、沒落への轉向と矛盾勢力——プロレタリア——の克服とは××的發動によらなければ不可能であることを意識してゐるが故に、今日までの隱蔽——僞瞞的懷柔——をカナグリ棄てゝ、大膽に露骨に本來の凶暴性を發揮するに至つたのである。××の行動は其の末梢的現はれに過ぎない。

洋モス爭議が資本家の帝國主義的政策の遂行のために原因し、其の經過が權力的發動による克服過程としての推移を取つてゐる以上勞働者もあらゆる反動的要素を跳ね返すプロレタリアの歷史的使命を意識せる高度意識を基準として鬪爭を發展せしめねばならぬ。從つて戰術的には當然に從來の經濟主義的鬪爭の型を破つて、政治鬪爭への轉換が試みられねばならぬ。

かくして、現在の工場中心の鬪爭はあますところなき戰術的發展によつて、彼等の意表をつく擴大化が計られるであらう。爭議團の組織と編成はそれを用意してゐる。

（一〇、七、爭議對策本部にて）

北方政府流産の眞相

支那統一戰爭の一段階

鈴木茂三郎

一

東四省に君臨して奉天に王座する青年將軍張學良の武力調停のために、閻、馮の北方政府は九月一八日の通電の發せられた瞬間、もろくも崩折れた。張は通電一閃と共に軍隊を關內に入れ、閻、馮が廿酸つぱい返電を發し、大軍をひきまとめつゝ總退却を開始するや、送り狼のやうに天津を捨て北平を納め、石家莊の近くにまでこれを送り込み、豫め張の內的交涉によつて因果を噛みしめて退却する閻にかはつて馮が北平、天津に陣營を延て直すいとまあらしめずして河北省を攻略した。

阿片と女に溺沒せる青年將軍張學良にしては出來過ぎた芝居であつたので、避暑地の北戴河で英國公使ランプソンの仕組んだ芝居だと見るものがある。なるほどランプソンは學良に北平への進出を勸說したには相違ないとしても、ランプソンは閻、馮を追討し、北方政府を覆沒せしめる武力調停をすゝめはしなかつたであらうとも見るものがある。

しかし現在、いづれとも斷ず可き具體的材料は無い。かうした謎を解き、英國資本の政治的陰謀の足跡を明らかにするものは、十月一日天津の官舍に於て左腹にピストルを擊ち込まれた、閻の任命せる税務司シムプソンの狙擊事件とその後の英國活動の方向であるが、現在、さうした問題は未だ充分明瞭でない。だが我々はかうしたことだけは斷言し得る。

元來が英國資本は長江流域に於ける强大なる經濟的勢力を覆沒されはしないにしても、そして又、反英運動の氾濫期に於ける一時よりは恢復し得たにしても、急速に勢威を喪失しつゝあるは事實で、せめては北方の英國資本を防衛せんことにランプソンの最後的な努力が爲されたのである。北方に於ける英國資本と言へば、開灤炭坑、燒作炭坑、京奉鐵道のほか、ランプソンが天津の税務司となつたやうに擔保の關税收入等がある。開灤炭坑は規模に於て東洋最大の炭坑で、撫順と共に支那に於ける二大炭坑であり（註1）また北平と奉天を結ぶ京奉鐵道が開灤炭坑を背景としていかに重要な交通幹線であるかも言ふをまたない、此のほか和蘭資本による張學良の通遼から打虎山に南下する打通鐵道の背景

も英國資本である。

そこで英國資本の支那に於ける政治代表はかゝる英國資本を防衛するために、學良のポンチをまるめ込み、しかもまた北方政府をも手なづける必要に促迫されてゐたことは動かし難い事實である。

(註1) 主要炭坑出炭高（單位千噸）

年次	開灤(英國)	撫順(日本)	淄川(日支)	中興(支那)	全支那
一九二一	四、三一〇	二、七三八	五一三	六五九	二〇、四五九
一九二三	四、四九五	四、八〇三	五五八	七一七	二四、五五三
一九二六	三、〇三八	五、八〇三	六八〇	五〇七	二一、四八一

いづれにせよ青年將軍張學良は進出した。學良をして進出せしめたのはランプソンの怪腕がいかに動いたにせよ第一には日本ブルジョアジーの政治代表たる幣原外相との一致を確めたこと、第二には蔣介石の懇請と臨時軍事費の保證を得たこと、第三には東四省内の守舊派將軍のために地盤を獨占されて下積みの憂き眼にある進歩派將軍の勸說、第四には天津、北平を中心とする河北の經濟地盤の獲得等の諸條件が、軟弱な彼の腰を決めさせたのである。

二

然らば送り込まれた閻、馮の敗軍の將は如何、馮が本年の二月山西省五臺の難府生活から太原へ現れ、山西の閻をさそつて反蔣聯盟の大軍をすゝめたのは、言はゞ背水の陣であつた。馮の據る甘肅、陝西は未曾有の農業飢饉で馮の大兵を養ふ經濟的基礎が覆沒されてゐる。恰度食料生産の不足に强制されて、甲斐の武田信玄がいつも軍馬を縣外へすゝめて戰つたと同じやうなもので、しかも信玄の甲斐とも言ふ可き甘肅、陝西は農業飢饉に襲はれてゐて、敗將馮は落ち延びる經濟地盤が無い。そこへゆくと山西の閻は、配所の月を眺めるにしても生れ故鄕の山西がある。山西は山西の石炭、陝西の石油と一と口に言はれるほど、山又山を疊んだ山西はその他鐵など重工業生産の自然原料が豐富である。(註2) 陝西の石油はパイプではこび出す計畫がされたことはあるが、未だ資本主義的生産の計算が成り立たない。陝西は保晉、平定、萍鄕炭坑など半資本主義的生産がある。それに山西の東家—爲替問屋—は近代の銀行資本に壓倒されたとは言へ、東北邊境一帶の農業生産支配の上に拔き難い殘存勢力がある。閻を支持、支配するものはかゝる封建的農業金融資本であつて、銀行資本との必然的對立の故に、敗將閻錫山はなほ山西が彼を必要としてゐる。

(註2) 支那石炭埋藏量—主要地

讀者諸君は、山西と開灤を有する河北、撫順を有する奉天とを對比せよ（單位百萬噸）

	無煙炭	瀝青炭	褐炭	合計
山西	三五、三五六	九一、五八六	一七三	一二七、一一五
河北	七〇七	二、〇三一	—	二、八八八
奉天	三〇	一、二五〇	五	一、二八五
四川	一、〇〇〇	一八、〇〇〇	—	一九、〇〇〇
雲南	—	一八、九〇〇	一〇〇	一九、九〇〇
貴州	—	一九、〇〇〇	—	一九、〇〇〇

河　南	五、八四二	一、六〇七	七、四四九

それ故に馮は沒落、閻は山西の太原に冬眠するほかあるまいが、その間いかなる動きがあつても、畢竟するところ彼等は沒落又は停滯勢力であつて、全支那のブルジョア統一戰爭を指導すべき經濟的物質的根據を缺くものである。たゞ彼等がかつて全支那のブルジョア統一戰爭卽ち主權の統一、確立の上に、南方の蔣介石と共に物質的條件をそなへてゐたのは北平、天津、濟南の資本主義的機構と結びつき得るやに見えた北方政府成立前後の瞬間にすぎなかつたのである。

だが、もつと突込んで極めつければ北方政府の成立に先立つて閻、馮はすでに濟南を喪つてゐたので、此のとき北方政府のあはたゞしき沒落の運命とブルジョア統一戰爭に於ける閻馮の役割の限界は決定されてゐたと言つても差支ないのである。

北平は封建時代の王城の府といふだけで資本主義都市でない。從つて北方政府の經濟基礎は天津、濟南に置かれた譯だが、兩都市に於ける資本主義生産は、南方の浙江財閥と巨大なる外國資本を背景とする上海には比肩すべくあまりに小規模ではあるが、濟南には製粉、製糖、紡績、機械、絨毯等五五工場、資本一千一〇萬元の支那資本と四工場の日本資本、二工場の獨逸資本がある。天津は一層生産規模が大きく罐詰、製油セメント、機器工業、蓆等八七工場の支那資本がある。が天津、濟南が、全支那の資本主義機構に占める重要性は寧ろ耕地生産の、農産物に對する金融的資本、一般的な貿易商品に對する商業資本の尨大な地域にわたる中心勢力たるところにある。

然るに閻、馮は斯くの如き經濟的地盤から何故に強制退散されねばならなかつたか。我々は第一の理由を天津、濟南地方に於ける金融的資本又は商業資本の絶對支持を得なかつたところに求める。そのことは閻、馮の武力征服による期間が支持を確立するいとまのなかつたほど短期間だつたといふところにも據るであらう。蔣、張は、だからこそ北方政府に根をおろすいとまを與へなかつたのではあるが、本質的な原因はさきにも述べたやうに閻、馮の山西、西北に於ける經濟的地盤が封建的基礎の上に置かれてゐるがために、ピタリとしないものがあつたらうと思はれる。第二の理由を我々は外國資本の強力な支持、背景を持たなかつたところに求める。北方政府と英國資本との關係は前にも述べたとほりであつて。英國資本が長江流域の經濟地盤をおさへられてゐる南方政府に對して徹底的に北方政府を支持し能はざる理由が存するやうに、わが日本ブルジョアジーもまた天津市場の獨占支配を要求する張學良將軍に對して北方政府を徹底的に支持し能はざる理由がある。よしんば出先きの軍人が、いかに働いたにしてもわがブルジョアジーの確乎たる對支方針と利害よりすれば小手先の操作たるにすぎないことであつて、現に馮は南方飛行機の爆彈に襲はるゝや、武器彈藥と飛行機の買入れを交渉してきたがわが陸軍はこれを拒否したので馮、閻は伊太利の武器を輸入した事實がある。第三の理由を我々は閻、馮の當面の利害の不一致に求める。閻には歸農する故山があり、馮には飢餓と怨恨が待つのみである。閻にすれば不利な狀勢と戰はんより退いて歸臥した方が安全第一である、從つて張學良との單獨豫備交渉は容易く成立したわけで、馮がど

たん場まで知らずにゐたことは事實らしく、閻の意志が下野に決した以上、馮は閻に追隨せざるを得なかつたは明らかである。

これらの諸點の理由の故に、蔣と張のブルジョア統一に對する一應の一致に基く、學良の武力調停の前に、閻、馮はもろくも崩折れたのである。

三

次ぎに支那新興ブルジョアジーの絕對信任のもとに、統一戰爭を指導しつゝある蔣介石の南方は如何、蔣介石が支那新興ブルジョアジーを指導するかに見ゆるほど、支那新興ブルジョアジーの彼に對する信任は、いまのところ微塵も搖るぎないと見て好いが、彼の統一戰爭は、支那の新興ブルジョアジーと結合する外國資本によつてもまた强力に支持されるところで南方派の外國資本は米國資本と獨逸資本である。獨逸資本は蔣介石の近衛たる教導師團の軍事教練、航空隊の指導のほか、武器、飛行機その他軍需品の一と手供給を引き受け、米國資本は宋子文を通じて財政、產業を指導するほか、長江筋の貿易市場をおかしつゝある。四川省では英國資本のスマトラ石油にかはつてスタンダードの米國資本に代位され、奉天の學良支配の鐵道にさへドル資本が進出した。長春から洮南を突いて興安嶺の索倫―ソロン―に至るソロン鐵道は現在工事中であつて、之れは米國資本によつて起工されたが、やがてはソロンから興安嶺を橫斷して東支鐵道の海拉爾と結んで、東支鐵道北線の平行線たらしめ、連山灣に至る打通鐵道と結んで南下すべく洮南と通遼―パインタラーを結んで滿鐵本線と四洮線の競爭線たらしめる計畫で、北にソヴイエット・ロシア、南に滿鐵王國資本との對立を意圖するものとして注目されてゐる。

此のほか獨、米の資本は航空會社をつくつて支那の航空產業を獨占するに至つた。さうしてかうしたことは上海を中心とする米、獨等の貿易の躍進的な比率による增大となつて現れてゐるのである。(註3)

(註3)帝國主義國の貿易總額(單位千海關兩)

	一九二七	一九二八	增加率	一九二九	增加率
米國及植民地	一九一、二三八	二〇三、九〇八	六・七%	二一一、六六二	三・五%
日本(朝鮮)	一四六、一〇四	一五二、九二〇	四・六	一七四、一〇六	一三・八
英國及植民地	一二二、六六九	一二八、二四〇	二〇・四	一三八、六五五	一三・八
獨逸	三三、六五九	四九、一七六	四六・一	五七、五四五	一七・〇

かく外國資本と新興ブルジョアジーの絕對支持のもとにある南方政府は全支那統一の覇業を確立するであらうか。

こゝで諸君の注意をひきおこしておかねばならぬことは長江流域に寄せては返へす怒濤の如き共產黨勞農赤衛軍との階級戰爭を一應、本論のそとに置いて、我々は當面これらの赤衛軍の屯ろする湖南、江西、湖北、廣東その他の多かれ少かれの地域に亙る農民ソヴイエット權力との階級對立に於ける支那ブルジョアの統一、主權の確立が問題としてゐることである。從つてその限りに於ては、南方政府は閻を押し込め馮を沒落せしめ、張學良との政治的妥協の上に、統一戰爭の一應の凱歌をあげるであらう。そこでさしあたり十月十日の双十節―十の二つ重なりた

るブルジョア革命の記念日——には蔣介石は文武百官の統一への祝賀を嘉納する機會を持つであらう。しかしすでに一言觸れておいたやうに赤衛軍の進出によつて統一戰爭の終結は、同時に南方政府が統一戰爭の戰線から、大軍を階級戰爭の戰野に展開しなければならぬときである。

これは支那に於ける重大な形勢の發展であつて、我々はさきに張學良の武力調停の動因や閻、馮の敗退の原因を極めて一般的な見解のうちに求めて、之れを述べるにとどめ、わざとさうした諸形勢を急速に押しすすめたる拍車となつたもつと深い動因については、そこでは觸れないでおいたのであつたが、もつと深い動因とは、赤衛軍の長沙の一時的占領によつて蔣、閻と馮、張の背後にあつて、それ〴〵ブルジョア統一戰爭を助力しつゝあつた帝國主義外國資本は、さうして戰爭ごつこをつゞけてゐるまに、外國資本の最惡の共同の階級的對立物たる赤衛軍の陣營の整備、擴大と長江流域への進出勢力が眼前に展開されたのを見て畏怖したのは何によりも先づ外國資本だつたのである。外國資本は統一戰爭の終結と統一の確立を最大の緊急事として、活動の方向をそこへ急轉して向けたのである。張が武力調停をなしたのも、張と蔣との一時的妥協の成立も、外國資本のかゝる支持に促迫されたからであり、必然に閻、馮は外國資本から見捨てられた。

それ故に、蔣介石の南方政府はブルジョア統一の時期は促進されたが、統一戰爭の次ぎに外國資本の共同的支持は得られるにしても階級戰爭を戰はねばならぬ。

そして次ぎの階級戰爭は、いかなる狀勢のもとに戰はれるか。之れにも又、重要なる狀勢の發展がある。即ち打ち續く農業恐慌や繭生産不足のための生絲恐慌や戰爭による破壞恐慌のなかに深刻な銀塊恐慌（註4）が全土を襲ひ、海外からは世界恐慌が強く影響を與へつゝあるといふ恐慌の發展のなかに、階級戰爭が戰はれねばならぬのである。

輸出に有利な條件のもとに於てそれほど輸出貿易は增加しない——上海の昨年の輸出高は三億六千萬兩で前年よりタッタ二百萬兩多い——物價は急テンポに上り始めた。（註5）原料を輸入に仰ぐ紡績、製粉、石鹼、煙草、細絲織物等は原料の買付資金を失つて倒産しつゝある。

それらの支那資本と對立する日本の紡績資本、燐寸のスエーデン・トラスト、煙草トラスト等の外國資本は恐慌を通じて支那資本に對する強力なる壓迫を加へつゝある。

（註4）ロンドン銀塊相場

年次	最高	最低	備考
一九〇二	二六片一六分一	二一片一六分一	北清事件
一九二〇	八九片二分一	三八片八分七	欧洲大戰後
一九二三	三三片一六分一	三〇片	
一九二六	三一片一六分一三	二四片八分一	
一九二七	二八片——	二四片四分三	
一九二八	二八片一六分九	二六片一六分一	
一九二九	二六片八分五	二一片一六分五	北清事變相場と同一である

（註5）上海物價指數（一九一三年二月を一〇〇とす）

年次	卸賣指數總平均(一四七品)	貿易品物價總平均 輸出(七九品)	輸入(一一五品)
一九二三	一五六・四	—	—
一九二六	一六四・一	一五三・六	一五一・二
一九二七	一七〇・四	一六八・四	一六四・八
一九二八	一六〇・七	一六八・〇	一六九・一
一九二九	一六三・七	一七三・一	一七八・五
一九三〇			
一月	一六九・六	一七五・五	一八六・五
二月	一七四・七	一八二・〇	一八九・五
三月	一七三・九	一七九・八	一九〇・八
四月	一七四・二	一八〇・七	一九二・一
五月	一七三・四	一七六・七	一九八・四
六月	一八五・九	一九六・八	二一五・三

新興ブルジョアジーは、いかに外國資本と戰ひつゝ、恐慌に耐へるであらうか。此のことは南方政府の下に於ける統一の維持と南方政府の上に於ける蔣介石の位置の動搖を決定的ならしめるものではあるが、南方政府は一九三一年より決行せんとしてゐる關稅の從價一割二分引上による剩餘金を以つて、統一維持の行政費と階級戰爭の戰費に充當せんとするものである。

四

かゝる狀勢の發展のなかにあつて、南方政府の孫科が海路大連に上陸した。孫科の任務は張學良のもとにある諸鐵道——そのうち吉長、四洮、洮昂線は日本資本との借款鐵道である——を南方政府の政治的管理、統一のもとに置かんとすること、わが滿鐵王國の日支合辦、吉會線敷設の交渉案件を解決せんとするにあるのではあるまいか。「愈々、やつて來た」といふ恐慌感が日本のブルジョアジーを襲ふたかに見られる。

我々はその問題に這入り込む前に、全支那の「反日本」の輿論をまきおこさせてゐる「田中義一上日皇之奏章」いはゆる故田中首相の滿蒙政策に關する×××なるものの問題をここに公然と提起して置かねばならない。

上奏文なるものの內容は昭和二年六月——七月に亙る東方會議の決議錄であつて（一）滿蒙に對する積極策、（二）滿蒙は支那の領土に非ず、（三）內外蒙古に對する積極策、（四）朝鮮移民の獎勵及び保護政策、（五）新大陸の開拓と滿蒙鐵道（イ）通遼—熱河線（ロ）洮南—索倫線（ハ）長春—洮南線（ニ）吉會線、（ホ）吉會線及び日本海中心策、（ヘ）吉會線工事の天然利益と附帶利權、（ト）琿春—海林線、（六）對滿蒙貿易主義、（イ）大連中心策、（ロ）金本位制、（ハ）第三國の投資歡迎、（ニ）滿鐵經營方針の變更—鋼鐵、石油、硫安、曹達、マグネサイド、アルミニユーム、（七）拓務省の設置、（八）京奉線沿線の大凌河流域、（九）支那移民侵入の防禦、（一〇）病院、學校と滿蒙文化等が主要題目で日本ブルジョアジーの帝國主義政策の代表的な字句の表現を以つてつゞられてある。（×××の期日は昭和二年七月二五日、宮內大臣に對する田中首相の執奏方に關する文書も

添へてある)

余日章が原文を五萬圓で手にいれたとの說もあり、張學良の弟が日本で手にいれて歸國したとの說もあるが、出所のせんさくの如きはどうでもよいとして、それが×××であれ東方會議の決議錄であれ、それは××準備のための滿蒙對策であつて、斷じて我々のゆるし難いところのものである。—議會で問題の所在を明白にするために一切の材料を我々の所屬する全國大衆黨の松谷與二郎、淺原健三兩氏に依囑してあるから、ここでは深く觸れない—滿蒙の支那大衆が斯くて湧き立つてゐるなかへ孫科が重要使命をもたらせて渡滿したのであるが、幣原外交によつて代表さるゝわがブルジヨアジーの對支方針は、南に蔣介石、東北に張學良を援助しつゝブルジヨア統一を完成せしめるにある、と言つても蔣と張はつひには兩立し難い二大勢力であり強力な統一の不可能を見透しての統一であつて、南方とは獨、米の資本ほどわがブルジヨアジーとの關係の深度は深くない。さきに來朝した軍政部次長陳公哈と宇垣陸相との交渉によつて軍事顧問として現役將校二人を蔣介石軍に特派してあるほか、さしたる援助を與へてゐるとは思はれないが、最近、現實資本をにはかに動かし始めたところの例の泰平組合—三井、三菱、大倉等の資本による—を通じて武器を供給したと信ず可き理由もある。だが、どんなに深く結ばれてゐるにしてもわがブルジヨアジーと張學良との深度に比べては比較にもならない淺いものであらうが、それほど深度の深い張學良とわがブルジヨアジーとの關係は張作霖の時代に比べては之れ又比較にもならないほど淺いもので、言はば日本と張學良との政治的結ばれは深からず淺からずのところにあるであらう。張學良にすれば、彼の鐵道資本は滿鐵資本との對立がある、東三省官銀號の銀資本と鮮銀の金資本との對立がある。また滿洲の新興産業資本と日本資本による産業資本、耕地生産物をめぐつて支那農民と三井財閥の商業資本との對立も激成されつゝあるといふわけで、日本の帝國主義資本と強烈なる對立利害の上に立たされてはゐるが、と言つて、日本の經濟的軍事的勢力に對しては無力そのものの張學良としては經濟的對立を、大膽に政治對立にまで發展せしめ得ないのである。

かうしたことが吉會線問題をして多年の懸案たらしめてゐるであらう、また孫科の手で解決することを望んでゐるのでもあらう。

さうしてそれならば孫科がここに解決せんとする吉會鐵道と滿鐵合辦案とは何にかと言へば、吉會線は今日となつては經濟的必要よりも日本ブルジヨアジーにとつては軍事的政治的の重要さが倍加されたのである。さきに指摘しておいた田中義一の「上日皇之奏章」には斯う書いてある。

「滿蒙は極東に於ける政治の不完全なる地域にして我國は再び××と北滿の平野に角逐せざる可からずとすれば吉林は之れが中心となるべくかくて×××の第三期遺策を實行する時期に至らば××、××の師團は朝鮮より南滿に進出して××軍の北上を制し××、××××の師團は敦賀より海路清津に進み吉會線に依りて北滿地方に猛進し云々」

「長春—大阪間の距離比較、

長春羅新—大阪、陸路四〇六哩、海路四七五哩、長春—大連—大阪陸路五三五哩、海路八七〇哩」(かくの如き數字は、かつて外務省が日本海中心論者松尾小三郎を羅新に特派して調査せしめた事實がある—鈴木)

そしてもつと一層、切迫しつゝある政治的理由は間島を中心とする滿鮮國境に於ける×××運動鎭壓のための必要であつて、その點に關する限りに於ては日本も張學良も利害が共通にするところがあるので、階級戰爭の一點に結びつけて解決案をつくりだすに至るかも知れないが、蓋し孫科の腹案は滿鐵の解放卽ち日支合辦の要求と引き換へて吉林線を解決するにあると思はれるが、わが對支帝國主義政策が指導する滿鐵を支那資本に解放することは日本ブルジョアジーにとつては日露戰爭による巨大なる戰費と勞働者、農民の生命を賭けた代償であるが故にたやすく實現されるわけがない。從つて今回は腹のさぐり合ひの程度を出でまいと見られるが、初夏の滿鐵株の下落したる時、兜町へ支那資本が流入して滿鐵株を目立たないやうに買ひ占めた事實と思ひ合はせるなら、南方政府の滿鐵に對する要求には、相當根強いものがある。

かくの如き日支の懸案をめぐつて、蔣と張の當面の利害に基く一時的妥協や、日本ブルヂョアジーと張及び蔣との深淺の上に、背後のあらゆる外國資本との複雜なる利害がからみ合ひつゝ、新たなる諸情勢が發展してゆくであらう。

四十年

第一部

ゴールキー著・大宅壯一譯

メ一千頁

……たらどうかしてると言っていゝ。生々したピチ〳〵したすべての感情と感覺とがそこにあるのだ。苟もそれが人間的であり文學的である限りは――。

あゝ、この偉大で、優美で、途方もない一個の文學者！ 世界的文豪の名に値する唯一の存在！ 彼の畢生の傑作四十年を、原著・英譯と殆同時に諸君に送り得たことを我社は誇りとする。

古今獨歩の世界的名篇

本書は、單なる一つの物語りではなく、クリム・サムギンといふ一人の人間の四十年の生涯を通して見た「**近世ロシア革命史**」である。人類が過去數十世紀の間に經驗した最大の苦惱であり、試錬であり、歡喜であつたプロレタリア革命の全過程を、何人にも直接に具體的に、端的に傳へようとする目的をもつて書かれたものである。これによつて我々はロシアのプロレタリアと進歩的なインテリゲンチャが遂に搾取の鐵鎖を斷つに到るまでの、久しい惡戰苦鬪の全收獲を目のあたり見ることが出來ると共に、ゴールキーの圓熟した藝術の醍醐味を滿喫させられる。譯者は、「しば〳〵ペンを措いて、確かにゴールキーの前にゴールキーなく、またかういふ作家は今後二度と再び地球上に現れて來ないだらうと讚嘆これを久しうした」と言つてゐる。

主人公クリム・サムギンは、ゴールキーが自分の過去のすべての體驗を織りこんで創造した、インテリゲンチャの時代的階級的特色の一切を具備した典型的インテリである。正しい意味でのマルキシストは第一部では餘り姿を見せない。マルキシズムそのものも完全な姿をとつて現れてはゐないが、それに到達する迄の凡ゆる近代思想が、徹底的に淸算されてゐる。從來**日本の大多數のインテリの頭を構成してゐた一切の文學的並に思想的傾向と流派がこの一卷の中に盡く紹介されてゐる**。從つて本書は一面に於いて最も要領のいゝ**近代文學史**であり**近代思想史**である。

これこそ世界プロレタリア文學の最高峰だ。而も四十年に亙る作家生活によつて獲得した文學的技術と經驗の前には、全世界のブルジヨア文壇が聯合して掛つたつて齒が立つものではない。形式内容百パーセントの超弩級作。

四六判 一千頁　定價二圓　送料十八錢

中央公論社發行

國家豫算のマルクス主義的檢討

四方田敏郎

一

政府は本年度當初金解禁を斷行した。金解禁は金融資本ブルジョアジーの手持圓價の引上げと共に弱小産業資本を整理し、各種産業部門を金融資本の統制下におくことが××の目的であつた。この目的は、昨年末アメリカの株式恐慌に端を發した世界的産業恐慌によつて更に有效に遂行されつゝある。物價は暴落し、弱小産業、中小商工業は相次いで破産してゐる。政府の唱導する合理化政策はかゝる作用を××化してゐる。中小地主は急轉歩で沒落し小作人は飢餓に迫られてゐる。勞働者は勞賃引下と馘首を宣告され、失業者は今や續々と産業豫備軍に繰込まれてゐる。

金解禁準備の名の下に一億一千萬圓減の「緊縮」豫算を誇らかに立てた濱口内閣は、これら國内不況の反映を受けて、今や未曾有の財政難に陥つてゐるものゝ如くである。本年度歳入豫算は税收入、官營收入の見積り違ひのため一億五千萬圓の激減を報ぜられてゐる。更にまた、帝國主義日本のブルジョアジーが求める各種新規要求を加ふれば、明年度歳入は本年度豫算に比し一億七、八千萬圓の不足を見ると云ふ。政府は、この歳入減豫想に對し、明年度豫算を更に「大緊縮」するものと見られてゐる。彼は如何にして明年度豫算を削減しようとするか？ ブルジョア政府の出納掛大藏省は今やその豫算編成に忙殺されてゐる。その結果は近く諸新聞を賑はすであらう。だが果して政府は一大削減をなしうるか？ 日本帝國主義は果して財政の「大緊縮」を斷行しうるであらうか？ 斷行しうることは、たゞ物價下落に基く豫算面の表式替に過ぎないことは、餘りにも明らかである。實質的に豫算の削減を斷行することは、帝國主義ブルジョアジーの肯んぜざる所である。否實質的には、本年度豫算に比して更に膨脹すると思はれる。何故に然るか。

それは、過去における財政膨脹の經過とその理由を見れば、明らかである。欧洲大戰を契機として日本の財政が、中央地方を問はず、著しく

膨脹してゐることは何人にも周知のことがらである。

所謂一般會計の豫算を見るに、大戰前の大正二年には五億九千四百萬圓であつたものが、大戰後の八年には十億六千四百萬圓、昭和四年度では實に十七億七千三百萬圓に達してゐる。更に一般會計特別會計の總計額は、大正十四年の三十四億から、昭和四年には三十八億に膨脹してゐる。この膨脹の根源は、勿論日本ブルジョアジーの帝國主義的進出のためである。帝國主義的進出は、對外的には帝國主義相互の武力的並びに經濟的鬪爭、對內的には權力的反動的な斷壓政策を必要とする。この帝國主義的對內、對外政策の費用增大こそ、日本財政が何故に膨脹したかを說明するものである。然もなほ帝國主義各國の鬪爭が更に激化しつゝある今日、日本財政の膨脹は益々不可避的であることが明らかにされる。「ブルジョア××は、一方ブルジョア階級各自相互の、そして他方××される階級に對するブルジョア階級の相互保險以外の何ものでもない。搾取階級を制壓しておくこと、いふことはだん／＼困難となるから、この保險はだん／＼經費がかさみ、そして形式的には市民社會に對してます／＼獨立的ならざるをえない。」（拙譯編「マルクス主義財政特に租稅論」マルクス、稅制改革論批判八頁）

かくして日本政府は帝國主義國家の存立維持發展のために、帝國主義的緊急經費、即ち軍事、警察、各種帝國主義經濟進出政策、反動的教育費に對する經費の××を益々絕對に必要とする。從つて如何なる政府が政權を掌握した所で、財政が年々膨脹する傾向は厳然たる事實である。かく認めるが故に吾々は、政府が來る明年度豫算に對し實質的削減をなすことを絕對に信じない。

二

試みに濱口內閣の五年度歲出豫算削減のカラクリを見よう。彼は果して、その聲明の如く五年度豫算を前年度に比し一億一千萬圓削減し、以て財政負擔輕減を斷行したか？　この一億一千萬圓の削減は單に表式上の縮少である。それは、負擔を一時延期したに過ぎない。延期は國民の頭上に倍加する負擔を約束するものである。否、帝國主義日本が直接的に必要とする費目は、殆んど減少を示してゐないのである。總豫算に對する比率から見れば、これら經費は膨脹さへ示してゐるのである。

歲出豫算の二十九パーセントと、前年度に比し一パーセントさへの增額を必要とした陸海軍事費を先づ見よう。陸軍の五年度豫算二億一千五百萬圓は前年度に比し二千二百萬圓の縮少であるが、海軍の五年度豫算二億六千三百萬圓は前年度に比し五十萬圓の膨脹である。然も陸軍の豫算縮少たるや、それは、臨時部における繰延べ、即ち當該年度の數字上の形式を變へたに過ぎない。この兩部門における尨大な繼續費は、依然として將來國家豫算の膨脹を示してゐる。陸軍の國防充備費、海軍の水陸整備費、補助艦艇製造費はその最たるものである。なほ、陸海軍省部門に屬しないが、實質的には軍事費に屬する費目については如何。內務省管下徵兵費豫算百七十五萬圓は前年度に比し十一萬圓、同じく軍事

救護費百二十六萬圓は十二萬圓の增加さへ見せてゐるではないか。更に遞信省管下の恩給及び年金の大半は武官に屬するものであるが、この兩費一億四千三百萬圓は前年度に比し二百萬圓の膨脹を見る。軍事公債を以てその三分の一を占める國債の整理基金繰入二億八千四百萬圓は前年度に比し一千三百萬圓減少してゐるが、この減少こそ帳簿上の書替にして負擔を一時的に延期したに過ぎない。

次に帝國主義的獨占經濟の維持發展のために產業ブルジョアジーに交附する費目については如何？ 吾々はこゝで、直接的に日本帝國主義が緊要とする諸產業の獎勵費、助成費の膨脹と、間接的な產業助成費の縮少を見る。 商工省管下產業獎勵費五年度豫算三百九十六萬圓は前年度に比し一萬圓の增加、貿易振興費百二十一萬圓は前年度に比し稍ゝ增加、遞信省管下航路補助、航空輸送補助等各補助費千四百二十七萬圓は前年度に比し三百二十七萬圓の增加である。 他方間接的な產業助成費は、內務省管下治水事業費、港灣改良費の全部的節減繰延を見る。

濱口內閣は、國內無產階級運動××費としての警察費をどれだけ削減したか？ 警察費連帶支辨費二千萬圓、警察特別施設費百萬圓は、依然として「國家治安」上、手を下し得ない所でなかつたか。なほ驚くべき膨脹率を示す地方警察費が、四年度において八千萬圓に達してゐるを思へば、如何にこの國の××が「國家治安」を必要とするかが分明する。

帝國主義日本の教育は如何？ この費目は、三十年間において、各省經費中膨脹率の最高地位を占めてゐる。 そしてこの教育費こそは「思想國難」を恐れるブルジョアジーの一日も忘れえない所である。 濱口內閣は、この意味において そしてまた地方財政の膨脹に基く地方小農民の階級的××を恐れてこそ、義務教育費國庫負擔一千萬圓の八千五百萬圓を望んだのである。 かくして國庫支出の普通教育費の膨脹は益ゝ强烈となる。 爾餘の教育費の節減繰延は、國寳及特別保護建造物臨時費の二百萬圓減、災害復舊費の如き、何ら緊急を要しない費目である。

更に帝國主義各國は今や、それが持つ矛盾の激化のため、國內無產階級運動の激化に直面してゐるが、これが對策として最近、一方においては國家の階級性を××し、他方においては無產階級の遲れた層を××せんとしてゐる。 だがその武力的彈壓政策を以て階級運動の前衞分子を「一網打盡」したものと見てゐる濱口內閣は、社會政策費を必要としない。 また幾分たりともこれをなす餘裕財源を持たない。 從つて彼は五年度豫算において各種の社會政策費目に一大削減を加へた。 だが彼もまた近代的「社會國家」の粉飾を些か必要とする。 かくして百萬圓に足らざる新規增額を認めた。 即ち職業紹介事務局費一萬三千圓の增、國立癩療養所三萬圓の增、傳染病豫防費補助十一萬圓の增、精神病院費補助二萬圓、公益質屋建設費補助十萬圓の增、失業救濟事業費補助六十一萬圓の增。 何とけちた濱口內閣であることよ！

三

以上の分析から吾々は何を知るか。 濱口內閣は日本のブルジョアジ

ーが帝國主義の現段階において緊要とする費目の增額を斷乎として國民に要求したことを！

にも拘らずまたもや、かゝる帝國主義ブルジョアジーのこよなき××たる政府は、前年度よりか遙かに「大緊縮豫算」を編成すると聲明する。然らば、明年度歳入豫算一億七、八千萬圓の不足に對して、政府は如何なる歳出豫算豫編成せんとしてゐるか？

政府は今や、所謂既定經費の行政經濟化或は行政刷新の名の下に、大藏省をして、物件費四億圓の一割五分減、繼給費二億一千萬圓の三割減を各省に交渉せしめてゐると云はれてゐる。だがそれは、單なる物價下落に基く評價替へか、然らざれば僅かながらの事業繰延べに過ぎない。何となれば、これら諸經費の大半は帝國主義日本が絕對に必要とする軍事費であるからだ。政府は六年度以降各特別會計において恩給を分擔することに內定し、一般會計はこれがために六百萬圓の剩餘財源が浮ぶと云ふ。これこそ單なる帳簿上の計數移動に過ぎない。更に又政府はさきに決定した煙草の元賣制度廢止によつて約三千五百萬圓の財源を得ると云ふ。煙草の賠償價格を引下げて、更に中間利益を差し引いた上物價下落に反せる小賣値段を以て國民から暴利を貪る政府は正に××的所爲以外の何ものであらうか。或はまた行政費の節減を叫ぶにあたつて、官吏缺員の不補充を唱へてゐる。何と云ふ小つぽけな××根性であることよ！

更に見よう。政府をしてあれほど國民負擔輕減を叫ばせたロンドン軍縮會議の結果は如何？　政府は、同會議の結果、主力艦の艦齡は現行ワシントン協定に比し五年間延長され、この國の補助艦は四十一萬トンに減少する、從つて同協定の有效期間たる一九三六年迄の六ケ年間にわたる軍縮剩餘金は、これを減稅に向けると。だが最近に至つては、軍部において右六ケ年間にわたり四億五千萬圓否、遙かにこれを突破してゐると思はれる新補充計畫を編成し、同會議による兵力の缺陷を航空設備その他の帝國主義的軍事施設によつて償はんと報ぜられてゐる。帝國主義各國の軍縮會議なるものは、果してそれが一時成立したとしてもそれは軍事的カルテルに過ぎない。カルテル條件外の競爭は以前にも增して激化され、且つカルテル加盟各員は更に更に內部的充實を圖るものである、そして加盟各員の實勢力が以前と異つた時にカルテルは解體する。このことを××帝國主義政府は他の如何なる帝國主義國にも劣らず知悉する。從つて今や政府が當初聲明した國民負擔輕減は既に年額一千萬圓程度と云はれ、更にそれさへも全く危ぶまれて行く。年額六億の軍事費に對して一千萬圓の縮少で何が期待されるか。加ふるに陸軍費、警察費の削減を、吾々は何時耳にしたか？　聞くことはたゞ陸軍における一大國防計畫のみである。

かくして「世の中にいはゆる財政といふものほど、大仕掛のペテンはないやうだ。豫算や公債に關しての極めて簡單な遣りくりでも、祕密科學の信者によれば、巧妙至極な言葉で云ひ表はされる。」（拙譯編「マルクス主義財政特に租稅論」マルクス、新財政奇術三五頁）

更に進もう。金解禁と世界的恐慌のために急速なる沒落を辿つてゐる中小商工業者、中小農民に對して政府は救濟を叫ぶ。だが彼等に對し

では、預金部資金、即ち一般勞農大衆からの零細資金をかきあつめた資金が地方に還元し、低資融通なる××さへ與へてなければよい。百萬の失業者が街頭に溢れてゐる。だが無産階級の××體を奪つた政府は、未だ國庫負擔の社會政策費增大を××としない。社會政策的冗費は「緊縮」に相反したものである。それは只、地方債の許可を今後なるべく認め、從つて地方勞農大衆の負擔によつて安價なる社會政策を行ふと云ふ。かくて「併し乍ら、この失業對策は時々刻々に變化しませう。又その緊急の程度も時々刻々に變つてくるのでありまして、その對策に就ては、中央政府に於ても十分の努力をして是が對策をなさねばならんとは、當然であります。併し乍ら吾々は、失業者に對して、或る一部の主張する如く、徒らに扶助金を與へるやうなことは斷じてしない覺悟をしてゐるのであります。」（井上準之助著、「世界不景氣と我國民の覺悟」七頁）

かくて政府が一大決心を以て意圖する明年度豫算の「大緊縮」編成が如何なる正體のものであるかが××される。それは、畢竟、帝國主義日本の反動的存立上必要な經費は、これを絕對に削減しえないし、また削減しようとしないこと、爾餘の緊要ならざる經費支拂はこれを繰り延べるに過ぎないことを豫知しうるのである。そして總體的外形においては豫算の「緊縮」が、即ち帳簿上の計數の××があつても、それは物價下落に基く評價替へに過ぎないことも明らかにされる。

四

然らば以上の如き帝國主義的內容をもつた明年度歲計豫算に對し政府は、如何なる財源を以て充當せんとしてゐるか？

明年度歲入が本年度豫算に比して一億五千萬圓程度の減少と見られてゐることは前述した。だがこの歲入減見積りも、各種の事態を綜合すれば、明らかに過少である。否、かゝる歲入減を過少に見積ることによつて、政府は歲入、特にその主要歲入科目たる稅收入の自然的減少を防止する意圖を抱くのである。それは××的苛斂誅求以外の何ものでもない。この國の××的苛斂誅求が年と共に××されてゐることは、內國稅徵收費が如何に膨脹してきたかによつて明らかにされる。濱口內閣五年度の內國稅徵收費豫算千八百三十萬圓が、四年度に比し百十萬圓增加してゐることは何を意味するか！ かくて軍縮剩餘金による減稅を聞かされた國民は今や、減稅とは反對に、權力的課稅を××される。だが權力的課稅徵收の××を受けるものは、勿論、資本家、地主ではない。支配階級への××は、政治的には轉嫁と脫稅とこれが拒否との道が與へられてゐる、經濟的には勞賃の引下、獨占價格の維持或は創設によつて自己の負擔を×××階級に轉嫁しうるのである。見よ、資本家階級は今や株式配當を第三種所得稅から第一種或は第二種所得稅即ち源泉課稅に編成せんと政府に强要してゐるではないか！ 更にまた資本家階級は勞賃の引下、勞働時間の延長を宣告すると共に、各種產業部門において續々共同販賣機關を組織し、以て獨占價格の創設に狂奔してゐるではないか！ 不在地主の合法的脫稅はこの政府が備ましてゐる。

然らばかゝる權力的課稅徵收の中小地主及び中小商工業者に對する打擊は如何？ 彼等こそはかゝる課稅を最も深刻に受け、沒落の途を急

速に迎ふるものである。何となれば、彼等は租税その他の公課を××しえないからである。即ち「租税はある一つの階級が負擔して他の階級が轉しつけると、例へば金融貴族が跋扈する場合の如きにこれを見る。またそれは、地位の關係上、租税の負擔を他の階級へ轉嫁することの出來ぬ——ブルジョア階級とプロレタリア階級との間にある——社會の中間階級を滅すものに相違ない。」（拙譯編「マルクス主義財政特に租税論」、マルクス 税制改革論批判五頁）斯してこの國の中間層は斯る不況に際しての權力的課税によつて急速にプロレタリア化するものと見られる。

更に勞働者、小農民は如何といふに、彼等が課税から脱出しうるは、たゞその階級的××のみによる。だがこの國の勞働者、小農民は、前述の如く階級的に弱い。從つて各種の諸税は結局の所、彼等が絶對的に負擔する所となる。

吾々は今この國の租税を、利潤（利子、地代）に課税する所有課税と、勞賃が負擔する大衆税とに分けるに、前者は所得税、地租、營業收益税、資本利子税、相續税、鑛業税、取引所税、後者は酒税、清涼飲料税、織物消費税、砂糖消費税、關税、骨牌税である。そしてかゝる見地から吾が國の税收入を見るに、大衆税の増加率は所有課税の増加率を遙かに凌駕してゐるのを見る。即ち大正七年度（決算）と昭和四年度（實行豫算）とを比較するに左の如くである。（單位千圓）

	大正七年	昭和四年
所有税	二五三、二四〇	三九〇、六五九
大衆税	二四九、二三二	五一一、五〇六

だが政府の意圖する××××は、前述の如く中間層を急速にプロレタリア化するが故に、右の大衆税の所有税に對する増加率は更に更に上昇するであらう。

政府は軍縮剩餘金が可能なる場合に明年度營業收益税率の引上げ、織物及び砂糖消費税輕減を聲明した。だがそれによる減税が萬が一可能としても、如何に小額なるかは既に明らかだ。加ふるにこの小額減税と云へども、獨占價格が續々と成立されてゐる今日、明らかに資本家階級に對する××に化する。

かくて階級分化は強烈に行はれ、自然的税收入防止の權力的課税徴收は絶對的にも相對的にも無産大衆の課税負擔を加重する。

五

要約しよう。この國の財政は、從つてまた濱口内閣の明年度豫算は、帝國主義的權力機關、日本ブルジョアジーの帝國主義的××政策の經費削減を絶對に許さない、否その膨脹を必要とする。總豫算が計數上縮少しても、それは物價下落に基く評價替へに過ぎず、實質的には更に膨脹することを看取する。從つてまた、勞働者、農民、小市民が絶對的に、この帝國主義的日本ブルジョアジーの經費膨脹の××になることも既に明らかである。吾々は、以上の如く日本財政を分析して、以上の如き展望を抱く。（五年十月六日）

反帝國主義戰線展開の諸問題

米川恒夫

一

帝國主義の必然的發展としての帝國主義××の危機の××は、いまや厳然たる科學的事實である。帝國主義××は、資本主義制の不可避的な結果であり、不斷に行はれてゐる帝國主義政策の繼續的發展の一形態を意味するに過ぎない。ロンドン海軍々縮協定による支配階級の、一應の不和主義的プロパガンダも、更に一段と高まりつゝある軍國主義の生々しい事實の前には一毛の××なだに持つことは出來ない。新たなる國防計畫の擴充は、いますべての帝國主義國家にとつての當面の緊急なる任務である。不生産的な從來の一部分の戰爭武器の縮少によつて、軍國主義の新たなる局面は、より生産的な、より進歩的な武器である航空、化學兵器の擴充に集中されはじめてゐる。レーニンの指摘してゐるやうに、軍國主義は、不可避的な「資本主義の結果であり、資本主義の生命の表現」である。軍國主義の條件、その現實的根據が存在するかぎり百の軍縮會議、千の不和條約も一個の幻映たるより他に仕方がない。

いまや、帝國主義××への推進は、極度の矛盾に充ちた各帝國主義國家の進みつゝある決定的な方向である。コムインテル第六回世界大會の決議に見るやうに、現在の世界狀勢は「戰爭と××との時期」として特徴づけられてゐる。不戰條約、ロンドン海軍協定、國際聯盟のやうな、粉飾的假面の下に、帝國主義國家間の植民地再分割の爲の露骨な葛藤が尖銳な對立を示してゐる。帝國主義國家間の一切の政策は、××準備の爲の、いはゆる「後方の敵」の勢力關係に相應する權力のファッショ化と、植民地及び國內プロレタリア××運動の徹底的な彈壓となつて現はれてゐる。國際的諸對立の、複雜な諸關係を通じて見透される現在の政治的二潮流は、帝國主義諸國家間の對立を通じて切迫しつゝある帝國主義××の危機と、資本主義諸國家內部のプロレタリアートの××化、植民地民族××運動の一段の昂進に見られるプロレタリ

ア××運動の全面的展開である。繼續されてゐた階級闘爭の國際的局面は、資本主義第三期に及んで、最も尖銳な急激化を呈するに至つた。帝國主義諸國家内部のプロレタリアートの××化（一九二九年のヨーロッパにおけるメーデー及び一九三〇年四月六日の「失業反對デー」における米國支那をも含めての武裝的蜂起）ばかりではなく、この二三年以來、植民地プロレタリアートの大衆的蜂起は、植民地のあるところ、その帝國主義支配のあるところ、あまねく全土を蔽してゐる。これらの植民地民族革命運動の地理的分布は、支那、印度、印度支那、××、××、滿洲の××地方、シリア、パレースタインの小亞細亞地方、メキシコ、アルゼンチン、チリー、パラグワイ、ペルー、エクワドル、コロンビヤ、ヴエネズエラ、キユーバ、ハイチ等の南アメリカ地方、フイリッピン、ニユージーランドから更に、エジプト、ケニア、ニヂエリア、ガンビヤ等のアフリカ諸國にまで及んでゐる。

階級闘爭の國際的局面は、一面、帝國主義國家相互間の尖銳な對立と、プロレタリア××運動の抑壓、サヴエート・ロシア攻擊の爲になす共同戰線といふ矛盾に充ちた諸關係を内包しながら、他面、一切のプロレタリア××運動及び民族××運動の廣汎な潮流がそれに銳く對立したところの進行過程である。この二つの潮流は、歷史的な、しかも決定的な存在として闘爭し、前者は、自らその運命を後者の發展によつて解決しなければならない必然にある。

二

プロレタリアートは、資本主義第三期の課するところの重大なる政治的任務を、いま、現實に××しなければならない。現在の瞬間にあつて、帝國主義戰爭の××に對する闘爭は、プロレタリアートの最も緊急な、しかも重大なる任務である。この少しばかりの前置きによつて、我々は、帝國主義の××に對する闘爭及びその××が階級闘爭の具體的な全過程に結合され、その闘爭の國際的戰線の鞏固化の上に××しなければならない、ことを知るのである。戰爭反對の闘爭は、プロレタリアートにあつては、これまで、かゝる闘爭が、充分に遂行されなかつたことゝ、その爲の組織が極めて微弱であつたことからして、一層の努力が集中されなければならない。プロレタリアートは、コムインテルン第六回世界大會が、最前面に押し出したところの「帝國主義戰爭の危機と戰へ！」のスローガンを生ける現在の闘爭において、充分に具體化することが出來なかつた、この缺陷と誤謬とは、××闘爭の戰術上において犯した失敗ばかりではなく、それよりも、階級闘爭の全分野における諸狀勢が決定的な影響を及ぼして來たのである。××的プロレタリアートにとつて、嵐の傷手が未だに回復されない時期にあつて、あらゆる日常闘爭の高められた形態としての反戰闘爭のみが、ひとり進展する根據があらう筈がない。反戰闘爭の組織的發展は、他のすべての闘爭がさうであつたやうに、甚だ屈折した道程

なたどつて來た。プロレタリアートの反戰鬪爭の組織的過程を歷史的に見れば

一、對支非干涉同盟（一九二七年始めから一九二八年七月頃迄）
一、戰爭反對同盟（一九二八年七月より一九二九年十月迄）
一、反帝國主義民族獨立支持同盟（一九二九年十一月より現在に至る）

の組織的發展を示してゐる。「對支非干涉同盟」はコムインテルンの××によつて××的カムパーニアの一部として組織されたものであつた。このカムパーニアは、當時勞働農民黨の合法時代にあつて、大衆的に組織された帝國主義戰爭反對の比較的强力な鬪爭が展開されることが出來たにもかゝはらず、一九二八年三月の事件は、この同盟の鬪爭を半ば骨拔きの狀態にしたのである。××鬪爭展開の爲の戰術及び組織の上には、夥しい混亂が支配したのであつた。「對支非干涉同盟」の組織がやゝ有名無實の形となり、それが、地方的なグループとして分散するに終つた頃、これを全國的に結合して、新黨準備會の手によつて組織されたのが「戰爭反對同盟」であつた。戰爭反對同盟の勢力は、實質においては××地方を中心としたものであつた。が、一九二八年末葉からの左翼運動の組織的××によつて、それまでの戰術上及び理論上の誤謬は、一應克服され、鬪爭は新たに硬化し、より現實的な內容を持つに至つた。しかし、一九二九年の四月事件は、再び、戰反鬪爭の退却を余儀なくしたのであつた。けれども、戰反同盟の活動は活潑に繼續された。戰反同盟の鬪爭の成果は、かくして、その十一月、反帝國主義民族獨立支持同盟の創立によつて繼承されたのである。いま、これらの過去の鬪爭の弱點を綜括的な仕方で指摘すると次のやうになる。

一、組織問題上に現はれた誤謬

反戰鬪爭遂行の爲の組織が、プロレタリア××運動の全組織過程にあつて、いかなる組織的原則に立つものであるか、これらの諸組織―特に前衞組織―との關係がいかに××さるべきであるか、といふ點において誤謬が犯されてきた。反戰鬪爭遂行の爲の組織が、特殊なカンパーニア的××でなければならない、といふことに對する明確な認識は、ごく最近のことに屬する。「鬪爭反對同盟」の組織されてあつた當時、（一九二九年、五月）同盟の組織原則についてのハッキリした認識がなかつた爲、それが政獲同盟の一專門部であるといつたやうな見解が再び擡頭したのであつた。又、反戰鬪爭のイニシアテイヴの問題においても、それに相應した混亂が重ねられた。かゝる誤謬は、最近の反帝同盟によつて、またもや、極左的セクト主義のイデオロギイ的粉飾の下に―內容上の相異はあるが―繰り返されたのであつた。

二、戰術上に現はれた缺陷

戰術上に現はれた缺陷は、殊に宣傳××の鬪爭において、甚だ多くの缺點を見るのである。第一に、具體的な鬪爭の場合にあつて、インターナショナリズムの××××××が不充分であり、最近に至つては、殊に植民地民族××運動に對するアジテーションが××さ

れてゐた。それと同時に、プロレタリア××運動の國際的意義が、その宣傳活動において充分に××されなかつた。第二には、社會民主々義、排外主義、平和主義に對する闘爭が不充分であつた。彼等に對するバクロ戰は、しば〳〵抽象的なアジ、ビラの範圍にとゞまつてゐた。これらのブルヂョア的欺瞞思想に對する徹底的な××なくしては、正しい反戰闘爭の××はありえない。

第三には、アジテーションがまだ〳〵抽象的であり、××的に行はれてはゐない。各階級を包括する廣汎なる大衆に對するアジ・プロは彼等の生活の特殊な條件に××して爲されなければならない。最近の反帝同盟書記局によつて爲された「ルンカンパーニア」の××的アジテーションは、勞働者に理解されても、農民には、理解されず、農民には理解されても、××には理解されない、といつたやうなものであつた。一言にしていへば、アジテーションの××に對する具體的な見透しと、それに應じた特殊なメトーデが(理論的には理解されてゐても)考慮されてゐない。

更に日常闘爭の中にあつて、組織の××化の爲の精力的な闘爭が行はれてゐなかつた。例へば、反帝同盟にあつては、同盟は最初、××的團體のカンパーニアとして組織されたにもかゝはらず、現實の闘爭は何等××的に結合されず、却つて、分散的な形態をさへとつたのである。

三、極左的セクト主義の發展

この傾向は、最近の反帝同盟××支部の内部に現はれた大きな潮流であつた。いはゆる、「反帝同盟のボルシエヴィキ化」の名の下に登場したのであつた。彼等は、反帝同盟の××的原則である(加盟團體を主要なる××要素とする)カンパーニア的形態を否定することによつて、客觀的には、闘爭の孤立化、闘爭の實力化といふ結果を齎らした。かゝる傾向が發展したことは、いふまでもなく我がプロレタリアートの反戰闘爭の陣營が、未だ甚だ微弱であつたを意味する。

更に、反戰闘爭の××化が遲れたことは、これらの組織の××的結合が遲れた理由をも認めなくてはならぬ。例へば、對支非干涉同盟は、當然その一時的カンパーニアたることを止めて、反帝同盟××支部の××の方向に進めらるべきであつたのが、反帝同盟ブラッセル大會においてさへ、それを現實的な問題とする努力がはらはれなかつた。「戰爭反對同盟」も、それらの××的な組織とは無關係に、孤立的に組織されたのであつた。

我々は、こゝに、若干の缺陷を指摘しただけでも、プロレタリアートの反戰闘爭の組織的力が、未だ微弱であり、同時にこのことによつて、これまでの闘爭の缺陷を、いかに清算し、その闘爭の××を、いかに繼承して行くか、そして更に、反戰闘爭をして、いかなる方向に××せしめて行くべきかの問題に當面せざるをえない。廣汎なる大衆が、急速に××化しつゝある現在の狀勢の中にあつて、反戰闘爭の組織的微弱は、何よりも先づ、この任務の遂行を、緊急なるものと爲してゐる。大衆の××化の狀勢に比較しての、組織的力の微弱は問題を新たに提起したものであつた。最近の反帝同盟内部に現はれたセクト主義

は、その動機においては、確かにかゝる傾向の表現であつたのだ。しかし、この傾向は、反帝同盟の組織的鞏固化と、大衆化との爲にとられたのではなくて、これまでの闘爭の諸缺陷への消極的な順應を爲したに過ぎなかつた。反帝同盟の組織的構成要素から加盟團體を除外して、純粹な反帝×のみから同盟を組織してゆくといふ見解は、第一には、一般に、××の力が微弱であつたこと、第二には、反帝同盟が各左翼團體を構成要素として作られたものであつたにもかゝはらず、打ち續く××の爲にその連絡が不充分であり、同盟の活動が、實質上、加盟團體の活動によつて爲されなかつたことと、同盟の活動が半ば孤立化された狀勢の中から發生したものであつた。そして、この傾向は、これらの缺陷の克服の爲であつたのではなくて、これらの缺陷への最も消極的な順應であつたのである。いま、我々は、これらの缺陷を克服して、より強力なる××の展開を準備しなければならない。

三

現在、反帝同盟の再建的な××期に當つて我々は、同盟の組織的原則を、一應、原則的な形で規定する必要がある。しかし、問題の提起に當つて、我々は、「帝國主義に反對し、すべての民衆の政治的社會的解放を支持せんが爲の」××を支持する反帝同盟の組織と、その同盟内部におけるマルクス主義者の活動を混同することは出來ない。しかしいま、我々にとつては、同盟のかゝるものとしての組織が問題であるのではなく、××内部におけるマルクス主義者の××が問題なのである。マルクス主義者は、反帝同盟××支部は、かくあるもの、として論議するのではなく、現在の×××化された狀勢の中にあつて、それに應じた組織的發展の爲には、それをかくあるべきもの、として規定しなければならない。反帝同盟の組織を問題とするに當つて、我々は、國際××に見るやうな合法的な狀態と、その創立が社會民主々義者や平和主義的自由主義者の手によつて爲され、しかも加盟團體としての××××××が、その内部における闘爭によつて、次第にイニシアティヴを獲得して來た事情と、我が國の事情とを區別しなければならない。我が國においては、同盟は、第一に、×××的な狀態に置かされてゐるばかりでなく、その創立の當初において、××組織の指導下にあつた各××的左翼團體(勞働組合、農民組合、政獲同盟、××的新聞社等々)の手によつて作られたものである。同盟の××支部にあつては、同盟内部におけるブルヂョア的要素との闘爭が問題なのではなく、反帝同盟××支部をその客觀的諸條件に應じて、いかに規定し、いかに××させるべきであるかゞ問題の中心點である。我々は、いま、反帝同盟××支部を次のやうに××しなければならない。

反帝同盟××××は、前衛組織の指導下に、その反戰綱領を××的基礎において宣傳××し、且つ、廣汎なる大衆的組織として、勞働者、農民、××、學生、小ブルヂョア層を反戰、反帝の闘爭に××するところの、××的諸團體の××する恒久的なカンパーニアの形である。

かくして、反帝同盟は、××組織の指導下に廣汎なる大衆な闘爭に××し、それを組織的に××するばかりではなく、資本主義諸國家に

おける、あらゆる反帝同盟主義的諸勢力と植民地及び半植民地における反帝國主義的諸勢力とを××して、それを××的な、××的闘爭組織×××××××なければならない。我々は、反帝同盟××××をー××組織がその加盟團體となるのではなくー××組織の×××に活動する大衆的組織として理解する。かつて、このことは「戰爭反對同盟」の××によつて確認せられたばかりではなく、かく規定することによつて、反帝同盟の××は、明確な見透しを持つに至り、より一層の××の硬化と大衆化の方向が開かれるからである。

一方反帝同盟内部のセクト主義的傾向によつて代表された思想は、反戰闘爭の機械主義的認識から出發したものであつた。それ故に、其他の政治的、經濟的日常闘爭と反戰闘爭との必然的關聯を理解することが出來なかつた。この傾向の率直なスローガンは、「反帝闘爭は反帝同盟へ！」といふ言葉である。反戰、反帝闘爭の純粹なる××の爲に、加盟諸團體の除外を企てたものであつた。かゝる企ては、コムインテルン第六回世界大會の決議によつて、定式化された原則と對立するものであるばかりか、戰爭反對の××を、一切の勞働組合、農民組合の具體的な日常闘爭から切り離すことに役立つただけである。同盟は、反戰、反帝の闘爭を、反帝同盟の、同時に、その加盟團體の日常闘爭の發展と××することによつて、大衆のあらゆる階層の反戰闘爭を××し、それを、ひろく××闘爭にまでおしひろめ、切迫しつゝある帝國主義××の危機と、一切の反××的政策に、それを對置しなければならない。大地の底からもりあがるやうな、執拗なる闘爭の一歩一歩を積み重ねることによつて、同盟の鞏固化と大衆化、やがてその合法性獲得への基礎がつくられなければならない。しかし、同盟は、反帝國主義の闘爭を遂行することによつて、帝國主義戰爭の危機と闘ひ、植民地民族××運動及び大衆の日常闘爭を支持し、それを國際的闘爭にまで結合はするが、決して、戰爭反對闘爭の全面的指導者でもなければ、其闘爭を最後まで徹底的に戰ひ得るところの組織でもない。それ故に、同盟内部におけるマルクス主義者の任務が問題となつて來る。

四

戰爭反對の闘爭におけるマルクス主義者の任務、××に關しては、戰爭に對するレーニン主義的態度を最大漏れなく總括し、且つ、それを現在の諸狀勢の中へ定式化したコムインテルン第六回世界大會の「帝國主義戰爭に對する闘爭」のテーゼがこれを示してゐる。同盟内部におけるマルクス主義者の活動は、現在の同盟の内部の事情においては、あたかも同盟そのものゝ活動としての意義を持つ。マルクス主義者は、同盟内部において、××組織の反戰綱領を大衆的に××すべき義務を持つものである。それ故に、マルクス主義者の××は、同盟國際本部の示す反帝國主義と民族獨立支持との目標にばかり制限されてゐてはならない。同盟の闘爭をより××的な戰爭反對闘爭に結びつけ、擴大しなければならない。同盟××支部の規約の中に舉げてある闘爭スローガンは、確かにかゝる努力が反映されてゐる。マルクス主義者は、同盟内部の日常闘爭における宣傳××の活動を通じて、(一)帝國主義

××が資本主義制の必然的結果であることをハッキリと×し、（二）現在の時期における帝國主義××の危機の××な生々しい具體的事實の材料によつて××・××しなければならない。殊に、現在の世界狀勢の中に醸成されつゝある戰爭の諸形態—帝國主義××相互間の戰爭、プロレタリア國家、若くは、社會主義の建設せられてゐる諸國に對する帝國主義反××の戰爭、植民地諸國に對する帝國主義國家の抑壓戰爭、それに結びつく反帝國主義民族××戰爭—に大衆の××をよび起し、（三）いかなる戰爭が、反動的攻擊戰爭であり、いかなる戰爭が、進步的防衞戰爭であるか、更に、プロレタリアートは、いかなる××を××すべきであるかを、明らかにしなければならない。（四）大衆の中へ、常に××の原因に對する明確なる××を植ゑ付け、戰爭は、いかにして根絕されうるか、いかなる條件の下において戰爭は必然に根絕されうるかを××・××し、（五）特に現在の時期においては、帝國主義××のマルクス主義的な見方とサヴエート擁護鬪爭及び民族××運動支持の鬪爭の歷史的な、階級的な意義を××化しなければならない。具體的な日常鬪爭の中にあつて、これらの××××は——プロレタリアートが、戰爭による悲慘な經驗が少いといふだけに—最も執拗に行はれなければならない。

これらの宣傳煽動の××の中にあつて、マルクス主義者は、單に戰爭を解釋し、それに反對し、戰爭××の警鐘を亂打する××ではない。マルクス主義者は、これらの鬪爭の渦中にあつて、戰爭に對するマルクス主義者の積極的××をアジ・プロし、戰爭に對する戰爭、「帝國主義戰爭を×××！」の大衆行動の爲の××××××めなければならない。

しかし、マルクス主義的な反戰鬪爭は、ブルヂョアジイの生々しい戰爭××の「背後の帳」を××することを大きな任務とする。これの徹底的な××の爲には、次のやうなブルヂョア的イデオロギイに對するバクロ××を伴はざるをえない。（一）帝國主義××の危機とサヴエートに對する反××的陰謀を陰蔽せんとする官許平和主義（國際聯盟、ロカルノ條約、不戰條約、軍縮會議）（二）官許平和主義の一分派であるところの右翼、中間社會民主々義及び、戰爭反對の反對ならざる反對論者、左翼社會民主々義、（三）其他一切のブルヂョア急進主義諸團體の代表する平和主義及び個人主義的非戰論—これらの諸傾向は、ことごとく、××の××に對する事實を陰蔽するか若くは、それを過少評價し、平和主義的言辭によつて、戰爭の××をあたかも廻避することが出來るかのやうな幻影を宣傳するものである。これらの傾向に對する徹底的な××を××することなくしては、マルクス主義の勝利はありえない、とするレーニンの言葉を××に××さなければならない。歐洲大戰における、社會民主々義の裏切りの歷史的事實は、我が國の社會民主々義諸政黨の日常鬪爭における裏切りの事實と結合されてバクロされる必要がある。

最後に、組織活動について一言を許されたい。反帝同盟日本支部にあつては、組織活動は、いま最も重大なる當面の任務になつてゐる。反帝同盟日本支部は、未だ實際には、全國的組織にまでは進んでゐない。それに、重要産業・農村・××の間における××的基礎が微弱な爲に、

未だに活潑なる闘爭が展開されえない。このことは、何よりも増して、一日も早く、全同盟員の活潑なる××によつて克服されなければならない。マルクス主義者は、同盟の××××に全努力を傾注し、(一)××的勞働組合、改良主義組合内部の反對派、農民組合、其他の××的グループを加盟團體として××することによつて、ひろく工場、農村に××を持ち、殊に、鑛山、運輸、金屬、化學等々の諸工場を××しなければならない。(二)農村における××について、第六回大會のテーゼは、「農民階級が××の主要階級を爲すことを考慮して、農民の間における反戰活動は、特に××視されなければならぬ」といつてゐる。農民の間における組織は、あらゆる反動的農民組合、在郷軍人會、其他の地方的諸組織の内部に、同盟の××が確保されねばならない。(三)青年層獲得の爲の組織活動においては、ブルヂョア的な青年スポーツ團、ファッショ團、國防的學校等の××の戰術をもつて、他方廣汎なる青年層の組織化を××すべきである。(四)××殊に××の間における組織活動は、重要視されなければならない。××の間における特殊な活動の意義を過少評價する傾向と、それの困難を過重評價する傾向とは排撃さるべきであらう。これらの組織活動の爲に、特殊なスローガンと正しい方針を同盟は、急速に作成する必要がある。(そしてそれは、適齢者歸休×××、×××の組織の方針にも役立つやうな)(五)更に婦人少年の組織特に婦人に對する組織活動は、××である。産業における婦人の地位と戰爭における婦人の役割は益々××になつてきてゐる。(六)其他、同盟にあつては、學生層、小ブルジョア層の組織的確保も、組織的任務の一つである。

こゝに書いた××的分野は、甚だ原則的な範圍に止まるのであつて、問題の「いろは」以上のものでありえない。我々は、いま、同盟の内部におけるマルクス主義者が、自ら、その組織活動の××に立つて、同盟の擴大强化のために、精力的な闘爭を××しなければならない任務を強調すればよい。同盟の擴大强化、同盟の大衆化の爲の闘爭は、同盟のスローガンをいかに××化してゆくかの問題である。現在、同盟が全く非合法的な狀態へ追ひ込まれてゐる事情は、決して、同盟そのものゝ「力」が微弱なばかりなのではなく、我がプロレタリアートの敗北が、未だ決して回復されるに至らないからである。現在の、極めて困難な諸狀勢の中にあつて、同盟の×××は極めて困難な事業である。しかし、この困難は、決して不可能を意味しはしない。同盟は、現在の非合法的な活動を、あらゆる合法運動と××し、合法闘爭の舞臺を最も巧妙に利用することによつて、廣汎なる××を組織的に確保することが出來るであらう。マルクス主義者は自ら同盟の日常闘爭の先頭に立ち、不斷の闘爭を通じて、前衛組織の反戰綱領を×××しなければならない。同盟は、廣汎なる大衆の、反帝闘爭を××する國際的××として、同時に、前衛組織の指導下にその影響を×××する爲の組織として發展されなければならない。かくすることによつて同盟は、はつきりとした部署を持つに至り、ガッチリと結合された階級闘爭の大衆的××力となる。

サヴエート同盟の建設「十五ケ年計劃」

高山洋吉

五ケ年計劃は豫想外の成功をおさめてその前半を了へ、十月一日を以て第三年目に入つた。サヴエート同盟では、この成果を基礎として今、新しい計劃が國家計劃委員會の手で樹立されつゝある。それは、第一次の五ケ年計劃に續いて第二次、第三次の五ケ年計劃を豫定し、この十五ケ年を通じて一大計劃期間となし、その間に「アメリカの生産力を追ひ越し、國内では階級のない共産制社會を建設」しようといふのである。この計劃は未だ討議の最中であつて、計劃としても未だ完成したものではない。が、今この論議の中心となつてゐるN・コワレフスキー氏の私案を通じて案の骨子を述べれば次の如くである「東亞」九月號所載、大竹博吉氏「サヴエート・ロシア經濟大計劃と極東ロシア」による)、——

1、技術と國の生産物の量に於て世界一流の資本主義國に追ひつき、且つ追ひ越す。

2、十月革命から凡そ十五ケ年——第一次五ケ年計劃の終るまでに レーニンの協同組合計劃を遂行し、新經濟政策を完了する。

一

「トウルクシプ」鐵道開通し(本年四月二十八日)、木綿の世界的産地トウルケスタンと穀物供給地シベリアとを聯結してサヴエート國家の全經濟機構に深大なる影響を與へ、中央アジアの半開の地を世界の最新文化と結びつけた。ベーリング海峽埋立計劃が發表された、この計劃の目的は、歐亞—米の鐵道連絡を實現し、南下する寒流を絶つて、シベリア(日本全面積の十倍以上もある)を温帶の沃土にする、にある。そしてその十分な科學的基礎を持つてゐるといふ。さてはまた、國營大農場計劃が實現されて、合衆國のキヤムベル某の所有にかゝる世界最大の農場(面積四萬ヘクタール)の四倍もある大農場が幾つもつくられた。等々——資本主義世界を舉げて恐慌の大波に見舞はれてゐるとき、吾々は西の方サヴエート同盟からは、絶えずかうした聞くも愉快なニユースに接するのである。まことに、社會主義は世界を變革し、地球を變革する。

3、第二次五ヶ年計劃に於てより完成した共產主義形體へ漸次に轉向し、社會主義的經濟形體を展開させる。

4、十年——十五年の再組織の結果、世界に於て資本主義と共產主義勢力の同時的併存のもとに許される範圍で共產制社會の完成された形體を建設する。

この計劃案の思想は、今に始まつたものではない。この見透しは、第一次五ヶ年計劃立案の當初より存在してゐたのである。

「サヴエート同盟に於ける經濟計劃は一般に、從つて就中五ヶ年計劃も亦、既に述べたやうに闘爭計劃であり、既存の經濟的社會的比例、既存の經濟的階級關係を社會主義の方向へ向つて推移させるを任務とする計劃である。それは、吾々の曾孫にして初めて體驗する如き、社會主義へのマヌルイ歩みの計劃ではなくて『歷史的に短かい期間に最も進歩した資本主義諸國に技術的にまた經濟的に追ひつき、それを追ひ越し』そして同樣に可能なる最も短かい期間に私經濟的分子をサヴエート經濟の表面から一掃する、といふ明確な見透しを持つ、强化されたプロレタリア的攻勢の戰略的計劃である。『歷史的に短かい期間』といふのは、決して漠然として、不定な表現ではなくて、この論文の終りで證明しようと試みるであらう如く、略ゝ、十五——二十年を意味するのである。從つて完全に社會主義的な經濟の建設の完了は、吾々の代の問題である。この見透しから五ヶ年計劃は觀察されればならぬ。」*

*Die Internationale, 1. November 1929; L. F. Winow: —,,Das Wesen des Fünf-Jahr Plans."

新しいのは、第一次五ヶ年計劃前半の成果に基づいてこの大計劃實現の具體的な、物質的な基礎が與へられたことである。この大計劃の實現が具體性を得たことである。

然し、この計劃そのものは、未だ未完成であり、計劃案に止まつてゐる。從つて私のこの小論の直接の問題は、何がこの十五ヶ年計劃の立案の基礎となつたか、言ひかへればこの大計劃の出發點、及びこの大計劃實現のための前提は何かである。

二

去る六月——七月に開かれたサヴエート同盟共產黨第十六回大會は、非常に大きな歷史的意義を持つた大會であつた。大會は、現在の新情勢を正しく分析し、それに基づいて新しい政策を樹立した。大會は、現時期を轉換期と規定した、——資本主義諸國にとつてはこの轉換は經濟的沒落に向つての轉向を意味する。現在の恐慌は、今までに起つた世界的經濟恐慌のうち最も深刻な、根深い恐慌である。一方、サヴエート同盟にとつてはこの轉換は工業及び農業の兩面に於ける社會主義建設の飛躍的發展を意味した。そしてサヴエート同盟の社會主義建設は今、新經濟政策の最後の段階に到達した。スターリン氏は、第十六回大會に於ける演說の中でこの段階のことをかう言つてゐる、——「吾々は既に新しい意

味に於ける過渡期を脱出した。吾々は既に社會主義の時代に入つたのである。何故なれば、今日に於ては、たとへ社會主義社會の建設、階級分化の廢絶までには前途なほ遼遠であるとは言へ、社會主義的部分が國民經濟全體の一切の經濟的中心機關を支配してゐるからである。」資本主義世界は××に瀕し、社會主義は××しつゝある。

轉換期に於けるこの發展は、ボルシエヴイキーの黨の豫想の正しかつたことを證明した。ブルジョアジー、社會民主主義者、「左」右の日和見主義者の考へが完全に間違つてゐることが證明された。「組織的」資本主義論やアメリカ「繁榮」論などは一タマリもなく吹き飛ばされてしまつた。ヤング案の經過、ドイツの政治的危機が示してゐる如く、ロカルノ條約によつてブルジョア・ドイツを復活させやうとする試みも、一場の夢に化してしまつてゐる。また、サヴエート同盟の資本主義への後退とか内部的危機とかいふ國際ブルジョアジーや社會ファシスト共のお伽噺が全く根も葉もないことがわかつた。

かうした情勢の導くところは、必然的に、資本主義の一時的「安定」の最後的××、××運動の新たなる昂揚、帝國主義戰爭、サヴエート同盟及び植民地××運動に對する帝國主義的反××××の危險の増大、この危險に對する國際プロレタリアートの×××××である。そしてそれはやがて××××××にはゐない。

かゝる情勢がバックとしてサヴエート同盟は、新經濟政策の最後の段階に入つた。社會主義の段階に入つた。全戰線に亘つて社會主義の全面的攻勢に入つたのである。

そしてこの全面的攻勢の中心政策に基づいて立案されつゝあるのが、所謂「十五ヶ年計劃」(ゲンプラン)に他ならぬのである。

言ふまでもなく、この十五ヶ年計劃の直接の基礎をなしてゐるのは、第一次五ヶ年計劃前半の大成功である。それは、全計劃の内容が四ヶ年で、否、幾多の工業部門に於て三ヶ年若しくは二ヶ年半でさへ、實現される見込みを與へた。私は今それについて具體的な說明を與へるために、十月四日の「東日」紙の紹介するところによつて、五ヶ年計劃第二年の成績を示さう。——

大工業大量產額は、五ヶ年計劃による二〇%の増加豫定に對して二五%の増加を示し、戰前の工業產額水準に比して一七七%となつた。そのうち重工業の生產増加は三八%、輕工業の生產増加は一一%で、大工業の生產増加は極めて高く、遙かに前々年度の増加率を凌駕してゐる。その内譯は次の如し(單位百萬噸)——

(種目)	(生產額)	(増加率)
石炭	四七	一八%
石油	一七	二六%
銑鐵	五	二四%
鋼鐵	五・六	一八%

また電氣動力の生產量は、四三%を増し、最新化學の理論を實現した大發電所その他合計四十箇所が建設された。工業投資資本總額

は四十億ルーブルに達した。

サヴエート同盟の工業は、その發展水準に於ては先進資本主義國のそれより遙かに後れてゐる、けれどもその發展速度に於てはサヴエート同盟に及ぶものではない。黨の中央委員會の政策はこの發展速度を更に一層速め、以て近き將來に於て先進資本主義諸國に追ひつき、追ひ越さうとするに對し、ブハーリンその他の右翼の提唱するところはこの發展速度を緩めよといふにあり、客觀的には明かに社會主義の敵、敵階級を代辯してゐるのである。

また、農業の社會化が五ケ年計劃の基本的內容をなすことも、既に周知のことである。十月革命に於て大土地所有が沒收され、貧農及び中農に賦ち與へられたことが、農民の解放の第一段階であつたとすれば、農業の廣汎なる共同經營化と機械化とによる後れた個人主義的な經營の廢絕は、農民を徹底的に解放するものである。されば、サヴエート同盟共產黨は、一九二二年末以來、この農業社會化を中心政策として採用し、日和見主義者や「專門家」の非難や嘲笑を物ともせず一意この政策を進め、五ケ年計劃の樹立に際しては、その基本的內容の一つとして採用したのである。

黨中央委員會のこの政策は正しかつた。それ故にこそ大衆は――貧農大衆のみならず、中農の大衆までも――中央委員會のこの政策を支持したのである。五ケ年計劃は、その第一年に於て十二萬の農場を共同經營化する豫定であつたが、實際上は六十萬の農場を、卽ち豫定の五倍を共同經營化した。第二年に於ては更に大きな成功が見られた。

右翼は黨の政策を中傷し、攻擊し、中農の代辯にこれつとめた、彼等はこの政策を以て狂氣の沙汰だとか、中農を富農の陣營に渡すものなどと言ひ、この政策は必ず失敗するに違ひないと念を押したものだ。また「左」翼――新しい衣をつけたトロツキー主義――は、建設の成果に眼が眩み、中央委員會の政策を曲げ、奇矯な政策を提唱し、實踐に於て右翼を支持したものだ。

然し、二ケ年の成果は、この點に於ても彼等が完全に誤つてゐたことを明瞭に說明した。

國際ブルジョアジー、社會ファシスト、「左」右の日和見主義者は、口を揃へて建設の困難を數へ上げる。商品飢餓だとか、農民（富農と讀め！）の不滿だとか、黨內の不一致だとか。勿論、社會主義建設の途上には克服さるべき幾多の困難が橫はつてゐる。かゝる一大變革が何の困難も軋轢もなくスラ〳〵と進むものだと考へるのは、狂氣の沙汰である。第一に、社會主義建設のこの成果は、種々の困難、階級敵に對する斷乎たる鬪爭によつてのみ可能だつたのである。けれども、これらの困難は、改造期に伴ふ困難である。謂はゞ、成長のために、前進のための困難である。資本主義世界は今、沒落、或ひは沈滯の困難に二進も三進も行かなくなつてゐるのだ。

そしてこれらの困難を克服する唯一の途は、「全戰線に亘つて資本主義的分子に對して進擊を組織する」（スターリン）ことである。

そしてこの全戦的攻撃の政策は、第十六回大會によつて今後の建設のための中心政策として採用されたのである。

三

私は最後に、この十五ヶ年計劃遂行實現のための前提を問題にした。

サヴエート同盟は、内外の敵及びその代辯者の不斷の攻撃と戰ひつつ豫想外の成果をさめつゝその第一次五ヶ年計劃を遂行して來た。帝國主義列強は、サヴエート同盟に對して一指だに染め得なかつた。都市及び農村に於ける資本主義的分子の絶望的な抵抗も無益に終つた。

第一次五ヶ年計劃の偉大なる發展としての、「十五ヶ年計劃」は、就中――

一、世界一流の資本主義國を追ひ越し、

二、新經濟政策を完了し、

三、更に完全なる社會主義形體に移り、そしてその結果、

四、世界に於て資本主義と共産主義勢力の共存の下に許される範圍で共産制社會の完成された形體を建設する、――

ことを豫定してゐる。

さなきだに危機に瀕してゐる世界資本主義にとつては社會主義經濟體制の、世界資本主義經濟體制からの決定的分離は、そしてそれだけで、致命的な打撃を意味する。既に現在、國際ブルジョアジーが、サヴエートの「穀物ダンピング」などと騷ぎ立て、サヴエート同盟に對して英米市場の「攪亂」の罪を鳴らしてゐるのも、國際ブルジョアジーの必死の「自衞策」に他ならぬ。まことにプラウダ紙の言ふ如く、九月三十日の電文の大意)、世界市場の穀物の價が一割しかしめてゐないサヴエート穀物によつて世界市場が攪亂されるとすれば、それは資本主義自身が恐慌によつて二進も三進も動けなくなつてゐる結果だ(罪は資本主義そのものにある)。その昔歐洲大戰前、ツアールのロシアは世界市場に於ける穀物の四割(今の二倍)を、而かも「砂糖で豚を飼つても割に合ふ程の」廉價で供給してゐた。それでも國際ブルジョアジーはダンピングなどとは言はなかつた。當時イギリスは時の敵ドイツのダンピングを騷ぎ立てたものだ。……吾々は、彼等のこの反撃宣傳のうちに、かつてイギリスのドイツに對して抱いた決意を今國際ブルジョアジーがサヴエート同盟に對して新たにしてゐる事實を看取すべきである。

「十五年計劃」はまた、國内の資本主義分子を完全に清掃することを豫定してゐる。資本主義的分子の最後の隱家である農村から彼等を階級として絶滅させることを豫定してゐる。この政策は、彼等資本主義的分子の更に絶望的な反抗に遭遇するに違ひない。これら資本主義的分子の思想的代辯者たる「左」右の日和見主義者は、彼等の主人の意を體し、その時々の必要に應じて樣々な衣に身を裝ひつゝ、中央委員會のレーニン的政策にタテつくに違ひない。また、この兩者の間を調停する調停派分子は大衆を欺瞞しこれらの日和見主義者を助けるに違ひない。スターリン氏は、全線的攻撃政策遂行の必須な前提として前掲の演説の終りでい

つてゐる、——

「任務は、將來に於ける非妥協的な二戰線鬪爭、即ち小ブルジョア的急進主義を代表する「左」翼と小ブルジョア的自由主義を代表する右翼との兩者に對する鬪爭の繼續である。任務は、將來に於ても黨內の調停派分子、二戰線に於ける決定的鬪爭の必要を理解せざる分子、若しくは理解せざる如く裝ふ分子との非妥協的鬪爭の繼續である。」

一國に於ける社會主義の勝利は可能である。然し乍ら、その勝利の最後的保證——「共產制社會の完成」——は、×××××。「世界に於て資本主義と共產主義勢力との同時的併存の下に許される範圍で共產制社會の完成された形態が建設されるは、同時に、資本主義存續の××的瞬間である、この計劃の實現は、ヨロメキかけてゐる世界資本主義體制に××の×××××××ものである。帝國主義列強に、サヴェート同盟に對する封鎖、干涉、使嗾、攻擊を幾十倍化して、「人類の文化の擁護」の名に於て、世界資本主義體制維持に當るであらう。社會民主主義者は、彼等の主人達のあらゆる反××的行動のために勞働者大衆を動員し、彼等の主人達のために「最後の奉仕」をしようとするであらう。

偉大なる「十ヶ年計劃」の實現のためには、これら內外の敵に對する非妥協的な鬪爭を前提とする。そして、全××のプロレタリアートによるサヴェート同盟の擁護、防衛は、その××な條件であり、保證である。

世界經濟恐慌渦中の日本

片山潛

金融資本は、恐慌の中に日本の支配的勢力となつた。金融資本の強化は、産業の合理化と、産業=及び商業資本のトラスト化と、多く大資本に呑み込まれて了つた小企業の合同とによつて遂せられた。日本の帝國主義は、産業を總動員し、陸海軍の兵力を著しく擴張することによつて、來るべき××戰爭と國內の×××とに全力を擧げて準備してゐる。日本の帝國主義は、すべてをこの目的に從はしめ、そのために勞働者農民をおそろしい搾取に晒してゐる。日本は、次第々々に、重要な一環として、世界經濟と資本主義の世界恐慌との連鎖に這入り込んで行きつゝある。

日本は、世界戰爭中の殷盛時代の後、既に幾度か恐慌を經て來てゐる。この恐慌の最初のものは、一九二〇年三月十五日の取引所大恐慌を頂點とした。それは、ニューヨークに於ける最近の取引所恐慌に比較すれば、規模は小さかつたが、日本の如き國にとつては、その影響は大きかつた。第二の恐慌は、一九二三年、この國が一九二〇年のときの打擊から恢復しないうちに襲ひ、東京及び横濱におけるおそろしい震災と關聯して起つた。第三の恐慌は、一九二七年四月、銀行取付といふ形をとつて、例へば十五銀行、臺灣銀行のそれの如き無數の銀行の破綻といふ形をとつて起つた。

日本は、強力な工業國に發展してゐながら、××的恐慌を經過しつゝあると言ふことが出來る。その經營や工場は、既に一九〇七年に於て、年額二十五億九千九百十四萬九千圓に上る價値の農業生産物と年額十二億五千八十萬圓に上る價値の繭、海草、鉛及び鑛物の生産とに對して六十九億四千七百九十四萬八千圓以上の價値の商品量を生産してゐた。然し日本は、その欲

求を充たす、重要な工業原料、例へば鐵、棉花、石油、ゴム等等の如き、現在最も重要な工業の原料を十分に持つてゐない。日本は常に、就中原料問題が殆んど全く外國に依存してゐるといふ理由で、恐慌に脅かされてゐる。そのことは、既に、この前の世界戰爭の經驗が證明してゐる。日本が外交上成功してその結果アメリカの軍隊をシベリアから撤退させるや、大統領ウィルソンは日本への鐵の輸出を禁じてこの一撃に仕返しした。その結果日本の鋼鐵工業に全く破綻を來し、長い間その生產を停止せねばならなかつた。運命の皮肉は、日本の工業をして、その原料探求に際して、その競爭者若しくはその屬領に仰ぐを餘儀なからしめてゐる。それ故に、恐慌の脅威は絕えず日本の產業の多くの部門に蓋ひかゝつてをり、そして日本に原料を輸出してゐる或る國が、この輸出を制限するか、若しくはアメリカの場合の如く、全く停止でもすれば、恐慌の脅威は現實に恐慌となるのである。然しまた、日本の經濟には內的矛盾もある。對アメリカ事件の經驗以來、日本は絕えず、自國の鋼鐵產業に對する自國の原料の供給を保證しようと努力し、そしてこの方面では今までに既に多くのものを得た、が然し、經濟的性質に基づく不可避的困難は克服すべくもなく、この政策を破綻させてゐるのである。

日本の產業は、他國に依存してゐる限り、著しく動搖した、望みなき狀態にある。國の過剩人口が增すにつれて、內的矛盾は益々尖銳化しつゝある。人口の增加は、年々、七十萬乃至八十萬に達してゐる。日本は增大し行く自國の人口を養ひ得ず、その屬領（朝鮮及び臺灣）から米その他必要な生產物を搾り出さねばならない。國の住民は飢餓に瀕し、且つ高率の地代と稅金とによつて骨の髓まで搾り取られてゐる。その上日本の××主義はこの抑壓と搾取とをなほ强めてゐる。その結果、階級鬪爭は日に〳〵激化しつゝある。濱口反動政府は、××する戰爭××のすべての負擔と出費とをプロレタリアートと農民の肩に轉嫁しようと努力してゐる。かゝる事態にあつて日本が最も多くアメリカに依存してをり、且つ開始されたアメリカ恐慌の影響を最も著しく蒙つてゐる事實は容易に理解出來る。尤も日本の恐慌は既に始まつてゐたので、アメリカの事件はたゞそれを激化させたに過ぎないものであり、金解禁亦事態をなほ著しく複雜にしてゐるのは明らかだ。

日本の政府當局の經濟政策の中で、最も矛盾に滿ちてゐるのは、一九一七年九月四日以來アメリカの例に倣つて實施されてゐる金輸出禁止である。當時日本は最も有利な金融狀態にあつた。蓋し、一九一五年より一九一八年までのあひだに外國貿易

の輸出超過は十四億以上に達し、その上日本は海上保險のプレミヤム等として十三億八千萬圓を、總計二十七億圓を受け取つたからである。然し、金輸出禁止は、日本の經濟に大きな損害を與へた。商品の價格は騰貴し、幾年かの間に輸入は輸出を超過したのである。

濱口政府は、一九二九年十一月二十一日、一九三〇年一月十一日を以て金輸出禁止を解除する旨を聲明した。そのための準備に政府は、日本銀行の助けを得て、一九二九年七月以來株式證券を買ひ集め、一方の在外正貨準備を八千三百萬圓から二億三千七百萬圓に增した。金解禁の效果如何は何びともこれを正確に示し得ないが、物價が不可避的に下落するであらうといふ一事は全く明瞭である。下落は、平均二〇%に達するであらう、蓋し日本の價格はイギリスやアメリカに於けるよりもそれだけ高いからである。

物價下落は、既に六月二十五日から十二月十七日までのあひだに、明瞭に見られた。吾々は、六月といふ月は田中政府が金解禁は延期されるであらうと聲明してから漸く三週間を經たばかりであつたことを想起する。而して略ゝ同じ期間を經た後、濱口政府は、一九三〇年を期してこの禁止を解除する旨を最後的に聲明したのである。

既に金解禁を見越して、圓價は一五乃至二〇%下落した。金平價の恢復と共に爲替相場は二〇%騰貴したが、このことは金流通の一般的制限、勞働者階級の狀態の惡化、及び就中失業の增大を意味する。吾々は既に、工場や經營に於ける勞働者の大衆行動を目擊してゐる（新聞は、合同紡績に於て十二月十八日に勞働者の半數―三千五百人―がさうした騷擾に參加したと報じてゐる。）

前述せる三つの恐慌が小企業の負擔に於て金融資本を××せたと同じく、爲替相場の方面で採られてゐる諸方策もこの國の信用授與者と大資本家とを×らせ、勞働者及び農民の大衆と產業界の小ブルジョア的部分を×しますであらう。

爲替相場の恢復は、その全重味で、國民大衆を、主として勞働者、農民及び小ブルジョアジーを壓する。吾々は既に、例へば大阪の合同紡績會社の如き無數の企業に於ける勞働者の大衆行動を指摘した。今吾々は、製絲會社が十二月十五日を以てその九十二工場の中五十一工場を休業させ、一月十五日を以てこの會社の他のすべての工場を休業させる決議をし、生絲生產を二萬六千貫に制限しようと試みたときく。加ふるに組絲業者と綿絲業者とは、その生產制限を決議したではないか。製紙やセメントその他の工業に於ても狀態は全く同じい。これらすべては、失業を增大させ、就業勞働者間の競爭を激化させ、更に賃銀を

引き下げ、勞働時間を引き延ばし、そして搾取をより强化する。

濱口政府は、去年、金解禁と共に(一)産業の合理化(二)産業發展の助長(三)工業及び商業のすべての部門に於ける勞働能率の增進、(四)土地の收益力の增進及び(五)鐵道運賃の緩和、のための方策を講ずる約束をした。政府は、全力を擧げて、俵商相の努力によつて作成された計劃に從つて合理化を遂行するやうに要求した。事實、この計劃は、大資本の支持を意味し、それは國營事業を民營に——勿論名目價格で——移すことに、大資本の手に移る企業を整理するに際しての援助に、資本主義的合理化による勞働能率の增進に、政府による補い、そして優良な企業を奬勵する目的を持つ工業の監督に、現はれてゐる。これらすべては、大資本を支持するために行はれてゐるのであるが、而かもその出費は勞働者の肩に××されてゐるのである。

ロンドン、ニユーヨークに於ける一億圓の外債引受の助けでなされた國爲替相場の人爲的引上げについて言へば、これは對外的方策に過ぎない。事實上この國は金解禁の準備をまだしてゐないのである。日本に對して、例へばイギリス、スウエーデン、オランダ、ベルギー、フランス等、他の多くの國々が金平價を恢復してゐる。これらすべての國々はベルギーとオランダとを除いて、金解禁の結果、物價慘落、失業の不斷の增大及び貿易のバランスの不利な狀態等、無數の困難に逢着した。これらすべての國々に於て勞働者階級がこの現象の負擔を背負ねばならなかつたのは明かである。日本に於ては、ブルジヨアジーは、一九二九年の六月に百圓が四十三弗になつたとき、舊平價に向つて努力した。日本の物價はアメリカのそれより二〇%高かつたので、それは不可避的に物價下落に導かざるを得なかつた。だが日本には、金輸出禁止の影響が他よりも鋭く且つ敏感な特別の原因がある、それはアメリカ恐慌が不可避的に日本の恐慌をも激化させるからであり、玆に日本の對米貿易關係は、極めて大きな意義を持つ。

絹工業は、日本では著しく發達し、繭をとるだけに二百萬以上の家族が從事してゐる。日本は世界で生絲の主たる生産者である。橫濱は、この生産物の世界價格を統制してゐる。而してこの日本の絹の販路は主としてアメリカであり、それ故にアメリカの經濟狀態はこの産業部門の狀態に著しく影響する。合衆國に始まつた恐慌は不可避的に日本に、だが就中絹工業に影響せずにはゐない所以である。吾々は言ひ得るであらう、——日本は、アメリカ恐慌の結果廉い棉花を手に入れるであらうが、棉花の輸出手續は銀相場の下落に著しく苦しむであらう。かくて日本は、舊金平價への復歸と關聯して、そしてアメリカ恐慌の

影響の下に困難な時代に當面してゐるのである。合衆國のこの恐慌が一般的な産業恐慌に轉化する程度に應じて、その影響は、他の國々に於けると全く同じく、日本でも益々強く感ぜられるやうになるであらう、そしてそれは現在既に失業の一般的な增大によつて證明されてゐる。

勞働者階級の狀態は、絶えず惡化しつゝある。工場法が適用されてゐる私營企業に於ける勞働者數と國營企業に於ける勞働者の數とは減退してゐるが、この法律の適用されてゐない工業勞働者の數は增加の傾向を示してゐる。一般に勞働者の數は一九二六年から一九二八年までに減退してゐる。

日本に於ても、他のすべての資本主義國に於けると同じく、最も重要な問題は失業の問題である。この失業問題は、外國資本の競爭、現政府の緊縮政策、並びに外國資本とのその競爭に於て資本家に自由を與へるための産業合理化の強化と金解禁とに直接關聯してゐる。これらすべては、直接間接、勞働者の搾取の強化による金融資本の確立を促し、そして著しい程度に於て中小企業家の崩壞に導く。昨年の六月まで、濱口内閣が組織されるまで、急速なテムポで進んで來た中小企業の萎縮は、これらの經營の勞働者を激しい鬪爭に導き、小さくはあつたが、ストライキ運動を惹き起してゐる。

一九二九年の一月より十一月までに、一、一二四のストライキ鬪爭があり、その參加勞働者數は十二萬六千七百五十人を算したが、それは、前年に比してストライキ件數に於て四四五件、參加勞働者數に於て五萬二千二百五人の增加を意味する。失業者數は、絶えず增加した。毎月出る日本銀行の勞働統計は、明瞭に、就業勞働者數の減退を示してゐる。然しこの統計はたゞ、五十人以上の勞働者を使用する工場のみを含み、五十人以下の勞働者を使用してゐる企業についての材料を與へてはゐない、けれ共、これらの企業に於ては、小さなストライキ鬪爭の數の增加が示してゐる如く、使用勞働者數の減退は、大中工場に於けるよりも遙かに著しいのである。勿論五十人以上の勞働者を持つ工場に於ても、就業勞働者の數は、低下の傾向を示してゐる。

生産に從事してゐる勞働者の數は、機織工場と紡績工場に於て減退してゐる。此處では合理化が行はれて勞働が強化されてゐるからである。

紡績工場には、一九二六年末に於て、十八萬二千九百人の勞働者が使用されてゐたが、一九二八年末にはこの勞働者數は十四萬六千四百五十二人に減じた。一九二九年七月に於ける紡績工場の深夜業廢止、技術的裝置の改善、生産能力の增大、及び全合理化は、勞働者階級の××に於て行はれた。金解禁によつ

て惹き起された沈滯の結果、紡績業者はその生産を一〇パーセント制限し、一萬六千人の勞働者を街頭に拋り出さうと決議してゐる。

吾々は、二、三の部門に於てはまた、勞働者數が增加してゐるのを認めねばならない、――即ち、この二年間に就業勞働者數は十九萬四千二百人增加した、然るに一方新たなる勞働力の過剩は一九二八年末までに四十三萬六千人增加した、從つて人口增加の結果、二十萬四千八百人といふ勞働力の過剩があつたのである。失業者數は、或ひは多く或ひは少く言はれてゐて、その計算の堅い根據はないのである。

解雇された鑛山勞働者のうち歸農するものは僅かな部分に過ぎないが、一方、工場勞働者は益々多く、工場で感染したあらゆる病氣を持つて歸農し、農村の過剩人口を殖しつゝ、生活を、而して就中、農民を搾取する大地主に對する鬪爭を、困難ならしめてゐる。

農業に於ける恐慌は日に〱尖銳化してゐるが、寄生的な地主は益々小作農を搾取し、小作農から高い借地料を取り立てながら、その收入、農民から搾り取つた彼等の利潤をば、農業の改善には用ひないで、工業に投下する。その結果、農村人口は益々窮乏化し、都市の資本家と貧農との間の階級鬪爭は極度に尖銳化して、秋田や奈良や富山の例で見たやうな爆發が刻一刻と脅かしてゐる。

農民の窮乏狀態は、ブルジョア政府が地租政策の問題で地主に與へた保護によつて著しく强められてゐる。

政府は最初から(一八六八年に於ける革命運動の發展以來)、當時ブルジョア政府の唯一の財源であつた地租に依存してゐた。革命政府は德川幕府を倒して德川に屬してゐたすべての土地を沒收し、また二、三年のうちに諸侯はその藩籍を政府に奉還した。一八七三年、耕地はすべて登記され、測量され、ついですべての土地の地價が米の收穫に從つて定められた。米價は當時一石四圓乃至四圓五十錢と決められ、一等地の平均地價は、一段五十圓と決められた。この價格に從つて、政府は三分の租稅を徵收してゐた。地租に關する最初の法律が發布されたときは、土地の評價が五年每に改められ、而してその際最近五ヶ年間の米の平均價格によるとされてゐた。けれども、今日に至るまで土地の評價は一度も改められずにゐるが、その代り地租は三分から四分五厘に高められた。

土地の評價に關する規定と、稅率の確定とは、近代資本主義の法則に基づく土地の純粹の資本化を示すものである。而して、土地の評價が、五年每に改められる筈であつたのに、五十年以

上も改められなかつたといふ事實は、地主保護政策の最善の證據である。土地の價値は年を逐ふて上り、而して土地の資本化は益ゝ進み、そこから農民の搾取も年々強化され、そして農業爭議が激化して行つた。土地からの全收益は一九〇七年には八億五千七百萬圓であつたが、地租は同じ年に八千五百萬圓を少し缺けてゐたのである。一九一七年には、全收益は六億四百萬圓に上り、地租は七千二百八十萬圓に上つた。一九二八年及び一九二九年には、全國家收入はそれぞれ二十億五百萬圓及び十七億七千二百萬圓であつたが、地租は六千七百八十萬圓及び六千三百六十萬圓に過ぎなかつた。



筆者近影 第七十年誕生記念の日(モスコウにて)

男子の普通選擧權に關する法律によつて、土地占有者(Bodenbesitzer)——地租を納むるものの一定數——は、議會の選擧權及び被選擧權を得た。田地——米田——は、年々確實な收入を得る資本投下の最適地である。地主(bodeneigentümer)は、過去に於て議會の壓倒的多數を占めてゐたとは言へ、階級として何等政治的勢力を持つ

てゐない。彼等は地租引上げに反對することが出來ただけであつた。現在、金融資本の支配の下に於ては、彼等は何等政治的要因をなしてゐないのである。彼等は、ブルジョア的＝經濟的勢力の中で解消して了つた、そして彼等の唯一の任務、彼等の目的は、貧農（それは一九二七年に於て百四十九萬五千六百七十六家族であつた）、就中、小作人（それは一九二七年に於て二百三十二萬八千七百三十九家族であつた）を搾取するにある。小作人及び貧しい半小作人――これこそ地主に對する來るべき闘爭に於ける唯一の××的要因である。而して事實、地主と小作人との間の對立と爭ひとは、益々尖鋭化しつゝある。

日本の農民は、一八六八年以來、搾取者、封建領主に對し、また新地主(neue Grundherren)に對し、暴動と闘爭との永い歷史を過去に持つてゐる。そのときまでは、すべての農民は封建領主の奴僕であつて、彼等農民はこの領主に對して自分の收獲した米の五割乃至六割を納めねばならなかつた。彼等は、政治的權利などは少しも持たなかつた。彼等は、彼等が耕作してゐる土地の耕作權を賣つたり、または讓渡したりする權利を持つてゐなかつた。その狀態を改善するための彼等の闘爭手段は、封建領主に對する暴動で、その暴動に際しては絕望的になつた農民が、竹槍、犁、松明等の外には何の武器も持たずに封建領主の城を目掛けて押し寄せたものである。彼等は、暴動の合圖村の寺の鐘を利用した。十五世紀に始まる封建制の時代に於て八百の農民暴動が勃發し、その際運動は往々大きく擴がり、地方一帶が起ち、封建的傭兵たる武士に對する闘爭に身を投じたのであつた。暴動は大部分その目的を達したが、前衛や指導者は、おそろしい刑罰や拷問に遭ひ、絞刑されたり遠島の刑に處せられた。一八六八年の革命後も、最初の十二年間に三十七の農民暴動が勃發したが、それは新政府に對する不滿によつて惹き起されたものであつた。

一八八三年、現行土地法令が發布された後、農村人口は次第に分化し始めた、――地主、自作農(baeuerliche grundeigentümer)、小作人、及び、極く僅かの土地を持ち、そして糊口を凌ぐためにはなほ土地を借りねばならぬ半小作人に。土地を持つてゐる農民は、所有者心理と所有者的氣持とを持つてゐるが、この動搖した層は、中立化せしめられるか小作人の側に引き寄せられるかせねばならぬ、何となればこの小作人のみが日本の農村の戰闘的××的な分子だからである。

地主と小作人との間の爭ひは、益々鋭い形體を採つてゐる。一九二七年は千六百五十五の紛爭があり、それには一方に一萬九千三百三十四人の地主と他方に七萬一千七百五十人の農民と

が參加した。一九二八年にはこの衝突は千八百四十四に增加し、それに關係したものの數は地主一萬九千二百四十七人、農民七萬二千八百七十五人に達した。一九二九年に於ける當該の數字は尠いが、鬪爭は遙かに銳い形體をとり、階級的性質を帶び、そして往々血の衝突を以て終つた。

日本の勤勞農民の動搖は今日では大衆的性質を帶びてゐる、卽ちそれは純粹に經濟的な攻擊から政治的攻擊へ、否、××的攻擊にさへ變つてゐる。その特に明瞭な例を擧げる、——

一、一九二八年十二月、宮崎市に大衝突が起つた。全市民が縣廳襲擊に參加した。この大衆行動で注目すべきは、市の全消防隊が裝具をつけてそれに參加したといふことであつた。××は無力で、豫かじめ約百八十名のものを逮捕した後、行動の指導者を逮捕した以外には何もなし得なかつた。

二、一九二九年一月八日の夜、岐阜縣の七ヶ村の農民三千五百人が九百人の××と衝突した。原因は、農民の水田灌漑のために河中に堤防をつくることに關して生じた紛爭であつた。その際特徴的なことは村役場が最初のうちデモに加はつてゐたことであつた。やがて縣知事は××を救援に召集し、そして老人や婦女子をも含めて數百名のものを檢擧した。農民は高價な犧牲を拂つて初めてその目的を達することを得たのであつた。百八十名の農民が獄に投ぜられ、多くのものがおそろしい××を受けた。

三、秋田縣五味堀の小作人百二十名は、彼等が五ヶ年間借地してゐた地主庄司家と小作料支拂について爭ひ始めた。やがて××との血の衝突となつた。××は警官四十名に指揮された。警察は、××して不滿の農民に與ひかゝつたが、小作人は武器をとつてその指導者を擁護したゝめ、彼等の指導者を捕縛するを得す、その際九名の××が重傷を負つた。そこで××は、百三十名一隊となつて、暴動を起した農民の首謀者を捕えようとしたが無益に終つた。婦女子をも含む武裝農民は、竹槍や石以外の武器を持たなかつたにも拘らず、××のすべての攻擊を巧みに擊退した。警察は、全力を擧げて庄司家を擁護した。一九二九年一月廿六日に起つた鬪爭は、結局、主謀者の捕縛を以て終りを告げた。然しそれにも拘らすこの鬪爭は、封建制の時代の模範に倣つて純粹の米騷動であつた。

四、十月十八日、高知縣の漁民一萬人は、縣廳の所在地たる高知市に押し寄せ、大衆的示威運動によつて、當局が或る企業會社に發動機船を用ひて漁獲する許可を與へたことに抗議し、縣會を守つてゐた××との無數の衝突を見た。公園や寺院に陣取つてゐた漁民の示威運動は、縣會の前で幾日も續けられた。彼等はその目的を達したが、五百名のものは捕縛されて起訴されてゐる。

五、富山縣神通河畔の漁民五百餘名は、縣廳に襲擊し、警察との血の衝突に多數の××が負傷した。この衝突は、縣會に於ける民政黨員と政友會員との間の毆り合ひとなつた。漁民は、或る電氣會社に對して、その發電所が集つて來る魚を追ひ散らすことによつて彼等から生活の途を奪ふと言つて不平を持つてゐたのであつた。激昂した漁民は、資本の利益を擁護する××との衝突に於てその鬪志を示したのである。

六、東京では市電從業員が罷業した。最初彼等は十二月六日に仕事をやめることに決めてゐたのであつたが、その後、提出された要求

に對する市當局の回答を十二月九日まで待つことが決議された。然し、左翼の役員達は祕かに鬪爭準備を行ひ、十二月五日の夜から六日にかけてストライキに入れといふ指合を發した。その結果、市電従業員とバス従業員との總罷業となつた。ストライキは、賃銀を二割引下げようといふ市當局の決意に對する回答であつた。ストライキは秩序整然と行はれて、警察はストライキ指導部を探し出すことさへ出來なかつた。早朝勞働者が集合することになつてゐた場合も完全に祕密に附して置くことが出來た。堀切市長は、罷業者に向つて妥協を提議した、——即ち、賃銀引下げは一割に止めて置くといふのである。それは罷業者の正しい勝利であつた。罷業中の賃銀は支拂はれ、解雇された十二名のストライキ指導者は復職した。

これらすべての例は、搾取者に對する勞働者農民の鬪志の最善の證據である。日本は、國際勞働者運動の一般的××的昂揚の圏外に立つものではない。大ブルジョアジーと反動政府とは、恐慌の重荷を勞働者農民の肩に轉嫁し、以て恐慌のこれ以上の擴大深化を喰ひ止めるために、すべてを賭してゐる。……(中略……)

金解禁後、そしてアメリカ恐慌の影響を受けて、この國の經濟生活に於ける矛盾は尖鋭化し、××的勞働者及びその組織に對する白色テロと社會ファシズムの攻勢とは增大してゐるのである。……(以下略)……

シャルル・モーラスと現代

柳澤健

○

今から二年程まへに上梓されて、今日では既に十萬部近くの發賣を見てゐるだらうと言はれてゐるピエル・ガクソツト Pierre Gaxotte の名著「佛蘭西革命(ラ・レヴオリユシヨン・フランセーズ)」は、從來巷間に出た夥しい佛蘭西革命史に對して新らしい一時代を切つたものだと言はれてゐる。然し、過般の大戰で西部戰線にその命を捨てた若い歴史家オーギユスト・コツシヤン Auguste Cochin の企てた事業を知る者にとつては、未完成で終つたコツシヤンの著作を、このガクソツトが完成したのだとも見做し得るであらう。この意味でむしろコツシヤンこそ、佛蘭西革命史の研究者として新時代を開いた人と言へるのである。

コツシヤンの佛蘭西革命史觀の特色を一言にして説けば、今までの革命史家の大部分が好んで採用してゐた唯物史觀に大いなる打撃を與へたといふ點であつた。從來の佛蘭西革命史家が殆んど與つて當時の革命の起因を説くのに財政の問題、經濟の問題、貧富の問題にその主力を集むる觀のあつたのを、コツシヤンは誤謬若くは誇張なりとして排斥し、その代りに革命の眞因を單純なる思想問題の起伏に歸さうとしたのである。即ち、コツシヤンに依れば、唯物的に見て當時の佛蘭西の民衆は數百年に亙つて確立してゐたその王政を倒壞すべき何等必然の事由は有つてゐなかつたのである。それならば、何がブールボン王朝を倒すことになつたのか? 思想、思想、思想、……それ以外には何物もなかつたのだ。内は宮廷自身のなかに巣喰ひ、外は巴里は固よりリオン、マルセーユ、ナルボンヌ、レンヌ、トウールとあらゆる地方の大小都市に網を張るに到つた所謂自由思想

の主義者の集團——それをコッシャンは Sociétés de Pensée の言葉をもつて呼んでゐる。——これが、白蟻のやうに王政といふ大殿堂の基礎を壞し初めたのだ。殘餘の仕事は、風の一吹きで足りる。その風の一吹きを、今迄一生懸命になつて研究してゐたのが、滔々たる内外の革命史家だつたのだ、唯物史觀爲能の史家だつたのだ……。

コッシャンは斯くして、一七八九年の革命から引續いて今日に到るまでの佛蘭西の政治運動の左翼と右翼との對抗、——といふよりも左翼の勝利と右翼の敗北とを、「思想」の勝利と、「無思想」の敗北とに解さうとしてゐるのである。

○

ピエル・ガクソツトが『佛蘭西革命』の著書に描き出してゐる革命の原因觀は、その資料の豐富さとその解釋の透徹さとでコッシャンが説いて到らなかつた境地まで侵入して、こゝに史上の燦然たる紀念塔を完成してゐるのを見るのである。

ガクソツトに依れば、佛蘭西革命の決定的の原因は二つあり一はヴォルテール、ルッソーの播き付けた（それも先づ宮廷のなかに！）自由思想の種子がこれであり、他の一はネッケルは固より彼に前後する各大藏大臣の採つた租税政策（殊にその徴税方法）の拙劣だつたことがこれである。これ以外には、革命にまで事態を招致するやうな事由は（殊に經濟的の！）全く無かつたのである。民衆の貧窮？　否、それどころか革命勃發の十年以前のごときは、佛蘭西の過去の歴史でも嘗て見なかつたほどの夥しい富が上下に充溢したのではなかつたか。支配階級——宮廷の豪奢？　否、その費用を今の共和政治の政府乃至政黨政治の政府の費やす夥しい國帑に比較しても見よ。殊に、選擧の度毎に費やすその驚ろくべき巨數に比較しても見よ。支配階級の壓制？　否、それどころか支配階級自體が、ルッソーやヴォルテールやの思想に「眼覺め」て、その特權の重荷から解放されるのを待ち望んでゐるといふ狀態ではなかつたか。民主政治といふもののその實金權政治でしかない今の議會制度の生み出す壓制振りに比較しても見よ。それならば、治者と被治者との間の融け難き階級的反目でもそこにあつたといふのか？　否、あの斷頭臺の露と消える數年まへまでは、女王マリア・アントワネットを、「全巴里が戀してゐた」のではなかつたか。

ガクソツトは、佛蘭西の王政を亡ぼしたものは、實は外ならぬ王室自身の手であつたことを、明かにしてゐる。王室が——それを取り卷く貴族と僧侶とが、先づ誰よりも初めにルッソーを讀み、ヴォルテールを讀んだのだつた。人間は總て平等であ

るべき筈だといふ思想が、門閥の治者階級を眞先に克服したのだ。それが濟んでから、地方の貴族へ、地主へ、僧侶へ、……と克服の手を擴げて行つたのだ、民衆が、――被治者階級が、何も別に要求を感じないのに、宮廷を中心とした上層階級では元來平等であるべき筈の人間に治者と被治者と傳統的に分れてゐるのは、自然に反し正義にもとると言ふ風に覺醒し初めたのだつた。彼等は、治者の特權（然し、それは何といふ重い義務だ！）の上に坐してゐることに、極度な不安と焦燥とを感じてゐたのだつた。民衆が彼等を攻撃するまへに、彼等は自己内心の「敵」に苦しめられてゐたのである。否、何とかして特權を失ひたいと焦つてさへゐたのである。觸れなば落ちなんとする狀態、――これが、一七八〇年代の佛蘭西の支配階級の容氣だつたのだ。

觸れるには事を缺かない。その機にさらに存在する。この場合、この役割を偶然につとめたのが、（偶然であつて、決して必然ではない！）前記の財政當局の拙劣な租税政策だつたのである。

佛蘭西人は、今も昔も金錢に對しては頗る鋭敏な感覺を持つ點で、支那の國民と最も類似性を有つてゐると言はれてゐる。從つて彼等から租税を徴收する場合には、政府當局に最も巧妙な政策、方法を必要とする。彼等の反抗、不滿を巧みに中に轉じて、然も所期の收入を得るだけのタクトが肝要である。ネッケルの人氣のあつたのも、徴税に依らで公債に依つた點にある外に、彼にこの巧妙な手腕があつた爲めである。それが、當時の政府當局に出來なかつたのだ。徴税方法の混雜、その露骨さ――これが不用に民衆を苛立たせ反抗させることとなつてしまつたのだつた。

こゝでガクソットが特に強調してゐるのは、從來の大小史家によつて例外なく、當時の政府の苛斂誅求振り乃至は一般民衆の貧窮振りを示す確乎たる證據物件として取扱はれて來た當時の無數の私公ドキュメントであるが、これ等は馬鹿正直にたゞ正面より表面を讀むべきものにあらずして、如何に當時の彼等が徴税吏の眼を胡魔化さんとしてかゝる物件を作り出したかを知らねばならぬとしてゐる點である。

兎も角も、何とかして租税を免れんとする民衆の要望は、期せずして、宮廷下賜の自由思想を讀み囓つた大小都市のクラブ政治家の利用するところとなり、何時しかこゝに澎々たる「輿論」の聲となつて、ついに自他共に思ひも寄らぬ大慘劇の序幕は切つて落さるることとなつたのである。然かもこの群民の騷擾と煽動とに對して、當然社會秩序維持の責任を有する支配階

級は何をしたかと言へば、前記の通りとうの昔に自由主義に去勢され終り、秩序と統一との爲めに闘はうとする念慮なぞは求め得べくもなかつたのである。……

ガクソットの革命史觀は、かくして從來の古い唯物史觀的革命史家の解釋を粉碎したかの觀がある。即ち、ヴォルテール、ルッソーの思想さへ無かりせば、一七八九年の革命は有り得ざりしものと論結してゐるのである。

○

佛蘭西の今日の政治運動を正しく理解せん爲めには、是非共大革命の當時まで溯ることを要するとは、何人も一致せる見解であらう。言はゞ、現代の政治的佛蘭西は、大革命の餘映でしかないとさへ見られやう。

佛蘭西革命が、コッシャンやガクソットやの說くがごとく、ヴォルテール乃至ルッソーの思想に依つて釀成せられ激發せられたものとするならば、現代の佛蘭西の政治の態樣も亦正しくそれと均しき內容に依つてその闘爭の分野を形作つてゐるものと見做すことができる。即ち、この國に於ける左翼と右翼との政治闘爭は、他の國に於けるよりも遙かに『思想的』であつて『社會的』乃至『經濟的』ではないのを見るのである。更に正確に言へば、この國に於ける實際政治の上に於ける左翼政派の不斷の勝利は、取りも直さず彼等が右翼政派に比して多分の『思想』を有するところから來てゐるのだと言ひ得る。

人も知る如く、佛蘭西はその國土の豐饒なる點でその氣候の溫和佳良なる點でまたその人口の多からざる點で、世界に於いて最も惠まれたる生活地層の一である。彼等の世界爭覇戰に於ける消極性はこゝに因を發して居り、また國民全體として極めて國家主義的で且保守的であることも亦こゝに發してゐる。それにも拘はらず、彼等の國內の政治潮流は、常に左翼から更にその左翼へと移動して止まない現象を呈してゐる。『左翼には敵はない』『Il n'y a pas d'ennemis à gauche』のである。何が彼等をさうさせるのか？ 決してそれは、マルキストたちの說くやうな經濟的必然から來てゐるのではないことは、一七八九年の革命が勃發したのが決して經濟的必然からでなかつたと同樣なのである。即ちそれは殆んど一に『思想』の爲めだと言つていいのである。思想、――佛蘭西革命を生み出した思想、更にミシュレーやユーゴーやの浪曼主義となつて咲き亂れた思想、サン・シモンの、プリユードンの、ゲードの、ジョーレスの、さてはマルクスの撒き散した思想、そして知識の程度の低い大衆にも至極容易に理解できる思想、――その思想が、百五十年に亙つて絕

えずに政治的佛蘭西のうへを吹き荒んでゐるのだ。

この左翼の持つ『思想』の嵐に對して、右翼は何を持つてゐるのか？　如何なる『思想』を持つてゐる、また持つてゐたと言ふのか？

○

たとへその『思想』は要するところ群民煽動の爲めの藥劑でしかないと言はれ、反抗と憎惡と猜忌との卑俗なる動物的感情の刺激劑に外ならぬと卑まれ、さては經驗と理智とを缺いた至つて安價なる人道主義的感傷性以外の何物でもあり得ないと罵られはしてゐても、左翼政治運動の持つてゐるこの強みは、何人もこれを否定することはできぬと言つてゐゝ。それを呼ぶに一つの教理（ドクトリン）をもつてしてもいい。一つの原則（プリンシプル）の名を以つてしてもいい。また一つの觀念（イデオロジイ）の名で呼んでもいい。また、フランシス・ドレジ Francis Delaisi がその名著『近代世界の矛盾（レ・コントラディクシオン・デュ・モンド・モデルヌ）』のなかで、稍々皮肉な言葉で言ひ現はしてゐるやうに、一つの Mythe であるとなしてもいいし、さては批評家アルベール・テイボーデー Albert Thibaudet に眞似て、一の Mystique であると爲してもいい。兎も角、『科學的』で『唯物的』な學說であることを看板としてゐる純マルキシズムですら、牢獄と流血とのまへに躊らはない信徒を作りあげるだけの不思議な強さを持つてゐるのだ、この左翼運動の『思想』なのだ。

この左翼の『思想』に對して、右翼が從來持つてゐたものはむしろ『無思想』だつたとさへ言へやう。勿論、そこに現實の利害問題以外、無反省な傳統的信條以外、また盲目的な保守的感情以外、何等『思想』と稱すべきものを全く持ち合さなかつたとは言へない。然し、佛蘭西革命を生み出したヴォルテールの『思想』に、さてはルッソーの『思想』に優に對抗する強力な『思想』が當時見受けられなかつたやうに、その後引續いての佛蘭西政界に、この滔々たる左翼の『思想』に對抗し得る『思想』は殆んど右翼の陣營には見受けられなかつたと言つてよかつたのである。勿論そこにフユステル・ド・クーランジュはゐた。またイポリット・テーヌはゐた。またオーギュスト・コントはゐた。またルメートルはゐた。ブールジエはゐた。バレスはゐた。ペギイはゐた。然し、それとて右翼の政治運動を總括してその『思想』の大系を作り出し、以て左翼の『思想』に對抗し、進んでそれを粉碎するだけの、力のある強大なる教理（ドクトリン）を、原則（プリンシプル）を、觀念（イデオロジイ）を生み出したものとしては、一人だつて無かつたと言つてよかつたのである。従つて左翼の烈しい狂信的な、且つ數量的な『思想』の攻撃に對して、右翼はたゞ現實的な『實力』で辛うじて防

禦するだけの情勢であつた。否、その防禦さへも時には怪しかつた。

　これが從來の佛蘭西の政治運動の實際だつたのである。大革命の當時から、尠くとも今世紀の初期までの右翼の不振と左翼より更に其左翼への移動との原因は、實にこれだつたのである。

　この滔々たる大勢、――これを言はゞ、赤手を以て既往に翻した偉人がゐる。南佛蘭西はプロヴァンスのマルティーグに六十年ほどまへに呱々の聲を擧げたシャルル・モーラス Charles Maurras 今日の「若き佛蘭西」の尖端を代表してゐると言はれてゐる政治結社「アクシオン・フランセーズ」Action Française の盟主モーラスこそ、實にその人なのである。

○

　シャルル・モーラスの政治思想をもつて、乃至はアクシオン・フランセーズの政治綱領をもつて、右翼と定義することは一應の註釋を必要とする。普通に於いてこの右翼なる言葉は、反動・保守・守舊等を意味しまた、資本主義・國家主義・帝國主義乃至軍國主義等の擁護を意味する。孰れにもせよ諸般の關係に於いて社會・國家の現狀維持を目的としてゐることは、右翼の思想乃至運動に共通せる觀念であると言つていい。佛蘭西の實際政治の上に於いても、所謂左翼及中央に對して右翼と稱ばれてゐる政黨政派は、その思想・政綱に於いて全く現狀維持――所謂保守の旗旌をば翻がへす者なのである。(だから彼等は共和主義であり民主主義でありさては議會政治主義者であることには變りはない!)

　然るにわがモーラスの政治思想は、この點で截然と所謂右翼と分裂する。先づ彼は、共和主義を否定する。民主主義を否定する。議會主義を否定する。即ち今日に於ける佛蘭西の現狀自體を否定する。それのみではない、彼は資本主義をも否定する。金權政治をも否定する。然し、階級鬪爭乃至プロレタリア專制等をも斷然否定する。社會主義、サンディカリズム等等を否定するのは固よりである。

　從つて、モーラスの思想を以て、普通の意味で「右翼の思想」を創成し大系しさては組立てたものとなすことは、固より當らない譯である。モーラス自身も、その結社アクシオン・フランセーズは、決して政治的のある團體乃至政黨ではなく、すべての此種の政黨政派の更に一段上にあるものであつて、その一切をば當然包括し得るものだとなしてゐるのである。

　然しながら、佛蘭西革命自體を否定し、この革命を生んだ自由・平等・民權等の思想を否定し、民主主義による進步と發達と

を否定し、議會政治――わけて政黨政治を否定し、これ等を母胎として生れ出た社會主義・共産主義を否定して、秩序と權威と力との政治を高調する彼の思想は、矢張り何と言つても一般的な左翼の思想に先づ以て對峙・抗爭する思想であると言はねばなるまい。況んや、右翼の政派政黨と雖も、共和制度維持については左翼の夫れ（尤も共産黨は例外である。）と異つてゐない佛蘭西とは政情を異にする他の諸國、――殊に他の君主政體の諸國にありては、モーラスの思想の中核は、最も多く右翼の思想を交錯するものと言へるであらう。

○

十九世紀の政治運動のうへで世界のトップを切つた佛蘭西、民主主義から社會主義、さては共産主義さへをも既に實驗してゐる佛蘭西、そして過般の大戰を劃紀として既に百五十年まへ佛蘭西が遣つたやうな革命を、王室顛覆を、共和制度採用を、彼の國も此の國も遣り遂げまた遣り遂げようとしてゐる今日の世界、自由と平等との合言葉、さては大衆の要望とプロレタリアの勃興との合言葉以外には最早世界には共通語がないやうに思はれるまでに彼も此も左へ左へと傾斜して止まぬかに見える今日の世界、――それに stop! の警笛を鳴らした形なのが、モーラスである。

今から數ヶ月まへ、佛蘭西で發行されてゐる雜誌「リーブル・オピニオン」のなかで、ルー・コスタドオ Roux-Costadau が書いてゐる言葉は、短かいながらにこのモーラスの思想と運動との效果を明かにしてゐる。ルー・コスタドオ自身が曾て社會黨 S.F.O.I. の代議士として佛蘭西政界に活躍してゐただけに、彼の以下の言葉は並ならぬ強さを持つ。

「……この際眞實を語る必要がある。全くモーラスを中心としたアクシオン・フランセーズの運動なるものは、今日に於いて現制度（即ち民主共和政體）に一の學說一の組織をもつて反抗する唯一つのものなのである。勿論彼等は少數ではある。然し、この少數は一つの魂を有し一つの息吹を有してゐる。彼等は、若くて、無慾で、熱烈で、剽悍で、戰鬪的で、今日の無氣力でぶよぶよしてゐる佛蘭西の大衆のなかに恰かも鐵塊の一片のごとく突入してゐる。彼等は、威嚴と、銳齒と、運動とを持つてゐる。自分は、この二月の十九日にあの羅甸區のブリエ Bullier で催されたアクシオン・フランセーズの學生大會を想起せざるを得ない。そこには實に一萬を超える聽衆が、演壇に立つ王黨の闘士を拍手し喝采してゐたのだ。それこそ全く一の象徴的なものだと言つてよかつた。自分は痛感した。――專政的

でグロテスクでまた國家萬能主義な『共和國』がこの佛蘭西に生み出す無數の不滿の徒をば、このアクシオン・フランセーズの連中が今や着々と味方に引き入れつゝある、と。現代の政治に憤懣し嫌厭する一切の人間は、この運動に走るに相違あるまい。……」

これが、社會黨の一鬪士が見た僞らざるモーラス觀だ。モーラスを首領とするアクシオン・フランセーズ觀だ。

見よ、かくの如くに眺めたるモーラスとその一團とは、最早右翼に陣營を構へて左翼へ左翼へと進む佛蘭西にその背後から呼び掛けようとしてゐる、所謂保守主義者では斷じてあり得ない。むしろ左翼へ左翼へと流れ落つる大勢の正面に身を挺して飛び込み烈しき鬪ひを挑む急進主義者ですらあるのだ。

この意味で彼は、今日の佛蘭西にあつて實にその時代の最尖端に立つ者と言ひ得やう!

○

潮の差し引きはあつても、結局に於いては左翼の勢力が益々增して行く傾きを持ち續けて今日尙止まぬのが、佛蘭西の實際政治の經過であると言つていい。一九三二年に行はるる次の總選擧に當つては、急進社會黨は、恐らくその左翼を占むる社會黨S.F.I.O.の爲めに夥しい投票を奪はるることとなりはせぬかとは既に多數識者の豫想してゐる所である。共産黨が、現在その議員數こそは二十數名にしか達せざれ、前期の總選擧で全國に亙つて驚くべきほどの多數の投票を獲得したことから、次期の總選擧の同黨の好成績を今から期待してゐる者も單に同黨の黨員許りではない。

然し、この『左翼から更にその左翼へ』の政治現象は要するに佛蘭西に於いて、左翼政治の顚落を意味するものとも見られるのである。王政顚覆前後の混亂狀態は暫く論外としてもいい。今日見るが如き所謂第三共和國が樹立せられてから今日まで既に百年を經過してゐるのであるが、それが若し所期するがごとき政治を行ひ得たものとするならば、大體に於いて政治潮流の安定狀態を見ていい筈である。然るに事實は全くこれに反し民衆の不滿と不足とは增加するとも減少するが如きことは無かつた。然し、民衆自身が既に『王たる市民』である以上、往時王政を顚覆せるが如く、顚覆すべきものとては何とてもなかつた。――自己を顚覆する以外には。この結果は、彼等をして、更に未知なるもの、急進的なるもの、――即ち更に左翼へと向はせることとなつたのである。民主主義から社會主義へ、社會主義から共産主義へ、――この道行は、實にこの民衆の充たさ

れざる欲望の結果以外の何ものでもなかつたのである。「デルネ」の主人公のごとく、あの山越えれば幸ひの棲む村あるべしとて、山また山を越えて旅する空想兒こそ、この「左翼より更に左翼へ」と動く憐れむべき民衆の政治悲劇に外ならないのである。

この輪廻的な左翼運動の永久悲劇から、民衆を、祖國を解放せんが爲めに、モーラスは蹶起したのである。

○

シャルル・モーラスの政治思想を、さては彼の思想の感化と影響とを最も正確に且精細に知る爲めには、何よりも彼の主宰する日刊新聞『アクシオン・フランセーズ』を日日繙讀するに若くはない。既に創立以來二十數年を經過してゐるこの新聞紙は最初アンリ・ヴオージョア Henri Vaugeois が創刊した當時の片々たる週刊雜誌から、今日見るがごとき二十數萬部の發行數を有する大新聞となつたのであるが、（佛蘭西の共産黨機關紙『ユーマニテ』L' Humanité が第三インタナショナル本部からの豐富なる資金の供給ありと稱せられてゐるにも拘はらずその發行部數容易に五萬を出ないのと對照せよ！）これ以外に佛蘭西全土に散在する數十の王政主義の諸新聞を加へれば、正しく四五十萬の人間がこのモーラスの思想の猛烈なる洗禮を日日に受けつゝありと言はねばならぬ。見よ、その新聞の第一頁は、日曜も祭日もなく常にモーラスの筆になる「政治」と題する三段乃至四段の時事論説を掲載せられてゐて止む時がない。（細字にて壓搾して組まれたるこの三四段は、恐らく我國の新聞紙の一頁乃至三分の二頁には優になるであらう。）彼の眼とその筆とは、佛蘭西の政治に關する限り、その議會内の事柄なると外の事柄なることを問はず、また内外の新聞・雜誌・書籍に掲げられたる論説報道なるとそれ以外なることを問はず、政治的乃至思想的集會の公然なる演説なると然らざるとを問はず、一切は免かれることがない。彼の所謂實證主義 Positivisme の政治哲學を指導原理とし鐵則として、一切の政治現象を批判し解剖し暴露して餘すところがない。一切の虛妄、幻影、デマ、情實、僞瞞、美辭、麗句等、民主主義乃至左翼運動に必然的に纏はり付いてゐる『虛僞』を、彼は些かの曖昧もなく摘發する。かくて佛蘭西を、その平和を、その福祉を、その獨立を、安寧を、自由を救ひ得べき方法として、「傳統的にして構組的なる」héréditaire et constitute 王政の樹立、――更に換言すれば祖國佛蘭西を生み且つ育て上げて今日の大をなさしめたカペチアン王朝の恢復（即ち、ブールボン王家の恢復）、これ以外には何等餘さ

れたる方法が他にないことを立證し、確認する。

報道新聞としては極めて貧弱で且所謂社會的特種の持ち合せのないこの新聞が、實に數十萬の讀者を有するといふことは、一にこのモーラスの筆になる數段の政治論文のある爲めであると言はねばならない。而してこれ等の讀者の大部分こそ、ルー・コスタドォの所謂『今日の無氣力でぶよ〱してゐる佛蘭西の大衆のなかに、恰かも鐵塊の一片のごとく突入してゐる』役割を努めてゐるのである。

○

このアクシオン・フランセーズの旗旌の下に集つて、わがモーラスの指導の群に動いてゐる數十萬の人々を從來佛蘭西の政界に消長の歴史を繰り返してゐた正統主義者、オルレアニスト乃至は奈翁の後を立てやうとするボナパルティストの群と同一視することは、全く當らない。これ等の純然たる保守的分子が、アクシオン・フランセーズの運動のなかに多少は含まれてゐぬこともない。然し、それは極めて少數で、むしろ例外に近い。アクシオン・フランセーズの運動の强力な點は、――その勢力を扶殖して行く所以は、モーラスの政治哲學それ自體を彼等が理解し同感し共鳴して行くからにある。從つて、アクシオン・フランセーズの構成分子は、主として青年學徒の群によつて維持せられ擴大せられてゐると言つてもいい。

モーラスの政治思想が、『青年佛蘭西』を動かし――生かし若くは創りつゝあるその力は、佛蘭西の今日と明日とを見んとする者の閑却するを許さない所である。今から三四十年まへ佛蘭西の青年を、わけて各大學の學徒をあゝも强く魅惑した社會主義的思想は、今日の青年達の間にあつては殆んど見る影もないまでに凋落したとされてゐる。その代りに强い反社會主義的の思想が、彼等の若い頭と胸との間を嵐のやうに吹きまくつてゐるとされてゐる。この大きな轉換を惹き起したのは、過去に於いて佛蘭西政界の示した實際教育の力もあらう。然し、モーラスの思想の波及と滲透とが無かつたならば、到底このすさまじい變換はなかつたらうと言はれてゐる。

この春の雜何區のブリエで催されたアクシオン・フランセーズの學生大會に一萬を超える青年學徒が來り參じたといふことは、ルー・コスタドォの言葉で、既に讀者の讀まれた通りである。その後五月の末かに巴里の郊外アントニーで催されたアクシオン・フランセーズの屋外大會には、折柄の激しい暴風雨をもめげず一萬五六千にも達する參會者があつたが、その大部分は若い青年子女だつたと言はれてゐる。また、續いて七月の初めに

南佛モンペリエで催されたアクシオン・フランセーズの南佛大會には無慮三萬の參會者があり矢張りその大半はその地方の大學生其他若い者たちの群だつたと言はれてゐる。

貴族の末裔、地方の大中地主乃至ブールジョア階級、さては僧侶——これ等の者を中心とする王政復古運動は、左翼へ左翼へと動いて止まない佛蘭西政界のうへでは、今日殆んど清算すみになつたかの觀がある。從つて同じ王政復古運動でも、このアクシオン・フランセーズの運動は、その原理その精神に於いて前者と何の關係もないと言つてい〻。それは、モーラスが創り上げたもので、モーラス以前には無かつたものだからだ。それは保守的な感情の發露からでもなく、また個人的な利害關係の打算からでもなく、一の『思想』からだ。一の『理論』からだ。一の『分析』からだ、『發露』からだ。

從つて、この新らしい王政復古運動（新らしい、と言ふ。然しそれは既に二十數年の苦鬪に充ちた歷史を持つてゐる！）は十九世紀を通じて民主々義乃至社會主義の『新思想』が所謂既成勢力を目掛けて突貫したやうに、今日の既成勢力たる民主々義乃至社會主義に、二十世紀的な『新思想』の力を以て突貫しようとするものである。十九世紀に於いてもこの突貫の尖端に立つた者が青年の群であつたやうに、アクシオン・フランセーズの突貫の尖端も亦、青年の群によつて堅められてゐるのを見るのである。

○

一見極めて保守的なこのアクシオン・フランセーズの運動が青年の群を中心として構成せられてゐるやうに、他方また極めて貴族的とも見られるこの王政復古の運動が、相當に夥しい勞働者の群を包容してゐることも看逃がしてはならない。

左翼から左翼へと動いてゐる佛蘭西の政界に於いて、最左翼を成す共產主義運動が、他の數多い國々に於けるが如く、しかし時の政府の峻烈な彈壓を受けないことは、當然の事理であると見なければならぬ。從つて、政府と共產黨とは必しも兩立せざる仇敵の關係ではない。寧ろ共產黨側から見て（また政府側から見ても！）眞の敵は外ならぬ反革命、反左翼を標榜するこのアクシオン・フランセーズの强力なる運動なのである。

從つて共產黨側乃至社會黨側が、アクシオン・フランセーズの運動を指して、貴族・僧侶乃至ブルジョア階級の擁護運動であると宣傳し反對にプロレタリア階級にとりては恐るべき脅威を招來する運動であると呼號して、勞働者のこの運動に加盟するが如きことを極度に警戒してゐることは、容易に理解し得る

ことである。共産黨機關紙『ユーマニテ』のごときは、都度アクシオン・フランセーズを指すに、公然と勞働階級の「仇敵」なる言葉を用ゐて憚からない。

然し、モーラスの政治思想は、名のみ美でその實は醜惡なる金權政治(プルートクラシー)乃至は苛酷なる專制政治に過ぎない民主制度の下に喘ぎ且壓搾せられてゐる勞働階級を、從來の瞞(まが)しの民主々義・社會主義・共產主義等々左翼思想のデマから解放して、眞の自由と安寧と獨立とを恢復せしめようとするのにある。それには、傳統的にして持續的なる權威ある『王』に依る政治のみが可能であると說く。從つて、社會主義乃至共產主義こそ、眞の意味で勞働階級の爲めにも敵であることを、――これ等の主義の實現に依つては永遠に勞働階級は貧困と悲慘とから救はれざることを力說する。

かくして『ユーマニテ』や『ポピユレール』や『ソワール』等の不斷の警戒と監視とにも拘はらず、勞働者の群がアクシオン・フランセーズの運動に馳せ參ずる現象の絕える時がない。殊に北佛工業地帶に於ける工業勞働者乃至鑛山勞働者のなかには、數千若くは數萬をもつて數へらるゝ黨員(リグール)がゐると稱せられてゐる。

この一月、モーラスと並んで『アクシオン・フランセーズ』紙の政治部長(ディレクトゥール・ポリティック)をつとめてゐるレオン・ドオデエ Léon Daudet が、二十九ヶ月に亙る國外追放から赦免せられて、巴里はガール・デユ・ノールの停車場に歸還したとき、そこに出迎へた關係者はその數一萬を越ゆるの有樣だつたと言はれてゐるが、その際特に傍觀者の眼を惹いたのは、數百に達する勞働服そのまゝの鐵道吏員及び鐵道工夫の群の出迎へだつたと報ぜられてゐる。また、毎歲五月巴里の町で行はれるジャンヌ・ダルクの祭典(これとても今日見るやうな賑やかな國民祭としたのは、アクシオン・フランセーズの運動の力だとせられてゐる。)に、全國の黨員(リグール)の代表者を集めた數千名の行列があるが、各地方の風俗をした見る眼美くしいその行列に交つてこゝでも勞働服の儘の坑夫やら職工やらの群が夥しく加つてゐるのを見られることは、巴里でこの祭典に逢つた者のひとしく知るところである。

兎も角、アクシオン・フランセーズの運動は、ある特種階級の爲めの代辯を遣らうとはしてゐない。一人の王の統率の下に一切の階級が平和と福祉と自由とを獲得し得べきことを約束するのである。

○

一個人の力が、――更に一個人の思想の力が、十八世紀末以來引續いて左翼主義的旋風の吹き止まない佛蘭西政界に於いて

この二十年間にかくまでの強力なる思想的陣營を作り上げたといふことは何と言つても史的壯觀であると稱んでいゝ。

然かもその黨員の『數』の增すことによる力よりもその『質』から來る力の增加に賴むべきことを信條として來たこのアクシオン・フランセーズの平素から言つても、二十年餘の歷史で、これ程の夥しい同志を獲たといふことは、意味ふかきことゝ言はねばならぬ。

勿論、單なる數のみから言へば、その機關紙『ポピレエル』乃至『ユーマニテ』の讀者がこの『アクシオン・フランセーズ』紙の有する讀者よりもよし十分の一若くは五分の一ほどの少數に過ぎないとしても、社會黨の黨員乃至共產黨の黨員を自稱して佛蘭西全土に散在する者たちを併せれば、恐らく數百萬にも達しやう。この點で『アクシオン・フランセーズ』は、今日までの所は到底彼等の敵ではないと言つていゝ。

然し、アクシオン・フランセーズの覗ふ所は飽までその『數』ではなくてその『質』にある。左翼乃至極左翼の政治家が、傳來のその巧妙なデマ的の思想と言辭と戰術とを用ゐて如何に多くの『數』を獲得しやうとも（また左翼乃至極左翼の政治運動には『數』が生命である。何となれば、民主々義にしても社會主義にしても、共產主義にしても、詮じ詰めれば『數』のうへに立てられたる思想だからである。）それ等の數は眞の戰鬪と眞の建設に當つては無氣力なる傭兵以外の何物でもないとする。この點で、彼等は眞の意味のアリストクラシイを信奉する。（元來アリストクラシイのアリスト、即ちアリストイは貴族の意味ではなくて最上のもの乃至選ばれたるものを意味する。人間として最も特質の秀れた者たちに依る政治こそ、こゝに言ふアリストクラシイに外ならない。）即ち一人の王を中心とし、國民の選良を集めて（この選良は、勿論國民活動の一切の層に存在する。農工商の企業者側に選良が存在するとゝもに、勞働者の側にまた勞働者としての立派な選良が存在する。）統治の本體を形成すべき政治現象の發生を期待する彼等は、今日その團員（リグール）を作り集め且維持するがうへにもこれ等の者が常に選良の資格と抱負とを有すべきことを要求する。これ等の選良が、數のうへにも增すに到らんことは、固より彼等の切望してゐる所に相違ないけれども、選擧時の投票のごとく徒らに『數』を搔き集めんとするがごときことは、彼等の些かも念とする所ではないのである。

現代に於いては一の時代錯誤（アナクロニズム）とも見られやう、この『數』と『質』との嚴格なる差別吟味、その選擇、——而して、この差別と吟味と選擇とにも拘はらず、今日見るがごとき數十萬にも達する同志を克ち得たといふことは、モーラスの思想の持つ

力の大きさを明示してゐるものと言はなくてはならぬ。

○

佛蘭西革命は、自由と平等と博愛とを標語として起されたものであるにも拘はらず、その本質は主として『自由』の爲めの革命であつたと言はれてゐる。（然しかくして得たその自由も、モーラスに從へば、革命のテマである民主思想の當然の歸結たる金權政治の慘虐なる支配の下に粉碎されてしまつて、過去の王政時代に於いて見られたやうな眞の自由の確保は全く見られないのである。）これに反して、露西亞の革命の本質は『平等』を主として行はれたものとなされて居る。事實ソビエット治下の露西亞は、個人の自由を嚴しく抑壓してゐる點である點帝政時代を遙かに凌駕してゐるものさへあることは、多くの論者乃至旅行者の期せずして一致してゐる所である。然しその反對に、『平等』に對する熱意と施設とは、あらゆる方面に見られるとなされてゐる。固より、この『平等』が、佛蘭西革命後の『自由』と同樣、名のみあつてその實を完全に失ふに到るべきものか否かは、こゝで論ずべき限りではない。唯、佛蘭西革命後の世界の潮流が『自由』のスローガンを中心として激しい起伏を見せたやうに、今日の世界は露西亞の革命を劃紀として『平等』の聲を響き交す場面を展開してゐることだけは、事實である。

この平等、——愚者も賢人も一人として數へられることから出發しようとする『新文明』の樹立。この『數の文明』から、この『不平等の文明』から、斷然離反しようとしてゐるモーラスの哲學は、勿論『不平等』の原則を、政治のうへでは固より、科學のうへでも、産業のうへでも、文學・技藝のうへでもこれを確認せんとするものである。同時にまた、アクシオン・フランセーズの運動自體に於いても、『不平等』の鐵則を實行するに此かも躊らはない。

見よ、そこに數十萬の同志があるにしても、その統率者は昨日も今日も變らない。シャルル・モーラスは、レオン・ドオデエと竝んで、十年一日の如く新聞『アクシオン・フランセーズ』の政治部長である。モーリス・ピュジオー Maurice Pujo また十年一日の如くその編輯長である。實際運動の指導者として恐らくその中心勢力とも言ふべき『カムロ・デュ・ロア』Camelot du Roi の團長は常にマクシム・レアル・デル・サルト Maxime Real del Sarte である。[illegible]れた[illegible]にルシアン・ラクール Lucien Lacour である。その他、婦人の團體、さては若き娘たちの團體、學生たちより成る諸團體は固より、巴里の内外にある大小數十の支部から、國内全域に擴がる數百の支部にいたる

まで、その團長・副團長・支部長・副支部長等々、一度その任に就けば、特殊の事情無き限りは一生を通じてその職責の遂行に沒頭せんといふのが、彼等の決心でありまた現狀である。勿論その就任は、選擧に依つて決定せられたものではない。また選擧に依つて更新されるものでもない。（選擧こそは、彼等の最も憎む公敵の一である。）モーラスを中心として二十年間に亘りこの運動を創り、育て、戰ひ、苦しんだ少數者の最高機關が、選擧制度とは最も反對なる精神と方法とで選び出した『選良』こそこれ等の人々なのである。かくして、そこには統率する者と統率せらるるものとが判然と分れる。不平等がそこに實現せられる。然しそこには、斷じて不平等の原則が生み得ない心服と親愛と自由と訓練と調和とが生ずる。秀れたる者に對する敬畏の念慮その責任を（殊にその過失を）己れに選擧したる無名のマスに轉嫁して恬然たるを許されざるこれ等の統率者の重責に對する同情の念慮、――この貴い人間性のうへに、彼等は新らしい政治文明を築かんとするのである。そして、佛蘭西革命以來の世の合言葉となつてゐるやうな『平等』の提唱をば、猜疑と敵對と憎惡と羨望とから來た賤劣なる動物の感情の發露でしかないとして、これを徹底に排擊せんとするのである。

○

この不平等の精神自體も、大我の爲めに小我を沒することを意味する。全體の利益の爲めに、自己の野心を、地位を、タイトルを、名譽を得んとするの野心を、放棄することを、意味する。卑俗な唯物主義者の多い現代に於いては、最も至難なる道徳的試練を要するものと言つてゐる。

この點から見ても、アクシオン・フランセーズの運動が、今日數十萬の同志を集め得たといふことは、何と言つても刮目事たるを失はない。思へ、今日の政黨なり、さては政治運動なりで意識的にまた無意識的に自己の爲めの利益の獲得の爲めでなくしてその黨首となりさてはその運動に參加してゐる者が、幾程あるであらうか？　彼等の大部分は、現在に於いて、或ひは近き將來に於いて、何等かの利益に（地位を、タイトルを、名譽を、さては、富を）參與せんことを所期して、その黨なり、その運動なりに馳せ參じたものと見てゐる。またそれ等の政黨なり運動なりの幹部は、或ひは暗に或ひは明かにそれを約束して、以て多數の同志を集めんとしつゝあるのである。

既成政黨とも言はれやう右から中央にかけて、更に中央から左にかけての、沿革の相當に古い數多い政黨にして、この埒外

に出てゐるものは一つだつてないと言つていゝ。(そのなかでも比較的政權獲得には縁遠い右翼各派は未だしも、社會共和黨乃至社會急進黨等の左翼各派に較べてはこの點は恬淡と言へるかも知れない。)新興勢力を代表してゐると言はれる社會黨乃至共產黨にしたところで、この點何れほど既成各政黨と相違してゐやう。尠くともその黨員の夥しい數は、社會黨の若くは共產黨の天下になることによつて、勞働階級の地位の改善を、——更に具體的に言へば自己の地位の改善を、富の分配を乃至は生產手段の獲得を、先づ何より先きに獲やうとしてゐるのではないか。

アクシオン・フランセーズの運動は、この點で、その忠實なる團員に約束し得る何等の個人的利益を持合はしてゐない。王政の確立に依つて國家自體が富强となり安全となり、從つて國家を構成する各人も眞の自由と獨立とを獲ることができる！——と、これだけである。この意味での利益の享受は、單に團員のみに止まらない、その仇敵も亦佛蘭西人たる限りは洩れなく均霑し得るのである。

然しアクシオン・フランセーズの運動が、目立つて大衆の間に滲透しないのは、こゝにあると言はれてゐる。何處の國も同じこと、眼前の自己の利益に何よりも銳敏な大衆なるものは、さうした具體的な利益の約束がない限りは、容易に動かうとしないものである。社會黨は、さては共產黨は、この點で、大衆を容易に動かし得る主張と戰術とを見事に持つてゐる。然しかゝる主張と戰術とを有せざることを誇りとし、若しこの爲めに團員の數が永久に增加せずとすれば、それも止むを得ずと見做してゐるのが、アクシオン・フランセーズなのである。

同樣の意味でまた、富める資本家なぞから資金を醵めることも、アクシオン・フランセーズのよう遣り得ない所である。王政の確立に依つて、資本家が益ゝ富み益ゝ伸展しその位置を確立するとは、豫想し得ないからである。(むしろその反對である！)從つて、社會黨や共產黨やに數萬金の巨額を寄附する資本家は今までだつてなか〳〵ある。然し、アクシオン・フランセーズは、忠實なる團員にその都度寄獻を迫る以外には、金穴の持合せがないのである。

が、この理論的の、また實際的の困難にも拘はらず、アクシオン・フランセーズの運動が今日の强大を來したことは、モーラスの偉大さを優に證據立てるものと言つてよい。

○

烏合の衆の百萬よりは、一萬の精兵を貴しとするこのアクシ

オン・フランセーズである。自からに、その統率者と統率せらるる者との間、さては團員と團員との間に、他には容易に見るを得ない強度の團結・訓練・組織が存在してゐるのは固よりである。勿論彼も人是も人である。そこに全然紛議やら内訌なりの影も射さぬとは言へまい。然しこれを他の諸種の團體（そのなかには統制の相當に厳しいとされてゐる共産黨をも含めて）と較べれば、まるで問題にならぬと言つてよからう。

彼等のこの團結・訓練等の見事なる精神を如實に世に示したものとして、今から三年ほどまへに起つたるレオン・ドオデエの脱獄(?)事件がある。

モーラスと並んで「アクシオン・フランセーズ」紙の政治部長の任にあるレオン・ドオデエが、かの十九世紀の大小説家アルフォンス・ドオデエの遺れ形見であることは言ふまでもあるまい。政治家として彼は元來社會急進黨に屬してゐた。それがモーラスと接觸するに及んで急角度を以て王政主義の思想に傾いて行つた。今日モーラスを除いては、彼がアクシオン・フランセーズ運動の中心人物だとも言へやう。

今より五年ほどまへ、十四歳になる彼の愛兒フィリップが巴里の市中で暗殺せられた事がある。警察側乃至裁判所側はこれを自殺と主張したけれども、それは政治的陰謀から來た怖るべき犯罪であるとは、彼ドオデエ及びその周圍の者の確信であるのみならず、世間の大部分も同様の觀察を下してゐたものである。

然るにドオデエは、その愛兒の屍を乘せてゐたタクシイの運轉手から、誣告罪として逆に訴へられることになつた。ドオデエが、その運轉手をも犯罪の一味の者と數へ立てたからである。その訴は裁判所の受理する所となつて、彼は實に二萬五千法の損害賠償に加へるに五箇月の禁錮刑に處せられることとなつたのである。

幾多の曲折を經て、結局ドオデエは一昨々年の六月巴里はラ・サンテの監獄に收容せられた。

自分が茲に述べやうとする事件は、こゝに始まる。——

○

レオン・ドオデエがラ・サンテの囚人生活を始めて一週間經つたか經たぬかに、彼は世にも不思議な方法で『脫獄』させられたのである。言ふまでもなくそれは、彼を首領とたのむカムロ・デュ・ロアの一味の遣つたことなのである。その手段の巧妙さは、言はずもがな、警察では勿論、事があると直ぐに虱潰しに目星しい團員を片つ端から調べて見たものであるが、その事

件の端緒だに捉へることができなかつたのみならず、三ヶ年以上を經た今日に及んでも事件はそのまゝ完全に暗のなかにあると言つていい始末である。然もこの事件に直接與つた團員の數は百五十人ほどもあると言はれてゐる。それがこの固い祕密の嚴守だ。名だたる巴里の巧妙な警察の發動も、憲兵の大動員もさては歳月の經過も、百五十人の團員から毛すぢほどの祕密の微光すら洩らさせることができなかつたのだ。これだけでも、口數の多い、祕密と言ふ祕密が容易く外へ洩れるとされてゐる佛蘭西人氣質(かたぎ)のなかでは、珍らしい現象だと言はなければなるまい。――

ドオデエが收監後間も無く、ある方面の謀(はかりごと)で彼は毒殺されるかも知れぬといふ情報が、一味の者の間に傳つたのである。是非共彼をそれから救ふ爲めには「脫獄」させるより外に途はないと決した結果、こゝに世にも巧みな筋書が祕密に實行さるるに到つたのである。

ある日の正午、ラ・サンテの獄長カストロが官舍のなかで食事をしてゐると、電話が掛つて來た。内務大臣からである。閣議の結果ドオデエともう一人同じ監獄に捕へられてゐる共產主義者の某とを大赦放免することに決つたから、すぐその取計らひをするやうに……と言ふのである。が、カストロは即座にその命令を實行するまへに、それから約十分程經つてこつちから内務省に電話をかけて見た。すると先刻大臣に先つて電話した祕書官がちやんと出て來た。「未だ君は大臣の命令を實行せずにゐたのか！」といふ叱り樣である。カストロはこれで安心して大臣の命令通り、ドオデエともう一人の共產主義者とを直ちに釋放したのである。

釋放してからその報告の爲めに、また内務省へ電話をかけて祕書官を呼ぶと、今度は別人の祕書官である。ドオデエの一件を傳へると、そんなことは當の祕書官も大臣も全然與り知らぬ所だと言ふ意外な返事だ。

それから騷ぎだ。警察と憲兵との網は當の巴里は言ふに及ばず、全國に向つて張られた。殊に國境に近い場所は、それこそ蟻の這ひ出る餘地のないほど嚴重に固められた。アクシオン・フランセーズ社の建物が臨檢に合つたのは固よりである。カムロ・デユ・ロァの目星しい連中には、全國的に監視と尾行とが附けられた。ドオデエの出入しさうな知己友人の家のまへには、固より晝夜を分たぬ監視であつた。アクシオン・フランセーズ社の電信、電話は固よりのこと一切の郵便物もが一々檢閲され監視されてゐるといふ噂であつた。が、本人は天へ上つたか地へ隱れたか、杳として消息は判らない。巴里選出の前代議士でもあ

り、アクシオン・フランセーズ切つての辯舌の士でもあり、殊に三十貫以上もある大男の彼のこととて、厭應なしに人目に附かなければならぬ筈でゐて、これだ。

それのみならまだいい。『脱獄』後二三日經つたか經たぬかに『アクシオン・フランセーズ』紙の第一頁を見ると、麗々しく彼の書いた論説がのつてゐるではないか！　然もそれが殆んど一日缺かさずに出るのだ。

かゝる狀態が續くこと約二週間、これで官權に對する皮肉なる復讐も充分と判斷したものか、ドオデエは北部國境を安々と越えて白耳義に入り、その首府に滯在すること廿九箇月、この春漸く大統領の大赦令に依つて歸巴するに到るまでそこで安穩に暮してゐたのである。

この事件のからくりは、前言した通り、今日までも全く秘密の幕の彼方にある。百五十人の口は、外部に向つては固より内部の他の同志に向つても開かれてゐないらしい。それは、まるで一人の口も同樣である。

この團結とこの訓練と――それ許りは叩頭の外はないと言つてゐるものは、彼等の政敵のなかにわけて多い。

○

共產主義と相俟つてと言つてもよい、今日の共和政治乃至議會政治に對する怖るべき強敵であり、更に一般的に左翼的な政治思想に對する不斷の脅威を形作つてゐるこのアクシオン・フランセーズの運動の中心を以て居るシャルル・モーラスその人は、抑々如何なる徑路を經て王政主義者となつた人間なのか？

彼は決して生れ乍らの王政主義者では無い。彼の家庭も亦、從來の多數の佛蘭西人の家庭同樣、極めて自由主義的な田舍のブルジョアであるに過ぎなかつた。從つて彼の『改宗』は、年齡から言へば四十歲近くで、相當廣い見聞と深い省察との結果から生れて來たものに外ならなかつた。

この七月の『巴里評論』の卷頭に、彼の執筆になる『政治的告白』"Confession Politique"といふ一文が掲載せられてゐる。これは、言はゞ彼の改宗物語である。このなかで彼は先づ少時に讀んだ諸種の哲人や史家やからの影響の數々を擧げてゐる。ワルシュ子爵の著『ヴァンデからの手紙』がその一つだ。ラ・ムネの著『一信仰者の言葉』がその一つだ。それからテーヌの著書だ。ル・プレーの著書だ。ジョセフ・ド・メーストルの著書だ。ボスユエーの著書だ。それから（彼の思想の中核を形作つたとも言へる）オーギュスト・コムトの著書だ。さては、エルネスト・ルナンの著書だ。

これ等の讀書は、何時しか若い彼の心に社會人の生命に關する三つの特質を氣付かしむることとなつた。その一つは、社會人としての人間は飲み食ひをするまへに先づ自己を精神に合致せしめんとして努力する、——換言すれば人間といふ生の物質を人道化しやうとするその强い情熱であつた。その二つは、吾々人間の種族の有する偉大なる勞働の繼續性であつた。勿論その繼續性は、機械的に時期を等しうして生ずる現象ではない。然し、數百年をさては數千年を段階とし大部隊より成り立つ、『相續』の展開はこれを否定するを許されない。その三つは、かくして史的展開を遂げて行く人類は、最早個人の計算のみで停止し局限することを許されるものではなく、その勞働は無限から無限へと運ばれて行かねばならぬ。卽ち過去の集積を將來へと送り出すのだ。この集積が物質的であれば、それは『資本』であり、精神的であれば、それは『記憶』若しくは『傳統』なのである。

この三つの人類の特質を離れて、吾々は人間と社會との意味を發見することができない。またこの特質を否定して、吾々は文明の發展を意圖することもできない。——モーラスは、その眼を佛蘭西の實際政治に向けるまへに、否王政主義者に『改宗』するまへに、この根本的な純粹眞理を捉だのであつた。

○

やがて彼の眼は、實際政治のうへに向けられた。

そこに展開してゐる光景は、(彼は、恐怖といふよりもむしろ侮蔑で目をつぶつてゐたかつた、と述べてゐる。)民主主義の生む虚僞とデマとで充ち滿ちてゐた。名のみ美くしい政綱を持つてゐるに過ぎない政黨は、政權に乃至利權に有り付くが爲めには、佛蘭西自體の不利となることに頓着はしなかつた。軍事的にも政治的にも經濟的にも、數々の外敵に圍まれてゐる佛蘭西の爲めにその內部の統一を目論むのではなくて、それを引き割くことに努めてゐた。それからそれへと猫の眼のやうに變つて行く內閣に統御せられねばならない佛蘭西といふものは、恰かも砂のうへで子供が作つては壞し壞してはまた作る砂の小山に些かも相違しはしなかつた。責任政治も何もある筈は無かつた。萬ケ一どうしても責任が問題になるやうな曉には、辭職さへすれば事が濟むし、さなくば遠慮なくその責任を投票人である無名のマスのうへに投げ付けて恬然としてゐればそれで差支へはないのであつた。

無論そのなかには、祖國の興隆を先づ念とするやうな政治家乃至政黨が全然無い譯でもなかつた。(それは、常に政權から締

の違い有異方面に存在してゐた。）然し、その無訓練と無組織とは、この我利々亡者の旋風に對して無力に均しかつた。

要するに彼の見た佛蘭西政界は、（否社會自體が、經濟界が、學界が、文藝界が、一切がそれでもあつた！）『無秩序』の一語に歸するものであつた。中心のない政治、權威を持たない政治責任と指導とを缺いた政治、統一と持續とを放棄してゐる政治――混亂と撞着と矛盾とを極めてゐるこの無秩序の政治は、過去千年に亙つて見事に築き上げられた祖國の光輝ある大殿堂の基礎に、白蟻のやうに喰ひ入つてゐるのを、彼は見たのであつた。『數』の無遠慮な專制とその蠻行とのまへには、眞の見識、眞の國策、眞の理性が、常に踏みにじられて行くのを、彼は見たのであつた。

それ許りではなかつた。若い彼の胸を一しほ強く打つたのは民主主義の政治が當初の理想にはまるで反して、少數者は益々富み榮えるのに、多數者は益々貧困と抑壓とのなかに降ちて行くといふ現象であつた。『自由』の爲めに『正義』の爲めに王政を倒して共和政を布いたといふのに、事實はこれに反して、多數の國民は（貧しければ貧しいほど一層）：醜惡なる金權政治の下にその『自由』も『正義』も取り上げられて、少數のデマゴーグと富豪、企業家（共和政治にあつては、國家が既に資本家の天囚であつた！）との縱な搾取のまへに戰慄してゐねばならなかつた。こんな不正義な不自由な歴史が、今まで佛蘭西の何時の時代にあつたらう……。

モーラスは、目前の共和政治に絶望した。然し、それを撃つ方法としては、未だ彼の頭に何等具體的のものは浮び出して來なかつたのである。

○

モーラスは、今更のごとく古代から近代に亙つての各國の興隆と衰亡、――その基礎を爲すその時々の制度(レジーム)の變化とその得失とに、強い研究心を煽られて行つた。殊に古代希臘の消長が彼の心に焔を投じた。『政治的告白』のなかで彼は、この時代に讀んだアンリ・ウーヴレ Henri Ouvré の大著『希臘思想の文學的形式』"Formes littéraires de la pensée grecque" について當時書き附けて置いた彼の感想を約十頁に亙つて採用してゐるのを讀むで見ても、彼の古代希臘研究が如何に深みに達してゐたかが窺知できるのである。彼は、歐維巴を生むだこの大きな母胎から、――古代希臘のなかから、あらためて昨日の佛蘭西と今日の佛蘭西とを眺め廻したのであつた。……

然し、モーラスは決して書齋人ではなかつた。わけて南佛プ

ロヴァンスの熱い血を享けて來た詩人の彼にとつては、街上の現象が都度強い反應を彼に齎らすのを止めなかつた。

彼は、過去の文明の華とも言へるプツサン、ローラン、ヴィンチ、チチアニ、ラフアエルなぞを收めてゐるルーヴルの畫廊が、アルセナルさてはマサリンヌのサロンが、日に日に廢滅に瀕して行く光景を眼の前に見た。(民主主義の政治は、こんなものに關心してはゐないからである！) 彼の愛惜と憤懣との念は人類のかゝる至寶を擁護し維持することは、彼の當然の義務であることを訓へるに到つた。

また彼にとつて、遠く鄕里のプロヴァンスを去つて巴里にその日その日を送ることとなつてから、一しほに鄕土に對する愛が心のなかに燃えるのを禁(とど)め得なかつたのだつた。殊に彼は、大詩人ミストラールとは言葉を交はした仲でもあつた。ミストラールを取り巻いてゐたオーバネルやルーマニルやのプロヴァンス生粹の詩人たちの作品も、彼にとつて幼時からの愛誦であつた。これ等の作品に盛られてゐる鄕土の言葉と傳說と詩とは巴里にある彼に燃えるやうなノスタルジーの熱情を起させて止まなかつた。彼は、このノスタルジーの焰に驅られるやうな念(おもひ)で、今更にその鄕土の過去の美くしい歷史なり傳說なりを讀みはじめた。そうした彼に、餘りにも明らかに映つた姿相は、一七八九年（バスチーユ牢獄破壞の年）を劃紀とするやうに、その前後に展開する地方分權(デサントラリザシオン)と中央集權(サントラリザシオン)との鮮やかな對照(コントラスト)であつた。一切の政治・文藝・風俗・傳說のうへに見られたプロヴァンス特殊の深い美くしい地方色は、この革命期を境として波に洗はれたやうに褪色して行つてゐるのだつた。そして、何處も彼處も同じな、獨創も個性も失はれた厚い砂塵が、そのうへを窒息的に蔽ひ冠さつてゐるのであつた。

然しこの現象は、ひとりプロヴァンスにのみ限られたことではなかつた。ノルマンディーが、ブルターギュが、アルサス・ローレンヌが、みなその通りだつた。王政當時に造り上げられた地方の自由と自治とは、その美くしい傳說・風俗とともに、日一日と中央からの強制的で人爲的な權力の洪水に流されて行くのであつた。

この亡び行く「地方」を防禦しやう！ これこそ、モーラスが先づ最初の公の聲明とも言へるものであつた。

○

彼は、かうして好んで佛蘭西の國內を步いた。全體の調和を破ることなしに然かも個々に生命の波を強く打つてゐた地方地方が、王政の終熄とともに、その生命の脈搏を止めて卑俗(ヴュルガェル)で

強力な「國家」の機械的な支配の下に移され、然も統一も脈絡もない一つの屍體にさせられてしまつてゐる光景は、彼を更に遠い省察まで運ばない譯には行かなかつた。殊に佛國から捥ぎ取られたアルサス・ローレンヌの旅は、共和制とそれから生れ出た帝政（アンピール）とに對する激しい憤りを、彼に抱かせずには措かなかつた。かゝる敗北と屈辱とは、王政時代の歷史では嘗て見ることが出來ないものであつた。その時代は、王を中心として國民が一體をなしてゐた。外敵の侵入を易々と防ぎ得る團結があり一致があつた。それが王政の終熄とともに、內輪の鬪爭となつた。――政黨同志の鬪爭、統制のない資本家同志の鬪爭、それから階級間の鬪爭。みなそれは民主主義の持ち來らせた「惡」なのだ。……

彼は更に海の彼方希臘の旅へと上つた。（この折の紀行文集「アンティネア」“Anthinea”は、ひとり當時の彼の思想の經路を知り得る許りでなく、おそらく從來希臘及び北部伊太利について書かれたるもののなかで最良の書の一つと學げ得るであらう。）祖國を離れて、却つて祖國をよく觀ることができた、とは彼の感想でもあつた。彼は、嘗て王政當時の佛蘭西が諸國のなかに有してゐた威敬と愛着との地位が、今日は恢復しがたき不人氣と輕侮とに陷つてゐるのを目睹した。また王政當時に佛蘭西の領域だつたものが、共和制になつて他國の手に渡つたものが、尠くないのを、まざまざと痛感した。希臘の興亡が、當時の國家の統一と不統一とから來てゐることを、今更にその土地を踏んで感を強めたことは、言ふまでもない。――

彼の思想は、こゝに確立した。十數年に亙つての讀書と冥想と見聞とのなかに醸された液體は、こゝに漸く酒となつた。首領なく父なく王なき國家は、衰頽の坂を滑り降ちるの外はないこと、國民の福祉と安全と獨立と自由とを永久に獲るの途なきこと、佛蘭西と佛蘭西國民とをこの破滅より救ふ爲めには共和制を排撃して王制を樹立する外他に到底方法は無きこと、――彼の政治的原理と信條とはかうして漸くこゝに確立したのである。

而してモーラスの樹立せんとする王政は、佛蘭西を過去千年餘に亙りて統治したるブールボン王朝の復辟に外ならない。何故となれば、この王朝こそ歷史とその詩との生める子であり、數世紀の底より我等に來りたるものであり、從つて我等を傳統的に精神的に導き得るものであるからである。一國の統治者の權威なるものは、決して人爲的に作成せる權力のうへには現はれ得ないからである。

かくして、徹頭徹尾理論的なモーラスの王政「改宗」は成つ

た。爾來二十数年、彼の原理と信條とは些かも動かない許りか今日では數十萬にも達する同志が生ずるに到つたことは、前記した通りである。

○

モーラスのこの政治原理と信條とは、二十年來彼の書いた一切の著書及び記事の所在に明らかに現はれてゐるが、最も純粋且直接にこの原理を取扱つたものに、七百頁にも達する部厚な著書『王政に關する吟味』"L'Inquête sur la Monarchie" がある。こゝで彼は、彼の抱く政治哲學を根本に溯つて説明し解説してゐる許りではなく、彼の提唱する王政に對して理論的若くは實際的に反對してゐる一切の議論を洩れなく俎上にのぼせてそれを分析し解體して以て此等の反對論の無根據にして無價値なることを縦横に闡明してゐるのである。彼の説に私淑すると稱するものも、反對に彼の説を否認すると稱するものも、世上頗る多いが、兩者共先づこの『王政に關する吟味』の著書に溯つて、モーラスの提唱する學説の眞髓を理解してからでなければならないとせられてゐるのである。

この著書に竝んで、ひとりモーラスの名篇とするに止らず今では明らかに一つのクラシックとしての取扱ひさひ受けてゐる作品に『叡智の將來』"L'Avenirde L'Intelligence" といふのがある。これとても上梓以來約三十年にもなるものであるが、新らしい讀者は殖えこそすれ、すこしも減退する模様はないと言はれてゐる。この論文は、『三つの政治思想』"Trois Idées poltiques" (シャトーブリアン、ミシュレー、サント・ブウヴの三人を取扱つて彼等のデマ的な民主主義思想を檢討したものである。)等とともに、佛蘭西革命の思想が、氣紛れで移り氣で責任感とて毛筋ほどもない輕薄な文學者たち(取り分けて浪曼派に屬する――)に從つて如何に釀成され傳播せられたかを、的確な史眼で説いた名篇である。同時にそれ等の文學者が、革命に依つて出來上つた新社會――今日の共和制度の下にあつて、如何に政治派から出版主からさては一般の讀者から、侮辱と酷使と嘲弄を受けねばならなくなつてゐるか、これも王政時代の文學者の純粋で自由だつた地位に較べて如何に顯著な相違があるかを、歴史に卽いて説いてゐるのである。

從來新聞雜誌に現はれた論文を集輯したものに過ぎないが、一二年まへに上梓せられた相當部厚な『雲霧の君主たち』"Les Princes des Nuées" (この『雲霧』は希臘哲人の用語から來てゐる。漠として捉へ所のない雲霧のごとき然かも毒氣を含める思想――要するに一般の左翼的思想を指したものである。)は、

彼の政治原理の探照燈で照し出した現代政治家の發露である。こゝでは自由主義の政治家たちから最左翼の政治家ジャン・ジョレス邊までの殆んど現代佛蘭西の政治家の一切を舞臺にのぼせて、彼一流の犀利な精確な筆で解剖してゐる。（犀利で精確な筆！　批評家アルベール・チボーデーは、『新佛蘭西評論』誌のなかでこの著書を批評した一文のなかに於て、モーラスの文章こそは眞の意味でアナトール・フランスの唯一の生きた後繼者のそれだと激賞してゐる。）こゝで讀者は、彼の政治原理の『應用』を遺憾なく見せて貰ふことができる。

○

彼の政治原理が、哲人オーギュスト・コムト Auguste Comte に負ふ所鮮くないのは、周知の事實である。コムトの哲學のそれを實證哲學の名で形付けることができるとすれば、モーラスの政治原理は取りも直さず實證政治原理だと稱ぶことができやう。

モーラスに『オーギュスト・コムト』"Auguste Comte."の著がある。四十頁前後の短篇に過ぎないが、モーラスのコムト傾注を、――といふよりも、モーラスの政治原理の鑛脈を何よりも適確に採り得る好資料たるを失はない。

この文章の初めにモーラスは書き記してゐる。――

『時々、安らかな夜の勞作の眞中に、疲勞から來た不安の危機が、精神を惱みと混亂とのなかに投げ入れることがある。ペンは進まなくなり、思想は規則正しく動いて行くのを止める。立ち上る。不動から來た麻痺狀態を揺り動かす。然し、散歩も休息も失はれた安堵を再び精神に戻して呉れない。この場合必要なのは、精神的で且それに適はしい姿相をもつて感動を與へて呉れる一の助けを求めることだ。詩人に助けを求め、若くは科學のある類集を披いて見るといふ場合ではないのだ。純粹の科學はこの場合餘りに冷え過ぎるし、また詩もこの場合無限の容器のやうに見えるからだ。自分はこの場合、文字通りにはポジティヴィストではないとしても、かゝる折コムトの教訓と論理とを想ひ出すことができる人があれば、それは幸福な人々だと信ずる。……』

かう書いて來た彼は、『夜の沈默のなかに、半聲で』繰返へすのを常としてゐるらしいコムトの幾つかの短かい言葉を書き記してゐる。

『秩序と進歩と。』

『家族。祖國。人類。』

『原則として『愛』。基礎として『秩序』。目的として『進歩』。』

『一切は相對的。これこそ唯一の絶對原則。』

『排除するが爲めに導き入れる。そして最後に建設する。』

『豫見せんが爲めに知悉する。そして最後に準備する。』

『精神は常に心情の支配者でなければならない。決して心情の奴隷であつてはならない。』

『進歩とは秩序の伸展である。』

『服從(スーミツシオン)は、完成の基礎である。』

『最も高貴なる現象は、到るところ最も野鄙なる現象に從屬してゐる。』

『生ける者たちは、常に、且益〻強く、死せる者たちの爲めに必然的に支配せらるることとなる。』

『人間は、益〻強く『人類(ユーマニテ)』に從屬せられて行かねばならない。』

優婉と纖細と堅確と、――それを一樣に包容してゐるこの比べやうもなき確かさは、『實證主義(ポジテイヴイズム)』といふ無味乾燥なる言葉には似も寄らぬものと言ひ得やう。然しこの美くしき語句のなかの世界こそ、所謂實證主義の核子なのである。モーラスの政治哲學の意圖する所も、實にこれに外ならないのだ。

○

自分は、モーラスの政治原理と言つた。然し、この政治原理は畢竟する所單純なる政治現象に限らるるものではなく、の一切の現象――宗教の世界、經濟の世界、乃至文藝學術の世界にまで及ぶべきもので、言はゞ一つの世界觀の體系を成すものなのである。然かも、原理それ自體がこの廣大な構成を有してゐるのみではなく、これに附屬する戰術自體(これはむしろアクシオン・フランセーズの團員の有する戰術と言つた方が適切かも知れぬ。)も特異な精神と形態とを有して居り、優に研究の對象とすべき價値を保つものである。然しこの原理と戰術とをこゝに解說することは、限られたる紙上で到底不可能の事であると言つていい。從つてこの解說はいづれ他の機會に讓ることとして、自分はこゝに彼の政治原理の極めて大略の骨子だけを紹介することとする。――

モーラスの王政主義が、冷靜な觀察と理論から來てゐることは前に書いた通りである。彼は先づ過去の各國の歷史、別けて佛蘭西の過去の長い歷史に依つて試驗濟みになつてゐる試煉にその基礎を置いた。そして絶對の理想を、比較的な且即時實現できる可能性のある善政に結び附けることに努めた。

彼が共和制なり更に廣汎に言つて社會主義なりを排擊するのは、共和制乃至社會主義それ自體を憎むからではなくて、それを生みまたそれから生まれる無秩序を、數の壓制と驕行とを、

厭惡するからである。だから彼は、地方的に夫々共和制度が布かれることには些かも反對でない。たゞその地方々々を結び付けこれを調和統一する有效なる中央權力の樹立を條件とするのである。

國民にとつて最高の善は、秩序である。他の一切はこれにかかる。——安寧、獨立、富裕、自由、進歩……の一切が。(無秩序の狀態に置かれて最も苦しむ者は、決して社會の上層にある少數の者たちではなくて、大多數の國民なのだ。殊に見よ、革命勃發に際して最も塗炭の苦を甞めさせられるのは、何時でも何國でも國民の多數を占める階級なのだ、所謂プロレタリアなのだ……。)

然し世の民主主義論者は抗言する。民主主義を組織化したらいいではないかと。が、これが絶對に不可能事であることは、民主主義の本質が、數に基礎を置く平等、混亂、無定形、不統一、塵埃である、ことから見て多辯を要しまい。況んや組織化といふことは、差別を附けることと階級を設けることであつて、正しく民主化の正反對なのだ。從つて、民主主義を組織化するといふことは、結局民主主義を破壞するといふことに歸着するのである。見よ、勞働組合を、コオペラチーヴを、さては階級鬪爭なるものを。これ等は孰れも民主主義組織化の爲めに爲されたる試驗と見得る。しかもそれは一として特權の要求に外ならないのではないか？

民主主義は一の權利とは言ひ得ない。何故とならば、秩序に反する、さては全體の生活に反する個人の權利なるものは有り得ぬからである。それのみではない。事實としても民主主義は存在してゐない。世上の大部分の現象を見ても、それはコムトの言葉通り「欺瞞」であり「恥づべき虛言」であるに過ぎないではないか？ それが眞に實現せられたことは過去に於いてなく現在に於いてもない。元來實現し得べきものではないからである。然かも唯名のみに過ぎない、——乃至傾向だけに過ぎないこの民主主義の息吹のかゝる所、見よ一切は忽ちに色が褪せるのだ。國家を破滅に瀕せしめ、社會的の結束を破り、風俗を頽廢し、人間を痴愚にするのだ。

それ許りではない。民主主義が確言し得る所のものは、混亂のなかに於いて觀念の晦闇、原則の亂雜のみである。プルードンが、民主主義とは嫉妬だと言つたのは正しい。その癖それを正義だと信じてゐるのである。かくして民主主義は、非物理的な平等なるものを高調しながら、世にも嫌忌すべき數々の不平等を實現してゐるのだ。そのなかでも別けて最も非人間的な不平等は、富の不平等だ。見よ、民主主義は常に必然的に金權政治に終り、更に專制政治、武斷政治にも移轉する。實に世に民主主義ほど社會的不平等の種子を植え付けるものはない。……

○

モーラスは、佛蘭西革命以來、別けて第三共和制以來、民主主義の思想(一切の左翼思想と言つた方が正しいかも知れぬ。)が、如何に佛蘭西の國家と國民とに『惡』を滿喫せしめたかを遺憾なく暴露する。些かの論爭が忽ちに展がつて政府を國家を國民を死地に陷入れる。人口が減退する。官民を通じての官僚主義の瀰漫。智識階級の貧困。イニシアチーヴの衰滅。それとは反對に大衆の猜疑心の增大。……これが一として、民主思想の賜物でなかつたものがあるか?

民衆の爲めなりと稱しながら、結果は正しく民衆自體を殺すのに役立つてゐるに過ぎない民主主義を死ぬまで排擊してそれに代つて眞の民愛主義 Demophile を樹立しやうといふのが、モーラスである。それには、過去の佛蘭西が、この上ない好實例を提供してゐる。王の親政こそこれである。王のみが一視同仁の政治を爲し得る。王のみが金權政治を專制政治を武斷政治を芥除し得る。王のみが國家全班の利益を體現し得る。(一黨一派の勝利は、乃至一階級の勝利は、斷じて國家國民自體の勝利とはならない。然し、王のみは國家國民の消長のまゝに消長する。)

勿論、各代の王にルイ十四世のごとき傑物のみを期待することはできない。然し如何に凡庸なる王と雖も、民主主義の制度に依つて生み出された傑物の政治家よりは、結局國家國民にとつて善政を布き得る。これが豫想でなくして、現實の眞理であることは、過去千年の王政下の佛蘭西と百數十年の共和政下の佛蘭西とを比較すれば、誰にも首肯のできることである。(勿論この歷史の研究・檢討は、ラヴィス、セーギョーボス、オノトオ等共和政治下の寄生虫的史家のデマと虛僞とに充ちた著書に依るべきものでないことは、言ふまでもない!と彼は言ふ。)民主主義の生むだ政治家は、骨の髓まで選擧區とその黨派との——然かもそれを利用して個人的野心の滿足を圖らんとする者たちである。政治家としての王は、先づその血に依つてその雰圍氣に依つて幼時からのその教育に依つて、常に傳統的にして且持續的なる國策そのものの表現である。彼は、黨派と黨派とをさては階級と階級とを鬪はせるよりも、それを調和融合せしめて國力の伸展を來さしむることに個人的の利益をも受くべき立場に立つ。

この王の親政を扶翼すべき大臣は、勿論政黨の代表者ではない。選擧に依つて地位を占めるのでもない。政務と事務とに充分練達してゐる士ならば王の指命に遵つて誰でもいい。また國家の眞の幸福利益が要求する限りは、終身その職にゐてもいい。これでこそ、永遠の國策の遂行がはじめて期せられる。

議會？　勿論民主主義の生み出したこの最悪の制度は早速廢止せられねばならない。然し眞の民の聲を聽くことは常に必要だ。この爲めには、職業別に依る代表者を集めてその職業上の造詣を吐露せしむれば足りやう。……

○

モーラスの政治原理が個人感情を離れた純理的のものであるやうに、その宗教觀も亦純理的な立場から來てゐる。即ち、王政の基礎が統一と持續と權威との歡心から來てゐることは、そのまゝヴァチカンを中心とし運行する加特利教の精神及び形態と合致する。この理論的檢討に加へて、佛蘭西の王政が從來加特利を形質兩點から支持して築き上げられたその歴史的事實を重視する。かくして必然的にアクシオン・フランセーズの政治運動は、加特利のルネッサンス運動と抱合することになる。勿論信教の自由は團員の勝手としても、加特利の創り上げた構成をば、彼等の政治形態の模範とし要件として尊重し維持しやうとする。

この意味で加特利にとつて忠實な擁護運動とも言つたこのアクシオン・フランセーズが、過去五年に亘つてヴァチカンとの間に紛爭を續けてゐる有名な事件は、ひとりアクシオン・フランセーズの歴史のうへに於いて興味多き問題である許りでなくヴァチカンの今日の政策、——殊に所謂外交政策を探究するうへに缺く可からざる好資料であると思ふが、これも他日を期することとして、この紛爭の結果アクシオン・フランセーズ運動が相當の痛手を負つてゐることだけは否定し得ない。殊に、加特利教徒の地方の素封家などで從來この運動に相當の資金なぞを供給してゐたものが、この事件以來それを止めた爲めに、運動資金の調達が極めて困難となつたことは現實的なその最も大きな痛手だつたらしい。この意味で、對ヴァチカンの問題は、アクシオン・フランセーズの運動にとつて極めて大きな受難でありその受難時代は今日も未だ續いてゐると言はねばならない。

が一方に於けるこの受難は、他方に於いて好都合な反動を生むこととなつてゐる。團員の結束がこの試錬で益々固くなりつゝあることだ。また、熱烈な同情者乃至同志が却つて多くなりつゝあることだ。この春の初めの羅甸街（カルチエラタン）の學生大會に一萬餘の學生を集めたといふこと、續いて夏の終りに暴風雨のなかの巴里郊外の屋外集會に一萬數千の、——殊に夥しい若い男女を集めたといふこと、これ等は從來のアクシオン・フランセーズの運動史のうへでも曾て見なかつた盛んな現象だとさへ言はれてゐるのを見ても、この間の消息は解し得る。

殊に最近この新らしい同志のなかに、ある有名な政治學者と小説家とを加へたといふことは、彼等の特別に大きな誇りだ。

有名な政治學者といふのは、榮譽ある翰林院(アカデミー)の會員シャルル・ブノア Charles Benoist その人である。現代佛蘭西のすぐれたる政治學者の一人としてその著はす二十數種の著書は、この國で政治學を修めやうとする者、佛蘭西を中心として歐羅巴の政治の發展史を探らうとする者にとつて孰れも座右に置かれねばならぬものだとされてゐる。佛蘭西の學界の誇りとともに持つ碩學の一人である。

この老學者は、昨年『佛蘭西政治の諸法則』(レロア・ド・ラ・ポリチック・フランセーズ) Les lois de la politique française の一冊を世に問ふと同時に、「自分が今日迄數十年に亘つて佛蘭西を初め諸國の政治史を研究考察して來た結果、こゝにシャルル・モーラスが二十數年まへに既に結論に達してゐた王政の復活と全く同様の結論に漸く到達することとなつた。自分は二十數年間徒らに廻り道を辿つてゐたことになる。モーラスに對して慚愧の感無きを得ない。」との告白を公にして、公然王政運動に加盟するに到つたのである。この『改宗』が學界、特に青年學徒の間に大いなるセンセーションを起すに到つたのは固よりである。由來法文科大學の教授連の間にもアクシオン・フランセーズ運動の同志乃至同情者は鮮くはなかつた。(然し各大學を通じてこの種の教授を最も多く持つてゐるのは、醫科大學であることは興味がある。彼等の『改宗』はその取扱ふ生理學の知識から來てゐると言はれてゐる。見よ、人體の構造には民主主義(デモクラシイ)は行はれてゐない!)然し、この老學者が一生の研究の堆積からこゝに共和制度排撃、君主制度復活の結論に自然と到達したといふことは、アクシオン・フランセーズの運動に百鈞の重さを加へたといふ許りではない。恐らく佛蘭西の政治史自體の上にあつても一つのエポックであらうとまでされてゐるのである。

○

ブノア教授の改宗と前後して王政主義に改宗した小說家に、ビネ・ヴァルメール Binet-Valmer がゐる。

アクシオン・フランセーズ運動が、數多の大學教授をその同志として持つてゐるやうに、すぐれた數多くの文學者をも持つてゐる。モーラス自身が、さてはレオン・ドオデエ自身が現代佛蘭西文壇の最高峯の一つ一つを夫々形作つてゐることは言ふまでもない。『新佛蘭西評論』(ヌーヴェル・ルヴィユ・フランセーズ)の批評家アルベール・チボーデーが同誌のなかで『今日わが國の文學者で『アクシオン・フランセーズ』紙を毎日讀んでゐない者は一人もゐないであらう……』とまで言つてゐるのを見ても、その消息は判らう。殊に新進の小說家として、一昨年のゴンクール賞を獲得したコンスタン・ウエエル Constant-Weyer 及びバルザック風の深刻怪異な作風で文壇を駭かした『サタンの太陽』の作者ジョルジュ・ベルナノ

ス Georges Bernados の兩人を彼等の同志のなかに數へてゐることは、彼等の大きな誇りでもあつた。それは今度、同じ新進作家の花形ビネ・ヴアルメールをも加へるに到つたのだ。

ビネ・ヴアルメールは、從來巴里選出の代議士テータンジエの統率する『愛國青年團(ジユンネス・パトリオット)』Jeunesses Patriotes の團員であつた。(巴里の大新聞の一つ『エコー・ド・パリ』紙はこの團體の半機關紙だと言つていい。)然し彼は、この愛國青年團が左傾潮流に對する強力なる反撥的反動的の團體であることは間違ひないにしても、そこに眞の建設的なイデオロジイのないことに、漸次失望しはじめた。そこに到ると、アクシオン・フランセーズの運動は、決して單純なる反動的の運動ではなかつた。また單純なる國粹主義の運動でもなかつた。一つの學理(ドクトリン)を有し原則(プランシップ)を有し組織を有する現代に唯一の右翼運動と言つてよかつた。同じ愛國的な運動でも、愛國青年團には見出し得ないこれ等の要素がアクシオン・フランセーズにはあつた。ビネ・ヴアルメールはかくして多年籍を置いて活動してゐた愛國青年團を去つて、モーラスの旗旌の下に走ることとなつたのである。

おそらく遠い日本にも讀者が鮮くはないことと思はれる佛蘭西小說壇の巨匠ポール・ブールジエ Paul Bourget が、相當古くから熱心な王政主義者の一人であることだけは知られてゐぬかも知れない。元來政治的傾向の全く透明だつたこの人は、個人及社會に對する永年の小說家的觀察の結果、權威(オートリテ)が、それから生れて來る統一が、秩序が、個人と社會とを生かす唯一の途であることを自然と悟るやうになり、今日の如き王政主義者となつたのだと傳へられる。

このブールジエの改宗沙汰は、若いこのビネ・ヴアルメールの改宗沙汰とは大分違ふにしても、その何れもが小說家としての鋭い人間觀察の結果に出てゐることは均しいと見ていいであらう。これ等の人たちの人間觀察と相俟つて、シャルル・ブノア教授のやうな人の數十年に亙る書齋生活に依る思索・瞑想の結果がこれと同じ結論へと到達したといふ事實だけでも、モーラスの政治原理とその一味の運動とが、充分世人の研究の對象とするに値するものであることだけは、疑ふを得まい。

が、モーラスの政治原理が果して實現できるか、アクシオン・フランセーズの運動が結局今日の佛蘭西共和國を打倒して百年まへのラ・レストラシオンを再び復活することができるか、——この豫言は、固より自分の能くする所でもなく、また本篇の目的とする所でもない。要するに本篇を成すに到つた動機は、從來我國の讀者に不當にも知られなさ過ぎた偉人モーラスの思想とその事業とを、こゝに稍克明に解說して從來の貶められたる遠近を補正しようとしたに過ぎないのである。

(一九三〇・八・京都にて)

日支外交秘話

(張作霖物語)

駒井徳三

5

汽車が奉天につくと、プラットフォームには憲兵、巡査が右往左往して何か只事ならぬ氣色である。見識越の警部補をとらへて、

「何事ですか」と聞くと警部補は一寸擧言の禮をして、

「只今小西邊門で張將軍に、爆彈をなげつけた者があつたのです」と答へた。

自分は「ははァやつたな」と思つたが、「其の結果は」と訊くと、「不成功で犯人の一人は自爆して死んだが一人は未だ捕まらない」と言ふ。

警部補の話を聞くや否や、私は急ぎ瀋陽館に駈け付けて或る人々の部屋に飛び込んだ。が既に其等の人達は何處へ消へたか影も形も見へなかつた。女中に聞くと「皆さん先程急にお立になりました」との事であつた。

これに就ては話がある。私が蒙地買收の計劃を立てると殆ど時を同じくして滿洲に宗社黨擧兵の一大事件が勃發した。目的は旅順亡命中の清朝の皇族肅親王を盛り立てゝ滿洲帝國を建設せんとするにあつた。計劃の中心は陸軍の田中義一、外務の小池張造一派の人々と袁世凱の帝政に義憤を懐ける支那浪士の面々とであつて、擧兵運動に要する資金は親王家傳來の家寶の賣立金と大倉慾翁が擧兵成功の曉鴨綠江採木公司の挑下を條件として涨々投げ出したる金百五十萬圓とを以て之に充てたと言はれてゐる。擧兵手段としては滿洲馬賊二千餘名を大連に集めて急速に訓練し之を主力とする一方外蒙古に使を派して蒙古軍を招徠し兩軍協力して奉天城を陷れ、こゝに滿洲帝國獨立の旗を飜さんとするにあつた。

擧兵本部は大連にあつたが奉天附屬地は又有力なる策謀地であつた。我々の宿所である瀋陽館は遂に擧兵軍司令官ともいふべき土[illegible]

大佐の宿營となり見るからに嚴めしい人々の出入が頻繁となつた。佃信夫、中島眞雄、川島浪速等の大浪士を始めとし有名無名の小浪士さては風を聞いて集まる非職將校連中等の往來で奉天附屬地は時ならぬ賑を呈し、金六、金城館、粹山などの旗亭からは連日連夜絃歌の聲が聞へて景氣のよい事限りがなかつた。

時の奉天總督段芝貴は此の聲に恐をなして逸早く天津に逃げ去つた。總督を失つた奉天官場は其後任問題でごた／＼してゐる內に俺だ／＼と自己推薦宜しく飛び出して省城の主に納まりかへつた者は誰あらう我張作霖であつた。宗社運動は袁の急死と寺內總督の反對で龍頭蛇尾に終りを告げ滿洲帝國建設の計劃は支那浪人の一朝の夢と消へたが獨り張作霖のみは此の絕好の機會に乘じて平素の野望を遂げ他日彼が中原に覇を稱ふる端緒を握り得たのである。小西邊門外に爆彈は飛んでも此の幸運兒は彼が奉天將軍就任祝賀の爆竹の音と聞き流して微傷だも受けなかつた。

滿洲にも行樂の春は來た。併し我々には土地買收の緒口さへも容易に見出されない。一方鄭家屯からの情報によれば土地拂下の準備は着々進行して、今はたゞ奉天から荒務局幹部の到着を待つばかりであるといふ。たゞ幸ひ守田太夫の話では張作霖の方では何かの都合上荒務局の幹部に對して急速に出發を命じ難き理由があるらしいといふ事と又荒務局の實權を握れる副局長の闞廷瑞は每日悠々と守田病院に通つて淋病の治療に餘念なく而も闞の淋疾たるや惡性にして急速に全快の見込はないとの事であつた。我々は密に闞の淋病に信賴して稍ゞ安心はしてゐるもの、如何にすべきかと思案に耽つてゐると、そこへ一人の不思議な人物が現れた。元より支那人である。姓は楊名は忖卿滿洲は昌黎の產とある。

歲の頃三十四五歲、痩形の好男子で別に何が職業と云ふ事なきも平素大官の出入する茶屋小屋廻りに忙しく奉天官界、財界の事情に精通し、殊に其裏面的狀況に關しては張作霖を始め、數ある奉天要人の家庭の內證は勿論のこと、閨房の祕事に亘る迄詳細通ぜざるなしといふ通人であつた。

紹介者の言によると此男支那人には珍しく大膽機敏で貴公等の仕事の手先には最適任と認めて推薦する、但し其人格は保證の限りでないから隨分手を咬まれぬ要心し乍ら使つて見給へとあつた。三四度の打とけた會合で我々には彼の人物手腕も見當がつき彼も亦我々の目的を略ゞ了解した如くであつた。

「どうだ楊君、君の手で取纏め得る自信があるか」と問ふと、「まあ兎に角私にまかせておいて下さい」と、如何にも自信ありげな答へであつた。

我々は必ずしも彼に大なる期待を持つてはゐなかつた。然るに二三日過ぎた或る日の夕方突然彼は瀋陽館に驅け付けて來た。平素のニコ／＼顏に似ず其日は稍ゞ緊張の面持で無言のま

ヽ我々のすゝめる座布團にどつかと足座を組んだが、無言の程に支那服の内懐から袱紗包の書類らしいものを恭しく取り出し、彼はその一通を示して、

「貴下方の求めて居らるゝものは是じやありませんか」と言ふ。見れば達賴罕王旗の發行にかゝる土地擔保の借金證文であつた。彼の語る所によると、

何れの蒙古王府も財政難を切りぬける一の方法として北京で土地擔保の旗債を發行することがあるが、各旗債の所有者は該地拂下の場合之を蒙務局(拂下局)に提示して優先的に證書面記載の土地を拂下げ得るといふのである。

今こゝに示せるものは即ち達賴罕旗の旗債であつて王自身の署名捺印がある。一枚の額面各壹萬兩擔保地積各壹百方地(三千三百餘町歩)、而も其土地は何處から何處迄と明瞭に記載され、且拂下の場合には此證書所持人に拂下の優先權を與ふる旨が明記されてある。

實に我々にとつては驚くべき結構な書類である。殊に愉快なことには、拂下地中私の最上と睨んだ地名が彼の示せる四枚の證書に全部書き入れてあることである。尚彼の話は續く。

「達賴罕王を強要して拂下げに迄漕ぎつけた張作霖も後に至つて此の旗債發行の事を知り大に驚いた。密に之が回收を命じたが何しろ誰の手に渡つてゐるか分らぬものを秘密に回收しようと言ふのだから中々困難である。旗債は全部で拾壹枚發行されてゐるが其内張作霖の今迄に回收し得たものは此の四枚であつて殘七枚の回收には目下なほ苦心中である。之が全部の回收を見る迄は拂下は斷じて行はれない。如何に張作霖が亂暴でも奉天省民なら兎も角未だ〳〵北京人の權利を無闇に蹂躙する程の力はない」と楊先生頗る得意の體であつた。

成程これで拂下停頓の理由はわかつた。楊先生、やがて此四枚を擔保に直ちに六萬兩許り貸してもらひたいと云ひ出した。結局、買ふのならばだが、貸すには六萬兩は少し高すぎる、額面ならば貸さう。私が、此證書を持つて大連に歸り金はすぐ屆けやうと云ふと、

「いやそれでは困ります、金は明朝十時迄に必要なのです、又それを大連迄持つて行かれて萬一間違のあつた時には自分は勿論或る人が非常な迷惑をします」楊先生非常に難色を浮べたが、書類は絶對に間違ひを起さない、金は明朝十時に正金銀行で君の手から受取り給へと云ふと、彼は漸々承諾した。

「それにしても此の證書は一體誰が保管してゐるのか」と尋ねても彼は笑つて答へない、試みに

「閻延瑞だろう」と言ふと、一寸驚いて、

「貴下方閻を知つてゐるのですか」と言つて「閻の奴金に困つて私に調達をたのんだのです、然し貴下方日本人からと云ふことは絶對秘密ですからどうか其御つもりで」と念をおした。

やはり閻延瑞であつた。彼は日本人を危險と見て宗田君に斷

つて置きながら支那人のブローカーを通じて金を搜してゐたのである。

楊の辭去と共に私は其書類を懷にして城裡にC老先生を訪ねた。眞贋の鑑定を乞ふ爲である。C先生は奉天有數の蒙古學者であつて、多年蒙古關係地方の知縣、知府、道臺等に歷任した人であるが今は退いて奉天城内に靜に老を養ひつゝ悠々の日を送つてゐるのである。先生は、達賴罕王の署名捺印は眞正眞銘間違なしと言ひ、尙此書類の法律的性質に就ても幾多の先例を擧げて詳細なる說明を與へてくれた。

これで此證書の效力には最早一點の疑義はない。挪下の場合、此證書を提示して我々の權利を主張すれば足るのである。

6

楊輯鄕の手を通じて闞廷瑞に銀四萬兩を支拂つたのは其翌日であつた。玆に始めて我々は苦悶のデッドロックを打開して土地買收の前途に一條の光明を認むることを得たのである。これこそ全く怪漢楊輯鄕出現の賜であつた。怪漢と言へば楊君の外に今一人我々の土地買收に盡した不思議な人物があつた。彼の姓は潘名は幹臣號を忠國と呼んだ。潘は陸軍大尉で張作霖の探偵部長であつた。守田大夫の紹介に依て知つたのであつたが彼は陸軍大尉といつても、支那の軍隊でよく見る留學生上りのハイカラ大尉ではなく、齡既に四十を越へた容貌魁偉六尺豐の大人道であつて、如何にも張作霖の探偵部長らしい男であつた。此男が何故に特に私に近づいたか、之に就ては一條の挿話がある。

これは私が後日北京に於て公使館付武官齊藤季次郎少將(故中將)から親しく聞き得た實話である。

話は日露戰爭にさかのぼる。

奥軍司令官の率ゐた我第二軍は滿洲上陸の當初より出沒常なき露軍手先の滿洲馬賊の爲めに相應惱まされたもので、中にも金州城を根據とする靑年馬賊の一隊は其活躍最も目ざましきものがあつた賊軍掃蕩の命を受けたる軍參謀齊藤少佐は一日謀を用ひて遂に其巨魁四名の捕縛に成功した。併し捕へて見れば皆未だ廿歲前後の小孩であつたので、惻隱の情を催した少佐は彼等助命の方法に就て考究した。時恰も旅順攻圍の目的を以てダルニーに上陸せし乃木第三軍はダルニー旅順間に於ける露軍の防備不明の爲前進するに由なく暫くダルニー滯在の止むなきに至つた。乃木軍參謀山岡少佐は齊藤少佐に使を派せて露軍防備調査に適當なる助力を求めた。こゝに我齊藤少佐は馬賊助命に關する一つの方法を案出したのである。

馬賊斬首の日は遂に來た。先づ賊中最も不逞と目さるゝ一人は殘三名の面前に引出されてズバリと一刀の下に斬首された。之を見せつけられた三名の顏色は流石に土の如くに變じ頭を下げたと見ると一齊に腰をぬかして砂土に打倒れた。少佐は「汝等は助命を欲するかと問へば皆唯々叩頭號泣して只管助命を願ふのであつた。

「汝等が眞に助命を欲するならばこゝに唯一つ助命の道がある。それは、汝等露軍と連絡あるを幸に、こゝより三方に別れ、向ふ十日間を期して旅順に往復し、其間通過地に於ける露軍防備の狀況を詳細に視察して自分に復命せよ、汝等此往復に成功せば助命は勿論我

軍は永く重用して其功に酬ゆるであらう」

　少佐の命を聞いて彼等は欣喜雀躍した。彼等が釋放されて密に旅順に向つて出發したのは翌朝未明の頃であつた。かくて八日、九日と日限は過ぎて、期限の十日目の夜は來たが、彼等からは何の便もなかつた。果然十一日の未明に彼等の一人は生還して參謀宿舎の門を叩いた。彼の語る所によると

「途中の嚴重なる警戒線を突破して、辛じて旅順に入り得たが、歸路は生還期し難しと見て、暴風雨の夜に乘じ、密に一隻の帆船を盗み、海路漸く今しがた金州灣に辿り着いた」といふのであつた。彼の詳細なる報告によつて防備の狀況始めて明白となり旅順攻圍軍は漸くダルニーを出發する事を得たといふのである。

　此唯一人の生還者こそ誰あらう後年の潘探偵長其人であつた。

　爾來潘幹臣は戰役中は日本軍の爲に働き戰後は關東都督府民政部の囑託を受けて州治に貢獻する所尠くなかつた。關東州の阿片制度が潘の獻言に基いて布かれたことを知る人は少ないであらう。潘は阿片制度の開拓者ではあつたが漁夫の利は當時の關官石本慣太郎によつて占められた。石本は數百萬圓の阿片成金となり大連に城廓の如き大邸宅を築き代議士となり大連市長となつたが潘は酬いられなかつた。關東州に志を得なかつた彼は遂に馬賊時代の盟友張作霖の許に走るの外なかつたのである。然し張作霖も亦彼を遇すること頗る薄く陸軍大尉として僅かに一探偵長の職を與へたに過ぎなかつた。彼が悶々の情やる方なく再び日本人である私の懐に飛び込んだのはこれが爲であつた。

7

　潘を得て後の我々には張作霖身邊の機密は大小となく手に取るが如く知ることを得た。實際潘の行動は大膽不敵其者であつた。夜更けて人の寢靜まつた頃[illegible]の私の部屋の窓から大入道が身も輕々と飛び込んで來て小聲に聞き込を報告し明日の命令を與へると又煙の如くスーと闇に消へて行く。斯くして我々には張作霖の許に今日は誰々が來て土地拂下に就て大體何を議したかと言ふことが明白にわかる。實に愉快であつた。

　楊蝉鄕の報告によると闇廷瑞は張作霖の命令によつて殘餘の旅債の蒐集に忙がしい、然し之は容易に集まりそうにも無く之が回收されない以上拂下は行はれない。愈々拂下實行といふ迄には未だ〳〵二三ヶ月を要するであらうとの事である。そこで私は一先づ大連に引上げた。所が或日驚くべき事件が勃發した。實に晴天の霹靂であつた。それは鎌田奉天公所長からの至急親展の長文電報であつた。「蒙地拂下ゲニ關スル闇廷瑞一派ノ陰謀發露シ、關係者三名昨夜捕縛セラレ、内二名ハ今朝銃殺セラレタリ、闇ノ生死ハ尚不明ナリ御參考迄」とある。

　此電報を見るや否や自分は鎌田、守田の兩君に宛て、「電見タ我今夜發貴地ニ急行ス、關係者及其家族一同ヲ附屬地ニ收容シ保護ヲ加ヘラレタシ」と返電して即刻奉天に向つた。それにしても「昨夜捕へて今朝銃殺」とは如何にも張作霖らしいやり方である。銃殺されたのは楊か潘か、或は兩人諸共かと、汽車が奉天に着く迄は氣が氣でなかつた。奉天停車場には幸ひ奉天公所の米良君が迎へてくれて私の顔を見るなり、

「いや、やつた、やつた」と言ふから、

「誰だ、君、銃殺されたのは」と問ふと、
「小者二人だ、大者は容易に殺しやせん」
「關係者は何處に居るだらう？」と聞けば、驛の階上大和ホテルを指さして、
「こゝの二階だ、附屬地はとても危險で置かれやせんよ」と言ふ。二階を見上げると階段の横手から楊の奴が顔を出しておいでくゝをしてゐる。彼の部屋に行つて見ると楊は意氣悄沈しておどくゝしながら、
「昨日は全くの不意討で驚きました、何でも昨日行つた突然の金庫檢査でばれたらしい」と言ふ。銃殺されたのは、と聞くと閻總辨の部下二名だと云ふ。
「閻は大丈夫だらうか」と聞けば、
「いや、わかりません」と如何にも不安げである。
兎に角、ここに居ては、楊も危險だから大連に連れて行くことにした。
憲兵分隊へ大連まで楊の保護を依賴す可く出掛けると驛の入口で潘を見かけた。一寸眼で合圖をして驛長室の一隅に誘ひ、
「今日ははり込みか」と聞くと、
「昨夜からはり込み中です」
「一人大連迄保護してもらひたい者があるんだが、大丈夫か」
彼は一寸階上を指して、
「あれでせう。知つてゐます。こゝは大丈夫引受けますが、大連が少し危ない、近頃大連に宗社の殘黨がゐるので絕へずこちらから密偵が行つてゐます。普通の支那宿に置くのは危險ですから私が安全な場所を紹介しませう。すぐ手紙を出しますから明日午後そこに伴れて行つて下さい、場所は小崗子の朱春山の宅です」と周圍をはゞかりながら小聲で話した。
其晚、楊を伴れて大連に歸る途中、偶然奉天から遼陽に歸るW總參議と同車した。W君は私を一隅に招いて、
「昨夜の事件を知つてゐますか」と問ふから、
「えゝ、聞いて驚いてゐるのです」と答へると、
「だから私があの仕事は危いと言つたのです」
「閻君は殺されるような事はないでせうか」
「私は大丈夫だらうと思ふ、今閻を殺せば將軍の金錢の出入が分らなくなりますからね。然し當分は出られないでしよう」
W君は尙張作霖と閻との關係に就て種々話した上、
「兎に角あの仕事は急いではいけませんよ」
と私に注意を與へて遼陽に下車した。
楊は潘の紹介で朱春山に預けることゝした。朱春山は任俠の徒で大連に於ける特殊支那人の大親分である。小崗子の丘上に在る彼の住宅には彼の保護を求むる亡命客を收容する大地下室がある。彼の地下室では其宗社たると革命たると又何たるを問はず吳越同舟であり一切同權である。こゝは此等の亡命者にとりては日支官憲からの治外法權區域であり絕對安全地帶である。

私は楊を伴つて此地下の室にはいつて見た。部屋は八疊位のものであつたが小奇麗で掃除も行屆き光線の具合もよく普通の旅館より却つて住心地よさそうに思はれた。其隣室には宗社の殘黨とおぼはしき數人の先客があつた。私は其中で阿片に陶醉して寢ころがつて居る眉目清秀の一青年を見出して驚ろいた。それは故金壽山の一子金鼎臣であつた。金壽山は張作霖の盟友であり張と殆ど肩を並べて立身した男であつた。世人は皆其理由を知るに苦むだが、野心滿々たる張を以てすれば、兩雄並び立たず先んじて人を制したに過ぎなかつたのである。一子金鼎臣は、不倶戴天の父の怨を報ずべく、宗社黨の擧兵を絶好の機會と見て振ひ立つたが、天運彼に與せず、空しく長蛇を逸して、今は朱春山の保護下に隱れ、悶々の情を僅かに阿片の陶醉に遣つてゐたのである。私は潘から張作霖が大連に尙宗社の殘黨ありと睨んで密偵刺客の徒を放つて居ると聞いたがこれで略よ其理由を讀む事が出來た。

楊の部屋を時々訪問してゐる內に此地下室には更に不思議な御客のゐる事を發見した。我々が寢ころがつて話してゐると何處からとも無くかすかに人の呻き聲が聞ゑて來る。訊くとここの下に穴藏があるのだといふ。楊が小聲に話す處によると、こゝでは奉天からの密偵を每日平均二人位づゝ捕へる、捕へた奴は高手小手に縛り上げ猿轡を咬せてガンニーバッグに詰込みこの下の穴藏に投り込むのだそうだ。

「然し澤山溜つたら其始末に困るだらう」

「ですから夜遲く引き出しては處分してゐます」

「處分て一體どうするのだい」

「小崗子の海岸から舟に積んで沖へ生きた儘投げ込むのです」

之には驚いた、生きながらの水葬とは荒つぽい處分もあつたものである。

8

潘からの通信によると、閣の陰謀曝露後張作霖は、遮二無二拂下を急いで今では旅債の有無などを問題とせず近く拂下着手に決定した、場合によつては邪魔の入らぬよう一時軍隊を以て拂下地一帶を押へるかも知れぬ、勿論自分も近々鄭家屯に向つて出發するとあつた。

さうなつてはこちらでも一日も早く現地に出掛け當方所持の旅債面と現場とを照し合せ、何時でも荒務局に出頭してこちらの權利を主張し得る準備をして置く必要がある。假へ張作霖の軍隊が出動したとて遠慮してゐるわけには行かぬが萬一の場合の用意だけはしておかねばならぬ。私は出發に先だつて旅順に參謀長を訪ねた。參謀長は西川中將の後任として高山少將(故中將)の着任後間もない時であつた。事情を述べて萬一の際に於ける保護を依賴すると、少將は豪傑笑をしながら

「安心して出掛け給へ、骨は必ず拾つて上げるよ」

と言つたが骨になつてからの保護では少々心細い。

私は滿鐵から二人の測量師を同伴して出發した。七月下旬で雨季上りの酷暑の候であつた。SとHは前後して鐵嶺を立つた。

我々の現場に於ける劃策の中心地は鄭家屯と定めた。で今こそ鄭家屯は四平街から一瞬時で達するが其頃は普通支那馬車で二日行程、特急の場合は朝未明に立つて馬車を急がせ夜に入つてから着くのであつた。後者によつた私は隨分馬車を急がせたが、それでも三江口(サンチヤンカウ)の遼河の渡場に着いたのは日暮に近かつた。

最後の渡船は私達の馬車二臺を積むと間もなく纜をといた。丁度其時大急ぎで河岸に着いた一臺の馬車があつた。客は馬車から飛び降りて大聲で船を呼び返さうとするが船頭達は見むきもしない。私は見兼ねて船頭に一喝したので、船頭ははじめて漸々船を後に返して其客を乘せた。其人は四十恰好の役人風の男であつたが、私に丁寧に謝辭を述べながら名刺を出して、公用で鄭家屯に行くものだ、と言ふ。名刺には荒務局測量課長とあつた。私は心密に「こりやよい男と道伴になつた」と思つて早速名刺の交換をやつた。L君は私の名刺を見て、

「どういふ御用件で鄭家屯においでです」と問ふから、「四鄭線關係の調査です」と答へると、L課長は私に何を期待するのか鄭家屯の私の宿所などを聞いて是非御伺ひすると言つた。

鄭家屯に於ける私達の宿は滿鐵の出資によつて其程漸く出來上つたばかりの鄭家屯ホテルであつた。ホテルの御蔭で私達は南京蟲の襲擊から免れたのみならずホテルの位置が日本守備隊滿鐵公所などと向ひ合つてゐた爲めに支那官憲からの注目壓迫から免がれる上に非常に好都合であつた。丁度其頃は鄭家屯事件の直後で街には守備隊の外に一個大隊の日本兵が駐屯してゐた。又領事館が新設されて支那語の達人岩村通允君が副領事として着任したばかりの時であつた。

荒務局のL課長は早速訪ねて來た。種々雜談の末私を土地拂下の關係者と知る由もない彼は荒務局の内情を可なり詳細に話した。何處迄も四鄭線關係の調査員を裝ふ私は態と其話を避けてゐたが、突然彼は、

「荒務局の測量も既に終りましたから近く自分の仕事もなくなります、それに就て是非貴下に御願があるのですが」と言ひ出して新設四鄭鐵路局の技師長に向つて測量師として推擧してもらへないだらうかと云ふのであつた。L課長は人柄もよささうであり、四鄭局の技師長は現滿鐵鐵道部長の藤根理事であつたから、Lの測量技術さへ相當なものならば場合によつては推薦してもよいと思つて、

「それにしても何か君の技術を證明する材料がありますか」と言ふと、Lは最近作製した測量圖があるから御眼にかけると言つて、夜になつて一卷の大圖面を抱へて再びやつて來た。見れば拂下地の實測圖である。Lの技術の巧拙は別問題として此の實測圖は我々にとつて非常に重要なものであつた。

實は我々は買收地の測量に就て以前から非常な心配をしてゐた。器械測量などは元より許されない、それかといつて、如何に熟練した測量師を使つても他の方法によつて、短時日の間に正確な測量をとげ

ると言ふ事は殆ど不可能である。よしそれが可能であつても何の目標もない茫漠たる平原で一體何處が拂下地の起點なのか限界なのかが不明なる以上殆ど手の下しようすらなき狀態である。

そこへ偶然にもLが拂下地の實測圖を持つて現はれたことは全く空谷の跫音に等しかつた。それは拂下地全部を現はした二萬分の圖面であつたから可なり大きなものであつた。一方地(三十三町步餘)づゝの區劃線も入れてある。これさへあれば我々は現地を見て所持の旗債と照し合せ我々の拂下ぐべき地點を撰定する事は頗る簡單である。私は一覽の上、同行の滿鐵の測量師達にも見せた上で貴下を藤根技師長に推薦することをよく相談したいと思ふから此の圖面を暫く貸してくれないかと云ふとLは一寸困つた形で、

「これは役所備付の原圖なんです。これの寫は唯一枚奉天の張將軍の手許にあるきりで他に絕對に寫を取ることを禁ぜられてゐるのです。最近役所では此圖面を會議に使つて居りますから暫らく貴下に御貸しすることは一寸困りますが」

「それではかうしませう、私は今夜此圖面を見せて君の事をよく相談して置きますから明朝君が役所に行かれる時に一寸寄つて持つて行かれたらよい」

Lは就職依賴の關係からそれ以上私の要求を拒み得ずして圖面を預けたまゝ歸つて行つた。

早速同伴した二人の測量師を呼んで、

「君達の心配した測量は簡單に僕の手で出來上つた」と圖面を擴げて見せると、支那人の腕としては上出來だ、と彼等も褒めた。そこで、今夜中に模寫する事を囑すると、快諾と共に彼等は早速寫しにかゝつた。夜中に私が起きて行つて見るとコツ〱と一心不亂にやつてゐた。翌朝私が眼を醒した頃には既に出來上つてゐた。それから、完成した寫圖を二十枚ばかり靑寫眞にとるため、元氣な二人は大急ぎで大連に向つた。

Lは返事如何にと心配げにやつて來たから、

「君の技倆には滿鐵の測量師も敬服して居ました、私が必ず適當な位置を探しますから安心し給へ」と言ふと、彼も亦喜んだ。

其後Lの爲めには四鄭局とも思つたが萬一此圖面の一件が暴露した場合支那の官營である四鄭局に居ては危險であると考へて彼の爲めにはより安全で且待遇もよりよき所に推薦した。彼は今尙ほ其處に勤めて得意の測量技術を振つてゐる筈である。

靑寫眞の圖面は旬日ならずして私の手許に屆けられた。此の上は現場に行つて土地を選定する許りである。然し現場に於ける行動の根據地は白音太來とする必要がある。此の路中に鄭家屯、白音太來間四日乃至五日の支那馬車旅行は非常な苦痛なので、種々の考究の結果騎馬で行く事とした。馬ならば少し逸物を選へば途中一泊で乘り着け得る自信がある。又白音太來着後現場の往復にも馬の方が便利である。たゞ助手としての同伴者に騎馬の經驗ある人を選ばねばならぬ、幸ひSの助手高久靑年

が馬の名手であつたから同作することとした。我々二人は支那人に變裝して未明に鄭家屯を出發し、途中一泊して豫定の如く翌晩白音太來に着いた。

白音太來に於ける我々の宿所は街端れの太田醫院であつた。院主の太田醫師は添田壽一の實弟で一風變つた人物であつた。

遲蒔きながら醫術を以ての滿蒙開拓を標榜して朝鮮から遥々名醫の多きに苦む滿鐵に押かけて來た人であるが滿鐵は其志を壯とするよりも背後の鐵道院總裁添田壽一に恐れをなして希望の如く白音太來に小病院を建設しこゝに太田先生を敬遠したのである。

先生の齢既に六十に近かつたが見るからに精力絶倫で看護婦と評する妙齢の美人と二人水入らずで大に蜜月生活を樂んでゐた。その最中へ我々二人が飛び込んだことは、先生の戀愛生活に大變脅威の種となつたやうだが、我々は相戒めて荷も美人に對しては寸毫も他意なきを示した爲めに追ゝ太田老も安心されて時には美人の手に成つたと云ふ自慢の粟飯の饗應にさへあづかることを得たものである。

その頃白音太來には今一人に異識た日本人が存在した。それは自在丸金市といふ支那人相手の高利貸であつた。何でも陸軍の憲兵上りとかいつたが此男の生活は又頗る振つたものであつた。家は此邊で平房（ピンフワン）と呼ぶ支那式の普通の泥家であつたが、家の中に四方頑丈な鐵柵を以て檻を作り何人も中に入れず、自在丸は動物園の虎の如く一人其中で生活し、日常の飲食物から汚物のだし入れは勿論金錢の取引も鐵柵の間から行つてゐた。斯くして彼は參萬圓貯蓄して今は朝鮮で果樹園を經營してゐる筈である。

白音太來を中心に我々は土地選定の潛行的活動を續けた。如何に變裝しても支那人でない我々の騎馬姿は物見高い支那人達の噂の種になり易い。成るべく未明に白音太來の街を出て夜に入つてから宿に歸ることゝした。現場の要所要所には荒務局の役人が見張つてゐた。其警戒線を突破しての潛行は可なり骨の折れる仕事であつた。

殊に此地方は東ゴビーの砂漠に近い關係から日中は砂漠から吹きつける熱風の爲めに非常な暑さで、人よりも寧ろ馬の方が弱り出した或日白音太來への歸り路で大旋風に遭つたことがある。それは直徑約一哩程のものであつたが物凄い勢で土砂を捲き上げ少しぐづぐづしてゐたら人馬諸共にやられさうである。我々は咫尺を辨ぜざる砂風の中をたゞ一目散に馬を飛ばせて漸つとの事で其中心から逃れた。附近を見れば鷄も豚も犬も凹地に塊つて首を地中につき込まんばかりにして難を避けてゐた。白音太來の街上では支那人達が皆不思議そうに我々を眺めた。宿に歸ると太田老も美人も共に我々を見て腹をかゝへて笑ひながら人も馬もさながら泥の中から出て來たようであると言つた。

何しろ東西四拾哩南北七哩の廣大な地域の中から短時日の内に壹萬町歩の集團地を選定しようと云ふのであるから可なり困難な仕事である。殊に其選定を一ヶ所のみに限つておいて他日そこが萬一買收困難な事情を生じた場合を想像すると安心して引上げるわけにはゆかなかつた、どうしても此際第二第三の豫備地をも選定して置く必要があつた。然し此六ヶ敷い仕事も我々の若き元氣と高久青年の撓まざる努力との御蔭で約三週間を以て完結した。其結果我々の選定した場所は

第一候補地　錢家店より南方小清河兩岸一帶の集團地約八千町歩。

第二候補地　白音太來の東北孔家窩棚を中心とする集團地約一萬町歩。

第三候補地　錢家店の北方遼河(老河)の北岸一帶の集團地約一萬二千町歩。

以上の三ヶ所であつたが此等の土地は皆私が最初から土地選定に對して必須條項とした

一、集團地全體に亘つて地味肥沃なること。

二、蒙古農業の最大缺陷たる旱魃に應ずる必要上及家畜の飼養上豐富なる流水又は地下水あること。

三、集團地は豫定鐵道線の停車場敷地を含むか、然らざれば停車場敷地より二哩以内にあること。

等の三條件を具備せる處であつた。

斯くして我々は白音太來滯在中太田老に特に心配を與へる程の種も蒔かず又荒務局の役人達にも何等の不安をも與へずして無事に鄭家屯へ引上ぐることを得た。

最早やこれで我々の準備は凡て完了した。何時拂下が行はれようともびくともしない。所が拂下は何故か依然として停頓狀態にある。潘の情報によると闞廷端の自白により旗債の最も重要なる部分が我々日本人の手にあることが知れて流石の張作霖も其處置に窮してゐるらしい。闞が何と自白したかは知らないが或る日蒙古王府から人を以て我々に恐る〳〵旗債回收を歎願して來た。其話には如何なる條件にも應ずるとあつたが旗債の賣買で一儲を目論む人なら兎も角土地獲得の唯一の手段であるこの虎の子を今手放してたまるものかと一言の下に拒絶した。

9

我々が土地拂下を待つ間の鄭家屯生活は實に退屈其者であつた。鄭家屯は支那街としては人口三四萬を有する相應の大都市であつたが、官衙、兵營、雜穀問屋等を除く大部分の建物は雨の少ない此地方特有の所謂る平房と呼ぶ泥屋で町の外觀は甚だ殺風景なものであつた。日本人の在留者は二百名内外であつたが、其多くは金貸、賣藥商、賣淫などで餘り愉快な存在ではなかつた。

或日私の處へ出入をする支那人の一人が、「大連の滿鐵でもやはり金貸をやつてゐますか？」と不思議な事を尋ねるからよく聞いて見ると、鄭家屯滿鐵公所の社員が監督不行屆を幸に高利貸と連絡を取つて密に金貸をやつてゐた事實が判つた。其やり方の又頗る惡辣であつたといふのは貸金の返債遲延などの場合には債務者を公所の事務室に呼入れ軍人上りの其社員は軍服着用に及んで佩劍をガチャつかせ乍ら嚇し上げてゐたそうで、これには私も驚いて早速事實を調査の上本社に報告して其社員を片付けた。

鄭家屯在留邦人にとつて唯一の歡樂郷は旭館であつた。旭館

は料理屋でそこには何れも天草渡來の數名の酌婦と二三名の藝妓と稱する者達がゐた。然し料理屋といつても直ちに日本風の瀟洒な座敷を想像してはいけない、そこはやはり支那の泥家で土床の上にアンペラを敷いた部屋が所謂る御座敷であつた。

鄭家屯事件後間もない頃私は鄭家屯を立つて四平街に向ふ途中で奇妙な一隊の人達に出逢つた事がある。其一隊の先頭の婦人は大丸髷にカーキ色の兵隊ズボンで支那馬に跨つた何ともいへない不思議な恰好の大年増であつたがこれこそ旭館の女將が娘子軍の一隊を率ゐて鄭家屯に遠征する途中であつたのである。此の女將は又頗る手腕家で少し御客が杜絶えると自ら守備隊に青年將校や兵隊連を誘惑に出掛けた。それでも彼等が應じなければ後向きざまに大きな尻をまくつて叩きがなら「これでも來ないか」といつたそうである。

兎に角に鄭家屯では私も徒らに拱手して時を過すの外なかつた。併しかゝる内にも時は流れて夏去り秋逝つていつしか又も朔風吹き荒む冬景色となつた。そこへ突然滞がやつて來ての話に愈ゝ張作霖は兵を繰り出して孔家窩棚、錢家店一帶の排下豫定地を占領することに決定した、多分普通の排下は見合すだらうとのことであつた。

とう〳〵張作霖も思案にあぐんで兵力を行使するか、宜しそれならば當方もそれに應じて適當な對策を講ぜねばならぬと、種々方策を考へてゐた所へ偶然天鬼薄益三が一群の馬隊を率ゐて奥蒙古から鄭家屯さして引上げて來た。

彼は適ゝ私のホテル滯在を知つて訪ねて來たのであるが偉大なからだを緋緞子の支那服で包み朱鞘の大刀を提げ長髯を撫しつゝはいつて來た所は宛然項羽の再來であつた。蒙古ならでは見られぬ圖であるが、彼も亦此時代の滿蒙經營に一役を勤めた稚氣愛すべき豪傑であつた。彼は破鐘の如き大聲で、

「今頃鄭家屯とはお珍らしい」といふから、

「君は又一體何用だ」と問ふと、

「例の巴布札布(パプチャプ)將軍を無事送り屆けて今引上げて來た所です」と彼は勇壯な戰話(いくさ)を一くさり濟ませて、「わしは今日は貴下(あんた)に少々相談があつて來たのだ」といふ。默つて聞いてゐると、

「わしも今度で愈ゝ此商賣の足を洗つて此先は蒙古關係の實業で立たうと思ふが、貴下(あんた)一つ智慧を貸してくれんか」と、案外眞面目な相談である。

「君が實業とは神妙な話だが、蒙古關係と言へば三島海雲坊の向ふを張つてカルピスでも造るか」

「いやいやわしはあれ等のやうに一人身(ひとりみ)でない、何百の手下を養つて行かなきやならぬから蒙古に止まつて牧畜をやらうと思ふがどうだらう」

「場所は何處だ、此邊でやつて時々副業に出沒されてはかなはんぞ」

「いや大丈夫、場所は興安嶺下の大板上あたりと思ふがどうだらう。」

「あの邊ならよからう、君も興安嶺下の羊飼になつて滿蒙實業

經營の第一線に立つか」
「うん大にやるつもりだ、萬事貴下の御指導に俟つ、わしはこれから上京して資本家を捜さなきやならんが誰がよからう」
「滿蒙をよく理解した餘程勇氣のある資本家でなけりや其話は六ケ敷い、俺もよく考へて君の爲に圖らう」
彼が荒井泰治を說きつけて蒙古產業公司を造り上げたのはその後間もなくであつた。
「時に君の今つれてゐる部下は何名位あるか」
「丁度三百騎だ」
「皆相應に鬪へるかね」
「無論の事だ、例の事件の前に命の惜しい奴は皆追拂つてしまつたから今殘つてゐるのは命知らずの一騎當千の者ばかりだ」
「どうだ、君の上京の留守中に其連中を俺に貸さないか」、
「御希望とあれば貸してもよいが一體貴下何に使ふのだ、まさか貴下がわしの商賣を始めるわけでもなからう」と笑ふから
「戲談じやない、君の繩張りは決して侵さないから其點は安心し給へ、俺に一寸必要な事があるんだ」
彼は深くも問はず、
「いや大體わかつて居る、後は守二(白龍)に任しておくから御用の時は何時でも奴に命じて下さい、御役に立てるから」
と笑ひながら歸つて行つた。

守二とは彼の影に宿る渾守二青年である。天鬼には實際風貌程の剛膽さは無かつたが守二は長身痩軀見るからに剽悍な青年で天鬼の參謀長であり又實戰に於ける統帥者でもあつた。

張作霖が兵力を以て我々の權利を蹂躪するならば私は剽悍決死の此の一隊を引きつれて蹴散らかしてやらうと決心した。一日岩村領事を訪問の際それとなく私の決心を漏すと溫厚なる領事は顏色を變へて驚いた。この日支親善の最中にそんな事を始められては大變だ、と眞實心配して切言されるから、
「いや貴下になにか御名案があるならば私は決して事を好むわけではありません」
「別に名案があるといふのではありませんが、今度奉天に來られた赤塚總領事が張作霖と手を握ることに就て種々奔走して居られるやうですから、一つ此問題を赤塚さんに任して貴下方と張作霖と合辦で經營するやうに話合つて見られたらどうでせう」
「いやそれが出來れば結構此上もない事ですが果して張作霖がそれを承諾するでせうか」
「それや是非承諾させるように持かけるより外ありません、兎も角も此話は暫く私にまかせて置いて下さい」といつて岩村領事は早速奉天總領事に電報で交涉を始めた。度々往復があつて最後に赤塚總領事から「本問題は張作霖と當事者とが會見して直接交涉する事が其解決を圖る上に最も捷徑と信ずるから當事者をして至急出奉せしめられ度其紹介の勞は本總領事がとるで

あらう」といふ意味の來電があつた。岩村領事は其電報を私に示して、兎に角奉天に行つて下さいといふ。

玆に於て私は大馬容を行くが如き痛快なる場面を暫く保留して岩村領事の勸むるがまゝに奉天に行くことゝした。

10

赤塚總領事は廣東から奉天に着任して未だ間もない頃であつたが對張作霖外交に就ては非常な自信と抱負とを示して得意の絕頂にあつた。彼の語る所によると張作霖は彼が着任以來持ち出した凡ての問題に双手を擧げて贊成の意を表し一として拒絕せしものなく、例へば蒙古に於ける日支合辦の大牧畜經營問題の如き、撫順奉天間の電車敷設問題の如き、其他等々、皆易々として承諾したとある。

「張の如き與し易き人物を何故從來皆が恐れたか我輩には不可解である、我輩は差當り右の二問題を政府に打電して調査官吏の派遣を乞ひ立處に成立せしめて見せる」と得意の舌なめずりをしながら氣𦦨百丈であつた。

彼の得意の氣を挫ぐ事は餘計な話であるからその場合私は大に敬服した如な顏をしてゐたが實を云へばそれは彼が張のゆき方を全然知らなかつたのである。張は抽象的の提案には双手を擧げて贊成するが、具體的になつては一步も讓らない。斯くして始は提案者を大に苦にすが最後には蹴飛ばして問題を一步も進めない、之が彼の常套手段であつた。今總領事は所謂る抽象的時代にあるのだ。私の言に疑を懷く人があつたら滿蒙に行つて見給へ、蒙古の何處に日支合辦の大牧場があるか。奉天、撫順間の何處に電車が走つてゐるか。

對張外交の氣𦦨に水を注ぐことは餘りに彼の自尊心を傷ける恐ありとして遠慮をしたが、其交涉の手續に就ては滿鐵從事員の立場から一片の注意を與へることが寧ろ親切なりと信じて、

「總領事の今の御話は大變結構な事ですが其鐵道問題の御交涉などは滿鐵と御打合の上ですか」と聞くと、

「滿鐵、滿鐵とは何だ君、一營利會社じやないか、我々政府の官吏が支那官憲と交涉するのに營利會社と打合せをする必要が何處にある。我輩張に向つてもあく迄これは政府と政府との交涉であつて不日日本政府が官吏を派遣して調査した上更に具體的の交涉を進めると言ひおいた」と鋭鋒當るべからずである。彼は自身の提案の所謂る大問題に自己陶醉してしまつて我々の事件の如き殆ど問題視して居ないかの如くに見へた。これでは外交よりも寧ろ內交を先にしてこの總領事の自己陶醉を醒ましてからでなければ何事をも進め得ないと考へて私は一先づ從來の報告勞々大連に引上げた。

報告を濟ませて二三日すると總裁から呼ばれた。行つて見ると總裁は私に一通の電報を示されて、

「今總理大臣からこういふ電信がありました。君は此程奉天總

領事に逢つた際何か聞きましたか」と言はれるから、大要を話すと、

「未だこちらに馴れない人でせう。君御苦勞だが又奉天に行つてよく親切に注意して上げなさい」

總裁が電報を渡されたから見ると、

「奉天總領事ヨリ斯々ノ報告アリ、充分協議ノ上進行セシメラレタシ、奉天總領事ヘモ此旨訓電セリ」との意味であつた。

「それでは行つて參りますが、此の牧畜と電車とに對する會社の御方針は」と聞くと、

「出來れば結構な話じやがそいつはちと六ヶ敷からう。まあまあ適當に御挨拶しておきなさい」と總裁は笑つて居られた。

内交には成功の見込がついたから再び奉天に赤塚總領事を訪問した。まづ懷から電報を取出して、

「又營利會社からやつて來ました」と笑つて皮肉ると、總領事は電報を見て先日の氣焰にも似ず悄然と苦笑しながら、

「我輩の所へも來たよ、それで我輩弱つてゐるのだ。實は我輩張に日本政府から調査の爲に官吏が來ると言つたのだが今更來ないとも言へないしね」

「そんな事、あんた、何でもないじやありませんか。といふのは手近な滿鐵には各種の專門技師が腐る程居るのですから、そいつを政府が臨時囑託にすればなんでもないじやありませんか」

「じや宜しく頼むよ」

「承知しました。所で其方は大に協力してやるとしましてですね、私の方の例の問題は如何でせう」

「おゝそう〳〵あの問題は我輩張と堅く約束しておいたから何時でも呼び寄せるよ。所で君の方の都合がいいなら、張の都合を聞いて後程君の宿に電話で通知しよう」

これで漸と話を本筋に戻した。

愈々待ちに待つた張作霖と會見の日が來た。私は當然こちらから城裡の彼の公署に出掛けることゝ思つてゐたら彼の方から總領事館にやつてくるとの事であつた。前年宗社黨の爆彈騷ぎ以來一歩も城外に出なかつた彼が無名私の如きものと會見すべく態々危險を冒して出て來ると言ふ事を見ても如何に彼が此問題を重要視してゐたかゞ分るであらう。尤も話をこゝ迄に運ぶには赤塚總領事の斡旋與つて力あつた事は申す迄もない。

それは二月下旬の可なり寒い日であつた。朝十時の會見といふので私はSとHとを同伴して交渉の段取りを打合すべく少し早目に出掛けた。

總領事との打合によつて交渉は專ら私が當ることゝなり、總領事は紹介者、立會人兼話の脫線防止の進行係を勸めてくれる

ことゝなつた。追々時間が迫つて來るので私は玄關脇の小窓から心待ちに前庭を眺めてゐた。張作霖も此前の爆彈に懲りて今日は多分自動車で來るであらうと想像してゐた。所が十一時一寸前に總領事館の門外に當つて凄じい蹄鐵の響が聞へた。おやと思ふ間もなく一中隊ばかりの支那騎兵が脱兎の如き勢で雪を蹴立て、門內に闖入して來た。開け擴げられた玄關を見るとそこには軍服姿の張作霖が既に馬から飛び降りて出迎へた赤塚總領事と握手をしてゐる所であつた。成程彼の行動はあくまで「快馬張(クワイマーチャン)」の異名に叛かず實に輕快其者であつた。

私達は先に應接間に行つて待つてゐたがそこへ彼は總領事と並んで靜かに入つて來た。總領事は阪東副領事の通譯で私達を彼に紹介した。最初に私を「これは滿鐵の產業專門の學者である」といつた。彼は比較的丁寧に握手をした。次にHとSとを「此の兩人は日本の大資本家の代表者である」と告げた。張はHの顏を見て「お前は此邊の停車場でうろ〳〵してゐるのを見掛けた事がある」と如何にも侮つた調子で言つて握手さへも與へなかつた。日露戰爭特別任務の大勇士、今は商品陳列館長のHも此の挨拶には憤然としたが張はそんなことにはおかまひなくさつさと設けの椅子に着いてしまつた。私は話をする都合上卓を狹んで張と對座した。總領事は阪東通譯と對座しSとHとは私のお脇にすはつた。張はあの小さな體(からだ)を無作法に安樂椅子に投げかけながら私達の顏を見廻した。彼の顏には何の特徵もなかつたが其眼にだけは蛇の如き陰險さがあつた。

先づ順序として私から挨拶の口を切つた。

「豫て總領事から御聞及びの事と思ひますが、我々は日支新條約に基いて東部內蒙古で農業經營を始めやうと思つて居ります。聞けば將軍もあの地方に於て土地を獲得されるさうですが、同じく農業を經營さるゝ以上我々と合辦の形式によつて協同の經營を許さるゝならば非常な仕合せと存じます」

阪東副領事は少し鼻聲ではあつたが併し流暢な支那語で通譯した。張は銜へ煙草で安樂椅子にふんぞりかへりながら聞くが如く聞かざるが如く極めて不眞面目な態度を裝つてゐたが、

「蒙古と云つたつて廣いが君達のいふ所は一體何處なんだ」と傲然と質問した。私は小形の蒙古地圖を卓上に掲げて其位置を示すと張はそれに一瞥を與へて、

「そんな處は知らない、我輩に關係のない處だ、君達やりたければ勝手にやつたらよかろう」と輕くつつぱねた。

私は靜かに鞄の中から例の靑寫眞の大實測圖を一葉取り出して卓上一ぱいに擴げた。張は默つて其圖面を見つめてゐたが、見る〳〵彼の面上には驚愕とも痛恨とも明狀し難き一種の表情が現れた。私は「ざまを見ろ」といひたかつたが落付きはらつて「我々のやらうといふのはこの遂賴罕旗の挪下地です」といつ

たが張はじつと默して答へない。私は更に關東廳と我々の第一候補地を避けて第二第三候補地を指さしながら聲を勵まして
「我々の計劃して居るのは拂下地中孔家窩棚から河北に亙る此の一帶の地域です」といふと、流石に張は直ぐ平靜を取戻して
「わかつた〳〵、所で其計劃は」と今度はだいぶ態度を改めた。
私は事業計劃の詳細から收支の豫算までを約三十分に亙つて説明すると、其間張は神妙に聞いてゐたが、
「君はうまい事をいふが、要するに利益を少なく見積つて地價を安くさせやうといふのだ。我輩は遼西にも東山にも土地を持つてゐるが皆一割以上に利廻してゐる。あの白音太來附近の肥沃な土地で一割や一割五分の利益といふ事があるものか」と農家に生れた彼は中々玄いことをいふ。
「あなたも土地を持つてゐるか知らぬが、私の滿鐵は南は大連から北は長春、鄭家屯に至る間に數ヶ所の農事試驗場を持つて居て永年澤山の學者技師に農作の實地試驗をやらせてゐる。其成績から割出しての議論であるから絶對に間違はない。成程豐年には一割五分以上に利廻ることがあるかも知れん、その代り不作の年には收穫皆無の事もあり得る、農業を事業として計畫するには十年の内少なくも二年の大不作があるものと見てかゝらねばならん」
此の説明には張も一言もなかつたが、
「往年或西洋人が新式農業をやるからと土地を借せといふので貸した事がある。種々の大きな機械を持ち込んでやつたが失敗に終つた。君達は又あれをやるのぢやないか」と飛んでもないことをいひ出すから、
「いやいや、私はあんなアメリカの眞似をしやうといふのぢやない、此邊の農業は御國の百姓のやり方が一番よいが、たゞ種とか肥料とか灌漑とかに一寸注意を與へればそれで收穫を倍にする事が出來る。將軍は蒙古の赤峯附近でやつて居る水地(シユイチイ)（畑作灌漑農業）を知つてゐるでせう、あれを大規模にやるんです」
「おゝ君、赤峯の水地を知つてゐるか、あれをやるのか」
だん〳〵彼は話につり込まれて來た。
「よし、それではこうしよう、あの土地を君が我輩に年一割を保證するなら十年でも二十年でも君の希望通りに貸さう、その間君が何に使ほふともそれは君の自由だ」と折れて出た。
總領事は私に向つて小聲で
「駒井君こゝらで一つ妥協しようぢやないか」といふから私は輕く總領事を押へて、
「私は蒙古迄出掛けてあなたの小作人になるのはいやです、それよりも新條約によつて合辦でやらうぢやありませんか」
「新條約とは一體君何だ」
「其説明は私よりも總領事に願ひませう」

赤塚總領事は極簡單に日支新條約を説明した。
張は眞實知らざるもの丶如く、
「はゝあ、さういふ事があるのか。それにしても我輩が率先してそいつをやるといふ事は他の思惑上一寸困る」と難色を浮べたから、私は、
「何も將軍の名前を表面に出す必要はないでせう」
「それもさうだ、然し其相談はだいぶ込入つてくるから我輩代表を撰んで君の宿へ上げるからそれとよく相談してほしい」と全然拒絶の色も見えなかつたが、老猾な彼のことであるから巧に切上げて逃げを打つのでないかと思つて私はすかさず、
「私は是非將軍との合辦の成立を希望しますが最後にも一つ將軍に聞いておきたい事がある。それはあの土地の拂下を受けた將軍以外の人々から私達が土地を買ふ場合が生じてもあなたには異議はないでせうね」
「それはその人の勝手であつて我輩に異議のあるわけはないぢやないか」
「いや有難うございました」
これで會見の要談はすんだ。我々は總領事の合圖で拔かれたシャンペンを捧げて最後の挨拶を交換した。張作霖は上機嫌で戲談をいひながら出て行つた。玄關に見送ると一々丁寧に握手を交してヒラリと馬に飛び乘つたと思ふや否や疾風の如くに城裡に去つた。樂觀主義の總領事は喜色滿面で私の肩を叩いて、
「今日は大成功だつた」といふから、「まあ七十點といふ所ですな」と答へると、「いやどうして百點百點」と喜んだ。
總領事は合辦の可能を信じてゐるやうだつたが私はそこ迄は信じなかつた。然し我々の土地買收に對して今後張は從來の如き防害的態度に出ないであらうといふ事だけは確め得た。それだけでも我々にとつては非常な收穫であつた。我々は深く赤塚總領事竝に阪東副領事の勞を謝して宿に引上げた。
其晩奉天公所の鎌田所長に逢つたら、
「今張に逢つて來たが張は君に敬服しとつたよ。」と笑ひながら
「あの若い博士が滿洲蒙古の事を何でも知つて居るのには驚いたといつたよ」
私も張作霖から博士號を頂戴した事は光榮至極だが、
「君合辦の話はどうだらう」
「そいつは一寸怪しいが、張は君の所へ人をよこすとは云つてゐた。だが、役人はうるさいから田舍から親戚の者を呼んで任さうと思ふなんて話だつた。奴さん闞廷瑞に懲りたんだよ」
「闞といへば奴はどうしただらう」
「なんでも裁判が確定して十年の懲役ださうだ」
「十年とは永いな」
「それでも君銃殺よりはよいよ」

我々は張作霖の所謂る代表の來るのを二三日待つてゐたがそこへひよつこり楊輔卿が變裝巧に忍び込んで來た。

「大連の地下室もだいぶ退屈になりましたから天津に渡つて租界に隠れてゐました」と云ふ。

「時に閻は十年と決まつたさうじやないか」

「ゑい、十年と私財沒收です」

「奴も可哀相だから何とかして助け出す工夫はないかね」

「無い事もありませんが、だいぶ金がいりますよ。裁判がきまれば一日大洋一元の割で計算して受出す事が出來るのです」

「それや又便法だが十年三千六百五十元か」

「其外に多少運動費が要りますからまあ五千元ですな」

間もなく閻廷瑞は放釋されてのこ／＼出て來た。聞いて見ると監獄も金さへあれば頗るのんきなもので阿片も煙草も飲み放題とあつた。要するに銃殺さへ免がるれば生くる道はいくらもあるらしい。

彼は實に宦海遊泳の達人で後年私が京奉鐵道の車中で偶然出逢つた時にはぬく／＼と毛皮の外套に包まつて甚だ得意の體であつた。「近頃はどうだい」と聞けば大きな名刺をつきつけたがそれには「黑龍江省財政廳長　閻廷瑞」とあつた。尤も滿洲では日本側でも近頃は上は滿鐵總裁を始めとして奥飯先生の活躍さる丶世の中だ。閻廷瑞の出世をのみ不思議がるにも當るまい。

張作霖代表との日支談判はどうも瀋陽館の疊の上で足坐をかいてぢや具合が悪いとあつて、我々は宿を奉天驛上の大和ホテルに移した。間もなく代表は張の日本語通譯唐君に導かれてやつて來た。見れば田出しの百姓親爺である。張作霖は元來滿洲海城縣の田舎大高坎の百姓の伜であるが、此の親爺は成程彼の親戚らしい。合辦契約の交渉を始めて見たが自分の名前すら碌々讀めないこの親爺に話の出來よう筈がない。唐通譯が我々の話を一言一句嚙むで含める如に說明するがそれでも飲みこめないらしい。とう／＼親爺も匙を投げて、

「俺ら、種や肥の百姓話なら何でも分るが此の話は少々不得手だ」といひ出した。こんな親爺を代表に出す張作霖も人が悪い、それかといつて我々も此の親爺を無下にはねつけ難き理由があるといふのは私は元より貪慾無比の張作霖との間に合辦契約が無事圓滿に成立しようとは決して考へなかつたが、從來日本人の土地買收を猛烈に防遏した張作霖が我々との間に土地經營の合辦談を進めつゝあることは嘘も隱しもない事實である、之を種に拂下地の分配にあづかつた彼の部下から土地を買取ることは頗る容易な仕事となつた。幸ひ其頃になつて拂下地の大部分は彼の部下に割當てられ我々の最も希望した第一候補地は師團

長張景惠一派が獲得することに決定した。私は潘を呼び寄せて張景惠との買收交渉に當らせ極めて簡單に其目的を遂することが出來た。其間我々は張作霖代表の田舍親爺に毎日ウヰスキーを飲ませ、西洋料理を御馳走し、時に平康里（ピンカンリー）に支那美人を見せて歡待大に努めたが海城の田舍者にとつては奉天は花の都であつた。張作霖の親戚だけあつて女の道にかけては豪の者の爺さんは頗る悦に入つて、

「俺ら日支合辦は大好じや」と涎を垂して喜んだ。

事件後記

白晉太來の土地爭奪事件は天鬼幕下の特殊馬隊活躍の痛快なる場面を見せずに平々凡々裡に幕を閉ぢた。私は兎に角豫期通り土地買收の目的を遂したが所謂る理想郷の建設には莫大の資金を要する事を知つて之を他日に期し買收地は暫くSとHに任せて彼等が欲するが儘に經營せしむることゝしたが今は滿鐵の傍系會社たる東亞勸業公司の經營に歸してゐる。

私の土地買收に度々危險を犯して獻身的努力を敢てした潘に酬ゆる爲には私は特に關東都督府に願つて彼が老後を養ふに足るだけのある仕事を與へてもらつた。彼は今鄕里金州に起臥して悠々餘生を樂んでゐる。

私自身は此事件に依て元より物質的に酬ひらるべき理由はなかつた。それでも一擧手一投足凡て金によらざれば動く事を知らぬ殖民地人は密に之を怪しんだ。其代り此事件によつて私の體得したる生きた支那知識は到底金錢を以て購ひ得る程度のものではなかつた。後年私が日支兩國間に蟠れる多くの經濟上の難問題を無事に處理し得たことは全く此事件によつて私がかち得た貴き經驗の賜であつたといつても過言ではない。

其後Sは東拓の後援により拂下地の大規模買收を計劃したが張作霖は頑として應じなかつた。Sは同鄕の先輩寺内總理大臣に訴へた。寺内總理はビリッケン頭から湯氣を立てゝどなつたが張は「それ程あの土地が日本に必要なら兵隊を出して取つたらよからう」と嘯いた。

之を聞いた大倉喜八郎は「わしは張とは親類付合の間柄じや、わしなら買つて見せる」と態々八十の老軀をお駕籠で蒙古まで運んで、彼一流の得意の掛引をやり結局四百萬圓迄せり上げたが、それでも張作霖は「いくら御まへが親類顏をしてもあればけはいやだ」と撥ねつけた。大倉老も世間へ吹聽の手前素手では歸れず、蒙古は同じ蒙古でも草も生へないやうな奈曼（ナイマン）族の瘠地、をつかんだ。それでも存命中は負惜に米が出來るとやら芋が出來たとやら觸れ廻つたが歿後伜の喜七郞は蒙古にはモー懲り懲りだとあつて棄てたとやら賣つたとやら。（完）

獄窓の非合法黨員

陸奥啓太

1

「こゝがお前の部屋だ、今夜は直ぐ寢てもよろしい……」

頑丈な板戸が重々しい響をたてゝ閉まると同時に、金屬性の脅かすやうな音がした。錠がおりたのだ。一瞬にして、又死のやうに冷たく沈んだ夜の靜寂が支配する。看守の靴音がその中に小さく消えて行つた。

三疊間の眞中に五燭の電燈が黄色くともつて、おぼろげな物象の濃淡(ニユアンス)をうつし出す。隅の方にゴタゴタと並べてある洗面器や便器めいたもの、掃除道具、紙屑籠、壁に貼つたお上の注意書。

「これが俺の部屋か」鐵三は、心でつぶやいた。そして、一寸緊張して監房の中を一通り調べやうとしたが、直ぐに思ひかへして薄つぺらな監獄布團が敷いてそのまゝごろりと横になつた。貪るやうな深い眠が忽ち彼を襲つた。それは四十日間を警察の留置所で暮して來た鐵三にとつては、この上もない安易さと甘熟さとを持つた眠りだつた。毎日繰り返へされる××と懐柔と奸計。留置所内の寒氣と虱。濡れた指で肌をこするとズルりとはがれて來る垢。——「惡い事は云はないから早く喋つてしまひ給へ、刑務所へ行けば本は讀めるし、湯にははいれるし、床屋もあるんだ。どうせ起訴されてゐるくせに、こんな留置所に何時までも蒸し返へされてゐるのは君も損ぢやないか。」取調べに來る本廳の警部さへ、お為ごかしの言葉の蔭で留置所生活の苦痛を承認

一看守の手記

山川 伋

明け方、深い霧である。あの高い塀がわからない。

「外へ出す勿(な)」「囚人を外へ出すな」といふ聲が聞える。塀の側を特別に巡警が廻る。その掲げたカンテラが、ポカリポカリと動いてゆく。

囚人達は監房の出口で、扉の鐵の棒の間から、顔を重ねてそれを見てゐる。

×

思想犯罪者の行刑についての話が出た。私は冗談のやうにかう云つた。

「それは移動刑務所といふものがいゝ。軍縮の廢艦を使ふんだ。そして兎も角みんなを夫れへ乘せるんだ。そして日本海の眞ん中へ置くんだね。それからは輿論の趨勢に聞くんだ。たとへば教化主義で行くといふんなら夏はそれを樺太へ廻航し、冬は南洋へもつて行くんだ。若し懲罰主義で行くといふんなら夫れと反對に、冬は北へ、夏は南へ走らすんだね。それとも例の折衷主義でといふんなら、その

した。——頑强な抵抗を續け通したが、身心共に疲勞し切つた鐵三は、四十日目にやつと刑務所に送られると、早速風呂に入れられ、清潔な獄衣を着せられ、薄いせんべい布團だがまあ垢の付かない夜具の中に體を投げ出す事が出來て、皮肉な人心地を味つたのだ。當分は拷問と不潔とからは解放された。逮捕を逃れた同志を防衛する義務も果した。今更あせつた所で監獄に居ては何が出來やう。まあ落ち付いて天下百年の大計でも考へる事さ：：。「よし、五年の刑でも十年の刑でもやつて來やがれ。」

布團の上に横になるなり鐵三は久しく忘れてゐた安らかな深い眠りに落ちて行つた。

眼を覺ますと、朝の陽が小さいガラス窓から獨房の板壁に斜に射してゐる。ガラス窓の前には愉らしい木の枝がさしかけてゐて、五月の朝風に靜かにゆらいでゐる。

「この部屋は」と鐵三は直ぐに部屋の位置を考へた。「東向で少し南の方に寄つてゐるやうだ。監獄の場所から考へると牛込××町の方に向つてゐる筈だな」——與へられた僅かの事實と條件から全事態を推測する習慣を四十日の留置所生活が敎へて與れた。僅かの日射しから方向を計つたり、大略の時間の見當をつけたり、巡査や警部の片言隻語から外の事情を讀み取つたり、遠く離れた人聲の中に取調を受けてゐる同志の聲を聞きわけたり、等、等。要するに五感に與へられた一切の刺戟を殘りなく意識の中に攝取しやうとする敏感が養はれる。洞察と想像と推測がその上に極度に發達する。

布團から起きるなり、鐵三は爪先で伸び上つてガラスの窓の外を覗いた。この二階の舍房からは、灰色の高い獄壁越しに牛込××町附近らしい人家の屋根、電柱の列、電線の交錯が見える。窓の下には芝生の敷かれた獄庭、小さく扇形に區切られた運動場、靑桐、檜、少し離れて他の舍房の棟。その屋根の上を低く一群の鳩が飛んだ。

今度は部屋の中の調査だ。三疊のうち、窓に近い所の三尺四方が板敷でながしになつてゐる。便器、洗面器、水罐、たん壺等が雜然と置かれてゐる。部屋の隅には箒とはたき、粗末

邊をブラ〳〵さして置けばいゝぢやないか」と。

×

獄城はまた圜土と稱ぶ。その敷地は圜く、その建物は方、「圜は仁を示し、方は義を敎ふ」と支那の文字はしるしてゐるが、しかし事實はどうであらう。敎化と懲罰とを併せもたしたとすることは、結局その何れをも毀ふことではないか。

わたしは事實によつて之をいふ。

×

監房をまはつて見る。

そこの壁へ、自分の鄕里や、氏名や、年齡や、刑期や、そして出所の日を、釘をもて書きしるす。爪の先もて彫りつける。

なぜかういふことをするのであらう。

たとへば社や寺の柱へでもするやうに。

×

朝鮮の囚人は、入所の時、大きな草鞋を贈られる。それは健やかでこれをはいて出でよとのこゝろからであると聞いた。

內地の監獄に豆草履といふものがある。それは囚人自らのすさびで、眼にも入れたい程の——長さ一分にも滿たないものさへある——小さな草履を、それは驚くべき巧みに、紅

な箱膳の中に茶碗二個、箸が一對、大型土びん一つ。それに日本帝國監獄法が規定する所の外國米と麥とを混ぜたモッソウ飯と一日五錢也の副食物と一杯の白湯が給與されゝば、未決囚が人間として生活するための一切の準備が完全に整つた事になる。人間生活の最も簡單で、而も必要品の總てが備つてゐる樣式の一つである。

周圍の板壁には樂書の跡がいつぱい殘つてゐる。而し書いた後を看守が次から次へと削り取るものと見えて判讀できるものは殆どない。鐵三は熱心に樂書の文字を讀み取らうとした。

日本××黨萬歲

プロレタリヤ××萬歲

部屋の檢査をする看守も見落すやうな暗い場所に、針の先で書いた、細いかすかな跡がある。三月十五日に最初にやられた同志が書いたものだ。鐵三は何やら大きな聲で呼びかけたい衝動を感じた。その横には大部薄れてゐるが鉛筆で擦つた樣な字が見える。

大正十×年×月×日下獄す

同志よ健在なれ　　朴烈

おや〳〵、此處は朴烈がゐた部屋か。……上の方には半分削り取られた字が斜めに射す陽の加減で浮き上つて讀まれた。

盗人にも三分の利あり

諸君よ　出獄後は黑龍會靑年部を賴つて來るべし

「盗人にも三分の利あり(?)」……何だか少し變だな。あゝそうか『盗人にも三分の理あり』の間違ひか……鐵三はクス〳〵笑ひ出してしまつた。「三分の利どころぢやない、盗人まるもうけぢやないか」

突然、舍房のはづれの方で朝食を配給する號令がかかつた。

「茶碗の用——意」

2

第一日目の夕方、隣りの第二十六房の方から「コツコツ、コツコツ」と隔壁をノックする信號(サイン)が起つた。鐵三も直ちに返事のノックをした。第二十六房から聲がする。低いが落ち付いた澄んだ聲だ。

「あなたは監獄は始めてですか」

「そうです」

白の絹糸などもて、ひそかにつくるのである。

どちらも古い時からのことらしい。なんといふ不思議な、しかも自然な共通であらう。

×

面會に來る每に氣むづかしくなる夫のことゝろを、その妻は、時に、はかりかねて泣いて歸る。

その人に、あまりむごいが私は斯う敎へたかつた。

「あなたが、臺所へ疊一枚だけ敷いて、一日そこへつくねんと座つて、何んにも云はずに過してごらんなさい」と。

外にある人達には、せめてかうでもして、僅かに中の、而も優遇されてゐる被告の方の人達の生活を察し得るであらう。

×

時々監房のなかへ座つて見るが、それとて受刑者の氣分に、どれだけ觸れ得るものでもない。

監獄改良といふことのために、志願囚人となつて、この中に起臥した人もあるが、やはり殆ど形ばかりに終つたことであらう。

しかし、夫れだけでも、たゞ夫れだけでも爲さゞるにまさることは遙かであつて、その

「事件は何ですか」

「治安維持法――共産黨事件です」

「あなた達の仲間は隨分たくさんはいつてますね。こゝの舍房だけでも私の知つてゐるのは三十一房のKさん、三十五房のNさん、その他一部屋おき位にみんなあなたのお仲間がはいつてるやうですよ」

「どうしてK君など知つてるのです？」

「一昨年Kさんは爭議か何かで入獄された事があるでせう。私はあの時隣にゐたのです。私は今度で二度目：：：」

「あなたの事件は？」

「有價證券僞造行使――破廉恥罪で：：：あなた方にはお恥かしい：：：」

「有價證券僞造？」

「滿鐵の株券を百萬圓ばかり：：：」

「どうして、それが：：：」

「しつ!! 看守が來る」

部屋の前の廊下を見張りの看守の草履がパタリ、パタリと、もの憂げに音をさせて來る。

未決囚同志の最初の挨拶がこれで濟んだ。お互ひに何でやられたかを聞き合ふ事が、顏を見る事の出來ぬ監獄での初對面(?)の禮儀である。それから、自分のやつた犯罪の自慢が始まり、ブルヂョア法律に對する××の甚だしいもの程尊敬を贏ち得るのが獄內道德である。雜居房では自慢話が昂じてなぐり合ひが始まる。

「俺の事件は朝日新聞に三段拔で載つたぞ」

「こん畜生、俺たちが新聞を讀めないと思つて出鱈目いやがんな」

「何にッ、噓だと思ふなら誰かに聞いて見ろ」

そこで「コッ、コッ、コッ」とやつて隣りの舍房の新入りに問合はせる。「知らない」との返事でもあれば用事にかこつけて舍房の擔當さん(看守)が呼ばれる。看守はこの持兇器强盜の記事が新聞に何段拔きで載つたかの證人となるためにやつて來ることになる。

資本主義社會を××し、プロレタリア××の社會を建設しやうと云ふ、それこそブルヂョア法律や制度を屁とも思はないコンミュニストは、監獄では忽ち××される。治安維持法違反の合じるし――着物の襟に縫ひつけられた黑い囚人番號の橫に、共犯者は赤字でイロハの合じるし――を捺される。「セ印の七三七番」それが鐵三の番號だ――を付けた囚人

僅かな體驗さへ、私達をつくりかえようとする。

×

佯狂がある。それが眞症に變りつゝあるのを見た。私はさる人へさう云つた。

佯狂といふのが旣に一つの病氣ではないか、たゞ責めないで、何んとか見てやれないものか」と。しかし、さういふことは出來ないらしい。

或る苦しみをのがれるために狂人の眞似をしてゐたものが、我れ知らず眞性の狂人になつてしまふといふこと、考へるだけでもぢつとして居れないことではないか。

×

所內の生活では色々異常なものを見る。中には先天性のものもあるが、ともかく之を列擧すると次の如くである。

×

一、手淫の癖烈しきため病弱を訴ふるもの
一、特に鷄姦の相手をつくり、之を愛撫してやまざるもの
一、誰彼の差別なく鷄姦を挑む癖あるもの
一、何となしつまらぬ品をも隱匿蒐集するもの
一、外面柔順を裝ふに巧なるもの（所謂監

は、獄内で時々すれちがふ掏摸、强盜、詐僞、殺人犯……から尊敬と讃嘆の眼なざしを受ける。プロレタリアと殴民の英雄は、監獄でも又××なのだ。

日を經るにつれて隣りからの小さな話聲をはつきり聞きとれる程耳が訓練されて來る。しよつちゆう舍房を巡視してゐる看守に、會話中發見されない樣な警戒力が本能的に備つて來る。もう占めたものだ。獄則違反——隣室と話をすることなどは獄則違反で、早速看守長に呼び出されて懲罰を喰ふ——を發見しやうと、忍び足で近よつて來る看守の耳を巧に盜んで隣房との會話が發展する。

外界との一切の交通が遮斷された獨房。如何なる「人間嫌ひ(ミスアントロフィスト)」も遂には人なつかしさに惱そゝられる時が來る獨房。頑丈な隔壁と嚴重な看守の警戒との中をつき破つて通ふ囚人の言葉が、何と云ふ人間性に溢れてゐる事よ。

毎日僅かづゝ會話が週に重なり月にかさむ。交はされた斷片は一つの物語りになる。

3

砂を嚙むやうだつたモツソウ飯に幾分か味が出て來るやうになつた。監獄生活にも大分慣れた。明治四十一年制定の時代遅れの監獄法や刑則などに巧に適應した合法的方法や、看守の眼をくぐつた非合法行動などにも段々習熟して來た。

風呂場や運動場への往復の途中でちらりと見た後姿、看守の不用意から盜み見た本や辨當の差入願箋の文字、看守との口論を大聲でやつてゐる同志の聲。敏感な囚人心理には僅かのヒントが推測と判斷の端緒を與へる。自分の近くにゐる同志が少しづゝ判つて來る。日が經るに從つて判明した領域が擴大してゆく。

近所の監房にゐる同志も幾三の來た事を知つた。運動、入浴、理髮、裁判所への出廷等監房を出る機會がある度に偵察が進む。

コツ、コツと通りすがりに幾三の部屋のドアを敲いてゆく同志の數が多くなつた。遂には同志愛と激動に顫つたAの聲が、大膽にドアの外をかすめて過ぎる。

頭風）

一、上ッ調子にて少しの落付もなきもの
一、同一工場に飽き易く同一作業に長續きせぬもの
一、つまらぬ虛言の癖あるもの
一、奇行の癖あるもの
一、屢々收容者又は吏員に紛爭を持ちかくるもの
一、屢々所長面會又は大臣に請願を企つるもの
一、空想に耽り、徒らに我の强きもの
一、何事にもビクビクして、恐怖の度强きもの

×

拘禁病とも稱ばるべきものゝ中には、肺結核(死亡者自由民の約三倍)、胃の疾患、心臟の器質的疾患等もあるが、之と竝んで、しかも最も特殊なるものは急性「エピソード」性精神病と呼ばるゝものであつて、私達の屢々見るところである。

之に就ては寧ろ一米國醫師の明確な記載なこゝに參照した方がいゝであらう。左にその數例を揭げる。

甲、虐殺の恐怖に襲はれ、寢臺の下にかくれた。

——おい、元氣かあ——

　毎朝、食事が濟むと裁判所へ出廷する未決囚の呼び出しが來る。「××房、×××番、出廷——イ」。あゝ、今日はKが取調べを受けるのか……鐵三の頰には同志に對する信頼と檢事に對する皮肉の微笑が浮ぶ。「奴こさん、例の調子で檢事を手こずらしてゐる事だらうな……」

　隣りの二十六房氏が注意して呉れた。

「あなたの部屋の窓から運動場を覗いてごらんなさい、よく見えますよ。そこの窓は前にうまい工合に木の枝が茂つてゐるので運動監督の看守の方からは見えないのです」

　そこで鐵三は爪先で伸び上つて、注意深く眼だけそつと出して運動場の方を眺める。

　居る、居る、扇形に區切つて隔離された運動場の中に、狹い空地をぐる〳〵廻つて運動してゐる同志の姿が見える。一度に八人しか運動できないのだが、八人居るうち二人か三人はきつと同志である。Kもゐる、Aもゐる、Sもゐる、Dもゐる、H、K、T等々が見える事もある。運動場が遠くにあるのと、窓に對する運動場の隔壁の傾斜の工合でよく見える部分と見えない部分とがある。だが、毎日圓窓に覗いてゐる中に、いままで氣のつかなかつた同志や新らしく逮捕されて來た同志を發見する事がある。話は出來ない。相手はこつちの見てゐる事を知らない。それでも同志の元氣な姿を眺めてゐるのは何と樂しく心強い事か。

　運動場の同志を眺める事は、鐵三にとつて退屈な牢獄生活の日課となつた。

　第×舍第二十七房——それが鐵三の監房につけられた名だ——の窓からいつも覗いてゐると云ふ事は、間もなく運動場に出た同志の注意を惹き初めた。DやSは鐵三が覗いてゐるのに氣が付くと、看守にさとられぬやうに何氣ない樣子で運動をやめて立ち止る。それから第二十七房の窓に正面に向いて深呼吸をやつたり體操をやつたりして、鐵三の顏を見極はめやうとぢつと眺めてゐる。誰が覗いてゐるかをつきとめやうと一心になつてゐるの

乙、包圍して傷害せらるゝとの恐怖のため
　に病み、遂に死んだ。
丙、性的襲擊に對する恐怖を繰返した。
丁、即時に救ひ出さるゝことを妄想した。
戊、精神上の病啞を生じた。
巳、看守が自分を熊か獅子かの如く見做
　し、自分のみを監視する。又夜半、看
　守が彼の方に窃かに進み來り、銃と提
　燈を以つて武裝してゐるのを見たとの
　幻覺。

　而して此等は多く不意に發病し、急激に進行し、そして殆ど全部は釋放によつて恢復するのである。しかし釋放までに長時間を要するもの、或はこの進行のまゝ自殺、又は死に至るのも素より稀ではない。

×

　彼らは手紙の端にかう書き添える。

——私が再び世に出るといふことは、なか〳〵むつかしいのですから、一家の人々や妻子なども、だん〳〵に私のことを忘れるような習慣をおつけ下さい」と。

×

「のつちやん　　（手紙を見れ！）

　荒野にむかつて呼んだ筈ではないのに、姿も現はれなければ返事もない。それあよくな

だ。窓の前にはめられた目の細い金網と太い鐵の棒とで、窓の中の顔はよく判らないのだ。よし、信號してやれ。指で窓一杯の文字を一つゞゆつくりと書く。

Z——K——プ——ジ

鐵三が最近知つた外部の事情だ。逮捕を免かれた黨の中央委員會は猶ほ無事に存在してゐるのだ。——運動場ではまだわからぬらしい。Dは兩手を上に擧げて深呼吸の眞似をしながら、頭を大きく左右にふつた。

わからないのか、よし、もう一度だ。

Z——K——プ——ジ

まだわからぬらしい。

Z——K…Z——K

と同じ字を繰り返へして窓に書く。Dの顔が遙かな所でニヤリと笑つた。大きく首を振つてガッテン、ガッテン、ガッテンをした。わかつたな、占めたぞ。

プ——ジ……プ——ジ…プ——ジ

Dの首は又二三度ガッテン、ガッテンだ。そして兩手を高く差し上げた。體操の眞似をして「萬歳」の表情だ。

今度はくるりと後向きになつて、Dは運動場の隔壁の側にゆく。そこで兩手を上げたり下げたり、伸ばしたり縮めたり盛んに體操を始める。鐵三はその指先を見失はぬやうにぢつと見つめる。Dは鐵三からよく見えそうな壁の上に、運動監督の看守の鋭い眼を誤魔化しながら、巧に字を書いてゆく。

キ——ミ——ダ——レ

まだこつちが誰かわからないのだ。鐵三は窓に大きく自分の名を書く。

ヤ——マ——ダ…ヤ——マ——ダ

直ぐわかつた。ガッテン、ガッテン。それからくるりと振り向くと、壁の上に横なぐりに急いで走り書き。

ガ、ン、バ、レ、

そして突然、狹い箱のやうな隔離運動場の中をトットットッと驅け足を始めた。それで看守をたくみに誤魔化してしまつた。

鐵三が運動場に出てゐると、三十一房のKや三十五房のNやその他の同志が窓から覗いてゐる事がある。だが、鐵三の窓のやうに運動監督に對して地の利を得てゐないので、信號の交換はできない。

いぞ。兄貴に實際いそがしいんだから止むを得ないとしても、君は——それとも近頃は忙かいのかい？ それなら大いに結構だが、しかし、今日來るか、今日は來るかと待たせて僕を不安定な氣持にさせておくことは罪だぞ。此處にはいると不確實なことは何事によらず禁物だ。とは云へ、なにも不平に思つて云譯ぢやないから安心いたせ。しかし早く顏を見せにやつて來て貰ひたいと思ふこゝろは……いや、遠くて臆劫だらうが、一と思ひにやつて來い。近日中に。でないと、獨樂の樣にひんまはすぞよ！

君を懲罰に附する。決定は末尾に於て申渡す。(こんな調子で僕もやられたんだ)

のつちやん

今日は雪だ。僕は高い窓から、やつと外をのぞいて、美しい白いものを見た。ロシアの雪を思ひ出す。彼の地では、溫い部屋の二重窓を通して雪を眺めたが、今は冷たい獄屋の窓からとござる。しかし、牢屋はまたピリ、と冷くていゝ氣持ちだと思ふこともある。僕の窓の下は小松の植込みだ。十間程離れて、高いセメントの障壁がある。あの壁一重が千里の隔てさ。あすこで娑婆はときれてゐるのだ。壁の上に民家の屋根が見える。あの屋根

「三十一房ッ——面を出すなつ」

警戒の看守にどなりつけられる。

或る日運動場にゐる鐵三に向つてKの顔が意味あり氣な合圖をしたまゝ、すつと消へた。何かやるな!? 鐵三は立ち止まつて、三十一房に向つて悠々と深呼吸を始める。暑いので外してあつたガラス戸が三十一房の窓に突然現はれた。オヤ!! と思ふと、ガラス戸には細く裂いた障紙を唾ではりつけて五寸四方位の字が書いてある。

「ヨシンマダカ」

豫審どころではない。入獄後三ケ月も經つのにまだ檢事調べも餘すつぼないのだ。「NO!!」の意味で首を左右に振ると、紙で字の貼つてあるガラス戸はすつと見えなくなつた。

監房は幅の廣い廊下を中にして向ひ合つて二列に並んでゐる。廊下には、晝は天井の採光窓からほの暗い薄明が射し、夜はところどころにつるされた五燭の電燈が、古び果てた空虚な倉庫のやうな人氣のない廊下をぼんやりと一部分だけ照らし出す。そして夜となく晝となく、生氣のない顔をした薄給の看守がきき耳を立てながら歩き廻つてゐる。この最下級××は自由勞働者よりも惡い、或ひはせいぜい同程度の生活條件を強ひられてゐる。官服を着、劍を下げた無教養の×××者の群は——彼等の多くはあらゆる職業からの××者だ——自分の最後に取りすがつた生活を守るために所長や看守長などに對しては猫の如く卑屈で從順であり、收監者に對しては冷酷な囚人扱ひをする事によつて僅かに自己の優越感を確保する。收監者の規則違反は拔け驅け的に上役に申告され、容赦なく處罰される。彼等の眼と耳とを盜む事は、監獄生活の經驗による熟練と大膽とを必要とする。××主義者の大衆的投獄以來、彼等の眼と耳は神經衰弱的敏感さを帶びてゐる。恐怖を帶びた緊張と警戒とが彼等の間を支配してゐる。

廊下を隔てた向側の監房にTやHがゐる事は間もなくわかつた。だが通信するのは至難の事だ。廊下を隔てた距離は四、五間に過ぎないが、物々しい金具のついた部厚の扉が監房にぴつたりと蓋をしてゐる。部屋の中で怒鳴つても聲は通らない。たゞ一つ機會があ

の下に溫い部屋、熱い×がある。「溫い家庭」なるやつが一寸なつかしい。どうかするとこんなことを夢想することがある。明るい灯、溫い部屋、熱いコーヒー、愉快な談笑、——中止、斯う書いて居る所へ、雜役が「借本は何をなさいますか」と來た。官本の借覽を申込む日だ。申込んだ。なんだと思ふ? 曰く簡易生活法、土木學講話、蜜蜂飼養法、こんな本を合間々々に讀むんだ。役に立つこともあるし、空想のタネになることもある。どんな本でも何かしら書いてあるもんだ。

今日の樣な日は、頭の中で湯豆腐やロシアのヴオルシユが湯氣を立てゝ居る。

ウッ——たまらねえ、こいつばかりは娑婆の魅力だよ。」

×

「今日は快晴、俺樣の生れた日、蒲團を干します。朝、ジャム付パンを差入れて自分を祝つてやる。午後には豆大福だ。金十錢。娑婆ぢや見むきもしなかつたもんだが、とてもうまい。

近頃僕らの間に、注目すべき事實が發展して居る。こはそも何事ぞやと思はせる樣なことだ。あのケン明だと信じられた頭腦から、こんな愚劣な意見が分泌しやうとは。僕は裏

る。夜だ。夜になると監房の扉についてゐる覗き窓の蓋が外側から開かれる。覗き窓は幅一寸長さ三寸位の金網を張つた穴だ。蓋の間はその上に外側から鐵の蓋が下りてゐる。巡視の看守はしよつちゆうその蓋を上げて監房内を覗き込む。が夜になると監視に便利なやうに蓋は開け放しになる。この機會、一人が覗き窓に口をつけ、一人が耳をつければ向ふ側との通信が出來る。だが――死のやうに靜まりかえつてゐる監獄の夜に、看守の耳が盗めるか!?

今日も一日を暮した――つくづく、さう感ぜられる監獄の夜がおりた。ガチャリと不快な音、覗き窓が開いて看守の二つの眼が探るやうに監房の中を覗く。その眼が消へると隣りの監房の覗き窓を開ける音がガチャリと同じ調子で響く。覗き窓の蓋が開いた。

「山田君――山田君」

きゝ慣れた同志Hの聲が低く廊下越しに響いた。來たな!! 鐵三は覗き窓へ飛んで行つて耳を押しつける。

Hは巧に機會を捉へた。監房から監房へとつぎつぎに覗き窓の蓋が開いてゆく音で、看守の位置を計算してゐたのだ。そして、このひよろ長い廊下の最南端――Hの部屋からの最長距離――に看守がゐる時を見はからつて通信を開始したのだ。

耳をあてた覗き窓にHの太いバスが流れて來る――。

「十八房におとついTがやられて來た。Tのニュース……中央部無事……無産者新聞……赤旗でてゐる……再組織も××……彈壓が猛烈だ……それから……」

きゝつけて走つて來る看守の足音が激しく近づいて來た。

「話をしたのは何處だ――あつ」

爆發したやうな怒聲が、がらんとした廊下に籠つて反響した。その後は、かき亂された夜の空氣の中に氣味惡いおつかぶせるやうな靜かさが沈澱した。

4

夏――

監房内は赤道下の無風地帶だ。二尺四方ばかりのガラス戸を外しても、そよとの風も部屋にはいらない。狹い部屋がびつしり壁で圍

實の力の波濤の如きを感ずる。しかし僕は『海邊敍』だよ。と云つたところでこれが何んだか分るまい。自からわかる時もある。

ところで言渡しをする。こんど來る時、新宿の東京パンか中村屋で『ランチパン』を六本ばかり買つて來い。もつと嚴罰すべきところ(松屋券入店、手數料、牛乳つけて朝食)、今回に限り寛大に致すッ。

まだ博覧會記念の服と外套を着てゐるのかい。僕の想像に浮ぶのつちやんは、依然それにつゝまれてゐる。しかしそれから懸て二年たつんだ。お着更え遊ばしたかも知れないね。早くやつて來い。

來週の水曜日はどうだい?」

×

「K君、手紙ありがたう、本當にうれしかつたよ。丁度十二時頃、もう晝飯をパクつて居た時で、大根をくひながら、膝にのつけて讀み上げ、面白くて心から笑つた。何時の間にやら正一合のオニギリ飯が無くなつて來た。それに氣がついた時には、もう君の手紙を五遍位繰り返し、そしてペロリとして空腹な感じた。そんな調子で非常にうれしかつた。

何より君が元氣で居ることが僕はうれしい。何回も何回も御禮を言ひます。

きれてゐるので、小さな窓一つでは風は通らないのだ。坐つてゐる身體から油のやうな汗がぢりぢりと滲み出る。夜の蒸し暑さは持久戰的拷問だ。規則通りに八時頃「就寢」の號令がかゝる。窓の外には夕映えがまだ黃色く空を染めて、蟬の聲がじいじいいらだゝしく聞える。木の枝が風にそよぐのが見えても、部屋の中はドロッとした溜り水のやうだ。臭氣のこもつた不潔の空氣が重く澱んでゐる。——寢ろ、と言つたところで誰が眠れるものか。戰ひやうのない敵との苦闘だ。

夜が更ける。暑さのためにだらけ切つた疲勞が、不健康な眠を催させる。プーン、プーン。蚊だ。耳もとを何匹もかすめる。

蚊帳は？ あるにはある。だが蚊帳と名付ける事は出來ない。窓と同じ大きさの二尺四方ばかりの木框に布が張つてある。夜になるとこれを窓にはめこむのだ。蚊はすき間からいくらも侵入して來る。晝間に外づしてゐる間にはいつて來ないと誰が保證できるか。それに、窓にこの蚊帳を閉めると、たゞさへ暑い部屋がむんむんと蒸して來る。蚊に喰はれても蚊帳はかけたくない程だ。

南京蟲。

うとうとすると直ぐ板壁の隱れ家から乘り出して、八方からの襲擊だ。首すぢ、腕、足などの柔かな部分は翌朝腫れあがつて火の樣な熱を持つてゐる。捕へやうと待ち構へてゐると出て來ない。眠に落ち無防禦狀態になると忽ち襲擊して來る。けちな反動暴力團のやうな卑劣な南京蟲。朝、血を吸つて身動きの出來なくなつた奴が、熟し切つた胡頽子の樣に血肥りになつて疊の上に轉つてゐる。勞働者の生血を啜るブルヂョア奴!! プッリと指でつぶすと、その生臭いこと。

パンパンパンパン——パンパン——パンパンパンパンパン……夏の夜の重い空氣をゆすぶつて機關銃の爆音が聞える。士官學校や戶山學校が近所にあるのだ。長い連續音が疲れ切つて不機嫌になつた囚人の神經をいらだゝせる。鐵三は暑さで衰へた嗅覺と聽覺の中に、市街×の響と反革命の血の匂ひとを感ずる。

……「糞ッ——」

暑さ、蚊、南京蟲、不眠。

一昨日は初めての雪、一日中氣味の惡い音がしませんでした。僕の窓にも粉雪が飛び込んで來ました。たゞ一心に讀書しました。

時々あまり靜かなので、窓邊に机を据えてそれを足臺に窓から何回も首を突き出しました。が何も變つたこともなく、安心してまた本を讀みました。運動場は雪にぬれておヂャン、昨日もまだ土がぬかるんでゐるのでおヂャン、運動が二日つゞいてお止めになると、身體全體が重い煙で充滿したやうで深い疲勞が襲つてくる。そんな時には出來るだけ胸を張つて神經を搔き立てる。

そして「エコノミスト」誌の「日本銀行帳簿尻」とか、「物價指數」とか、そんな、1、2、3、4、5、6……蟲のやうにキレイに並んだ數字、それを眼で追ふてはまた讀み上げる。——そんなことを繰返して居ると、電燈がついて七時半にもなれば床につく。床についてしまへば、朝はまたケロリとした薄い頭になつちまふ。此處では疲勞は決して二日と續かない。(事實、二日も續くことを考へるのは恐しいことだ。こんなところに閉された生活をすれば、人間は誰だつて疲勞(憂愁)を朝迄持ちつゞけるものではない。こいつは本能的だと考へる。) そんな譯で一日一日が早

運動不足、榮養不良、孤獨。
四人の精神狀態はいやおうなしに均衡を破壞される。强度の不眠性、思考の偏執、理性の衰頽等々が起る。××××××の火のやうな闘意は頑としてくずれないのだ、いままではち切れそうに緊張してゐた精神の均衡が破壞される事がある。マルクス主義者のあの針金の如き强靭な神經すらもが――日本の監獄設備は、しかく超人的に惡いのだ。

夏は監獄内の發狂者や自殺者が多くなる。夜中、突然發狂した四人の凄慘な叫び聲が一晩中舍房の中に響き渡る事がある。或ひは應急手當で息を吹き返へした自殺者の無氣味なピイピイ云ふしぼり出すやうな喉音が、熟睡できぬ人々の心を脅かす事がある。暑さと不眠で好い加減に頭が混迷してゐる時に、この陰慘な叫び聲を聞いてゐると、自分も狂暴な非理性的な世界に引き入れられるやうな氣がする。

――あゝ、早く夜が明けて呉れれば好いに――。

小さい鐵窓がしろじろとする夏の夜あけ。外は牛乳のやうな霧だ。ぼやけ切つた頭に、遙かな所で鳴くカナカナの聲が軋しむやうに響く。何だか、白つぼくゆがめられた妖魔に魅せれたやうな世界だ。

「これは俺達の世界ぢやない」――そうだ、コンミユニストの身心を腐らすために、支配階級が作りあげた合法的××の世界だ。長い牢獄生活を强要して、プロレタリア精神を不具にし、壓殺しやうと云ふのだ。

鐵三は窓の側によつて、朝の冷い空氣を吸ひ、重い頭を振つて睡魔を拂ひのける。そして久しく離れてゐた階級戰の舞臺を心に畫く。神田街頭のデモを、工場地帶の石炭臭い空氣を、爭議團の緊張した本部を、同志と共に死地をくぐつた戒嚴下の幾日を。

――こんな所に何年入れたつて、俺達の戰鬪心が磨滅するものか。同志よ……。

5

牢獄の中には變化がない、だから歴史がない。極端に云へば「時間」が無いのだ。

毎日同じ時刻に起き、同じやうな物を喰ひ同じ部屋に住み、同じ時刻に寢る。この單調く、深い單調の中にとけて行く。それに幸なことに『雨も三日は降りつゞかない』。今朝は夙く運動に出た。空を見あげると冬の海を思ふ。白い海も長いこと見ない。

自由に歩きたいね。此の夏警察で一緒になつた一人の老人は、――此の男は叔父を二十一歳の時、ふとしたことから「斧」で首根ッこを叩きつけて殺したそうだ。そして十五年の刑を九州でつとめて來たそうだ。人のいゝ大阪ものだつた。僕達は「テイヤモン」（大阪では養子のこと）と呼んだ。留置所から釋放される前日、こんなことを聞いたもんだ。「東京を出ようと思ふんだが、どつちへ行けばいゝのかなあ」と。

彼の「東京を出る」といふことは、大阪の方に向つて出る（東京を）と言ふことだつた。

彼は六錢所有。大阪の方に向つて、テクで東京を出ようと言ふのだ。實に驚いたものだつた。彼は子供のやうな顔をして、「夏の夜の野道は涼しくていゝよ」と言つてゐた。その驚くべき呑氣な老人を今思ひ出す。ほんとうに羨ましい限りだ。自由に歩けることに人間は感謝するがいゝ。僕は歩く時が一番幸福で、創造力も此の時だけ湧き上がる。部屋に座つてゐると、まるで金錢登錄器（レジスター）のやうに無味

な等似的な生活が毎日毎日繰り返へされる。同じテムポを持つた同じ樂節の繰返し(レフレイン)。それが音樂にならぬやうに、そう云ふ生活は生活にならない。

「社會」でも毎日單調な生活の繰返へし(レフレイン)をやつてる人がある。多くの人々は「一日」と云ふ同じ樂節のレフレインをやつてゐる。だが彼等が「社會」と云ふ一つの集團生活を形成した時に、日々異つたテムポとメロデーと濃淡(ニユアンス)が生れ、個々人の生活を社會的歴史的に染めなしてゆく。彼等の時間と歴史を感ずる。從つて彼等は何等かの「生活」を持つてゐるのだ。

牢獄生活はロビンソン・クルソウの生活である。社會生活から完全に隔離された孤獨的生活である。ロビンソン・クルソウが木の幹に暦を刻んだやうに、囚人は自分だけの歴史を作る。だが一人で作つた歴史とは――それは生活の自然史以外の何物であり得やうか。

「黒人(ニグロ)は黒人(ニグロ)である、それは一定の條件の下でのみ奴隷となる。」

囚人として社會生活の中から抽象された日から歴史は中斷した。「生活」はなくなつた。

監獄の中で社會生活を續け、中斷された歴史の溝壠を埋める事は出來ない。二ケ年間の監獄生活を共にした一人の同志は、出獄の翌日に語つた。「まるで、ゆうべの讀みさしの本を机の上から取りあげて、讀み續けてゆくやうな氣がする」――二ケ年前にやつた生活が、ほんの昨日のやうに思はれる。そして二ケ年前の生活に新らしい社會生活をつぎ足してゆくのだ。その中間には何もない。

歴史が消滅した代りに、自然が生き生きと姿を現はして來る。

四季の變化。毎日の晴曇。風雨。寒暖。雲の形。草木の成長、成熟、凋落、等、等々。それ等に對して何と親密になり、敏感になり魅力を感ずる事か。――あわたゞしい鬪爭と煤烟の巷に、自然を見る事もなく何年かを暮して來た鐵三は、牢獄の中で始めて自然の辯證法を眺めた。

時々監房の中に迷ひ込んで來る蠅や蟻などに對しても、いままでに知らなかつたやうな親しみを感ずる。張りのある唸りをあげて飛んでゆく飛行器を、消え去るまで飽かずに眺

な、グータラな男となる。

…………」

×

三十年程も前からの行刑の雜誌など蒐めて見てゐると、實にいろいろなことが誌されてゐる。所謂行刑の祕密といふことも、少し心して見ればみな此の中から窺ふことが出來る。あの密行主義といふことを極端に考へてゐる人達は知るや知らずや、たとへば次のやうな一齣もある。

「――自分に對する態度が良好でないので自然と手當が薄くなつた。醫師として患者を治療するに一切平等で患者の甲乙に依り區別をしてはならない、否決して其間に差別的處置のあらう筈はないが、今迄隔日に注射をして居つたのも一週一日位になり、滋養品も一日牛乳二合鷄卵一個を給與して居つたものが一日牛乳一合となり、時としては與へない時もあつた。勿論本人も不滿である。所長面會もした、時々苦情も訴へたが、僕は其感情に支配せられて同情感が薄くなつたのであるか一向平氣であつた……」

これは、やがてその囚人の重患なりしに喫驚した監獄醫の所謂懺悔録にあり、倘ほ之には「――僕は病床日記に常に其容態を何れの

め入る孤獨に住む囚人の心。

運動場の茶の枝に小指の先程の卵が付いてゐるのを見付けた。茶褐色で固い卵だ。看守に知られぬやうに枝のまゝそつと監房に持つて歸つた。窓の側の陽の射す所に置いて毎日眺める。何が出て來るか樂しみなのだ、天氣の惡い寒い日には、時々息を吹きかけて溫めてやる。或る朝卵の尖端が銳利な刄物で切つたやうに横に切られて、中が空虛になつてゐた。附近を探すと、黄褐色の八分ばかりの蛾が一匹飛び出して、壁に吸ひ付いてゐた。

晝は死んだやうにぢつと眠つてゐるが、夜になると一晩中うす暗い電燈の周圍をバタバタ飛び廻る。うるさく睡眠を妨げられたが、殺す氣にはなれなかつた。そのうち、窓の金網の目をくゞつて逃げて行つてしまつた。

或る夜、流し場の隅の小さな穴から食を漁る小鼠が這ひ出した。箱膳の中にもぐりこんでゴトゴトかき廻したり、眠つてゐる鐵三の首すぢを走つたりする。出て來たあとの穴を塞いで子鼠を二匹捕らへた。艶やかな毛なみ、淡紅の小さな肢、つぶらな眼を持つた可愛い奴だ。紙屑籠の中に入れて毎日の食事を分けてやる。囚人の主たる副食物——人參や午蒡は子鼠の大好物だ。時々籠から出して部屋の中を運動させる。彼女等は單に玩具ではなくて、よき同伴者として待遇される。

一週間ばかりして、監房檢査の看守に發見された。よもや紙屑籠までもと思つてゐたのだが、此處も嚴重な檢査を免れる事はできなかつた。獄則違反として早速看守長まで呼び出されて注意と譴責を受け、子鼠は沒收されてしまつた。

春がめぐつて來ると狹い隔離運動場にも色々の雜草が芽を吹く。なづな、たんぽゝ、はこべ等々。小さな紫色の花冠の中に黃色い雄しべがのぞいてゐる名も知らぬ花に運動の足をとめてぢつと眺め入る。一日にたつた二十分間の戶外運動の時間惜しさに一心に驅け足をする程貴重な運動時間——その運動の足をとめて名も知れぬ雜草にしみじみと眺め入る程「美」と「慰め」に渴してゐるのだ。赤煉瓦塀の根もとに哀れに咲いた雜草に對してさへも踏みつぶさぬ心づかひを囚人は持つ。

運動場の青い芝生の上に、小さな石ころが

患者の事も可成書き留め樣と勉めて居るが、此患者ばかりは書きたくないと思ふた、終に擱く事を止めた」とまで、宛から刑務所といふもの丶内情を暴露せしむるやうな大膽なことまでも讀されてゐる。

しかし之でい丶のである。社會が監獄の扉を叩くことはめづらしいのであるから、監獄は自ら負ふ責任に顧みて、時には自から[illegible]し、時には進んで、社會の窓を叩くべきである。

×

思ふに行刑の密行主義といふことは、監獄のうちに於て、どのやうなことが行はれてゐるかを世間に知らしめないといふ趣旨ではない。何を爲しつゝあるかは社會で分つてゐるのであるが、その行はれてゐる現狀を見せないといふ趣旨であらう。たとへば手錠がある。時にそれがはめられるといふことは分つてゐる。しかしそれをはめてゐるところは見せないといふ趣旨である筈だ。

若しも前のやうな解釋があるとしたら、それは當然打破されねばならない。後のやうな解釋に於てのみ漸く世間が容認すべき筈である。

しかも、この二つの解釋の相違は、現在我

環状にならべてある。おや、何だらう!? 近寄つて見ると、廻らされた小石の環の中に若芽がちよつぴり頭を出してゐる。去年こぼれ落ちた蟲取撫子の種子が芽をふいたのだ。氣の付かぬ者に踏みつぶされぬやうに、最初に見付けた者が石で圍(かこひ)をしたのだ。鐵三は何やら暖かなものが胸の中に流れるのを感じた。僕達の同志がやつたことにちがひない。

その環のそばに、同じやうな小石をならべて見事に書かれた三つの頭文字(イニシアル)。

C. P. J.

6

秋の末、鐵三は轉房させられた。運動場の同志と信號してゐたのが遂に發見されたのだ。今度は西向の階下の監房で、壁は固い漆喰(しつくひ)だ。隣りの部屋との話も困難のやうだ。

コツ、コツ、コツ、コツ……。

漆喰の壁が彈力のない乾いた音を立てた。來たな……壁の側に耳を持つてゆく。かすかに蟲の鳴くやうな話聲が向ふ側でする。どうもよく聞きとれない。

コツ、コツ、コツ、コツ……。

又信號が繰り返へされる。壁の向ふのかすかな聲。

「壁に耳をぴつたりくつつけて……」

そうか――聞える。聞える。受話機の底に響くやうな、低いが而しはつきりした聲が聞える。

「君は始めてですか――事件は、事件はなに」

「治安維持法――××黨事件――」

「何だつて――××黨(?)――誰だ――君は誰だ――」

「僕か――Yだ……Yだよ」

厚い漆喰壁を通して響く聲がいきなり歡聲を擧げた。

「おい、君はYか、ほんとにYか、俺(おれ)だよ、Tだよ……」

そうだ、低いけれども聞き馴れたTの聲に相違ない。幾年かの間一緒に危地を潜り、お互に慰藉し、激勵し、論爭し合つたTの聲だ。鐵三はこの厚い獄壁をたゝき破つて、Tの胸先に兩腕をさしのべたい衝動を激しく感じた。

「おゝTか、おゝTか、元氣か。」

實として、まことに重大な意義をもつてゐるのである。

×

面會に來た朝鮮人の奥さんが赤ン坊を作れてゐた。「これを「なかの父に抱き上げさせるかどうか」といふことが問題である。

こゝではこれが大きな問題なのだ。世間の人は不思議に思ふだらう。不思議に思ふ方が正しい。

×

塀を越して羊羹を投げ込むものがある。煙草を投げ込むものがある。「俺れが出たな」と約束しておいて、夕ぐれ工場や耕耘の引き上げた時か、大方は曉方早く、巧みに投げ込むのである。しかし、かういふなかでは煙草一本の臭といふものは、棟を越してさへ嗅がれるものである。羊羹をわけ合ふけはひさへ、忽ちに氣どられてしまふのである。それでもいいと云へばそれまでゞあるが、譬へば一人について一日砂糖一匁といふことを考へれば、一とつまみの羊羹も、どんなにつよい誘惑であらうか。

×

逃走を思はないのではないといふ。逃走が出來ないとは思はないといふ。しかし逃走し

「うん、この近所は皆元氣だぞ、××房はS、××房はM……みんな元氣だ。」
「久し振りだなあ」
「うん、君は……君はいつやられたんだ」
「俺か、君たちがやられてから一ケ月ぐらひ逃げてゐたんだよ」
「外の樣子はわからないか」
「どうもよくわからないが、兎に角Z・Kは殆ど殘つてるんだ……」
「まあ心配しても仕樣がないさ。暇でも据えてゆつくり靜養と行くか……」
「飯は三度三度默つてゐても食はして呉れるし、風呂にもしよつちゆうはいれるし、申分はないや。組合の連中など一時は甘藷ばかりで生きてたからなあ」
「この上××慾さへ滿足さして呉れれば申分なしだらう」
「全くだ……看守を××ツてストライキでもやらせるか……ハヽヽヽ」
プロレタリアの同志意識は、監房の隔壁を貫いて同志の胸から胸に流れる。そして高い獄壁を×り、國境を超え全世界のプロレタリアと連らなつてゆく。獄中にあるプロレタリア前衛にとつて、これは單なる言葉の上の概念ではない。自分の身内にひしひしと迫る實感なのだ。
キエフの牢獄に、シベリアの流刑地に、ベルリンのバリケードに、廣東の市街戰に斃れた同志よ！　俺達は同じ×を眼の前に持つてゐる。脈管には同じ血が流れ、同じ脈搏が鼓動してゐる。そして、同志よ！！　モスコーから、ベルリンから、溫いプロレタリアの××の手が我々の上に差しのべられてゐるのを俺達は知つてゐる。
同志よ！！　君たちのキエフの獄舍もかく暗く冷たかつたか、シベリアの生活もかく寒くわびしかつたか、そして君たちの胸にもおさへ難い鬪爭精神が燃え上つて、獄中にぢつとして生きてゆく君たちの心を悲憤にかきむしつたか……。
「外へ出てやりたいなあ」
Tがつくづく嘆聲を洩らした。如何なる彈壓にも屈せず、再び起ち上つて來るプロレタリア階級の創造力と成長力とを知つてはゐるが、みすみす幽閉されてぢつとしてゐるのはてどうなるかを考へるといふ。ほんとうにさうである。
逃走は多く或る强迫觀念がさせるのである。世間の人が考へてゐるのとは違つて、突發的に何もかも考へることが出來なくなつてしてしまふのである。一つの精神異常といつていゝ狀態でなされることであつて、憫むよりは憐れむべき場合が多いといふことを考へてやりたい。

×

けふ、A看守がかう云つた。
「私はこの頃少し變だ。勤務をしてゐながら、『お金を千圓拾つたら』と考へたら、すつかり拾つてしまつた氣持になつて、それをどう使はうかと思つたり、落しては大變だと思つたりする。それもふッとさうした氣がするといふのでなくて、時々ほんとうにポケットを押へて見たりなんかするし、買つたものが眼の前に並んだりしてゐる。どうもあの暗い廊下は禁物だ」と。
そんな氣持の輕いものは、いつ、誰にもあるであらう。しかし此處のはそれは深刻である。病氣とまでゝはない一つの病氣、拘禁性神經病とよばれてゐるものがそれである。
さて、この話は、大きな暗示を持つてゐる。

とても堪らない氣持だ。

「まあ、七八年は駄目だな」

「うん」――それからしばらく默つてゐたがTは言葉を續けた。「八年でも十年でもいゝさ。だが出て來てからどうなるんだ。この急テンポの時代に八年も監獄にたたき込まれてゐたら役に立たなくなりはしないか。それを思ふと癪だ。」

どんな事があつても階級戰線から落伍しないぞ――Tの言葉の蔭にはその決意が籠つてゐた。

7

監獄法施行規則（明治四十一年六月十六日司法省令第十八號）

第九十四條　在監者ニ給與スル糧食ノ種類及分量ハ左ノ如シ

一、飯下白米十分ノ四、麥十分ノ六
　一人一回三合以下

二、菜一人一日五錢以下

地方ノ狀況若クハ物價ノ高低ニヨリ又ハ在監者ノ健康保全ノタメ必要アルトキハ典獄ハ司法大臣ノ認可ヲ受ケ糧食ノ種類ヲ變更スルコトヲ得

第九十五條　在監者ニ給與スル飲料ハ白湯ヲ用フ但必要アルトキハ麥湯又ハ茶ヲ用フルコトヲ得

第百六條　在監者ハ雨天ノ外毎日三十分以内戶外ニ於イテ運動ヲ爲サシムベシ但作業ノ種類ニヨリ運動ノ必要ナシト認ムル者ハコノ限ニアラズ

前項ノ運動時間ハ獨居拘禁ニ付セラレタル者ニ限リ一時間以内ニ延長スルコトヲ得

…………
…………

以上の監獄法施行規則が規定する所は、囚人の健康を保持するための最小限度を指示するものである事は、條項を一見すれば直ぐわかる。而も下級官吏は――刑務所長から看守に至るまで――この規則を最狹義に解釋し適用しやうと努力してゐる。これが奴等の自己××術なのだ。過失による譴責を免れるためには、囚人が困らうが困るまいが、消極方針を取るのが彼等にとつて安全第一だ。だから監獄法施行規則の「但し書」などはどうでも好い事なのである。彼等が勇氣をふるつて運

――第二の囚人といふものが、その刑から進んで本質的なものになりゆくといふことを。役人の囚性化、實に行刑を活かすものもこれであり、殺すものも之である。

×

獄の裏に塵埃（ごみ）燒場がある。煉瓦を疊んだかなり高い圍いもので、眞ん中に長い煙突がついてゐる。私ははじめ之を見て、すぐ火葬場だらうと思ふた。これは自分が特に監獄といふものと死といふものとを非常に近く感じてゐたためと思つてゐたが、今日聞いて見ると、ほかの人達もはじめ皆さう思ふたさうである。そしてやはり同じやうな先入主からであらうといふことである。

×

こゝへの通信に繪葉書を使ふといふことは面白いことである。あまり凝つた趣向に氣を使はない方が却つてよく、むしろ手當り次第に、名所繪葉書、文展もの、そのほか時事のものなど殊に喜ばれる。

或る時、こゝは子供の世界なのだ。

×

夜、某書記官と語る。

「希望する者がありませうか？」といふ問は、「――囚人を」といふこと。私は言下に答へた。

「大間違ひ、その證明はこれで澤山でせう。

動時間を延ばしたり、書籍や差入の制限を緩和したりするのは、銀行重役、大臣、代議士、株屋の番頭、等、等の××共／絹布の夜具な監房内に持ち込み、一食二圓の差入れ辨當を喰つてる奴等に對する場合だけである。

　未決にたゝき込まれてから一年近くになつた。營養不良と運動不足と日光の缺乏から著るしく健康の衰へが感じられる。血色が眼に見えて惡くなり皮膚の光澤が無くなつた。裁判所の階段の昇降にも急激な疲勞を覺える。官給の食糧の不足が苦痛になつて來る。夜中に襲ひ來る空腹のために眼が醒めて、そのまゝ眠れない――あたりまへだ、午後四時頃に食べた南京米四分と麥六分の一合二勺の飯が何時まで胃の腑に落ちついてゐるものか。

　健康がだんだん害はれて來る。同志の中にポツポツ病監に送られた者の噂が傳はつて來る。獄内の不平が日に日に高まつて來た。

　よし、大衆的抗議だ!!　相手の出やうによつては獄中でデモンストレーションでもやつて脅かしてやれ!!

　鐵三とTの監房を中心にして、信號が壁から壁に傳はつた。

　運動時間を延長しろ!

　飯の量をふやせ!!

　副食物を改善しろ!!

　明日所長に向つてみんなで要求をつきつけるんだ!!

　壓しつけるやうな××の空氣が全監房に低迷し始めた。

　翌日、擔當看守に對して「所長面會」の要求が一人一人から提出される。囚人の「所長面會」の要求は拒絶できない事になつてゐる。看守は自分の落度でも申告されるのかと思つて、眞白の顏をしてただもうおど〳〵してゐる。

「い、いつたい何かね。み、みんなで所長面會なんて」

「お前たちの知つたこつちやねえや、だが下つぱの落度を上官に申告するなんて、そんなけちな事はやらないから安心してろ」

　所長からの呼び出しが來る。「所長面會」を要求した者は一人づゝ監房から連れ出されて所長室に出頭する。

『どうぞ釋放を延ばしてくれ』と云つた囚人はまだ居ません」と。

　つい昨日もあつた例である。少し長い刑期の者であつたが、朝、釋放されて門外へ出たら急に歩けなくなつた。あまり嬉しくて文字通り足が地につかず、同じところばかりクルクルはねまはつてゐる。また門へ入れて貰つて、そこでしばらく心を落ちつけ、それでやつと出て行つたのである。

　いや、言葉では監獄へ行きたいといふものがあるかも知れぬ。しかし夫れは社會事業を希望するのであつて、それを知らないか、夫れを見限つて監獄をといふのである。

　監獄が設備をよくすれば囚人が殖えるといふやうなことは、それは社會事業の罪であり、社會の罪であつて、監獄の罪ではない。

×

　飛行機が來る。あの爆音が高々とひゞいて來ると、みんなの眼は子供のやうに空を向く。

　監房の窓からも、工場の窓からも、いつまでもいつまでもふり仰いでゐる。

　どこでも飛行機は喜ぶ。しかし、こんなには喜ばないと思ふ。

　獨房の小さな窓から、のびあがつてあれな見ながら、「空は青い!」と囚人は思ふ。

×

「何か願ひ事があるさうぢやが、何かね」
「お願ひする事は何もありません。僕たちは收容者の健康維持のために必要な事を要求するのです。」
「要求？　要求などと云ふ事を私は受理する譯にはゆかん。願ひ事なら一應聞いておくが」
　モーニングを着て肘附椅子に腰かけたこの尊大な所長は、ストライキの交渉の時に資本家が使ふのとそつくり同じの口吻だ。
「あなたが受理しやうとしまいと僕達の要求に變りはないんだ。僕たちは正當な要求を受理せざるを得ないやうにするだけだ。」
「一體どうしやうと云ふのかね」
　所長はやゝ脅えてゐる。
「何をやるか？　そんな事は云ふ必要は無いでせう。たゞ僕等の同志二百五十名が當所で御厄介になつてる事だけはお忘れないやうに……」
「で君達の願ひ事と云ふのは……」
　所長はもう少々折れてしまつた。
「僕たちの要求は收容者の健康維持の問題です。今後も種々改善の要求を出す積りですが、さしづめ、運動時間の延長、飯の量の増加、副食物の改善――これだけは直ちに實行してもらひたいのです」
「收容者の健康に就いてわしらは鋭意注意を拂つてゐる積りぢや。君等はいろいろ云つてるやうだが、刑務所が始まつて數十年になるが、兎も角收容者の健康は維持されて來たんだし、餘り不平も聞かない。不平を云つてるのは君等だけだ」
「僕たちは外の人が我慢して泣寢入りにしてゐる事を無遠慮に言つたまでなんだ。一體所長は現在の待遇で充分に健康が維持されると思つてるんですか」
「いや、君も知つてる通り、最近は種々改善してゐるではないか」
　所長の云ふのは嘘ではなかつた。鐵三が收容されて以來差入品の制限や、獄中から購入し得る物品の種類など大部寛大になつて來た。而し自費で購入する物に山海の珍味が許可されたとて、金の無い者に――それこそ私有財産制の下で刑務所に充滿してゐる囚人の大半である――何にならう。さう云ふ改善は收賄した大臣や民衆の零細な金を横領したブ

　夜、態と停車場へ行つて、その入口で[illegible]を流れる人波を見た。さうして感じたことは、その大部分の人は、やはり大方監獄にゐる人と同じ顏、同じ眼をしてゐるといふことである。なかにはこの人ならば決して監獄へ來るやうなことはなからうと思はれる人がないではない。しかしそれたらば現在の監獄にも、どうしてこんな人がこゝへ來てゐるであらうと思はれる顏や眼も稀ではないのである。みな同じ人だ、同じ着物を着せれば同じ人だといふ感じを深めて歸つて來た。

×

　思へばはじめて彼處の三階から、數百の赭い人達を見たときには、それはただ赭い澤山の「着物」であつて、「人」は見えなかつた。しかし、それが今になつては、赭い着物はもう見えなくなつて、見えるものは人だけである。

×

　感想錄といふものがあつて、一は
一、拘禁後女性其他性慾上に對し何か考への起りしことありや
一、拘禁後女性其他性慾上之に對する慰安に付き考へたることありや
といふ項目を掲げ、是を有りのまゝに記すべしとされてゐる。之は生理學、心理學、醫學上の參考に資せられるものであるが、又他の感想錄に於ては、――例へば「入所時感想

ルヂョア共が、監獄内で居心地よく過し得るだけの事なのだ。「未決拘留者は罪人ではないのだから、金持は金持らしく、貧乏人は貧乏人らしく社會での生活をそのまゝ延長して生活させる」と云ふのが彼等の改善の方針だ。彼等はかくして社會制度の缺陷をそのまゝ刑務所内に移す事が最も公平なやり方だと考へてゐる。

「××の云ふ改善は、結局刑務所内の差別待遇を助長するだけだ。それでなくても金持やお役人の收容者には眼に餘るやうな差別待遇をやつてるぢやないですか」

「怪しからん、そんな事は君達のひがみと云ふもんぢや。刑務所は收容者に對しては絶對に公平ぢや。そんなひがみから出た要求など絶對に聞くわけにはゆかん」

交渉が決裂しそうになつたので鐵三は「切り札」を一枚出した。

「そうですか、書籍の制限を緩和したり、手錠を免除したり、特別の護送自動車に乗せたりするのは默つてゐるとしても、御大典の日に××自身がお茶などを持つて代議士連の監房に御機嫌伺ひをやつたのは、××××××」

「……」

氣の毒なこの××官の紳士は、こゝまで來ると顏を眞赤にして返事が出來なくなつてしまつた。御大典の當日市會疑獄で收監されてゐた代議士共の所へ御機嫌伺ひに廻つて屬官根性を發揮した事は隱れもない事實で看守等でさへも蔭では惡口してゐた事なのだから。

眞赤になつた××の顏が段々青白くなつて來た。平衡を失つた精神狀態をやうやくもとへとりもどしたらしい。

「わしは用事があれば誰の監房にでも尋ねてゆく。君の監房にだつて……」

「いや、私が迷惑しますからお斷りいたします。御用の節はどうぞ所長室へお呼び下さい」

鐵三はわざと丁寧に云つた。

行き詰つた××は、思ひ切りよく話をうち切る最良の手段を採んだ。

「看守、看守、この被告を監房へつれてゆけ」

附添つて來た看守が、命令の通りに鐵三を所長室のドアの外に押し出した。

「おい、さつさと出ないか」

8

×をもつて書かれた「三月十五日」が再び

錄」の

一、犯罪の原因に就て如何に考ふるや

一、警察及裁判所に關する感想如何

一、被害者に對して如何に考ふるや

とか、「出所時感想錄」の

一、所内の取扱に就て如何に感ぜしや

一、感銘せし書籍及訓話

一、將來を如何に爲すの考なりや

とか、その外色々の項目を擧げて、夫れ夫れ本人が之を記すことになつて居り、此等はあの大部な教誨史といふものゝ資料になるのである。しかし、それだけの價値をそれに認め得るものであらう。まことに深刻なるべき此等の事柄も、與へられたる事を以てしては、恐らく眞實は現はせないではないか。

×

在所者の懲罰といふことは、反對に、如何なる犯則を爲したか、或は爲さねばならなかつたといふ風に見てゆく時に意義深く考へられる。

本年發行の行刑統計から、その受罰件數其他を要約すれば次のやうである。

抗命	男	七三六人(延)	女	二二人(延)
暴行	男	一六九	女	八
爭論	男	一、三七八	女	九
毆打	男	一、五三六	女	二

めぐつて來る。獄中の同志の胸に新らしい憤恨が燃え上る。たゞでは濟まないぞ!!　固い壁の長い廊下を隔てゝ住む胸と胸の中に、脈々として相通ずる同じ感情。

我等の三月十五日を記念しろ!!

HUNGER・STRIKEだ!!

日本××黨萬歳!!

運動場や浴場の壁に樂書が現はれる。

その頃獄中に傳はつた同志渡政の死と、待遇改善要求に對する××の無誠意な態度への抗議が「三月十五日」の紀念と結び付いた。一年間ぢつと抑へてゐた鬪志が一時にはけ口を求め出した。强烈なダイナマイトのやうな肉彈――プロレタリア××の爆發力――への導××がブスブス燻り出した。

刑務所側でも××な空氣に早やくも氣がついてゐる。××への大衆的要求以來警戒は嚴重を極はめて、同志間の連絡は不可能な程困難だ。だが××の形勢は熟した。たゞ一つ。全舍房を統一する導××、たゞ一つの衝擊が必要だ。

「おいやらう」Tが云ひ出した。「二人で處罰される覺悟でやらうぢやないか」

「よし、やつちやはう」

十五日の朝飯をハンガーストライキして、飯の配給の終つたのを合圖に××の×を合唱する事に相談がきまつた。だが連絡がなかなか困難だ。嚴重な看視を切り拔けて、十四日の晩までどうにかして各××に傳へなければならない。二人は機會を覗つてゐた。

牢獄の夜が降りた。春淺い空氣の冷たさ。火の氣のない獄舍を巡視する看守の靴音はまだかだかんでゐる。鐵三は叢林に餌を狙ふ豹のやうに、覗き窓の蓋の開くのを待つた。

來た。來た。

ガチヤリ……ガチヤリ……ガチヤリ……覗き窓の蓋を一つづつ開ける音が、細長い獄舍の遠くの方から近づいて來る。鐵三の前を通つて、こつち側が濟むと、今度は向ふ側が開いてゆく。音が遙かに聞えるやうになつた機會をねらつて、覗き窓に口をつけた。

「H君――H君」

「何だ」と同志Hが向ふ側の覗き窓から返事した。占めたぞ――と思つた瞬間に扉の外で思ひ懸けない看守の聲がした。

「話をする奴は誰だあつ」

しまつた!!　刑務所では形勢を探知して、こつそり數名の看守を配置したのだ。

竊盗	男 一六〇	女 一
物品藏匿	男 一、三七七	女 一七
物品棄毀	男 三二六	女 六
物品交換	男 五九〇	女 五
喫臥不正	男 一二五	女 —
通聲談話	男 三〇八	女 五
猥褻	男 一三四	女 —
賭博類似	男 一〇四	女 —
怠役	男 五一九	女 五
逃走豫備	男 五五	女 一
其他	男 二、七七七	女 二三
計	男 一〇、五五二	女 六三

これは昭和二年度に於て、内地一五七刑務所(内、支所三九、出張所六二)の成年及少年在所者越負四二、七四三人、入監九四、〇七三人、合計一三六、八一六人の内に於て行はれたものであつて、其の實人員は男八、五四八人、女七三人である。實人員と延人員との相違は一人にて懲罰三回以上五回までのもの男一七六人女二人、五回以上十回までのもの男三一人女一人等ある爲めであり、中には傷害(八人)とか、殺人(二人)とか、逃走(二〇人)とかで刑法上の處分を受けたものが三十人に及んでゐる。又右の全數の中、被告人は一七八人(内女一人)勞役場留置者は一四人(男のみ)で他は全部既決である。

×

扨て懲罰事犯といふものは年々漸減しつゝ

鐵三は直ぐ布團の中にもぐり込んで眠つたふりをした。覗き窓からは看守の眼がぢつと部屋の中を見つめてゐた。

(とうとうしくぢつた。今日は三月十三日と……十五日の朝にやるには明日中に向ふ側と連絡しなければならない……さて、この警戒を突破するには……)考へながら、うとうとと眠りに誘はれていつた。……と、突然にTの聲が沈んだ空氣を大きくゆり動かした。

「同志諸君!!

我々の三月十五日を記念しやう!!

朝めしを喰はぬ事!!

飯の配給が濟んだら××の×合唱!!」

(やつたな! さすがはTだ! だが、何と云ふ大膽だ!)

たちまち荒々しい靴音が殺倒した。

「誰だ」

「何房だ」

「さつきも怒鳴つた奴だらう」

今日の特別警戒の看守が四五人、Tと鐵三の部屋の外でわめき散らした。二人とも知らぬ顏をして狸寢入りだ。目的は果たされたのだ。後は處罰でも何でも勝手にしろ!!

一九二八年三月十五日。

その日から一年の時間が音もなく流れた。工場、煤煙、示威運動、ストライキ、檢束、拘留、拷問、買收等、等。はち切れそうな闘爭力が支配してゐる世界から何と隔絶した世界の一年であつた事よ。フイルムの切れた白つぽいスクリーンが默つて眺めてゐたやうな二年間。だが、冷たい廢墟の底には×××××××の情熱がいぶつてゐる。

一九二八年三月十五日の朝。

味噌汁と澤庵二切れの朝食を配給する車が舍房を廻り出す。雜役に使はれてゐる一人の囚人と監督の看守とが配給車を押しながら各房を一つづゝ廻つてゆく。

計畫は完全に成功した。同志は食料の配給を××した。險惡な空氣を知つた看守の顏面筋が固くなつてゆがんでゐる。

ガチヤン……カラカラカラ

×××つけられたアルミニユームの食器が廊下を轉がつた。今日の警戒のために特に配置された數名の看守は、これを見ても默つて傍觀してゐるだけだ。

配給車が廊下のはずれにゆきついた頃、T

あつて、十年前の六〇、八二五に比して實に著しい對照を爲し、在所人員に對照すれば凡そ其の頃の三分一に減じてゐる。

これはまさに瞠目さるべき事柄であつて、減少の理由は

一、事犯を檢擧する手心が變つて來たのか

二、所謂敎化行刑が成功し來たつた爲めか

三、入所者の態度の變つた爲めか。

の三に分たれねばなるまい。

而して恐らくその主因はこの第三にあるのであつて、第二、之に次ぎ、第一は第二に隨伴して幾分考慮せられる程度であらう。之を永年勤續者に聞けば、異口同音「此頃は入つてくる者が變つた」といひ、原因をやはり第三に歸してゐる。

×

思ふに行刑は、敎化主義として更えて行かれねばならないといふよりは、實に社會の情勢によつて、時の入所者の性質によつて更えて行かれねばならないのである。こゝに行刑の時代性があるのであつて、今や一轉機を劃すべきときであることは、この統計が最も明らかに示すところである。

×

官舍の修繕に行つてゐて、井戸から水を汲みながら、一人の囚人が「アツ」と頓狂な聲な

が閉つたまゝ覗き窓から大聲で歌ひ出した。

「民衆の旗、×旗は……

…………………」

各監房の窓々から一齊に歌聲が起つた。一年間忘れてゐた腹の底からの聲が朗らかに流れ出た。

「民衆の旗、×旗は
××の屍を包む
死屍固く冷えぬ間に
血潮は×を染めぬ
高く立て××を
その影に生死せん
卑怯者去らば去れ
我等は××を守る」

力いつぱいに張りあげて歌ふことの快さ。威壓するやうな底力を持つた男聲の合唱が獄舍の中に反響した。

「歌をやめろ!!」

「歌をやめろ!!」

合唱の中に、狼狽した看守のわめくのが聞えた。靴音と佩劍が交錯して鳴つた。

歌聲は亂れないで、朗らかに落ちついて續いて行つた。

「……………………
卑怯者さらば去れ
我等は××を守る」

最後の繰返しがすむと、合唱はひたとやんだ。牢獄の朝の靜寂がまたもどつて來た。それは恐ろしいやうな靜けさだつた。

鐵三とTとは獄内示威運動の首謀者として懲罰を受け、分房への隔離と減食だ。

分房は監獄内の監獄だ。獄庭の中にポツンと建てられた暗い、冷たい、人氣のない小舍だ。三月とは云へ、陽の射さない、吹きさらしの板敷は寒さが身にこたへる。

彼は唇を嚙みしめて、じつと忍んでゐる。春が來るのだ。牢獄で春を待つ心は、半年の間、雨に閉ぢこめられたシベリアの農夫が春をあくがれる心だ。

いまに、獄庭にもたんぽぽの花が日に向つて黄金に輝き、陽炎が鐵窓を掠めて飛ぶやうになる。手足の指にできたいたましい凍傷もだんだんに癒えて行く。

遠くの方で同志が窓に向つて口笛を吹くのが聞える。おゝ、あれはメーデーの歌だ。

擧げたと思ふと、凝つと何かに聞き入つてゐる。「どうしたの？」と聞いて見ると、「えゝ時計が鳴つてゐます。時計が鳴つてゐます。もう三年あの音を聞かなかつたんです。」といふ。

×

或る監房に小さな植木鉢があつて、それから細い細いそれこそ絲のやうな草の芽が、ヒヨロヒヨロと二尺ばかりも伸びてゐる。さうしてそこにゐる人が、毎日紙撚でそれをはかつてゐる。

×

今夜、靜かな塀の外をあるいて見た。

思へば毎日かうして自分達のゐるところの周圍を、何といふことなし歩いて見るといふことはまだなかつた。

かうして和服を着、足駄をはいて歩いて見ると、すべての感じが違つて來る。

塀の高さも昔見るとは違ふ。内から見るとも違ふ。その突つかいが、世間のは内側にあるのに、こゝのは外にあるといふことも、今始めて氣づいたことのやうだ。

時々フツと立どまらされることがある。――あのシーンとした監房の夜に、ヒソヒソとしかも絶え間なく聞えるあの囁きが、こゝまで洩れてくるやうな氣がするのである。

ポカリと巡警の灯が見えた。

實業參謀本部論

石山賢吉

（一）

『實業參謀本部論を一つお願ひいたしたいですが……』

『そんな事は知らないよ。』

『イヤ、知らない譯はありません。』

『だつて、當人の事は當人が一番よく知つてるぢやないか。』

『然らばお伺ひいたしますが、貴下は商工會議所の事を御承知でせう。』

『知つて居る。』

『工業倶樂部の事を御承知でせう。』

『知つて居る。』

『經濟聯盟の事を御承知でせう。』

『知つて居る。』

『それを論じて頂きたいのです。』

『そんな論なら譯はない。』

『それを論じて頂けば、自然實業參謀本部論になるんです。』

『ハヽア――、君達は、あれ等を實業參謀本部と見て居るのか。それぢや、一歩進んで資本家參謀本部とも云ひたいんぢやらう。そう云つて云はれぬ事もない喃。然し、君達が思つて居るほど是等の機關は整つて居ないよ。』

『でも、この間は、勞働組合法案に對して、美事な團體運動をしたぢやありませんか。』

『ウム、ありや美事ぢやつた。資本家としては確に傑作ぢやつた。だが、あれなどが殆ど唯一のものぢやよ。あれ以外に何があるかと云へば、纏つたものは先づ無いナ。』

『それぢや平素何をして居るんですか。工業倶樂部にしても、商工會議所にしても、あれだけ立派な建物を持つて居て……。』

『愚圖々々して居るんぢやナ。』

『愚圖々々は少しひどいナ。』

『何もせんかと云へば、して居る。して居つて、何も纏らないんぢやから、愚圖々々と云ふの外ないぢやないか。』

『そう云へば、そうですが……。』

『一體、實業家と云ふものは、極めて纏りの惡いものぢや。見給へ、各種の產業を……。紡績を除けば、何一つだつて纏つて居るものはないぢやないか。製紙でも、セメントでも、肥料でも、毛織物でも、電力でも、互に不利な競爭をして毎日々々共倒れのような事ばかりやつて居る。實に笑止千萬の事ぢや。算盤を持つて立つ實業家が算盤の桁を外れた事ばかりやつて居るんだから、馬鹿げて居るよ。餘りの馬鹿らしさに、近頃お上の方でも、見るに見兼ねて、產業合理局と云ふものを設置して、實業家の世話を燒き始めた。お互の利害を政府から纏めて貰ふなんて、實業家としては、恥辱の至りぢやないか。是れなどは、君達の所謂、實業參謀本部が活動して居ない何よりの證據ぢや。』

『成程。』

『處が、不心得の實業家は、合理局へ呼び出されても、未だ手前勝手を云つて居る。實に度し難いものぢやよ。』

『それは誰れです？。』

『いくらもあるが、最近の實例としては、多木住友を擧げなければならん。』

『そいつは何處の重役ですか。』

『イヤ、一人の名ぢやない。多木肥料と住友肥料の事ぢや。それを略して云つたのぢや。此二人は肥料界の異端者ぢや。決して他人と協調しない。斯界の大勢を無視し、手前勝手の事ばかりするんで、肥料界は纏らないのぢや。』

『多木肥料と云ふのは、神戸の多木ですか。』

『ウム、其多木ぢや。これは豪傑ぢやよ。こんな面白い話があるんぢや。今より二十年ばかり前に、澁澤さんが團長となつて渡米實業團を組織した時、多木も選ばれて其一員となつた。何でも市俄古あたりであつたように記憶して居るが、彼は一行の二三と連れ立つて某製造會社を見學に行つた。そして、其製品が馬鹿に氣に入り、土產に買つて歸へると云ひ出した。會社では、御所望とあれば進上すると云ふ。イヤ、買ふと云ふ。押問答の末、半分金を拂ふ事にして、其製品を買つて歸つた。處が、歸へると多木は氣が變つた。どうもあの品は半額でも高い。隨員に命じて戻して來いと云ひ出した。日本發足以來、多木の奇談奇行に慣れて居る隨員も、これには面喰つた。先方で呉れると云ふものを半額で買つて、それを戻しには、どうしても行けない。多木に降參して其儘に濟ましたと云ふが、どうだ、君、凡人離れがした男ぢやらう。斯う云ふ豪傑ぢやから、同業者の協定なぞに這入る譯がない。是れは初めから分つた話ぢやが、不思議なのは住友ぢや。住友と云へば、三井三菱に次ぐ日本の富豪、其遣り方は穩當でありそうなものであつて、其實そうでないんぢや。肥料でも、銅でも、倉庫でも、横紙破りをばかりやるので、同業者は閉口し切つて居る。銀行だけは定跡を踏んでキチンとして居るが、其他の事業は無茶ぢや。そこで、住友は、同業者から毛蟲の如く嫌はれて居るんぢやよ。』

『住友が毛蟲の如く嫌はれて居るとは、驚いた。局外者には想像も出來ん事ですナ。』

『此度、肥料業者一同が合理局へ呼び出されて、住友とも顏が合つた。住友は、平素、同業者の寄合があつても出て來ないので、云ひたい事があつても云ふ事が出來ん。そこで、待ち構へて居た同業者連は、此時とばかりに、住友一人を捉へて八方攻擊をしたものぢや。是れには、流石の住友も大に弱つて居た。多木は合理局へもタッタ一度しか出席しなかつた。住友はそうはいかんと見えて、毎回出席して居るが、如何にも辛そうぢや。三回目の會合に、小委員を選擧する事になつた時、住友は小委員辭退を申出た。すると、皮肉な委員の一人は、イヤそれには及び申さぬ。住友なんて、どうせ選擧する者はありませんから……と、やらかしたものぢやよ。結局は、どうなるか喃。合理局が多木住友を征服するか。多木住友が合理局に打ち勝つか。茲、當分、其成行が見ものぢやよ。』

『同業者と協定した方が多木住友も利益ぢやないんですか。』

『他の同業者に協定させて、自分だけ單獨行動を執つた方が一層利益ぢやから喃。』

『そいつは餘りにこすい遣り方だ。住友ともあらう者が、どうしてそんな事をするんでせう。』

『それがわからんのぢやテ……然し、善意に解釋して見れば、斯うなんぢやないかと想はれる——。生産や價格の協定をして相場を釣り上げると云ふ事は、富豪として不穩當の事ぢや……と云ふので、初め同業者の仲間入りをしなかつたのぢや。處がさうして見ると、案外旨い。人は生産制限をして居るのに、自分だけはせんでもいゝ。人は痩せるのに、自分だけは肥れる。一度此味を占めたら忘れられんので、肝腎な、最初の精神を打ち忘れて、旨い事ばかり慣行するようになつたのぢやないかと、わしは想像するんぢやよ。人と云ふものは、腹からの惡人はさうないものぢやテ、多くは境遇に支配される。實業家ぢやとて、別な人間に生れ附いて居る譯ぢやないのぢやが、日常やる事が算盤づくのものぢやから、利に走り過ぎて、協調や妥協に、容易に應ぜん事になるんぢやよ。』

『利を欲して、利を逸する、と云ふ譯ですナ。』

『まあ、さう云つたようなものぢや。經濟聯盟なども、最初の觸れ込みはたいしたものぢやつたが、作つて見ると、何の働きもしない。それと云ふのは、各自の利害が衝突してあゝでもない、斯うでもないで、結局何もしない事になるんぢやよ。』

『成程。』

（二）

『大正十一年に、三井の團琢磨が團長になり、英米訪問實業團と云ふものを組織して、戰後の歐米視察に行つた事がある。其時、米國のチエンバース、オブ、コンマースや英國のフエデレーシヨン、オブ、インダストリーや佛蘭西のインターナシヨナル、チエンバース、オブ、コンマース等を見て感心して歸り、それを眞似て作つたのが、經濟聯盟ぢや。何でも、凡べての實業團體を統一した實業界の最高機關を作らうと云ふのが其理想であつたものぢやから、工業倶樂部を筆頭にして、銀行集會所、保險協會、信託協會、紡績聯合會と云ふようなものを會員にした。是等の團體は、云ふまでもなく、日本に於ては、最も有力なる實業團體である。それが集つて、其上へ更に一つの統制機關を作つたのぢやから、それは名聞に於て、如何にも立派なものぢやつた。當時、經濟聯盟の役員になるのは、實業家としての最大名譽で、恰も政治家が大臣になる位に心得たものぢや。處が、今日はどうだい。經濟聯盟の役員など誰も知らんぢやないか。團が會長である位の事は知つて居る人もあるが、其他に至つては、存在を認識されてない。甚しいのは、經濟聯盟其者の存在すら知らない者がある。創立の場合は、勿論、こんな積りでなかつたのぢや。あゝ云ふ事もしたい、斯う云ふ事もしたい——所謂高遠の理想が多々あつたのぢやが、やつて見ると、意見が纏らない。工業家の望む所は銀行家が反對であり、銀行家の欲する所は、保險屋が不贊成を唱へると云ふような工合で、仲々意見の一致を見ない。そこで、經濟聯盟も、最初は色々やらうとしたが、段々意氣が挫けて、今日に及んだ譯ぢや。所謂、龍頭蛇尾と云ふ奴よ。』

『さうすると、今日は名があつて實がないんですナ。』

『とまでは至らんが、多少の仕事はして居るよ。人を雇つて支那の經濟事情を調査したり、減價銷却の研究をしたりして居る。經濟調査が今の仕事なんぢや。それも必要と云へば、必要ぢやが、經濟國難に直面して、實業界の最高機關が、そんな事で日を送つて居るとは、呑氣千萬な話ぢやないか。物價は下がる。消費は衰へる。能力は剩る。金融は詰る。其上、外國品のダンピングにやられて、日本の會社事業は今潰れようとして居る。株式相場などはいづれも慘憺たるものぢや。此秋に方つて、實業界の最高機關たる經濟聯盟が減價銷却の研究とは、餘りに方角違ひの仕事ぢやないか。ナゼ、起つて大活動をしないのか……と云つても、團ぢや喃。』

『あの人は無能ですか。』

『無能ぢやないが、性格が消極的なんぢや。積極的には活動しない。それで極めて三井部内には評判がいゝんぢやから、番頭も三井あたりの大番頭となると、斯う云ふ性格が嵌まると見えるよ。』

『あの人は工業俱樂部の理事長もして居るぢやありませんか。』

『工業俱樂部の理事長で、經濟聯盟の會長で、三井の一番々頭なんぢやから、實業家としては最高の地位を占めて居る譯ぢや。三菱では、今、團に對抗するだけの人物は居ない。木村久壽彌太では線が細くて相撲にならん。各務といふ傑物は居るが、是れは三菱本部の人でなくて傍系會社の人ぢや。又、各務なら、之に對抗するに、三井には池田と云ふ人物が居る。是れは、五分の相撲ぢや。此外、三井には安川と云ふ利け者も居る。三菱には之に對抗する人物も居ない。要するに、三菱は、三井に比較すれば、人物は負けて居るよ。政友會の田中內閣が出來たての時、實業家の會合に、大臣連がよばれて行つた事がある。其時、中橋商工大臣と木村久壽彌太とが隣り合になつた。中橋は木村を知らない。そこで、隣りのお方とやつたものぢや。それもテーブルの上の雜談なら未だしも、起つた演說で、そう云つたものぢやから、當時中橋は人を茶にして居ると云ふ評判ぢやつたが、中橋とて三菱の木村久壽彌太と云ふ事を知つて居れば、そんな失禮な代名詞を使ふ譯がない。畢竟、木村が知られて居ないから、そんな侮辱を受けるんぢや。わし達が大臣に知られて居なくとも、どうでもないが、三菱の一番々頭がこれぢや問題にならんよ。』

『其代り人材澤山の三井は、兎角何事も遣り過ぎるぢやありませんか。』

『遣り過ぎるから其押へに團のような消極的の人物が總番頭に適當して居る事になるんぢやよ。三井を改革した中上川彦次郎は、イエス、ノーがハッキリして居るので、有名ぢやつた。團はこれと反對で、イエス、ノーが極めてハッキリせんので、評判ぢや。彼は會議の席などで、人より先きに自說を吐くような事は決してしない。先づ人の說を聽く。そして、それが不條理と思つても直に反駁しない。其代り名說と思つても卽座に贊成しない。徐に說を嚙み分け、自分で篤と考へた後ち、徐に判斷を下す。其說が自分の思ふ壺に嵌らん時は、何時まで經つても裁決を與へない。是が彼の議長振りぢや。今の三井では、斯うした議長が嵌るんぢやが、此人物が今一歩向上すると、三菱の殿様となり、更に向上すると、三井の殿様になるんぢやよ。』

『そりや又どう云ふ意味ですか。』

（三）

『三菱の當主岩崎久彌は、團に之を掛けたような人ぢや。此人は何事に對しても一切沈默ぢや。決して自說を吐かない。三菱の事業は、本家と分家が代り〲に經營する事になつて居る。初代彌太郎が死ぬと弟の彌之助が之に代つた。彌太郎の長男久彌が成長すると、彌之助は早速隱退して一切を久彌に引繼いだ。久彌は又彌之助の長男小彌太が成長すると、叔父彌之助の例に倣ひ、自分は未だ裏若い身にも拘らず隱居して、三菱合名會社の社長を小彌太に讓つた。小彌太は氣鋭に任せて時々三菱らしくない事をやる。久彌は腹に不贊成でも、決して口へ出して反對をしない。飽くまで默つて見て居る。彼は事業に盲目でないかと思はれる位ぢや。それほどに彼は克己心の強い男ぢや。』

『それは性格なんですか、境遇からですか。』

『性格でもあり、境遇からでもある。元來久彌は、質實の生れ附きぢや。是れは親の彌太郎に似ないで、叔父の彌之助に似た。それへ持つて來て彼の境遇が一層彼を質實にした。わしの知合に、株屋で叩き上げて金持になつた男が居る。此男は、今は立派な會社の社長になつて居るんぢやけれど、決して社交の方面へ顏を出さない。ナゼかと問ふと、貸金や寄附を强要されるのが厭ぢやからだと云ふんぢや。人と云ふものは少し惡意になると、必ず借金か寄附を持ち込んで來る。それを斷るのが辛いから、何所へも顏を出さないのだと云つて居る。ケチな男かと云ふと、そうぢやない。時々思ひ切つた寄附をして世間を驚かす。然し、寄附と云ふものは、自發的にする處に快味があるらしい。人から强要されると、これほど厭なものはないそうぢや。福澤桃介が團琢磨を評してこんな事を云つて居る。日本一の月給取、實業界の第一人者として、有らゆる幸福を一身に集めて居る團にも一つの惱みはある。それは寄附金の捌きぢや。ヤレ濟生會、ヤレ大震災救恤金、ヤレ學校、ヤレ慈善會と、三井の事ぢやから八方から寄附金攻めに遭ふ。それも凡そ高の極つた、性質の明かなものは、たいした惱みがないが、ソンジョ其處らの新聞雜誌、何々政黨、何々結社——所謂政治團體、思想團體、暴力團に對する寄附に至つては、如何に團が明晰なる頭腦を持つて居ても、容易に額を定められない。主人の金にしても、多く出せば馬鹿々々しいし、少く出せば怒られる。中庸を得る事は甚し難事中の難事ぢや。團は思慮綿密の男だけに、それだけ惱みが大きい、と云つて居る。流石は桃介、旨い評をしたものぢや。壺中の消息を穿ち得て妙なりと云ふ可しぢや。』

『寄附金の捌きは、仕事の捌きより六づかしいと見えますナ。』

『どうもそうらしい。これは、我々貧乏人には、解らぬ事ぢや。桃介には自身に經驗があるから、こんな旨い評をするんぢや喃。』

『だつて、あの人は、ケチで、寄附金なぞしないと云ふぢやありませんか。』

『自らケチ〲だと云つて居るが、實際は本人が標榜するほど、ケチぢやないよ。あれで仲々内密に金を出して居る。ケチとでも名乘らなけりや堪らんから、あゝ云つて居るんぢやよ。天下の寄附を一身に引受けるような、大きな顏をして居て、其實、桃介以下のシミツタレがどれほどあるか知れやしないよ。奴等は會社の金を寄附するんぢや。自身の金な

ぞ一文も出しやせん。其處へ行くと、桃介は公私の別を明かにして居る。出す時は必ず自腹を切る。あれほどケチを看板にしても、其自腹が可なりあるそうぢやから、三井三菱など、どれほどあるか、お察しが出來るぢやないか。そこで、岩崎久彌なぞはスッカリ、悩まつて仕舞つたんぢや。彼は頭がいゝ。本を讀む。つとめて周圍の人の話も聽く。だから、何でも知つて居る。彼は品行方正で、女房の外女を知らんが、それであつて、花柳界の情事にも通じて居る。彼は博識にして明晰なる頭腦の持主ぢや。何事にも直ぐ理解が行くが、其であつて、世間の事は勿論、三菱の事業に對しても一切口出しをせんのぢや。克己心の強い點に於ては、恐らく彼は日本一ぢやらう。●性格ではあるが、境遇ぢや、金持と云ふ境遇がそうした人物にして仕舞ふのぢや。』

『成程。』

『進んで三井を見給へ。是れは三菱以上ぢやから……。三菱の主人は、銀行へも出て來るし、番頭と話もする。また〳〵人間味がある。處が、三井の主人に至つては、雲上の人となつて居る。主人は番頭と簾を隔てゝでなければ話をせん。尤も三井の主人と云つても澤山あるが、總長は三井八郎右衞門ぢや。是が非常な氣取方で喃。番頭でも餘程格式のよい者でないと、目通りを許さない。茶の湯が堪能で、平素繪なぞ描いて澄してゐる。頗る上品の人ぢや。其代り、自分で自分の財產が自由にならない。そして、自分で思ふ仕事も出來ない。此點に至ると、彼等は人形ぢや。考へ方に依つては頗る不幸な境遇に居るとも云へる。』

『どうして、そんなに窮屈なんですか。』

『明治三十何年かに、三井が一度潰れようとした事がある。其時、井上侯が采配を振つて三井を改革した。これで三井は再興して、今日の大を成すに至つたのぢやが、其時井上侯は三井家の將來を考へて家憲を作つて呉れた。處が、其家憲は財產擁護にはなるが、人間の擁護には成らん。イヤそう云ふよりも、財產を擁護して人間を無視したと云ふ方が適切なんぢや。そこで、三井家憲法制定以來、財產は肥つたが、人間は痩せた。是れは、君、形式でなくて、內容の意味ぢやよ。三井の主人はいづれも形式は立派ぢやよ。中にも總長八郎右衞門の如きは、今云つた通り、雲上の人になつて居る。然し、內容は至つて空虛のものぢや。それに形式が整つて居ると云つても、それは、總家外二三の事で、連枝末葉に至つては內容形式共にあはれなものぢや。近頃、華族の廢業者が盛に出るが、將來、三井十一家の中でも、開放を叫ぶ公達が必ず出るだらうと思ふ。要するに、三井の殿樣と云ふ者は、餘り幸福なものぢやない。其主人は木偶化されて居る。其處に非常な苦痛があるのぢや、古河家の主人も一時木偶化されたが、近頃救はれた。之に就ても、面白い話があるんだけれど、本論と關係の事ぢやから、お預りして置くが、近頃英國の勞働內閣は重税を課して、金持の征伐をして居る。考へ方に依つては、それは金持の征伐でなくて救濟かも知れんよ。』

『貴下は、老人に似合はず、新しい事を云ひますナ。時に、經濟聯盟の事は大體わかりましたから、これ位にして置いて、●商工會議所と工業俱樂部の話をして下さい。』

『商工會議所は明けても暮れても、陳情ばかりして居る。あれは陳情團體ぢや。工業倶樂部は勞働問題と關税運動の外何もしない。是れは何と云つていゝかナ。尤も、平素は貸室とレストランドを營んで居る――どちらもいい加減のものぢやよ。』

『それでも商工會議所の會頭となると、大騒ぎをするぢやありませんか。』

『商工會議所は、政府の諮問機關になつて居る。それで、其會頭になれば、商工業者の代表のように見られる。實際は兎も角も、表面はそう云ふ形式になつて居る。そこで、實業家に依つては其會頭になる事を非常に希望するんぢやよ。それに喃、此會頭には歴史的の貫祿が附いて居る。澁澤が三十何年ッて、あれをやつて居たものぢやから喃。』

『澁澤さんはそんなに長くやりましたか。』

『澁澤の次ぎが中野武營――是れは僅か二三年であつたようぢや。次ぎは藤山雷太、指田義雄、藤田謙一……それから今の郷誠之助と云ふ順序になるんぢや。其中藤山は比較的永かつた。彼は七年やつた。指田は元より短命ぢやが、それでも一年ばかりやつた。そのアト藤田が三年やつて、今の郷誠之助になつたんぢやよ。』

『成程。』

『商工會議所は、初め商法會議所と稱へた。それから商業會議となり、近年商工會議所に改められたのぢやが、參考の爲にザット其經歴を話そう。明治初年、政府は、外國の信用を博するには、法律を作らなけりやならんと考へた。それに就て、商工業に關するものは、商工業者の意見を聽かう。さすれば、彼等も都合がいゝし、政府も纏め易い。と云ふので、伊藤博文、大隈重信等が澁澤に勸めて商工業の法令研究所を作らせた。それが商工會議所の起りなんぢや。時は明治十一年で、其時の名は商法會議所と云つた。其翌年大阪にも同樣ものが出來、漸次他の地方に及んだ。政府は之を利用して商工業の調査をさせたり、諮問をしたりして居たが、法令事務が片附くと、自然消滅に歸した。すると、其跡へ、商法會、商工會と云ふような自由團體が出來たが、間もなく、商業會議所條令が發布されて、正式の商業會議所が出來、それから昭和二年に會議所法改正があつて、今の商工會議所となつたのぢや。商業會議所條令の發布されたのは明治二十五年ぢやから、商業會議所と云ふ名は二十一年間續いた譯ぢや。澁澤は商法會議所時代の會頭で、途中で少し切れたが、前後を合計すれば三十何年かになるんぢやよ。』

『成程。』

『澁澤の會頭時代は無事ぢやつた。次いで中野武營になると少し弛み、降つて藤山雷太になつて悶着が始つた。』

『適任でなかつた譯ですか。』

『藤山と云ふ男は、手腕もあり、才幹もあり、辯力もあるが、惜しい事には、德が缺けて居る。到底、澁澤や中野の後繼者には成り切らん。そこで、藤山が會頭になると、間もなく、議員間に、反藤山の一團が出來た。そして、それが段々其數を增し、とう〱蔚然たる大勢力となつた。其團體が即ち例の辛酉會で、隊長は藤田謙一。藤田が藤山を倒したんぢやが、其經緯は頗る面白いんぢやよ。』

『何だか、永い間、ゴタ〱して居ましたナ。』

『それは確か大正十年であつたように記憶し

て居る。其年の二月に會議所の議員選擧があつて、新しい顏がだいぶ出た。すると、其中の某々が發起人になつて、新議員だけの會合を催した。そして、其席上でだいぶ氣焔が揚げた。會議所改革論なども盛に出た。其揚句、新しい議員だけで、一會を組識しようと云ふ事になつた。よろしい、贊成ぢやと云ふ事で、其場で成立したのが辛酉會なんぢや。辛酉の年ぢやから辛酉會と名づけたのぢや。

斯樣な次第で、辛酉會の成立は、極めて偶然であつたようぢやが、其實藤田が前から企んで居た芝居であつたのぢや。藤田は初めから野心を以て議員候補に立つた。それぢやから出來るだけ自分の同志を候補に立たせた。其結果、藤田の一味として當選した議員が十人ばかりあつた。新議員の會合は、藤田としめし合はせて其連中が發起し、萬事筋書通りに運んだのぢやつた。アトで此事が分り憤慨して辛酉會を脱退したものもあつたが、それは只一二の議員で、兎に角も、之に依つて藤田を頭梁とする一つの團體が出來た。此團體の目的は云ふまでもなく、藤山會頭の排斥ぢや。』

『……』

『其頃、藤山の方にも、一つの團體があつた。それは、二八會と云ふのぢやつた。二八會と辛酉會とが對抗する事になつた譯ぢや。處が、辛酉會は二八會には未だ其數が及ばなかつた。そこで、藤山會頭を排斥しながらも、それを實現する事が出來なくて、次ぎの選擧を迎へた。此選擧に藤田の一味が大活動をした。』

『同志の數を殖やしに掛つたんですナ。そんな事があるから、近頃、會議所議員の選擧も猛烈なんですネ。一萬圓位の運動費を遣ふ議員がザラにあるんです。如何に選擧の世の中とは云ひながら、會議所議員に一萬圓の運動費は馬鹿げて居ますよ。』

『御說至極同感ぢや。選擧に運動費を使へば使ふほど弊害が大きくなるんぢやから、之を何とかしたいものぢやと、考へて居る。いづれ此話も君にゆつくりしたいと思ふが、それは兎に角として其時藤田は鄕を看板にした。詰り、藤田では藤山を倒すだけの勢力を得られないので、鄕を擁いだ譯なんぢや。是れは、藤田としては賢明な策ぢやつた。藤田は無論自身で會頭を夢みて居た。處が、會議所へ出て見ると、彼自身が會頭では到底多數の贊成を得られそうもない。彼の人氣は寧ろ藤山以下ぢや。藤田が若し藤山以上の人物であつたならば、彼は辛酉會の成立と同時に、會議所の會頭に成つたであらう。處が、藤山の會頭は厭ぢやが藤田の會頭は尚更厭ぢやと云ふ連中が可なり居る。辛酉會ぢやつて、藤田が會頭になる野心のある事を露骨にすれば、忽ち毀れて仕舞ふんぢや。逸早く此形勢を親て取つた藤田は、先手を打つて、心ならずも、自分に會頭の野心のない事を聲明した。然も、彼は一般の信用を得る爲めに、それを屢々やつた。自分には會頭になる野心など毫もない。唯、藤山を排斥すれば足ると……。』

『そこで、次ぎの選擧に、鄕を擁いだ譯ですナ。』

『そう云ふ順序ぢや。鄕ならば申分がない。其會頭には多くの贊成者がある。其上、藤田の一味は金に構はず、多くの候補に立て、熱心に運動したものぢやから、開票の結果、辛酉會が多數になつて、藤田の目的が達せられた。處が、イザとなると、肝腎の鄕が會頭を承諾しない。何と口說いても頑として應じな

い。これで藤田の目算はからりと外れた。』
『どうして鄕が承諾しないんです？』
『鄕は藤山を倒して出ると云ふ事を嫌つたのぢや。彼は標榜して居る所が高いから、藤山くらゐを退けて、自分がそれに代つたとあつては、末代までの名折れになる、と云ふので、何と口說かれても應じなかつたのぢや。そこで藤田は大に困つた。彼は、今云つた通り、自分に野心のない事を屢々聲明して居るから、居直る譯に行かない。他に人を求めても、適當な人物が居ない。據ろなく、いい人が見つかるまで間に合せの會頭を置かうと云ふ事になつた。』
『と云つても、そんな會頭になり手がありますまい。』
『處が、あるんぢや。間に合せ會頭を大喜びで、進んで買つて出たのが例の指田義雄なんぢやよ。間に合せであらうが、何であらうが、一日でも、大臣格の、會議所會頭になれば、身の面目、家の譽ぢや。何卒私に其役を仰せ付けられたいと申出たものだ。見渡した處、會議所議員には全く人物が居ない。指田義雄なんて、廣い世の中へ出せば、渺たる一人物ぢやが、會議所議員となると、目立つた方に數へられる。まあ〳〵と云ふような事で、結局、彼に暫定的の會頭をやらせる事になつた。無論、裏面には藤田と誓約があつたのぢや。半年位經つたら潔よく辭職して、藤田に跡を讓ると云ふ……。處が、指田は其通り實行しなかつた。約束の期限が來ても、平然として其椅子に居り、辭職をしなかつた。』
『狡い奴ですネ。』
『それが指田の缺點ぢや。あの男も、名も無い辯護士から叩き上げて、米商の理事長にまで成つたんぢやから、腕はあるよ。けれども、人格がいけない。これで彼は嫌はれるんぢや。會議所會頭に成りたての頃、彼は議事の捌きなど旨くやつて、一時評判ぢやつたが、間もなく、地金を露はして、遂にソウスカンになつた。それで、やめろ、やめないで大騷ぎになつたんぢやよ。』
『醜態ですナ。』
『然し、如何に頑張つても、藤田が辭表を預つて居るのぢやから問題にならない。彼は、とう〳〵、むごたらしく會議所會頭をやめさせられて仕舞つた。然も、其時彼は、彼の持病が募つて居た。彼は蒼白い顏をして會議所通をして居たが、鬪に負けて會頭をやめると、間もなく死んだ。そうなると又、彼に同情する者があつて喃。こんなに早く死ぬのなら、無理にやめさせるに及ばなかつた。死ぬまで會頭をさせて置いて、死なせてやりたかつたよ——と。彼の靈もこれで幾分慰められた譯ぢや。』
『如何にも。』
『指田がやめると、會議所の天下は自然に藤田に歸した。時の經過や、周圍の關係で、外部は兎に角、會議所內では、會頭は藤田を措いて他にないと云ふ空氣になつた。これで、藤田は、晴れて五代目の會頭になる事が出來た。初めて會議所に打つて出てから五年目に宿志を達した譯ぢや。』
『それで、會頭としての藤田はどうだつたんですか。』
『いゝ所もあれば、惡い所もあつた。平均したら、評點は藤山以上かナ。元來が熱の男ぢや。遣る事は勇敢で積極的ぢや。それであつて、瓢逸な所もある。是が彼の缺點を保障緩和して居る。然し、何と云つても、粗野の所

が彼の缺點ぢや。指田とは別な趣で品位が足りない。唯、彼は金切れがいゝ。親分肌の所がある。彼はこれで勢力を得たが、又是が爲めに失脚した。自分に金がなくて切れるんぢやから、どうしても無理をせんけりやならん。』

『藤田は買勳事件と遣ひ込事件で、引掛つて居るんですね。』

『そうぢや。それで彼も折角苦心してなつた會議所會頭を棒に振る事になつた。結局は身分不相應な事をした報いぢやよ。』

『結論はそうなりますネ。』

『藤田が失脚したので、愈々鄉となつた。鄉が現在の會頭ぢや。今の實業家に適任を求めれば、何と云つても鄉ぢや。澁澤、中野以來、巡り巡つて適任の鄉に落着いた譯ぢや。初めから鄉に成つて居れば、面倒はなかつたのぢやが、其處が娑婆ぢやて喃。藤田は一ついゝ事を會議所に殘した。それは、渡邊鐵藏博士を會議所へ連れて來た事ぢや。渡邊は今理事と云ふ名になつて居るが、元の書記長ぢや。會議所の書記長と云へば、會頭の手紙書きか、宴會の下働きと云ふような事を專門にして居たものぢやが、渡邊になつてから、會議所の調査物が盛になつて來た。是れは誠にいゝ事ぢや、ウント發達させたいものぢや。然し、何と云つても、未だ會議所は駄目ぢやよ。手前勝手な陳情團體の範圍を出てないよ。それに、鄉と云ふ人は、どちらかと云へば、消極的の人で喃。受身の判斷は旨いが、積極的の活動はしない。會議所も急に發達するような事はあるまいよ。根本は議員の問題ぢや。議員がモット向上しなければ駄目ぢや。議員が向上するには、社會が進步しなければならん。年代の經過を待つ外ないよ。』

(五)

『工業倶樂部の由來はどうなんですか。』

『追々時間が詰つて來たから、極く簡單に話そう。初め、日本工業協會と云ふのがあつた。金子堅太郎が會長で喃。出來たのは明治二十三四年頃ぢやつた。工業協會は一時可なり活動をしたが、後ち次第に衰へて自然消滅に歸した。すると、一方に鐵會なるものが出來た。是れは、時の總理大臣桂の下に集つた銀行家の集團ぢや。此會の起りは、四分利公債の募集にあつたが、同債成立の後に於ても之を繼續した。そして、桂公以後歷代の政府は、何か經濟上の問題が起ると、鐵會に諮問すると云ふ風になり、自然それが勢力を持つようになつた。之を見て工業家連が奮起した。これでは、政府の經濟政策は銀行本位になつて仕舞ふ。一方に、商業會議所と云ふものはあるが、澁澤の辭職以來、重きを置かれなくなつた。我々の方でも一つの集團を作らうぢやないかと云ふ事になつた。詰り、以前の日本工業協會のような、工業家の代表機關を作らうと云ふ事になつた譯ぢや。こんな話が弗々あつたのは、歐洲戰爭前からぢやが、次第に其議が熟したのは、大正五六年頃ぢや。之を熱心に主唱したのは大橋新太郎で、大橋は之を和田豐治に計つた。そして、彼に創立の中心人物たる事を希望した。和田は即座に快諾し、彼の事ぢやから、それから熱心に奔走した。各方面は元より贊成で、取り分け中島久萬吉、植村澄三郎などは和田を助けて其成立に盡力したので、忽ち豫想以上の大團體が出來上つた。それが即ち今の工業倶樂部ぢやよ。其金は最初三十萬圓位と云ふのが

五十萬圓となり、八十萬圓となり、遂に百萬圓にセリ上つた。それでも少しも募集難を感じなかつた。景氣のいゝ時代であつたからでもあるが、個人が出す金でなくて會社が出す金ぢやから喃。』

『成程。』

『今の建物を造り上げたのは、戰爭直後ぢや。丁度其折、米國に國際勞働會議が催され、武藤山治を資本家代表に送つて氣焔を揚げたものぢや。だが、單にそれだけの事で、それからは最近になつて勞働組合法案の反對運動をするまで纒つた事をして居ない。但し、此運動だけは頗る美事ぢやつた。商工會議所と呼應して全國工業家の意見を纒めたのぢやから、お手柄としなければならん。でも喃、君、工業俱樂部を階級鬪爭の專門機關にするのは、餘り智慧が無さ過ぎるぢやないか。モツト、工業家自身の進步向上に此機關を利用しなけりやいかん。それから此連中の運動は內面的でいかん。モツト堂々と外部に意見を發表すべきものぢや。獨逸などはそれ專門の學者論客を抱へて置き、勞働組合に對抗して詳細の意見を發表して居る。それで資本家の味方も出來る。勞働組合の成立を怖れて居るようではこれからの工業はやれんよ。それに、社交の方面もモツト活動せんけりやいかん。工業俱樂部は、經濟機關であつて、又社交機關なんぢやから、其方の機能も充分發揮さすべきものぢや。萬國工業會議の連中を招いてケチな宴會を催し、得々として居るようぢや、日本の工業家は見縊られる。何と云つても、歐米のそれとは未だ距離があるよ。それだけ日本の商工業が遲れて居るからでもある。まあわしの話はそれ位にして置かうよ。』

『色々ありがたうございました。』

報知新聞論

馬場恒吾

講談社の雜誌經營に大なる成功をした野間淸治氏が報知新聞社長になつた。これは新聞界に一つのセンセーションを起した。講談社が他の雜誌社を壓迫する如く、報知が他の新聞を壓迫するやうになることは、今迄の新聞社會に取つて一つの脅威である。何あに。雜誌と新聞は違ふ。雜誌王必ずしも新聞王にはなれない。今に手を燒いて退却すると、簡短に片付ける新聞人もあつた。だが、かう云ふ半面には、若しかして、非常に成功しはしないかと云ふ心配が潜んでゐた。

今年六月、野間氏が報知に入つたとき、野間氏はデーリー・メール式の新聞を作るのだといふ報道があつた。それを見たとき、私はこの狙い所は正しいと思つた。若し其方針で進むならば、報知は恐ろしく成功するかもしれない。だから、皆んなが、野間氏の新聞界進出を一笑に付せんとするのに對して、私は馬鹿に出來ないぞと云ひ切つて居た。元より彼れが成功するか、否かは未知數である。だけれども、彼れの着眼點の正しかつた事丈けは說明する必要がある。

デーリー・メールが英國の新聞界に革命を起した事は誰れでも知つてゐる事實だ。これを創めたのは英國の新聞王と云はれたノースクリツフ卿である。彼れが世に出た當時(十九世紀末)の英國の新聞は、主として支配階級と知識階級の讀み物であつた。ノースクリフの狙い所は、今迄物を讀まなかつた階級に、如何にして物を讀ますかと云ふ點にあつた。彼れもそれを雜誌から始めた。ゴシツプ、短篇小說、家庭、スポーツ、其他萬人向きの、肩の凝らない記事で、下級の讀者層を開拓して行つた。其讀者層を相手にデーリー・メールを始めた。普通教育の普及と、選擧權擴張に依つて政治に對する興味の普及するとに伴つて、かうした讀者層が漸次膨脹して來た。從つてデーリー・メールが恐るべき勢力になつた。其お蔭で、ノースクリフと大なる政治的

な勢力を得た。アスキスが總理大臣であつたときに、かれはノースクリフ卿と云ふ名の貴族にされた。ノースクリフと云ふのはかれが田舍の家の近所にある岩の名である。ロイド・ジョージが總理大臣であつたとき、かれは子爵にされた。彼れは内閣を潰したり、作つたりする程の勢力を得た。餘りに圖に乘り過ぎて、巴里講和會議の全權になり度い野心を起し、それをロイド・ジョージに拒絶されて喧嘩をした。今のデーリー・メールはノースクリフ卿の弟ロザミーヤ卿の經營になつてゐるが、彼れも亦デーリー・メールの勢力を背景にして政治上の活動をしてゐる。かうした例を述べるのは野間氏が政治的進出をすると云ふ暗示を與へる爲めではない。野間は寧ろ政治的野心がない方に特長がある。デーリー・メールの例を引くのは、ノースクリフと野間氏の間に着眼點に共通な處があるからだ。

講談社の發展は新たな讀者層の開拓と云ふ事を特長にする。講談社の諸雜誌は低級愚劣だと一口に批評される。若しマルクス主義の難解な文字を羅列する事が高級とすれば、講談社物は低級に相違ない。だが、其愚劣な點に於ては、例令それが愚劣であつたにしても、其諸雜誌の讀者が愚劣なものを要求するとしたら、それも亦已むを得ない。今まで、物を讀まなかつた階級をして、物を讀ます習慣を體得せしめる。その爲めには、從來、の讀者階級とは、全然標準を異にする讀物を提供する。それでも、讀者の習慣がない者が、讀書の習慣を有つやうになれば、其所に輕蔑出來ない事業がある。

講談社物に教育された讀者が、何日迄も講談社物に執着してゐるか否かは疑問である。彼等は段々に卒業して他の高級雜誌に轉じて行くであらうが、同時に又新たに講談社物に入學するものが後から〳〵出て來る。時勢の變化に從つて、何日迄此繁盛が續くかは判らないが、現在迄に、講談社が新たな讀者層を開拓した事は、同社に對する爭はれない功績である。此讀者層は永久に講談社のものとして殘る理由はないのであるが、講談社の開拓した讀者層を他人が横取りする事は困難だ。講談社物に類似する他の大衆雜誌が餘り成績の良くない事がそれを證明する。「講談社物に養成された讀者は、それが講談社物の程度の讀者である限り、講談社の忠實なる讀者として殘つてゐると云ふのが妥當な觀察であらう。かうして開拓された讀者は、月一回發行される所の講談社の雜誌を讀む。同時に彼等は新聞を讀む。其新聞は講談社とは關係ない新聞ばかりであつた。所で若し茲に、講談社の雜誌流儀に編輯される新聞がありとすれば、彼等は其新聞を愛讀するであらう。若し此豫想が當るとすれば、講談社の一雜誌の六、七十萬と稱せられる讀者が、其新聞の讀

者として動員出來はしないか。それが出來るとすれば、報知は『朝日』『日々』と肩を竝べる讀者數を獲得する事になる。これが報知が東京の新聞界に於て脅威と見られる所以である。

日本の新聞は明治初年に比較すると非常に通俗化した。新聞の出來た當初は、新聞の文章それ自身が、漢文口調の六ヶ敷き名文であつた如く、其内容も亦政治家、學者、文人と云ふ少數の知識階級を相手に編輯された。それを通俗化して、一般社會に讀者を求める事が、明治廿年代の新聞經營者の仕事であつた。其中にも、矢野文雄氏に依て主宰された報知が其魁けをなした。矢野氏は英國の新聞が經營される方法を見て來て、報知の新聞購讀料が一ヶ月八十三錢であつたを三十錢に値下げした。それ丈けでも、當時の新聞界を驚かしたのであるが、同時に彼は記事の内容をも平易にして、新聞の民衆化に努めた。其頃已に報知は夕刊を始めたのであるが、これは餘りに時世より進み過ぎてゐたと見へて、二ヶ月程して廢めたのである。かうして、新聞は年を經るに從つて、通俗化されて今日に及んだ。然らば今になつては、これ以上に通俗化する餘地はないか。若し其餘地がないとすると、野間氏が大衆向きの雜誌に依つて、多數の讀者を集め得た方針が、それを新聞に應用する餘地はないと云ふ事になる。

然るに、其餘地はまた多分に存在する如く思はれる。現在の東京の大新聞が大衆に理解されるやうに紙面を作らんとして、相當の努力をなしつゝある事は疑のない事實である。併し、社會面以外はまだ大衆の興味を引き付けるには尙多少六ヶ敷過ぎはしないか。それらの面の記事を書く人々は、其記事を書くときに漸く文字を讀み初めた程度の大衆を、讀者としての目標に置いてゐるか、否か。事實は寧ろそれと反對である。政治記事を書く時は政治家を讀者として考へ、外國通信を編輯するときは外交通を目標とし、經濟記事は經濟社會に讀ますやうに書く。記事がかうした傾向を帶ぶるとき、それは專門的に精選されるが故に、必ずしもそれが惡いとは云へない。だが、其道の專門家にも輕蔑されずに、同時に何にも知らぬ大衆の興味を惹き起すやうに書くことは出來ないか。若しそれが人間業では不可能だとすれば、專門家階級を無視するか、大衆を無視するか。何れかに決心しなければならぬ。デーリー・メールは專門的部門には多少の犧牲を忍んでも、新聞の目的は大衆を獲得するにありとして進んだ。それは元より政治經濟の記事を輕んじた譯けではない。只書き方が簡短明瞭で、直ちに大衆に理解され、大衆の興味を湧かすやうに編輯された。かう云へば、それは只編輯技術だと片付けられるかもしれぬが、新聞經營者の狙い所を大衆に置くと云ふ事は、言ふは易くして、實行は中々困難な事

柄だ。それが成功して、英國の大衆向きの新聞が、今日驚くべき勢力になつたのである。

野間氏が講談社の雜誌に依て、新たな讀者層を開拓したのは、必ずしもノースクリフが考へた如く、今迄物を讀まなかつた民衆に、物を讀ますと云ふ所の、意識的な目的を有つてかゝつたものではあるまい。だが結果に於ては、講談社の雜誌があつて、初めて、雜誌讀者になつたものが無限に存在する。それと同じ意氣込みを有つて、報知が新たな讀者層を開拓するならば、玆に新聞界に新たな勢力の出現となるのである。尤も今日の日本では大抵の家庭に新聞が這入つてゐる。だから、新聞の讀者層の開拓と云へば他の新聞を排斥してかゝる事になる。こゝに於て、講談社の讀者層を報知が讓り受ける事が報知の發展の上に新たな意義を有する事になる。

報知新聞は明治五年に創刊されて以來六十年以上の傳統を以てゐる。其傳統は新聞界に於て傲りとするに足るものがあつた。野間氏の來る直前に、大隈信常侯が社長であつた時は別だが、其他の時には大抵反政友にして、大隈系、憲政會、民政黨的の色彩が强かつた。憲政會の苦節十年と稱する頃は今の農林大臣である町田忠治氏が社長になつてゐた。所ろで、憲政會新聞と云つても、報知は必ずしも憲政會の機關新聞らしくなかつた。加藤高明内閣が出來ても、報知は必ずしも政府の政策を力强く後援すると云ふ風でなかつた。新聞は新聞として獨自の立場を守つて、政府側の主張を載せると同時に、反對黨の主張をも無視しないと云ふ風であつた。殊に其頃の報知の夕刊の編輯振りは目立つて上手に見へた。何んとなく讀者に親しみと興味を持たせる。此點では報知は同業者から敬意を拂はれてゐた。

報知の編輯振りで、特色と云ふべき事は、如何なる些小の事でも讀者に對する親切の心を忘れない事であつた。例へば釣の時節になると、何處の川で何が釣れると、それは何の新聞も出す。報知は其上に、其の釣りをする所に行くには、何處迄電車で往つて、後は何町程歩くのだと書いて居る。實際釣りにでも往かうと思つてゐる讀者は、これ丈けの少しの注意で非常に助かる。報知の記者がよく私に話した事がある。僕の社では、外の社と同じ程度の記事を取る。其上に、只一歩でよいから、何か、外の社の取らなかつた種を付け加へる。それが社の方針だと。これは新聞社仲間の競爭心理から出た方針であらうが、根柢には讀者に對する親切な思ひ遣りが溢れてゐるやうに見へた。此點が徹底すれば、今の新聞に對する社會の批難、即ち新聞は切り捨て御免だと云ふ批難が大に緩和されるであらう。さう思はれるほど、報知の紙面には慈味が溢れてゐた。それには他

の新聞人も、報知に對して敬意を表さない譯には行かなかつた。

報知の此傳統的精神を作り上げたのは三木善八と云ふ人である。彼れは報知の大黑柱と云はれた人だ。今は報知の大株主ではあらうが、經營には直接干渉しない。さうした隱居の身分になつても、彼れの唯一の仕事は朝から晩まで、各社の新聞を比較して讀んでゐる事である。この記事ではどの新聞が良い。あの記事ではこちらが勝つてゐると。彼れの經驗に富んだ眼で見ると、新聞の紙面を見た丈けで、會計の金庫の中まで透視出來るのである。東京の各社は三木氏を恐るべき敵だと思つてゐたのである。

三木氏は明治廿年に矢野文雄氏に招かれて報知に入つたのである。其當時から營業方面を擔任してゐた。間もなく矢野氏が宮内省に入つた後、明治廿五年には町田忠治、犬養毅、尾崎行雄と云ふ如き朝野新聞の落武者が報知に復歸して來た。犬養、尾崎は報知に歸つたと云ふもの丶、直ちに總選擧に出馬して東京には居なかつた。留守を守る町田氏が編輯を擔任してゐた。編輯局は二階にあつた。處ろで、下の營業局に居る三木善八が只營業の事ばかりに關係しないで、編輯の方へも何かと口を出す、町田はそれがうるさくて堪らず、下から二階へ來る階段に張紙を出して『三木、此階段を登るべからず』とデモを飛ばした事さへあつた。

其三木氏の堅實な經營方針が報知をして東京の大新聞の一つたらしめたのである。町田氏は中途洋行したり、大阪の銀行に勤めたりして、始終は報知に居なかつたが、三木氏は終始一貫して報知に居た。町田氏が大正になつてから、報知の社長として迎へられたとき、報知は現金で五十萬圓積立て丶ゐた。それに町田氏は二十萬圓を新規に投資した。合計七十萬圓を大隈侯、箕浦勝人、其他の功勞者に頒つた。それでも報知は尙儲かつて往くほど、三木氏の經營の腕は冴えてゐた。其頃東京の各社は催し物、宣傳的の興行で競爭してゐたが、報知がさうした計劃をやるときは、何時でも餘り金が掛らなく、却つて幾分か新聞社の收入になるやうな事ばかり遣つてゐた。

日本の新聞社は何れも製紙會社の壓迫に苦しめられてゐる事は、新聞界の常識になつてゐる。報知も其數に漏れなかつた。これは重に町田氏の創意に依るが、報知は新聞を印刷する爲め外に紙を輸入する事を始めた。外國紙が日本紙に比較して廉價なるが故に、其差金を積み立て丶、今の報知の社屋が出來たのだと云ふ。震災の時に際しても、此外紙の爲めに大に助かつた。報知は震災當時に七十萬圓の外紙を貯へてゐた。それを藏敷料は少し高かつたが、鐵筋コンクリートの住友倉庫に預けて居た。他の倉庫が燒けて、東京の各新聞社が紙の飢饉に苦しんでゐた

とき、報知は七十萬圓の外紙を完全に所有してゐた。住友倉庫は助かつた爲めである。報知はそれを外の新聞社に供給した。又報知は震災に燒けなかつた新聞社の一つてある。それ故に震災後には目立つて發展をした。一時は六十萬の紙數に上つたであらう。只近年になつて『日々』『朝日』と云ふ大阪系の二大新聞に壓迫されて、購讀料の取れる紙數は、四十萬に足らなくなつた。無代紙を入れゝば、四十萬位になるであらう。

報知の經營者として、野間氏に目を付けたのは三木氏だと云ふ。三木氏が新聞の營業界に於ける大御所である事は勿論だが、彼れは編輯に對しても鋭い鑑識眼を有つてゐる。報知の傳統方針である所の、新聞を大衆向きにして、讀者に親切な思ひ遣りを運ぶ。其方針は三木氏の考へた事である。さうした方針を以て新聞を經營する所の三木氏が、野間式の編輯方法に注目するのは有り得べき事だ。尤も初め三木氏の勸誘があつたときには、野間氏は報知の現狀を調査して報知に入る事を謝つた。後に、社長であつた大隈信常侯が自身に野間氏を訪ねて、報知を引受ける事を懇請した。野間氏は大隈侯其他が所有してゐた二十萬圓許りの株を引受けて、報知の社長に就任した。外に、三木、町田などの大株主が居る。報知の資本金は百十萬圓であるが故に、野間氏は報知の持主としては僅かに五分一許りの權利しかない。だが、社長としては報知を經營する全權を委任されてゐるのである。

野間氏は雜誌で儲けた金を一千萬圓位は持つて居ると思はれる。此點に於て、彼れは新聞社會に於ける堂々たる資本家である。だが、雜誌と新聞の經營に關する限り、彼れは、他人に働かせて、自分は只利潤を取ると云ふ風ではない。彼れは夜の十二時迄、報知社に居つて、普通の社員の中に立ちまぢつてゐる。それは彼れの仕事をする流儀である。彼れがまだ雜誌『雄辯』の出版を始めた許りの時。彼れは音羽の小さな二階家に住んでゐた。二階が野間夫婦の居室になつて居り、玄關と六疊一間しかない下が雜誌社になつてゐた。社員としては記者一人と給仕一人がゐた。野間社長は朝どてらを着たまゝ、二階から降りて來る。そして夜の十二時頃迄、其所で雜談に耽ける。彼れの流儀はかうした雜談に耽つてゐる中に、何か雜誌を拵へる上のヒントを得る。ヒントを得ると直ちにそれを實行に移す。それが後に、彼れを雜誌王たらしめた行動方針であつた。報知社に毎晩十二時迄頑張つて、取り留めもない雜談に耽つてゐることは、彼れが雜誌に成功した方針を新聞に應用せんとしてゐるのであらう。此方針は必ずしも惡くない。德富蘇峰氏がまだ國民新聞社長であつた頃、蘇峰氏は好んでストーヴ會議に顏を出された。其の雜談の中から、天下の風雲を捲き起すやうなヒントが生れ

た。此一事を以てしても、野間氏を只の資本家的な新聞社長と同一に見る譯に行かない。

野間氏は報知社長になるに際して、副社長として寺田四郎博士、營業局長として講談社の赤石喜平氏、其外には自分の祕書を連れて來たばかりで、報知の編輯局の人々には、手を觸れなかつた。併し紙面には講談社風の色彩が現はれて來た。野間氏は明るい新聞、家庭で顔を顰くしないで、讀める新聞を作り度いと云ふ。だから、善行美談が屢ゝ紙面に出る。一寸した閑い物として政治面にも、社會面にも、名士の苦心談、修養談、英雄崇拜的な感想記事が出る。其甘さは普通の新聞人をして苦笑せしめる。だが、これも必ずしも惡くない。人類には向上心があると云ふ事を前提としてかゝれば、かうした記事が大衆向きである事は否定されない。性的な、そして獵奇的な趣好に訴へる事は、それは尖端であつても、大衆獲得の方針としては效果が疑はしい。人間の多數は病的でなくて、寧ろ健全なものであるとするならば、徒らに尖端を逐ふ新聞よりは野間式新聞の方が、却つて世俗的に成功する可能性を有つてゐる。

報知は前に云つた如く民政系の新聞であつた。大隈信常侯が社長であつた時代には、時々それが政友系になつたのではないかと思はれる記事が出た。今では再び最も堅實なる民政系としての色彩を有つに到つた。だがそれは必ずしも偏頗とは云へない。議論と記事の傾向も、政黨的色彩のない「日々」「朝日」と大差ないからである。政治に對する野間氏の方針は大體に於て時の政府を助けると云ふ事にあると聞く。だから、政友會內閣が出現しても、矢張大體に於て政府の政策を援助する事になるであらう。今迄の日本の新聞社會に一つの迷信があつた。それは、如何なる政府の時であつても、其政府を攻撃する事に依て新聞の發行部數は增加すると云ふ事であつた。舊い新聞記者は今でも尙さう信じてゐるかもしれぬ。だが、一般讀者の智識の程度が進むに從つて、新聞も是を是とし、非を非とする所の毅然たる態度を採らなければ、軈がては讀者に倦かれる。所ろで野間氏の如く、如何なる政府でも、時の政府に好意を持つと云ふは、少しく他の極端に走り過ぎてゐる。これは如何なる政府をも攻撃すると云ふ方針と同じく、苟くも政治を理解する讀者の要求には添はない。尤も、苟くも時の政府を預かり、位人臣を極め、大臣、大官として輝く人々を攻撃する事は、講談社式の英雄崇拜、偉人崇敬の方針とは矛盾する。若しそれが爲めに、如何なる政府をも餘り攻撃せぬと云ふ方針を立てたとすれば、其所に雜誌の營業と新聞の使命とが同一方針では行かぬと云ふ事が暴露される。

茲にも雜誌經營と新聞經營の差ふ所が一端を示してゐるが、野間氏が講談社經營の方針を其儘に報知新聞に延長せんとするならば、他にも幾多の矛盾が發見せられる、であらう。例へば社員の統制に於て先づそれが想像される。講談社の社員は實に能く働くと云ふ定評がある。何の社員も身を粉にして社の爲めに働く。夜は十二時にならねば家に歸らぬ。忙しい時には三日でも四日でも徹夜する。其忠實な仕事振りには世間が驚いてゐる。

野間氏は其著書の『體驗を語る』の中に、講談社の三大社是を述べてゐる。それは渾然一體となつて働く事、誠實勤勉なる事、縱橫に考量すると云ふ事である。縱橫考量とは、そんな事は出來ませんと云ふ裏に、どんな事でもやれば出來ると考へる事、卽ち考量を縱橫に働かすと云ふ所の、彼れの作つたモットーである。そしてかうした人物を作る爲めに、彼れは訓練を吝しまない。出來上つた社員は皆勤勉にして、蔭日向なく働く人人である。これが、野間氏の雜誌王國を築き上げた原動力である。講談社の社員は野間氏を中心とし、講談社を本位として、寢る間もなく働く。野間氏は社員の時間を切り賣り的に買つてゐるのでなく、其心まで社に結び付けてゐる。

社員が社長の手足の如く動く。社の爲めには一身を犧牲にしても厭はない。野間王國の忠臣義士となると、かうした心持ちは封建的美風である。以つて社が繁へる所以である。だがさうした氣持ちを今の新聞記者に有たし得られるであらうか。有たし得られたとして、それが新聞記者として望ましき性格であらうか。

元より或社に屬する新聞記者は其社に忠實であらねばならぬ事は勿論である。だが、新聞記者が取扱ふ問題は多くの場合、社會公共の利益が伴ふ問題である。社會公共の利害と、其新聞社の利害と一致する事もあるが、又一致せざる場合もある。其時は關係記者は社を愛するか、社會を愛するか、其何れかを採らねばならぬ事がある。社會を愛するよりも、自分の社を愛すると云ふ記者を、吾々は輕蔑する習慣になつてゐる。

尤も新聞社としては、社會を愛する事が、自然社を愛する事になるのである。何となれば社會全體の利害を考へずして、新聞社一個の利害を考へてゐる社がありとする。さうした心術で新聞を作つて居れば、何日となしに其新聞は世に捨てられる。だから結局は社會全體の利害を念頭に置いてゐる方が新聞社の利益である。だがさうする爲めには、新聞記者を何日でも物を虛心坦懷に、公共の立場からに觀る癖を付けて置かねばならぬ。新聞記者に自由豁達の氣分を有たしめ、自分の良心の外には、何人にも頭を壓へられては居らぬと云ふ自覺を有たして置く必要がある。此心持ちを養成する方針と、野間王國の忠臣

士を養成する方針とは互に矛盾する。

新聞も雑誌も共に公益事業であり、或程度迄は共に營利事業である。だが、程度の差がある。新聞は其影響する範圍から見て、より多く公益事業であり、雑誌はより多く營利事業である。從つて其經營方針も異るべきであらう。

私は野間氏が雑誌の經營方針を其儘報知新聞に適用するであらうとは信ぜぬ。否寧ろ、野間氏毎夜新聞社に十二時迄頑張つて居ることは、彼れが新聞を經營する爲めに新らたなる方針を見出さんと努力しつゝあるものと察しる。そして講談社流の記事は報知新聞の爲めにも相當の讀者層を開拓し得るものであることを疑はない。だが、新聞記者を講談社流に訓練することは新聞の本質と矛盾する。敢て此所で新聞の講釋をする積りもないが、新聞を作るに際しての最初の心得は己れを空ふしてかゝると云ふ事である。何となれば新聞の使命は畢竟するに社會を反映するにあるからだ。例へば茲に一人の先覺者が居て、それが新聞を作つて、社會を指導するとか、或主張を宣傳するとかは現代の新聞が採るべき正しき態度ではない。寧ろ新聞はラジオのレシーヴァの如く、世界中の數多き放送局から送る音樂の中の、最も自分の氣に入るものに波長を合せて、それを皆んな聞へるやうにすればよいのである。先覺者一人が語るのではなく、社會全體をして語らしめることが、新聞の使命を貴からしめる。新聞の上で語つてゐるのは論説や感想を書く名士ばかりではない。身投げをする女、法廷に引かれる男が、或は名を出して、或は名を出さずに、しかし皆んな命懸けの氣持ちで彼等の苦痛や、希望や、さまぐの心情を訴へてゐる。それが名士の上滑りの感想よりは何の位い價値のある音樂であるか判らない。如何なる一人の先覺者よりも、人類全體を含む社會全體の方が賢い。今日の賢い人、必ずしも明日の賢い人ではない。新聞記者は何日も其日の最も賢い人を探してそれに語らせればよい。それには己れを空うしてかゝる事が必要條件である。謙遜の態度を失つた新聞又は新聞記者は最早下り阪に一歩を踏込んでゐるのである。

野間氏は講談社の社員に向つて小我を捨てる事を要求してゐる。それは小我を捨てゝ、雑誌社と云ふ大我の爲めに働けと云ふのであつた。だが、新聞人として世に立つものは、新聞社自身を小我として捨てゝ、社會全體を大我として取る事を要求される。茲に雑誌と新聞の違う所がある。野間氏は今折角、報知新聞の經營に工夫を凝らしつゝあるやうだ。彼れの小我を捨てると云ふ信仰も押し詰めるときは此所まで行くであらう。彼れが指導する報知新聞が報知社と云ふ小我を捨てゝ、社會全體の大我に付くとせば、吾々は此新聞の將來に對して、他の新聞に對するとは異つた期待を懸ける事が出來る。

中間物選集

‥‥化粧品店です。寶石店です。フルーツパーラーです。カフエルームです。都會の盛り場を歩く人なら、誰でも、これ等がきらびやかに軒を列べてゐるのに氣付くでせう。無駄なものばかり——と云ひ給ふな。なんといふ、それは魅力でせう。「**中間物選集**」も、まアさう云つたやうな‥‥。だから若い人逹の間に、俄然、好評大好評です。‥‥‥‥

- 巴里を語る　柳澤健著
- 山へ入る日　石川欣一著
- 都會の點描派　淺原六朗著
- 近代明色　新居格著
- 或る斷層　さゝきふさ著
- 月寒の女　下村千秋著
- 都會の論理　林房雄著
- 場末風流　小島政二郎著
- 彼女等と語る時　片岡鐵兵著
- 東京と大阪　下田將美著
- 女優部屋　長田幹彦著
- 映寫幕上の獨裁者　酒井眞人著
- 變な笑ひ顏で　丸木砂土著

四六版函製三百數十頁・定價各册八十錢　送料內地八錢　滿鮮十八錢

東京丸ビル　**中央公論社版**　振替東京三四

内親王と名乘つた女の話

大森洪太

一

一六六〇年代と云へば、英國では、流石の執政府もクロムウエルの死後は遽に凋落して、チャールス二世に依つて、王政が復古した頃のことである。チャールス二世は氣樂な自墮落な國王だつた。駄洒落が得意で、賭博は大好きだつたが、國務の方は一向不熱心だつた。今も尙殘るドルウリー・レイン劇場の蜜柑賣から女優になつて、滿都の公子を惱殺したネル・グインを寵姫にしたことは、有名な史實である。上の好むところ、下にも及んだ次第であるが、一般にクロムウエル時代の清嚴な氣風はいつしか失せて、總べてが暢氣でだらしがなかつた。其の頃のことである。

倫敦の其の頃の船着場のビリングスゲイトにエキスチエーンジ・タヴアーンと云ふ宿屋兼業の料理屋があつた。其の時代の風習で、金持の連中は朝からそこに集つて、酒も飲めば、賭博も打つ。つまり、社交俱樂部で、屈託のない連中の暇潰しの場所である。

話は此の社交俱樂部から始まる。

二

倫敦のビリングスゲイトの金持連の社交俱樂部、旅籠屋のエキスチエーンジ・タヴアーンに天人が現れた。社交俱樂部は今も昔も男の遊び場所だが、其の男の遊び場所へ、突如として美人が顏を出した。しかも、素晴らしい美人である。雲の間から三保の濱へ、ふうわりと天女が降りて來た、それ程ではないにしろ、それに近い驚異であつたに相違ない。

美人は芳紀二十一二、それとも、三か四か、稍ゝ愁ひの色は浮んで居るが、顔も姿も眞に類稀な國色である。しかも、其の天稟の麗質を更に麗しく見せたのは、其の錦繡の美裝である。金の唸る倫敦の船着場でも行人の眼を眩ますに足る衣裳である。

此の美人は勿論天から降りて來たのではないが、大陸から船に乘つて來たのである。只ゝ一人飄然として、此の宿屋へ來たのであるが、宿屋の主人キングは職業柄顔よりも先づ服裝を一瞥した、一と目見て愕いた、之れだけの服裝は倫敦の呉服屋では、一寸手に入らない、何しろ、大した金持に相違ない、服裝を見て感心してから、顔を見た、顔を見て更に吃驚した、綺麗だ、立派だ、氣高いものだ、珍客御入來、宿賃の取れない心配は勿論ない、斯かる高貴な美人を客にすることは、宿屋冥利、商賣繁昌の瑞祥、有難いことだと、平身低頭して、早速最上等の部屋へ案内した。

三

美人は仔細あつて、大陸の或宮殿から遁げて來たものだと、自分で語つた。

暫く逗留して居る間に、社交倶樂部に出入する金持連とも知合になつて來た。常連の倶樂部室へ招かれて、愼ましやかに、杯を口にすることもあつた。

他人の事を立ち入つて聽き度がらない——少くとも、聽き度いやうな素振を見せないのは、教養ある英國人の特徴である。併し、相手が絶世の美人であり、宿屋の一人客であり、殊に宮殿をひそかに脱出した高貴の女性であるに於ては、好奇心も起れば、同情の念も生ずる。時にはそれとなく訊ねたけれども、只ゝ打ち沈んで、かすかに溜息を洩らすだけである。

或夜、例の如く、倶樂部の常連が集まつて、何か少しく大袈裟な宴席を設けた時に、謎の美人を招待した。此の夜は美人も大分打ち解けて居たから、人々は其の素性を訊ねたが、羞づかしげに躊躇する風情は、「猶抱琵琶半遮面」の趣がある。

四

美人は漸くにして、語り出した。

自分は獨逸皇帝（其の頃歐洲唯一の皇室であつたことは、云ふまでもない。）の太子ハインリヒ公の内親王で、宮廷の花と謳はれた者であるが、ひそかに若い侍從と相許して、將來を深く契つた、其の若い侍從は昔の騎士のやうに、神を畏れ、人を怖れぬ健氣な青年であつたが、貧乏華族の生まれで、内親王の配偶者としては、門地が甚低いと云ふ理由の下に、祖父皇帝は

等の結婚を峻拒した、それぱかりではない、若い侍從を大逆罪の名目で、死刑にしてしまつた、若い侍從は忠誠の士であつた、勿論大逆の如きは思ひも寄らぬことであつたが、只ゞ自分に其の男を思ひ切らせる方便として、可哀想に、無實の罪を着せたのである、そして、自分を或王家の妃にしやうとしたが、自分は自分故に寃枉の死を遂げた若い侍從に操を立てゝ、飽くまでもそれを拒絶したから、迫害は自分にも及んで來た、そこで、自分は暮夜ひそかに宮殿を脱出して、漸くこゝに辿り着いたのであるが、思へば果敢なき身の上である、嘗ては歐洲最高の元首の直系として、雲の上の寵愛を一身に鍾めたけれども、今は天涯の孤客として、羈旅の間に離愁に沈んで居る……

獨逸帝室の内親王は且語り且泣いた。喞々の思は嗚咽の裡に洩れて、聽く者は皆首を垂れた。

倶樂部員の同情が翕然として、獨逸内親王に集注せられたことは、云ふまでもない。毎日毎夜、倶樂部員は内親王に御馳走を奉つた。

五

内親王は贅澤に育てられたことは勿論である。倶樂部員から御馳走を受けると、内親王はきつと其の返禮の招待會を催される。宿屋の主人キングに關する限は、倶樂部員が内親王に走を奉つても、内親王が倶樂部員を招待せられても、會場はつも自分の方にきまつて居るから、結構なことではあるが、扨、餘り結構でないのは、内親王が一向勘定をせられないことである。獨逸帝室の内親王樣だから、之れまで、御自分で金錢の出納を取扱はれたことは、勿論ないだらう、併し、今は獨りで自分の宿のお客になつて居られるのである、宿賃を支拂つて貰はなければ、商賣はあがつたりである、しかも、隨分贅澤でゐらつしやるのだから、宿賃も餘程の高に上つて居る。

そこへ、又一つ、不思議なことが出來て來た。宿屋の主人キングの細君の弟のカールトンと云ふのが、親類の間柄だから、よく此の宿屋に遊びに來る。近所の小金持の若主人で、男つ振りの好い獨身者であつたが、内親王は近頃此のカールトンに思を寄せて居られる模樣である。カールトンの方では勿體至極もないことで、ひそかに思ひ焦れて居たけれども、所詮卑賤の者では手の屆かぬ高嶺の花である、諦め兼ねる戀を諦め、抑へ難い熱情を抑へて居たのであるが、先方からそれとなく有難い思召を蒙つたのであるから、有頂天になつて、身に餘る光榮を感激して拜受したのである。どうも、それが怪しい。いくら日蔭の御身の上とは云ひながら、獨逸帝室の内親王樣が倫敦の小金持に將

來を託せられる筈はない。事に依ると、喰はせ者かも知れないと、宿屋の主人キングは恐る〳〵疑念を挾み初めた。

六

「畏れ乍ら、殿下に申上げ奉りまするが、其、其の失禮千萬な次第で、申上げて宜しいやら、どうやら、手前とんと愚存の及びませぬやうな始末で、昨夜家內とも談合致しまして、へえ、其の何で御座います、決して手前損得のことを申上げる儀では御座いませぬ、殿下には、へえ、其の甚失禮で、へえ、全く手前考へまするには、お寶、いやお持物、へえ、全く、御所持金お手薄のやうに拜察仕りまするが、いゝえ、決して手前宿賃の儀を申上げる次第では毛頭御座いませぬが、へえ、上つ方様に於かせられましても、金子と申しまするものは、御手薄ではどうも御不自由で、恐れ入ります、御無禮を申上げまして、實は前申上げまする通、家內とも談合致しましたので、手前共考へまするには、一度、獨逸のお里、へえへえ之れは大失禮な、其の何で御座います、御皇室様へお歸りになりまして、其の御手許金の儀を、へゝゝゝ……………」

宿屋の主人キングが吃りながら、言上するのを聽いて、內親王は言下に答へた。

「わかりました、私が今手許に金がないものだから、獨逸へ歸つた方が宜からうと云ふのでせう、わかりました、私もさう思ひます、手紙で大藏大臣へ云つてやつてもいゝのですが、外に內密の用もありますから、私は一度獨逸へ歸りますがね、歸つてもすぐ又こゝへ參りますよ、兎に角一と月ばかり行つて來ませう、お宿賃の方はねえ、御心配には及びませんよ、眞逆私がねえ、ほゝゝゝ」

內親王は言ひ終つて、朗かに笑つた。成程、獨逸帝室の內親王が宿賃を踏み倒すやうなことはない筈だ。宿屋の主人の方では半信半疑だつたので、若し贋者だつたら、狼狽えて、すぐに馬脚を露はすだらうと思つたのだが、狼狽えるどころか、言下に獨逸へ歸らうと云はれた、勿論正眞正銘の內親王様の證據である。そして、又こゝへ來て下さると云ふ御思召である、有難いことだ、宿賃のことに付ては「眞逆私がねえ、ほゝゝゝ」と仰せられた。全く眞の通だ、縱令一時にしろ、お疑ひ申したのは、恐れ多いことだ。びつちより冷汗に浸つて、主人キングは重ねて平身低頭した。

七

かね〴〵內親王から嚴に申渡されて居たことだが、內親王の

素性は倶樂部員の外には、絶對に祕密にして居た。此度内親王歸國に付ても、倶樂部員は自分達にのみ打ち明かされた光榮な祕密として、勿論それを外部に洩らさなかつたが、自分達の内部では、内親王の爲には、出來るだけの努力はした。内親王の旅費は云ふまでもない、獨逸帝室へのみやげ物も、倶樂部員の醵金に依つて、まづは立派に調つた。

八

二た月たつかたゝないうちに、内親王は大陸から歸つて來た。巨額な金子は勿論、寶石珠玉も夥しく、高級の勳章までも持つて歸つたから、宿屋の一同、倶樂部員等の内親王に對する信用は確乎不動のものになつてしまつた。

九

亡命中の獨逸内親王は倫敦ビリングスゲイトの小商人ジヨン・カールトンと結婚した。義兄キングの滿足は云ふまでもない、宿賃の外にたんまり御祝儀を頂戴したことは勿論である。倶樂部員の方は又、自分等が内親王だと思つて支持した女性が、果して眞に内親王だつたのだから、之れも得意である。若し夫れ新郎ジョン・カールトンに至つては、天下第一の僥倖兒、歐洲最高の元首の直系たる絶世の美人に思はれて、芽出度く夫婦となつたのだから、男冥加の目の下開山、夢にしたところで、勿體ないほどの夢だが、それが本當の現實になつたのだから、此の位嬉しいことはない。

十

獨逸の内親王と倫敦の金持の小商人のカールトンとは仲よく暮してゐたが、或日、カールトンの義兄の例の宿屋の主人キングの許へ不思議な手紙が舞ひ込んだ。差出人の名は書いてないが、しつかりした筆蹟で、文句は相當鄭重だつた。併し、手紙の中味はキングをして啞然たらしめるに十分なものだつた。

手紙の要領は、獨逸の内親王と稱する女が、あなたのお世話で、あなたの御親戚へ片付いたそうだが、御用心までに御通知するが、其の女は詐欺師である、ケント州で既に數回結婚したこともある女だが、隨分念の入つた嘘つきである、若し此の手紙をお疑ひになるならば、彼の女の身體にはこれ〳〵の特徴がある——と云ふのである。

キングは眞つ青になつて、カールトンの許へ驅け付けた。身體の特徴と云ふのが、ぴつたりと事實に符合する。

果して、獨逸帝室の内親王は眞つ赤な僞者だつたのである。

十一

眞つ赤な贋者の自稱內親王、實はカンタベリーの貧家の娘である。

カンタベリーは人も知る英國々教の大本山の所在地で、英國東南の海に近く、スツウア川に臨んだ清麗な都邑である。其のカンタベリーの町外れに、小さい荒物屋の店を出して、自分は大本山の唱歌隊の常雇をして居るモーダースと云ふ男があつた。勿論貧乏人である。此のモーダースの娘が即ち本篇の主人公、獨逸の內親王と名乘つた女詐欺師のメリーである。

メリーは一六四二年に生まれた。丁度チヤールス一世の晩年に當る。おやぢは唱歌隊の常雇となつた位だから、聲は好かつたゞらうが、別に善い智惠も惡い智惠もなかつたやうである。娘のメリーは小さい時から目鼻立ちが勝れて居た。今日では、不良少年とか、犯罪素質とか、犯罪の萠芽の探究や豫防の方法が相當に攻究せられて居るけれども、何しろ、三百年も前のことである、田舍町の貧乏人の小娘に調査の手の屆く筈がない。尤も、幼少の頃に、官憲の手を煩したと云ふ證跡が殘つて居ないから、まづ通常の娘として、育つて行つたものと思はれる。

併し、注意すべきことが一つある。第十二世紀後の半期に、大僧正の聖者ベケツトが寺院の權威の爲に、毒鼓髮々として、時の國王ヘンリー二世の非を鳴らしたが、ヘンリー二世は卑怯にも四人の刺客を此のカンタベリーの大本山に遣して、聖者を祭壇の前で暗殺せしめた。聖者の遺德を慕ふ民衆に動かされて、ヘンリー二世は嚴寒の一日、半裸の姿で、跣足徒步、倫敦を距つること二十餘里のカンタベリーに詣で、、聖者の廟前に其の罪を悔いた。爾來英國の貴賤は聖者の頸血の迸り落ちた祭壇の前の床、即ち所謂聖痕の個處に跪くことを以て、一生の念願として、カンタベリー巡禮の風習は其の後數百年の長きに亙つて、續いたのであるが、英國詩壇の祖チヨーサーの雄篇「カンタベリー巡禮」も此の風習を採つて、其の題材としたものである。本篇の物語の當時も此のカンタベリー巡禮は盛に行はれて居た。晩春孟夏の輕暖和煦の日には、倫敦からカンタベリーへの大道に、巡禮の男女が絡繹として踵を接するが、此の頃の巡禮は寧ろ閑遊散步の旅であつて、衣裳に流行を逐ひ、趣向に新奇を衒つたから、巡禮の來る毎に、倫敦の社交界の衣香扇影を此のカンタベリーに傳へたのであつて、カンタベリーの町の少女は羨望の眼を以て、華美な兩襠を送迎したのであつた。而して、茲に說くところの主人公メリーは、幾度か斯かる兩襠を目賭して、自ら、豪奢を希ひ、絢爛を愛する念慮を增長せしめた。貧乏人の娘メリーは幼にして虛榮の女となつたのである。

十二

メリーは美しい娘だつた。其の頃の女子は一般に早婚だつた

が、メリーは十六になるかならないうちに、靴直しの行商人の妻になつた。自分のきめた亭主ではなく、親の命ずるがまゝに、嫁に行つたのだが、亭主の方では綺麗な若い女房を此の上もなく可愛がつたけれども、虚榮の念の强いメリーが靴直しのおかみさんで滿足はして居られなかつた。生來の美貌が禍を爲したのでもあらう、亭主が行商人である關係上、誘惑に乘ぜられる機會が多かつたからでもあらう。美しい蛺蝶のやうな若い人妻のメリーは、間もなく仇し男と道ならぬ道を踏むやうになつたが、其の相手も二人や三人ではなかつた。

軈てメリーは亭主の留守の間にどこかへ家出してしまつた。

十三

ドウヴァーと云へば、今も英國東南の要港で、佛蘭西と交通の衝に當つて居る。カンタベリーからは六七里の處に在る。

此のドウヴァーの町に若い醫師が居た。其の頃は丁度日本の今の開業醫のやうに、醫藥分業が行はれて居なかつたので、大抵は醫師と藥劑師とを兼ねて居たが、此の若先生も矢張左樣で、親の代から町の人々に調法がられて、相當大きな玄關を構えて居た。若主人の代になつてから、評判は益々高くなつた、素行が謹直で、患者に親切だ、人格が宜い上に技倆が確かだと云ふので、診察室はいつも患者で一つぱいになつて居た。實際、此の若先生は嚴格な、少々石部金吉だが、立派な青年で、風采は瀟洒だつたが、浮いた噂の少しもない未婚者であつた。

或日、此の若先生の往診した患者は、妙齡の佳人だつた。花のやうに美しい女で、別にどこと云つて惡いやうな樣子でもなかつた。が、今日の言葉で云へば、神經衰弱とでも云ふのだらう、とかく氣が鬱いで、頭痛がすると訴へた。二三回藥を貰つて居るうちに、美人の頭痛はだん〳〵よくなつたが、今度は醫師の方で頭痛がし始めた、此の頭痛は問題の患者を診察する每に、益々募つて、夜も眠れないやうな工合になつた、謹嚴な若先生は美人の患者を戀したのである。

煩悶の日夜を重ねて、若先生は遂に意を決して、美人の患者に結婚を申込んだ。美人の方では、待つて居ましたとばかりに早速承諾した。

十四

此の美人の患者、ドウヴァーの花形醫師の新夫人こそ靴直しの亭主を棄てゝ走つた本篇の女詐欺師メリーだつたのである。

ドウヴァーは前にも書いたやうに、カンタベリーから僅に六七里のところに在る。殊にメリーは誰の眼にも附く美貌の主である。ドウヴァーの花形醫師と幸福な結婚生活を始めて間もなく、誰かの告發に基いてメリーは重婚罪として起訴せられた。

十五

不思議なことには、メリーは無罪となつた。

メリーの法廷に於ける辯解に依ると、自分の前夫は久しい前から行衞不明で、自分は前夫が死んだものと信じて居たと云ふのであつた。之れは勿論眞つ赤な嘘である。前夫の靴直しは行商人であつたから、時々村から村へ宿りがけで靴を直しに行く、それは商賣の爲であつて、行衞不明になつた譯ではない、しかも、メリーは前夫を棄て、逃げたのである。併し、陪審員は皆好人物だつたから、メリーが涙ながらに陳述した眞つ赤な嘘を本當だと思つた。若しメリーの辯解が本當だとすると、メリーの行爲は結果に於て重婚にはなるけれども、重婚罪を構成するが爲には、犯意の要件を缺く。そこで、無罪の宣告を受けたのである。

重婚罪にはならなかつたけれども、重婚には相違ないのだから、醫師の若先生との夫婦關係は斷たなければならない。若先生は勿論離別の悲しみに耐え兼ねたけれども、所詮果敢ない緣と諦めるの外はなかつた。尤も、メリーは前夫の許へ歸る心は少しもなかつた。靴直しのおかみさんで一生を終へるのを嫌つて、飛び出して來た女である。しかも、暫くの間にしろ、若先生の奥樣で納まつて居たのだから、元の古巣へ戻る氣持にはどうしてもなれなかつた。

若先生から巨額な金を貰つて、倫敦へ行つたが、倫敦へ着いて最初に泊り込んだのが、本篇の劈頭に書いたエキスチエーンジ・タヴアーンである。

十六

エキスチエーンジ・タヴアーンで主人のキングを始め、倶樂部員を欺いて、獨逸の内親王になり濟ましたのだが、元來斯樣な馬鹿々々しい詐欺に引つ懸かると云ふのは、寧ろ不思議なことだが、何しろ外國の事情のよくはわからなかつた時代のことである、そして一度人を信用すれば、固く其の信用を維持するのが、英國人の長所で、ステユアルト王朝時代の倫敦人は今と比べて遙にお人好しであつたことは、云ふまでもない。

前に書いたが、エキスチエーンジ・タヴアーンの主人キングの勸說に依つて、獨逸の帝室へ一寸歸ると云つて、大陸へ旅立つた事件だが（本篇の七、八參照）、メリーは慥かに大陸へ行つたのである。メリーは船着場のドウヴアーに居たことがあるから、多少は大陸の事情にも通じて居た、勿論大膽な根性から無鐵砲なことも出來たのだが、彼の女は對岸の大陸へ渡つたのである。

十七

大陸へ渡つたけれども勿論獨逸の帝室へ歸つたのではない。お寺と市場とで名高いケルンへ行つて、英國の財産家だと云ふ觸れ出しで、第一流のホテルに陣取つた。美容に盛裝を凝らせたことは、云ふまでもない。

ケルンの社交場裡で、メリーは一人の老貴族を擒にした。此の老貴族は三十年戰爭の勇將で、攻城野戰の名人だつたが、戀の駈引は全く下手だつた。すつかりメリーに丸め込まれて、多額な金を絞り取られて、家代々の重寶や勳章までも捲き上げられた。(勳章を取り上げたのはをかしなことだが、メリーの方では、倫敦へ歸つてから、獨逸帝室へ行つて居たと云ふ證據にする考だつたのである)。可哀想に、老貴族の殆全部の財産を身に附けて、明日は結婚式を舉げると云ふ日に、得意の三十六計の奥の手を出したのである。

しかも、此の時には、一層罪が深かつた。最初ホテルへ泊り込んだのだが、後には或後家の許に止宿して、そこで例の老貴族を手玉に取つたのである。此の主婦の後家は慾の深い女だつたから、之れに情を明かして、老貴族から捲き上げた物を折半する約束で、十分の手傳をして貰つたのだつたが、扨、愈ゝどろんをきめる時には、折半どころか、主婦の留守の間に、其の寶石や貴重品の目ぼしい物を掻つ攫つて、逐電したのであつた。

馬鹿な目を見たのは、氣の毒な老貴族と慾の深い後家とだつたが、二人が地團太踏んで、口惜しがつて居る頃には、メリーは海の上で涼しい顔をして居た。

贓品は倫敦へ歸つてから、獨逸帝室からのおみやげだと云つて、披露したのである。

十八

扨、話は前に戻る。

メリーがエキスチエーンジ・タヴアーンの主人の義弟カールトンと結婚して、間もなく、馬脚が露はれて、獨逸内親王の金箔が剝げたが、憤慨したのは、宿屋の主人キングを始め、倶樂部員の面々である。早速告訴したので、メリーは逮捕せられたが、カールトンはどこまでも寛容だつた。義兄のキングや倶樂部員を宥めたし、又此の連中にしたところで、表沙汰になれば、却て自分達の馬鹿を賣物にするやうな次第だから、告訴を取下げた。そこで、メリーは釋放せられた。

十九

昔も今も變らないのは、興行者の興行氣質である。自稱獨逸内親王の噂が高まるのを當て込んで、「獨逸内親王」と云ふ芝居

を興行して、メリーを主演女優に登用した。

メリーは今は滿都の視聽の中心である。殊に容姿が綺麗だから、一時は人氣が沸騰したが、メリーは舞臺以外の芝居は上手だつたけれども、舞臺の芝居はからつ下手だつた。又、斯樣な場當りの興行が永續しそうな筈もない。メリーは軈て解雇せられた。

劇場を逐ひ出されてからのメリーは、益〻以て一と旅の惡黨になつてしまつた。一と頃は金持の紳士の妾になつて、贅澤三昧に日を暮らして居たが、こゝにも長くは居られなかつた。詐をやつて、主人に愛想をつかされたからである。

其の後、萬引で捕へられて、法廷に送られた。

二十

其の頃は刑罰のひどく嚴峻な時代で、五シリング（二圓五十錢、尤も、物價が安かつたから、貨幣價値は今とは違ふけれども）以上の窃盜は死刑になつたのである。メリーの盜んだのは、銀の大盃で、相當の高價品だつたから、勿論死刑の言渡を受けた。併し、英國人は法律の勵行と法律の無視との間を巧に調和して、少くとも、法律の濫用の弊害だけは避け得る國民である。斯樣な酷刑の時代に於ても、贓品の價額を極めて安く判定して、死刑から一等減ずるか、又は、死刑が言渡された場合に、特赦の制度を活用して、輕い刑に改めることが多かつた。メリーに對しては、後者の手段が擇ばれて、特赦に依つて、死刑は流刑に變へられた。

メリーの送られた流刑の場所は、西印度のジャマイカ島だつた。當時は法律も嚴格だつたが、監獄に於ける實際の處遇も隨分殘忍なものだつた、尤も或點に於ては、極めて冷酷だが、場合に依つては、反對に、だらしなく放漫で、流刑囚に對する措置は想像以上に粗笨なものであつたらしい。斯く信ずべき證跡は外の事件にもよく出て來るが、メリーの場合に於ても、矢張だらしのないものだつたらしいので、果して、メリーは流刑地を脫出して雲煙萬里の旅路をまづは無事に、倫敦へ歸つて來た。

二十一

倫敦へ歸つた時には、メリーは既に人の世の半ばを過ぎて居た。併し、天稟の麗質は尙人を惱殺するに足りるものがあつたから、此の美貌を武器として、メリーは盛に犯罪を行つた。

メリーは嘘つきの天才である、しかも、年と共に、詐欺の技倆も益々圓熟の境に入つて來た。併し、犯罪の方法が上手になるに從つて、犯罪のたちは愈〻下品になる。詐欺や窃盜の數を

重ねて、メリーは遂に市井の常習の犯罪人、即ち、犯罪の女人仲間に墮落してしまつた。

倫敦へ歸つてから犯した罪の數々は、今も記錄に殘つて居るが、其の一々をこゝに擧げることは煩しい、又それを一々こゝに擧げる必要もない。要するに、それは普通の犯罪女人の普通の犯罪の方法であつて、我等不幸にして常に新聞紙上で散見するところのものと同樣の犯罪である。

二十二

流石のメリーにも、最後の日は遂に來た。

或本職の泥棒の連累として、――明白ではないが、メリーは此の本職の泥棒の女房になり下つて居たらしい――法廷で死刑の宣告を受けた。

英國の現在に於ては、死刑の裁判確定の後、三つだけの日曜は生かして置く。之れを Three clear Sundays と云ふが、日曜が三回濟むと、直に死刑を執行するのが通例である。我が國の實際に比べると、餘程手つ取り早いが、本篇のメリーには僅に中六日の猶豫が與へられたゞけであつた。

メリーの死刑執行は、今も倫敦のハイド・パークの北端の大道の上に其の跡を印するタイバーンの死刑執行場で公開せられた。當時死刑の執行が公開せられたことは、云ふまでもない。

法廷で審理を受けた頃に、メリーの健康狀態がひどく惡くなつて居ると云ふことであつた、それが又メリーの唯一の辯解でもあつたが、死刑執行の朝、メリーの顏色は寧ろ生き／＼して居た。滿三十八歲になつて居たけれども、容色は尙みづ／＼して、濃艷な八重櫻の風情があつた。

傍觀の人達に（前にも書いた通、當時の死刑執行は公開である。）最後の挨拶をすることは、其の頃の慣例だつたが、メリーも簡單だが、はつきりした口調で、自分の罪を懺悔して、偏に神樣のお許を仰ぐと云ふ意味のことを述べた。

死刑の方法は絞首である。美しい頸は固く締められた繩の上に垂れた。

メリーは十五の時に靴直しに嫁いでから、幾度も結婚したが、獨逸の內親王を僭稱して居た時代に一緒になつたカールトンが最懷かしかつたものと見えて、死刑執行人がメリーの屍骸を絞首臺から卸す時に、カールトンの小さい肖像が右の袖にしつかりと縫ひ付けてあるのに、氣が附いた。それを見て、死刑執行人は思はず下を向いた。大きな淚がほろ／＼と死刑執行人の頰を傳はつた。（昭和五年八月）

失業歸農風景

大產業豫備軍落伍卒

群司次郎正

朝つぱらまだき都會の灰色の空の下、砂糖のこゞりにたかつた蟻のやうに勞働者を以て鈴鳴りにした裝甲電車が茅場町の鐵橋をしゆ然と戞飛んだ後に、ゆらゆらと絆創膏の様な太陽が、ヒビのはいつたアスファルトの鋪道に照りつけ初めた。午前五時の溫度六十三度、やがて九十四度になるだらう九月の初め、でも新秋といふか松茸をゆでた流し水の香が角の八錢均一めし屋から街上に溢れでゝ、びしやびしやと溝板の下を溝鼠が急調な流し水の旋渦を求めて飛び廻り、時々、板の割れ目からグロテスクな眼を出してわれわれを輕侮してゐる。

ほうろくの中の芋のやうに、アスファルトの鋪道に胴を並べたわれわれは赤鰯の眼と餘り變りのない、ゆるんだ光度で、街上に交錯斷續するもろもろの有機體を、もろもろの無機體のやうに見とれてゐる。時々、婀娜々々とした朝歸りのヨシ町の姐さんを見送つて、「仕事にゆんべありついたな。」と羨しさうに感じてゐる。

「仕事！」

この言葉の持つ響はわれわれには絕對である。われわれは働きたい集團であり、働くに仕事のない失業者の羅列である。

淺草町の羅列一八〇四人、小梅業平町の羅列八五四人、新腐尾町二二四人、旭町七〇九人、永住町四六二人、富士前町三八人、綠町四丁目二〇六一人、富川町二三三八人、神田橋三九人、われわれ茅場町の羅列四三人は全日本四拾萬失業者の最前衛、明日の命を保證されぬ決死隊である。

天空に煙突が林立し、工場街が建設されて、大資本の產業機關が着々と稼働され初まると偉い景氣が出た。ヨーロッパ大戰以後、一九二〇年代の好景氣ににわか成金が馬鹿芹のやうに出て、清き一票を拾圓で買つた代議士が帝國議會で無能な戰爭で有能にしたりした。だが帝國主義の特徵は、資本主義が一定の段階以上に進めば、どんな偉い政治家がどんな政策をほどこしたつて不景氣が好景氣によりがもどりつこがない。そんな努力は黄昏を黎明に塗りかへやうとする努力と變りはない。數字の歴史を觀念の歴史に引きかへ様たつて、さうはうまくゆかぬ。正確な數字の上では一九二八年よりは一九二九年の方が失業者は多い。一九二九年より一九三〇年の方が更に多い。失業者はふえる一方であり、中小經濟會社がつぶれて、大資本會社が利潤の追及集產をやる。三井・三菱コンツェルンの土臺骨にかじりついてゐるものは安心かも知れんが、その他の會社の破產に溢れ出す失業者の洪水が混沌として都會の黄昏に旋渦となり急流となる。肥るものは益々肥り、痩せるものは益々痩せる。だが、これが清算整理した結果に

は極く小數の大富閥と九十九パーセントのプロレタリアートがイクオールとなるのである。そして將來、このイクオールが持續される限り、われわれは餓死をせねばならなくなる。なんとなればわれわれはめしを喰つて生きて行かねばならない有機體である。現場のまゝで、永久に資勞が合法してゐるわけはない。日一日、刻一刻、世界は動いてゐるのである。そして最後に現場を爆破して、地球を赤く染めるものはなんであるか? マルクスは歷史の現段階の說明に、われわれ失業者を產業豫備軍と言つたのである。生きるための戰線に於いてわれわれは世界產業豫備軍の最前衞、決死隊である。

ビルヂングとビルヂングの雁行するところ工場街と貧民街の錯走するところ、われわれ失業者にとつて、そこは正に戰線火蓋を切る前の塹壕であり、われわれの羅列は分隊であり小隊であり中隊である。ベルダンの戰線に於ける戰士が相抱いて「故鄕」に淚し「平和」を祈るやうに、われわれ、失業浮浪の身が打開け合ふ言葉は「故鄕」であり「いゝまあに景氣が好くならあね。」である。

果して再び好景氣の時代が來るだらうか? こゝに迷蒙と無智の悲劇がひそんで存在してゐる。われわれのレーゾン・デトールが「いゝまあに景氣が好くならあね。」の合言葉で、現されてゐるやうに、おそらく世界の失業戰士の魂をプロオクンにまで蹶飛させずに、さうつと眠らして置くのも、このアーメンにも比較出來得る程恐しい力を持つた標語があるからではなからうか?

世界大戰に動員された老幼男女の豫備軍の魂の中には「いゝまあに平和の時が來る!」といふ希望があつた。だが、世界資本主義對萬國勞働者の世界經濟大戰に動員されたわれわれ產業豫備軍の魂の中にはそれに代る標語があつても、事實、待ちぼうけなのだ。

『おい、英國百七拾七萬の豫備軍、お前達はこの事實を知つてるか?』

『おい、獨乙三百四十萬の豫備軍、お前達はこの事實を知つてるか?』

『產業の華、永久の富榮國アメリカ七百萬の豫備兵よ、知つてるか?』

否、おそらくは知るまい、われわれ、明日の日の生命をも保證され得ない失業戰線の最前衞戰士でさへ相抱いて「いゝまあに景氣がよくならあねえ。」とかすかな微笑を洩らしてゐる迷蒙なるものゝ縮命!

ところがわれわれが居る米場町の羅列に一人の變つた兵卒を見出した。彼はモスリン工場の機械戰で藥指と中指をもぎとられたといふ理由で、國家が擬×に恩給をつけて野放しするやうに、この男も工場から一ケ月半の手當でゴマ化されて解雇されてから、散々路頭に迷ひわれわれの仲間へはいつて來たのだ。顏に少しアバタのある支那人と日本人の混血兒で名を丹宗といつた。兇狀持ちのやうに指のない手でツルッパシも握れば二十貫位の石もかつぐといふ大さうな力も持つてゐる。その兩腕を振りながら彼は「働きたい、働きたい。」と唸つてゐる。二十年もの失業と立ン坊の爲、卷キヤハンを骨の上にまいたやうな爺さんが、イタチの樣に丹宗を見て笑つたのだ

『若けの、あわてるな、あわてるな、いゝまあに景氣が好くなるまで待つがええだ。』と。

『ツケめ、默つてろ。』若者は吸鳴り返した。

『ツケならいゝが近頃は爺さんはツブだよ。なあ、爺さん。』

しらみをとつてゐた仲間の河原廻りのキチが爺さんの骨だらけの肩を叩いた。爺さんは親切を仇でかへされたといふやうにいがみ上つた。

『景氣が好くなるまで待てといつたのが何ぜ惡い。』

『ツプ、沒落しかけた資本主義がもとへもどせると思つてるか、てめいみてえな耄碌は世の中が變らねえ中に景氣のいゝ夢でもみて野たれ死をしてしまうがいゝんだ。』

爺さんは、さういはれると皺だらけの顔をしかめ、歯のない口をもぐもぐやらしてゐたが、急に涙をぼろぼろこぼして「國へ歸りたい、國へ歸へれば、こんなとこで、こんな雛つ子等に馬鹿にされずともすむのだ。」と泣き出した。

だが、爺さんの泣き蟲は丹宗にいじめられなくとも、黄昏が來さへすれば、必ず一度は泣くのだ。七十のローマンチストだ―

廣告燈がクル／＼とまわり出して八重洲堀の國華ダンス・ホールや人形町のユニオン・ダンス・ホールへ行く若いモダン・ボーイが舗道を踊りながら通つて行く。冷めたいコンクリートの株屋の入口に腰下ろしたわれわれは今日もあふれて、夕飯のことを考へ、ねぐらのことを語りあつて、まだ四散せずに、脚を投げ出して羅列してゐる。

爺さんはツケと言はれツプと罵られて口惜しがり、大切な夕飯の糧を得る道を忘れてゐる。「ツケ」とか「タイガラ」とは安料理屋や居酒屋、待合、カフエーなどの臺所へもぐりこんで客の喰ひ殘りを貰ふものを言ひ、ツプとはわれわれの仲間では最も下卑た呼び名で祭禮縁日などねらつて、そこへ出張に及び一錢二錢の惠與を仰ぐ奴を言ふのである。

丹宗は河原廻りのキチと二人で五十何錢なにがしかの合併財産を持ち寄り、ドヤ（木賃宿或は簡易宿泊所のこと）の感じのいゝところを探さうといふのでたくたく歩き出した。印半纏のうへから空辨の包を帶にしたキチとナッパ服の丹がふらふらと。キチはゴミ溜、物棄場で探した炭俵を賣つて商賣にしてゐる男で、かういふ商賣を河原廻りといつてゐるのであるが、いつも相當に金を持つてゐた。彼には田舍に妻子があるのだが、握つた小金で家に歸らうといふ殊勝な心掛けは微塵もないやうだつた。その癖ケチで手くせが惡く、丹宗は自分の色女の同郷といふよしみで大分キチには奢つてゐるのだが、キチの方からビタ一文でも奢つた試はなかつた。丹宗は女を持つてゐた。おセンといふ名で、年は十九、淺草のおくしあげで、愛スキをやつてゐた。淫亂で身もちのならぬ奴、そして、男から男と渡り歩いてゐる。その癖、いつも丹宗がたずねて行けば小遣を呉れることを忘れぬ女なのである。心に淋しい故郷を持つた女だ―

丹宗は、キチに女のことを、女が淋病で弱つてゐることを話してきかせた。藥を飲ませたいが女も俺も治療し終るまで藥を飲ませる程金が續かないと彼はこぼした。キチは梅の樹の皮を煎じて飲むといゝなどと勸めて、得意になつて×の××と×の××との卷述を論じて、本所緑町の安めし屋で三品のおかもりをひつかけた。「たこす」「さざゑの壺燒」「すゝこ」「まつ茸の土瓶むし」「かけ醤油」「いか豆腐」「鯉こく」などの均一料理を横目に丹宗は五錢のこわめしを一ぜん食つたきりだつた。丹が卅錢キチが廿三錢の持合財産で、キチに泡盛をこれ以上平らげられると、晩にドヤ

泊る金がなくなつてしまう。でも丹はそんなことは別に氣にとめぬ性格だし、「ない、ない。」といつてゐて腹掛のどこからか必ず金を引つぱり出してひそかに酒をくらつてゐるキチのことだからと思つて、丹はキチの長い舌にまかれて彼のおしやべりを聽いてゐた。

キチは性慾論から性病論、はては女性論、社會論にまでなつて來た。

『丹、お前の言つてることは本當かも知れん、世の中に景氣なんか出てくる筈はねえ、大金持達が夫々、イタチごつこのやうに利潤の集めつくらをしてゐる世の中だ。それからといつておれ達はどうすればいゝんだ。學問なんか、今の世の中ぢや質の持ち腐れ同然ぢやねえか、今年の大學卒業生が三割しか就職しねえ中に、來年の卒業生が二萬人も出るさうだ。てへ……、たまつた世の中ぢやねえや。』

キチはもうベロンベロンに醉つぱらつて、どこから覺えたか學生の歌をうたい出した。

若き血に燃ゆるもの
光輝滿てる……とこの節の歌詞をいきなり惡口の戸蝸尻へもつて來た。『チエツ、いくら若き血に燃えたつて後期が滿員で就職難と來れば、希望の明星を仰いだつて糞の役にもたゝねえや、親から學費を月五十圓で貰う寸法で、家に寢てれば一年で六百圓、六年で三千六百圓といふ勘定だな。』

われわれ浮浪者にも哲學はある。キチのやうに何等の希望も持たずにポーポーと流れるまゝに、犬も歩けば棒にあたる、いつか仕事にぶつつからうといふ僥倖派が四十五パーセントだ！

丹宗のやうに、なんとかして働き度い、仕事につきたいと營々焦燥するものが四十パーセント！

爺さんのやうに「こんな苦勞をするより國へ歸り度い、國へ歸りたい。」といふのが十五パーセント！

この合計百パーセントがわれわれの羅列を大別してゐる要望であり、簡易な哲學なのだ。

腦漿をアルコール漬にして人生の一瞬々々をゴマ化し倒し、蹌踉立ち直つてその日その日の射利射倖を夢想してゐるキチは、五錢めし屋を出て丹の片手にぶら下つてろーろーたるものである。

潮來出島のまこもの中に
あやめ咲くとはしほらしや

『あーあー、いゝ氣持だな。』

『キチ、てめえはいゝ氣持になつてゐるが、爺さんは今夜もキンチャプだらう。同郷のよしみだ。どうだ、俺のかゝあと爺さんを連れて三人で潮來出島へ歸へらうぢやねえか？』

キンチャプとは絕食のことだ、今夜も爺さんは絕食かも知れない、晝間は爺さんに吠えついてみたが、夜になつてくれば、七十に餘ろ蒼顏枯瘦の姿を以て天涯孤獨の魂を蹌踉としてコンクリートの危險極る橋桁にかこつセンチメンタル・ローマンチストの身の上に同情の泪をまくのも丹宗の人間性でもある。

『馬鹿にするない、自分の身をもて餘してる人間が他人のことなぞおちおち考へてられるかつてんだ。……待て待て、おい、丹、うつかりすると木賃にも簡易宿泊にも今夜はありつけねえど。少し飲み過ぎて拂金をへこましたやうだ。』と、これがキチのいつもである。

爪をへがすやうに五錢白銅の三枚を何度も數へてゐたキチはよろよろつと臨割料理の細によりかゝつて、腐つた溝の流れ口に立つた

蚊柱をクンクン鼻で吸いこまないやうに注意してゐた。そして寄りかゝつた欄の下に、のーのーと濁流を東京灣へ押し出してゐる隅田川が、オラガ・ビールの電飾廣告を飲んでゐた。工場の暗い影が逆に波にくだかれてゐた。

『キチ、酒に飲まれるなよ、下は危ない、川だぞ。』

『それよりか、丹、お前どうするんか、俺は木賃や簡易宿泊にもありつけねえとすりや淺草町のタカリのトメ兄貴を探し出して當分餓死をしねえだけの小仕事を見つけなきやならん、ところでお前も明日になつたら一緒にかかあの里の淺草へ歸えりな。そイで今夜は野宿をしやう。』

空には傘をかぶつた月が照つてゐた。おかんをするにはおまわりや夜警の通りさうにもないベンチか、せいぜい軒下の貨車の上に一夜の安住のベットを見つけなければならない。

われわれのその一夜の名譽は東京市中にある三百九十軒のどの木賃宿かに泊つたといふその感じを朝になつてしやべることであり、馴染の簡易宿泊所の係の行狀を噂することであるが、その夜はキチも丹も不名譽なことにとうとうおかん組になつてしまつたのだ。

キチはその翌日、われわれの羅列から斥候のやうにひよう〱として消えて行つてしまつた。淺草のトメといふタカリをたよつて行つたのだ。タカリはオモライが貰つた僅かな金を剝たり、その用心棒となつて、外の繩張りの奴が見えたから「疊んじまへ」とか、警官が來たから「早くびつこの眞似をしろ」とか、と指導權を與へて教授料をまき上げてゐる類だ。

キチが行つてしまつてから丹宗の唯一の話相手はやつぱり骨の上に卷キヤハンをつけ、頭のないカンカン帽をかぶつた爺さんだつた。爺さんは好んでお國自慢をして泣いてゐた。産業豫備軍の決死隊の大部分は、志を都會に立てゝ農村を捨てゝ來た人々のなれの果である。何かにつけて思ふはふるさとの山であり川である。歸りたい、歸りたくても、二間なにがしの旅費にさしつかへて歸れない、哀れな亡命者達のノールスタッヂヤだつた。千葉、埼玉、新潟、茨城の順位に故郷を持つわれわれの仲間の中で、支那人の出稼人の父に、どこの誰れやらわからぬ日本人を母に、故鄕の味を知らぬ丹宗が、爺さんの話をききながら自分の愛する女おセンの故鄕、潮來出島の星や花に好奇とたのしみを持つたのも不思議ではない。

赤切符の電車が赤電燈の電車になつて戻つて來るまで、毎日毎日、呆然と脚を投げ出してゐるわれわれだ。そのコンクリートの背後の建物では株式店がパチパチとそろばん珠を上下さして、一朝で巨萬の富を得る人があるかと思ふと、一夜に以前の含勝株を叩いてゐるものもある。投機經濟、一六經濟、形式經濟の資本主義！「働かざるもの喰ふ可からず」の立看板を「喰ふものは働かざるもの也」と讀き改めるが至當々々だ。

『ナサケナヤ、ナサケナヤ、』と爺さんは立ち上つてよぼよぼと步き出した。丹宗もなんとはなしに爺さんの後をついて步き出した。丹はもう「働きたい、働きたい！」といふ本能のやうな慾求も、毎日打ち續く九十度の溫熱とのしいかをのすやうな作業場人夫淘汰法にあきれて、新しい生き方に四苦八苦だつた。

日傭人夫に一日ありつけばわれわれは一圓四十錢位までになるので、われわれとしては拮高位の仕事なのだが、やつと、現場へやつて行けば、まるで命を賭けるために掘り下げられたやうな埋立工事の傾斜面に、危かしい枕木を土臺として飴のやうな線路の上にかゝつたトロッコ押しが、そのつとめなのだ。その難工事でさへ志願者がまるでわいわい騷いで百人も必死になつてゐる中から一匹二匹三匹四匹五匹六匹七匹とせいぜいとつて十二、三人、それも顏見知りか身内のもの、あとは「あぶれ、あぶれ、駄目だ、駄目だ。三輪の溝掘で三匹、千住の砂利積で六匹、その位ほしいといふ電話だからみんなそこへ行つて見ろ。」とビワ樽のやうな現場監督が二十錢の赤ネクタイを風になびかせながらがなつてゐる。

『駄目だ！　絶望だ！』

死刑を宣告されたやうに、あぶれた階級が各々の羅列に歸つて行くのだ。

市電のストライキ
鐘紡のストライキ
モスのストライキ

資本主義の第三期經濟危機が自然成長すると罷業が頻發する。同時にストライキ破りのための動員が目下、篇されてゐるといふことが、われわれの仲間に誰れかれとなしの口かられて、幸福な奴は二、三人連れて行かれたといふ話をきくこともあるが、依然としてたいしたわれわれの戰線に動搖はない。その代りわれわれの仲間は增えるばかりだ。ゴム靴直し、廣告人夫、マッチ賣り、飴賣り、帽子大道洗濯、煙突掃除、安來節歌ひ、辻占うり、バタヤ、拾ひ屋、ジミ、こりや、テキヤ、河原廻り、ヨナゲ、赤木賣り、々々々々々。

一九三〇年の夏の終りになつてわれわれは全く餓死を目前にした、蒸しころされるやうな不景氣熱帶風にあふれて、どんどん商賣代へをせなきやならぬやうなみじめな危險に出くわした。丹は爺さんを連れて淺草へ進出しやうと決心した。

『爺さん、淺草へ行かう。淺草へ行けば、あそこはおいらの都だ。』

まこと、淺草は大衆の都、近代文明　象徴する、變態、病態、俗惡極まるナンセンスの歡樂市、さながら大衆の一番手近な熱狂と泥醉と耽溺とが、待ち受けてゐるかのや[illegible]た。

だが、それらの一切と背を向けて、公薄暗がりに棍棒で頭蓋骨を碎られたやうにのびてゐるのがキチだつた。キチは丹と爺さんを見ると垢面蓬頭の中に死人のやうな微笑を浮べて淋しさうに言つたのである。

ジンセイ（人生）ハ　フシギナモノダナー

爺さんは突然、「國へ歸りたい、國へ歸りたい。」と涙をボロボロとこぼし初めた。木馬館や水族館のちんどんが鳴つてゐる。「こゝはお國の何百里！」畜生、歩いて國へ歸らうか。

その夜丹宗淋は爺さんとキチをベンチの上にのこして妻君のおセンの居所を木賃からドヤときいて步いた。勿論、おくしあげにはもう務めてゐなかつた。或は夜鷹白首に身を落して、捕げられて施療院にぶつこまれたかも知れないと思つた。われわれは施療院を刑務所のやうに思つてゐる。不節制な氣隨氣儘な生活をわれわれの性格からハク奪することはとても有難迷惑だつたのだ。

丹はおセンのことをナガシコミ屋の富山の婆さんとこに發見した。この婆さんが、歡樂

場裏に百鬼夜行するシタタカモノ達はキンキチ婆さんと通稱した、キンキチは金氣違ひの略稱であるらしい、淺草で春を鬻ぐ少女達はみな、野天では發見される恐れがあるのでナガシコミ屋といふ素人長屋を根城に、刎錢をとられながらも淺草に集つてくる職人を引きこんだ。おセンも何時かこの商賣に行くところまで行つて、その極端を歩いてゐた。

『鄕里へ歸らう。』

『鄕里へ歸るの？　嬉しいな。』

と丹宗の片腕につかまりながらおセンは公園裏の方へ歩いた。おセンは暫く見ないでゐる中にげつそりと瘠せた。背が低くデクデクと太つてゐたのが、今では子供のやうに可愛ゆく、髮を切つた後が高く男のやうに刈上つてゐた。彼女はどんな悲慘な生活、どんな放浪でも、これが今彼女に課せられたあたりまへの人生だと思つてゐるので、あつけらかんとして一同に誘はれるまゝに鄕里への旅についたのだつた。

第一日目の行軍は常磐線に沿ふて北千住、龜有、金町まで歩いた。丹宗夫妻もお爺さんもキチも決して後をふりかへらなかつた。背後には寺島、本所、千住の大工場街に林立する煙突が見える。黃昏の大空に煙を遠く引いて、旅をする人の眼瞼をセンチメンタルにぼかすのだが、彼等は長く住みあきた都會に今更一ペツの懷顧も哀傷をも感ずる必要はなかつたのだ。

夜、芋畑を掘つたのだが、芋は根がミミツのやうに含らんだきりでこれで腹を充すといふには情けなかつた。晝の暑さを忘れて四人は神社のえん側で明日からの饑死を凌ぐ戰術として、やつぱり、沿道の百姓家の情けにすがる外はないことを協議した。

田圃から吹き上げてくるやわらかい、稀に見る豐年の風が丹に抱かれたおセンの嬉しさうな口から古里の思ひ出を語らせるのだ。カズノコのやうに荒れ果てた彼女にも「戀しや古里、懷し父母」の歌も覺えてゐるのだ。彼等にも戀情も刺戟も感發もあるのだ。繁茂する叢れ、二人は接吻したのだ。星が散り、星座が高く流れる。やがて、慾情と慾情のたうちまわりは、禁斷の實をも制することが出來ないで、喰ひこんでしまうのだ。禁斷とは何か？　彼女は激しい尿道炎なのだ。

どうしたはずみかキチが眞夜中、よろよろと醉つぱらつて境內へもどつて來た。丹はキチの醉つてゐるのを見ると「はゝあ、やつぱり何處かに金をかくして持つてゐるのだな。」と思つた。眠つてゐた筈の爺さんまでがクルリと起き上つて舌打を初めた。七十の爺さんがキチの醉つた姿を見る眼は生れて六ヶ月目の犬のやうに可愛いかつた。肩越しに丹は爺さんを見かへると急に可哀いさうになつてキチに「俺達に五錢づゝ借してくれ。」と嘆願した。キチはへらへらと笑つてゐた。その憎々しげな笑ひを見つめてゐたおセンの五錢白銅のやうなちいちあい眼が異樣に光ると彼女は自分の胸をかきつくろつてゐたが、放浪で眞白に光つた齒を出してケダモノのやうに笑ひ出した。

『ねえ、キチ！お前さん、私の××を×××××十五錢で買つてくれんかねえ。』

『そんなことしたら丹に絞め殺されらあ。』

『丹はそんな人間ぢやないわよ。』

丹はにやにやと笑つてゐた。

『いや、俺は金の方がほしいや。』

とキチがきつぱり斷つた後へ、爺さんが印半纏の襟をこかしながらパラパラと五錢白銅をえん側へころがして、それをあわてゝかき

棄めながらおセンの前に置いて狐狸に魅入られた人のやうに、おセンの顔を見て笑ひ出した。棺桶へ片脚を突込んだ七十のよぼ爺々に性慾？

上には上、下には下、まことツンセイはフシギナモノだ！

流れるまゝ、たどりつくまゝに、その翌日、四人は松戸の町へかゝつて來た。ホコリと九十度の太陽が彼等をゴマボタモチにする。こゝで彼等は、歩いて郷里へ歸る按摩夫婦とその二人の子供の一行に合流して一路千葉と茨城の國境へ、ぶらりぶらりと一錢貰ひ二錢貰ひ、にぎりめしを貰ひ、われわれ仲間が一番輕蔑する「ツブ」「ケンタ」の類に身を落して歩行する。安孫子に近づいたとき、按摩の一行は千葉縣印幡沼の近村へ歸るのだし、丹宗の一行は利根川を越えて取手に道をすゝめる。こゝの別れ道で、一面小松林の中の芝草を足の下に敷いて、一同は遍路と遍路のおもしろ可笑しさやつらさを語り合ふ。按摩は郷里へ歸つたら必ず一戸をかまへて鍼灸術の權威になるといふ抱負を吹張する。針でセンキ、スバコ、腰け、淋病、ショウカチなんでも治すといふ、そこでおセンは針を刺して貰ふことになり、赤い肉じばん一枚になつて草の上におをむけに寢た。人々は好奇の眼を見張つておセンの十五錢位でいつでも見られるエロチシズムに呆然と見とれてゐた。按摩は妻に針をもつて來さしてピシャ／＼と口で針をなめながら、「人體は蒲鉾のやうなものさ。」といふ特有の學理をのべながら癩病者のやうに鼻からボタボタと水をたらしてゐた。太陽がギラギラと暮れて行く、日沒といふに、この人々はなんといふノンキさであらう！

新聞は「失業者が都會に氾濫して、就職の望みを失つて續々農村へ歸る」の情報をかゝげ、かゆを貰つてすゝる圖や大樹の下に蟄踞をしてゐる寫眞まで載せて、これを社會的問題として提案してゐる。篤志家は、火災に家を失つた人々や水に家を追はれる人々と同じやうな運命を半生に背負つて漂浪してゐるわれわれの存在に慄然として同情の星を光らせてゐるやうであるが、われわれにとつてはかういふ野に寢、草に起きる、これ程ぴつたりしたノンキな人生はないのだ。

都會のどん底を幾條にも流れる産業豫備軍の塹壕線から落伍した兵卒の群にとつて、こんな靑々とした天地、懷しい故國への旅は、脫走兵のやうに心が踊るものだ。

だが、彼等の郷里である農村は果して彼等を容れる餘裕があるだらうか？　米は安い、マユは暴落、だが飢え死をしないことだけは確かと一面には考へられる、農民は米を作る民であるから、ところがとれた米の全部を地主と肥料代に入れてカユをすゝる小作人の生活がわれわれの故郷なのだ。

丹宗淋とおセンとキチと爺さんの四人は取手に渡る大利根の鐵橋を渡り初めた。上野發の急行がしゆ然過ぎた後に渺々とした地平線に落日が赤く關東の大平原を燒いてゐた。見渡す限りの草原の中にわれわれはわれわれの渡り鳥(ワンダーフォーゲル)の一群がこゝにもたむろしてゐるのを、鐵橋の上から發見した。彼等のあるものは壯嚴な落日に向つて合掌してゐる。

ナニトゾ　ケイキ　ガ　ヨクナルヤウニ！

實に全世界何千萬の産業豫備軍を支配し、去勢してゐるのがこのイデオロギーだ。

沒落の太陽、沒落の第五階級！

そして死線の上に血みどろとなつた垢面蓬頭の大集團を一貫して流れる思想は、惰けないことに、屑(ルンペン)の屑(ルンペン)であるといふことだ。

――一九三〇、一〇、二――

裸體畫隨筆

伊集院齊

芝居や音樂會へ行く時には、誰でも相當に着飾つて行く。女なんか、念入りにお化粧して、特に派手な着物を着て行く。ところが、繪の展覧會となると、然うは行かない。展覧會に來てゐる人たちの服裝は、概して質素なようである。これは何故か？ 十九世紀のイギリスの美學者は、それをこんな風に說明した。

藝術は刺戟に外ならない。だから、例へば展覧會場で繪を見てゐると、繪の刺戟に堪えられなくなる事がある。だが、この場合には、單に眼をつぶりさへすれば、その刺戟を消すことが出來る。然し、芝居や音樂會の場合には、勿論、眼をつぶつても、何にもならないし、かと云つて、耳をふさぐ譯にも行かない。そこで、舞臺から眼をそらして、邊りを見廻すと云ふ事になる。つまり、堪えがたくなつた舞臺の上の音の刺戟を、觀客席の景色で打消すと云ふのである。毒を制するに、毒を以てす！ だから、芝居や音樂會へ行く人達は、みんな着飾つて行くのである――

これが如何にも學者らしい、間抜けた說明である事は、誰でも直ぐに氣付くだらう。棧敷に竝んでゐる、人形のように着飾つた女達に、それほどの細緻な、心理學的な配慮があらうとは考えられない。彼女達はもつと違つた存在なのである。

歌舞伎座や、帝劇の休憩時間に、その廊下を散步してゐる人々の群れ、その何物かを物色するような眼、その好奇的な心――だが、それよりも、もつと露骨に、這般の眞相を物語るものは、歐羅巴の劇場であらう。例へば、伯林の國立オペラハウスについて云つても好い。其處には、特に大きな散步室が用意してある。休憩時間には、着飾つた男女が互に腕を取合つて、樂しさうに散步する。而も、みんなが同一の方向に、圓い輪を作つて、ぐる〳〵と散步するのである。一人で來たお客のためには、それを見物する場所まで用意してある。其處から見てゐると、それは實に整然として、一絲亂れない輪舞である。舞臺の上で見る、本場のワグネル物よりも、私には、この壯大な散步の方が驚異であつた。云ふ迄もなく、彼等は舞臺から受けた空想と昂奮を、この散步室で、女の腕をとりながら、又は男の胸に抱かれながら、現實化しようとしてゐるのである。

藝術が現實の喜こびを强めるための手段に用ひられてゐる事は、今日では、最早や否むことは出來ないと思ふ。音樂は日常、食卓の喜こびを增すために用ひられる。歐羅巴のカフエ、特に獨逸のカフエでは、大抵、音樂師を抱えてゐる。而もその食卓には、脂ぎつ

スープや、見るからに精力の付きさうな、肉の塊りが運ばれるのだ。所謂情調音樂（ステンムングスムジーク）を看板にして、お客の情念を唆らうと云ふカフエもある。試みに、何處の町でも歩いてみるが好い。町中にある公園や廣場の、噴水、銅像には、性的象徴としての馬、鵞鳥、水瓶の類が配置してある。家具、特に寢室用の家具には、例へば山羊の足とか、蛇とか、そんな象徴が刻んである。詩や小説にしても、同樣である。人は屢々、歐羅巴では、こんな質問に出遇ふだらう。「日本にはダンスが無いのださうですね。ぢやア、小説と云ふ物もないでせうね？」

男と女と組合つて踊る西洋のダンスが、性的な興味と關係してゐる事は、云ふ迄もない。踊つてゐる間は、音樂のリズムに乘るために、心の全部を占められる、なアんて云つたつて駄目である。私の考えでは、ドン・フアンと云ふ男は、女の心を捉えるために、充分にダンスを利用したに違ひないし、其のダンスの際には、一種特別な、擽ぐるような味のある踊り方をしたに違ひないと思ふ。又、それ位、不自然に挑發的であるからこそ、勞農ロシアでは、男と女とのダンスが輕蔑されるし、獨逸や英國の左翼の人達は、もつと澤山の人々が組んで踊る、所謂民俗舞踊（フォルクスタンツ）みたいなものを、推賞したいと考えてゐるのであらう。だが、それにしても、然うしたダンスに付き物の性的興味と、小説と云ふ物との間に、一體、どんな因縁があると云ふのか？ 歐羅巴人の小説觀は、我々のそれとは、少し違つてゐるように見える。

勿論、日本でも、今日では餘程、藝術が現實の興味に近付いて來てゐる。小説にしても然うであらう。暴露的傾向、特にエロ物の流行！　若い人達は活動寫眞のラブ・シーンから、單に藝術的なものばかりを求めはしない。中年の夫婦にとつては、それは屢々、オヴイッドの所謂「愛の樂」になるかも知れない。そして實際、今日では、人々は展覽會へも着飾つて行く。帝展の招待日なんか、特に色彩燦爛たるものである。繪を見るのか、人を見るのか？　勿論、或る場合には、繪よりも、人の方が見榮えがある。繪の美しさよりも例へば淸楚な洋裝の女、派手な丸髷の女の方が切實な興味を唆るからである。若しかすると、あの迂濶千萬なイギリスの美學者か病氣にでもかゝつてゐたのかも知れない

だが、日本のエロチシズムは、未だ充分、板に付いてゐるとは云はれない。云はゞ、獨りでエロがつてゐると云ふ所がある。と云ふのは、それが未だ新らしい興味だからであらう。歐羅巴の先進國（？）では然うではない。今更こんな事を口に出して云ふなんて、野暮な話だ、と云ふ所まで進んでゐる。歐羅巴人の生活には、すつかり、それが溶けこんでゐる。少し誇張して云へば、彼等の一擧手、一投足にも、エロチシズムが見出される。ところが、彼等に云はせると、日本人こそは、その道にかけて、最も敏感な民族なのださうである。

色々と讀んでみると、彼等がそんな事を考えるのには、およそ二つの理由がある。第一には、日本の春畫。第二には、日本人が生理的に強健らしいと云ふ事。

日本の春畫が優秀な物（？）である事は、云ふ迄もあるまい。歐羅巴人の繪なんか、とても足元へも寄り付けない。大味で、滑稽で、

熱情が足りない。羅馬人の繪にしても、知れたものである。ポムペイの女郎屋に殘つてゐる壁畫だつて、お道化半分にかいたと云ふ工合だ。近代では、フラゴナールや、ビアズレーの物に、やゝ立派な物もないではないが、それとても、湍長や歌麿に較べたら、兒戲に類する。而も、そんな種類の日本の繪が、歐羅巴人の間には、意外に廣く行渡つてゐるらしいのだ。

第二の點についても、相當な根據はあるだらう。ヴアン・デ・ヴエルデの「完全なる結婚」を讀んでみても、歐羅巴人は所謂完全なる結婚のためには、可成り長時間にわたる、技巧的な豫備行爲を必要とするらしいが、日本人は、それ程でも無さゝうである。佛蘭西の或る小說には、媾婚の言葉として、先づアフリカの黑人、次ぎに日本人と書いてある。だが、これは云ふ迄もなく、日本人が性的な民族である事を示すものではなくて、却つてその反對である事を示すものであらう。

日本人は過去の封建的、儒教的な道德のために、極端に性的な事を羞ぢたらしい。精神分析學者に教えられる迄もなく、日本人に多く見られる羞恥の感情、羞恥の表現は、この性的抑壓と、抑壓された性的衝動との內面的な爭闘である。つまり、日本人は性的に放恣でないがために、心理的にも、生理的にも、性的に敏感なのである。嫉妬の感情も、日本人には著しい。他人の戀の告白を聞くと、直ぐに、「おや、御馳走さま」とか何とか云ふ。それで、そんな話は聞き度がらないかと云ふと、然うでもないのだ。彼等の間では、嫉妬が既にマンネリズムにまで擴がつてゐる。

性的に痲痺した歐羅巴人には、勿論、こんな敏感さは解るまい。自分の女の事でなら、嫉妬しても好いだらうが、他人の戀の告白なんか、氣にしなくても好いではないか。だから、彼等はお互に心置きなく、カフエで女と不坐戲ることが出來る。誰も妬くような奴はゐない。公園の芝生に、女が寢轉ぶことも出來るし、往來で女と抱き合つて、長い接吻を交はすことも出來る。警官はそれを見ても、勿論「おい、こら!」なんて、そんな野暮な事は云はない。そんな事をしたら、それこそ、人權蹂躙である!それに歐羅巴人は、そんな性的行爲を眼の前に見ても、格別感情を唆られもしないのであらう。

敏感な日本人は、今日でも未だ、裸體畫を靜視することは出來ない。女學生や、若い女達は羞恥の感情に慄えながら、顏を赤らめて、その前を素通りしてしまふ。歐羅巴人は、そんな點は平氣である。私の知つてゐる、ミユンヘンの女學生なんか、當り前の事のようにして、裸體畫を見てゐた。伊太利の美術館では、エルムアフロヂテ(=男女兩性のヴイナス)の奇怪な裸體像をまじ〳〵と見てゐる。と云ふのは、一つには、こんな理由もあるだらう。日本人は室內でも、滅多に裸かにはならないが、歐羅巴では、男でも女でも、大して裸體を恥ぢとしない。獨逸人なんか、日曜日には郊外へ出て、一家揃つて裸かになる。日光浴をやるのだ。巴里に滯在してゐる、或るコスチユーム畫家は、佛蘭西の女が、寢室では何時も裸かになるので、コスチユームの觀賞が出來ないと不平を洩らした。

ところが、我々の間では、事情が全く一變する。北海道の遊女屋では、女が裸かになるさうだが、普通は裸體を見ることは出來

い。私の知つてゐる、若い美術學生は、始めてモデル室に這入つた時には、裸かのモデル女から、ぱあッと御光がさしたようで、眼がくらんださうである。私はその時、「ぢやア、君には湯屋の三助は出來ないな」と揶揄つたのだが、彼の告白は、多分、ほんとの所だつたらうと思ふ。

そんな風だから、女學生や、若い女達は、多分、裸體畫には興味が持てまい。見馴れない物、不道徳な物と云ふ意味で、興味が持てないばかりでなく、勇氣を出して、その前に立つても、それを觀賞することは出來まいと思ふ。或る美術史の敎授に云はせると、裸體畫について講義する時には、何だか變な氣持ださうである。男の學生達にも、裸體畫がほんとうには解らないらしいと云ふのだ。と云ふのは、裸體畫は元來、性的な繪だからである。勿論、中には、裸體畫をそんな風に考えるのはいけない、と云ふ人もあらう。私もそれは知つてゐる。例へば、ヘーゲル流に考えて、他の何物にも感じられない、有機體の美の表現と云ふ風に見るのだ。だが、その所謂有機體を、人々は實際、性的に見るのだから仕方がない。ヨロのヴイナスを見ると、誰でも、その肉付きの好い、而も好く締まつた胸の邊りに觸つてみたくなるだらう。最近の研究によると、昔は色付けがしてあつたものらしいから、このヴイナスなんか、顔は少しいかついが、定めしギリシア人の實感を唆つた事と思はれる。若々しいメヂチ家のヴイナスでは、特に脇の下から下腹へかけての筋肉が好い。これはロダンの言葉である。ナポリ美術館のヴイナスは、お尻の恰好が素敵だと云ふので知られてゐる。

物の解つた近代の美學者達の中には、觸覺や、溫度感覺や、その他、所謂低級感覺に重きを置く人が多い。ロダンも、彫刻は指先で撫でゝ見る方が好いと薦めた。裸體畫についても、似たような事が云へる。ところが、若い學生諸君は、未だ女の肉體その物に觸れた事がないのだ。だから、ほんとうに裸體畫が解るか如何か、疑問である。

勿論、裸體畫にも色々ある。例へば、ルノアールの、はちきれさうな體力を蔵した、肥りきつた裸體、ローランサンの冷めたい、滑らかさうな肉體、ボルヂユの骨張つた、ボナールの暖かさうな皮膚――これら、すべての裸體を見るには、可成り廣い經驗が必要であらう。批評家と云はれる人達も、樂ではあるまい。「カラマゾフ兄弟」の父は、どんな女にでも、豚のような乞食女にでも、獨特な味を見出す男だつたらしいが、そんな男には、腐つたような女の裸體畫でも、興味があつたらうと思はれる。

ところで、これは男の眼から見た女の裸體藝術だが、女の眼から見たら、一體どんなものだらう？　我々が男の裸體像を見る時のように、割合に無關心な氣持で見られるものかも知れないが、これについて思ひ出すのは、女のかく美人畫である。男の畫家が美人畫をかくのは、これは解る。ルネッサンス以後の深山のマドンナは、一種の美人畫と見て差支えないだらうが、嚴肅な美人、しほらしい美人、理知的な美人、感傷的な美人、さまぐ〵である。畫家の好みによるのであらう。歌麿のかく眼の細い美人は、恍惚の瞬間の表情を捉えたものだと云ふ人があるが、シエナ派なんかの繪には、そんな事を思はせるマドンナ

もある。

現代の好みから云へば、勿論ルノアール型よりも、ローランサン型であらう。歐羅巴の女は、多分、食物の關係であらう。みんな相當に肥つてゐる。伊太利の女は一番小柄で、背も低いから、この調子なら、日本の女も洋裝する權利があると思はれる位だが、ゲルマン系統の女になると、みんな堂々たる體格をしてゐる。獨逸の女なんか、どれもこれも實に大きい。伯林のヴイッテンベルグ廣場を濶歩してゐる、赤や、緑や、紫や、金や、銀の乘馬靴を穿いた、例のお孃さん達の一團は、服裝が服裝だけに、特に威風邊りを拂ふものがある。一説には、この乘馬靴を精力の象徴、變態的行爲の象徴と見て、彼女達の生活を云云する人もあるが、詳しい事は私は知らない。

兎に角、歐羅巴の女は概して大きい。みんな肥つてゐて、云はゞバロック風である。その反動として、ローランサンのかくような、小作りな女、グレタ・ガルボ、ブリギッテ・ヘルム、ジヤネット・ゲイナーみたいな女が、男達の興味を唆るのであらう。彼等がゲイシヤに對して異常な好奇心を持つてゐるのも、一つには、體が小さいためだと思ふ。ゲイシヤと云ふのは、一般的には、日本の女の總稱である。特殊な職業婦人だと云ふ事を知つてゐるのは、一部の人に限られてゐる。マダム・バタフライの歌劇では、何時も小さな女優が立役をやる。その方が受けるらしい。で、ほッそりした女、萬歳ー　流行もそれに順應して、スカートが長くなつた。その方が弱々しくて、情味がある。勿論、長いスカートは今日では未だ、有閑婦人か、又は、夜のダンス場へ行く女が着てゐるに過ぎないが、上から外套でも羽織つてゐると、外套の下から、スカートの端がちら〳〵見える。それが赤かつたり何かすると、我々日本人には、特殊な魅力があるようである。緋縮緬の蹴出しを聯想させるのだ。多少淫らな、女の情念を訴えてゞもゐるやうな感じである。

これなんか、ロココ趣味への復歸と云へよう。こんな女が、頭の好いナンセンスでも語つたら、猶ほ更である。だが、これは大して不思議でもない。資本主義末期の苦悶と頽廢の中にある今日、もう一遍、新らしいロココ時代がやつて來る事は、むしろ當然な事ではないか。

女の畫家達は、何故、理想の男をかゝないのだらう？　バンクロフト型なり、ナヴアロ型なり、思ひ切つてかいたら好さゝうに思ふ。女のかいた美人畫には、何と云つても、衝迫力が缺けてゐる。着物の皺にしても、例へば浮世繪の畫家達に見られるような、細かに情味を持つてゐない。女にとつては、筋骨逞ましい男の裸體も、好個の主題ではないだらうか？　そしたら、女の生々しい實感が出よう。何しろ今日ほど、實際的な關心が藝術を支配してゐる時代はないのだから――。殊に日本人の生活と藝術が、ます〳〵歐米化して行くとしたら――と云つてはいけない。世界的情勢の動きにつれて、可成りな程度まで、歐米と同じようになつて行くとしたら、猶ほ更であらう。私は、カントやその他の哲學者達が、あんなにまで潔癖に、藝術を關心から分けたのも、彼等が歐羅巴人だつたからだと考えてゐる。歐羅巴人だつたから、何にでも、分けて考えなければならなかつ

である。

今日では、藝術は闘心と結付いてゐる。野球や、蹴球、又、拳闘など、活力的なスポーツの盛んな時代には、藝術はうんと引込み思案なものになるか、思ひ切り煽情的なものになるか、どつちかである。但し、この煽情的と云ふ意味は、勿論、必らずしもエロなものとは限らない。あらゆる物を、性的に考えようとするのは、一部の精神分析學者の悪い癖である。風景畫や、林檎の靜物には、エロがあらうとは思はれない。モスコーの革命美術館にある澤山の繪にしても、然うである。のんびりした花の繪か何かだつたら、或はそんな風に考えられるかも知れないが、花を植物の生殖器と感じるのは、植物學者か、又は、あの道の特別な好者に限られてゐよう。だが、其處に人間が出て來ると、少しばかり違つて來る。マルクス的な藝術家達は、多分然うではないだらうが、大抵な人は、それを性的にでも眺め得る自由を感じてゐるらしい。グルーズの美人畫に添えられた薔薇の花、アングルの裸體美人の持つてゐる水瓶、を彼女達の意慾の象徴と見る事を、禁じる譯には行くまいと思ふ。

だが、藝術がもつと煽情的になつたら？感じの鈍くなつた歐羅巴人には、それが好いのだ。それでなければ、物足りまい。敏感な儘で殘されてゐる日本人には、少し殘酷なような氣がする。カフエの女給みたいなものではないか。彼女達は美しく着飾つて、意味ありげに笑つて見せたり、お客の肩に自分の肩を感じさせたり、時には、お客の膝に乘りかゝつて來たりして、可愛さうに、散々お客の血を湧き立たせて置きながら、而も法規の上では、最後の物は與えない事になつてゐるのだ。隨分罪な商賣である。

今に人々は、ローマ崩潰期のエピクロスのように、叫び出すかも知れない。若し、藝術が何か立派なもの、面白いもの、心をときめかすようなものだとしたならば、料理と酒こそは、最上の藝術でなければならない――。殊に酒！ こいつは、心理的に我々を煽り立てるばかりでなく、生理的にも刺戟してくれる。それに、前後の思慮を失はせて、どんな馬鹿な事でも平氣でさせると云ふ、有難い力を持つてゐるのだ！

法醫學漫談

淺田一

近頃はエロ百パーセントとかグロ百パーセントとかいふ様な題をつけぬと讀者の興味を惹かぬほどみんなの神經がたゞれてしまひ、しびれてしまつた。悲哉我輩にはさういふ材料が餘りない。題して「法醫學漫談」といふがけふは一つ「鑑定の惱み」とでもいふべきものを擧げて見やう。

鑑定は屢々判官が無罪と死刑との分岐點に立つて迷へる時にどちらかへの進路をきめる羅針盤になるのだと思ふといゝ加減に扱うてはならぬといふ責任感が先づ氣を重くする。精神鑑定で犯罪當時心神喪失又は意識不鮮明の狀態であつたと鑑定した爲に無罪になつたものも少くない。我々は法廷で宣誓する如く實際誠實公平なる鑑定を下すものであつて決して私心、同情心で左右されはしない。然しながら鑑定人によつて見所が違ひ、我々法醫が健常人と見たものが精神病學者の再鑑定で精神病者となつた所が亦少くない。我々法醫には精神鑑定が出來ないとは精神病學者の常套語である。我々法醫も一通りの精神病學の知識がなければつとまらぬわけで精神病理學や治療法はもとより我々の研究範圍外であるが、診斷だけは出來さうなものと思つて居る。我々法醫は先づ常人として檢査する。常人でないことが證明されて初めて精神病者としての診斷に取かゝる從而健病の中間にある者は我々の方では常人に入れるし、精神病學者は之を病者の方へ入れる。所が犯罪の危險性はかういふ手合に多い。かういふ連中を無罪放免として社會に自由にしておくのは虎を野に放つよりも危險である。寧ろ刑務所に入れておく方がよい。然らずんばかういふものゝ國立監置所を作つて欲しい。

一番閉口するのは酩酊狀態中の犯罪である。随分殺人もある。傷害、往來妨害などもする。嫉妬心からの種々の犯罪もあ

る。酩酊時には常人でも多少自制心がなくなり、平素おとなしい人が隨分亂暴な事をしたり猥褻行爲を敢行する樣になる。病的酩酊と云つて僅の酒にも深い酩酊に陷る人がある。か丶る精神朦朧狀態中の犯罪は夢の中の犯罪の樣なものであつて、自分で意識が明瞭になれば非常に恥かしく思ふのである。か丶るものは酒の醉が醒めれば全く常人と異る所がないから之は我々は犯罪當時心神喪失狀態にあつたと鑑定しても直に無條件に無罪放免にしてもらつてよいか如何かは非常な問題である。刑罰に條件がつけられぬかは知らぬが執行猶豫といふ條件もある事だからその間禁酒させもし之を破れば直に刑に處するといふ風に出來ぬものか知ら。

酩酊とは反對に犯罪當時は精神清明であるのに收監後朦朧狀態に陷る事がある。之はヒステリー性精神病である。精神健常なりしものが長らく未決監又は懲治監に居る間に精神病になるものが少くない。之は監獄性精神病といふのである。かういふものは刑務所から出るとスツカリ健常になる事がある。

かうなると犯罪當時は健常の精神狀態であるが現在は精神病であるといふのが出來て來て量刑及行刑上隨分面倒な事であらうと思ふ。

僕は嘗て某海軍主計中佐だつたが現役を止めてからいろんな事業をやつて居たが火災保險に入つて放火し、之を共謀した巡査を某山中に連れて行つて殺したといふ疑で未決監につながれて居たものを鑑定した事があつた。初はよく答辯して居たのに急に耳鳴難聽を訴へた。其後筆談を要求されるのをうるさがり、弱視、失明を訴へ、遂に手足が動かぬとて法廷には背負つてもらつて出る。そして必ず尿意を催すとて神聖なる法廷でヂャーーとやらかすといふ風で實に始末におへない。それで其聾盲、起居動作不能は詐病でないか如何か並に精神狀態は健常か如何かといふ鑑定を命ぜられた。其耳は今は登橋に開業せる黑須耳鼻咽喉科醫院長の加勢を受けて精細に檢査したが何等異常なく、聾を詐佯して問ふても答へないから黑須君の裝置で呼吸曲線を紙上に描かしめ非常に高い音調の音叉を耳のそばでならすと呼吸曲線に狂ひが來るが口には何ともいはない。驚いた樣子もしない。犯罪記事のある新聞切拔を前で朗讀すると呼吸曲線が著しく變化して來たから科學的に彼の眞の聾に非る事を證明し得た。眼の方は汚い話だが大小便を拭うた紙片を眼にこすりつけて眼の結膜炎をわざと起し、遂に角膜が溷濁するに至つたから明に見えない程度になつてしまつた。運動の方も科學的檢査の結果眞に動けないのでなく、わざと詐佯して居た事が明になつた。精神狀態も全く健常とわかつた。然しこの男は如何

しても白狀せずに數年に渡り未決監に居た。其後三宅騏一先生の再鑑定で遂に監獄性精神病になつた事が證明されたが肺結核で病死したらしい。罪がきまれば愛する妻子が恩給にはなれるから、又自決でもすれば恩給よりも更に少い扶助料になつてもしまふから恩給欲しさに頑張つたものと見える。それにしても之ほど自分を苦しめて生きて居る事は監獄生活以上の苦痛であるから一寸眞似は出來ぬ仕事である。こんなのは鑑定人泣かせであり判官泣かせでもある。

警察では屢々我々をシャールロックホルムスにたづねる樣に僅微の材料から樣々の事をたづねられるので閉口する。此間も海岸から女のショールで首を絞めてそのショールの一端に石を括りつけた嬰兒死體を持つて來て其生後經過日數、死後經過日數、致死原因を聞かれたのは當然の事だが尙加害者は男か女か、之を產んだ女は何歲位か、その容姿顏貌は如何とまで聞はれるに至つては唖然たらざるを得ない。然し搜査の苦勞に當面する人から云へば之ほど進歩した法醫學が之しきの事も鑑定出來ぬかと思ふのも無理からぬ事ではある。此間のこの事件では、嬰兒の臍帶はとれて通例五六日以後に出來る臍輪が完全に出來て居り、生後二三日出る胎便は全くなくて生後四五日以後の卵の菜種煮樣便が腸の中にあるし、生後四五日によくある腎臟の尿酸梗塞はない、頭髮が二五粍もあり、爪は手でも足でものびて居るしするから生後一週間以上は確に過ぎて居ると思はれるが體重も身長も生れた許りの子供よりも小さい位であるから如何しても生後二十日以上も經た子とは思へない。それで一週間內外と云ひたいが、例外的に生後二十日位でもこの樣なのがなきにしも非ずと考へられるから一週間以上二十日以內、といふ鑑定をしたがあとで聞くと生後二十日の嬰兒死體であつた。それから死後經過時間も實にむつかしい問題で腐敗の程度、死後經過の程度できめるが、チットも腐つて居らぬが死後經過が全くないので二十四時間內外かと思つたが十二時間以上四十八時間以內といふ風に範圍をひろく鑑定した。實際は十七八時間であつた。嬰兒では非常に早く死後經過がなくなるらしい。此子供は血液型がB型であつたが頸を絞つてあるショールの結び目の中の方から纖維を取つてしらべるとやはりそのしみこんだ垢からB型の人の所有品とわかつた。して見るとB型の母から生れたB型の子供だらう、小さい子だから安產であらう。月足らずであつたらう。母親の年などはわからぬ。どうせ二十から四十五六迄の間だ。榮養のわるい子だから十分母乳をもらつて居らぬ。病身の母か不義の母か、貰ひ子かと想像した。事實は母親が生れるなり後出血で死んだので十歲位を頭に三四人の子持の婿

子職人、當時失業の亭主は途方にくれてかゝる慘行を敢てしたのであるといふ。警察では先づ行方不明になつた人間を死體發見の場所に近き所から虱つぶしにしらべた。丁度其前夜に夜逃した硝子職人が居る、妻を二十日前失ひ、大學へ死體を寄附して香典をもらつた事やら乳兒の足手まとひに弱つて居た事やら、其夜家を明けた事やらを聞きこみ手配をしたので犯人は朝鮮へ高飛する所をF市に上陸するなり捕まつたのである。この嬰兒死體發見の場所に近く女の下駄が脫ぎ棄てゝあつた。之から血液型をしらべるとA型であつからショールの主とは違ふ卽この犯罪と直接關係がないらしいとわかつたが果して下駄は無關係であつた。血液型も犯罪搜査に追々應用されて行くのは面白い。

よく解剖上死因と認むべきものがない時にショックといふ鑑定を下す事がある。ショックといふのは外力に因する事が明であるがサツパリ死體に死因らしいしい變化の見つからぬ場合にいふのであるが之などは餘程鑑定人の方で用心せぬといけない。警察では屢々半ば强制されてといはうか、いつまでもひつこく聞かれる事の煩はしさといはうか、爲もせぬ事をした樣に云つてのけるものがある。それが豫審廷や公判でひるがへすのが少くない。中には實際やつておきながらわざとひるがへす樣な惡い奴もあらうが、眞にわるくないものもある。

所で醫者が警官の言を素に信じて死體を解剖して外傷の痕もないのに死因不明の所をショック死などと鑑定すると檢事は之を盾に取つて如何しても被疑者に外傷を與へたと供述せしめなければならず、不確な警官の言を根據として鑑定した醫師の言が今度は更に被疑者を自白さすべき根據になるといふ風に一犬虚を吠え萬犬實を傳ふ樣な結果になるから醫師の鑑定は獨自の知識と經驗とによつてのみ行はれなければならず、死因と見るべき原因が不明ならば正直に不明としておくべきである。不明ならば判官の採量で如何でも融通が利くわけである。

醫者が知識經驗の缺乏から出鱈目の鑑定をするものが之も隨分罪の深い仕事である。例へば死後五六日の溺死體があつたとする、醫師が死後一ヶ月のものと鑑定したとする。警官は一ヶ月前後遡つた頃の溺死者のみを調査するが如何してもわからぬ。ツイ五六日前に投水溺殺したものがあつたけれども醫者の鑑定を信ずるの餘り之を問題にしなかつた。然し如何しても死體の主がわからないので死體發見の五六日前に投水したらしい男の調査にかゝつたが時既に半年も後の事である。調査すればするほどこの男がその死體であつたと認めざるを得ない。醫者の鑑定が邪魔になつて決定し兼ねて居るといふ樣な事件もある

所で聞いた。

不十分な知識經驗で解剖した鑑定書の再鑑定も實に弱らされる。鑑定の基礎になるべき要素は凡て逸してあるから如何する事も出來ない。こんなのは結局不明に終る。初から經驗のある法醫鑑定人に鑑定さしておけば極めて簡單に片附くのだが。

一番困るのは同僚や先輩の鑑定したあとの再鑑定を命ぜられる事だ。凡て一流の專門家の鑑定の事とて鑑定の基礎たるべき要素は充分に備はつて居る。只その要素の解釋の相違が大家の鑑定の相違を來すのである。さういふ事件は新聞記者の最も興味がる題材で各鑑定人の鑑定の結果を新聞に大書するのでやり切れぬ。有力なる鑑定人の意見が咀唔すると判官は誠に迷惑であつて何れに贊成すべきかわからないから結局被疑者がうまい事をする。死刑囚たるべきものも疑はしきは罰せずといふ樣なわけで助かる事になる。

指紋や血液型が問題となれば現場保存は益〻嚴重に行はれなければならぬ。第一事件のあつた家庭の人や近所の人々が現場を荒し、次で新參の巡査諸君の臨檢で荒されてしまふ。新聞記者の寫眞班なども現場を荒す口だ。現場では指紋、足跡、遺留品等凡て犯人搜査の手掛りになるのである。煙草の吸殼も、鼻紙も爪楊枝も、一本の毛髮も有力なる手掛になり得る。然るに現場に入りこんだ上記の人々が所嫌はず踏んでまはり、又煙草をスパ〱すうて殻を棄てるに至つては科學的搜査もヘチマもあつたものでない。

M檢事から聞いた話だが賭博事件で現場に毛絲製の錢入れが落ちてあつたので之を手掛りに搜査した。被疑者の中にさういふ毛絲製錢入を持つて居たものがあつたといふ證人もあるので一生懸命此方向に搜査した所が、捕へて見れば不在證明が立派に立つ。當時犯罪の現場には居なかつた事が明にわかつた。そして且其錢入を失つては居らない。よく〱調べると當時現場に踏み込んだ彌次馬連の中に之を落して行つた奴があつた事が其後證人を虱潰しに調べた結果わかつた。之などは現場荒しの最も甚しいもので、之が爲に搜査方針がスッカリ誤つた方向に反らされてしまひ、其間に眞犯人は舌を出して影をくらましてしまふ。こんな事が實に多い樣だ。之れ一般民衆も、初めて現場にかけつける半くろうとも現場保存の重要さをまだ充分に飲み込んで居ないからである。此點一般民衆は徹底的に心得ておくべきものである。

現場から有力なる證跡が出なければ事件はかたの如く迷宮入をやるのである。迷宮入をやれば民衆も新聞も警察の無能呼はりをするが其原因の大部分は現場荒しの彌次馬の罪に歸すべき

であるそれからモ一つ悪い事は證人が本當の事を云はぬ事である。人間といふものは自分の不利になる事は絶對にやらうとしない。證人は只自分がかゝりあひになつて引張り出される事を恐れあたりさわりのない様な出鱈目を述べる。之が亦どれほど捜査を惑はすか知れない。尤も之は警官の方も悪い。證人に對する態度は巡査よりも警部、警部よりも檢事、檢事よりも豫審判事、豫審判事よりも公判迄の判事と漸次丁寧になつて來る。逆にいふと警察では最も横平で先づ證人の感情を害してしまふ。第一印象を悪くしてしまふ。さうなるとこちらもムッとするから反抗したい様な、困らしてやりたい様な心持にもなつて來る。薄給の巡査には充分同情もし敬意も表して居るが、巡査の民衆に對する態度はモ少し親切丁寧にする様に養成せなくては到底交渉が圓滑に行かぬ。昨日も長崎は諏訪祭で非常な雜鬧である。僕は大學に行く爲にこの雜鬧の中を縫うて電車道に出やうとした。突然恐ろしい形相の査公が僕の腕を捕へて「コラ此所を通つてはいかん」といふ。かうなると僕も神様や佛様ではないからムッとする。「用があつて通りぬけるのです」と云つて人垣の薄さうな所を撰ばうとすると人垣の厚い方に僕を押しつける。「之は亂暴だ、通り道を作つてもらはにや拔けられない」「勝手に出て行け」といふ問答になる。そばに交番所がある。その前は極めて人垣が薄いからそこを通らうと思つて他の巡査にやさしくたづねると「通り拔けるならあそこを行つて下さい」と云つてくれる。漸くの事で通り拔けやうとするとサッキの怒聲巡査が「モウ一人も通してはならん」と威武高に罵つて居る。固より面識のない巡査ではあつたがこの調子で取扱はれては如何におとなしい民衆もムットせざるを得ぬ。保安課の巡査は勿論刑事課の巡査もモット親切丁寧にしてくれなければ今後の民衆を治める事は出來まい。

親子の鑑定が近頃大分新聞紙上を賑はして居る。血液型から極めて明瞭に他に姦夫のある事を知る場合がある。最近某市の某家に於てA型同士の夫婦間に四女があり長女A、二女O、三、四女A即四人の内三人はAで一人はOであつた。之は兩親ともA型ではあるがOといふ劣性分をも持つて居るのでAO型であるといへる。メンデルの法則で示すと

$$AO \times AO = AA + 2AO + OO$$

で三人のAと一人のOとが出來るのは誂へ向である。所がこの二人の間に第五番目に男子の子が出來た。普通ならば非常に喜ぶべきであるがこの主人は餘り喜ばない。何故なればこの程から妻の態度に疑があり、姦夫らしいものも略ゞ見當がついて居る。この子はB型であつてA型同士の夫婦から生れる筈はな

い。姦夫の血液型はAB型であつたから

$$AO \times AB = AA + AO + BO + AB$$

でBO即B型も生れる事がわかり、このAB型の男がこのB型の男兒の父かも知れない。少くともA型の父の子でないことが明になかつた。

かくて父に非ずといふ事がハッキリわかるのは十件中の一位であることは外國人の報告にもあるが僕のやつた十三件の鑑定中二件しか否定が出來なかつた。肯定の方は血液型だけでは確實性がないので顏の類似など百數十點を比較してなら略ゝ決定する事が出來る様になつた。

鑑定は事件が新らしい程容易であり、古くなる程難かしい。數年を經過してから犯罪現場にあつた血痕のついたらしい簞笥や衣類から人血や血液型を證明さゝれた事があるがいつも不成功に終つた。其間に血痕は氣味が悪いから何度も〳〵洗ふであらうから色こそ幾らか殘つて居ても全く證明出來なくなつて終ふ。

いつか兄を恨んで其家族を毒殺せんとして飯の中に青酸加里をとかしこんだ男があつた。この嫂はしつかりもので飯の色の異常に黄色いのに驚き、先づ猫に食はしたが忽ち吐した。その飯が僕の所に運ばれたから嗅いで見ると刺戟性の臭氣がある。青酸ではなからうかと直覺的に考へたので檢すると著明な反應が出た。刑事課にも早速知らせた。警察では青酸などは全く考へ及はず猫いらずとにらみあらゆる藥種屋で猫いらずを買つたものを物色して要領を得ないで居た。幸に僕が青酸加里だらうと云つたのでハッと氣がつくと此邊は蜜柑の産地で害虫驅除の爲に何の家も青酸加里を貯藏して居た。それから家庭の事情をしらべると弟と不和であるといふから直に弟を捕へたのであつた。處がこの事件が豫審へまはつてから家宅搜索に出かけて、この藥劑のはいつて居た抽出を檢査したが最早や飯の時の様に著明には反應が出なかつた。かういふ風に古くなるほど何でも反應はボンヤリして來るものである。

血痕の鑑定は九大教授高山先生の方法で極めて簡單に出來るし、人獸血の鑑別は東大教授三田先生の方法で簡明に出來るが精液の鑑定は今尙中々面倒である。此程も某強姦事件があつたが腰卷やパンツやら澤山しらべたが紫外線で光るけれども寧ろ尿か膣の分泌物かと思はれるものしか見つからぬ。警察では確にやられた事になつて居るが精液は出て來ない其被害者の一人なる一少女は局部の檢査もしたが處女膜も全然損じて居なかつた。之が警察ではやられた事になつて居るのであるから驚かされる。尤も精液の方は極めて新らしい材料でないと確實に證明出來兼ねる古くても保存の完全な場合でないと證明出來ないと

いふ幼稚な程度であるのでたとひ強姦せぬまでも猥褻射精などあつたか如何かを簡易に調べ得たらと、かゝる鑑定の度はなさけなく思ふのである。之もやがては簡易にわかる様になる見込はあるのである。

近頃は純醫學的でない筆蹟鑑定や僞印の鑑定も引受ける。之も比較研究に慣れて居る我々には容易の業であつて紙の質、朱肉の質、書き癖印影の各劃線の長さ太さなどを計測するから一たまりもなく眞僞がわかつてしまふ。顯微鏡大寫眞と、立體顯微寫眞紫外線と、紙質計、紙の厚さをはかるきかいなどで鑑定するのである。

X光線なども屢々のみ込んだダイヤや腕時計を寫眞にあらはせるし、骨傷害の程度、銃丸刀刃破片の殘留などを明かにする事が出來るから鑑定に重要な機械である。

活動寫眞なども現場臨檢に必要なものとならう。ハルピンで伊藤公を狙撃した犯人は偶々撮影されてあつた活動寫眞に出て居るから眞につかまつたとの事である。第一に現場にかけつけたものは活動寫眞を取る様にしたいものである。

以上取りとめもない法醫漫談を書いたが我々の努力も一に一般民衆の現場保存の必要を自覺するせぬに係つて居る所が多い。讀者各位も互に此點に留意せられん事を。

（昭和五、十、八稿）

出版部通信

馬場恒吾氏の「現代人物評論」には、正直のところ面喰つた。こんなに豫想外に多く賣れやうとは思はなかつたのだ。之は吾々にとつていゝ經驗だつた。眞面目な本の要求される理由がわかつた。聞くところによると、此の頃の左翼側の陣營――別して若い青年學生や、眞摯な勞働者の研究團體では、觀念的な理論鬪爭よりも、極く具體的、現實的な問題に研究の鋒を向け、あるがまゝのブルジョア社會の政治機構や經濟組織を深く〳〵掘下げて解剖批判して行く風潮があるさうだ。さういふ意味で高橋龜吉氏の『日本財閥の解剖』やこの『現代人物評論』がその種の會合に持ち出され常に熱心な討議の的となつてゐると聞く。

西部戰線異狀なしの發聲映畫は、檢閲の難關にひつかゝつて隨分永らく採まれたが、結局約五分の一のカットで曲りなりにもパスしたさうな。我社の半額普及版は八月廿一日から九月十五日迄一ケ月足らずで完全に百版を賣りつくして仕舞つた。今尚ほ盛んに賣れつゝある。これは實際、妙な本だ。

吾が出版部が開設されて丁度一ケ年になる。ちつと靜かに目を閉ぢて、遮二無二突つ走つて來た過去一年の足跡を回顧すると、感慨無量。熱切な支持と後援を賜はつた大方のファン諸君に厚い感謝の意を表します。

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルヂング五九〇區

中央公論社代理部

振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)五三五番

◇代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金にはなるべく一番安全な振替をお利用下さい。

◇御註文の際は郵税をお忘れなく爲替でお送金の節は必ず書留郵便に願ひます。

◇切手代用は拾錢以下の郵便切手で一割増の事。その他は一切お受け致しません。

最も經濟的な 實用替ズボン

本社代理部の替ズボンは、價格に品質に已に定評あるもので、何れも地方在住の愛讀者諸君のために、特選したものばかりであります。

純毛黒サージ	三圓八十五錢
上等黒サージ	五圓七十錢
極上黒サージ	七圓二十錢
純毛黒絹セル	五圓
上等黒絹セル	六圓五十錢
純毛茶及黒メルトン	三圓八十錢
フラノ（薄茶、鼠、紺）	四圓三十五錢

◆特價提供品◆

半毛黒サージ	二圓七十錢
茶褐スレン（園藝用）	一圓六十錢

寸（大	腹廻約二・四尺	股下一・九尺
（中	同　二・二尺	同　一・八尺
法（小	同　二・一尺	同　一・七尺

御註文には大中小の別と參考に全身長も御記入下さい。（股下はクルブシ迄を計つたもの）

送料内地十八錢　　領土四十五錢

古書賣買のお取次

「古書案内」に從來古文書、和本錦繪等も掲品中に加へてをりましたが、往々中には思はぬ高價な内容を持つものがあり、再び求め難いものを含む場合さへ少くありませんので、今後はこれ等の類に屬するものは一切お受けしない事に致します。

要するに賣買共に普通の古書のみをお扱ひ致しますですから、右の規定を御一讀の上どしどし御遠慮なく御利用を願ひます。

規定

A、御紹介には往復端書又は返信料を添附して下さい。

B、御註文はなるべく振替で、前金御送附を願ひます。

C、送品は代金後一週間位と御承知下さい。但古本の事ですから、御紹介代金までの間に現品の移動があつた時には、再び探し出す爲に相當の時日を要する場合があります。隨つて價格等も時には變動する場合が生ずる事もあらかじめ御承知を願ひます。

D、御註文御希望の書籍は、書名、著者、發行年月日、發行所、其他の手段等詳細にお書添へを願ひます。時には、現品を拝見の上でないと評價し兼ねる場合がありますからその旨お含みおき下さい。又その費用は實費を申受けます。

E、御紹介の宛先は、「中央公論社代理部古書案内係」と明記して下さい。

代理部特製品案内

圖書券

この圖書券は、中央公論、婦人公論の誌代、本社出版物の購讀は勿論、代理部の何品のお註文にも應じます。五十錢、一圓、五圓、十圓の四種。

四季の香水

春の香水(白梅)
夏の香水(スヾラン)
秋の香水(ヘリオトロープ)
冬の香水(シクラメン)

佛蘭西製にも優る本社特製品、紳士淑女の常用品として、本誌及婦人公論愛護者の家庭におすゝめ致します。定價各二圓四季又は四個七圓五十錢。

コーリンス・ハイゼニツククリーム

これは肌の營養クリームです。他人に好感を與へる事が日常禮義の重大な一要素である事を御存じの方は、寒風に荒らされた肌を毎夜このクリームで整えてをく事です。一層使ひよきこれの水クリームもあります。共に定價一圓五十錢。

コーリンス・オードベラ

肌をひきしめ、皮膚そのものゝ美を增しこれを常用すれば、ニキビは決して出來ません。定價一圓。

最新治淋藥 ピコノール(男女共同)

淋疾は一刻も捨てゝは置けない。直ぐ治さねばならぬが、**選藥に迷ふ必要はない。**代理部推選藥**ピコノール**の內服に限る。從來淋病藥はこれのみと云はれて來た白檀油に優る事數等、**胃腸障害を起さぬ事妙です。**

藥價 五十五錠入 二十五瓦入 各金二圓八十錢
送料 內地十八錢 領土四十五錢

電氣湯タンポ

本社代理部の特賣品であるこの電氣湯タンポは、熱湯を用ふる危險が無く、**數時間毎に湯を入れかえる手數を要せず**、而も常に攝氏七十度內外の程好い溫度を保ち、何時間繼續使用しても、絕對に**一定以上の溫度には上昇しない**理想品です。

勿論發火する危險は絕對になく、電氣の消費量は僅に二十一ワット(約十六燭光ニ該當)ですから、電氣料金は極めて僅少です。

カタログ御入用の方は御申越し下さい。



定價 二燈用ソケット及カバー添附 三圓七十錢
送料 東京市內十二錢 內地四十五錢 領土七十五錢

スマドレ、シャンプー ヘヤトニック

シャンプーは洗髪液、ヘヤトニックは美髪液、前者でキレイに汚れを落し、後者で毛を養ひ天來の美を増すと云ふ仕組は流石にパリー、ニューヨーク、ロンドン等で賣出してゐるものだけあります。

殊にこのシャンプーでの洗髪は實に手輕で、日々忙しい社會に立つて、男子の髪を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、數滴スマドレシャンプーの用意さえあれば、僅かな時間で毎もさつぱりとした髪で、自他共に氣持ちよく會談する事が出來ます。

定價　特大瓶　二圓



而も朝夕スマドレヘヤトニックを用ひて輕くマッサージする事で、一日の能率を高め、芳香邊りを包み毛髪は絹の様に軟く日々漆黑の美を増します。

定價　婦人用 紳士用　特大瓶各二圓五十錢

送料各東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

ユーカリ吸入器

ユーカリ吸入器の效果は、已に世に識られてゐます。噴霧器式の樣に大仕掛けでなく、蒸氣吸入式の樣に億劫にならず、敷島一個ポケットに入れた程の輕るさで、車中でも、事務室の中でも乃至歩きながらでも、煙草を吸ふ程の手數も要らずに樂々と使用が出來ます。



使用法

(イ)部からユーカリ油少量を入れ、其程度は(ニ)部の小孔が覆はれる迄。鼻の悪い時は(ハ)から咽喉又は口腔の悪い時は(ホ)のゴムをはずして(ロ)から吸ふ。三四回深く吸つて、二三回むせた位な所が適度です。使用後は(イ)と(ロ)とに栓をしてをけば何日までも使えます。

(ユーカリ液一ヶ月分附)

定價　上製　一圓八十錢
　　　並製　一圓三十錢

送料　内地十二錢　領土四十五錢

最新除毛劑

タキーは、手足、腎の下、襟、髭等任意の所に塗つて、三分乃至十分後に水で洗ふだけで剃刀で剃つたよりも綺麗にすつかり除毛する事が出來、繰返して使用するにつれて次第に毛が發生しなくなり加ふるに皮膚の美を増すと云ふ重寶な藥です。



定價(マムクリーム付)二圓二十錢

送料内地十八錢　領土四十五錢

新産兒調節器

獨逸製オクルサトルは、海綿纖維質の部分と、絶對に水液の通過を妨げるゴム障壁と把柄からなる新發明産兒調節器で、他の從來品の生理的損失を一掃した良品です。

本器は永久的の使用に堪え、眼覺めたる新しき家庭の實際問題の上に輝く大いなる光明燈であるとまで多大の賞讃を受けてゐます。

一回經産婦までは　〇番
三回經産婦までは　一番
四回以上の方は、　二番を使用

定價　(錠劑十二錠付)　六圓
錠劑のみ十二錠　二圓
送料　内地十八錢　領土　四十五錢

サユリ ヨウモトニック

藥で有名な三共の新製品です。毎朝脱脂綿につけて、頭の地肌に摺れば、所謂若禿を防ぐ事受合ひです。〇頭の痒い人、脱毛する人、〇壮年禿髪の人、遺傳禿髪の虞ある人、〇若白髪の人、〇大病後薄毛の人、〇日常ポマードを多量に使用せらるゝ人、〇病床にあつて洗髪の出來ぬ人、特に婦人では〇産後薄毛の人、〇常に日本髷の人、〇大きな添へ毛、髢を用ふる人、〇赤毛が苦になる人はお用ひ下さい。

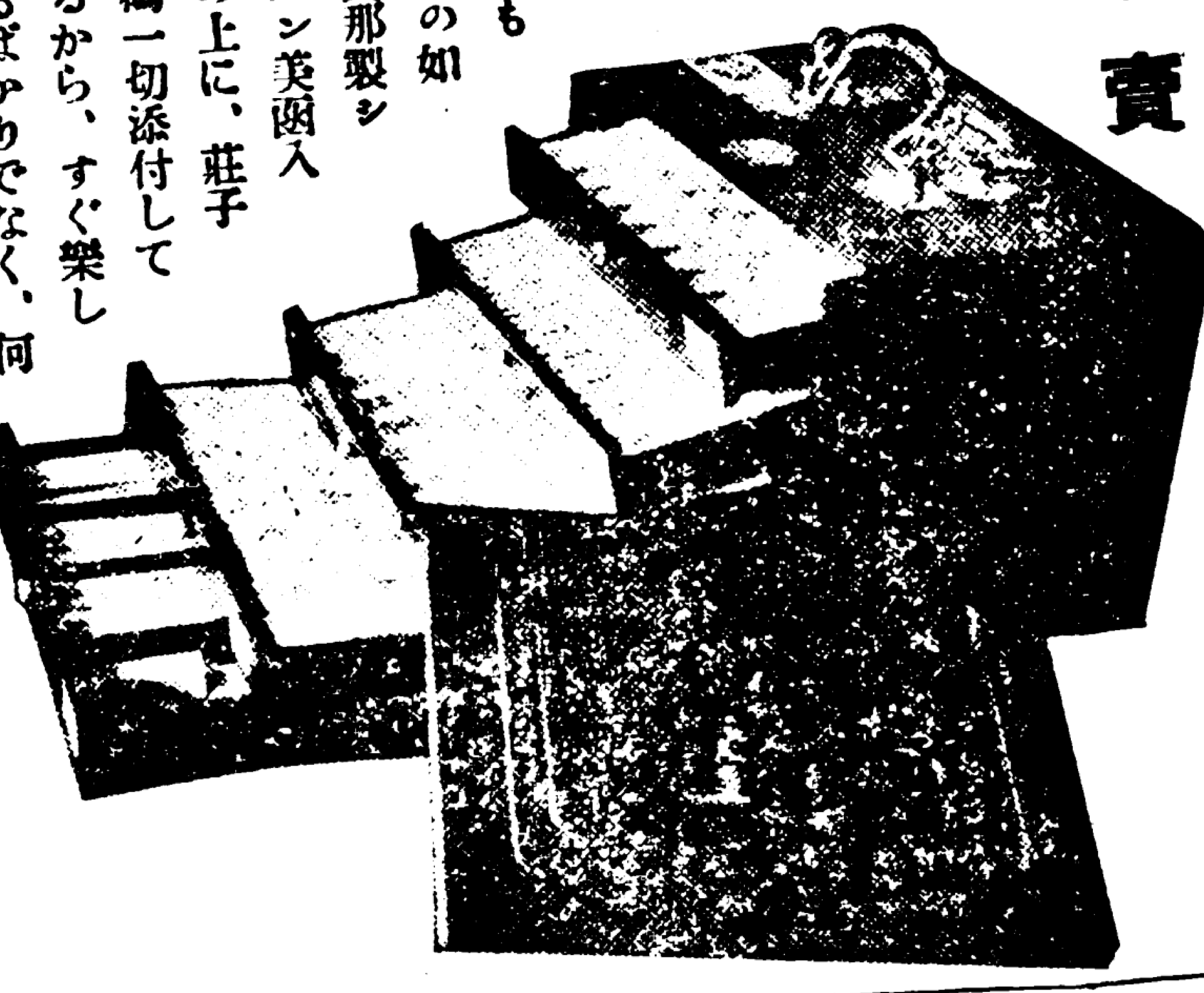
定價　大　二圓　小　一圓二十錢
送料　東京市内六錢　内地　十二錢
領土四十五錢

麻雀牌特價販賣

◆麻雀牌は徒らに高價なものと思つてはならない、と云つて余りに廉價な呼聲につられたのでは粗惡品を買はされる。要するに信用ある手を經て求めるに限る。

◆本社代理部の特選標準牌は、市價よりも少からず廉價ですが、之には理由のある事でその代りストックが僅少ですから、現品の配送は嚴正な御註文順により、遲れた方は次回の入荷まで、少しづゝお待ちを願ひます。

◆何れも下圖の如き支那製シユタン美函入りの上に、莊子籌碼一切添付してあるから、すぐ樂しめるばかりでなく、何所へ出しても恥しくない優良品ばかりです。



骨のみの厚さ　支那尺	曲尺	
A（八分）	（二分）	二一・六〇円
B（九分）	（二分二厘半）	二七・五〇
C（十分）	（二分五厘）	三五・五〇
D（十一分）	（二分七厘半）	三九・七〇
E（十二分）	（三分）	四五・三〇
F（十三分）	（三分二厘半）	五一・〇〇

送料　東京市内十二錢　内地六十三錢　領土　九十錢

◆試みに見よ。此の函だけでも市價六・七圓は取られる。籌碼だけでも二・三圓はする。これ等一切を集めた價格に比較して、本社代理部の特選牌が如何に廉價であるかを知られ度い。ポール函入りの牌でも九分と云へば二十六・七圓は普通の市價です。

◆型は全部日本に於ける標準型で、彫刻と云ひ着色と云ひ、純正な支那製だけに一點の非を打つ所もなき優良品です。

「注意」　麻雀牌は販賣規則の殊に嚴格なものにつき、一度封を切つた上での御返品及御取換えは絶對にお斷り致します。

アテナ萬年筆

使ひ出せば、間もなく執筆者の手と習風になじみ、使へば使ふ程いよいよ書きよくなると云はれ、舶來品に勝ろ國產第一の優秀品です。

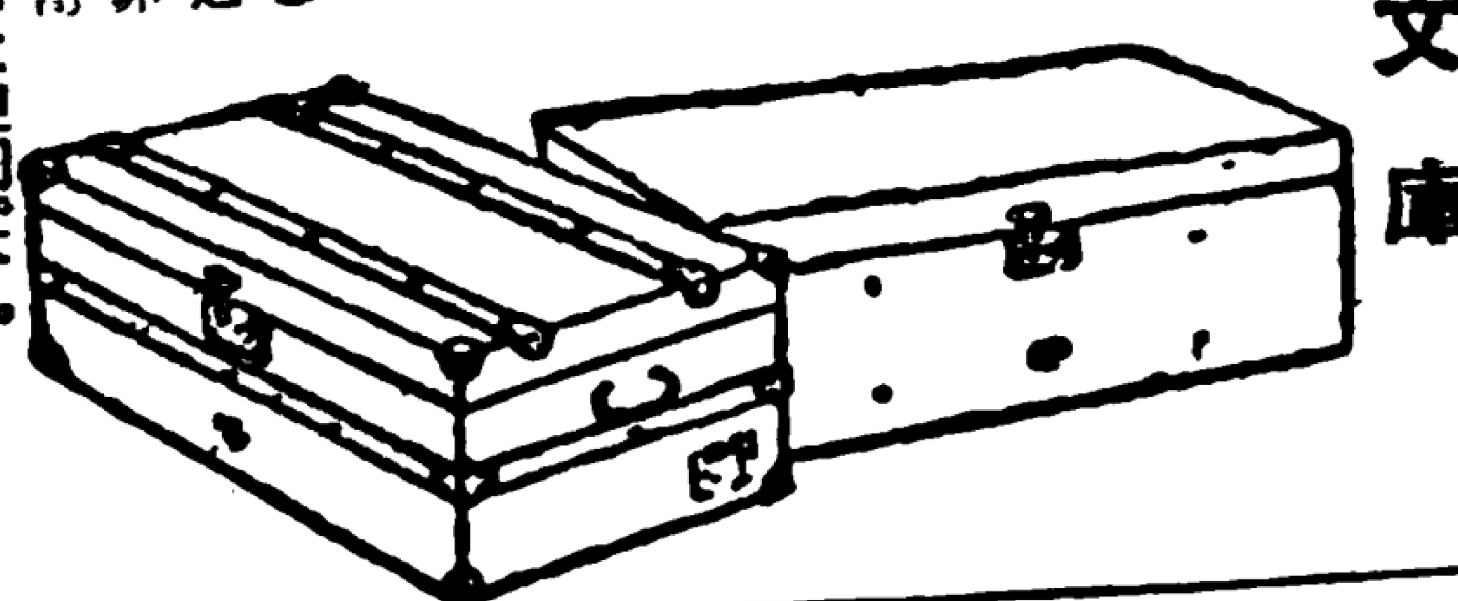
定價　二圓八十錢　四圓　四圓五十錢　（回轉吸入式）二圓八十錢

送料　内地　十八錢　領土　四十五錢

昭和文庫

厚い鋼鐵板張りの外面には漆の高溫燒付けを施し、防蟲防濕の工夫をした堅牢な容器で、縱二尺四寸、幅一尺二寸、高サ八寸五分、内壁は木板で圍み、ナフタリン樟腦入れまで設備してあります。

毛織物類入れに貴重書類入れに、上製はトランクとしてそのまゝ發送する事が出來、非常用としては簞笥や支那鞄より遙かに便利です。



定價　上製　九圓八十錢　並製　六圓八十錢

送料　東京市内配達料二十錢　地方荷造費三十錢運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した獨特製品で而も洗濯が出來布よりも丈夫です。

改正定價　大　一圓六十錢　小　一圓

送料内地　十二錢　領土　四十五錢

ズボン吊兼用 保健整形帶 サッポーター

(一)ズボンを腰で輕快に釣り支へます。ズボン吊の如く肩の凝りや、胸脊の壓迫がなく、ゆるやかな氣分で常に居られます。

(二)姿勢を正しく、スタイルを端正に整へます。座臥動作は自由て、姿をスラリと見せ、前屈みの人も姿勢の正しい習慣となります。

(三)胃の下垂を防ぎ、腸を保護し、腹力を强めます。

疲勞を和らげ、神經過敏に陥る事を防ぎ諸種の病弱の原因を輕減し、自然健康を增進します。

(四)執務も活歩も愉快に、活動力が盛んになります。

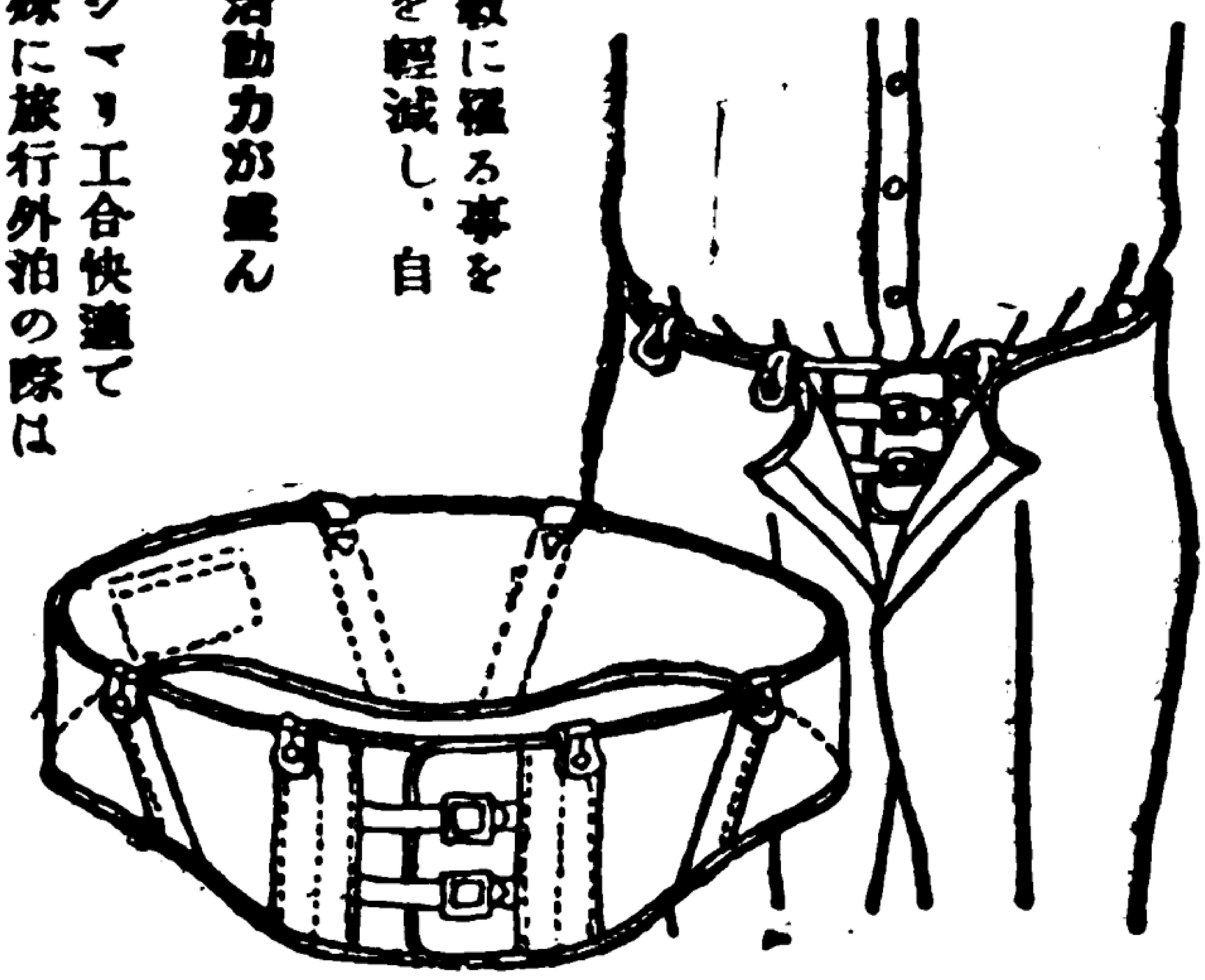
下腹、腕骨、脊柱等のシマリ工合快適で和服の場合にもよく、殊に旅行外泊の際は安全胴卷の代用をつとめます。

(特大)周圍範三尺五寸中心　(大)二尺四寸中心　(中)二尺一寸五分中心　(小)　一尺九寸中心

高級特製品五圓五十錢　A純毛ネル地三圓八十錢　B混毛ネル地二圓九十錢　C一重地二圓五十錢

送料　東京市内十二錢　内地十八錢　領土四十五錢

◆御注文には引き締めた腹圍り寸法をお報らせ下さい。



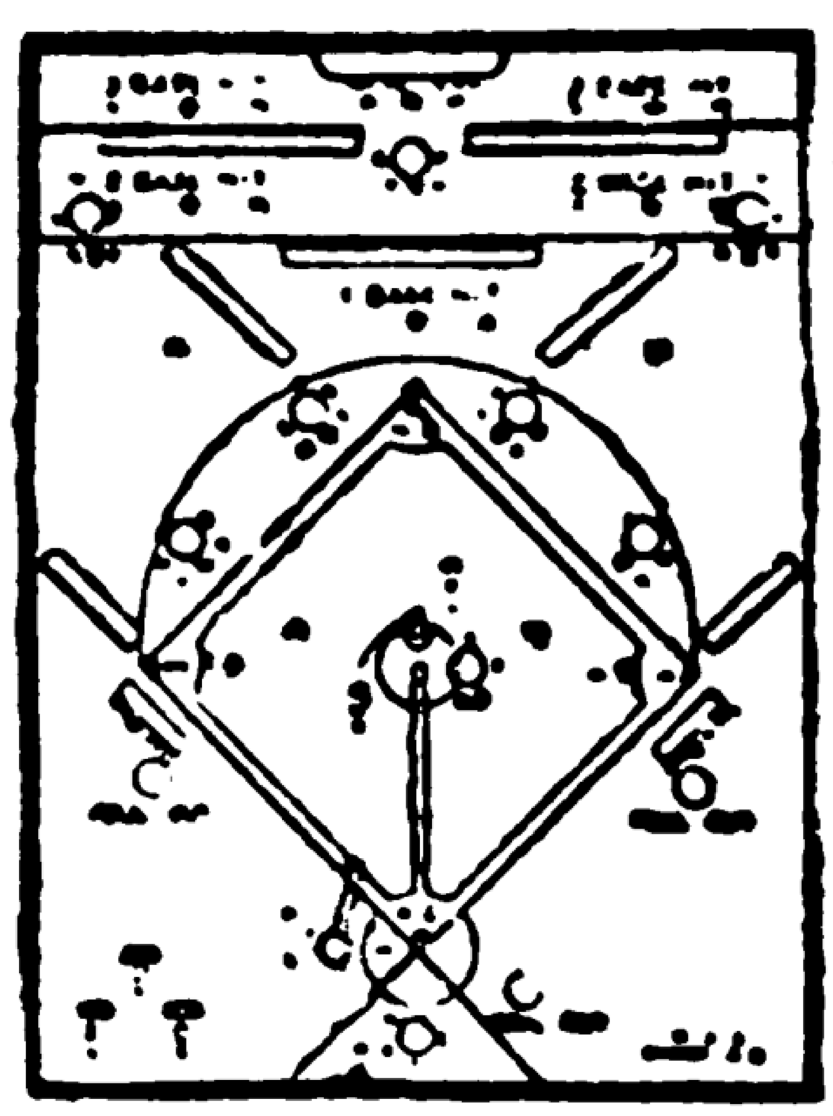
誰にも愉快な 野球競技盤

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、球にあてた指の力一つに、直球、曲球、軟球、剛球を自由自在に出す投手と選手がボックスに立つた氣持ちで立向ふ打手との敵味方緊張した氣分は、この野球競技盤ならでは、味はへぬ所です。

選手はもとより、春秋のシーズン毎に野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる昨今、高尚な新らしい家庭遊戯として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價　小型一圓三十錢大型三圓八十錢

送料　内地小型は十二錢　中型は二十七錢　領土小型は四十五錢　中型は五十五錢

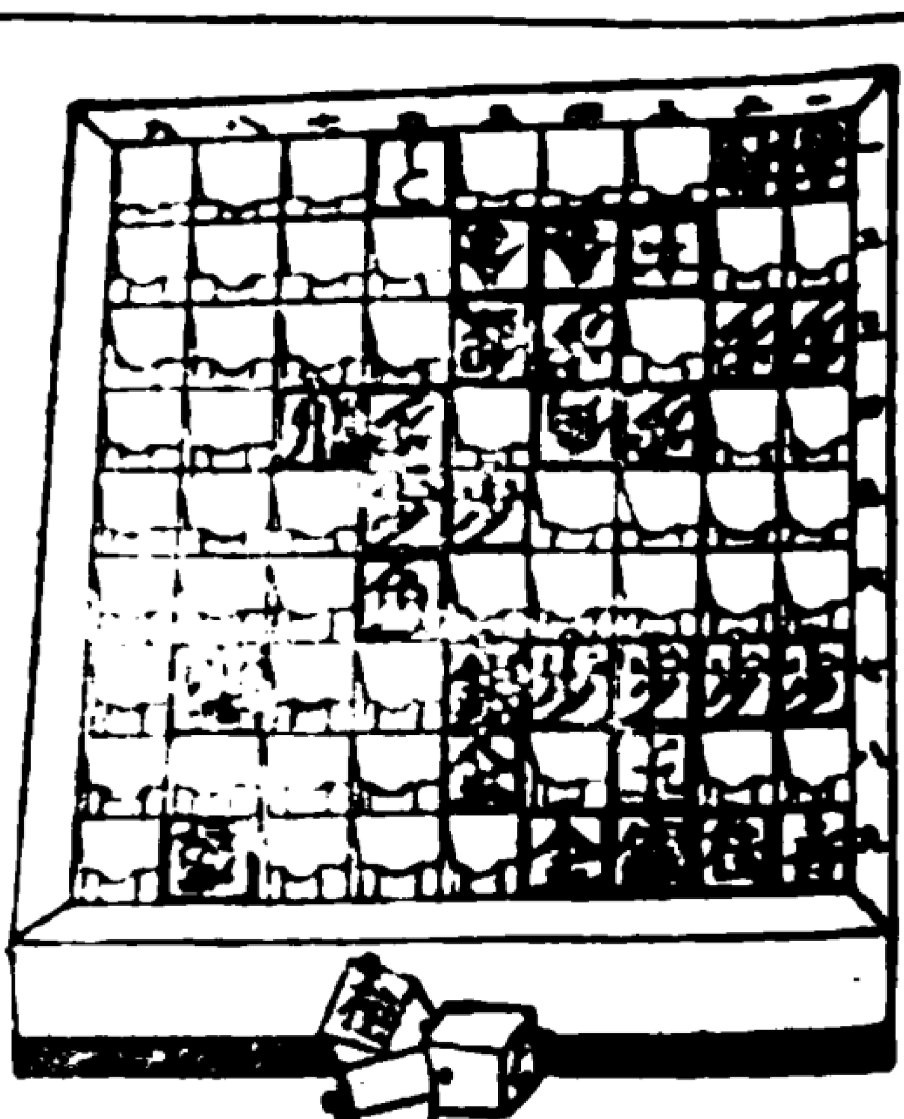


最小型將棋盤

縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棋盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから。ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく。駒には一個一個磁針が附けてある等。婦女子の眼にも可愛らしい粹のものです

盤は日本文字を用ひ、駒には表裏に文字が記されてありますから、初歩を離るからの研究には一層便利です。



其の他些細な僅少の間に自分の閑を得て、又は忙しい旅の汽車中に、或ひは湯上りの寢ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは旅のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、將棋家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價（駒箱附）　一圓八十錢

送料　東京市内十二錢、内地十八錢　領土　四十五錢

御注意

◇御送金には振替の御利用が一番安全ですが、地方によりは普通便より四日乃至十日間以上遲れますから、御注文はそれ丈一層お早くお出し下さい。

◇爲替での御送金は、必ず書留郵便に願ひます。

中央公論社代理部

洋服の注文は今!!

◇特に二回に分割拂込みのお便宜も計ります。

◆洋服の生地見本は、御承知の通り餘りに多種多樣で、全部取揃へる事は經費もかゝり、それに伴ふ不便も少くありませんから、必ず御希望の品、例へば「冬服のB」「合服のA」と云ふ風に明確にお指定の上、お忘れなく御年齢をお書添え下さい。

◆代理部では、御年齢、御職業その他の御希望條件に最も適合した生地を見立てゝ、明確な圖入の寸法書と共に御送り致します。

◆キザな流行の支配によらず、紳士的な而も明るい感じの洋服を求められるなら、山間の僻地からでも居ながらにして、眞に東京型の洋服を求められるなら、本社代理部を利用するに限ります。

◆生地見本を御覽の上、代理部考案の用紙に寸法を書入れて送れば、思ひ通りの型、思ひ通りの寸法の服が約二週間でお手に入る譯です。

◆裁縫の入念と、品質の確實な事は、所謂通信販賣洋服と類を同ふするものではありません。

◆見本ノ請求ニハ一種毎ニ郵便切手十錢添付ノ事。



〔合服〕〔冬服〕	
A	35円00
B	43円00
C	50円00
D	60円00
E	70円00

中央公論社代理部洋裁係

振替東京七八四七五番

新著月評

内外社版

綜合ヂャーナリズム講座（第一卷）

小野秀雄

入間の創造した文化現象の中で古い歴史を持ちながら其本體を捕へ得なかつたものはヂャーナリズムであらう。ヂャーナリズムは資本主義時代に發生した新聞紙によつて明瞭に人々の意識に上つた。それが資本主義的機構を具備して認識の對照となつた。十八世紀に起つた獨逸の新聞研究乃至十九世紀末期に擡頭した米國の新聞研究は皆此新聞紙を對照としての研究であつた。獨逸の新聞研究は他の事情によつて挫折したが、米國の新聞研究は新聞記者學としての體系を具へて、資本主義時代の新聞に貢獻する重要なる科學系列に參加したのである。併しながら其學的認識の範圍が資本主義社會の新聞に限定されてゐる限り、吾々の學的慾望を滿足し得ないことはいふまでもない。アメリカ新聞學の學界に寄與した所は新聞倫理であり、新聞技巧學であり新聞經營學である。いふ所の新聞倫理は職業道德であるが普通倫理である。新聞技巧と新聞經營は營利を目的とする研究であつて、新聞學の根本題目であるべきヂャーナリズムの本體は未知の世界に葬られてゐるのである。新たに擡頭した獨逸の新聞研究はまつしぐらに其本體を把握すべく努力してゐる。其準備事業ともいふべき個々の部分的研究が盛んに諸大學の研究所から發表されつゝある。

一方實際社會に於けるヂャーナリズムは學界の遲々たる檢討を嘲笑ふかの如くにフルスピードを以て其種々相を各種の文化現象の上に浸潤せしめつゝあるではないか。政治、經濟、文藝、宗教等近代社會生活のあらゆる領域は盡くヂャーナリズムの洗禮を受けて存在を意義あらしめてゐるではないか。此常識的に明瞭な事實を學問の對照として學界に取入れることは學界の義務であり使命であらねばならぬ。併しながらたとひそれを學的に把握することが困難であるにしても之を常識的に會得することは決して困難ではない。それは多くの新聞記者が日々新聞を作製しつゝあることを見ても理解することが出來る。從つて内外社の發行する「綜合ヂャーナリズム講座」が吾々の學的慾望を滿足せしめ得るや否やは私の問題とする所ではない。學的にせよ常識的にせよ、それが如何によくヂャーナリズムを理解せしむるかに價値標準の基礎が置かれねばならぬ。執筆者も發行者もそこに着眼點を置かねばならぬ。此意味に於て本講座の執筆者を通覽すると、新聞雜誌出版界の大家並に各方面の文明批評家を網羅して萬遺漏なきを期してゐる。斯くの如く多數の大家がヂャーナリズムに對する研究、調査、體驗、感想等を發表することは我邦出版界に於ては未曾有の壯觀である。私はヂャーナリズムの正當なる認識を提供するために斯く多方面の大家が一致協力されたことを喜ぶと共に、一個の學徒として多方面の文獻が一時に學界に提供さるゝことを心から喜ぶ者の一人である。

さて「綜合ヂャーナリズム講座」の第一卷として發表された諸大家の論文を通讀すると、皆眞面目に各自の問題を取扱つた點に少からず滿足した。「新米で素入だ」と前置きした牧野武夫君の「新聞廣告のつくり方」にさへ充分の注意と眞面目さが窺はれる。第一卷全部の論文は長短廿有餘篇、それを「新聞ヂャーナリズム」「雜誌ヂャーナリズム」「出版ヂャーナリズム」「特別講座」「内外ヂャーナル」の五部に分類してある。全部を通讀する餘裕を

持たなかつたのは遺憾であるが、私の眼にふれた限りをこゝで紹介してみたい。卷頭を飾る長谷川如是閑君の「ブルヂョア・ヂャーナリズム」は序論ともいふべき「新聞の意義とヂャーナリズムの侮蔑」「新聞發生の動機」の二節が掲載されてゐる。長谷川君の研究は「我等」時代から獨逸式の社會學的觀察を以て一貫してゐる。此點私と少からず共鳴する點である。本論文に於ては新聞發生の動機を群生活の對立に認め、ヂャーナリズムの侮蔑は其對立關係に基因すると論定した。之が資本主義社會の發生により如何に歪められたかは次の問題として殘されてゐる。緒方竹虎君の「現代新聞論」は現代社會に於ける新聞が量的に增大すると共に質的に減少する狀態を英米の實例を擧げて說明してゐる。量的に增大する結果は個人の公的活動をも不可能ならしむる橫暴となり、質的に減少する結果は一市一紙の狀態を招來して輿論獨占の危機を包藏すると論じてゐる。大いに同感にたへない。實例として引用されてゐるマンチエスター・ガアディアンの言葉をかりていふならば大量生產新聞の橫暴は「理論上の可能」に過ぎないかも知れないが、こうした事實の可能性は理論上ばかりではない。緒方君のいふ如く全く「新聞に對して新聞の加へた批評として注目」すべきである。

下田將美君の「經濟とヂャーナリズム」町田梓楼君の「外報部の組織と活動」北尾鐐之助君の「寫眞部の組織と活動」刀禰館正雄君の「新聞サーキュレーションの研究」は前二者には新聞記者の重大なる使命が強調され、後の二者には其組織立つた研究調査が眼立つ。共に現代新聞界に於ける聰明なる知識の展開である。

北尾讓君の「地方新聞總展望」と下中彌三郎君の「日本出版界の現勢」には綿密な注意が拂はれてゐるのを感じた。新居格君の「東京朝日論」は主觀論として、石濱知行君の「中央公論の回顧」は稍々客觀に傾く主觀論としてよく眞を穿つてゐると思つた。其他讀みたいものは澤山あるが此原稿が締切の間に合はないのを恐れて割愛した。唯千葉龜雄君の「新聞小說論」は私が多年期待してゐた論文であるから大急ぎで讀んでみた。隨筆的氣分で筆を起したが、問題の中心に觸れて來ると眞面目な技巧論となり價値論となつた。殊に其技巧論に千葉氏獨特の見解があつて面白い。

以上第一卷の大體を通じて私の感じたまゝを無雜作に書きつられた。精讀の餘裕の無いために或は私の誤解があるかも知れない。兎に角全卷に流れてゐる努力と眞面目さな直感して非常に愉快であつた。

猪俣津南雄著

没落資本主義の「第三期」

——日本資本主義は没落しないか？——

阿部勇

一九二九年ニューヨーク取引所の破綻以來一年を經過した。そして世界は今やその殆んど全部を擧げて例外なく恐慌に見舞はれて居る。ベルリン景氣研究所の報告によれば、尙上向線を辿る國はデンマルク、アイルランド自由國、ノールウエーのみであり、まあよいと云ふ程度のものにフランスがあるのみで、これら全體を合しても全世界貿易額中僅かに九%を越えず、他は總べて深刻な恐慌に沈淪して居る。取引所の破綻をば單なる金融組織における破綻として片附けようとしたフーヴァーの聲明は美事に裏切られた。そのあらゆる糊塗手段は失敗に歸した。今や合衆國の景氣指數は一九二一年の水準まで低落した。農產物價格の驚くべき下落——ハイドは小麥價格の下落をば、ソゴートの不當ダンヒングに

歸せしめたのだが、シカゴ取引所は直ちにこれを取り消して謝罪するの醜態を演じて、――貿易の著しい萎縮、株式の暴落。だが他の資本主義諸國では狀態は更らに悪い。ドイツ總選擧の結果を見よ！　國粹社會黨とドイツ共産黨との進出は何を物語るか？　九月一日ノッチンガムイギリス勞働組合總會議における議長ピアードの演說にあらはれた明瞭な社會主義否定は何を意味するか？　北フランスの大ストライキ。相次ぐ植民地の革命運動！　そして日本の現狀はどうだ！

斯樣な情勢に直面して、この恐慌についての樣々な解釋、色々な對策が日本でも橫行して居る。資本家階級を代表するイデオロギーは各々その立場に立つてこの恐慌中において自己の利益を擁護せんと努力して居る。そして資本家階級が種々な層より成立して居るに從つて、それだけ異るイデオロギーもあり得るわけであるが、いづれも現在の恐慌と、資本主義的生産關係内部におけるその地位の擁護と云ふ見地より闘つて居ること、社會的に發展せる生産諸力と交換形態との間の基本的矛盾を無視し又は隱蔽せんとして居る點においては一である。その一、二、を擧げよう。

その一は、この恐慌の主要なる一原因を世界的規模に亙る長期間の財界整理、通貨收縮に負ふものとなし、しかもこれは經濟の基礎を合理化するについては不可缺なものなる故必然的な、進歩的なものであるが、これに食糧品、原料品の世界的過剩生産と米英海外放資の減退とが不況を加重したとする、金融資本家の說である。（井上準之助著、世界不景氣と我國民の覺悟）基本的矛盾を除外して現象形態のみを見たこの說によれば、日本の解禁の如きも經濟組織合理化の上より見て已むを得ざる政策であり、この解禁こそは多少の犧牲を伴ふもやがてこの不況を救ふ合理的基礎であると云ふこととなり、徹底した金融資本の利益擁護である。然るにこれに對立して小企業家、小市民のイデオロギーを代辯するものに新平價解禁、又は金輸出再禁止論なるものがある。これはその階級的地位に束縛せられ、すべての生産關係が黃金の中に消滅する貨幣の魔術性に魅せられた說であつて、この說はこの恐慌の基礎を單に通貨の量と商品價値との關係の變化に求める。（石橋湛山、不景氣對策の討檢、東洋經濟新報昭和五年九月六日）それ故この說によればインフレーションは生産關係の變化に關係なく常に經濟的に可能であることとなり、新平價解禁又は金輸出再禁止が恐慌克服の手段として提唱せられる。しかし目下日本にはこの外、社會民主主義の腐爛性を最も端的に物語るところの、ルンペンインテリゲンチャのナンセンス說が橫行して居る。それはその地位の性質上意味をなさぬことを目走る點において手に負へぬ。左に一寸この例を紹介しよう。

「今回の世界的大不景氣は、勿論（何が勿論だ！）、皆資本主義の行詰に原因することは勿論ですが、然しその資本主義の行詰りたるや、資本主義の機構上の矛盾から原因したものでなくして、寧ろ、資本主義が圓滑に運營せしめ得ない事情が出來たので、資本主義の作用が不圓滑になつたまでだからです」（勝田貞次、どうして我財界を更生させるか、改造昭和五年十月）（傍點、阿部）ところで矛盾でない資本主義のこの外的事情とはどんなものか欧洲大戰による米國への債權債務の如きものであると云ふ。だが辨證法を御承知のないらしい勝田氏に注意しておきますが、こういふ對立をば矛盾と呼ぶのであつて、斯樣な不均等な發達こそは資本主義社會發展の一般法則である。戰前において果して斯樣な債權債務が無かつたか？　無かつたと答へうるものはロシヤに資本主義が無かつたなどと云ふこと

を臆面もなく云ひ得る勝田氏位のものだ。しかもこの債權偏倚の過程こそは資本主義の内在的發展法則の然らしむる所だ、それは一國における集積、集中の過程が大規模にあらはれたまでの話だ。序でながら特に帝國主義時代においては戰爭は經濟外の事情であり得ないことを附け加へておく。ところで勝田氏はどう云ふものを矛盾と云ふのか？ 搾收のために消費力の減退するのを矛盾と云ふのださうだ。そして後者は理論の上では指摘せられ得るが、實際にはまだ見られないのだと云ふ。しかし債權によつて得る利子が剩餘價値の一部分でないと云ふのなら、地代も企業利潤も共に剩餘價値ではない。從つて、搾取のために消費力が減退する等々と云ふ現象は何處にも存在しないとになる。矛盾はとう〳〵理論の上でも無くなつた。勝田氏の議論自體が現在の世界恐慌の分析から見て正當であつたか否かと云ふ樣な上品な問題は最早や餘地がない。それでは氏はどういふ對策を持つのか？ 日本財界にはコンチエルンが無く、資本主義が濫用せられて居るなど〻唄ふ勝田氏が正しいのなら、日本資本主義にとつては恐らくこの缺陷は氏自らが池田、團氏等に代つて三井へは入るより外に仕方がないのだらう。

だが勝田氏のナンセンスと、金融資本家の政策とどちらが頭がよいかは餘りにも明白ではないか。

さて無產階級は常に資本家的社會の批判者である。斯樣な樣々なイデオロギーの横行の中にあつて、マルクスの理論はこゝでも最も鋭い批判の武器を與へる。〔一寸一言、いはゆるマルクスの理論を振り廻す者の中にも、マルクス、否、經濟學のABCをも知らぬ者が居ることを斷つておく。例へば合理化は不變資本に手を着けることが不可能になつたから可變資本へと攻擊の手を向けたのだと云ふ如き議論がこれだ、(吉田秀夫、現段階の勞賃論。中央公論、十月)こんな解釋は、合理化は勞働時間の延長や笞(これも實は不變資本だが！)でなれさると云ふ田舍の小工業の話であつて合理化に伴ふ不變資本量の著しい增大、生產設備のおそろしい膨張による過剩生產、利潤率の低下等々を顧みないところの完全な反動のイデオロギーだ！」斯樣な、その所有關係によつて束縛せられた樣々なイデオロギーを批判し得るものは、所有關係より解放せられたるイデオロギーあるのみである。私はこの意味において猪俣津南雄氏著、沒落資本主義の「第三期」を薦めたい。本書の出現はこのイデオロギーの混亂の最中にあつて、批判の武器としての重要な使命を持つものでなければならぬ。それは戰後資本主義第三期における現在の世界恐慌が如何なる歷史的必然性をもつものであり、如何なる沒落期資本主義の解決し得ざる矛盾を含むものであるかを教へる。それは同時にこの世界恐慌が日本において如何なる特殊性を持つてあらはれたかをも分析して居る。私はこの後者の意味における猪俣氏の價値多き試みを特にこゝに感謝したい。それは戰後日本資本主義の世界恐慌への合流の過程をば初めて理論的に分析したものである。私はこの論文が今後日本資本主義研究の力強き土臺となるであらうと云ふことを疑はない。本書の内容を述べる代りに私は次にその編入諸論文の目次を紹介しよう。

たゞ私は他面本書に對して多くの希望をも持つ。没落資本主義の「第三期」においては何故矛盾發展のみが説かれ、矛盾の止揚の要素の發展、特にその生産關係の變化によるその地位の變化が説かれてなかつたか？ 階級構成の變化の問題がこゝで重要な要素として取り上げらるべきではなかつたらうか？ 第一期と第二期との間の移行が今少し正確に取り扱はるべきではなかつたらうか、特に合理化運動と植民地運動との連關は明確を缺くのではなからうか、又農業恐慌の説明が餘りにも現象形態に過ぎはしなかつたか等々。

特に日本については、大正八年以後の消費資料生産部門と生産手段生産部門との間の「深大矛盾」成育の過程こそは著者の、炯眼のあらはれであらうが、未踏の域だけに尚多くの説明と必要とするのではなからうか。特に日本の農業生産力の發展の停滯性については農業と工業との關係が知りたかつた。

だがこれらの試みは近き將來において必ず我々の期待し得る所であらう。

ヴアルガに頼る以外に何事をもなし得ずして他人のヴアルガ利用をば俗流化等と誹謗する者も居る中で、眞摯なマルクス研究學者の筆になる眞面目な現段階の分析を敢へて江湖に薦めたい。

（大衆公論社發行定價一圓六十錢）

（一九三〇一〇九）

世界經濟研究所編
世界經濟（總觀）

石濱知行

最近日本でも各種の經濟年報が發刊せられた、われわれ經濟學徒を益することが多い。ヴァルガの世界經濟年報はマルクス主義的に世界の經濟を把握したもので、今日にいたるまで、すでに九册邦譯せられてゐる。

我國の經濟狀態を年報的にまとめて發刊せられたものには、朝日の經濟年史があつたが、最近には、東洋經濟新報社から日本經濟年報の第一卷が發行された。

かうした、經濟狀態全般の鳥瞰的觀察が、それぞれ正確なる統計をもつて有力なる學者たちによつてまとめられて出版されることは、單に經濟學徒にとつてのみならず一般大衆の讀者にとつて、はなはだ有益であり、便利である。經濟の事實的研究に對する欲求およびそれに應ずる研究方法が發達するにつれて、かうした有益なる本が續々として發刊される傾向にあることは、まことに結構である。

かゝる傾向のうちに、法政大學の若い經濟學者たちによつて組織せられる世界經濟研究所の手によつて、それらの人たちの組織的努力による第一回の發表「世界經濟——總觀」が發刊された。

本書は、その發刊の辭がしめすやうに「冷靜に、客觀的に、科學的に、世界經濟の進行を觀察する』ために、『かゝる知識の素材となるべき生きた資料を有效に、要領よく、提供すること』を目的としてゐる。

第一卷に相當するこの總觀篇では、ドーズ案から最近までの世界經濟の大觀として、世界經濟大觀、生産、消費、金融、物價、貿易、勞働・賃銀・失業、カルテル、トラスト、コンツエルンにわたる部門を、各國主要の經濟雜誌・著書および新聞に掲載せられた統計を利用して要領よく叙述されてある。

言ふまでもなく、かゝる事業は、大きな事業であるとともに、また、すこぶる困難なる事業である。ことに、それが、日本に於ける最初のこころみであるだけに、その困難および

苦心は大なるものがあつたと推察せられる。

執筆者諸氏は――そのうち三四の人たちは僕の友人達であるが――充分に信用してよい篤學なる人達である。かゝる人達によつて、この有益な事業が、さらに各部門にわたつて定期的に繼續せられることは、我々讀者の大に期待するところである。

一本を寄贈されていまだ十分熟讀するの餘裕を有たないが、一讀の際感じた二三の點についてのべて見る。

一、本書のごとき性質の書は、全部を讀むといふよりもむしろ、讀者が必要に應じて利用するといふ方が多いであらう。かゝる點から見て、本書はやゝ不便である。何故なら、卷頭にごく大まかな總目次があるだけで、索引もなければ、各頁の柱もないので、必要なる項を檢索するのに、はなはだ厄介である。すくなくとも各頁の柱だけでも、今後は附してもらひ度い。そして、甚だ厄介な仕事ではあるが、索引も附してもらへば甚だ讀者にとつて有難い。ザアルガの經濟年報の邦譯も始めのうちは索引がなくては不便であつたが、途中からその必要を感知せられて索引を附してから、非常に便利となつた例もある。

(二) この書は、十數人の合同執筆になるものであるが、記述の方法に、各人の特色がすこし目立つ。例へば、カルテル、コンツエルン、トラストの項は、行換への句が非常に多く、また、圏點を附した字が非常に多く、他の項とのつり合ひが何となく目立つ。記述者の特色が出るのは、仕方がないが、かうした合同編纂物は、全體としての統一がよりのぞましい。

(三) 本書が、十數人の合同執筆になることから生じた今一つ目立つことは、各執筆者の方法論の差違に從がつて、見方、理論がすこしづつ違つて來ることである。例へば、本書劈頭にある概觀は、現下の世界恐慌を前にして、すこしく樂觀的な觀察であるが、本書の他の部分では、それと異る見方も現はれてゐる。例へば二八――二九兩頁にわたつては資本主義經濟の行詰を示唆する記述があり、『一葉すでに落ちた』とさへ言つてゐられる。その他、ところどころさうした行違が見出される。この點は、僕が(二)のところでのべた技術的のものとちがつて一寸統一することは困難であらう。思想的に、方法論的に一致した人たちから成る團體ではないのだから、この點は、記述をより素朴的な簡素なものにすることによつていくぶんかさけ得られるであらう。

――以上所感として述べたところは、一讀者としての僕が一讀した際に一寸氣附いたところを正直にのべたに過ぎない。多少の參考ともならば幸である。

從來にある世界經濟統計は、本文と相俟つて非常に有益である。

僕は一般大衆が、新聞や雜誌を讀むにあたつて、また考へるにあたつて、つねに座右にかうした有益な本を置いたらば、世界經濟についての知識を利することは、はなはだ大なることを信じて、この好著を無條件で推薦することを辭さない。

山名格藏著

日本の浮世繪師

織田一磨

「お前は、歌川豊春といふ名だね。

「へエ、左樣で……、

「原籍は何處カネ、

「近頃に但馬の豊岡だと皆樣が申されます。或は……

「曖昧なことはいかん。以前は豊後國と

申したではないか、アーン

戸籍係の警官となつた山名氏は、浮世繪類考以來の、內外參考書をすこし參照して、

「誰れが何といつても、お前の生國は豐岡なのだ。不足はあるまい。

「ヘエ、左樣でゲスカ、何分ともに、ヘイ。

頗る明快な警官は、次に北齋老人の宅を訪れて、

「お前は酒をのまんな、何? のむ、いかんれ、北齋は下戸と書いたから、斷然下戸だよ。いゝか下戸だな。

「恐れ入りました。お上のお陰で人格者になれます。ヘイ、ヘイ。

戸籍係は不良取締を兼て、一氣に面倒な亂麻を斷つて、こゝに浮世繪師傳一卷を書いたり譯したりした。これが「日本の浮世繪師」といふ本だ。

浮世繪師の傳記をまだ知らない人は、本書に據つて、その大體の概念を得るには、至つて便利な書物だ。山名氏の序文をみると、英のアーサ・モリソン氏著一九〇五年版の「日本の畫家」中から、「日本の浮世繪師」といふ一章を譯して、それを骨とし、註を加へたり、山名氏の判斷を加へたりして、此大册を成したといふ由來が書いてある。そうして、序文の終りに「本書一册さへあれば東西の日本浮世繪に關する一般的研究の最も新しい知識を遺憾なく攝取することができるものと思ふ」と書いてある。而してこれはあんまりあてにはならない。內容をみると、繪畫としての浮世繪に關しては、最も新しくない記述が、極く僅かしか出てゐない。新しくも古くも、此本からは、繪畫的研究は知ることができない。換言すると、浮世繪に關する知識といつても、繪畫上の知識は得られないのだ。

浮世繪は何といつても、繪畫なのだ、決して戸籍調べでもなければ、木版發達史でもない筈だ。浮世繪師の生活とか官能とか、感覺とかいふものから、描寫とか描線とか、色彩といつたものに、浮世繪鑑賞研究の要點は懸つてゐると思ふ。山名氏の譯著には、その點が、缺除してゐる。尤も多少は記述してあるかも知れないが、至つて平凡陳腐といふことになる。だから序文の一節の通りかどうか、請合兼ねるのである。

書名が「日本の浮世繪師」とあるのだから、浮世繪師の傳記を輯めた本とみればいゝのかも知れない。何しろ此種の傳記本は、類考以來數へ切れないほど多く出版されてゐるから、新しく刊行するに就ては、なる可く諸書を參照して、便利なやうに編輯したのだといふなら、或はそうかともいへる。繰返していふが、浮世繪師の傳記や戸籍を知りたい人は、本書に據るのが便宜となるかもわからない。

それから挿繪だがこれは可成綺麗な寫眞版で氣もちがいゝ、作品の選定も要領よく、代表的のものが多く擧げてある。この邊は先づ申分がない方だと思ふ。たゞ挿繪の解説が全く無いので、何となく物足りないし、不便だし誤解が生じる。例へば、百十五圖の辰齋作とした風景畫は、どこからそんな斷案を下したか、辰齋研究にすこし苦心した者には、不思議に思はれる。三十一圖の祐信肉筆となつてゐる繪なぞは、更に怪しい。而し缺點は擧げないで、大體に於て挿繪は立派だとほめても、間違ひではない。

モスクワ近景

柏木弧矢郎

示威運動

小粒なサラ〳〵した鹽の様な雪が北風に煽られて亂舞して居る。寒暖計は零下二十度。流石は北國の人々、雪に對する觀念が違ふ。彼等は降りしきる雪も、眉も氷りそうな寒氣も別に氣にも止めない風で平氣で歩いて居る、が歩道の石疊みは凍へてゐて私の足元は危ない。オーバシユーズを踏みしめて一歩々々と用心深く歩く。ホテルから程遠からぬ電信局の重い扉を排して中に這入るとムツと暖かな空氣が流れる、眼鏡が忽ち曇つて何も見えなくなる。眼鏡を拭つて受付口で發電を依頼する。此所で便利な事は發電には別に一定の頼信紙に書かなく共、勝手の紙に書いて持つて居つてもよい。局では夫れを直ぐ受付け臺紙に貼りつけ、整理して居る。急報の場合には順番を待たずにすぐ受付ける。

滑らぬ様に階段を降りて通りに出ると彼方から音樂を先頭に元氣の好い聲で勞働歌をうたひ乍ら來る一隊がある。人が皆立ち止つて見て居る。示威運動だ。人數は二十人位宛一團となつて幾組も續く、女も子供も交つて靜々と降る雪の中を素晴らしい勢だ、勿論標語を書いた幾流かの赤い旗が翻る。何のデモかと傍の人に聞くと、種子の分配促進のデモだといふ。成程今此の國の當局はその産業五ケ年計畫の實現に當り、從來の富農を彈壓して中貧農を救濟する爲め共産主義的協同農業に導く大々的の宣傳をやつて居る。即ち協同農業は共同に播種し共同に耕作して收穫は國家が一定の價格で買上げる組織で其の代り土地も國家から分割を受け種子も配給を受ける事になるから、其の種子の分配を迅速公平にやらうと云ふのが、此の示威運動になつて現はれたのである。此の活氣横溢の行列を見て居ると寒さなど何んのその自分も力強く歩いて見やうと云ふ氣になつて歩き出す。

パン屋の前には澤山の人が長い行列を作つて吹雪にぬれて自分達の番を待つて居る。

プリワル(並木街)に出る。十二三歳位の子供が男も女も皆林檎の様な頬をして盛に雪の上をスキーやスケートをやつて居る。實に可愛らしい。雪も小降りになつて漸日が當つて來た。通りがゝつた馬車が頻りに乘つて呉れといふ。いらぬと云つて斷つても今日は朝からアフれて未だ仕事が無い、安くてもよいから乘つて呉れとせがむ。見ると年老つた馭者だ、氣の毒になつて汚ない馬車にのる。教會の前に來る毎に馭者は馬を止め帽子を脱いで一々十字を切つてから又驅け出す。モスクワの様に寺の多い所で一々止められては、やりきれたものでない。

食堂、電話料

歩いた方が早い位なのを辛棒してヤツと宿に歸つて空腹を食堂に運んだ。最近のモスク

ワでは各ホテル專屬の食堂以外に料理屋らしい物が無いので出先で食事の出來ないのは一寸困る。精々コーヒーと菓子位の喫茶店以外は極く低級の簡易食堂式の物しか無い。其處は安くもあるが何時も滿員で殆んど腰掛ける場所も無い位、皆立つて食つて居る。東京の本郷バーといつた形、或は夫れ以下である。止むを得ず時間になればホテルに歸らればならぬ。併し、少く共東京の如く一歩毎にカフエーやバーの洪水が無いから、自然の結果として醉つて夜を更かす所も無い。だから下級勞働者達の行くビヤホール位は別として一般の青年達も夜の娯樂としては劇場、音樂會、活動、クラブ等に行くか或は友達の宅に集つて飲む位である。『ビヤホールの代りにクラブに行け』と云ふ標語が民衆を襲つて居る。

此の外に『臺所工場』といふのがある。家庭の主婦が炊事の爲めにムダな時間を費す事を避ける意味で作られた卽ち『婦人を臺所から開放せよ』といふ主旨の公設食堂がある。コルウエージユ式最新式の明るい建築で、一切の調理から器具の洗滌迄電力でやつて居る模範的の食堂で、價格も廉で淸潔であるが、矢張り何時も滿員で困る。が、此の種の食堂が追々增設されると餘程便利になる譯である。

食堂で顔馴染のボーイの話したことがある。彼れの曰く「自分は第五級の勞働者に屬して月給は七十五圓貰ひ、一日の勞働時間は八時間で、四日働いて一日休むから、從前の様に朝から晩迄立ち通しで豚の如く働いたのと異つて、健康狀態が非常によい。食事はホテルで實費で二皿四十哥(カペーク)で食べられる。家賃は一立方サージエン(約七尺立方)四十哥の割で、二室で一ヶ月七圓拂ふ。家內も亦ホテルの女中をやつて五十五留(ルーブル)貰つて居る。家は老人と子供の四人暮しだから生活には樂である」と今の組織を讃美して居た。

家賃は其の人の收入程度によつて定められ必要以外の餘分の部屋を持つ事を許されない代り、收入の尠ない者は家賃も安く拂ふ。獨り家賃計りでない、電話料なども架設者の所得によつて料金が異なる計りでなく、大抵の家では電話を持つて居る。架設するのも亦至極簡單だ、電話一本に千金を投じなければならぬ文明國は恐らく日本計りであらう。其他託兒所で子供を預るのも、勞働者の收入に比例して一ヶ月十五留のも十留のもある。

日本語を語る女

是は或る春の夜、A君と一緒に散歩に出る。クレムリンの高塔を月は斜に照らして居る。城内の大宮殿、今はソヴイエト聯邦內閣の存在する殿堂の屋根には、電燈が輝いて暗夜にも鮮やかに見える様、赤旗が翻つて居る。大劇場の横迄來ると丁度向ふから來た二人の女が行き違ひ様に、しかも確かな日本語で「今晩は」ときた。

モスクワの眞中で路傍の女が突然日本語で挨拶したには少々驚かざるを得ない。此方も「今晩は」と答へる。

「メトロポーリですか？」と彼女がいふ。蓋しメトロポーリは日本人のよく泊る大きなホテルである」

「日本語が大變上手ですね」

「えゝ少し」

「誰れに敎はりました？」

彼女は笑つて答へずに「左團次サン知つて居ますか」といふ。

「え知つてますよ」——實は舞臺以外の左團次は知らないが此の場合知らんとは言へぬ。

「妾歌舞伎見ました、大變ヨロシイ」といふ今一人の女は私達の會話を聞き乍ら笑つて居る。

「妾の宅に行きませう、近いのです」今度は

ロシア語である。

愈々本音を吐いたなと思つて、少々ブシツケだが貴嬢方は毎晩此の通りを散歩するのですかと聞くと、彼女はキツパリ「妾達は夜の女ではありません、今友達と果物を買ひに來たのです」と、成程袋に入れた林檎を持つて居る。「妾日本の方が好きなのでSとかWとかいふ人も知つて居る」といふ。話し乍ら町の四ツ角迄來た。「又御邪魔に行きませう、今夜は外に用がありますから」といつて別れた。

彼女達の後ろ姿を見送り乍ら、A君は「惜しい事したな、行つて見やうか」といふ。私も一寸行つて見度い氣にもなつたが初めて逢つた女の家に行く事の無謀を思つて斷念し、一歩きして宿に歸つた。

夜の舞踏

土曜日の午後十一時。そろ／＼ダンスの初まる時刻である。どの卓子も滿員。燦然と輝くシヤンデリヤの下に、鉢植ながらサイネリヤや、紫陽花の赤や紫が妍を競ひ、直徑一間もある大鉢に植えた南洋植物の濃綠の色がうれしい。大理石の壁に天鵞絨の窓掛け、すべて贅澤を極めた大ホテルを其の儘使つて居るのだから、實に堂々たる物で客は何れも女連れである。野郞計り卓について居るのは私とB君と丈けで聊か肩身の狹い感がある。

やがてオーケストラが初まると彼方からも此方からも一齊に踊り出す、フオツクストロツトだ。輕羅をまとつた金髮の女、夫れは恰もナンシーキヤロルとかクラ、ボーとでもいつた樣な濃艷なのが、只其の瞬間自分の持つ一切を忘れた表情で、男の腕に抱かれながら、その踵の高いエナメルの靴が磨き上げた床の上を音も無く滑る。

不意に赤色のテープが私の顏をかすめて飛んで來た。見ると四五間先きのテーブルに居る女が此方を向いて笑つて居る。彼女が投げたのである。頭の毛の黑い、黃色い顏の東洋人に、何んの感興を持つたのか、今度は正面から又投げて來た。私とB君も敵意の無い憤慨をして早速テープを買つて投げ返すと先方も負けん氣になつて投げて來る。彼女と並んで笑つて居た其の友達らしいのも應援して投げ初めた。私達の卓子と彼女達の卓子の間は忽ちに五色のテープが蜘蛛の糸の樣に亂れ散つた。

此のテープはダンスが初まると男が持つて賣りに來る。五色のテープ凡そ十巻程一包になつて二留とは決して安く無いが、夫れを誰れもが買つて思ひ／＼の人に投げる。だから踊つて居る美しい女達は髮から肩からテープを瀧の樣にあびて居る。紙の拂底な國で、買物に行つても、例へば罐詰とか函物の如く持ち易い物は包んで吳れない程紙の節約を極度に勵行して居ると思ふと、茲では又此のテープを只一瞬の坐興の爲めに惜氣もなく投げて居る。

次のダンスが初まつた。タンゴだ。B君はダンスが達者なので意を決してテープを投げた女の前に進んだ。一分二分の後色の黑い彼と背の彼れよりもスラリと高い金髮の女とは已に十年の知己でもあるかの樣にダンスの群れに交つて居た。日本に居ると稍もすれば老人組に編入され易い私達も、此處では白髮の老紳士も頭のテカ／＼禿げた人も若い女相手に元氣よく踊つて居るので、大に心強い。私は二人に盛んにテープを投げた。タンゴが終ると彼と彼女は私の卓子に戾つて來た。B君はタクタ今知り合ひになつた計りの彼女を私に紹介した。私達が彼女と共に一杯の葡萄酒を乾盃しきらない内に次のダンスが初まつて

二人は又立ち上つた。

一ト踊りすませて、彼女を其の卓子に送つて戻つて來たB君の言葉に依ると、彼の女はレーユングラード國立劇場の女優で、日本人の友達も持つて居る。一週間の休暇を利用して遊びに來たのだといふ。先刻から私達にテープを投げたのも日本人を知つて居ると云ふ好奇心からだと判つた。

夜の更けるに従つてダンスの人は益々多くなり、煙草の煙、香水の薫、甘つたるい女の香等で息づまる様な場面が展開して、所謂肩々相摩す盛況を呈して來る。テープの糸が縦横にもつれ合ひゴム風船を爆破する音がドカン／＼と夜の空氣を振動させる。之れも赤テープと一緒に賣りに來る青赤紫のゴム風船、日本で買つたら十錢か十五錢のを矢張り一個二留取る、それを買つて紙片を結びつけ其の端に火をつけて放すと、風船は段々上に昇つて丁度天井に達した頃、火は紙を燃え盡くして風船に達し、一大音響と共に爆發する。一ケ二留の風船は斯くしてテープと共にドシドシ賣れて行く。午前三時は食堂の閉まる時間であるが、ダンスの客は中々歸らうとしない。二階のオーケストラに盛に手を叩いて催促する。音樂が初まつて又踊り出す。かくて夜のホノ／＼と明け初める頃、人々は漸く名殘り惜し氣に歸つて行くのである。

一週五日制度

朝起きて茶を飲んで居ると卓上の電話が鳴る。利權局からだ。今日十時に會見の約束を都合で明後日に延期して來たのだ。カレンダーを見ると其の明後日は日曜日だ。私達には日曜日には休むものとの習慣性があるので日曜に仕事をする事は何んだか損をした様な氣がする。

が此の國では所謂一週五日制度を採用して以來、五日目に一度休む組織になつて居るから、日曜も何にもあつたもので無い。が其の休日は各人各別だから誠に煩雜である。例へば甲は今日休みでも乙丙は休みで無い、だから役所に人を訪問しても豫め何時休みか研究しておかないとあの人は今日は休みですといふのにブツかる。

それで勤務表が出來て居て、色別けやマーク分けになつて居り、假りに自分の色が赤とすると五日目毎にカレンダーに示してある赤の日が休みになる譯である。又は色の變りに星の印の日、ハンマーの日、赤衞軍の帽子の日等々に分けたりなどする。だから今日は日曜だから一ト夕皆んな一緒に遊びに行かうなどと友達を誘ひ合ひして出掛けるには誠に個利が悪るい。殊に此の國では夫婦でも共稼ぎをやつて居る者が非常に多いから夫は休みでも妻は勤めに出なければならぬ事もある。それで特に一緒にしたい場合は仲間と妥協して休日の交換をして貰ふより仕方が無い。

かく四日働いて一日休むが、工場でも役所でも一ヶ年に五日の國際日即ち一月二十二日のレーニン祭、五月一日二日のメーデーと十一月七日八日の革命記念日以外は、年中無休で働くのだから、保健上にも仕事の能率の上にも大に成績がよいといふ事である。

モスクワの新聞では『イズウースチヤ紙』と『プラウダ』紙が代表的のもので東朝と東日といつた形、其他夕刊のモスクワ、エコノミチエスカヤ、ジーズニ(經濟生活)とか、勞働者新聞、赤色新聞、文藝新聞、無宗教新聞等々約三十種の新聞があつて多いのになると百五十萬部も出して居るといふ。

新聞の廣告欄で面白いのは改名披露廣告だ何の某は爾今何の某と改名する、異議のある人は申出て呉れ、と只夫れ丈である。之れで

改名手續はすむのだから實に簡單である。求人廣告も、電氣技師を求むとか會計士入用とか何れも國家機關公共機關の廣告で、日本の様に、それで周旋料を捲き上げたり證據金を取つたりするイカサマ物で無い丈け眞面目である。

タクシー譚

此頃は馬車屋もバスやタクシーの出來たのと馬糧の高いのとで大打撃だ。馬車屋は何時もコボして計り居るが、實際馬車はタクシーに比べると遲い割に遙かに高い。現在では未だタクシーの數が少ないからだが追々タクシーの數が增えて來たら馬車屋は自然消滅の運命となるであらうし、加之政府の當局者は次第に國營のタクシーを增やして、自分で馬を持つて居る、言はゞ小さな資本である個人營業の馬車屋を驅逐する方針を取るといふ、丁度日本の大都會で人力車の需要が段々無くなつて行くのと同じ經路である。

けれ共今の所では未だタクシーが全市に百五十臺位しか無いから、タクシーを捕へるには中々困難である。市の要所々々例へば劇場の前とか停車場の前とか言つた所には、タクシーの駐車場があるが、何時も車は居た事がない。だから歸つて來るのを待つて居て奪ひ合ふのである。

ソコデ又面白い商賣が出來て、子供や仕事にあぶれた勞働者などが駐車場でタクシーを待つて居る人に、それを捉へて吳れる、卽ちタクシーが歸つて來ると、未だ駐車場まで來ない先に驅け出して行つて、タクシーをつかまへて來て客から幾分の心付けを貰ふ。心付けを出しても、高くて汚ない馬車に乘るよりタクシーの方が遙かに安上りで淸潔で早いから、タクシーは大繁昌で殆んど空車で走る事は無いといつてよい。

タクシーの外に乘合自動車があるが、その素敵に大きな車體の奴が市の隅々まで通つて居る。一區十哥で之れ亦馬車屋の大敵である。

百貨店

劇場前の廣場では澤山の男女がベンチに腰かけて、新聞を讀んで居る者、ボンヤリ煙草を吸ふて居る者、仲睦じく語り合つて居る若い同士、等等と何れも春の陽をポカ〳〵浴びて幸福そうである。

大劇場と道を隔てゝ對立して居る國立百貨店には不相變人が雪崩の様に押しかけて居る菓子、酒等を初め臺所用具、玩具、陶器、文具類、硝子器、銀器 寶石から織物製男女服、ピヤノに至る迄、百貨店とト通りの品物は並べてあるけれ共、選擇由に出來る程潤澤では無い。殊に織物など、贅澤品に屬する絹織物の如きは誰れにでも買へるが、必要品たる可き棉布や毛織物は購買手帳を持つ者にしか賣らない。從つて私共の如き外國人には購買資格が無い。

此の種の店は全市に澤山あるが何れも國營で澤山の客を吞吐して居る。だから菓子一つ買ふには相當順番を待たねばならぬ。が、此所の組織は、先づ一定の品物を選擇すると賣子は其の品物に相當する傳票を切つて吳れる。其の傳票を持つて帳場で代金を支拂ひ受取を持つて來て現金と引換にするから、買ふ方は面倒だが賣る方は統一がついて便利である。

それから何れも國營だから品物の單價が一定して居て、チヨコレート一函買つても二留の品は何處の店でも二留で、三越では二圓だが松阪屋では一圓八十錢といふ等差が無く安心して買へる。

十字路には、巡査が中央に立つて交通整理をやつて居る。間違つて横斷した者からは直に三十哥位の罰金を徴收する、中々嚴重であ

ろ。しかも違反者は文句を言はずに拂ふから感心だ。

此の十字路を中心にしたあたりは最も賑かな所で、あらゆる商店がある。就中外國人に最も興味のあるものは骨董屋である。貴金屬繪畫彫刻衣類に至る迄何んでもある。以前は隨分色々な掘り出し物があつたさうだが、アメリカ人其他外國人が入り込むで良い物はドシ／＼買つて行くので此頃は良い物が尠くなつたといふが、夫れでも色々面白いものがある。ロシアの名畫例へばウエレミチヤーギンとかアイバゾーブスキーといつた大家の畫とか、或は帝政時代の皇室用のマークの入つた器具類、ダイヤ其他の寶石類貴金屬細工物は今でも澤山ある。此の種の店が市中に約十軒程あつて之れ亦國營であるが、骨董屋あさりは外國人にとつては誠によい消暇法の一つである。

禮拜堂紛失

クレムリンの城壁には「宗教は國民の爲めに阿片なり」と書かれてある。以前は此の標語の下に些やかな禮拜堂があつて四時參詣の人が絶へなかつた。

是はイベーリスキー禮拜堂と云ひ千六百年代から在る由緒深い禮拜堂で、皇室の歸依も厚く、革命後になつてからも渇仰の人で何時も香煙の絶へ間が無かつたのであるが、或る時一夜の中に忽然と姿を消し何處へ持つて行かれたのかも判らないとか。恐らく反宗教運動の結果であらう。

反宗教運動といふのは寺院並に宗教的肯信反對の爲めに組織せられた篤志團體で、一九二五年の總會で設立せられ、更に一九二九年六月第二回總會で各宗派の教儀に對し積極的に反對鬪爭する事を以て會員の義務と定めた。現在會員は約六十萬人を有し新聞、雜誌等を發刊して居る。

此の邊から城内にかけては人の往來騒然として續き、古本屋のより取り五十哥から婦人子供の靴下、エハガキ、銀メツキ屋に至るまで色々この店が並び、ゴム風船は春風にへんぽんとし、鳩笛を賣る男は節面白く商賣の笛を吹いて居る。

赤廣場

城壁のトンネルになつた所を潜れば赤廣場である。赤い國の廣場だから赤廣場と思ふと間違ふ。

此のクレムリン城前の大廣場に於ては昔モスコー朝最後の王、アレクセイ・ミハイロヴィチの王女ソフヒヤが其の異母弟のピーター大帝と王位を爭ひ、狙擊聯隊と結托して反亂を企てた事があつた。當時西歐に外遊中であつたピーターは、變を聞いてモスクワに歸ると、多數の反徒を捕へて悉く此の廣場で斬罪に處し、ソフヒヤをば修道院に監禁して仕舞つた。一六九八年の出來事である。其の時流血の爲めさしもの廣場も赤くなつたといふ所から、此の赤廣場の稱が起つたのでロシア歴史畫の大家スリコフが此の處刑の光景を描いた有名の畫が「刑場の朝」と題して、今モスクワの美術館にある。つまり其の名稱が二百餘年後の今日偶然間に合つた形である。

茲に有名なレーニンの廟がある。死んだレーニンを其の儘生けるが如く保管して、永久に大衆が面接する事の出來る樣に設計したものである。

其の廣場の前即ちクレムリン城と相對する彪大な建物は、往時の大勸工場のあつた所、今はグウムといつて矢張り國營百貨店になつて居る。蓋しグウムはガバーメント・ユニヴアサル・マガジンの頭文字を取つたものだ。

ここの店ではよい煙草を賣つて居る、由來ロシアには以前から品質の良い煙草があり、

吸口の長いロシア巻の外に近來は輸出用としてハイカラな吸口も出來た。

煙草拂底

ツベルスカヤの通はモスクワの銀座だ。前に書いた十字路の町と相俟つて最も繁華な地點である。ロシアの街には從來何處でもゴロゴロとした丸石を敷き詰めた所が多く、モスクワの如き大都會ですら此の丸石の町であつたが、ソヴイエトになつてから盛に道普請をやり、已に此のツベルスカヤ通りは立派のアスファルト道路になつて砥の如く光つて居る。

此の通りに革命以前エニセーフといふ大食料店があつた。其の堂々たる店構へは恰も宮殿の樣で、殆ど世界中の食料品を網羅した立派の店であつたが、革命後は其の儘國營となつて矢張り食料品を主としたデパートになつて居る。(此のエニセーフの當時の息子は東京に來て大學に居つたが今は巴里に居る。)當時煙草がなく前述の百貨店グウムにもなかつたが、然し此處なら必ずあると思つたが、矢張り無かつた。無いと言つたら何處にも無い、國營だから價格も統一して居る代り無い時は何處にも無いのである。

そんな時には仕方なく路傍に立つて賣つて居る安煙草を買ふ。夫れですら二十本入り二包しか賣らぬ。もつと吳れといふと貴方計りに賣つたら外の人が困るじやないかとケン突を喰つた。尤もな次第である。序にマッチも吳れといふとマッチは小函一つしか賣れぬとある。之れも唯々諾々と賣つて貰ふ。路傍の小賣商人、彼等のも決して個人の商賣では無い。矢張り國家機關の販賣人で賣上一留に對して何程といふ步合を貰つて賣つて居るのである。

こんな工合だから、煙草拂底のときなど、タマに小賣屋で一定量を限つて賣り出すのを買ふ爲めに、人は一丁も二丁も列を作つて順番を待つといふ騷ぎになる。勿論偶々ホテルにあつても、そこでは市中の二倍以上である。

然し煙草は間もなく豐富になつた。

だから、ロシアの事は、各人の云ふ事が皆違ふとよくきくが、夫れは其の時にロシアを見て來た人の、場合々々で異つた報告をするからで、例へば丁度煙草の市中に無い時に逝つた人はロシアには煙草が無いといふだらうし煙草のある時行つた人は煙草はあつたが石鹼が無かつたといふであらう。だから其の刹那々々の現象を捉へて一般を律する事は盲斷である。

電車・浮浪少年

ラッシュアワーで電車も乘合自動車も滿員である。停留場に澤山の人が待つて居る所へ電車が來る、然し之等の人達は何れも順序正しく並んで順々に乘つて行く。東京の樣に眼の色かへて老人も女も突き飛ばして乘る事をしない。なほ飛び乘り飛び降りは無論の事、運轉手臺すら乘る事も立つ事も嚴禁である。違犯した場合には一留の罰金をとられる。だから誰れも犯す者が無い。稀れに違背した者は默つて拂つて居る。

電車の後部卽ち車掌臺の後ろにボロボロの衣服を着て底光りのする眼をした血色の惡い少年達がブラ下つて居るのにあつたことがある。薩摩守をきみ込む浮浪少年で未だ十二三の小さなのも居た。彼等は何れも歐洲戰爭から引續いて革命といふ永い間の戰亂の結果、親を失ひ保護者を失つた哀れな無宿の少年達で、乞食も搔つ拂ひもやる厄介な連中である。一九二二年の頃彼等の數は全國で數百萬人の多數に上つたとの事だ、當局は之れが救濟に全力を注ぎ、一九二八年には三十萬人になつた。此の頃ではモット減つたと云ふ事だが戰爭の產んだ痛ましき產物の一つである。

生きてゐる戰死者

——世界怪奇實話Ⅹ——

牧逸馬

1

脊の高い、物腰の柔かな上品な男だつた。頭髮は黑く、頰骨が高くて、一見韃靼人の血が多分に混つてゐることを思はせる剽悍な顔をしてゐた。一九一二年の春の初めである。匈牙利の首都ブダペストから四哩程離れた田舍に、ツキンコタといふ風光明媚な避暑地がある。ちよつと週末旅行などにも好いところで、附近には、ヴヰスグラッド、ナジ・モロス、ブダフオックなんかと、名前は恐しげだが、景色の佳い遊覽地が澤山あつて、ツキンコタは丁度その中心になつてゐるから、日曜は大變な人出だ。このツキンコタ町へ、今いつた見慣れぬ男が、若い綺麗な細君を伴れて首府のブダペストから移り住んで來てゐる。名をベラ・キスと言つて、四十歳位だ。細君は十五程若かつた。ツキンコタ町の住宅地をあちこち探し廻つた末、Matyasfold街道に面したかなり大きな邸を借り受ける。前に廣い庭があつて、鳥渡周圍から切り離されたやうな家である。番地は、マテアスフオルト街一二九番、古城の趣を取り入れて屋根の尖つた、灰色煉瓦の建物だつた。こゝで夫婦は、七個月ほど表面何事もなく、幸福に暮らしてゐる。主人のベラ・キスは、一週に一二回ブダペスト市へ出て行く。泊つて來ることはなかつた。相當手廣くやつてゐる鐵力工場の所有主で、いまは實際の商賣からは隱退してゐるといふ近處の評判である。

誰とも餘り親しく往來しないでゐる。キスといふ男は、何處か不氣味なところのある人物で、噂によると、いつも細君を相手に心靈學上の議論などを闘はしてゐたさうだ。天文學にも趣味があるらしく、書齋にはその方面の書物が充滿してゐた。そ

の影響でか、細君の Norma Kiss 夫人も萬事神秘好みの女だつた。ジプシィの占ひ婆さんか何かがよく硝子の玉に見入つて、そこに人の運命を讀み取ると稱する。これを水晶判斷(クリスタル・ゲイジング)と謂つて、西洋の一部信者のあひだにはあらたかなものとされてゐるが、ノルマも、拳大の硝子玉を大事にしてゐて、それを凝視めては、始終獨り占ひをしてゐた。夫婦仲も好く、常に自家用のがたがた自動車で一緒に出掛けてゐた。良人のベラ・キスがひとりでブダペストへ出る時も、その自動車を自分で運轉して行つた。

この匈牙利の錻力屋の親方、Bela Kiss こそは、いまだに歐羅巴第一の怪奇な存在と見られてゐる。ちよつと過去に類がなく、しかも比較的最近の出來事であるが、その割りに餘り知られてゐない。事件の當時、警察が全力を揮つて揉み消したからだ。

ノルマ・キス夫人は非常な美人である。そのせいだらうか、良人のキスはひどい嫉妬焼きで、夫人に男の友達と親しくすることを厳禁してゐる。匈牙利の南、ダニユウブ沿岸のツヰモニイ地方は、昔から美人の産地で有名な處だ。ノルマはこの Zimony の生れで、美人でもあつたが、またちよつと、浮氣つぽい女だつたに相違ない。ブダペストの畫家で Paul Bihari といふ不倫夫があつた。さういふ町のゴシツプだつた。キスが留守になると、このパウル・ビハリが、ブダペストからやつて來て、附近にはアカシアの森が多い。そのアカシアの森を、二人で戀人氣取りで散歩したりする。森の奥へピクニツクと洒落て、草に坐つて話し込んだりしてゐる。ビハリは眼鼻立ちのくつきりした美青年で、ブダペストでは先づ知れてゐる畫家である。同市に、文藝家、畫家、新聞記者などの協會で、全匈牙利に勢力のあるオツトン倶樂部といふのがある。立派な會館があつて、毎晩このボヘミアン連中が集つて雜談を交してゐる。パウル・ビハリはこのオツトン協會の會員だつた。

知らぬは亭主ばかりなりで、この狀態が半年あまり續いた。パウル・ビハリは盛んにツヰンコタの家を訪れて、ノルマを伴れ出しては附近の名所舊蹟といふやうなところを遊び廻つてゐる。七個月程經つた或る日の夕方、キスがブダペストから歸つて來ると、家に錠が下りてゐて這入れない。夜中近くまで庭に迂路うろして待つてみたが、何時まで經つてもノルマが歸つて來ないので、キスは窓を毀して屋内に這入つた。食卓の上に紙きれが置いてある。戀人と逃げるから何卒わたしのことは諦めて惡く思はないで呉れ——ノルマの置手紙である。キスは發狂せんばかりに、激怒して、その手紙を燒いたのち、近處に住む

Litman といふ銀行員の家へ駈け出した。リットマンは、キスの渺い交友の一人である。寝てゐるところを叩き起して、一晩ぢうこのショックについて掻き口説いてゐる。リットマンこそ迷惑な話しだが、慰めたり、宥めたり、大骨を折つて朝になつた。

朝になると、このニユウスが Czinkota の町中に擴まつて、ゴシップ好きな匈牙利の農民である。いや、大變な騒ぎ。なかには、早晩かういふことになるだらうと見通してゐたやうなことを言つて、先見の明を誇り顔にしきりに合點くものもある。Bela Kiss の性格が一層嫌人病的に急變したのはこの日からである。

世界大戰。匈牙利は獨逸に組して聯合軍に當る。鳩の胸のやうに平和な中歐の山國にも鋼鐵と鮮血の風が吹きまくる。國内上を下への騒動で、壯青年はすべて銃を取つて戰線に集まる。ベラ・キスも召集された一人で、夢のやうなツヰンコタの町を後に出征することになつた。が、いざ出かける前に、彼は不思議なことをしてゐる。出征ときまると同時に、キスは町の鍛冶屋に注文して、夥しい鐵棒を造らせた。これを窓といふ窓の内側へ丹念に打ちつけたのである。居ないあひだに泥棒が這入らない要心だといふのだ。キスは、細君のノルマに逃げられてから、靜かな、と言ふより淋しい平凡な月日を送つて來てゐる。生活も空虚な筈で盗られて困るやうなものもありさうに思はれない。この嚴丈な留守宅の固め振りを見て、近處の人は一寸變に感じたが一週間ばかりのあひだにこの不思議な後仕末も濟んで、ツヰンコタの人々は、おらが町の勇士として、重い戎衣に身を固めて長列に加はつて進軍するベラ・キスの姿を見送つた。

一年半經つて、戰爭は酣である。

ベラ・キスの屬する聯隊は、セルビアに轉戰してゐる。ダニウブ沿岸セメンドリアの戰ひの後、同地の陣營から出したキスの手紙がツヰンコタ町に殘つてゐるリットマンに届いた。リットマンは六十近い老人で、兵役を免除されてゐたのだ。早速セメンドリアのベラ・キス宛てに返事を出したが、この手紙は四個月後に、受取人死亡といふ附箋がついて聯隊から返されて來た。キスは、腹部の負傷が因で、ベルグラアードの野戰病院で死去したといふのだ。同時に、ツヰンコタの町廳へも公式通知が來てさう發表された。ベラ・キスは戰死したのだ。妻に背かれて可哀さうにあんな孤獨な生活を送つてゐた Bela Kiss が、祖國のために命を捨てたといふので、町の人は一齊に哀悼の意を表してゐる。ツヰンコタ出身の戰死者の碑にベラ・キスの名前

まれた。

丁度その頃、ツキンコタからブダペストへ行くアカシアの森で、偶然若い女の屍體が發見された。地下六吋ばかりの淺い穴に埋まつて、ほとんど識別出來ないほど白骨化してゐる。指の骨に結婚指輪をはめてゐて、その内側に頭字(モノグラム)が彫つてあつた。それによつて屍體は、維因納の相當大きな毛皮商の妻で、大戰の前年に、二千磅ばかりの現金と、ありつたけの寶石を持つて、何處の何者とも知れない中年男と駈落ちして以來行方不明になつてゐる女と判明した。一度ブダペストから維因納の友達へ手紙が來たきりで、毛皮商のはうでも實家でも内々搜してゐるところだつた。が、身許照會をして色いろ審べてみると、夫の毛皮商は、戰爭が始まつて一週間もしないうちに戰死してゐる。で、警察は、戰爭の最中で他に仕事も多いので、こゝで事件を打ち切つてしまつた。ところが、それから三個月程して、またその附近で若い女の屍骸が發掘された。失踪人物の名簿を繰つてみると、今度も、直ぐに判つた。イサベル・コブリツツ――Isabelle Kobilitz――といつて商務大臣の姪である。交靈學に凝つてゐたのが、一九一三年の七月、維因納で行方不明になつたとある。

ブダペストの警察は些さかほん氣になつて搜査を開始した。すると、ベルン市から同じやうな報告が來て、金持ちの瑞西婦人で Riniker といふ、これがロウザンヌ市からブダペストへ遊びにきてジエネヴアに妹がある。そのジエネヴアの妹へ手紙を出しただけで一九一三年の十月に矢張りブダペストで失踪した儘になつてゐるといふのだ。詳細な人相書が回送されて、頬に小さな赤い痣があり、左の脚がすこし不具で輕い跛足だとある。これを土臺に、今まで發見された身許不明の屍體に照らし合はせて往くと、三日許りして、六個月以前に、ブダペストから廿哩程離れた Solymar といふ小さな村の荒れ井戸から揚つた屍體が確かにそれであると判定された。ソリマアは毎年「薔薇の女王祭」が擧行されるので昔から有名なところである。

警察は躍氣になつたが、それでも、これらの女の惨死體と、ほかにも多く屆け出てある女性の失踪者を一つに結びつけて考へることはしなかつた。各獨立の事件として、搜査の緒を手操つてゐる。

2

細君のノルマに逃げられて、苦い失望を、味はゝされたキス

は、元來さういふ傾向もあつたのだが、すつかり變人になつてしまつて、家へ籠り切りで一歩も外出しない。打ちのめされた良人として、死人のやうな日を送つてゐる。もうブダペストへ出ることもなければ、雇人一人置かずに、自分で身の廻りの世話を見て、ぢやむさく自炊しながら、まるで隱者のやうな生活ぶりだ。猛烈な女嫌ひになつて、精神測定學(サイコメトリイ)だの心靈學だのといふものに沒頭してゐる。はじめからエクセントリックな人間なことはツキンコタの人も皆知つてゐたが、夜になると寢室の窓に灯りが映るだけで、家は何個月經つても閉め切りである。本人のキスはすこしも姿を見せない。病氣らしいといふ評判が立つて、近處の人は心配になつて來た。申し合はせて戸を叩くと、蒼褪めて弱々しいベラ・キスが、寢卷の上に何か引つかけて出てくる。病氣で寢てゐたといふのだ。一人では仕樣がないから、面倒を見る者を寄こさう。醫者も呼ばなくては――近處の連中がさう言ふと、

『私は生きてゐたつて死んだつて同じやうなものです。今でも半分死んだも同然ですからねえ。あれに行かれて、何のために生きて往くのか、もう目的がありません。』

意氣地のないことを言つて、四十男が女學生のやうにセンチメンタルになつてゐる。多勢で慰めて、要らないといふのに無理に醫師を呼んだ。カルマンといふ、日雇ひのやうなことをしてゐる老婆をつけて看護させることにする。

當時のキスの愁嘆振りは狂氣じみてゐた。一室に、逃げた細君ノルマの、殘して行つた着物やら靴やらを飾つて、そこへはKalman婆さんも決して入れない。お婆さんは薄氣味惡い思ひをしながら、三週間ほど親切に介抱した。病氣は段だん快(よ)くなつて、カルマンも暇を取り、キスは元の一人ぼつちの生活に返る。

ブダペストへもちよいちよい出掛けるやうになつた。午後自動車でツキンコタの家を出て、夜更けか朝早く歸つて來る。カルマン婆さんは、興味の中心になつてゐる神祕境に寢泊りして來たのだから、自然ゴシップ好きな人間が集まつて、悲しみに強打されたキスへの同情に以前からの好奇心も加はり、色んなことを訊き出さうとする。お婆さんは一躍花形役者になつた氣で、大得意だ。大いに饒舌つた。そのうちにこんなことを言つた。

『お前さん達は何も知らないだらうけれど、あたしやこれで、あの家は隅から隅まで見て來たんだよ。二階の一間に、逃げた奧さんの着物や何かが大事に飾つてあつてね、何んなことがあつても、其室(そこ)へは這入つちやいけないと言はれてゐたんだけれど、そんなこと言はれると、なほ這入つてみたいやね。旦那が眠つてゐる隙に、こつそり忍び込んで見て來てやつたよ。そ

部屋には何のこともないがね、向うにもう一つ隱れ座敷があつて戸が締まつてゐるのさ。鍵穴から覗いてみたら、正面の壁のところに、大きな鐵力の桶が五つ並べて置いてありましたよ。何が這入つてゐるんだらうねえ――。』

『桶つて、お婆さん、そんなに大きな桶かい。』

『あゝ、かう兩手で一抱へもありさうな――何が這入つてゐるんだらうね。』

『ほんとに、何が這入つてゐるんだらう――。』

近邊の山間には酒の密造をやつてゐる者が尠くない。そんなところからでも仕入れて來て、自惚酒をあふつてゐるのだらう――皆さう言ひ合つた。ことによると、あゝして戸閉めてゐて、自分で葡萄酒でも密釀してそつとブダペストのカフエあたりへ賣り込んでゐるのかも知れない。この噂が、唯一人キスと親しくしてゐるリツトマンの耳に這入つて、リツトマンは或る日、カルマン婆さんが見た五つの桶のことと、それに關する町の人の取り沙汰をキスに話した。

笑つて答へてゐる。

『面白いことを言ふものですな。酒の密造などと、私はそんな危い橋を渡る人間ではない。』全く彼は、神經質なほど几張面な性格だつた。『あれは揮發油ですよ。自動車に使ふ揮發を、危險ですから、五つの鐵力の桶に入れて、あゝして二階へ上げて置いたんです。識合ひのブダペストの石油屋が破産しましてね、何うせ要るものですし、あまり安價いから五桶ほど引き取つたんですが、正直のところ、すこし持て餘してゐますよ。』

これが町のゴシップを消火するに役立つて、間もなく人々は、この、キスの家にある五個の鐵力製の大きな桶のことを、忘れるともなく忘れた。

一度リツトマンが駈落者の消息を傳へると、キスはこともなげに、

『維因納で幸福にやつてゐるさうですね。それは何よりです。私はいまだにあれを愛してゐますから、邪魔しやうとは思ひません。たゞ、私は馬鹿でした。それだけです。』

とあとは話題を外らしてゐる。

が、キスの行動に對するツキンコタの人の疑惑の眼は、一さう深まつて往つた。この頃度びたびブダペストへ出掛ける樣子が、何うも怪しいといふのだ。いくらか中世紀的なところの殘つてゐる、迷信ぶかい人達である。女などは、ベラ・キスは魔法を使ふのだとひそひそ私語き合つてゐる。星占學を信ずる婦人

を集めて、その一人ひとりに各自の算命天宮圖といふ不思議なものを描いてやつてゐるといふ。算命天宮圖は、人間の生れた星によつて運命と命數がきまつてゐる、それを圖解にしたものだ。こんな評判が擴まつて、ベラ・キスはいよいよ不氣味な變人といふことになる。

リフトマンの注告で女中を雇ひ入れた。ヘレナ・ビイチフと言ふ。二た月ほど働いても給金を呉れないので、催促したら、キスは非常に怒つて女中を殺さうとしたといふのだ。ヘレナは言つてゐる。

『書棚の抽斗から祕法の鏡とかいふものを持ち出して來て、卓子の上に置きました。そして私に、一分間ぢつとその鏡を見詰めてゐると、未來の良人の顔がそこに浮んで來ると言ふのです。誰だつて、自分は何んな男と結婚することになつてゐるか知りたいに決つてゐますから、私は鏡のうへに屈みこんで、何時まででもいつまでも凝視めてゐました。と、ふと何かしら身に危險が迫つてゐるやうな氣がして、振り返つて見ました。うしろにキスさんが立つてゐます。輪結び(スリップ・ナット)にした綱をそつと私の頸に掛けやうとしてゐます。私は夢中で跳び上つて叫びながら、力一ぱいに突き退けました。キスは二三歩よろめきましたが、恐しい眼をして私を白眼んだかと思ふと、直ぐ氣が違つたやうに笑ひ出して、大分びつくりしたやうだね、冗談だよ、冗談だよと言つて綱を床に捨てました。が、決して冷かしや惡戯でなかつたことは、私にはよく判つてゐます。キスはほんとに私を殺さうとしたのです。一生懸命に家を逃げ出して、いのち拾ひをしましたけれど、あんな恐しい目に遭つたことはありません。』

前のカルマン婆さんのほかに、やはりツキンコタの町はづれに住んで、すゝぎ洗濯などをしてゐる老婆があつて、これは毎金曜日、キスの家に掃除に通つてゐる。色いろ評判の高い家なので、お婆さんも好奇心に動かされてちよつと屋根裏の通風窓から覗いて見た。問題の部屋で、揮發油がはいつてゐると稱する大きな錻力の桶が五つ、一列に並んでゐる。それはいゝが、その覗いてゐる現場をキスに見つかつて、洗濯婆さんは即座に叩き出された。この時も、何うも揮發油ぢやなくて盜んだ酒でも這入つてゐるのだらうと、また一しきり忘れてゐたゴシップが沸いたが、これが一九一四年五月のことで、八月には大戰勃發、いくら小さなツキンコタの町でも、もうベラ・キスどころではない。そのうちに當のキスも、町民の歡呼の聲に送られて出征してしまふ。萬事そのまゝになつた。が、出掛ける前に、さきに言つたやうに窓には内側から鐵の棒を渡して裏表でのドアーも、一

笑しいほど厳重に釘づけにして行つた。

翌々年、一九一六年の五月まで、二年間開かずの家である。

一週間に二回ほどブダペストへ出ると、いつも夜中の二時三時に歸つて來る。ツキンコタの町はぐつすり眠つてゐる。自家用といふとよく聞こえるが、襤褸自動車である。猛烈な音を立て、大通りを疾驅して行くので、町の人はよく眼を覺まされた。金は、キスは相當持つてゐたやうだ。ツキンコタの警察は、色いろの評判を聞くので、ひそかに刑事を尾けて置く。尾行は、巧みにキスと仲好しになつて、段だん話し合つてみると、別に怪しいところもないばかりか、仲なか叮嚀親切な、鷹揚な人物だ。すつかり友達になる。いつも町の珈琲店で話し込んでゐる。リツトマンと三人でキスの家で歌留多遊びに夜を更かしたりした。それ位だから、警察のはうでは、もうすこしも疑つてなんかゐない。些さか變つた人物といふだけで、ベラ・キスの上に、何事もないツキンコタの生活が續いて往く。

一九一四年一月、冬にしては暖い陽が、ツキンコタからブダペストへ出る途中のアカシアの森を照らしてゐる。町から半哩ほど離れた淋しいところである。素晴らしいなりをしたベラ・キスが、見事な毛皮の外套を着た若い女と、親しさうに歩いてゐた。これを見た者があつて、細君に捨てられて新しい戀人が出來たのだらうと、またゴシツプになつた。が、その時一度きりで、二人の間に交際が續いてゐる樣子もなかつた。他に誰もその女を見た人はない。ちよつとブダペストから來て、一日キスと森を散歩しただけのことだらう――町の人が噂し合つてゐるうちに、一月程して、リツトマンが、ツキンコタから四哩、Rakosfalva へ行く道で、見知らぬ女と腕を組んで森を歩いてゐるキスの姿を認めた。キスは氣がつかずに、何か熱心に女に話してゐる。近くの樹かげに、例の泥だらけのキスの自動車が乘り捨てゝあつた。

Karoly Kerut と言へば、ブダペストの銀座である。そこの絹物商の娘で Luisa Ruszt といふ廿二になる女が、同市 Josef-varos 區の警察へ奇體なことを言つて訴へ出た。

3

ソモシイ劇場といふ寄席がある。その前で會つたといふのだ。四十恰好の、親切さうな紳士である。一緒にドライヴしないかと話しかけられて、早速應じた。男が運轉して、あちこち乘り廻す。マルガレツト橋の附近に男のアパアトメントがあつて、そ

こへ伴れ込まれた。勢運をみてやらうといふのだ。女は大概占ひが好きなものだが、ルヰザも面白半分にどうぞと言ふと、男は、まあ一つこれでも飲つてからと笑つて、何か黄色い液體を注いで出した。強烈なにほひがするが、思ひ切つて呑んだ。命じられる通り卓子に据わつて、水晶判斷である。渡された硝子玉を兩手に持つて、ぢつと見入つてゐる。未來の良人の顏が映つて來ますよ、冗談混りに男が言つた。すると、氣を詰めて玉を白眼んでゐるうちに、ルヰザは變に眼まひを感じ出した。今の黄色い飲物のせいかも知れない。ちよつと顏を上げて傍らの鏡を見ると、形相の變つた男が、直ぐ背後に突つ立つてゐる。緑色の絹の紐を持つてゐる。一端を輪にして、結び目を滑らして締めるやうになつてゐる。男は、それをそうつとルヰザの首へ廻さうとしてゐた。ルヰザは氣絶して、氣がついた時は、エルツェベット公園の樹の下に倒れてゐたが、身に着けてゐた金や寶石はすつかり失くなつてゐたといふのだ。

男の人相やそのアパアトメントを詳しく述べたので、警察も一應捜してみたが、男は勿論、連れ込まれたといふアパアトも、實地に檢證してみると、何處だか一向判然しない。ロマンテイックな性向の女が、あまり小說でも讀み過ぎて夢のやうなことを言つてゐるのだらうと打ち切つた。

が、三週間後に、また一人の女が、ブダペスト Relvaros の警察にやはり同じやうな話しを持つて來た。ダニユウブに面したフランツ・ヨセフ河岸に住んでゐるちよつとした人の奧さんで、日曜日に、テレツフアロス敎會でふと相識になつたといふ。フランツ・ホフマンと名乘る物柔らかな中年の紳士だつた。寶石の旅行販賣人で、心靈學に興味を持つてゐると言つた。二三度ランデヴウの後、女はアパアトメントにホフマンを訪ねて、前と同じやうなことが起つてゐる。警察も騷いでそのアパアトメントを探したが、女の記憶が不確かで矢張り發見されなかつた。三度目に同じ事件が報告されて、ブダペスト中の警察が眞劍に動き出した時、大戰である。何もかも放擲された。

一九一六年、五月。Bela Kiss は疾うの昔に腹部の貫銃創でベルグラアド野戰病院で死んでゐる。

匈牙利に石油が少くなつて、陸軍から石油の非常徵發令が發せられた。戰時である。軍用である。嫌應はない。全國に亙つて、工場、ガレイヂは勿論、個人でもすこしでも石油を有つてゐる者は、すべて所定の場處へ持つて行つて政府に買上げて貰ふ。はじめは都會で行はれたが、それでも足りなくて、三個月後には、田舍の隅ずみにまで及んだ。津々浦々に石油徵發員が

飛んで少量の石油も見逃さない。ツキンコタの町にも徴發隊がやつて來た。思ひ出した人がある。リツトマン、カルマンなどといふ比較的キスに近づいてゐた連中である。あの家の屋根裏に大きな鐵力の桶が五つ並んでゐた。密造酒だらうと町で騒いだ時、あれは揮發油が這入つてゐるとキスが言つた。所有主は戰死してゐるのだし、あれだけの揮發はこの場合大變な足しになる。この話しが徴發員の耳に達したから、すぐマチアスフォルト街の家へ出かけて行つて、窓の鐵棒をこわして這入つた。

成程、階上の一室に大きな鐵力の桶が七つ置いてある。カルマンが見て、町で評判になつた時は五つだつたのが、キスが出征する前に二つ殖えたとみえる。七つになつてゐた。徴發員は、聞いたより二桶も多いので、すつかり喜んだ。二年間閉めきりだつたので、家の中は蜘蛛の巣だらけ、桶は埃りをかぶり、濕つた空氣が澱んでゐて、物凄いやうである。揮發油ではあるまい。密輸入したブランディを貯藏してあるのだらうと思つた。事所からコップを持つて來て、桶の横腹に穴をあけて内容を受けてみる、舐めて試る。ブランディではない。揮發油でもない。アルコウルである。重い。一つづつ二人掛りで動かした。

蓋をあけてみると、女の着物が詰まつてゐる。その下に裸體の女の屍體が這入つてゐた。アルコウル詰けになつてゐるから、餘り崩れないで、顔などもはつきり鑑別出來た。頸のまはりに赤い痕があつて、絞殺されたことが判る。輪の結び目を迂らして絞めたものに相違ない。手は手、足は足と縛つて、鶏のやうに二つ折りに押し込んであるのだ。警察へ急報されて、殘りの六つの桶も順次に開かれた。一つに一人づつ裸かの女が固くなつて這入つてゐる。家宅捜索をすると、キスの書齋の机の抽斗から、維因納とブダペストの有力な新聞に出した個人欄廣告の代金の受取りが澤山出て來た。妙に仕末のいゝ男で、歸つて來るつもりですつかり保存してゐたのだ。これを手懸りに當時の新聞を調べてみると、こんな廣告が出てゐる。これは一つの新聞に十日も續いて掲載されたもので——。

四十歳の淋しき獨身者。自營の商人にて年收約三千磅。結婚の意思ある優雅なる女性と文通したし。左記へ御照會あれ。

De Koller, Poste Restante, Granatos, Budapest.

ブダペスト郵便局私書函である。

維因納の新聞にはこんなのが出てゐた。

先づおんみ自身を知れ——運命判斷で將來の行路を定めやうとする方は、ブダペストの星占學大家ホフマン教授を訪問して下さい。

このはうの宛名は維因納局私書函になつてゐる。廣告はすべてこの求緣か占ひか何方かだつた。早速調べてみると、ブダベスト局の私函には「淋しき獨身者ドユ・コレル宛ての「優雅なる女性」からの返事が五十三通未開封のまゝ溜つてゐたし、維因納局のはうには、運勢判斷を乞ふ婦人の手紙が、「ホフマン教授」あてに二十三本抛り込まれた儘になつてゐた。キスのやり方は求緣と占ひの廣告で女を釣つて、ブダペストのアパアトメントかツヰンコタの家へ誘き寄せたのだ。片つ端から絞め殺して、金、寶石、衣類などを奪つたのだらう。アルコウル詰けにして置いたのは、いづれ機を見て他へ埋めるつもりだつたに相違ない。庭を掘ると、十個の女の屍體が出て來て、キスは愈いよ職業的な殺人者であつたことが判つた。セルビアと露西亞の捕虜をツヰンコタへ呼んで來て、附近のアカシアの森を中心に大大的に搜索してみた。全部で廿六の屍體が現れてゐる。みんな若い女だ。百六十枚の質札が食堂の絨毯の下から出て來て、これはすべて被害の所持品衣類等を入質したものである。この方面から十四人の女の身許が判明してゐる。大抵中以上の家の細君や娘だつた。庭で發掘された屍體の一つが、實家パウル・ビハリと駈落ちした筈のノルマ・キス夫人で、これには人々も愕きを倍にした。ビハリの行衞を搜したが、大戰勃發と同時に兵役を逃げて亞米利加へ渡つたとまではわかつたが、たうとう見つからなかつた。第一の桶に這入つてゐたのは、一九一三年の十一月に失踪したツヰンコタ・ホテルの娘でエミリア・リイス、第二は不明、第三のは維因納の女、他はブダペストの相當いゝところの娘だつた。

犯人ベラ・キスは？　といふと、前に言つた通り、セルビアで名譽の戰死を遂げてゐる。これ以上追究の仕やうもない。戰爭で人心が動搖してゐる時だから、警察はこれ幸ひと調査を怠いで、ばたばたと片附けてしまふ。が、一應形式とおつて、ブダペスト警察のレッシュ警部――Resch――が、キスの死の模樣を聽取すべく Belgrade 野戰病院へ出張する。キスは確かに死んでゐる。腹部の傷のほかにチブスに罹つて死んだとある。死亡證明書、軍隊手帖、その他の書類一切、Bela Kiss といふ名前、Czinkota の住處等、すべてレッシュ氏を滿足させるべく完全だ。歸りがけに、キスの臨終に立會つたといふ看護婦に會つたので、雜談的に、

『何か遺言でもありませんでしたか。』

『いま伺つてびつくりしてゐるところで御座います。まあ、あんな優しい少年が、何うしてそんな恐しい罪を犯したので御座いませう。信じられませんわ。』

『少年(こども)ですつて？　誰が少年です。ベラ・キスは四十二三でしたよ。』

『あら！　そんなこと御座いませんわ。こゝで死んだベラ・キスさんは十九か廿歳の小柄な綺麗な人でしたわ。』

全然別人である。もう一度書類を調べ直すと、その寝臺(ベッド)で死んだのは確かにツヰンコタのベラ・キスとなつてゐる。疑ひもなく、死にかけてゐる若者と、名前と書類をそつくり取り換えて、本物のキスは脱營したのだ。後で判明したところによると、Mackaree といふのが、その身代りになつた青年の本名だつた。混亂を極めた野戰病院のことだから、こんな手品も出來たのだらう。かうしてベラ・キスは見事にずらかつてゐる。

レフシユ警部はブダペストへ飛び歸つて、倉皇として手配を敷く。全歐の警察にキスの寫眞と逮捕依頼の電報が散つた。倫敦に高飛びしたと言はれてスカツトランド・ヤアドが騒ぎ、巴里に潜伏してゐるとあつてSûretéが動いたが――みんな虚報で、ベラ・キスはまだ捕まらずにゐる。諦めたわけではない。いまだに歐羅巴と亞米利加では係りの探偵が眼を皿のやうにしてキスの影を求めてゐるが、これこそほんとの不良外人だ、ひよつとすると、モダン・ガアルを狙つて銀座あたりを流してゐるかも知れない。

アメリカ通信

社會主義化の米國

本誌特派員
在ローサンゼルス　清澤洌

1

アメリカはどういふ道を行くのか、と君は聞くのか。『アメリカに一ヶ年も据りこんでゐた以上は、いくら君でも何とか見當がついたらう』は御挨拶だネ。

ぼくはアメリカは社會主義の道をたどりつゝあると答へるよ。しかし敗け嫌ひのアメリカ人は、この場合表門から堂々と社會主義の門を這入りはしなからう、例によつて裏口からさ。

君だから説明するまでもあるまいが、今までとてアメリカが、大きな問題に打突かつて、その出入にバック・ドアーを使用したことは少なくないんだ。ウイルソンが惨めに敗れてから、「國際聯盟」といふと、鬼門に建てた便所かなにかのやうに恐いから、これに出這入りするのに、その看板を用ひるやうな智慧のないことはしない。この方面に通用口あると、政治家は「國際司法裁判所」とか「軍縮會議」とかいふ裏口を用ひてゐるんだ。

米國はまたモンロー主義とか不干渉主義とかといふお手製の政策を持つてゐるので、東洋のことでも、そう干渉はできないから「門戸開放主義」といふバック・ドアーから這入つて同じ目的を達したのは君の知つてゐる通りだ。

アメリカが本家本元の個人主義、資本主義の國であることは、今更ぼくが説明するまでもあるまい。それはモンロー主義より、共和主義よりも、もつと早く、もつと深くアメリカ人の魂に喰ひこんだ信條だ。

ぼくがワシントンで上院議員のボラー君に逢つた時に『アメリカは社會主義化することはないか』と聞いたことがある。すると先生、意外な質問をするものかな、といつた顔つきで『私有財産制の觀念は、餘りに深くアメリカ人に食ひこんでゐるから、社會主義などは到底アメリカでは行はれませんよ』と答へてゐたよ。

同じ質問をぼくは、銀行界の大立物で、思想や美術に理解のあるオットー・カーン君にも致したんだ。かれはこれを苦もなく否定して

『米國の資本主義は無論、前例のない富豪を造つたけれども、同時に勞働者をも驚くべく富ました。フォードは自分が金持になつたは事實だが、勞働者のために仕事を造つたではないか』といつて、米國人が誰でもいふところの個人間の競爭による刺戟と創造が、このアメリカの繁榮を造つたことを語つてゐた。

かうしたリベラリストが、資本主義の謳歌者である以上は、麥穗の向き方で、大概風の方角が分らうじやないか。モンロー主義のアメリカが國際聯盟を認めないやうに、個人主義、資本主義のアメリカが、正面から社會主義を認めるわけはないんだ。

現在でもアメリカの政治家が、失業保險とか、水力の公營とかといふやうな、社會主義の倉庫の前を通つたほどの問題を主張するのにさへ、見てゐても氣の毒なほどの辯解やら遠慮やらだ。「社會主義」といつたゞけでも、大概の政治家の壽命ならなくなるよ。

が時と必要は、それに拘はらず、アメリカをして行くべき道を行かしてゐるんだ。現在の不景氣は、もう山が見えた。この周期的な不景氣が過ぎさつた後で、そこに明確り殘るのはアメリカが社會主義の道に——前にいつたやうに裏口から踏み込んだ記錄でなくてはなるまい。

2

このことを説明する前に、一言いつてをきたいことは、日本におけるアメリカ批判だ。こちらにをつて日本から來るアメリカに關するものを讀んでみると、まるでわれ等に解らないことが多いんだ。つまりアメリカを覗くのに、餘りにモスコウ製の眼鏡を使ひすぎやしないかネ。丁度、ぼくの手許についた『中央公論』の一論文に、こんなことが書いてある——

『世界資本主義の沒落期において、『獨り、超然として、所謂「アメリカ繁榮」なる好景氣によつて伴奏せられて舞踏してゐたアメリカ資本主義は、その内容の極めて不確實なものであることは、屢々識者の指摘したところで、最近に於ける株式取引所に於ける數度の混亂は、この内容の自然なる發現であるとされてゐる』

かうした記事は、偶然手許にあつたものを引照したにすぎないので、いはゆる高級雜誌の論文で、かうした調子を帶びないものは一つもない。日本の雜誌の論文を讀んでゐると、米國は株式の低落からまるで地獄の底にでも落ちこんだやうな口ぶりじやないか。

資本主義の攻擊をするのはいゝさ。ぼくはまだそんな贅澤品を親類に持つた覺えはないのだから、少しも氣に病みはしないよ。併し米國に關する限り、その資本主義が礎きあげた驚ろくべき繁榮と富力といふ事實だけは、まづ認めてをいて、そこから議論を出發するのでなければ、論理にもなにもなりはしないよ。

遠くから見てゐるだけだから、よくも分らないが、マルクス論理は米國を邪魔にしすぎやしないか。「世界資本主義の沒落期」に當つて、米國だけが資本主義で、あの繁榮を礎きあげたといふ事實が、資本主義と古靴下だけは捨て場にも困ると思つてをつた人々に、米國を眼の上の瘤にさせた傾きはなかつたかネ。そこへ株式の暴落だ。

『そうれ見ろ』

と、かれ等は初陣の若殿様が、敵將の首級でもとつたほどの喜びかただつた――少なくともそうわれ等には見えるネ。

現代の經濟組織の缺陷は、資本主義で固めて、個人主義の油であげたほどのアメリカ人ですらも、ポチ／＼氣がついて、いま折角何とかするために苦心中だ。ぼくはこれに對する批判が、どれだけ辛辣であろうとも少しも差支へないと思ふんだ。

たゞぼくがこゝで云はうとするのは、アメリカが驚くべく富んでゐるといふ事實まで否定しちや事は滑稽になることだ。アメリカが「空景氣」だといふが、最下級の勞働者が食つてゐる駒下駄大のビフテキは、木の皮や古帽子の布ではなく、正眞正味の牛肉なんだぜ。

ぼくは今、ローサンゼルスでこれを書いてゐるが、そこの日本字新聞の工場に働いてゐる職工の半分以上は自動車を持つて、それで家から通勤してゐるんだ。

ロンドン會議の全權一行が、米大陸を横斷してゐた際、隨員筆頭の左近司中將が、食堂車から歸つて來て『驚いたネ、われ等を給仕した黒ん坊が、われ等と同じ御馳走を食つてゐるんだ。あれなら體格がよくなるに決つてゐるよ』と目をみはつてゐたことがある。アメリカに生れた日本人の兒童が、營養分攝取を最大の理由として、日本における同年のものより餘程發育がいゝのは、もう試驗濟みの事實なんだ。

勞働者が自動車にのつて、帝國ホテル以上の御馳走が食へるのが「空景氣」なら、君、その空景氣を十年ぐらゐ續けてみたくなくはないか。

況んや君がアメリカのどこに上陸しても、餘程の場合で失業行列にでも打ち當らない以上は君は日本でいはれる「不景氣」だの「失業」だのといふ空氣を感じえないことだけはぼくが保證するネ。

この間、ある大學の教授が日本から來て、『一體、不景氣だとか、失業者なんといふものはどこにあるんですか』と聞かれて、それを見せるのに相當に骨が折れたよ。

併しそれだから米國の資本主義はいゝといつてゐるのではないぜ。そんな風にとられるとぼくは迷惑するぜ。米國の個人主義、資本主義が變りつゝあることを說くのがこの文の目的なのだが、たゞ過去の資本主義が、この富源の豐かな國に芽生へて、何をしたかだけは正直に認識しなければ、理論の公平を失すると思ふんだよ。

3

今更、新しい說でもあるまいが、現在世界に二つの大きな產業的試練が行はれてゐると思ふんだ。一つは無論、共產主義を土臺にした勞農ロシアで、他は資本主義を土臺にしたアメリカだ。そしてそれが何れもビジネス・ステートとしての試練なだけに、常陸山と梅が谷が四つに組んだほどの興味があるよ。

アメリカといふ國の基礎が、元來、ドッカと經濟の上にあることは說明するまでもない。ニューヨークの床下は一枚岩で、地盤の強固なこと類なしといはれるが、アメリカといふ國は、どこを掘つても、地盤の強弱は知らず、經濟といふ一枚岩に打ち當るんだ。この國では政治は、經

濟に比すると人物においても、運用においても、まるで玩具だ。

それもまだプュリタンだの、キリスト敎だのが國民の精神を押えて居つた頃は、政治はまだその方面に氣をとられてゐたんだ。元來、政治といふものはその時の主要な問題と結びつくものだ。宗敎が威を揮つて、それが國民の中心であつた頃は、政治は宗敎と一緒になつてゐた。西洋のチャーチ・ステート、日本あたりの佛敎ステート乃至は神道ステートは、お互ひには平凡な歴史的事實だ。

ところが、宗敎が、タイムの流れに洗ひ落されてから、そこに宗敎に代る巨人が現はれたんだ。それが經濟さ。宗敎がたゞ個人の信仰にとどまる間は、政治はそれほど宗敎に對して乘り出さないやうに、經濟がたゞ個人の小企業に止まる間は、政治が經濟との合同を畫するわけはないんだ。經濟が丁度昔しの宗敎の位置を占めて來た事實が、どれだけそれが羽をのして來たかを語るものじやないか。

經濟が――アメリカ流の言葉でいへばビジネスが、乘り出して來たのは無論産業革命があつて直後のこと。アメリカにおいては開國當時からだ。その頃からマシユー・アーノルドの言葉でいへば、國政は漸次敎養ある貴族から、技術的に訓練されたるブルジョアー（商人、金融家、實業家）の手に渡つたといつて差支へない。

併しそれにしても、世界大戰の終る頃までは、宗敎とか、理想とか、自由とかといつたやうなものが、それを明らさまにすることを邪魔した。米國の南北戰爭が正義と不正義の戰爭だなどゝ思ふものは、救ふべからざる愚者だが、併し實は南の農業と北の工業の衝突とだけ見るのは、人類社會の他の要素を無視しすぎるよ。世界大戰の際におけるウィルソンの理想主義が、經濟的動機が全部だといつたら、歴史を全面的に觀察するものは承服しまいよ。

併し世界大戰は、かうした理想主義や人道主義に對して徹底的な否定運動を作用した。世界大戰の最大事業は偶像破壞運動さ。從來の宗敎や社會に對する既成觀念が權威を失してしまつた後で、そこに出て來たのは飾りのない「經濟」なんだ。今まで背後にあつて働きかけてゐた經濟が、戰後公然表面に出て來たのだ。政治は公然、その膝下に伏して少しも怪しまれなくなつた。

この事はウイルソンの理想主義が敗れて、天下が共和黨に廻つてからの十ヶ年間の歴史によつてよく分るよ。一九二〇年に大統領ハーディングが大統領に當選したが、かれを大統領に押しあげた標語は二つあつたんだ。一つは"Back to Normalcy"といふんで、これは戰爭によつて壞された米國の經濟界を、平時の安定にもどすことを意味するものであり、今一つは"More Business in Government and Less Government in Business"といふんだ。『政府にはビジネスをもつと多く、ビジネスには政府を、もつと少なく』。これ正にビジネスが政府と政治に君臨した公然の聲明ではないか。

ハーディングは君も知つてゐる通り、近來の米國で最も弱い、最も定見のない大統領だつた。併しビジネスといふ新しい米國の統治者に對して門を開いてこれを迎へるのには、生中、定見があつたり、強い性格であつたりしては不向きだ。對手のいふなり次第になつた方が都合が

いゝのだ。これにはハーディングは極めて當り役であつた。

そのつぎに出たのがクーリッヂだ。クーリッヂは、瀨戸物屋の燒人形みたいに無口で、しかも正直な男。理想は即ち繁榮の現狀維持、手段は即ち能率主義。ハーディングによつて門戶を開いた白堊館に、資本家とビジネスが來て自己の意志を行ふには、この上もない當り役だつた。

白狀すると、當時ぼくはなぜこの平凡人がアメリカで、あれほど人氣があつたかゞ、どうしても分らない謎であつたんだ。人間がいくら徹底してゐるにしてからが、この人を持つて來ずとも、看板に事を缺かなからうではないか。併し今度アメリカに來てこの謎は漸く解けた。いはゆる商業化したこの國民の心にはクーリッヂは、商業の店飾りとして少しも危なげがない。それがこの國で珍重されたのだ。

ハーディングが門番で門をあける役、クーリッヂがビジネスの番頭――そしてその次ぎにフーヴアといふビジネスの技師が大統領の職に選ばれて、資本主義を土臺とするビジネス・ステートは完全に舞臺に上つて來た。

4

これを書きながら、ぼくはワシントンで逢つたフーヴア の風姿を想出してゐる。

ぼくがフーヴアと會見したのはワシントンが暑熱の洗禮を受けて、外よりも低い位置にあるこの都は、ヂッとしてゐても汗が流れる頃であつた。白堊館の大統領執務室で逢つたのだが、かれはこの暑いのに、例の紺サージの洋服のボタンをきちんとかけてゐた。

『お逢ひすることを喜びます』

と握られた手が、大きい、併し柔かなのが今でも記憶に殘つてゐるが、それよりも印象の深いのは、その色の靑いことであつた。寫眞で見ると、しやもじに眼鼻をつけたやうで、どう贔屓目にみても、勞働者以上には踏めないが、かうやつて逢つて見ると、どこか調和があつて中々の好男子である。

逢つた後で、一緒に行つたヴエノス・アイレスのある新聞の主筆が

『大統領は如何にも疲れてゐるやうだネ。丁度一ヶ年ばかり前に、南米漫遊に來た時に逢つたけれども、その頃は餘程勢力が横溢してゐたものだ。今見ると、どこか病人のやうではないか』

と話してゐたが、ぼくもそういふ印象をえたよ。

傍にゐたユナイテッド・プレスの華府支局長が『それは病身だといふんではないんだ。大統領は何しろ非常に働く。朝八時頃出勤して、晩は六時までは少しも休まない。お晝の時間も一時間ぐらゐとるのが關の山さ。それだから今日も働き疲れしたのが顏に出たので、明日はまた人間機械の活動が始まるよ。』と說明してゐた。聞くと、この前のクーリッヂは、午後になると大概晝寢かなにかしてすごしたものだが、フーヴァは朝から晩まで働き通して、しかも國內の評判は餘り香ばしくないといふのだ。

ぼくはフーヴァの靑い顏を見ながら、移り行くアメリカの經濟組織と、その中にたつて働く機械人の苦勞とを考へたよ。

戰後のアメリカを分つて、ぼくは大體四つにすることが出來ると思ふネ。抽象的な分類法では長くなるから、人間を以て分類してみよう。それがまた不思議に當て嵌るんだ。

第一は前に書いたハーディングだ。これは米國最高の位置をビジネスのために明け渡したんで、謂はゞバプテスマのヨハネの役をつとめたといつていゝさ。『自分の後から來るものは、自分よりも偉大で、自分はその靴の紐をとくにもたらない』と野に叫ぶ聲だ。意見のないかれは、實際またそれほど謙遜でもあつた。

第二にこの後に出て來たのはクーリッヂだつた。かれは資本家の意志に抗せず、かつ自分は勞働と儉約といふ古い道德と經濟觀に終始した。多くとり入れて、少なく使ふ——個人の場合でも、國家の場合でも、かれの目標はそれ以外に出でなかつた。

第三期になると、米國の傾向は全然違つた色を帶びて來た。この期の代表者はメロンであらう。メロンといふのは君の知つてゐる通り、ハーディング內閣當時からの大藏大臣で、過去十ケ年間の財政政策は誰よりも、この人に負ふところが多い。自身も大金持で、米國の富豪番づけで片方の手の指をくれば、その一つはかれの名が動かないといふ男さ。

クーリッヂ內閣の後半の政策は、無論この人の指圖だが、かれは完全に近代の大金融家のタイプだ。かれはその國家政策を、どの金融家もがそうであるやうに、金利の低下と、證券の高値維持を目標として來た。かれは約十ケ年間に、米國の戰時債務百億ドルを償還してしまつた。かれは金融家であるから、一國の繁榮を株式の高低指數で測定した。この點でかれは自から滿足した。平年といはれる一九二六年十二月卅一日において、二十個の重なる株式の平均値段を見ると、五ケ年間に六十七ドルから百七十七ドルに騰貴した。

第四期を代表して出たのがフーヴァである。能率主義の技術家で、オルガニゼーションの天才で、近代の混み入つた經濟組織を運用するのに最も好適だと思はれた人だ。今まで、それでも政治家に賴つてゐたアメリカ人は、今こそ、經濟技師を公然その頭に推戴したのだ。

フーヴァに對する期待は大に失したので、その反動の失望は現に來てゐる。併しアメリカの過去を見つめるものが、かれ以外の何人を期待しえよう。ジョン・デュイもいつてゐるやうに、共和黨は公然、自から繁榮の保護者を以て任じてゐる。繁榮の父の名を共和黨とでもいひたいほど、かれ等は繁榮だけを賣りものにして政權を握つて來た。元來、米國の大統領の選擧は、全體として「恐怖」によつて左右される。現在の繁榮と組織が、何人かによつて顚覆されるやうなことはあるまいか。この恐怖がいつでも、平凡だが性の知れてゐる共和黨に、といふことになるのだ。

その共和黨の候補者がフーヴァだ。戰爭好きの國、武士道の國では軍人が民衆のイマジネーションをそゝるやうに、この商業心の國では、技師が國民の想像を煽るのは當然だらうぢやないか。フーヴァが前古未曾有の大多數で當選した上に、この當選が確定すると、株式市場が吹き出して、狂的なフーヴァ相場を現出したのは、この邊の米國民の心理を

示して餘りありだ。

5

米國の過去十ケ年間を四つに仕切つて、そこに代表的人物を持つて來たのは、なにも英雄主義的な意味からではないんだ。この間に米國がどう進んだかを見んがためさ。

も少し詳しく說くと分ることだが、ハーディング以來、政府は漸次ビジネスの中に足を突込んで行つた。なにしろ自分達が繁榮の一手製造元のやうな顏をしてゐるのだから、義理にも繁榮の讃美をせねばなるまいからネ。アメリカの繁榮に反動が來てそこここに入道雲が現はれた時ですらも、政府は樂觀ばかりして聲明を發し、その時々に株式は盛りかへしたものだ。併しそれに拘はらず、政府はまだ米國の個人主義とビジネス主義を恐がつて、産業界に深入りはしなかつた。他人が射た鹿の肉を、一緒になつて騒ぐのが、それまでの政府の立場だつたといつてよからうさ。

もし米國の繁榮が、も少し續いたら、經濟技師のフーヴァも、能率の研究や、各省の聯絡ぐらゐに頭を突込んでゐたに違ひなかつたらう。併しフーヴァが職について半歳經たないうちに、米國の繁榮は崩れかけて來た。かれは準備もなにもない内に、拔手をきつてザンブと經濟組織の眞中に飛び込まねばならなかつたんだ。かつても書いたが、レセス・フエアの米國でも、恐慌が來た時には政府の力を借りることに昔から相場が決つてゐるんだからネ。

フーヴァが飛び込んでみると、米國の經濟界は同君がその著の「アメリカ個人主義」などで說いてゐるところよりも、もつと進んでゐたことが分つたんだ。つまりアメリカはピユアー・エンド・シンプルな個人主義的資本主義——そんな文字があるかどうか知らないが——から、どこかへ一轉しなければならない時期に來てゐたのだ。

アメリカの歴史を讀むものは、誰でもルーズベルトのトラストの征伐の場面に行くと、その痛快さに手を打つを常とするだらう。一九〇四年に、かれはグレート・ノーザンと、ノーザン・パシフイックの兩鐵道會社が、合同するために大北證券會社をおこしたのを、例のビッグ・スチックで撲ぐり仆したものだ。その後、アンチ・トラストのシャーマン法は現存して、歴代の政府はトラスト征伐をその信條とし、大資本の合同や價格の協定は斷じて許さなかつたものだ。

然るにそれから僅かに二十六年、その間に政府と、從つて國民の態度は全く變つてしまつた。政府は進んでこの二つの會社の合同を贊成するばかりでなく、政府の別働隊である州際商業委員會はこれが中間に這入つて奔走するといふ狀態である。そして曾ては猛烈な抗議をしたであらう國民も、それを少しも不思議としない。今頃、トラスト征伐などゝいふと人が笑ふぜ。

更に最近、造られた中央農業局を見てくれ。政府が民間の事に足をふみ込むことは、今までは戰爭以外の場合には國民は決して承知しなかつた。然るに農業が不況で、その購買力が減少したのを見るや、政府は特別な政府機關を造つて、これに二億ドルまでの信用を與

へ、農業救濟をやり出した。現在ではその運用の結果、四千萬ドル乃至五萬ドルの損失を招いてゐて、この邊に對する批難はあるが、政府がビジネスに乘り出したことの批難は殆んどない。

米國にパニックが來ると、大統領フーヴァは實業家や有力者を招いて大會議を開いた。ある人にいはせると、これは馬を盜まれた後で、遽てゝ馬小屋の戸を閉めるやうなものだつたが、それでも經驗にこりないで、戸を開け放しにしてゐるよりましだらうじやないか。いづれにしても、この會議から恒久的なものが生れて、そこに日本流の名前にすれば經濟審議局とでもいふやうなものが出來そうだ。勞働代表や、學者などもこれに入れる時期が來れば、レス・ガバーンメント・イン・ビジネスどころか、政府卽ちビジネスになつてしまはうではないか。

この外、傾向として民間における事業の合同熱などをあげれば切りがあるまいよ。銀行の合同は一九二二年から一九二五年までの平均は百二十乃至百二十五件であつたのが、一九二六年には百五十四件、一九二七年には二百五十九件だ。米國における全銀行の資本總額の八割までが、十二の金融機關によつて握られてゐる。ガスとか水道とかいふやうな公共事業のものでは、一九二五年には四百二の會社が失くなり、一九二六年には一千二十九、一九二七年には九一一、一九二八年には八二九が合併されてゐる。自動車の生産額の七割五分は二つの會社の手にあり、本年の暮までには他の弱少會社は合併の運命にある。

これ等の事情を君はどう解するか。一つは國民が資本の力に頭を下げて、トラスト破壞といふやうな古い個人主義に執着しないことを示すものであり、第二にはそれと同時に、政府も(一)産業の要求と(二)自己が繁榮を看板とする關係から、ビジネスに干渉、協力、交涉を行するに至つたものだとぼくは思ふね。

こゝまで來ると、米國のやうな經濟組織の發達してゐる國では、相當な急速力で轉換すると思ふんだ。そしてフーヴァは時代の力に引きづられてこの方向にスタートを切つた先驅者さ。

6

以上のやうな傾向は、米國の現狀を見つめるものが、否定出來ない事實だとして、さて問題はこれが、どの方面を通つて、どの方面に行きつくかだ。

米國の産業界を見渡すと、明らかに二つのものがあるんだ。一つは古い部類の産業――今までは米國の根底をなすといはれた産業で、農業、石炭、織物、鐵道などがそれだ。ところが君も知つてゐるやうにこの歷史の古い産業に行きつまりが來たのだ。鐵道でも、石炭でも、かつては産業の柱石をなしたものが、もう自力では立つことすら困難になつて來た。景氣のいゝ間は、政府の干渉を排する産業が、下り坂になるとまづすがるのが政府であるのは洋の東西を問はんよ。

農業は政治家を動かして二億ドルを支出する政府機關を造らした。直接に政府の援助を仰ぎえない産業は、形式をかへて保護關税によつて補助を仰ぐことにした。フーヴァ内閣の關税政策の如きは、この舊産業の仆れるのをふせぐ突つかい棒と解せずして、諒解することができようか。

この舊産業に對して、他方に米國に新産業があるんだ。自動車とか

ラヂオとか飛行機とかいふ近代の發明になるものがそれで、最近の米國における繁榮は、謂はゞかうした高音のものが發したジャズだともいへよう。まだ青年の氣を負ふこの産業は、政府の援助を期待しないのは無論として、關税などに對しても敵意をすら示してゐる。

が、こゝでぼくはチューイーの言葉を眞似てみたい。今、新しいところの産業が、やがて資本過超になり、その消費が投資の比率と添はなくなる時はどうなる。卽ちその産業も亦生産に對して過剩能力を有する時にはどうなるんだ。現在米國の餘剩蓄積額は一ケ年八億ドルであつて、其額は尙增加して行くといはれてゐる。この資本はどこに流れ出る？

先頃は株式界に流れ出て、一時救はれたが、併しその結果は却つて通貨の膨脹を來たして、新しい病根をまいたのは誰も知る通りだ。もしその資本が産業工場の擴張にあてられゝば、それがまた生産過剩になるであらうことは疑へまい。

舊産業を救ふために一歩を踏みこんだ米國の政治が、その場合に新産業の救濟なり、管理なりを忌避しうるであらうか。その時期はかりにまだ相當に隔たつてをるとする。併しその産業の發達と共に、失業者と、老年者の處分問題は、どうしても國家政策の發動を必要としようぢやないか。現在でも米國では四十才を超した勞働者の就職は困難になつて來てゐる。そこにも社會管理の必要品が、米國を待つてゐるんだ。

かうして米國の政治が、經濟の責任をとらねばならぬ時期は目の前にある。また實際、個人主義の權化のやうなフーヴァが必要から産業の統制に出發しつゝあることは、米國としては極めて注目すべきことであり、これに對して國民が何等の反抗も示さないのは、米國人としては珍らしいことでなくてはならぬ。米國が裏口から、社會主義の道を進みつゝある。といふのはこの意味だよ。

この不景氣が過ぎ去つた後で、米人の間には再び個人主義の叫びを聞くであらうさ。併し農業家――個人主義の最後の要塞である農業家に對してすらも、共同賣買と産業統制の利益を教えた以上は、その影響は簡單に消えさりはしないよ。

殊に米國人の他國と異なる特長は、機械文明の發達がかれ等を共同行動に馴れしめたことである。米國では「合衆國株式會社」(The United States, Inc.)とか、コーポレート・ステーツとかといふ文字が、米國社會を形容するのに使はれてゐるが、一個の大會社の國家化が米國だともいへる。米國は資本主義下にあつて、社會主義統制の準備ができあがつてゐるといふのは過言かね。

彼等は現在、競爭の浪費に氣附て來た。鐵とガソリンと石炭を無制限に發掘して、自然富源を荒し終ることの不賢明さを考へて來た。自己の社會に於て無政府主義を排斥する彼等は、經濟界における無政府主義をも排斥せねばならぬと考へ出したのだ。資本主義的大合同運動が終る時に、そこに社會主義的轉換がかれを待つてゐると思ふのだ。

たゞ最後にぼくは米國は社會主義の道を進みつゝあるけれども、併しそれはプロレタリアの革命による共産主義の樹立に結果するのでないと信じて居ることは一言附言しておきたいと思ふよ。これについては書く暇はないが、反對の結論を下す人だつて、謂はゞ推測た。同じ推測なら餘程讓步したつて五分五分で、それで頭が新しいの古いのと、古帽子屋の店先みたいなかけ聲は御免蒙るぜ。

文藝時評

正宗白鳥

この頃は毎夜、月が冴えてゐるが、月の美も昔ほどに詩人墨客に魅力を及ぼさなくなつてゐる。私など無風流漢は、月雪花に對しても、和歌や俳句をひねりだしたことは一度もなかつたが、古今の名詩名句の斷片はをり／＼記憶の底から浮んで來て、ひとりで興を覺えることがないでもない。

今夜の澄んだ月を仰いでも、少年の頃吟誦してゐた幾つかの漢詩を思出したが、そのうちの一つは、「月は大空に横たはつて千里明かに。風は金波を搖がして遠く聲あり。夜は寂々兮望み茫々。船頭何堪へん今夜の情。」といふ、「佳人之奇遇」中の長歌の一片であつた。今日の若い讀者が讀んだら、凡庸な詞句に過ぎないと思ふだらうが、我等の少年時代には、こんな詩によつて、感激させられてゐたのだ。私は、「佳人之奇遇」中の一卷を手寫したのだが、これは異例であつた。

東海散士の「佳人之奇遇」と、矢野龍溪の「經國美談」とは、その頃の感激性に富んだ青年讀書子を心酔させた小説であつて、明治十年代の末期に、「書生氣質」と時を同じ頃に出版されたのは、對照が面白い。後者に於ては、純粹の寫實でないにしても、當時の書生の日常生活や用語や、實際の世相の一面が窺はれるが、前の二小説に於ては、若い者等の理想が察せられる。片山潛氏でさへ、自叙傳のうちに、「實に予の精神を躍らせ血を沸した書物で、この本くらゐ予を刺戟したものはない」と、「經國美談」を推稱してゐる。これ等二小説には愛國の精神が溢れてゐるのだ。私は明治二十五六年頃に、小學を卒業して、隣村の私塾へ入つた時に讀んだのだが、その時分でも、まだ私塾の學生の必讀書となつてゐた。しかし、今日讀み返して見ると、これ等の小説は、明治の古典として誇るべき價値は認められない。二十年代に、一部の青年に盛

んに迎へられた浪六の俠客物が、今日になつては、讀むに堪へられなくなつたと同樣である。木下尙江氏の「火の柱」を、私は今度はじめて讀んで失望した。岡本の文學全集も一面、一時の流行に過ぎなかつた古物を、暗闇から白日の下へ曝らし出してその正體を見せた感じがされる。これについて思ふに、政治家や敎育家や、俳優や音樂家などは、死後は明瞭にその正體を知られないために、實價以上にも實價以下にも、どうにでも見られてゐるので、文學者の如く末代までも自己の眞相をそのまゝに殘して、後人の批判を受けるのとは違つてゐる。維新の志士傑物にしたつて、後人の追憶によつて色彩を加へられてゐるのである。今日の政治家は明治初期の政治家に比べて見劣りするやうに云はれてゐるが、「佳人之奇遇」と今日の小說との比較から推察すると、私にはさうは思はれなくなつた。現在者よりは故人を尊重するのは、人間の通有性であるが、文學や美術の作品は本物が殘つてゐるのだから、誤魔化すことが出來ない。

明治二十年前後に新文學の勃興して以來、大文學出でよ、大詩人出でよといふ注文は、批評家によつて頻りに提出されたのであつた。二十年代の代表的雜誌であつた「國民之友」の綴込みは、少年時代の私の書齋であつた故鄕の舊屋の二階の古本箱に藏せられてゐるので、私は歸省のたびに、取出して濫讀することがあるが、茫漠たる大文學要求の昔の聲の名殘をあちらこちらから頻繁に聞かされてゐるやうで、三四十年來、日本の文壇はこの不滿な聲で續けられたことを思出すのである。德富蘇峰氏でも內田不知庵氏でも、今から見ると、變な注文をしてゐたのだ。例を擧げると、「國民之友」社說の一つに、「何故に大詩人出でざる」と題して、「行燈は電氣燈となれり、飛脚は電信となれり、吾妻橋は鐵橋となれり……醫術はアメリカの師たるに至り、我邦少女の手に成れるハンカチーフは巴里の貴婦人に弄ばるゝに至れり……然るに此間に於て、一の詩人の世界にその名を知らるべきものを產せず、一篇の詩の後世に傳はるべきものを出さゞるは不釣合の次第にあらずや、何故に總てに於て大なりし日本は、文學の一部に於て大なるものを出さゞるか」と疑ひ、その源因をたづねて、

「眞實に神佛又は諸偶像を信仰する文學者なき事。自由平等、道理光榮、眞理及びその他の原理又は德性を眞實に愛するものなきこと。眞實に國を愛するものなき事」などを列擧してゐる。

不知庵氏も、「文學上に於ける原動とは何ぞ。曰く思想是なり、……今の文學界は思想を缺ける事極めて甚だし、……今の文學者は脳漿を失へる枯髑髏なり」と罵倒して、その對照として外國文學者の言語行動を盛んに引用してゐる。二十年代の雜誌論文なんか讀むと、あの頃の論者がよくもこれほどに西洋古今の著書を讀破してゐると驚かれるのである。

内村鑑三氏なども、熱烈に、「大文學は出でざる乎」と叫んで、ノルウエーにイプセンあり、ハンガリーにモリッツあり、ロシアにプーシキンありなど、西洋文士の名前を無數に列擧して、日本を罵倒してゐる。「文學とは高尚なる理想の産なり」と斷じ、「日本國は世界的精神を養はざりしなり、故に世界的大文學は彼れより出でざるなり」と獨極めに極めてゐる。

ゲーテのファウストの如きもの出でざるか、ユゴーのミゼラブルの如きもの出でざるかといろ〳〵な批評家によつて叫ばれてゐるが、三十餘年後の今日でも、そんな空漠たる注文を出してゐるものがある。…文學論が空疎であつたのから類推して、當時の政治論だつて空疎であつたことが察せられる。

「醉うては枕す、窈窕美人の膝。醒めては握る堂々天下の權」といふのは、明治初年以來の青年の理想で、私の少年時代にも、私塾の學生によつてまだ朗吟されてゐた。十年代の政治小説に現はれてゐる理想は、要するにそれであつて、「佳人之奇遇」「經國美談」に描かれたる夢物語にもその理想は變形的に現はれてゐる。フロイドの文學觀はこれ等の上にも的確に應用し得られるのだ。壓迫されたる性慾と名譽慾が文學の形をなして紙上に現はれてゐる。「佳人之奇遇」は、ことに太太しい作品である。會津の遺臣たる東海散士が海外に遊び、所々の亡國の跡を弔ひ亡國の志士仁人に會つて、互ひに肝膽を吐露し、世界の大勢を論爭するのが一篇の着想で、常に情趣ある漢語を驅使して、古風な詩味を帶びてゐるが、主人公に對する重な人物は、愛蘭の貴女紅蓮、西班牙の名族の貴妃幽蘭などの美人であつて、それ等の美人は、偶然行會つた東

海散士に纏綿たる愛慕の思ひを寄せるのである。共に河上に遊び、詩を吟じ樂を奏し、あるひは閑室に會食しながら、互ひに國家的感慨を洩らし合ふのである。そして、世界を舞臺に離合集散の變化を經驗しながら、全篇を通じて愛慕の情緒を互ひに樂んでゐる。私が月を仰見ながら思出した詩句は、「我所思行」と題して幽蘭姫が大西洋上で歌ふ所の長歌の一片であつて、そのうちに、かう歌はれてゐるところがある。

「我思ふ所は東海の人、往いて之に從はんと欲すれば關山難し。羨む君が錦衣郷に歸るの日。悲しむ妾が虎窟兒を探るの辰。妾今一たび去つて何の處にか復らん。歐雨米煙夢相を逐ふ。妾今一たび去つて今の處にか會せん。青雲黄壤擧めトし難し。想ふ昔時水興に乘ずるの船、東西奇遇す殊春の天。月下手を携ふ花落るの處。清風琴を拾ふ水流るゝの邊。嗚呼昔の夜この歡なくんば、今宵豈又この歎あらんや、千行の涙は紅綃の袖を沾ほす。一雙の影は映ず亞字の欄」

東海の遊子たる主人公に對する歐洲の美妃の愛慕の情のいかに濃厚なるかは、この詩によつても察せられる。明治以來の小說に、いろ〳〵な色男が描かれてゐるが、世界を舞臺にして、歐洲貴婦人に思ひを焦させた色男は、この小說の主人公くらゐなものである。明治の初年に着馴れぬ洋服を着けた東洋の孤島の一書生たる作者が歐米を旅行して、かういふ滑稽染みた空想を起したのは非凡であるが、それだけに眞實性皆無で、今日となつては讀者の心に訴ふるところがなくなつたのも當然である。それに比べると、德富蘇峰氏は、空想力が乏しいだけに、歐米漫遊後には平民主義を脫却して、國家主義帝國主義强兵主義を抱持するやうになつたらしい。この方が眞實性に富んでゐる。

木下尚江氏の「火の柱」は、社會主義信奉者を主人公とした最初の小說であらう。日露戰爭時代に出たもので、二十年代に多くの批評家によつて求められてゐた「思想のある小說」の一つがはじめて現れた譯である。こゝでは「醒めては握る天下の權」の代りに、社會組織改革の熱意を持つた貧青年が現はれてゐる。ところで、私が面白いと思つたのは、この立役たる青年に配合する立女形は、富豪の娘であることである。富家に生れながら社會主義の思想を持つて、金權萬能主義の

父に反抗して、貧しい青年の懐に身を投げかけるのだが、こゝにも、フロイド流の精神解剖は施し得られるのだ。作者は、猛烈に貧者に同情し富者を呪つてゐるのだが、しかし、裏長屋の貧しい醜い無教育な女を、戀の相手にさせるのでは、創作的空想が滿足させられなかつたのであらう。富家の美しい女に慕はれることを妄想して感興が湧いたのであらう。木下氏をはじめとして今日でもその傾向がある。「眞理の春」にでも、作者は富家の娘にプロレタリア思想を持たせることに興味を置いてゐる。「望んでも現實の世では手易く滿たされない性慾と名利慾が文學に現はれる」といふ觀察は、プロレタリア小說の上にも適應されるのである。

内田不知庵内村鑑三德富蘇峰氏をはじめ、明治二十代の批評家によつて盛んに論及された文學對思想の問題は、今日でもまだ論ぜられてゐるが、それが文學の上にどれだけの效果があつたであらうか。

岩野泡鳴もよく思想の必要を說いてゐた。自然主義刹那主義を奉じ小說を書くと云つてゐた。しかし、彼れはすべて露骨であつたゝめに、「佳人之奇遇」や「火の柱」のやうに、一般の讀書子に喜ばれなかつた。主義を現はし思想を現はすにしても、文字の綾や筋立の綾が必要であつた。今日のプロレタリア小說にしても、主義思想の一本調子であつたら、一般受けはしないに違ひない。

この頃、明治大正時代はいろ／＼の方面から研究されてゐる。文學も、改造社や春陽堂の圓本によつて、雜然と集められてゐる。これを見ると、僅々數十年の間に、變遷が激しく、文章も作風も種類の異つたものが續々現はれてゐたことが分つて面白い。東西古今の文學史に比べて、ひけ目があるかないかは問題として、系統的に研究して的確な批判を下す必要があるのだ。傾向の變遷についても、個々の作家についても、いつとなしに定評がつくられてゐて、批評家も讀者も、あるひは、文學史見たいなもの、編纂者も、その定評をそのまゝに受入れてゐるのは遺憾である。盲目的定評も少くないのである。

「佳人之奇遇」「雪中梅」時代は云ふまでもなく、二葉亭一葉獨歩、あるひは、花袋泡鳴、その後の作家に至るまで、人世の種々相をそれ〴〵の領域に於て、よく描き、人間愛慾の悩みなども次第に深く入つて表現してゐるやうであるが、それに關はらず、明治大正の文學を通じて、淺さ、甘さ、おとなしさを私は感じる。これが、傳統的の日本人氣質なのであらうか。却つて低徊趣味と云はれた夏目漱石や、人道主義と云はれた有島武郎の作品に、愛慾、我執復讐鬪爭の人間心理の根強さの現はれてゐるのを私は見た。

一葉の小說は日本の女性の情趣をよく現してゐて、文章にも源氏物語以來の日本女作者特有の妙味を持して快く讀まれるのであるが、名譽心も可成り强かつたらしい新代の才女として、あまりに大人し過ぎた。私は、例の「國民之友」の綴込みをうちに、德富蘆花(?)によつて梗概を傳へられてゐるバシカアトセッフ女史の日錄を讀んで、一葉など、如何に異つてゐるかを考へた。女史は、ロシアの少女で、名譽心深く、戀の空想も强かつた。そして肺患に罹つて夭逝したのであつだが、その日々の感想を錄した文字は、何々火談を吐いてゐるやうであつた。これを一葉の日記の謹み深さに比べると大違ひである。日本人だつて生の喜び生の恐れについて、歐米人に劣る譯ではないのだらうが、文學にはそれを現はし得ないのは何故であらうか。私は、日本の自然主義文學が歐洲自然主義文學の感化を受けたといふことさへも怪むのである。無論外國の感化なんかは受けなくてもいゝのだが、受けたことに極めてゐるのは馬鹿げてゐる。私はこの頃フランスの古典文學たるラシーヌ、コルネーユの作品の一端をうかゞつてさへ、その獰猛强烈さに面を向け難く思つて、明治文學者の人のよさ、お目出度さを連想した。

この頃輕々しく宗教否定が說かれてゐる。しかし私は、談何ぞ容易ならんやと思つてゐる。佛蘭西革命の時には、宗教は土足で踏まれたが、國家平定後には舊に倍して迷信が復活した。ロシアだつて押して知るべきである。たとへ、キリスト敎とか佛敎とかを否定したにしても、もつと詰らない種々雜多な日常の迷信から脫却してゐないのに自から氣つかない

のは滑稽である。宗教から出た常套的道德に捉はれてゐながら、宗教否定の氣焔を吐けてゐるのも可笑しい。

私は、思想のない新日本を罵倒し續けた内村鑑三氏の、死に直面してからの日記を、「聖書の研究」終刊號で讀んで感慨に打たれたのである。人間的親しみを覺えた。多年、理想とか思想とかを題材として論を立てゝゐた氏も、暗黑の死に接しては、さういふ衣服を脱いだ一個の人間の影をほのめかせた。心の迷ひ、氣休め、不安、人頼み、弱々しさが、押え切れなくて現はれてゐる。「人は如何なる大先生であつても、自分の通過したことなき道の樣子を知らない。自分が人の教師であるが故に、死に到るまでの道を知盡してゐると思ひ、誰一人これを以て、慰めて呉れる者なきを思ふて、本當に人生の情なさを感じた」と云つてゐる。「青年時代から宗教文學殊に佛教で死といふ事をあまり細かく聞かされたことの害を知つた」とも云つてゐる。

害があつてもなくても、我々は幾百年幾千年の間、祖先以來宗教心は染込んでゐて、今更どうすることも出來ないのだ。希臘の盛時には陽氣な宗教はなくつて、現世を謳歌してゐた譯だが、しかし、その時でも、人間は運命の免れ難さに戰慄してゐた。

附録

最新社會科學の頁

編輯責任者

池内宏
蠟山政道
新渡戸稲造
穂積重遠
戸田貞三
河合榮治郎
高柳賢三
高木八尺
那須皓
村川堅固
上田貞次郎
黒板勝美
矢内原忠雄
松村瞭
小泉信三
阿部賢一
美濃部達吉

（イロハ順）

目次（昭和五年十一月）

經濟學

◆理論經濟學・學說史及學說批判

●高田保馬「資本蓄積理論の發展」(中央公論、四五・九、昭和五・九月、二一—三五)問題はマルクスが資本論第二卷に揭げた擴張再生產の數式に發途する諸家の資本蓄積理論。即ち資本の蓄積には果して限度ありや否や、又ありとせば其限度は何處なるかを定めんとする理論の價値果して如何である。作者の是に對する意見は懷疑的又否定的である。即ち第一に蓄積行きつまりの理論は、技術の變化、資本構成の變化、又剩餘價値率をば强いて一定の大きさと前提することに依て成立するものなれば、「論議の必然性をもち得ない」とし、第二によし經濟理論として確立せられても、それは資本主義組織其者の崩壞に就ては何事をも證明し得ぬ。究局此問題を決定するは經濟外の社會的勢力であるといふ。即ち此の判斷は「經濟は弱い、社會は强い」といふ作者の社會學的根本思想に立脚するものである。篇中最も多く學者の論評を受くるは、現時著名のグロスマンの蓄積及恐慌理論である。先づマルクスの數式に基いて蓄積無限進行の可能を說きしはツガン、是に對して、資本構成の高度化なる要素を導入して消費財過剩の必然を說きしはルクセンブルグ、是を批評し、資本を消費財生產業から生產財生產業へ移すことに依て需給の調和の實現し得らるべきことを證明せんとしたのがバウエルであつたが、グ氏は一應バ氏の數式から出發しながら、蓄積が或年數以上進行すれば結局行詰りに到達せざるを得ぬことを證明せんとする。即ち可變、不變資本の增加率を一定せりとせば、一定年數の後には資本家が收得する剩餘價値の全部を擧げて蓄積に充てゝも猶ほ足らぬ時が來るといふのである。是に對して作者は一定人口增加率一定の可變、不變資本の增加率といふものが任意の前提であり、殊に獨占の實現は資本高度化の勢を緩ならしめる、又恢復のない最終的恐慌の必然は證明せられて居らぬといつて居る。蓄積理論が資本主義崩壞の證明として無力なる理由として、作者は蓄積なき資本主義の存續可能なることを認め、又經濟界及び戰時の匈牙利を指摘して、資本主義崩壞に蓄積の行詰りを須たざることを說いてゐる。資本主義の崩壞には必しも蓄積行詰り必要ならざることを說く限りに於ては、新調和論者とも又ヴルガ等とも一脈相通ずる處ありと謂ひ得るものの如くである。(小泉)

●シュパン「世界經濟の個人主義的概念と全體主義的概念」(Othmar Spann, Der individualistische und der universalistische Begriff der Weltwirtschaft.—Weltwirtschaftl. Arch. 30 (2) Oct. 1929, pp. 112—121) 此論文はシュパンがその獨自な方法論に立脚して說いた世界經濟論である。個人主義的概念に於ては、世界經濟は豫め存在せる完全な個人間の單なる交涉に歸せられる。集團の活動は個人の活動を限定する消極的役割に存し得るのみである。然るに、全體主義的概念は此根本概念を轉回する。全體は部分に、社會は個人に先行する。部分、個人は僅かに社會に依て結合構成せられるものとして存在するにすぎぬ。即ち全體は常に必ず其本質的なものとして部分に對隨し、部分は全體との關係に於て存在し得

るのみ。而して經濟生活に於て現在重要なる社會的全體は國家であるが、斯る部分と全體との關聯に於る織列はこれを極點として終るものではない。假令世界經濟が有效な統一ある組織の點に於て國民經濟に劣つて居るとしても、其は最高層統一體に達するといふ利益を持つであらう。斯る見解は國際經濟問題に對して新しき光を投ずると、筆者は述べて居る。(小泉)

●社會主義、共產主義及無政府主義

●**高橋誠一郎**「**ユートピア管見**」(三田學會雜誌、二四・八、昭和五・八月、頁一―二二) W.E. Cambell, More's Utopia etc., 1930 の所說に關聯して「ユートピア」篇中に現れた革命思想が果して著者の眞信念なるや否やの問題を論ずる。彼を共產主義者、社會主義者と做すカウッキー、ベーア、リータム等に對してカメルは、ハイスローデーの思想とモーア自身の名の下に表明せられたものとを嚴密に區別する。モーアは該篇中の全對話を通じて自ら眞正且つ重要と信じた社會的政理及び原則を自己の名に於て表明し、自ら贊同し得ざる他の其等をハ氏に語らしめる爲めに對話の形式をとつたと謂ふのである。筆者はこの解釋を斥けユートピア篇が對話體なるは該書が希臘文學の研究旺盛なりし時代に其熱心なる一研究者によりて著されたに由ると解すべきで、ハ氏は實にプラトーンの對話篇中に於るソクラテスの地位に立てるものにして、又、實にモーアにとつては、彼は屢々「第二の我」たるのみならず、彼の「更に善き我」として描出せられたものであると謂ふ。(小泉)

●**住谷悅治**「**我國に於ける『社會主義』といふ語の最初の使用者**」(經濟往來、昭和五・九月、頁九四―九七) 我國に於て社會主義なる語は古く前同志社教師ラーネッド博士に依て用ゐられたといふ安部磯雄氏の記述を補正して自分の知る限りでは初めてソシヤリズムなる語を使用したのは安部氏のいふ明治十六年頃よりも古い明治三年の事でそれは加藤弘之著「眞政大意」次で明治五年、中村敬宇譯ミル「自由の原理」に見えてゐる。日本語としての社會主義なる語は先づ明治十五年藤田四郎著「歐米政黨沿革史總論」に見え次で明治十七年澁谷慥爾譯「政治談」に用ゐられた。(小泉)

●**土田杏村**「**『ドイッチェ・イデオロギイ』の唯物論**」(經濟往來、昭和五・九月、頁二二―三二) 近刊マルクス、エンゲルス遺稿「ドイッチェ・イデオロギイ」は、彼等が茲に極めて鮮かに唯物論を定礎し、其上に唯物史觀の全構造を建設せし著作として、マルクスの全作物中最重要のものに屬する。土田氏が力說するのは、マルクスの唯物論は決して單純に觀念論に反對したものではなくてカントのそれと趣こそは變るけれども、やはり經驗論と觀念論とを結合統一せんとしたものであること是れである。こゝで、土田氏は本文の中から左の一節を引用してゐる。「かゝる活きた生活過程が明かにされるや否や、歷史は、かのそれ自身なほ未だ抽象的であるところの、經驗論者に見るやうな、死んだ事實の蒐集でなくなり、またはかの觀念論者に見るやうな、想像せられた主體の、想像せられた行動でもなくなる。」即ち彼は經驗を創造的な生產的な人間の行動とする事に依て一方經驗論の陷穽を避け、其創造

的、生産的な人間の活動をば同時に對象的に把握する事に依て、他方、觀念論の短を棄て以て是等兩者の統一を物質に求める事に依り自己の立場を確立した。マルクス唯物論の獨自の境地は玆に存する。從て彼の唯物論は通俗的、素朴的、直觀的、機械的唯物論乃至人間學的唯物論等とは到底比較にならぬ程、洗練され、批判され、從つて批判に堪へ得る堅固な理論的構造を持つた唯物論である。併し此唯物論が當爲的立場を全く不必要とする事、並に人類の現實生活を「物質」と呼び、人間的活動を直ちに生産と呼ぶマルクスの仕方に對しては遽かに同意し難しと土田氏は言つてゐる。（小泉）

●**ブウルギャン「ブランキの市街戰論」**(Fourgin, G. Blanquis Anweisungen für den Strassenkampf. Archiv für d. Geschichte d. Sozialismus u. d. Arbeiterbewegung. 15. Jahrg. 2. hefte. 1930)ブランキの根本的科學的研究に志す者は宜しく、彼の友グランジェが巴里圖書館に保管し、未だ何人にも利用せられざる處女資料たるブランキ文書を見なければならない。ブウルギャン氏は是等の文書中より、特にブランキズムの中樞とも言ふ可き××戰術に關する二文書を拉し來て、是に簡單なる序言を加へてゐる。實踐家としてのブランキの準備、智識を知ることが出來る。（小泉）

●**ブウルギャン「一八七一年のコンミュン史概要」**(Bourgin, G. Aperçu sur l'Histoire de la Commune de 1871. Revue historique. 55. Année, Tome CLXIV. Mai-Juin, 1930. p. 88—96)巴里コンミュンの間接の原因は一八六〇—一八七〇年時代殊に一八六三年以後の特徵たる未曾有の政治的並に社會的動搖であり、其直接原因は一八七〇年七月普佛戰爭に依つて齎された國民的危機である。當時巴里勞働階級の思想は共和主義、愛國心、マルクス階級鬪爭論から成つてゐた。コンミュンの樹立後の選擧に選出された代議士は各種の流派を代表する人々で、斯る事情が內訌を誘發し軈てヹルサイユ政府に對する敗北の原因となり又コンミュンの社會的施設の見る可きものが微々たるものであつた所以である。或はコンミュンを、巴里フランスを襲ふた非社會的暴動の類と解し、又或は之を階級鬪爭の思想に由來する純乎たるプロレタリヤ運動と看做す者があるが、其は孰れも附會派の說である。人類の大衆を動かすには彼等をして發憤蹶起せしむる感情に訴へなければならないといふ事が若し眞理ならば、コンミュンの希望も不幸も共に、プロレタリヤの心の中に生きて彼等が集團的行動の動因となる事であらう。（小泉）

◆日本經濟史

●**小葉田淳「王朝時代貨幣史の研究」**（經濟史研究、昭和五・八月、頁一—一六、及び同九月、頁一—二〇）王朝時代貨幣史の研究は旣に濱田健次郎氏、橫山由淸氏、內田博士、西田博士、柴謙太郎氏等によつて試みられてゐるが、『王朝時代を通じ、廣き史料の再吟味と、綜括的考察を加ふることは、徒爾ならずと推せられ』て物された注目すべき力作である。奈良朝において、當時强調せられた國家統一的意識の象徵として發行せられた官錢の流通を初期において阻害した畿外庶民の貯錢の退藏をば、倍錢當十の新錢が長き時の經過

を待たずして漸次その價値舊錢と一致するに至つた事實に求められる。錢納の「撰使」少なく、新錢の流布多からざる地方に舊錢に對する執着心が強かつたのである。しかし漸次貨幣は普及するに至り、寛平延喜の時代に及ぶ。轉じて平安朝中期以後に至るや銅鉛の闕乏、鑄錢司の紊亂等は依然として覺醒せざる政府の貨幣政策と相待つて、貨幣自體の價値を失墜せしめ、遂に世情の信用全く地を拂ふに至つた。時に地方勢力は彌々強力となり公地公田は侵奪せられ、莊園は各地に增大した。中央の權威は全く地に墜ち、財政は極度の窮迫を告げた。庶民の不統制、海賊盜賊の横行、浮浪の叢出、かゝる混亂、賑援の世態は又貨幣史の上では、通用量の減少、量目品位の輕小化惡化等となつて現れた。かくて『以上の大勢は政府の執つた無力なる錢貨忌避の制止、或は貨幣流通の社寺への祈禱乃至は消極的なる私鑄錢の禁斷等によつて轉向せらるべきではない。卽ちそれは、次期に於ける世態の更新と優秀にして多量なる貨幣を持たねばならなかつたのである。』

要するに此論文の企圖する所は、王朝時代の貨幣史が、貴族社會の發生、成長、衰頽とその推移を倶にすることを究明するに在り、貨幣史を社會史的見地より觀察する點において大なる特徴がある。（河合—土屋）

●**菅野和太郎**　**「我國に於ける證券市場の發生」**（經濟史研究、昭和五・十月、頁一—一二）

菅野氏は嚮に明治初年に於ける通商・爲替會社に就いて綿密なる研究を發表せられ、それを以て我國における株式會社の濫觴とされた。この論文は株式會社の普及發展の不可缺條件である證券市場の發生の經過を論究されたもので、或る意味において前研究の補充をなすものであると言つてよい。

我國において有價證券は既に德川時代の米切手、手形にこれを見ることができ、それらは盛に賣買されたとはいへ、たゞ賣買交換の目的物を動化するに停つたため、その影響はなほ經濟社會の表面に止まつた。わが國最初の株券は、わが國最初の株式會社たる通商、爲替兩會社のそれである。しかし、當時有價證券に關する知識は普及されず、その流通性は乏しかつた。關西鐵道會社、國立銀行設立を經て株式會社はしだいに普及し、商業に小會社が族生した。有價證券の知普及に與つて力あつたのは、三年四月の九分利附外國公債を嚆矢とする各種の公債であつた。證券の賣買も、有價證券に對する知識の普及に伴つて、國立銀行株券の發行以後は盛んに行はれた。しかし未だ證券取引所の發生を見なかつたので、その取引は阻害されざるを得ない。

加ふるに、秩祿公債、金祿公債の發行、その賣買讓渡は愈々株式取引所の實現を促した。明治十一年五月布告第八號を以て株式取引所條例が發布された。東京大阪兩取引所の開設は我國における證券賣買のみを行ふ近代的取引所の最初の出現である。

氏は轉じて當時の取引狀態を研究され、公債の賣買高が株券のそれより遙かに大にして、今日と全く事情を異にすることを示される。その理由として第一に公債の發行額が上場されたる株式の資本金額より遙かに大であつたことを擧げ、第二に秩祿、金祿公債の所

持人が士族であり、その多くが事業に失敗し沒落し去つた事實に求められる(河合—士屋)

●堀川昇「日本資本主義發達に於ける製糸業の地位」(經濟學論集、八・四、頁一二一—二八二)百六十頁に亘る長論文。我國資本主義發達の過程において、その技術的基礎において熟練と道具とに依存すること多き製絲業が如何に、特殊の形態を示すと共に、他方必然的に資本組織における高度な產業の反作用を蒙らざるを得なかつたかを論究せられたるもの。

筆を慶長七年に於ける白絲の輸入に起し、製絲業の發展を一應跡付けられる。德川時代の末期において支配的となつた前貸制度の下に、製絲は養蠶から分離する。開國による生絲輸出の増大は生產に反作用して、歐洲製絲器械の輸入となり、家內工業的經營形態はマニュファクチュアに進化する。器械の普及は經營規模の擴大に導く。日露戰役に於ける株式企業の發展、大戰、恐慌、震災、を通じての倔起、更にカルテルの成立。それは同時に生絲問屋の金融力の衰退、特殊銀行中央金庫の進出、地方銀行の合同合併と都市大銀行殊に中央財閥の地方支配への躍進。かくして大企業の金融上の優越は、大企業の金融資本への從屬を通じて贖はれる。しかし乍ら明治初年製絲器械の輸入は、特に製絲技術に於ける分化と勞働者の一定の場所への集合とに於て進化を齎したに過ぎず、特に顯著なる進化なき製絲技術の制約は、未だ製絲業における工場制形態の確立に迄到らしめない。併せて商人資本の根強き介在は大企業に對して今尙多數の中小企業を殘存せしめてゐる。近時に於ける合理化はこの二點に、商人資本の整理と中小企業の整理に主たる努力を向ける。

最後に筆者は要約する。我國製絲業の當面する矛盾は、その技術的構成の低度と、價値構成の高度との不均衡、窮迫せる多數小企業と優越せる少數大企業との間の不均衡であると。(河合—士屋)

工業政策

◆經營經濟學、商業、工業、商業政策及

●佐々木吉郎「經營概念に就いての一考察」(經營經濟研究、五、昭和五・九、十月、頁八五—一〇八)經營經濟學は經濟の單位としての經營の生活現象を研究し其問題は經營概念の意味にある。「經營」に關する諸論は一元的な技術的又は經濟的解釋に分ち得、中間に二元的解釋が介在する。玆には右諸論中技術的解釋を見るに、經營を技術の單位とする者に(一)リーガー(經營は大自體經濟上の大きさでなく經濟の客體であり經濟的觀念の統制を受けてのみ經濟單位たり、經濟なる言葉の內容は財務金融の問題から導かれる)(二)ゾェルハイム(經營は技術的勞働單位、企業は經濟的勞働單位、前者は後者に依存する其部分)(三)メレロヴィッチも之に類する。又經營は技術、經濟何れでもないとする小島博士說(經濟と經營とは統制原則が異り、前者は財の交換原則、後者は指導意思による)あるも首肯しくない。「經營する事の本體」が經濟的に把握せられる所の本質が經營經濟學の意味する『經營』であり、」あるべきだ。(上田)

●井上晴三「我國農家經濟に於ける養蠶經營の重要性」(經營經濟研究、五、昭和五・九、十月、頁一〇九—一四三)日本農家戶數の六九%

は耕作面積一町以下の過小農にて、耕地面積の制限ある爲耕作經營集約化が大正九年頃迄急速顯著だつたが以後減退し主穀經營の行詰を見、耕作と養蠶(又は園藝)の混合經營化、副業の發達の二つを齎した。農家戸數中養蠶戸數は明治三八年二八%から昭和三年三八%に及び農蠶混業乃至養蠶本位の轉向大にて、國民經濟上農産物價額三二億圓中米五一%に次ぎ繭一七%、農家經濟上は養蠶收入平均二四三圓、收入(收入の一一%)としても生計諸費貨幣支辨(年見積約七一三圓)の根源としても重要である。然るに各方面で屢々養蠶所得(自己勞働所得)は工業賃銀以下で足るとする前提で養蠶經營生産費計算を主張し、爲に不當に繭價を壓迫してゐる。此養蠶經營の自己搾取法を助長するものは即ち養繭經營費に無關係に糸價を基礎に繭價を決定する繭掛目算定である。(上田)

●兵藤吉郎　「我國蠶絲業に於る產業革命」(生絲經濟研究、五、昭和五・五月、頁二五一―六〇) 筆者は昨年四月社會政策時報に本稿の前半即ち開港後明治維新までは舊式生產方法によるに[illegible]なる粗製濫造の時代であり、其後明治十七年まで政府の天降り的獎勵政策にも拘らず、依然民間業者は無自覺なりしことを論じたが、本稿に於ては其後約三十年に亘つて當業者が意識的に合理的經營を採り入れるに至つた次第を述べてゐる。尚今後の計畫として大戰前に其後に於る大製絲家の出現と絲價維持策批判をなす意圖が見られる。明治十五年の紙幣整理で製絲家の倒産相繼ぎ今までの急進的氣分を捨て漸進的に斯業の發達を策することゝなり茲に政策の一轉を來した。同業組合運動是である。是は同業組合の強制加入による協同組合化と共に失敗したが、其後群馬縣島に於る座繰絲の共同荷造所による機械製絲への對抗長野山梨に於る機械製絲の組合利用に發展せしめ、彼等は此結合を通じて海外市場を研究し、製品の標準化を期し新式機械を採用し繭質の改良を期した。その間漸次に座繰の機械化を見たけれども未だ大規模なる製絲家は出現せず又自ら貿易に手を染める者少く、唯合理的に工場を經營するに止り、其商業的機能は專ら橫濱の賣込問屋に委せられ、製絲家は銀行信用による他は[illegible]融に依賴する狀態なりしことは、未刊[illegible]である。(上田)

●森本宋　「蠶絲業經濟發展史論前編」(生絲經濟研究第五輯、昭和五・五月、頁七五―一一四) 世界大戰開始に至る迄約五十年間生絲市況不振なることありしにも拘らず其間政府の救濟は勿論當業者の全國的對策すらも實行されなかつた。その主因は當業者の規模小く統制機關具はらず又盲進的工場擴張なく、從つて生產入荷數量少く繭絲價特に生產費低廉にして且つ官僚政府のため民間資本家の勢力が政治を動かすに至らなかつた事等である。然るに歐洲戰爭中、我國資本主義の大躍進と共に以上の諸條件が具備し當業者は自衞策として安値賣止、取引所市場に對する賣緊禁止、操短、出入荷制限を行つたが、此等を行ふ時は資本薄弱なる當業者は益々金融難に直面するから政府の財政的援助を仰ぐに至つた。かくして大正三年及九年の買收救濟と十五年昭和二年の共同保管貸付が行はれた。共同保管貸付は絲況の前途の不安を一掃し難き

のみならず更に其不安甚しき時は廉價にて賣却するを有利とする缺點を有し、買收救濟は財界非常の時政府の援助するに非ずんば實行し難い。そこで昭和二年農林省蠶絲委員會による蠶絲價安定施設となり補償限度三千萬圓の昭和四年絲價安定融資補償法となつて現れ、今年三月第一回の法發動を見たのである。此法律の批判は之を後稿に譲る。（上田）

●**井村薫雄**　「**支那紡績と綿製品貿易**」（東洋貿易研究、九七號、昭和五・七月、頁一三—二九）一昨年五月から一年余に亙つて日貨排斥が行はれ其機に乘じて支那紡績業は異常なる發展を示し、我國紡績業は一面英國業者の統一的進出と競爭し、他面支那紡績と競爭しなければならなかつた。然し支那紡績の大部分は日本人經營に屬し、銀價下落により日本の對支輸出が阻止されると共に我紡績業者は勞働條件の安き支那に向つて資本輸出を行ふこと〻なつた。かくて昨年末の在支紡績工場の狀勢は、

	日本人經營	支那人經營
精紡機	一四五四千錘	二二五六千錘
撚絲機	一六三千錘	六八千錘
織機	八九千臺	一五千臺

で、精紡機に於ては支那人所有のもの遙に日本人のそれを凌駕してゐるが、支那人紡績は多く二十番手以下の太絲なるに對し日本人紡績は細絲並に細布製造に中心を置くから其間自ら分業がある。されど日本人紡績が太絲より細絲へ粗布へ細布へ加工布へと進んだと同じ歩調で支那人紡績も迫りつゝあるから、やがて我との競爭が豫想し得る。（上田）

●「**日本綿工業の國際的地位**」（東洋貿易研究、九・六、昭和五・六月、頁一—一九）日本綿工業は紡錘數に於ては世界第七位にあるも棉花消費額に於ては英國を凌ぎ米國に次ぐ世界第二位に躍進し、製品も綿絲より生地綿布へ更に加工綿布へと進展した。從來海外市場の王座を占めてゐた英國綿工業は（一）國稅地方稅の負擔過重、（二）勞働者の團結强固による資本家の不利、（三）過小企業の多き等の内部的諸原因の外、大戰爭による經濟組織の混亂とその間における各國紡績業の發達殊に日本品の支那、印度、南洋への進出に災されることになつた。世界最大の綿布消費地たる印度に於ては英國輸出綿布は約半減したが是は印度に於ける自給力の增加もあるが、より以上に日本品の進出に原因する。爲に印度紡績業も今年四月綿布關稅引上、對英特惠を實行することゝなつた。是は同樣に他の諸國にも見られ我紡績業に關稅障壁、英國綿業の企業合同による合理化、新競爭國の出現に苦しまなければならなくなつた。（上田）

●**谷口吉彦**　「**京都市における米の小賣相場について**」（經濟論叢、三一・三、昭和五・九月、頁八四—一一二）現在京都市に行はる〻三種の小賣相場、即ち小賣商の聯合會が時々發表する標準小賣相場、小賣商が直接消費者に販賣する市内小賣相場、及公私設市場相場の實證的比較研究。何れも正米相場に店迄の運賃、精米賃料、搗減り、店より消費者迄の配達費等を加算して決定されるが、最も高位にあるは標準相場である。市内相場は前者に追隨すべきものなれども遙かに低位にあり公設相場はそれよりも更に低い。然し後の兩者は最近に於て

殆ど其差を見ない。此等相場は後半年に於て高位を示し變動の回數を增すが、日々變動する正米相場に比すれば年平均十四回變動する標準公設兩小賣相場は安定性を有するといへる。變動の關係は標準相場は公設相場に先走つて上昇し遲れて下降する。市內小賣相場は時期と程度に於て標準相場にリードされるが絕對的高さに於ては公設相場に牽制される。然し總てが正米市場に從ふ點においては同一である。（上田）

●ケネディ「日本に於る產業革命」(Kennedy, M.D. Industrial Revolution in Japan, Fortnightly Revi., Nov. 1929. pp. 636—647)

現代日本の政治・產業の指導者達の生涯の間に行はれた經濟的社會的變化に就て見るに日本人口は鎖國の崩壞以前二百五十年以上殆ど三千萬位に停滯してゐたが過去半世紀間に二倍となり現に年約百萬の割で增加してゐる。一八八〇年工場數僅か二百其勞働者千五百だつた日本は一九二七年には五萬の工場、勞働者百五十一萬を持つ。原料特に石炭鐵鑛の輸入により日本は單なる一消費國より他諸國と競爭する國家に轉形した。日本の多い雨量は石炭石油の代用として水力電氣の發展に充分な分野を提供した。歐洲大戰初頭急激な產業化の必要に迫られ多數の勞働者は農村から都市に吸收され、日本人天性の才能を利用して斯る短期間に不可能と思はるゝ產業化を實現した。一度斯した經路に乘り出した日本が其步みを戾し得ざりし四重要要因がある。（一）「既に生產力の水準は獲得され、其水準の維持に何等かの道が發見されねば、激しい打擊を受けたゞらう」、（二）「歐洲戰爭の敎訓は重要必要品の供給を他國に仰ぐ事の賢明ならざるを敎へた」、（三）「多數の日本移民は多くの國で歡迎されなかつたので過剩人口問題の解決方法として產業が有望な唯一の策たるを漸次認識した」、（四）「都市生活を味ひ工業勞働に轉じた者にとり地方に歸り平穩滿足に再び農業に落着く事は不可能だつた」。稠密な人口の生活の中に生じた此根本的な變革は貧民窟、失業。勞働爭議、其他の困難を齎した。一の重大な問題は家族生活の破壞である。（上田）

●マックグレゴアの「株式會社と危險負擔原因」(Macgregor, D. H. Joint Stock Companies and the Risk Factor, Economic Journal. Dec. 1929, pp. 491—503)

最近の產業合理化及び合同の傾向は危險負擔の要素の增加によるものなりや否やを決定する爲に株式會社破綻の歷史を調査した。英國では充分な記錄は一八八〇年より古くへは及ばない。併し五十年の期間は見得る譯だから一會社の「生涯」に近いものとして充分な永さをなし得る。一八八〇年に一一六二の會社が登記され、一九二九年七月迄其跡を辿り得る。其中二九六社は事業を開始せず、五四社は合同により消滅し、五社は官公當局に買上げられ、二七社は分類不明に屬し、六五四社は失敗、一二六社が此期間の終迄活動してゐる。事業を開始せぬ二九六社を加算すると否とにより、殘存社數は一一・七%又は一六・二%に當る。此事實から普通の會社生命は十五年から廿年位だと見積り得る。破綻に就いて見ると債務支拂不能により自ら解散したもの、一八七〇—七九年間三二%、一八八〇—九〇年間三五%、一八九六—一九〇五年間三五%、一九〇六—一三年間四

四%、一九二一年以後は約五〇%となつてゐる。存在社總數に對する解散社總數は一八八〇年代年平均六・五%から一九一五―一八年間の平均三%に減じた。投下資本平均額に對する損失資本平均額の率は一八九三―一九〇二年の間二・七%、一九〇三―一三年間二・三%である。之等の事實は比較的危險負擔の要因小さきを示す。但し多數の小會社を考慮に入れて考へねばならぬ。負擔する危險に對する報酬の率の不足する產業は其組織上何等かの合理化策を必要とする時代に到達せるもの、如くである。(下田)

●「米國に於ける勞働銀行運動」(Unsigned, Labour banking movement in the U.S., Monthly Labour Review, Dec. 1929, pp. 83―88) 勞働團體が勞働銀行を始むるに至つた主な理由は(一)事業上の理由(勞働組合基金の有利な投資や働業者利得の獲得)、(二)勞働運動の擁護、(三)勞働階級の潜勢的な大きな金融力の行使による勞働運動の進展、(四)預金利子の引上げや預金者利潤分配等勞働者に對する協同組合的役立ち、(五)組合優位の確保の希望や役員の個人的野心や競爭組合との張合ひ等の心理的原因である。最初の勞働銀行は一九二〇年五月開かれたマウントヴァーノン銀行である。一九二〇―二六年間は勞働銀行の實際の增大時代であつた。一九二六年三六行、預金總額一億八百萬弗に達した。其後漸減に轉じ一九二九年六月廿九日現在僅か二一行預金九千二百萬弗に止つた。勞働銀行の多數は勞働團體の支持薄く、無精合族意識的下於へ等が勞働銀行に對する關係組合組合員の態度をよく語る。勞働銀行特有の最大困難の一は人物問題で、此に關し過誤が行はれた。重役の多數は熟練せる銀行家でなく組合役員又は知名の人たるに止まつた。勞働銀行取締役會は主に勞働組合員より成り概して銀行の經營を助けず却つて妨げた。他の問題としては充分に多方面から預金を得るの困難、取引關係を作らうとして貧弱な取引を多く受入れ過ぎた事、取立や營業上費用等の支出及び無際な會談に重役の時間の使用等を理由とする無擔保對人信用による困難があつた。投資收益から見れば高々中位の成功に止まる。一九二一年勞働銀行配當は平均四・四%、一九二二年には六・一八%に上つたが、再轉二三年三・二二%二四年一・七六%となつた。以後一九二八年迄三%を超えぬ。金融的見地より見て勞働組合は少數の例を除き其勞働銀行へ投資した基金の收益で滿足すべくもなかつた。要之勞働銀行運動は「勞働」を「資本」に對し擁護すると同時に其攻擊の前に曝す事にも與つて大きかつた。一九二五年以來勞働銀行の傾向は協同組合的原則を離れ「普通銀行業務」に向きつゝある。(下田)

●ノッツ「代表的國際カルテル、コムバイン、トラスト」(Notz, William F. Representative international cartels, combines and trusts. U.S. Bureau, Foreign & Domestic Commerce, Trade Promotion Service #81, 1929 pp. 76) 國際カルテルは個人單獨企業又は組織された集團企業から作られる、或場合には國有又は國營企業もカルテルに協約の一員となる(例之佛獨加里カルテルの佛國政府)。國際カルテルの組織及運營の成功の爲には通常國內市場を國內カルテルの形に豫め組織して置く必要

がある。トラスト及マージャーに對比し、カルテルの組成員はカルテル協約が價格販賣區域生産其他につき制限を附する以外では技術事務に關する行動自由は勿論其個々の法律的獨立を保持する。若しカルテルが法律上の地位を獲得する必要ある時は本據を定め地方會社法の規定に依る。多くの國際カルテルは永久的統制本部を有たぬ。國際カルテルには五型式(一)地方的地區的カルテル(二)生産雇主カルテル(三)カルテル(四)販賣カルテル(五)特許カルテルがある。國際カルテルは今世紀の初以來多數に作られ始めた。大戰前には一一四存在すと知れてゐた。夫は主に歐洲大陸は際し大體單に國內カルテルの地域的擴大又は夫への併呑であつた。戰爭以來多數の既存カルテルは改造され新カルテルが組織された。經濟區劃は中歐では多く政治的限界を超えてゐた。一國で原料を生産する産業は隣接國家の加工產業と密接な關係を持つ。境界にある諸産業は共通の市場と勞働問題を持ち雇役交換で結ばれ各種相互利益を有ちカルテル組織の自然的背景を成す。緩い形の協定が最も實行的なるを實證した。國際カルテルの作用が圓滑を缺き短命に了つたのは協約に複雜な統制機關、技術的問題、一部組成員の不當な要求、他組成員の片務的犧牲、有力な不參加者のある場合、特に無限の海運放出線を有つ商品や團體訓練團體意識の不足の場合等である。技術的經濟的法律的困難に加へて偶然の政治的社會的心理的問題迄起る事がある。自由競爭の缺如により生活費の增加と獨占弊害の發生を怖れる公衆消費者の反對も亦國際カルテルの小さからぬ障碍である。加之國際協定の結果失業及勞働政策生活標準低下を見るべきを勞働者內で怖れる。最後に米國を含む諸國の政策は競爭制度を保持し其法律は產業商業を拘束する協約を禁止する。多くの國際カルテルが緩い結社の結束で組成されてゐるに對し、より高い程度の、或場合には獨占に近い、經濟的集中が一部の所謂國際コムバイン又はトラスト中に發見される。株式所有持株會社其他類似の方法により世界の諸地方の各種企業に亙つて有效な統制を實行し得る。此研究の主要部分は六個の例を論ずる。即ち其中の二、人絹カルテル、マッチコムバインは世界的規模の組織を代表し、アルミニューム、鋼、加里カルテル及び人造バタコムバインは主に歐洲生産者を代表する。(上田)

◉財　政　學

◉バチ「イタリーの財政政策」(Pro. Riccardo Bachi, Finanzpolitik, Wirtschaftsdienst, August 22. 1930 1464—1466) 財界の不況はイタリーの財政狀態を大分影響してゐる。一方歲入は減少の傾向を有し、特に國民の經濟生活と密接の關係にある收入の減少は著しい。然るに他方歲出にあつては社會的經費において增加の傾向を有してゐる。一九三〇—三一年度豫算においては追加豫算を除いて歲出百九十九億リラの中、國債費に四十九億リラ、戰爭による恩給年金に十九億五千六百萬リラ、文武の人件費に五十一億二千二百萬リラ、歲入取扱費に八億五千六百萬リラ、植民地補助に四億九千三百萬リラ、國防費に二十七億一千七百萬リラ、而て其他の諸經費の爲に三十六億五千萬リラが計上せられてゐる。該年度

の豫算はその歳出部において、前年度に比し七億七千三百萬リラの増加が豫想せられたに拘はらず、その歳入部においては前年度の百九十三億四千九百萬リラに比して七億七千八百萬リラの増收を計らねばならなかつた。其は一九二七年に、時のデフレーシヨン恐慌の最高潮期に當つて取引税や直接税系統の輕減を行つた結果がこゝに來たのも其の一因である。最近藏相マスコニは、收支の適合の爲に之れ以上節約は出來ぬと聲明した位であり、偶々本年度の豫算編成については歳入減に脅かされ、增税と税法の嚴格なる施行の已むなきに立至つた。それに選はれたものは賣買税の增徴、相續税の擴張等であつた。賣買税は從來不動産に限られたものが、一九二三年に動産特に奢侈品の賣買に課せらるゝことゝなり、税率二乃至三分であつたが、一九二七年一分に輕減せられ、それで收入は一九二九—三〇年度には四億五千萬リラを擧げてゐた。之を今度一分半税にした。相續税は一九二三年藏相ステフアニが近親者間の相續税を撤廢したが、今度之を回復し、唯被相續者に二人以上の子がある場合のみ免税をなし、——イタリアの人口政策と歩調を合せて——而して他は少しく課税することゝなり、之から九千萬リラ乃至一億リラを擧げる豫定。今年又六月實施の穀物關税引上は財政目的の外に保護目的を有するものとして注意を要する。

最後に國債については一九二七年八月から內債償還の法規はあつた、事實之は不實行に終りしもの、今度償還基金制度を設け、一ケ年二億六千萬リラを之に繰込み五十ケ年に五分利國債七百十五億リラを償還し盡す計畫——然も既償還國債利子を減額せずに新償還に繰込む方法を採つた。で、最高年五億リラを償還し得る場合もある由。——その實行の可否が將來問題になるであらう。(阿部)

◉**神戸正雄**「**法人配當源泉課税の長短**」(經濟論叢、三十一・三、昭和五・九月、頁一—二〇)法人配當金を第三種所得税において總合的に課税せる現行税制を改めて、謂ゆる源泉課税法にしようと云ふ實業界の要求を檢討せるもの。要求せられてゐる源泉課税を想定してその長所短所をば、各方面より、又財政學者の所見に注意を拂ひつゝ、比較考證せるところに特色がある。長所の諸點。經濟上においては法人企業投資を助長する數々の理由と、流通性に富む株券に對しては人的主觀的の課税よりも物的客觀的課税の方が株券の性質によく適應せる點を擧ぐ。課税技術上においては源泉課税法が配當を捕捉し易く、從つて徴税費少く、且つ課税物件の範圍の擴大が考へられてゐる。財政上においては收入の大と確實が數へられ、更に若干の長所が公平課税上にある事が指示される。但し源泉課税の短所が所得と所得税の性質から、又公平課税の上から、更に經濟上、課税技術上、社會政策上、行政關係上から指摘せられてゐる。而して概して云へば「源泉課税」は「公平課税上に重大なる短所を持ち、所得税の本來の性質に合はぬ」。だが「重大長所もあるから絶對に之を否定することは出來ない。」(阿部)

◆人口論及人口問題

◉**高田保馬**「**食糧問題の社會性**」(經濟史研究、七、昭和五・五、頁一七二—一八七)人口問

題は人口とすべての生活資料との釣合の問題であるが、食糧問題は人口と生活資料中たゞ食糧のみとの釣合の問題である。人口問題と同じく食糧問題も社會的制約の下に立つ。酵母食糧の工業的生産は技術的に可能なりとしても現在の高き生産費を以てしては酵母食糧に對して大なる需要を生ぜざるべく從つて生産もせられないであらう。日本の食糧問題は米の自給の問題に歸著するが、生活標準の高まるごとに米に對する需要は増し、從つて食糧問題解決の困難は加はる。反之生活標準低下の傾向さへ強く現はるゝならば何等の政策を待たずして水の低きにつくが如く容易且つ自然に解決せられるであらう。(矢内原)

●滿鐵調査課　「民國拾八年滿洲出稼移民移動狀況」(滿鐵調査資料、一三〇、昭和五・五月)民國拾八年(昭和四年)の入滿移民數は推計百八萬人にして昭和三年度百二十餘萬人同二年度百十餘萬人に比して減少したが、其減少額は豫想を裏切つて僅少に過ぎなかつた。併し其内容には可成りの變化が認められる。第一に海路入滿者の仕出地別に於て青島乘船者が減少し芝罘及龍口乘船者が増加した。第二に陸路北寧線及營口經由入滿者中約十二萬人の河南省避難民の新參加があつた。第三に到着後の移動に於て比較的僻遠地を避くる傾向が見られた。第四に歸還數が増加した。第五に販賣市場が愈々開拓事業に要下した。要するに内亂が口火となつて激増した移民數は容易に減ぜざるべき形勢にあり、且つ排外熱の旺盛なる折柄支那政府をして滿蒙に於ける外國勢力との角逐を人口數に依つて解決せんとの新戰法を自覺せしめた形となつて、滿洲に對する支那の植民は經濟的政治的軍事的に一層の重要性を増加したと見られる。(矢内原)

●善生永助　「朝鮮人の内地渡航」(外交時報、六〇七、昭和五・五・一五、頁一七三—一七七)朝鮮人の内地渡航は大正四年後激増し、昭和三年には渡航者一六六、一八六人、歸還者一一七、五六三人、内地在住人口二一三、六二七人、府縣別にすれば大阪府の四五、一三三人、を最多とし青森縣の一六九人を最少として各府縣に普ねく散在する。大部分は土工、坑夫等で賃銀は内地人より二割位低廉だが、力役に從事する者は大差ない。規則を設けてその内地渡航を禁止若くは制限すべきでなく、朝鮮内に於て彼等に適當なる生業を與へ生活を安定向上せしむることが最も急務である。(矢内原)

◆植民政策及植民地事情

●矢内原忠雄　「植民地國民運動と英帝國の將來」(改造一二・四、昭和五・四月、頁一二—二六)英帝國各部分は地理的に分散し政治的に遠心的であり、その遠心的傾向は大戰後益々著しくなつた。このことは米帝國主要領域の集中的求心的たると對照して、世界勢力としての英米二國の地位を相異せしめる。今政治的理由に基き英帝國の構成分子を本國、自治領、印度、埃及及び近東、直轄植民地の五類に分ち、戰後に於ける英帝國の趨勢を論じやう。英本國は愛蘭自由國の成立によりて益々小となつた。自治領は内政のみならず外交軍事の自主權をも獲得した。印度は少くとも完全なる自治領の地位を獲得する迄は、その國民

運動を止めないであらう。埃及及び近東の民族運動は英帝國よりの分離なる形式を以て解決せられつゝある。直轄植民地の民族運動は未だ發展せず從つて尙未だ英國資本の完全なる搾取舞臺たるものであるが、その經濟價値の開發の爲めには巨大なる財政的支出を要する。大戰後英國は帝國市場を重要視し英帝國の統一結合に益々苦心を拂ふに至り、統一帝國黨の成立の如きもその一表現であるが、その理想とする帝國關稅政策は自治領及印度の遠心的傾向と相容れず從つて實現可能性に乏しきものである。（矢内原）

●**ボンネ「パレスチナの社會・經濟的變化」**(Bonné, A. Die sozial-ökonimischen Strukturwandlungen in Palästina für Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik. 63. Bd. 2. Heft. April 1930) ユダヤ人のパレスチナ移住者は當初の豫想ほどに多數でないが、それにしても一九一九年の在住人口五萬五千人總人口の九・四%が一九二八年には十六萬八千人、總人口の二一・一%に増した。その結果は都市の發達、物價及勞銀の騰貴、生活及經濟の近代化等々。ユダヤ人のパレスチナ植民はその動機が單なる資本家的搾取に存せず又その目的が政府と一體たらざる點に於て一般の植民地と異る特質を示す。（矢内原）

政治學及法律學

◆政治學及法律學の一般理論

●**天川信雄「ジュリウの政治思想」**（早稻田政治經濟學雜誌、一八、頁三五―八〇、一九號、頁九五―一三五）ジュリツは Rousseau の社會契約論の先驅者である。彼は新敎徒として Louis 十四世の專恣的權力に反對し、佛國を古代の自由な狀態に戾さうとした。國王の權力は人民の主權に基くとして神政的學說の Bossuet を駁した。先づ人民と國王との服從契約の歷史的論證を試み眞正な君主政體は人民の共同選擧によるものとし、次で國王の權利、所謂主權に付、限界を論じた。三權分立を認めぬ專制的權力は是認するが主權契約で人民が主權の一部を留保した時は勿論、留保しない時でも人民が主權を回復する爲の反抗權は當然認められ、契約が違反しない君主の命令には服從の要なきものとする。即、國家に先在し優先する自然的權利を認める點で個人主義の誤謬に陷つてゐる。人民の權利は絕對無制約なものとした點で Locke と異る。Rousseau が個人の自由を唱へつゝ、共同自我を拘束し得る根本法を認めず從て國家が必要とする時は公民の自然權をも廢止し得とし、又、主權、國民の意思は讓渡不能であるから團結契約のみを認めたのに異るが佛革命後の諸憲法で人民主權が認められたのは彼の影響である。尙彼が人民は自ら好む政府の選定を得るとしながら主として君主政體を批判し殊に佛王の專恣的權力を否認する論證を加へたのは彼の直面した政治事情に基く。（美濃部）

●**クラウス「聖オーガスチンの政治學說」**（國家學會雜誌四四・九、昭和五・九月附錄、頁一―三一）オーガスチンの說を知る上に道標となるべき三點がある。その思想が年と共に進展せる事その學說は主として神學的なる事 (Civitas Dei, (Civitas terrena) は多くの學者の云ふ如く現實の敎會國家を指すものではな

い」及びその著は主として抗辯的なる事である。オーガスチンがキケロの國家の定義中より正義の觀念を排斥したのを見て、彼は唯理想のみを重んじ地上の國家を罪の醜惡の所產と鑑み之に關心を持たなかつたとするは當らない。何故なれば彼の所謂正義は普通の意味とは異り愛(Caritas)と同義の絕對的な觀念であつて legality よりもむしろ morality に屬すべきものであつたからである。彼が地上の國家に就て此の絕對的なる正義の存在を否定したのは當然であつて、相對的な legality の意味の正義は彼も亦否定しなかつた。彼は現實に關心を持たなかつたどころか或意味では羅馬國家の愛國者でもあつたのである。唯彼は正義を上の如く絕對的なものと考へた故之を現實の國家に否定せなければならなかつたけれども而もプラトーと異り此不完全な地上の國家も亦何日か愛の力に依つて理想國家の域に進むべき樂觀的希望を失はなかつた。(美濃部)

●ディキンソン「社會秩序と政治的權威」(Dickinson, G., Social Order and Political Authority, The American Political Science Review, May, 1929, pp. 293—328. August, 1929, pp. 593—632) 本編の目的は、社會統制の一機構としての政治的權威を主として、社會學的發生的方法に於いて、社會統制の他の諸機構と比較し及び此等との關係を研究することにより、その本質の理解に資せんとするにある。社會統制の機構としては、先づ慣習と、倫理的若くは經濟的動機に基く利益衝突の意識的自發的調節とがあるが、この二者を補充するものとして、權威ある集團機關の統制的活動がある。この權威の中心は、一單位としての集團活動のための組織經營の機關として發生したが、漸次個人的利益衝突の統制權を獲得したもので、その決定の先例化したものが即ち法であつた。集團が擴大と分化との過程を通してより大なる地域社會に發展すると、そこには數多の集團の並存と同時に權威の集團的中心の多數存在が現出するが、これらの權威の諸中心が層次的統一を爲すときその最高の權威を「政治的權威」と云ふ。政治的權威は、當然、自己と他の權威の關係を規定する權能を有し、實力による統制——近時その重要性が輕視されてゐる——を特徵とはするがその社會統制の機能が最も能率的に行はれるのは、一般大衆の支持を受けるが如く行動する場合である。代議制と多數決制とは政治的權威と社會秩序との融和を計る機構であり、政治的權威に頑强に反抗する小數者の存在は病理學的現象である。政治的權威の基礎は民衆の服從的總意にある。(蠟山)

●牧野英一「法律に於ける價値の論理」(法學志林、三二・九、昭和五・九月、頁八三—九〇)論理を單に論理そのものとして論ずる「形式の論理」に對して、「價値の論理」は道理の上に組立てられた論理、道理と論理の結合である。法律は論理的に構成されてゐると言はれるが、道理の礎石を缺く時は單なる空中樓閣に過ぎぬ。法律上の問題の解決に當つては、異れる二個の斷案が二つながら論理的たるの故を以て二つながら許さるゝことはない。第一に法律は吾人の生活關係に妥當な規範を與へねばならず、第二に事物の法律的考察に於てはそこに既に法律と言ふ内容が與へられる

ことになるのである。かくして法律的論理は純正に形式的たり得ず一方法律的な價値を論理的に展開するものでなければならぬと同時に、他方その論理に因つて又法律的な價値が探究されねばならぬ。道理の第一の形であつたタブーより現代の社會連帶の思想に至るまで、その價値と言ひ道理と言ひ畢竟一の神祕である。時代より時代へ思想は更に論理的に醇化され、更に文化的に止揚され、更に高次のものたらしめられるであらう。自由法論の立場に立つて吾人は思想の展開を重ねつゝ常に自由に批判し、かるが故に更に高次の醇化を試みるのである。かくして礎石の固きが得られ、礎石の固きが故にその上に構成の大なる發揚を成し得るのである。（高柳）

◉政治學及政治問題

●**吉野作造**「**統帥權問題の正體**」（中央公論、四五・六、昭和五・六月、頁一五〇—一六八）「**統帥權の獨立と帷幄上奏**」（同上、四五・七、昭和五・七月、頁一二九—一四〇）ロンドン條約に關する統帥權問題及陸相文官事務管理問題等を機としてもつれた政府と軍部の間にた解決すべき制度上明確な規準がない。その錯雜せる諸關係、殊に軍部の特權とその濫用等は、凡て唯從來の慣行に基因する。本來國務に一貫せる統一あるべきは現代政治の根本原理なれば、之を機とし「政府權限範圍の普遍」原則を確立するを要す。そのためには軍部大臣文官任用制採用、帷幄上奏制廢止、軍令廢止を可とす。その代り政府監督の下に統帥事項諮問機關を置くを要し、又必要あらば、大正三年防務會議の如き特別諮問機關を設くるも可なり。若しこれらの實現困難ならば、少くとも統帥事項に政府が完全に參與し、軍令の內容を嚴密に統帥事項に限局するための軍令審査權を政府に收め、且帷幄上奏の範圍を純然たる軍內部の事項にのみ止らしむる樣改革することを要する。（蠟山）

●**五來欣造**「**統帥權問題の政治學的考察**」（早稻田政治經濟學雜誌、第十八號昭和五・六月、頁一九—三三）統帥權問題は本來は憲法上の解決問題なれど、之を政策論的に見れば、統帥權獨立論は天皇親政の國體を擁護せんとの趣旨に出でて、實は却て天皇の神聖を犯し皇室を危うくするの虞あるなり。統帥權の完全なる獨立と皇帝への直屬が原因となつて却て皇室を滅亡せしむるに至りしプロシアの歷史は正にその立證なり。皇室の安泰と國民經濟力とを顧慮せば、統帥權そのものをも國務大臣の責任となすを有利とする。（蠟山）

●**永井亨**「**公企業に於ける勞働問題**」（都市問題・昭和五・六月）本論文は始めに資本制の意義を明かにせんとして、企業の經營目的が營利的であり、その經營方法が獨裁的である點に特徵を求めてゐる。我國の公企業は、その經營關係多岐に亘つてゐるが、何れもその動機が社會主義的とは言ひ難く、公共團體が主體たりと云ふは、右に擧げるが如き資本制的企業たるを妨げない。然らば公企業と私企業の區別は何處に求められてゐるかと云ふに單に主體の性質の區別に依つてゐる丈けで、そこに本質上の相違がない。然るに自治體は國家機關との關係上その經營する公企業には社會的目的と民主的統制とが要求される。ただ事業として現在の自治體の管理統制の機關が

非民主的である爲め、その經營目的が消費者の利益や從業員の福祉を念とするに至つてゐない。そこで、公企業に於ける勞働問題を解決するには、自治體を民主化し、其企業經營に組合の「代議統制」を認め、「責任管理」を行はしむる必要がある。さうすれば、其爭議には「自主的調停」が行はれるやうになる。この進展過程によつて問題は解決される。（蠟山）

●渡部宗太郞「地方自治の本質」（途中改題「地方自治の本質に關する二學說の研究」（法學論叢三卷、三五一—三八三、六六七—七〇一、八七七—八九七）自治行政の概念はその主體たる團體と上位權力たる國家團體との間の或る關係を基底としてのみ存在し得る。この地方團體の獨立作用と國家の牽制作用との相互に反對の方向に働く二作用の相接涉する關係が地方自治の本質の問題である。地方自治の本質に關する學說は大體二に分れる。一は獨立說といひ、地方團體の固有の人格と固有の政治的支配權とを認め、他は受託說といひ、地方團體の行使する政治的支配權は國家の委託に依るものなりとす。後者は更に分れて、一は純受託說といひ、地方自治行政を國家行政の爲めの國家機關との計畫的協力作用なりと解し、他は準獨立說といひ、地方團體は國家に對して委託せられたる支配權を行使して自己固有の生存發達を遂ぐべきものなりとす。惟ふに獨立說は現代法の趨ふべき趨勢を指導せんとする政策論としてのみ價値を有し、純受託說は自治制度そのものを否定するの結果を免れず、共に地方自治の本質に關する解釋法論たり得ない。現代法に立脚する以上、地方團體が國家團體に內在し國家と上下の階級關係に立つてその構成部分をなし從つてその使命は國家使命と背馳せざることを要する。結局地方自治とは土地に據る隣接居住關係を基礎とする國家內の團體が國家の委託に依り、而も或る程度に於て國家意思から獨立して地方的政治作用を行ふをいひ、ここに地方團體の政治作用に對する國家權力の監督の根據が與へられ、且つその性質の解決が導かれる。（美濃部）

●ボルネマン「小選擧區制と比例選擧制」（C.H.Bornemann, Einzelwahlkreis und Proporz. Zeitschrift für Politik. April 1930.）

●エルドマンスデルファー「自働式計算法」（H.G. Erdmannsdörffer, Das automatische System. ibid. Juni.）

●ホイス「比例選擧制と議會主義」（T.Heuss, Verhältniswahl und Parlamentarismus.ibid, August.）

●テクレンブルゲ「選擧法問題」（A. Tecklenburg, Das Problem des Reichstagswahlrechts. ibid. August.）

この四論文は獨逸選擧法改正問題を中心に相關聯せるものである。一、（ボルネマン）選擧法改正の核心は如何に比例選擧制と小選擧區制とを結合せしむるかにある。現行制の弊害は主にその一體的投票用紙と自働式計算法に基因する。故に何よりも自働式を廢すべし。余は玆に一の彈力的計算法を提案する。卽ち議員の約半數は小選擧區制により、他の約半數は全國の投票に據りて各黨に比例せしむる方法。（其組織及計算方法を詳述す）。二、（エルドマンスデルファー）ボルネマンが比例選擧制と小選擧區制の結合に着眼せるは正當だが、自

働式を験せよと云ふは誤りだ。之位簡單にして完全なる計算方法はない。弊害は名簿制と選擧全過程の非人格性とに在る。故に自働式比例選擧方法は之を維持し、名簿制を廢して個人的候補制を採るべし。三、(ホイス)選擧法の問題は前二者の考ふる如き數學的計算技術の問題に非ずして政策問題なり。議會主義は多數者による權力的決定を要求する。比例選擧制は少數者の權力的又は無權力的保護の欲求に過ぎぬ。政治を非感性化機械化せしむる比例選擧制を廢して、小選擧區個人代表制へ復歸すべし。四、(テクレンブルグ)選擧法に對する根本的態度についてはホイスを正當とす。數學的計算の意義は具體的目的に從屬する。選擧法の最重要點は選擧人がその投票の直接的效果を目前に見得ることに在る。その爲には計算の正確を犧牲とするも可なり。現在適當の改革方法は全國を中位の選擧區に分ち、其内部には一種の比例制を認むるも各區の決定を以て最終局とするに在る。(蠟山)

◆公　法

●イザイ「カルテル立法の發展」(Fr. Isay: Die Entwicklung d. deutschen u. ausländischen Kartellgesetzgebungen. Ztschr. f. Ausländisches u. Internationales Privatrecht. 4—1, 1930) 産業部門のカルテル化は、一面規則ある統制をもたらすが、他面、獨占と其れに由來する橫暴と云ふ不利益が附隨する。この兩者の間に立ち、國家が如何なる態度を採つたかを歷史的に、比較法的に考へよう。(1)カルテルの歷史は資本主義と其の始を同じくし、一四七〇年の頃、伊太利に現れたのが最初であらう。しかし、この時代の敎會法が商取引的利潤に對して反感を持つて居た事と、嚴重な規律を要求する封建國家が一階級の内部に大きな懸隔を來すことを好まなかつたため、一般に禁壓的方針を採つた。重商主義時代には之と反對に、國富の增加のためには、統制と秩序のある生産組織が必要であるとの見解から、禁壓主義は捨てられ鑛山業のような主要産業には强制的にカルテルを組織させ之に種々の特權を附與し其の發達をはかると同時に國内に向つて其の特權を濫用することは嚴重に禁壓した。(2)自由主義時代に入れば、營業自由や契約のような個人の意志と自由を制限するものは取り去られることになつた。米國に於てトラスト禁止法が出現したのも、トラストの暴利を不當としたのではなく、トラストの出現は自由競爭の精神を害するとしたためである。佛刑法四一九條が物價吊上げの目的を以てする團結を罰するのも、ナポレオン戰爭當時の大陸封鎖の必要から來ただけであつて、其の必要の消滅と共に裁判所も强行せぬこととなつた。ロシアは一八八五年の刑法で佛刑法を繼受したが、これも國内交通の不便な爲容易に地方的獨占を惹起し得ると云ふ特殊事情から來たのであるに過ぎぬ。(3)一八七三年の不況以來大陸には又反動的に重商主義政策復活の傾向が見えた。大戰當時物資供給の必要上强制カルテル政策が採られたが、之は戰後に於ても社會主義の確立と統制經濟によつて引き續き行はれた。そして今日も商行政、商工業に繼續されるのである。伊・佛・チエコ等も之にならつた。(4)然るに戰後の無秩序なマルク相場の下落の結果

カルテルが不當な利潤を上げて居るように感じられたのと、ロシアの社會主義の失敗とのためカルテル政策の再轉換を來たし、強制カルテルは解かれ、カルテルの國民生活を脅かす樣な行爲に對して國家の行政的な監督が加へられることになつた。濠・加・丁・ノールウエー等に於てもカルテル團結は制限されることとなつた。（穂積）

◆私　法

●**仁井田陞「古代支那・日本の土地私有制」**（國家學會雜誌、四三・一二、四四・二・七・八號、昭和四・一二昭和五・二、七、八月號）所有權概念も又歷史の所產である。我々の有する所有權が絕體的無限的なりとしても之のみを以て所有權の絕體的定義となすを得ない。過去の所有權が期間に於て處分の權限に於て制限を受けて居たからとて、直に以て所有權では無く他の異つたカテゴリーに入るとなすは早計である。斯る考よりするならば、古代支那日本に班田の制度の行はれた外觀のみを見て、土地公有制が行はれたとすることも又早計であると云はねばならぬ。例へばイスラエル古法は私有地は神から託されたものとの觀念から其處分に制限を設けた。卽其制限は「私有」を前提とするのであつて、同樣な事が支那・日本に於ても云ひ得るものと思ふ。⑴古代支那に於て井田の法と稱する班田制度が行はれたと云ふのが通說であるが、この點に關する文獻上の根據は明でない。周末秦の商鞅が井田を除いたと云ふ事も疑はしいのであつて、彼が井田の破壞者であるとは班固に依れば前漢の董仲舒によつて述べられたに始まり、史記には何等かゝる記載は存在せず唯彼が稅制を改革したことが推測されるに過ぎぬのである。而も周代に於てはもはや定着農耕が行はれ、土地を基礎とする封建制度も建設せられたのであつて、かゝる社會狀態よりするも私有觀念の不存在を主張するのは正しくない。下つて漢晉に至れば私有は益々發展して其の弊が多くなつたので、種々の制限策が行はれた。王莽の政策は最も著しく、天下の土地を王田と稱し賣買や制限以上の土地の私有やを禁じた。しかし之も制限的私有權を認めて居るのであつて公有と解すべきではない。唐に至つても、土地の班給と其の土地の處分の制限は續けられた。しかし根本觀念に於て變動はないのである。⑵吾國に於ても土地私有觀は『賜道臣命宅地』（日本紀）と云つたような種々の記載によつて推定することが出來る。吉田博士は水口祭を以て水田班給の根據とされるが、水口祭は『水を引く口』を祭るに止り、それ以上の交涉は考へられぬ。斯る狀態に於て唐の班田制度が輸入されたのであるが吾國の制度は唐制に比し甚だ複雜であるを以て特色とする。有田教授は口分田を以て、管理處分權は天皇に、使用收益權は家族共產體をなす戶に屬する分割所有權であると說明せられるが、口分田の權利主體は戶ではなく戶內の戶口であつて、分割所有權ではなく、種々の程度の異つた制限の附せられた制限的所有權であつたのである。（穂積）

◆國際法及國際政治

●**松原一雄「內亂暴動の國際性」**（國家學會雜誌、四四・九、昭和五・九月、頁一一—一八）

一國の内亂暴動は二箇の方面より國際性を有するに至る。第一に當該國の國際責任問題を通じて。即ち内亂暴動に際し、官憲が事前に之を防止するに於て「適當なる注意」を爲さゞる場合、又事後に被害者に對する國内的救濟を與へざる場合には國家の國際的責任を生ずるのである。本來秩序を缺く所の國家は不可抗力の抗辯によつて責任解除を求むることを得ず、又司法制度の完備せざる國家はその不備を理由として國際責任を免れ得ない。國家の責任は茲に「國際標準」の制限を受けるのである。第二に當該國内在留の外國人所屬國政府の臣民保護問題を通じて。在留外國人保護義務と表裏して在外臣民保護權存し内亂暴動が元來一國の内事たるに拘らず、被害者所屬國は前述の場合前述の標準により加害國に對して國際責任を問ひ得るのである。在外臣民保護權が干渉と呼ばるゝと否を問はず、右保護權は否定若は不法視せられ得ない。慢性的革命國に對する臣民保護權行使に關し米國のカリベアン政策に就て見るに學者は多く干渉政策少くとも單獨干渉に反對して居るが、實際家はカリベアン諸邦の特殊事情に顧み止むを得ずとなすのみならず更に豫防的干渉をも是認せんとし、不戰條約に於ても保護權行使は留保されてゐる。之は聯盟規約乃至一般國際法規の統制完からざる重大問題であり、單獨干渉、共同干渉、國際管理、委任統治等の可否は深き研究を要する所である。（高柳）

●**猪谷善一　「日本經濟の世界化と其の諸問題」**（國際知識、一〇・九、昭和五・九月、頁二八―三七）日本經濟の世界化は既定の事實となり、世界的經濟恐慌と日本恐慌との間に有機的關聯の存することは學者政治家の間に認識せらるゝに至つた。然るに、從來の國際的經濟會議を見るに、一九二七年の世界經濟會議は實質に於て戰後の經濟界の行詰りの打開を問題とするものに過ぎず、今春の關稅休日會議に至つては其の歐洲的性質頗る鮮明、日本は折角正式に列席しつゝ故無き沈默を守るに終つた。我政府の態度は不徹底消極的で、國民も亦無關心である。今や北米合衆國南米聯邦歐洲聯邦大英同盟勞農聯邦等成立し或は成立せんとし、之等諸聯邦の對峙衝突は更に聯邦間の聯盟を必要とするに至るであらう。日本は諸聯邦の何れよりも取り殘されたる孤立國の悲境に陷ることを避け、新しき意義に於ける國際主義の上に立つて將來の發展を期せねばならぬ。歐洲聯盟成立の曉には、經濟上より言へば經濟的勢力としての歐洲聯盟を現在の國際聯盟より控除すれば殘る所皆無である。日本政府が世界化せられたる日本經濟を認識し所謂經濟外交主義の上に立つて活動せんとするならば、かゝる國際聯盟にのみ加入し居るは無意義であり、進んで歐洲聯盟に參加する必要がある。又關稅休日會議の如き世界的經濟會議は大に利用して日本の經濟的要求を世界に發表し、歐洲モンロー主義の誤謬を指摘すべきである。日本と歐洲との經濟的關係の重要性は本國と日本との關係のみならず、其の東洋に於ける植民地と日本との關係を考察すれば明瞭となるであらう。歐洲聯盟に加入したる日本の義務は、是等の弱小民族の經濟的解放を要求し且又歐洲聯盟の差別的排他的精神を統制するとでなければならぬ（高木）

●**クイグレイ　「海洋自由說は陳腐なりや」**

(Quigley, Harold S. Is the doctrine of the freedom of the seas obsolete? Current Hist. 31—1, Oct. 1929, pp. 53—57) 一八五六年の巴里宣言は久しく海洋に於ける中立者の權利の傳統的原則であつた。併し戰時禁制品なる語の意味を定義する交戰國の權利の留保及び封鎖に關する交戰者の權利の漸的擴張は此の宣言を無價値ならしめた。「海洋自由論」は一の「陳腐な合言葉」と化し終つた。海洋自由に關する英米の關係の改良の爲には、或は國際聯盟がその規約を改正せねばならず然らざれば米國が平時にも戰時にも國際聯盟と協力する道を見出さねばならぬ。(高柳)

●**カテラニ　「海洋の自由に就て」**(Catellani, Enrico. La libertà del mare. Nuova Antologia. 264—1369, April 1929, pp. 371—384)

ウイルソン大統領による平時並に戰時に於る海洋自由の提唱は不必要の如くである。何者、平時に於る自由は國際法上自明の理となり戰時に於る自由は實現不可能と思はれるから。併し乍ら海洋自由は平時に於てすら單に優勢なる海軍力を保有する大強國の寛容に依存してゐるのである。完全なる自由は軍備制限並びに商業及び交通の國際的制限及び統制と提携せねばならぬ。中立者及び交戰者に對する行爲の規則は過般の戰爭に於る破壞的慣行により一掃されたる後に回復されねばならぬ。軍備の制限は優勢力が貿易及び交通に關する將來の規則を無視する危險を除去し眞に國際的管理を可能ならしめるであらう。(高柳)

●**ポリティス　「巴里不戰條約と軍縮問題」**(Politis, Nicolas. Le Pacte de Paris et le problème du désarmement. Esprit Intern. 3—12, Oct. 1929, pp. 530—541)　ゼネバ議定書は明確に軍縮問題に於ける三要素——仲裁々判安全保障及び軍備縮少を其の相互關係に於て取扱つたのであつた。其の失敗は是等三方面の總てに於て同一歩の進步が爲されねばならぬことを證明した。其の後に於ける發達の割合は各領域に就て同じではなかつた。仲裁々判に就ては長足の進步が爲され、安全保障に就ては殆んど見るべきものなく、而して軍備縮少に至つては皆無であつたが、遂に一九二九年四月の準備委員會に於て、爾後軍縮問題は巴里(不戰)條約との關聯に於て考究さるべきであるとのギブソンの宣言が爲され該條約の齎した安全保障によつて軍縮問題の解決が遂に促進せられたことを示すに至つた。併しながら、若し巴里條約が米國或は國際聯盟より來ることあるべき何等かの保證を含んでゐたならば、此の安全は遙に大きかつたであらう。然し戰爭が巴里條約を犯して行はるる場合に連署國たる米國が中立を維持することはあり得ないと思はれる。國際聯盟の側では聯盟規約と巴里條約との兩者の規定を相依り相扶けしむることにより巴里條約に存する戰爭への抜け路を塞ぎ同條約の有效性に貢獻することが出來るのである。而して此のことたるや既に聯盟に於て熟慮中の事柄である。(高木)

●**バルテルミー　「歐羅巴合衆國論」**(Barthélemy, Joseph. Etats-Unis d' Europe Rev. Pol. et Parl. 140—418, Sep. 1929, pp. 329—345) クーデンホーフェ・カレルギー等の汎歐羅巴の思想がブリアンに依て提唱せらるゝに至つて、思想家の夢は茲に政治家の計畫となつ

た。ブリアンは如何なる紛爭に對しても直に之を討議すべき方法を供與することにより歐洲の利害關係國間に於ける永遠の接觸國交の可能性を保證せんとする。バルテルミーによれば、歐洲を斯の如き永久的外交組織に結合する場合には英國の地位の問題を解決すること困難である。露國の缺けたる聯邦は不具と云へよう。而して歐洲諸國の歐洲外植民地の包含に就ては如何にすべきであるか。此の聯邦が何れの國をも假想の敵國とするものでないとはブリアンの公言する所である。歐洲が一七八七年に於けるアメリカ植民地の如くに結合され得るとの思想は強く否定されて居る。蓋し今日の歐洲には諸種の特殊的文化集團が存し是等は破壞されるよりも寧ろ保護さるべきである。歐洲の經濟的連帶は既に大なるものがあるが、尖は關稅障壁の低下其の他の方法により更に增進されねばならぬ。然らざれば歐洲は尙一層米國の經濟的支配に屈從するに至るであらう。此の如き歐洲聯邦に依て多くの革命的轉化の生ずべきことは疑無き所であるが其の進展は徐々たるべく幾多の難問は倶面に解決されねばならぬ。併し此の思想は平和を目指すものであり、其の部分的實現からさへも多くの福利が齎さるゝであらう。（高木）

社會學

●**秋葉隆**　**「性の禁忌と其解放」**（社會學雜誌七〇、昭和五・二月、頁一—二四）著者は材料を朝鮮に取る。朝鮮に於ては男女間の性的關係が古來より甚だ嚴重であつた事を氏は諸々の事例に就いて實證する。而して斯る性の禁忌は儒教の影響に因るものとする從來の見解に反對して、著者は朝鮮固有の親族名稱によつて、古來から性的禁忌が行はれてゐた事を證明せんと企圖してゐる。尙他方には朝鮮では男女間に大膽なる性的解放が例へば舞踏・村祭などに行はれてゐる。氏は進んで此等の性の禁忌と性の開放との文化的意義を考察する。性の禁忌は人間性慾の自然的本能を抑制する事を意味するが故に、是れは所謂文化と見做す事が出來る。然るに過度な制慾は社會生活にとつて甚だ危險であるから、こゝに過度な制慾からの開放が社會生活上必要となつてくる。禁忌が自然を抑制する文化であるに對して開放は餘りに自然を抑制し過ぎたるを引き直す謂はゞ自然に順應する文化である。氏はかくの如く性の禁忌とその開放との文化的意義從つて此等の社會的機能を說明してゐる。（戶田）

●**安藤喜一郎**　**「高峯の家族と社會」**（社會學雜誌、七二、昭和五・四月、頁一—一七）臺灣の高峰中に生活するブヌン族とタイヤール族はその家族竝びに社會形態に於て頗る異なつてゐる。卽ちブヌン族は高峰聳立の間に狩獵生活をなし、傍ら嶮峻な土地を耕作する。此の如き自然との鬪爭生活は必然的に彼等をして人間情愛の最も強く且永續的な血緣社會卽ち大家族制度を成立せしめる。彼等の婚姻には家長が勞働力多き女を選擇して結婚せしめる。又家長權を確立する爲に性關係を嚴重に取締る。彼等が他國人を歡迎するのも畢竟彼等の家族成員に加へて家族の勞働力を增さんが爲めである。然るにタイヤール族は緩かな山岳斜面の耕作地に住み豐富な資糧を收穫するから大家族を作る必要なく隨つて小家族の各

家屋が密集し所謂地緣社會を成してゐる。而して此等の各社會は相互に爭闘して武力團體を形成してゐる。女性は大膽にも自由に結婚する。且此處では客人の歡待は彼との性愛を目的として行はれる。要するに著者は如上社會形態の相違は生産事情のそれぐの段階に應ずると結論してゐる。(戸田)

●ヘバーレ「社會誌學」(Heberle, Rudolf, Soziographie. Schmollers Jahrb. 53(6), 1929: 995—1014.) 此論文はヘバーレが社會誌學の方法論一般を概述した論攷である。氏は社會誌學を一科の獨立した新科學とは考へない。氏は社會誌學を人間結合形式の學たる一般社會學の一部門を構成してゐる科學であると理解してゐる。テンニースが社會學を純正即ち理論社會學、應用社會學、經驗社會學の三門に分つたがヘバーレはスタインメッツやテンニース等の先蹤に一致して社會誌學を經驗社會學の内に納入した。

社會誌學の特徴は方法論的には社會事實の歸納學であり從つて先づ記述學の特性を持つてゐるところに在る。併し尙進んで原因の決定從つて又法則の發見をば決してゆるがせにしてはゐない。尙社會誌學は人種學と人口學との一部門を持つてゐる事を主張する。最後に社會誌學と純正社會學との多くの聯關の中で最も重要なる關係側面は社會統計と社會學との密接な結合に於て視られると言ふ(戸田)

●アーベル「文化社會學は可能なりや」(Abel, Theodore. Is a cultural sociology possible?—Amer. J. Sociol. 35(5). Mar. 1930: 739—752.) 近時顯著な勢を以つて企圖されつゝある文化社會學に對して之が樹立を根本的に否定せんとする試論がアーベルの此論文である。文化社會學が據つて以つて樹立せられる可能の道が四ある樣に見える。(一)文化の研究が一新科學を樹立する、(二)文化の學的作業は即ち人間行動を充分に説明する、(三)文化現象は超個人的者である、(四)文化事實の敍述は即ち文化事實の説明に必然的に等しい。併し如上の四の可能の道は根本的に否定せられる、(一)に對しては文化の研究は結局社會諸科學の領域を綜合的に操る作業かさもなくんば擬定的に侵害するかであつて、何等一新科學を樹立しない、(二)に就いては凡そ人間行動は社會的過程及社會的關係に據つてのみ説明せられ得る、(三)に對しては、超個人的者なる概念が指示するが如くに文化事實は人間行動の刺戟因でも或は個人に外的なるものでもない。(四)に就いては、敍述と説明とは全然異途した論理過程である。斯くして文化社會學の樹立可能の四の道は何れも支持し難い、從つて文化社會學の可能は必然的に之を否定しなければならぬ結論となる(戸田)

●ハント「戰爭に於ける生物學的淘汰」(Hunt, Harrison R. Biological selection in war—Eugenics. 2(11). Nov. 1929: 3—10.) 世界大戰中米國では二十八萬七千人の男子が徵集されたが、内一七%のみが戰地に送られ、殘る八三%は生理的缺陷の爲に歸された。之等不健康な人々の内からも當然子孫が生れるわけである。不合格者數が戰地派遣軍人數に對する主要病氣の比率は、結核病五五對一、癌及腫瘍二對一、癲癇一一八對一、聾一〇三對一、精神的缺陷五六對一、狂人一四一對一である。尙又二五—四四歲の年齡階級に付て

はハーバード大學卒業者の合格者は全國のそれに比して一五%高い、而も又戰地での死亡率も高い。仍で戰爭は生理的にも精神的にも優勝者を亡ぼすものであるが爲めに、戰爭はつまり反優生學的機能作用を營むものと見做し得る。(戸田)

文化人類學

●松本彦七郎「陸前國名取郡及宮城國亘理郡の石器時代後期乃至前後遺跡」(東北帝國大學理學部地質學古生物學教室研究報告、第九號、昭和五年、頁四九—一一三) 地域的調査の一方向を示すものである。著者は時代の中心を主として宮戸島上層式の別格新相と熱田式とに置く。宮戸島上層式及熱田式とは夫々一型式の土器によつて特徴づけられるものである。而して此地域に於ける該時代は日本民族に屬する初期文化の展開しつゝあつた頃に相當する。個々遺跡の精密調査を離れた右地域内を鳥瞰圖的に見て、増田町十三塚其他十七遺跡を檢した。該地域内では同時代以降を貝塚を形成する必要のない文化で、日本民族的要素が强くなつたとする。遺跡の分布は標式的宮戸島上層式は幾分低き處に、同式別格新相と最末期でない熱田式とは比較的高い處に、最末期熱田式以降は低き處に集る傾向がある。石器は在來の種類の外に、熱田式に特有な石器がある。別格新相後期頃から鐵器が起つた。時代の降るに從つて繩紋土器の混入頻度が減する。幾何學的紋様は別格新相中に其萌しが見られる。(松村)

●鹿野忠雄「臺灣東海岸巨石文化遺跡に就て」(人類學雜誌、第四十五卷第七號及第九號、昭和五年、頁二七三—二八五、三六二—三七四) 著者が一九二七年より一九二九年に至る間臺灣東海岸に存する巨石遺跡を調査した結果を記錄したものである。調査した遺跡數七個所、種類は立石・石棺・石壁等で、三者は必ずしも同一個所に存するのではないが、相互に關係ありと思はれる點がある。遺跡の附近からは大小の石器が發見されることが多い。著者は之等を同一種族の遺物なりとし、その種族を先住民と見做し、現存のアミ・ピユウマ・パイワン諸族に或程度の關係ありとし、新石器時代の文化に屬する者なりと考へる。併し少量の金屬器はあつた。遺跡の多くは丘陵上、山の斜面地によつてゐる傾きがある。(松村)

●オルロフア「カムチャッカ半島のコリヤーク族」(Orlova, E. P. The koriaks of the Kamchatka enin Sula. Северная Азия. 2(27) 1929: [illegible]—113) 著者が一九二六—一九二七年の民族調査の間に踏査した地方は、北はティジール河から南はボルシェレックの村まで、西はオホーツク海岸から東はカムチャッカ河に至る範圍である。コリヤークの人口・タイプ、性質を述べてから、彼等の衣服・住居(yurta)、食物を詳述してゐる。婚姻及結婚狀態の所では、ラムート族の女とコリヤーク族との結婚、重婚、レヴィレイト、離婚の場合等を記してゐる。雜制の部では老人間に自殺のないことを力說してゐる。交易に就いては多くの頁を割いた。コリヤークはラムートの鹿乘用法を學んだ。鹿の飼養者の勞働が明確に書かれてゐる。露西亞人は茶、砂糖を屠殺した鹿と交換する。一頭の鹿は約一留から三留の間で得られる。

多數の鹿は此露人相手の交易の爲に屠られる。鹿の外に長旅に堪へる犬を所持してゐる者もある。定住者に與へられる馬を持つた者もある。漁撈が定住部族に重要となる樣に、狩獵の重要さも年々高まつて行く。すべての商品、製產品は毛皮と取引される。殆んどすべての魚類は地方的に消費される。狩獵、漁撈の方法及統計表が添附されてゐる。(松村)

●サルモニイ「支那新石器時代の人像」(Salmony, Alfred. Ein neolithische Menschendarstellung in China. Ipek. 1929(publ. 1930) 31—49) 從來の學者は支那の新石器時代美術を、東南歐羅巴、露西亞ターケスタン及び北東獨逸方面に關係附けて來たけれども、サルモニイは支那の古代美術の一部には、西北印度に負ふ所の強いものがあるといふ考を強調してゐる。ストックホルムの瑞典東亞博物館には、甘肅土器に屬する完全な塑造人像があるが、それは此考へ方から理解することの出來るものである。古代支那に於ける文化の由來は、是によつて新しい光明を得る。同樣に國民の象徵となつてゐる龍(ドラゴン)は印度スメール系文化の刺戟によるものであらう。(松村)

歷史

◆國史

●牧健二「新史料に據れる德川時代名主選擧の一研究」(歷史と地理、二六・二、昭和五・八月) いはゆる新史料とは、表紙に「寬文十二年七月廿五日八日町長人入札云々」と記された半紙十二枚程の册子であり、中には長人と呼ばれた町名主の入札卽ち選擧の爲投票を行つた投票紙五十四枚を貼附し、最後の一枚に投票數を計算した所のあるものである。牧氏はそれら投票紙の、それぞれに異つたる寸法文言等を剋明に列記した後、八日町とは甲府の八日町であること、その町名主の選擧權は八日町の總ての戶主が持つてゐたこと、投票用紙は各自の持ち合せの紙であつたこと、投票は必ずしも選擧人の自筆たるを要せず、記載法も亦一定しなかつたこと、最後に投票數の計算において被選擧人相互の間に多少の融通をつけることが默認せられたことなどの數ケ條の考證を試みてゐる。(黑板)

●三木榮「山田長政の事蹟に就いて」(史學雜誌、四一・七、八、昭和五・七月、八月) 山田長政についての記載は、昔から澤山あるけれども、何れも餘りに傳說的である。併し我が國にある材料にのみよつてゐては、遂にこの傳說以上に出でることは難しからう。本論文はこの弊を匡さんとして、長政と殆ど同じ時代にシヤムにゐた人、ファン・フリートの著「暹羅志考」ともいふべき册子の佛譯本を本とし、傍ら筆者のシヤムに於ける言語慣習地理等の豐富な知識を採取してものされたる新しき長政の傳記であつて、よつて以て舊說の誤の正されたものが少くない。例へば長政が逸(エ)比留(ビル)の王に封ぜられたといふ舊說は疑はしく、實は六昆王に封ぜられたのであり、又彼の官職名は諸書の傳ふる所殆ど皆異つてゐるが、それは次第に昇進して行つた官職のそれぞれが別々に記されてゐるからであるといふ如きである。(黑板)

◆東洋史

●和田清「兀良哈三衞の本據について」(史學雜誌、四〇・六、昭和四・六月、頁六五九—七一〇) 明の頃、朶顏・福餘・泰寧の三衞を總稱して兀良哈(Uriangkha)といつた。しかしこ

れは明人の誤用で、眞の兀良哈は朶顔の一衛に限る。朶顔を Noyan と讀むのは誤で、必ず Doyan と音すべきであるが、これはもと〳〵、元の初めに Onon 河源に居た所謂「蒙古兀良哈」であつて、成吉思汗の時に東方洮兒河上源の搠河畔に從つたものであり、その衛名は大朶顔山に因ふてゐる。明の中葉に北京の塞北に南下した朶顔衛の後身が今日の喀喇沁部である。次に泰寧衛の名は遼金以來の泰州卽ち元時の泰寧路から起り、また福餘衛の名は古の扶餘とは關係がなく、却つて金代の蒲與路と聯絡がある。前者の住地は今の洮南附近で、明初に三衛の首衛が置かれたところ、後者は本據を今の齊々哈爾方面に有し、その東方の瑚裕爾河から衛名を得たのであつて、後の科爾沁部は必ずこれと關係があらうと思ふ。（池内）

●**羽田亨**　**「大月氏及び貴霜に就いて」**（史學雜誌、四一・九、昭和五・九月、頁一一—三〇）この問題に關する根本史料に再吟味を加へてみると、漢の初め支那の西邊から西に移動した後に於ける月氏の消息に就いては、單に彼等が大夏卽ち Tochara の國を擊つて臣屬となし、Amu 河の北に居を設けた事實以外には何等知られない。嘗て桑原隲藏博士も論じた如く、貴霜(Kushan)王國なるものは、月氏種族の建てたものではなくて、大夏が月氏に征せられる以前から既にその國に存した貴霜翕侯が、のちに發展して他の翕侯を併合したもので、實際大夏の種族と認められねばならぬのである。卽ち東洋學者の多くが、貴霜王家を月氏の系統に繫けるのは誤解であつて、また彼等が一般に大夏語卽ち Tochara 語を月氏語と考へ、或はTochara 語の別名とされる Arśi の名を以つて月氏に比する見解も絕對に許容できない。然らば同じく彼等が、西域出土のトルコ語佛典に見える Küsän なる貴霜に相當せしめてゐるのは果して如何。この說もまた信じ難い。思ふにこの Küsän は、蒙古時代の曲先、卽ち古來龜茲(Kuči)と記されたものに外ならず、遲くとも西暦第十世紀の中葉に、トルコ人が西域の龜茲國を指して呼んだ名稱であらう。（池内）

●**出石誠彥**　**「天馬考」**（東洋學報、十八・三、昭和五・六月、頁四六—八七）古代支那人が天に馬を配してゐたことは楚辭や淮南子などに明かであり、史記に見えた秦の宗廟車白馬もその例であらう。馬を太陽の乘物とし、或は太陽の車を挽くものとするこの思想は、また希臘を初めバビロニア・ユダヤ・アルメニア(Armenia)・マッサゲーテ(Massagetae)・波斯・印度などにも存在した。恐らくそれは、馬或は馬車が、轉して王侯貴人勇士の乘物としての聯想から、轉じて此等民族の崇拜した太陽に結び付けられたのであらう。古來支那で飼育された馬はその本源を蒙古高原に發する。ところがこの系統の馬種には、漢の武帝の時の大宛卽ち Ferghana 遠征によつて西方の驛馬所謂汗血馬が支那に輸入されるに至つた結果、注目すべき改良が行はれた。現に當時石に殘れる馬の姿は大概かくして育成された改良種を寫したものである。天馬の思想もこゝに至つて、この驛馬と結合される。そして大宛の汗血馬は天馬の子といふことになつたらしい。汗血といふ名は恐らく血管の擴張のため、發汗の際に血を汗した如く見えたのに起因する。この事は Ferghana 窪地の地理と相俟つて、世界の馬史上極めて注重されねばならぬと思ふ。（池内）

編輯者雜記

◇

秋更けて氣愈々清爽。このとき諸賢の机上に本號をおくるを悦びとする。叱正も俟つ、示教は喜んで迎へる。兎に角手にとつて見られたい。充分に讀者の待望に應へた積りである。

◇

周知の如く、現在資本主義世界の凡ゆる國々は、經濟恐慌のまつただなかにある。この一環として、さらにまた金解禁後の必然的情勢の裡に、我國の大衆は不景氣の大浪に喘いで居る。

このとき、「十五ヶ年計畫」を宣説せるサヴエートの國から、巨頭片山氏が故國の民衆を憂へて寄せた論稿は、讀者の喜びであり、又本誌の誇りである。

◇

報知新聞は斯界注目の的だ。馬場氏の本論ある所以。友岡氏は法政大學に教鞭をとる篤學の新人。其他凡て一粒選りのもの。手前味噌は控へやう。

◇

創作――斯界不振の折柄、かくも妙味ある顔觸れと内容とを得たのを讀者とともに喜びたい。

◇

別掲發表の如く「生活に喘ぐ」體驗記募集には奮つて應募されたい。

◇

本誌が、尖鋭に重厚に、はた快朗と大衆の生活に即す王道ヂャーナリズムの下に、月を追ふて讀者層を擴め深めゆく事實は、日毎に寄せられる讀者の文書によつて最も明らかだ。諸賢と携へて今日を語り明日を歩まむとする本誌の欣快之に過ぎたるはない。

◇

妹誌婦人公論も、その大衆化の素晴らしい成功に伴ふて、今や婦人雜誌界に君臨し、文字通り「婦人公論時代」を現出せんとして居る。蓋し積年の努力による盤石の基礎の上にたつて、最もよき客觀的状勢の成熟にア…トしたからだ。共に愛讀を賜へ。

◇

驚嘆すべきスタートを持つた出版部も、讀者諸賢の深甚なる支持により、開設茲に一年、今や全日本出版界をリードするの幸運に惠まれ、意氣に燃えて居る。讀者の翹望に應ふべき巨彈はつきぬ。

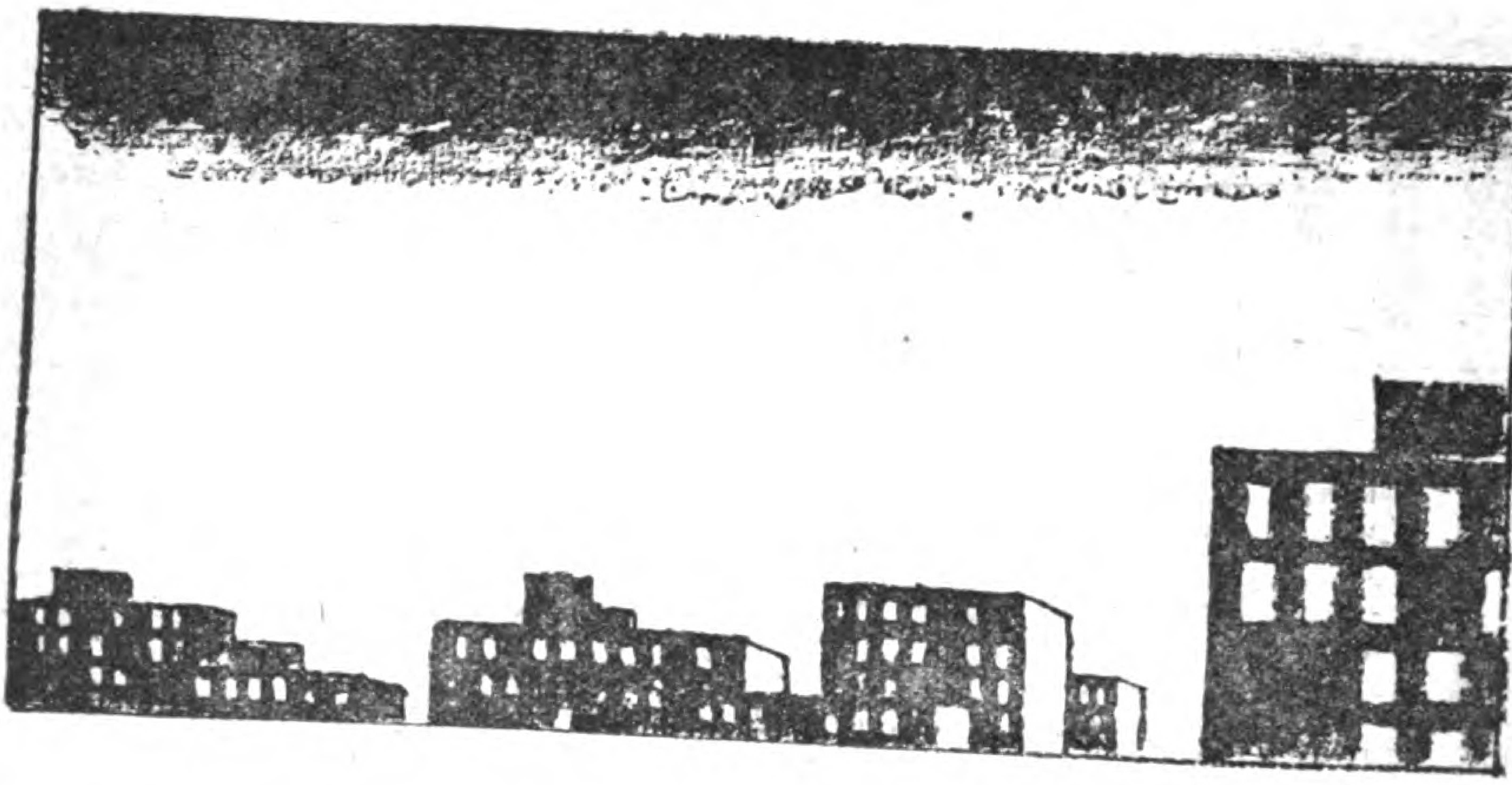
◇

「現代人物評論」は、率直に云ふて、豫想外の賣行を示した。公正な情熱に裏づけられた本書の持つ具體性が、時代の大衆をカッチリと把握したのだ。

ゴーリキイが現に執筆中の三部作「四十年」の第一部が、逸早く邦譯されて讀者の渇望をいやせるのも嬉しい。藝術的香氣高き筆觸を通して、われ〳〵は革命までの四十年に亙るロシアの眞相を泌み〳〵と味ふことができる。

◇

われらは、出版部、婦人公論、中央公論のトリオを以て、中央公論社ファン諸兄の健康を祈つて已まない。



夏期實習

水上瀧太郎

一

帝都生命保險相互會社の鰐鮫の口のやうな暗い入口から、角帽や中折や、かんかん帽子をかぶつた雜魚が、ひとかたまりづゝ吸ひ込まれて行つた。長い廊下の突當りに廣間がある。其處に彼等は群を成した。

集つた百數十人は、お互に顔を知らない者が多かつた。少しは、同じ學校から來た者同志で、ひそひそ話合つてゐるのもあつたが、大概は互に敵状を偵察するやうに、眼を光らせてゐた。はつきりした形はとつてゐないが、競爭心と嫉妬心の芽生が、みんなの胸にぐんぐん延びてゐるのであつた。

「あゝあ。」

この場合不謹愼にもあくびをした者があつたが、周圍の者が忽ち輕蔑の色を示し

て、その男の顔を睨んだので、誰にともなく微笑を見せ、てれて、悄氣て、うなだれてしまつた。みんなが行儀よくしなければならないといふ共同感が、室内を領してゐたのだ。

會社が指定した時間は夙に過ぎ、應募者は退屈し切つて、不滿と不安と倦怠と焦燥に負けて來た。みんなにとつて、正面の演壇のうしろの壁にかゝつてゐる禿頭白髯のぢいさんの寫眞が、たつたひとつの牽引であつた。その顔を、新聞や雜誌で見知つてゐる者もあつた。顔は知つてゐても名は知らない者もあつた。顔も名もまるつきり知らない者もあつた。それらの世間知らずの若者に對して、ぴかぴか光る金の額縁の中から、禿頭白髯のぢいさんは、儼然たる威容を保つて見下してゐた。叱るやうな、睨むやうな、あはれむやうな、嘲るやうなその表情は、見る者の心々でどうにでも解釋された。

長い間待たされた後で、みなりのとゝのつた若い社員があらはれた。

「大變お待たせしました。只今庶務課長が御目にかゝりますが、その前に皆さんの名前を呼びますから、返事をして下さい。」

報告的にいひ切ると、直ぐに積み重ねてある履歴書を、一枚々々めくつて、姓名を讀みあげた。呼ばれたものは一齊に行儀を正した。自分自身の不行儀をたしなめるやうな咳拂ひが起つた。

みんなの視線が一度に一點に集中された時、其處に短軀肥大の課長が悠然とあらはれた。たしかに彼は悠然とあらはれる自分を、立派につくり上る事に苦心してゐた。

彼は壇上の人となる前に、社長の額にむかつて一禮した。

「諸君。」

聲は體格に似ず細かつた、こわれた管樂器のやうな微震音を伴ふ聲だつた。

「わたくしは矢田であります。」

さう云つて、二重顎の短い首を稍上に向け、滿堂の若者に矢田鉦吉である事を確實に認識させようと努めた。だが、社

長の顏を知つてゐる者は幾人かあつたが、課長の顏を知つてゐるものは一人も無かつた。それにも拘らず課長は幸福だつた。

「この度我帝都生命保險相互會社に於きまして、夏期實習を行ふ事になり、各學校に志望者を募りましたるところ、斯く多數の應募者に接しましたのは、不肖欣快の至に堪へざるところであります。御承知の如く、我國に於ける生命保險事業は、未だ僅に半世紀の經驗を積んだに過ぎないのでありますが、既に世界第三位の保險國となり、現在契約高八拾億を超え、しかもその一割強は實に我社の保有するところであります。いかに我社が天下の信頼を博し、國家社會の爲に貢獻しつゝあるかは敢て我輩の喋々するを要せざるところと信ずるのであります。」

課長は、たしかに自己研鑽の雄辯術に陶醉して、聽者の評價が如何であるかを推測する餘裕を失つてゐた。彼の微震音を帶びた聲は、時に咽喉笛の破滅に歸するかを危ぶませるのであつたが、彼自身は決してひるまなかつた。

いかに生命保險事業が人間社會にとつて必要不可缺のものであるか、いかに帝都生命保險會社が名實兼備の優良なる會社であるか、重複を厭はず、冗長を恥る事なく言葉を盡した。

「就中我社の誇る可きは、その組織であります。諸君。御承知の如く我社は相互組織であります。利益を壟斷する株主といふ怪しからぬものが存在しない。自分は遊んでゐながら事業の收益を搾取する株主が存在しない。保險の效果を知つて喜んで我社と契約する人は總て我社の社員である。諸君と雖も、只今我社の保險に加入するならば、たちどころに帝都生命の社員となり、その經營に參劃し、その利益を受ける事が出來る。それが相互組織の特徴であります。卽ち株式會社ならば會社の營業の利益は株主の懷にたくしこまれるのであるが、相互組織ではさういふ不合理な事は無く、之を加入者全員に分配するのであります。すべてが民衆本位になりつゝある今日、相互組織が株式組織にまさるものなる事は疑ふ餘地の無いものと確信致します。」

さういふよき事業を、よき組織の會社を根據として行ふ事の幸ひを、課長は力說するのであつた。

「而して、この度我社が他社に卒先して、學生諸君の夏期休暇を利用し、尊い體驗を得る機會をつくりました事は、生命保險事業の一新紀元を劃する事ともならうかと、多大の期待をかけてゐるのであります。」

元來細い聲を張上げ、額から汗を流し、自分の辯舌に泥醉したかたちだつた。いかに現在の學生が將來の日本を背負つて立つ可き使命を帶びてゐるか、いかに此の尊き事業が活動的人物を待ち受けてゐるか、いかにそれらの新人によつて斯界が目覺まされ廓清され、品位を高めるか、あらゆる無形の稱讃とおだてを惜氣も無く撒き散らし、浴せかけた。彼は雄辯術が充分學生を魅了した事を疑はなかつた。しかし學生にとつては、自分達の無力ははつきりわかつてゐるので、いかにほめられても自分達の事だといふ實感が無く、誰か外の世界の人間の噂を聞かされてゐるやうに思はれるのであつた。彼等は手ごたへの無い沈默を守りつゞけた。勿論中には、ひそかにあくびを噛殺したり、輕いいびきを立てゝゐねむりをして居る者もあつた。

「しかし、人間はいかに高尚なる仕事に從事するとしても、全然無報酬では働かない、否、報酬無しでは百パアセントの能率を發揮する事は出來ない。其處で、諸君に對しても、その働きに應じて相當の御禮をするのが當然と考へます。恐らく諸君は父兄から學資を貰つて勉強してゐるのでありませうが、自分で働いて得る金の尊さを知るのも決して無益ではありません。寧ろ甚だ愉快な事であります。さてその報酬は……」

千圓の契約を締結したらいくらの手當をやる、五千圓ならばいくら、一萬圓ならばいくら、二萬圓ならばいくら、三萬圓ならばいくら、五萬圓ならばいくら、十萬圓ならばいくら、十五萬圓ならばいくらと、大きければ大きい程率の增進する數字をあげて細かく説明した。高遠なる理想を説く時とは自ら異なる氣分が、課長の滿身に自然の表情となつてあらはれた。彼は金錢について語る時、それが自分の儲でゞもあるかのやうに相好を崩した。

「どうです。無資本でこれ丈の收入がある。いゝ商賣ではありませんか。」

親しさを示して、腹をゆすつて笑つた。

これで課長の長い挨拶はその本旨を盡したのであつた。彼はもう一度激勵の言葉を繰返し、明日はノオトを携へて來るやうに、又その節は社長も親しく面接するであらうとつけ加へた。

「では、今日はこれでお別れ致します。」

多年の習練によつて學び得た笑顏を見せながら降壇し、短軀肥大のからだを悠然と運んで去つた。

學生は一時に立上り、のびをしあくびをし、何かくすぐつたい笑を浮べ、又ひどく緊張し、おもひおもひの所作と表情で、雜然と席を離れ、やがて鰐鮫の口のやうな暗い玄關から、夏の日の街路へ吐き出された。

二

往來に吐き出されて、四方へちりぢりに別れて行く中の一人に小谷根堅太がゐた。彼は私立大學を來年卒業する筈で、何よりも心配な卒業後の就職口に思ひ惱む時代の兒であつた。大學校さへ卒業すれば立派に喰へると思つてゐたのが、何時の間にか時勢は變つて、大學出である爲にかへつて職にありつけない時代が來てしまつた。彼は別段學問好きでも無く又人にすぐれた秀才でも無かつた。寧ろ平凡な人間である爲に、無理をしても大學を出て、月給にありつかうとする大多數の一人に過ぎなかつた。夏の休暇には國に歸り、學校生活最後の夏休みを充分享樂しようと考へてゐたのだが、小遣を使ひ過ぎ、月謝も拂へなくなり、あやうく受驗資格を失ひさうになり、あわて、友達に融通して貰つて試驗丈はすませたもの、、遠い故郷へ歸る旅費もなかつた。折柄二三の保險會社が申合せでもしたやうに、夏休の學生の爲の講習を開き、兼て外交の體驗を與へるといふので、勇を振つて應募したのであつた。そんな事でもして置いたなら、それが緣になつて、來年卒業と同時に職につけるのではあるまいかとも考へた。うまく行けばいくらかになるといふ事は勿論彼を誘引した。彼は保險の理論にも實際にも完全に無智だつた。どの會社がいゝのかも知らなかつた。たゞ何となく、相互會社の方が株式會社よりも牽引力が强かつた。それは封建主義と民主主義といつたやうな差別があるやうに想像されたのである。

果して課長の説明によつても、相互組織は遙かにすぐれたものに違ひ無く思はれた。遊んで暮らしてゐる株主に搾取されない。契約者が即ち社員で、會社は契約者のものだから、營業利益も契約者に分配される――何といふ素晴らしい話であらう。自分も一口契約しよう。さうすれば自分は帝都生命の社員だから、來年卒業と同時に其處に一つの椅子が待受けてくれるであらう。彼はあく迄も都合よく考へた。そればかりでは無い、契約者以外の誰人にも利益を奪はれず、すべてが契約者に分配されるとすれば、やがては自分もその配當で金持になれるかもしれないのだ。彼は街上の暑さも忘れて將來を空想して卒業する。帝都生命の社員になる。月給をとる。利益の分配にあづかる。課長になる。支配人になる。社長になる。あの額縁の中にいかめしい禿頭が將來の自分なのだ。思はず知らず、彼は白日の下で微笑した。

「おい。」

「よう。」

うしろから肩を叩かれて振かへると、同級の相原欣吾の大きなからだが目の前に迫つてゐた。

「どうした。まだくにへ歸らないのか。」

「うむ、歸つても爲樣がないからなあ。それよりも君はどうしたんだ。」

「俺か、俺はこの夏保險屋の見習をやつて見ようかと思つてゐるんだ。」

小曾根はいきなりどやしつけられた程吃驚した。二の句がつげなかつた。額から汗が玉になつて落て來た。自分の祕密を知られたやうに狼狽した。

「お前も知つてるだろ、學校の掲示板に出てゐたから。今日が面會日なんだ。」

ふうん、こいつ先刻帝都生命の廣間で、課長の長講を傾聽してゐたのか、それにしてはよく見つからなかつた。まあよかつたと思つたが、汗は矢張とめどなく流れて來た。

「どうだい、お前も行つて見ないか。一人よりも二人の方が氣が强いからなあ。」

非常に愉快な冒險を敢てするやうに、相原ははずむ心をまざまざと見せた。

面とむかつて小曾根は氣の引ける立場に在つた。彼は急場のしのぎを相原にも助けて貰ひ、月末迄は返す約束だつた。

「行くつて、何處へ行くんだ。」

「皇國生命さ。これから出掛けると恰度い丶時間なんだ。」

小曾根は多少安心した。友達は彼とは別の會社の催しに應募してゐるのだつた。

「皇國生命。ふうむ、外にも何とかいふのがあつたらう。」

「あつた。帝都生命と共榮生命さ。」

「皇國つていふのが一番い丶のか。」

「一番い丶かどうか知らないが、兎に角古い信用のある會社ださうだ。ほら、創立は古く施設は新らしつていふ廣告を新聞に出してゐるやつだよ。」

相原は生來の熱情のはけ口を見つけて、自分の活動を悲壯化し、相手の思惑には頓着なく、一人で喋りながら、目的の方角に引張つて行つた。

小曾根はたつた今、帝都生命の廣間に課長の雄辯を聽いて來た自分を語らなかつた。保險屋といふと、あらゆる惡德を身につけ、世間から嫌はれるもの丶やうに感じられる。その見習をするといふ事が、おほつぴらに他人に話せない心持をいだかせた。そんな筈はない、立派な仕事なのだと自分自身に辯解しても、矢張心が承知しなかつた。さういふ自分の卑屈に比べて、友達のあけつ放しの態度はいさぎよく思はれ、その爲にも一層相手に壓迫を感じた。

「え、おい、いつしよに行けよ。くに丶歸るなら爲方が無いが、東京で下宿にくすぶつてゐるのなら、寧ろ暑さと鬪ふ積りで働く方がい丶ぢやあないか。うまく行けば小遣稼ぎになるらしいぞ。」

さういはれると、小曾根は愈々參つてしまつた。相原とても樂で無い懐から貸してくれたのだ。早く返してやらなくて

はならないと思ひながら愚圖々々になつてゐる今、貸した方が稼いで、借りた方が遊んでゐては顔がむけられない。小[illegible]位は稼げるといふ相原の何氣ない言葉さへ、小曾根の耳には痛かつた。

「ね、賛成しろよ、俺だつて一人ぢや心細いよ。共同してやればきつとうまく行くぞ。」

「でも、保險の保の字も知らないで大丈夫か。勸誘つてやつはとてもむづかしいさうだぞ。」

「なあに他人がやる事だ。やつてやれない事はないさ。」

彼は熱心に共同勸誘を說いた。それには小曾根も心が動いた。自分だつて一人で見ず知らずの家に押かけて行く勇氣は無い。二人なら餘程氣が強いだらう。取消せるものなら帝都生命の方を取消して、こいつといつしよに皇國の方にした方がいゝかな……

「あれだよ。あの古い石造のうちさ。お、もう時間だぞ。」

腕首の時計を見て、足を早めた友達の氣勢に抵抗する力は無く、小曾根も引擦られて階段を上つた。

受附に案内されて通つた廣い室には、既に澤山の學生が集つてゐて總ての光景が帝都生命の場合と似たものだつたが、こゝには社長の寫眞のかはりに會社の建物の寫眞がかゝつてゐた。

二人が一隅の空席を見つけて腰かけると、間もなく少し背中の曲つた胡麻鹽の老人と、赤く、襟飾を結んだ社員が連立つて來た。老人は叮嚀に一禮して、極めて低い聲でくどくどいひ出した。

「今日は暑いところを、みなさんお揃で御見えになり、甚だ感謝に堪へません。ところが折惡く東京支部長は據所ない用事で地方へ出張致しましたので、私が代理で御挨拶申上る次第でありますが、私は甚だ口不調法でありまするで、こゝに居られます社員野村亮一君にかはつて頂く事に致します。同君は會社から選ばれて歐米に留學せられ、最近歸朝した秀才であられますで、さぞかし有益な御話がある事と存じます。」

老人はたしかに演說とか卓上挨拶とかいつた事の經驗に乏しい人に相違なかつた。喋る事にひけめを感じてゐる樣子が

あまりに明かで、忽ち學生達の顰蹙を招き、殊に低聲で聞えないので、うしろの方に陣どつた者は、しきりにざわついてゐるのであつた。

「では野村さん、お願ひします。」

老人は一座が傾聽してゐないと知ると、一層參つてしまつて、恥しさうに頭を下げさつさと窓際の風の通る所へ椅子を持つて行つて扇子を使ひはじめた。

赤い襟飾の社員は細長いからだに特殊のしなをもたせ、教師が學生に教へ、牧師が信者に說教するやうな一種の型で話し出した。

「只今豐留副長から御紹介をうけました野村であります。私は約三年間米國に於て生命保險の學理と實際とを研究し、つい此間歐羅巴を經て歸朝したものでありますが、歸朝以來今日程嬉しく思つた事は無い、何がそんなに私を喜ばせたかと云ふと、それは斯く迄多數の若い活動力の旺盛な知識慾に燃ゆる諸君と一堂に會する事を得た事であります。」

絕えず微笑を含み、充分の親しさを見せ、又極めて朗かな音聲をみづから享樂するものゝやうであつた。彼にとつて、自分の豐富な知識を多勢の人間に認めさせる機會の到來は樂しい事に違ひなかつた。

「實は、この度諸君の貴い夏休みをさいて頂いて、我社が講習を開くといふ計畫は、私が立案した事なのであります。立案はした。しかし私は內心その成功を危ふんでゐました。何故でせうか。私共が諸君の如く學窓に在つた頃は、我國では生命保險といふと甚しく毛嫌したものでした。現に私の如きも、あいつは保險屋になつたさうだと級友から冷嘲されたものでありました。當時若し何處かの會社で、學生を集めて保險の講習をしようとしたと假定して下さい。恐らくは只の一人も應募する者は無かつたでせう。然るに今日の日本は世界第三の保險國となり、保險がいかに人生に必要なる施設であるかは常識となつた。おかげで諸君の如き學徒にして、將來社會に活動せんとする人材數百餘人をこの一堂に見るに至つた。豈喜ばざらんとするも得べけんやではありませんか。私の如き若輩の者さへ隔世の感を抱くのであります。まして況

や斯業に從事する事三十有餘年に及ばる、豊留副長の如きは、この光景を何と見らるゝでありませうか。」

さういひながら上役の方へ愛嬌笑を湛へた顔を向けたが、扇を使つて居た老人の手はいつかだらりと垂れ、子供のやうに口をあけて居ねむりをして居るのであつた。さういふ上役のていたらくに、多數の學生の視線を差向けたのは自分の落度だと思つた樣子で、彼はあわてゝあとを續けた。

學生は一瞬間浮べた笑を無理に呑込んで、再び謹聽した。殊に小倉根は深い興味を感じた。彼は帝都生命の場合と一々對照して心に刻み込んだ。あつちでも課長が我事のやうに得意がつた世界第三の保險國を、こゝでも若い新歸朝者の口から聞いた。さうか、日本はそんなに保險好きなのか、彼は全くはじめて得た知識なのでひどく感心してしまつた。

「保險思想は津々浦々迄普及されました。しかし、私の見る所によればあちらに比して日本では、未だ生命保險の價値を充分認識して居ないといふ意味は、生命保險といふと葬式の費用だとか、遺族の爲の用意だとか考へるのでありますが、旣にあちらでは、生命保險はひとつの財産蓄積手段であり、又最も有利なる投資の方法として認められて居るのであります。今茲で諸君がめいめい壹萬圓の保險をつけたとする、諸君は忽ち壹萬圓の財産をつくつたと同じである。たゞ此の財産は勝手に使ふ事が出來ない。それではつまらないと云ふ人があるかもしれないが、勝手に使へないといふところに此の財産の特徴がある。決して無駄に費消されない强味があるのであります。葬式費用の生命保險を不吉だ、緣起が惡いと嫌ふ人はありませう。しかし、それが最も安全確實な利殖の道であるとわかつたならば、誰が反對するでせうか。保險募集はむづかしいと云ふ。それは說明が下手だからであります、緣故募集、泣落し募集、强迫募集、詐欺募集の時代は夙に過去となり、今後の募集は學理と實用の結合によつてなされねばなりませぬ。經濟知識が必要である。法律知識が必要である。心理學の應用が必要である。殊に保險外交員は、一家の財政計畫に參與するのであるから、何よりも先づゼントルマンである事が必要である。斯ういふ風に、資格條件を數へて參りますと、將來の保險外交員は、最高學府を出た智德兼備の人物でなければならない。將來諸君が學窓を出られ職を求めらるゝに當つて、進んで保險外交員たらんとする時代は旣

に目の前に來て居るのであります。御承知の通り亞米利加合衆國の大統領カルヴィン・クーリッヂ氏は、大統領の任期滿つると同時に生命保險會社の重役となつて、今やこの天職の爲に勉勵して居るのであります。」

卓子を叩いて見えを切りさうな語氣であつた。この天職の見習生に對し、會社は五日間保險理論の講義を與へ、その終了を待つて募集の實際にあたらせる。それに對して報酬を拂ふ事は勿論で、千圓の契約が出來ればいくら、壹萬圓ならばいくら、十萬圓ならばいくら、十五萬圓ならばいくらと、細かい數字をあげて説明した。

「おわかりになりましたか。なかなかいゝ收入でせう。なほその上に、毎日市内を馳驅するには、足代と辨當代が入用ですから、契約が出來やうと出來まいとに拘らず、五日間の講義終了と同時に、一人金貳拾圓づゝを差上げます。」

一人あたり金貳拾圓を支給するといふのは、出す方は充分そろばんを彈いてゐるのであるが、學生にとつては意外の事だつた。何かしら感動を受けた動搖が、此の一室に漲つた。

「なほ終りに一言申添へ度いのは、この種の催しは我國では最初のものと考へてゐましたところ、聞けば同業帝都生命でも行ふといふ事でありまして、あちらではどういふ方法をとるか知りませんが、いづれがよりよき成績を擧るかは、極めて興味深き事であります。私は徳義上他社の批評をする事は好みませんが、たゞ諸君はよくも皇國生命を御選びになつたと申上げ度い。何故か。それは此の會社の歴史が古く、經驗は豐富であり、契約高は多く、資産の確實無比なる事、竝に保險種類が澤山ありまして、各人夫々の需要に應ずる事が出來、加之保險料は極めて低廉であるといふ強味を持つてゐるのであります。この背景があるのですから諸君の成功と否とは、たゞ努力の如何によつて分るゝものと斷言しても差支ありません。」

明日から五日間、營業時間終了後ノオトと印形を忘れず持參する事、ノオトは講義の要領を書留る爲に必要であり、印形は出勤簿に捺印する爲に必要であると、細々した事迄注意して、一禮して壇を下つた。あくびを噛み殺し、ゐねむりを我慢して聽いてゐた學生は、解放された家畜のやうに一時に緊張感を失つて、騷然として立上つた。

凉しく南風の吹いて來る窓際の椅子に、こゝちよく夢を見てゐた三十年年勤續の東京支部副長興留隆之進氏は、吃驚して眼をさまし、はたはたと扇子を鳴らしながら、さも謹聽してゐるやうに、下役の方へ顏をむけたが、その時既に話終つた新歸朝社員は、長い雄辯に疲れた唇邊に輕い皮肉な微笑を浮べて、室外へ立去らんとするところであつた。副長は身を起し、學生の方へ中途半端なおじぎをして、下役のあとを追つたが、廊下へ出ると堪へきれなくなつて、大きなおくびをした。

「どうだい、流石に大どこ丈あつて鷹揚なものぢやないか。」

おもてに出ると直ぐ、相原は今出て來たばかりの古い建物を振仰いで云つた。

「え、契約が出來るか出來ないかわからないのに、前金で貳拾圓くれるといふんだぜ。今日集つた奴が先づ百人、もつとゐたかしら、まあかりに百人として、二千圓だからね。少なくないよ。萬一それで契約が出來ないとなると、二十圓たゞ貰ひになるぢやあないか。ちやくい奴になると、そいつをつかんで何處かに旅行しちまふかもしれないぞ。」

相原は心の底から感心した樣子で、興奮のけしきをかくさなかつた。

小曾根は妙に憂欝な氣持に捉はれた。帝都生命の課長の示した手數料の計算と、皇國生命のとを比較して、どつちがいいか馴れない頭には明確につかめなかつたが、少なくとも後者の、出來ても出來なくても前金で二十圓くれると、いふのは力強い誘引だつた。その二十圓があれば、相原から借りた金を返し新しい夏帽子を買ひ、それから——彼は忽ちに腹の慾に思ひ迷つた。

「なあ、おい、ひとつ頑張つて見ようぢやあないか、もともと生命保險てやつは、誰にだつて結構なものなんだから、勸め方さへうまければ、案外出來るかもしれんぞ。俺あ、今晩下宿のおやぢを口說いてやる。」

自分の活動とその效果を想像し、相原は都合のいゝ夢を描いてゐた。

三

小曾根堅太は終日樂まなかつた。夏休みだといふのに、夜も机にむかつて六法全書を開き、生命保險に關する條文を拾つて讀んだ。株式會社と相互會社の優劣はその條文からはつきり、つかむ事は出來なかつた。しかし、契約者全部が社員で、重役もその社員が選擧するのだといふところが、ひどく新味を感じさせた。皇國生命方の前渡金二十圓の魅力も充分きいたけれど、兎に角最初に履歷書を出した方に行くのが本當だと考へた。相原には何か胡麻かしを云つて、帝都生命の方へ行かうと思つてゐた。

ところが、翌朝起きて見ると、皇國生命から葉書が來てゐた。

拜啓貴下當會社夏期保險實習生希望の旨御申込相成候に付諸般の準備相整へ御待致居候間此狀持參明日午後三時シャアプに御來社相成度此段申進候

堅苦しい候文の中にシャアプといふ片假名をまぜたのが、いかにもあの赤い襟飾の新歸朝者の仕事らしかつた。小曾根は舌うちして自分を叱つた。昨日その會社の出口で、萬一未だ履歷書を出してゐない人があるなら、住所氏名丈書いて行つてくれといはれ、うつかり紙片に名を殘したうくわつさが悔まれたのだ。

彼は又迷はざるを得なかつた。帝都生命には夙に申込をしてゐるのだから、これをすつぽかしたら、會社から愚圖々々云つて來るかもしれない。それも自分に對して抗議を申込んで來るのなら、あやまつても事は濟むが、萬一學校の方へ談じ込まれたら信用をなくなしてしまつて、來年の就職の妨にならないとも限らない。彼は皇國生命からの葉書を懷に祕めて、帝都生命へ出かけて行つた。

昨日の廣間に、課長と助手が机を並べ、來た者には出勤簿に判を押させて、氏名と本物とを見比べた。小曾根は、どうにも逃げやうのない自分を感じた。

「どうだい、何人集つた。」

課長は時計を見ながら助手にきいた。

「ひい、ふう、みい――助手は鉛筆で一人々々の氏名の上を叩きながら勘定した。

「どうしたんだ。昨日よりも餘程少ないぢやあないか。」

「いざとなると尻込みするんですな。」

「意氣地なしめ。」

昨日とはうつて變つて課長は不機嫌だつた。上着を脱ぎ、椅子の背にそつくりかへり、机の上に靴のまゝの兩足をのせて、扇子をやけに使つた。

定刻を餘程廻つてから、課長は大儀さうに身を起して壇に上つた。矢張、社長の額にむかつて禮をする事は忘れなかつた。

「ごらんの通り、昨日よりも人數の少ないのは殘念ですが、今日お出の方々は極めて決心の堅い、一人當千の人々に違ひありません。雜兵葉武者はあつてなきにひとしい。我が帝都生命は最良の會社たるを理想とし、又實際最良の會社である諸君の如き一人當千の士こそ、吾々の歡迎するところである。」

課長の咽喉笛は細く高い音を出し、暑い室内に波動を送つた。

「さて、短時日に實習の效果を收める爲には、長々と理窟を述べてゐるひまが無い。殊に諸君は學校に於て、保險の何たるかは研究された筈である。私は保險論を長々と喋る愚を避けて、直に保險募集の實際を御教授申上げ度いと思ふのだが、それに先達て、特に今朝葉山の別莊から、諸君に御目にかゝる爲に出京されました社長大川爲三郎氏を御紹介致します。」

助手に目くばせすると、若い社員はあわてゝ室外へ去つた。課長も椅子の背にゆだねてあつた上着をとつて身につけた。

學生は緊張し、禿頭白髯の寫眞を仰ぎ見ながら、その實物の出現を待つた。

聞もなく、社長の素顔は威厳を保ち、しかもその威厳を崩さない程度の温容をつくる事に苦心しながら、慢性僂麻質斯の足を引擦つて演壇に上つた。

「私は當會社の社長大川であります。元氣のいゝみなさんに御目にかゝる事は私の最も悅ぶところである。きけば諸君は今日より保險勸誘の實習をせられるさうであるが、これは甚だよい事である。働かざるものは喰ふ可らず、誰か西洋人が云つたさうであるが、私は大賛成だ。不肖大川もごらんの如く頭上一毛を止めざるに至る迄働きつゞけ、曾て一日も働かずして喰つた事は無い。働く事、それ自身が悅びである。日本國民全體が、この覺悟を持つてゐるならば、不景氣も無い。失業も無い。私は先日も總理大臣にあつて云つてやつた。今日の日本の經濟國難は、平生働かないで喰はんとする人間が多過るから起つたのだ。不肖大川の如く全國民が働くならば、かゝる事態には立至らないのであると。總理大臣も至極同感だと申して居ました。さて、我が帝都生命は相互組織の會社である。株主などゝいふ働かずして喰ふ人間は一人も居ない。生命保險といふ人類社會の最も偉い事業に賛成し、帝都生命と云ふ優良な會社に加入した人は即ち我社の社員であつて、此の一億數千萬圓の資産を有する會社は即ちその全社員のもので、決して一部の資本家の有では無い。こゝに吾々のほこりがある。これ程合理的な、これ程公平な組織がありませうか。不肖選ばれて社長の任にある事既に久しきにわたりますが、私は決して此の會社に資本を提供したものでは無い。私は一介の無産者であつて、たゞ社員諸君に選ばれて職を汚してゐるに過ぎない。非才よく重責を果すを得るや否やを常に懸念するのであるが、しかし微力なりと雖も全力を傾けて社業の發展に盡してゐる事丈は公言して憚らない。私は鈍才であるが人一倍働く。私と共にこの會社に勤める一千餘人いづれも働く事を以て天職と心得てゐる。したがつて會社は、年々好成績で多大の利益を擧げて居るのであるが、その利益をわたくしする者は一人もゐない。みんな社員即ち契約者に分配してしまふのである。これが我社のたてまへであつて、他の多くの會社と趣を異にするところである。吾々は全契約者の爲に働く。社會奉仕である。私は自慢では無いが貧乏である。貧乏ではあるが、心は常に滿ち足りてゐる。それは何故か。利己の爲に働くのでなく、共存共榮の爲に働く事を深

く自覺してゐるからである。願はくば諸君も吾々のこゝろざしをこゝろざしとし、大に働かれん事を希望します。なほ申上げ度い事は山々あるが、今日はこれから大藏大臣を訪問して、失業救濟、不景氣打開策につき意見を述べて來たいと思ひますので、あとは課長に任せる事に致します。」

老社長は凸凹のはげしい禿頭の天邊を見せて禮をし、又僂麻質斯の足を引摺つて退場した。

うやうやしく見送つた課長は、見送り果てゝ又上着を脱いだ。

「では、これから愈々實習に移ります。きくところによれば、同業皇國生命に於ても、こちらの眞似をしたのかどうか、同じやうな事をやつてゐるさうであるが、之は頗る興味のある事である。彼社は我國に於ても古い歴史を有し、契約高も資産も我社に匹敵する大會社であるが、兩者は根本に於て全然たて前が違ふ。卽ち彼は株式組織であり、こちらは相互組織である。又我社は所謂高率配當主義であり、彼は低率保險料主義を唱へてゐる。あらゆる意味に於て對立してゐるのであるが、此の度亦期せずして社外の諸君の實習に於て、兩者の實力を競ふ機會を得た事は、吾々の愉快とする所である。何故か。必ず我社の勝つ事を確信するからである。そこで、此の兩社の對抗戰を實習の第一課の教材に供し度い。諸君ノオトを出して要領を書留て下さい。」

課長は眼前に敵を控へたやうに敵意を籠めて、自社と他社とを比較して、自社の有利を確說しながら、かゝる比較が契約募集に最も有力なる武器である事を教へた。

相互組織は株式組織と違つて、株主に利益をとられず、すべて社員に分配される事、彼は營利的でありこれは非營利的である事、帝都生命の契約者配當は皇國生命のそれよりも遙かに多い事、したがつて、たとへ最初の保險料は彼より高くとも年を重ねるに從つて配當と差引になり結局正味掛金は彼より少ない事、その他約款にもかういふ優劣があるとか、後から出來た會社が前からあるものと殆んど同じ契約を保有するに至つたのは卽ち彼に勝る實證であるとか、何から何迄段違ひだといふ事を、寧ろ口汚なく述べ立てた。課長の熱心は屢々假想敵をやつつける事に急で、かへつて反感を起させる

程であつた。大人はおとなしいものといふ先入觀念にとらはれてゐる學生は、かく迄熱狂的な競爭意識を持たなくてはならないのか、とすくなからず膽をびくつかせた。

課長は言葉をつゞけ、一人の新規の契約希望者を二社以上で爭ふ場合、又既に他社に契約してゐる人を勸誘する場合、他の會社の契約を解約させて、こちらへ乘替させる場合の戰術を、一々例をあげて説明した。

「これを世間では掠奪募集などゝ云つて、近頃では保險協會でも商工省でも一寸うるさい問題になつてゐる。成程、他人の契約をぶちこわして、こつちに奪つて來るのだから、德義上どうかといふ問題は一應尤もである。しかし一面から見れば、惡いものをいゝものに取替へるのが何故いけないか。たとへば友達が五十圓で一軒の家を借りてゐる。日あたりが惡い、根太が腐つてゐる、近所が騷々しいといふ場合に、外に四十五圓で、南向で、靜かで、新らしい家があつたとしたら、勸めて其處へ引越させるのが親切である。不德でもなんでも無い。又友達が下手で高い洋服屋と馴染みで、いつも不格好な風をしてゐるのを見兼て、もつと安くて、上手な洋服屋を紹介してやるとする。それが何故不道德か、これを非難するのは、不當な値段をとつてゐる横着な家主や洋服屋の外には無い。假に帝都生命が他の會社と契約してゐる人を、こつちへ乘替させたとする。恐らく、とられた會社は帝都は不道德だ、怪しからんと恨み罵るであらう。だが、こつちの方が會社の内容がよく、約款が有利で、配當が多く、正味掛金が少ないとしたら、契約者にとつてはどの位とくだかわからない。不德どころか、救ひの神だと云つてもいゝ。つまり、いゝ會社の契約を惡い會社に乘替させてこそ不德義であるが、惡い會社からいゝ會社に乘替させるのは、好意であり、親切であり、いゝ事である。事實、帝都生命程いゝ會社は無いのだから、何處の會社の契約を奪つても、かすめても、ちつとも差支ない。これが正論であると私は信じてゐる。しかし世の中には弱者の方が多い。彼等は團結してすぐれたるものを誹謗する。役所も多數の弱蟲を庇護して餘計なおせつかいをし、強者を強盗の如く目するに違ひ無い。だから、此の點はよく注意して、實戰に於て敵と正面衝突をする場合にぶつかつたら、一應私に相談して頂き度い。乍憚秘策はこゝにしまつてある。」

課長の意氣はあがつて、肉の厚い胸を叩いて見せた。

「兵を進めるには迅速を第一とする。いたづらに机上の空論をなす事は本實習の目的でない。諸君は今から直に目的の爲に突貫しなければならない。」

保險の講義などは全然無意味で、それは本を一册讀めば充分だ。そんな時間つぶしの事をやめにして、只管契約の獲得に盡せ。但し一日に一度は出社して各自の行動を報告しなければならない。應援を必要と認める場合には應援する。契約申込書の書方、診査の請求手續、第一回保險料の取扱方――とひと通りの手順を話し終つて、さも心地よさゝうに扇子の風を二重顎の邊に送るのであつた。

質問のある者は質問しろといはれても、學生側には質問する丈の知識も無かつた。彼等としては、もう少し講義がつき、多少の自信がついてから野戰に出るものと思つてゐたところ、忽ち契約に必要な書類を渡され、直ぐさま勝手な方角に突進しろと言はれたので、手も足も出なくなり、互に助を求め度いにも求める手段も無く、弱り切つた體であつた。一人二人かんたんに手續上の質問をしたものはあつたが、あとは誰も口をきくたねを持たなかつた。

「では又明日御目にかゝります。諸君の奮勵努力を祈ります。」

てつとり早くかたをつけて、課長は悠然と室の外へ消えた。

「あゝあ。」

わざと人に聞えるやうに嘆息した者があつたが、誰も取合はなかつた。

四

實習舞臺の東京には夏の日が烈々と燃え、交通機關の音響は四方八方に反響し、その堪へ難さ、やかましさが、一層青空を高く思はせるのであつた。

小曾根堅太は月末の支拂と、友達に返さなければならない借金の爲に、どうしても保險に入つてくれる人間を探さうと思つた。だが、自分はいつたい帝都生命の實習生なのか、皇國生命の實習生なのか、どつちの會社の契約人を探してゐるのか、どつちつかずの身の處置には迷はざるを得なかつた。

「募集は相手方と募集員との關係から見る時、これを大別して緣故募集と飛込募集とに分つ事が出來る。」課長の說明の中にさう云ふ言葉があつた。飛込みならば何處だつていゝ筈だ——さう思つて大通の東側と西側を見比べたが、堂々たる構の商店の、あけひろげた店つきが、到底彼を飛込ませはしなかつた。それは、今日迄氣の付かなかつた威嚴をもつて冷酷に並んでゐるのであつた。

緣故だ緣故だ、緣故の方が樂だと心にきめて、下宿近くへ引上げて來た。彼には、今や往來が一種の怖ろしさをもつて迫つて來た。何處も彼處も彼の來るのを待ちうけ、しかもやつて來たら侮辱し、嘲弄し、蹴飛ばしてやらうと待構へてゐるやうに見えた。その反對に、今日程に宿の四疊半のなつかしく思はれた事も無い。そこには多年倚り馴れた机がある。窓の外の隣家の朴の木の落葉迄、明かに目に見るやうに想ひ描く事が出來た。

それでもものめのめと下宿へ歸る不甲斐なさは許せない氣がした。彼は行きつけの烟草屋のめつかちの、おやぢに親しさを感じた。いつも店頭で新聞を讀むか、舊式なラディオの聽取器を耳にしてゐる好人物は、きつと同情してくれるに違ひ無いと思つた。

おやぢはひとつしかない眼にふたつ玉のある眼鏡をかけ、叮嚀に新聞を讀んでゐた。

「いらつしやい。」

習慣的に客を迎へ、新聞の中から目を出したが、馴染の顏と認めたので、直ぐにバットの箱をひとつ、硝子蓋の中から取出した。

「暑いね。」

小曾根はこれをとつて、一本抜出して火をつけた。
「お碧うござんすね。」
なんといふ無口な奴だらう――おやぢは客が直ぐ立去るものときめ込んで、又新聞の中に顔を埋めてしまつた。
「君は保險に入つてゐるかい。」と聞くつもりでゐたのだが、切出しかねてしまつた。彼は紫の烟を吐きながら、力なくその店を出た。
下宿の帳場にはかみさんが、年下の亭主と差向ひでお茶を飲んでゐた。
「小曾根さん、夏休みだつていふのに、毎日早くから何處へ出かけるんです。」
へぼ將棋の好敵手は、善良な聲をかけた。二階へ一二段上りかけた小曾根は、いゝきつかけとばかり、戻つて來た。
「實はね、面白い事をはじめたんだよ。」
彼は勸められる蒲團を貰つて、保險會社の實習に參加した事を、さもスポオツを樂むやうなゆとりを見せて話した。
「へえ、保險の實習つていふと、どんな事をするんです。まさか外交ぢやあないでしよ。」
「ところがその外交なんだ、大將ひとつ入つてくれないか。」
「何處の會社です。」
「帝都相互さ。」
「帝都か。あれはなかなかいゝ會社だ。で、一口出來るといくら位になるんです。」
「それはね、えゝといくらになるんだつたかな。」
小曾根は少してれて、對手國の手當さへ知らないと云ふ素人ぶりのかげにかくれ、わざとノオトを開いて見せた。
「こりやあいゝ、仕事だ。山や海に行つてぶらぶら遊んでゐるよりは餘程氣がきいてら。」
「全くねえ、小曾根さん、あんた儲けたらおごつて頂戴。」

かみさんは、滯り勝な下宿料が、この不時の收入ですつかり順調になる事を、すぐさま考へた。
「おごるとも、だから大將、一口入つてくれよ。」
「あたし達は駄目よ。とつくに二人ともつけてんだから。」
こゝだ、こゝで增契約をさせるのが、全くの新規の契約者に勸めるよりも樂なのだ。
「へえ、二人とも入つてんのか、いくらつけてる。」
「二千圓づゝでした。合せて四千圓だからね、隨分掛金が多いので弱つてまさあ。」
亭主の方が得意さうに答へた。
「無論帝都相互？」
「いゝえ、あたしとこは皇國でさあ、日本一堅いつて評判の會社だからね。」
さも自分の會社のやうにいふ側から、かみさんも心を合せるのであつた。
「何しろあんた、五拾圓の株が千圓とか千五百圓とかするつていふんですからね。大したもんぢやありませんか。」
小倉根には株の値段など初耳だつた。どうしてそんな馬鹿高いねうちがあるものなのだらう。矢張いゝ會社なのかな——
——だが待てよこゝで例の乘替つてやつを用ゐなくてはいけないんだと思つた。
「それがねえ、もうせんうちに長くゐた方で、安井さんて人があつたんですよ。その方が皇國生命の外交をやつてゝ、うまく勸められて入つちやんたんです。千圓づゝで澤山だつて云つたんですけど、とうとう二千圓づゝつけさせられてしまひましたの。」
「外交つてものは全く腕次第だからなあ。」
夫婦は互に信賴し合ひ、皇國生命と契約してゐる事で滿足し切つてゐた。
「だけどね、僕のきいたところでは、皇國生命もいゝにはいゝさうだけれど、帝都の方がそれ以上だつていふぢやないか。」

第一組織が違ふからねえ。」

小曾根は勇氣をふるひ起し、淺い知識の頼りなさを感じながらも、一生懸命で夫婦の信仰を動かさうとした。

「組織？　組織たあ何です。」

「組織は組織さ。つまり一方は株式會社で、片方は相互會社なんだ。」

「そんな事あどつちだつて同じさ。いゝ會社がいゝんで、惡い會社が惡いのさ。」

「ところがさうぢやあないんだよ。一口にいへば株式會社つてものは株主の會社で、相互會社つてものは加入者全部の共有なんだ。だから、株式會社では儲けるのは株主ばかりで、相互會社の方は加入者全部で利益を分けるんだ。」

「あたしやあ理屈はわからないけれど、つまり利益分配つてやつでせう。そんなら皇國の方にだつてありますぜ。年々掛金が減つて行くんでさ。」

「それはあるかもしれないが、しかしだね、假に二つの會社が同じだけ儲けたとするんだ。いゝかい。その中から兎に角株主配當つてものをいくらかでも差引くとすれば、差引いた方の加入者には利益分配が少ないわけだらう。」

「そりやお理屈さ。だがね、加入者の共有だなんて云つたところでかりにあたしが一萬圓契約したつて、社長にも支配人にもしてくれないぢやあないか。」

「しかしだね……」

小曾根は、新しく注入された知識の乏しさを感じるよりも、脱線してるやうで脱線してゐないやうな亭主の論理に閉口してしまつた。

「小曾根さん、駄目よ。もつと修業して來なくては。」

かみさんはあつさり片づけて、

「あんた、そろそろ出かけないと遲くなりやあしない？」

と亭主の方へ、いゝ加減にしてといふ目まぜをした。

「今日は一寸寄合がありましてね。」

亭主は直ぐに立上つてしまつた。

小曾根はとりつき場がなくなり、まぬけな自分を二階の四疊半へ運んだ。

「いけねえ、いけねえ。」

部屋へ入ると上着を脱ぎ、大の字に寢ころんで、自嘲するやうにつぶやいた。

下宿の亭主との問答で、結局要領は得なかつたにしろ、自分の立場丈は明かになつた。こゝの夫婦にむかつて、帝都生命の實習生だと名乘つたからは、皇國の方はすつぽかしてしまはふ。相原にあつたら、とても自分には保險の外交は出來ないからやめたと云つてしまへばいゝ——肚のきまつた安心で、午後も讀書を樂んだ。

だが、その安心も長くは續かなかつた。

「おい、ゐるかい。」

と云つて相原の巨軀があらはれたのである。

「どうした。いつしよに出かけようぢやないか。」

「何處へ。」

「保險會社さ。俺、昨夜保險の本嚙つたよ。なかなかむづかしいもんだなあ。」

「むづかしいさ。殊に募集と來たひには、とても僕達の手には合はないぞ、僕はごめんかうむらうかと思つてゐるんだ。」

「そんな弱音を吐くなよ。兎に角講義さへ聽いてゐれば二十圓にはなるんだからな。」

「だけど、みすみす出來ないとわかつてゐるのに二十圓貰ふのは氣が咎めるよ。」

「やつて見なければ、出來るか出來ないかわかるものか。俺は三日や四日は出來ると思ふんだ。まあ、いつしよに來いよ。

共同戰線を張つて、儲は全部山分にしようぢやないか。」

相原の熱心と、自分に借金のある弱味から、小倉根には友達の勸說をしりぞける丈の力が出て來なかつた。

五

小倉根堅太は心に重い負擔を負ひながら、朝は帝都生命に、午後は皇國生命に通つた。ふたつの會社をあざむいて居ると云ふ事が彼の苦痛であつたけれど、實習の效果は一段と深かつた。このふたつの會社が――恐らくは保險會社のすべてが――はげしい競爭から嫉視反目をつゞけ、あらゆる手段をもつて他をおとしいれ、罵り、きづつける事に努力してゐる事を知つた。

帝都生命の庶務課長は、口を開けば皇國生命の惡口を云つた。其處には何等の紳士的態度が無く、なんでもかんでも相手をやつつけてやらうとする外には何の目的も無かつた。自社が他社に比して有利であるといふ事を示すさまざまの印刷物があつたが、その多くは皇國生命と比較對照するものであつた。そればかりでは滿足しない。保險關係の新聞雜誌に金をやり、材料をやつて、こつちをほめ、あつちをけなす記事を書かせた。それが庶務課長の仕事の最も重要なるもの、やうに見えた。

上役が既にさうなのだから、それに敎育された專門の外交員は、口を開けば他社の弱點を衝く事に熱中した。小倉根の發見したところによると、保險募集といふものは、他の會社の契約の奪ひあひであつた。斯う迄うばひかすめる事をお互にやつてゐて、どうして八拾億なんて契約高にのぼつたのか、殆んど了解出來なかつた。

それに對抗する皇國生命も、決して默つて攻擊されては居なかつた。社風の相違か、幹部の人となりの相違か、この方は片方程露骨では無かつた。或はその相違は株式と相互の組織の相違に因るものかとも考へられた。株式會社の背後には更に大きい資本閥が控えてゐる。その睨がきく爲に、みんながおとなしく、遠慮深く、時には意氣地がなくなるのかもし

れない。相互の方は、誰も恐いものが無い。後日の事は考へず、思ふさま振舞つたつて、直に咎められる事は無い。これは小曾根の直感で、はつきりしたかたちは取らなかつたが、兩社の遣口のひとつひとつに、思ひ當る事が多かつた。一方はあく迄も實行本位當面主義であるのに對して、片方は少なからず理想主義に據つてゐた。片方がいきなり他社の攻撃を教へ込み、直ぐに募集の實際にあたらせる時、他方は兎も角も五日間の講義をつゞけた。その講義の五日目も今や終りとなつたのである。

「これで學科の講習はおしまひにしまして、これからは皆さんの腕比べに移ります。しかし、若し質問があるならば、遠慮無く訊いて下さい。」

赤い襟飾の新歸朝者は、さあどこからでもかゝつて來いといふ態度で、充分の自信を微笑の中に示してゐた。

言下に一人の學生が手をあげた。

「僕は、實は二三日前に勸誘を試みてみたんです。ところが、その相手の人つていふのが相互會社の信者で、株式會社は株主ばかりが甘い汁を吸ふしくみで、契約者は馬鹿を見るものだと云つて、てんでうけつけてくれないんです。」

「それで、あなたは何と云つたのです。」

「僕、この間きいた通り、株式會社も契約者に利益分配をするから同じだと云つてみたんですけれど、この會社の配當は帝都相互や九重相互よりも少ない。それは株主が暴利をむさぼつてゐるからだと云ふのです。」

「わかりました。」

何の雜作も無いといふやうにうなづいた。

「それはあなたの募集能力を試すのに絶好の機會です。今日これから直ぐに行つて、もう一度勸めてごらんなさい。先づ第一に先方は株式組織よりも相互組織の方がいゝと思つてゐるのですから、株式が決して相互に劣らない、否かへつて勝るものであるといふ事を說明しなくてはいけません。成程、相互組織では株主配當といふものはない。しかし、その利益

の全部が契約者のものになるのではない。誰よりも先に、重役が莫大もない賞與金をとつてしまふ。よござんすか、こゝに帝都相互の定款がありますから讀んでみませう。第三十六條「決算ニ於テ剰餘金ヲ生ジタル時ハ二十分ノ一ヲ法定準備金トシ二十分ノ一ヲ役員賞與金トシ殘額ヲ社員ニ配當ス」と明記してある。よござんすか。相互會社は株式會社を攻撃して株主が利益を壟斷するに反し、相互會社では之を加入者に分配すると云ふ。ところがその定款には、先づ利益は重役がとつてあとの殘りを加入者に分るときめてゐる。勿論これは、一面重役がとり過ぎないやうに制限を置いたものとも見られますが、しかし如何に重役が多額の金を懐に入れるかは想像に難くありますまい。株式會社の重役は株主の選んだものである。株主は利害關係が密接だから、常にその監視を怠らない。ところが、相互會社では、重役が何をしやうとも、實際上之を監視する人が無い。彼等は社員の選擧したものだといふ。然し事實上社員全員が參政權を行使するなど、云ふ事は不可能である。重役の選んだ代表が又重役を選ぶに過ぎない。だから、怖いものなしの相互會社では、重役が一人で二十萬三十萬と云ふ金をとつても、誰一人文句を云ふものは無いのです。よござんすか、ところが、萬一會社が損をした場合にはどうなるかと云ふと、一般加入者はすべて社員であるから、その損失を負擔しなければならないのです。株式會社なら株主が損をするところを、相互會社では加入者が損をする。例へば平生自分達の賞與を多く取る爲に、無理な儲けをしようとして株を買つて損をしたとする。近頃のやうに株の値下りのはげしい時、損をしないものは殆んどないと云つていゝ。そこで缺損になつた場合、數十萬人の加入者は、その損を負擔しなければならないのです。株主のやうに金錢出資もせず、平生莫大もない報酬をうけてゐる重役は、自分達の經營のやりそこなひを、契約者にしよはせてしまふのであります。實に結構な組織ではありませんか。言葉をかへていへば、契約をして保險證券を手にすると同時に、會社の損失はいつでも負擔しますと云ふ約束をしてしまつたのです。」

新歸朝者の顔面には熱情の血が上り明かに自分の所説に昂奮してゐた。

「おわかりになりましたか。」

「わかりました。ですが・何故相互會社の方が契約者にやる利益分配が多くて、株式會社の方が少ないのですか。矢張株主が利益をとるからではないのですか。」

質問者は何とかして、二者の優劣をはつきりさせ度いと云ふ、若者特有の心の動きを示してゐた。

「そんな事が。」

そんな馬鹿な事があるものかと、强くはねつけ度いのをこらへた樣子で、新歸朝者は緊張した顏に笑を浮べた。

「相互會社だから配當が多い、株式會社だから少ないと云ふ理屈はありません。或相互會社の配當が、或株式會社の配當よりも高いといふ實例はあります。たとへば、帝都相互の配當は我社の配當よりも多い。何故多いか。向ふが相互でこつちが株式だからではありません。向ふは高い保險料をもつてそれを割戻すに過ぎないのです。よござんすか。所謂高配會社の保險料は必ず高いときまつてゐます。我社は保險の合理化を唱へてゐる立場から、低率保險料主義です。高い保險料と安い保險料との差額は、とりもなほさず利益分配に等しいのですから、この點を考へると、我社の配當必ずしも彼に劣るとはいへないのであります。しかし、彼等は常に利益配當比較表といふものを作つて、持廻つてゐます。これは主務省から使用を嚴禁されてゐるにも拘らず、未だに跡を絕たないもので、業界謂ふ所の不正印刷物であり、魔表であります。何故魔表といふかと申しますと、遠い將來の配當などは全然豫測出來ないのに、これを確定配當のやうに欺瞞したり、八十幾才迄生きればこの通りの配當になるなど〻、途方も無い非常識な事を云つて說明するのであります。成る程、八十迄も生きれば配當は多いにきまつてゐる。だが、萬人の中幾人が八十迄生きられるか。斯う考へてみると、遠い將來のあるか無いかもわからない配當などよりも、契約した時から保險料の安いしくみの方が、どの位合理的であるかは說明を要さない事と思ひます。だから、高配主義によれば、比較的早く死ぬ最も不幸な人、即ち一番保險の恩惠を受く可き人が損をして、極めて少數の長壽者がとくをするといふ事になるのであります。こんな不合理な事がありませうか。」

恰も義憤を發するもの〻やうに、いつの間にか熱烈な語調で論じるのであつた。

誰よりも興味深く感じたのは小曾根堅太に違ひ無かつた。帝都生命では株式會社の惡口をいひ、皇國生命では相互のからくりを指摘する。彼の課長の人を喰つた株式排撃の猛烈なのにも驚いたが、この若い社員の相互攻撃の熱情にも打たれた。だが、どつちにも理屈はあるんだ。と考へるよりも、どつちもよくないのだと考へ度い氣の方が强かつた。世間といふものは、かう迄あくどく鬪爭的なのかと、世間しらずの彼は、手も足も出ない心持に襲はれたのであつた。

「なほ明日からも日に一度は必ず會社に來て頂き度いのですが、講義は今日で終りとしまして、これからはみなさんの腕だめしです。では、最初御約束致しました通り、甚だ輕少ではありますが、電車賃として金貳拾圓宛差上ますから……」

彼は壇を下つて、一度室の外へ去つたが、直に東京支部副長豐留隆之進を伴つて戻つて來た。毎日會社でゐねむりばかりしてゐる三十餘年勤續の老人は、たゞにこにこして、めいめいに、紙袋に入れた金貳拾圓を渡した。

渡された學生は、或者は羞しがり、或者は面喰つた。はじめからきかされては居たものゝ、現在紙包を貰つてみると、かなりの負擔を感じるのであつた。

「おい、銀座に進出しようよ。」

「豪遊々々。」

「俺、こいつを持つて、鎌倉山のキャンプへ行かうつと。」

「ありがてえ、ありがてえ、下宿代の半分稼いぢやつた。」

友達同志話合つたり、漠然とした同志感で、身近の仲間にうけて貰ひ度い爲、輕口を叩く者もあつたが、それとても、貰ふ可からざるものを貰つたやうな氣持の惡さをごまかす辭に過ぎなかつた。

「え、流石に大きいところを見せたぢやあないか。ほんとに二千圓くれやがつたからなあ。」

相原は頗る上機嫌で、小曾根の肩を叩いた。

「どうだい、今晩はビフテキの血の出るやつを喰はふぢやあないか。大に英氣を養つて、明日から斷然尖端を切つてやる

ぞ。」

長い間下宿の飯で我慢してゐた小曾根も、脂肪を含んだ獸肉の切れば血の出るやつと、むせるばかり白い粉を吹いた馬鈴薯と、和蘭芹の眞青なのが載つてゐる大皿を、忽ち眼の前に想ひ描き、その誘惑には完全に抵抗力を失つてしまつた。

六

帝都生命保險相互會社でも、皇國生命保險株式會社でも、實習の學生達は、吹込まれた丈の知識を持つて、或者は勇敢に、或者はびくびくしながら、おもひおもひの募集を始めた。

小曾根堅太も自分の力量を示し度い心持もあり、相當な收入も欲いし、又皇國生命に對しては二十圓に對する義理も感じて、どうかして一口でもいゝから契約し度いと思つた。だが、彼の活動を內部から邪魔するものがあつた。それは、ふとした弱氣から、つい二つの會社に關係してしまつた自分を咎める良心である。

日が經つと、どつちの會社でも、ぼつぼつ落伍する學生があらはれて來た。毎日の出勤簿に、判を押す數が少なくなつた。二十圓貰ひつ放しで、海水浴へ出かけた者もあるらしかつた。

「どうも怪しからん。學生にあるまじき事だ。」

「よおし、橫着な眞似をする奴は學校へ報告してやるぞ。」

「どちらの會社も、出て來ない學生に對してはひどく憤慨した。さうきくと、他人事ならず思はれて、逃出す機會は愈〻少なくなつた。

一方には、少しづゝでも契約をとつて來る學生もあつた。すると、その所屬校名と氏名と契約金高とが、大きく書き出され、多數の正社員――內勤も外交も女の事務員も、それを見に來た。帝都では課長が、皇國では赤い襟飾の社員が、その優績者を口を極めて稱讃した。

「おい、俺達も愚圖々々してはゐられないぞ。明日から戸別訪問をやらうぢやあないか。」

相原は競爭心に燃え、二人共力してやらうとしきりにいふのであつたが、小曾根は友達と連立つて、頭を下げて歩く事をいやがつた。さう云ふのつぴきならない立場に自分を持つて行くよりも、いつか來るらしい機會を、自分一人で自由に待つ方を希望した。

しかし、そんな都合のいゝ運は廻つて來なかつた。毎日見たり聞いたりするのは、どつちの會社でも他社の惡口をいひ、手段を盡して相手を傷つける事ばかりだ。

いやだ、いやだ。何といふ商賣だらう。生命保險程貧い事業は無いといふけれど、その貧い職業の實際は、何たる醜い遣口なんだらう——小曾根は世間で保險會社、保險會社員、引いては保險そのもの迄いやがるのが、決して無理で無いと思つた。彼は屢々實習を遁走する機會を待つた。

相原も元氣な口はきくものゝ、想像以上に困難な仕事には辟易してゐた。

「兎に角こいつは根氣仕事だよ。あく迄も押が強くなくては駄目だね。それにはどうしたつて單獨では押切れない。二人で頑張つて見ようぢやあないか。」

逢ふ度に執拗く口説かれて、小曾根もとうとう同意してしまつた。

どの方面がいゝ、あつちは駄目だと相談の末、結局學校附近の顏見知の商店を、先づ第一に訪問する事になつた。

暑い日であつた。折角貰つた二十圓も、いゝ氣になつて飲み喰ひにつかつてしまつて、殘り少なくなつてゐた。二人は、學校の門前の蕎麥屋で天井を喰つた。

「おい、こゝの亭主勸めて見ようか。」

「駄目だらう。あいつ變に氣むづかしさうな面をしてゐるから。」

「面なんかどうだつて構ふもんか。」

相原は小倉根の氣のすゝまないのをおつぶせて、帳場で帳あひをして居る亭主の方へ辭をかけた。
「おやぢさん。」
「ありがたう。御勘定ですか。」
「あゝ、勘定も勘定だけれど、君保險つけてるかい。」
「保險ですか。少しやあつけてますよ。」
「何といふ會社。」
「會社ですか。何ていつたつけなあ、極東つていつたかしら。」
「そいつあ、火災保險だらう。」
「えゝさうなんです。もう餘程前だつたが、近所に火事のあつた時すゝめられてね。」
亭主は突然思ひもかけない話を持出されたので、ふしぎさうにこつちをすかして見てゐたが、何の利害關係も無しと見定めた樣子で、首をうしろへ廻すと、奥で働いてゐる若い者に怒鳴るやうにきいた。
「相模屋さんの冷麥二ツ、もり三ツは出たかい。」
ぶつつりと話をたちきられて、相原は小倉根と顏を見合せた。畜生、相手にしないなと思ふと、しつつこくやつてやれと考へ直した。
「あのねえ、僕達體驗の爲にやつてるんだが、少しでいゝから生命保險に入つてくれないか。」
亭主は、學生客からそんな事を持出されたのが不思議さうに、疑深い眼でじいつと見つめたが、至極簡單に突放した。
「あゝ、生命保險ですか。あいつあ嫌ひだ。死んでから金を貰つたつて爲樣が無いや。」
「生きてゐるうちに貰へる養老保險ていふのもあるぜ。」
「かんべんして下さい、蟲が好かないんだから。」

とたんに壁の上の電話が鳴つた。

「え、え、ざるが四枚、うどん휴で天ぷらがひとつ。かしこまりました。御湯屋の裏の山木さんですね。わかつてます。毎度ありがたうございます。」

受話機をかけると、見向きもしずに、のれんの向ふへ消えてしまつた。

「ちえつ、よく出來てやがら。」

相原は舌うちして、やけに銀貨を二枚放り出した。

おもてに出ると、二人は聲を出して笑つた。

「ふり出しが悪かつたなあ。」

「だからよせつて云つたんだ。」

「今度は君に頼むぜ。あそこの唐物屋のおやぢにあたつて見よう。」

「困つたなあ、僕全く自信がないんだ。」

小曾根は、いつも店さきで懐手をし、往來を睨んでゐる亭主が留守である事を祈つた。そこでは、つい此間靴下を一足買つたのだ。

「弱つたなあ。」

「勇氣を出せよ。」

ちよつと手前で氣が挫けて、思はず立どまつてしまつたが、相原に促されて、二人は洋品店に入つて行つた。店には十二三の女の子が、少女雜誌を讀んでゐたが、いきなり、

「お父さん。お客さまあ。」

と甲高く、語尾を引いて呼んだ。

「いらつしやい。」
聲に應じて亭主が出て來た。
「お暑うございます。何を差上ます。」
揉手をして、本來無表情な顔なのに、習練で覺えた笑を湛へ、ひよこひよこ頭をさげた。
「僕、半巾も欲いんだけれど、それよりも……」
しまつたと自分でも思つたが、既に遲かつた。
「へえ、半巾を。」
亭主は直に手近の商品を一つ二つ客の前に並べて見せた。
「ダアスならばお安く願つて置きますが……」
「いや、一枚でいゝんだ。」
すつかり押され氣味になつて、小倉根は懐の蟇口を出した。
「君。君は生命保險に入つてゐますか。」
頼甲斐なしと見てとつて、うしろから相原が口をきつた。
「生命保險? へえ、少々ですが……」
「何處の會社。」
「會社ぢやあないんで、簡易保險です。おかみでやつてる。」
「さうか、そんなら僕達の爲めに一口入つてくれませんか。皇國生命ですがね。夏期實習つていふんで、僕達も勸誘してゐるんだけれど、實はまだ一件も出來ないので、弱つてるんです。」
喋つてゐる相原も、側ではらはらしてゐる小倉根も、額から汗がしとゞに流れた。

「そいつあ物好きですなあ。」

亭主はやつと呑込めたと云ふ様子で、忽ち顔面からは笑が消え、揉手をしてゐた手を開いて横に振つた。

「もう保險は澤山です。いろんな會社が來てうるさくて弱つてるんだから。」

「だけど僕達の爲に……」

「駄目ですよ、保險は。一つの會社に入ると、外の會社が默つて居ないんだから……」

亭主はもう一度手を振つていやだといふしかめつ面をして、小倉根の置いた錢を手の平にのせ、奧へ引込む氣勢を見せた。

「なんだい、一口位つきあつてくれたつていゝぢやあないか。君んとこだつて、學校があるからこそ商賣になつてゐるんだぜ。」

相原はむかつ腹を立てゝ、書生流のたんくわを切りはじめた。

「よせよ。わからない奴にはわからないんだから。」

小倉根も中腹だつたが、友達をなだめておもてへ連れ出した。

「なんでえ、生意氣な口をききやあがつて。保險の保の字をきくと、直ぐさま態度を變へたぢやあないか。よおし、あいつんとこ非買同盟をやつてやるぞ。」

炎天の路上で相原は行人のかへりみるのも構はずに憤慨した。小倉根はすつかり參つてしまつて、今買つたばかりの雪白の半巾で、顔中の汗をしきりに拭いた。

「今日は。」

相原は不機嫌になつて、何も云はず、大またに歩いた。小倉根はその後から、引摺られる形でついて行つた。

相原は突然本屋の前に足をとめた。

「お久しぶりですね。お國にはお歸りにならないんですか。」

「あゝ、保險會社の夏期講習をやつてゐるんだ。それでお願に來たんだが、僕達の爲に一口入つてくれないか。」

「そりやあ入らないものでもないが、いつたい何處の會社です。」

「皇國生命さ。」

「そいつあ駄目ですよ。先月だつたかな、實は檢査を受けたんだが、血壓とかゞ高いから御免かうむるつていやあがるんです。なんだい、こつちからお願して入らうつて云つたわけぢやあない、向ふが幾度もしつつこくやつて來て、無理やりうんと云はせといて、いざとなるとそれなんですぜ。その上いひぐさがいゝや。うちの會社は診査が嚴重だつて、ぬかすんです。嚴重もくそもあるものか、へつぽこ醫者に何がわかるもんですか。あたしつてえ人間は、生れてから今日迄、薬つてものは見た事もないんですぜ。それをさ、血壓が高いからいけないつていふんだ。馬鹿にしてるぢやありませんか。」

亭主は肥つたからだを半分むき出しで、大きな團扇で胸毛を煽ぎながら、一氣にまくしたてた。

「さうか、そいつは弱つたなあ。」

流石の相原もうけ答へをする勇氣も無く、頭を掻いて引さがつた。

「では又。」

二人は力の拔けた顏を見合せて、又みちばたで評定をはじめた。

「いけねえ、いけねえ。とても吾々紳士のやるべき仕事ぢやあないよ。なんだいあのぢゝい、あんなにぶくぶくしてゐりやあ血壓だつて高いだらうぢやあないか。腦溢血でくたばるとも知らないで、薬つてものは見た事もないたあなんだ。」

何處に行つてもうまく行かない。もう手の屆くところにはあても無いといつた心狀で、無責任な惡口をいふのであつた

「よさう、よさう。一日でも早くやめるのが一番利巧だ。」

弱氣では小竹根の方がうはてだつた。

「二十圓貰つてゐるのが癪だなあ。あいつを使はずにとつといて、叩きかへしてやればよかつたんだが……」

相原の言葉が、小脅根には一層深い實感である。二人とも共同感に捉はれて、その上口をきかないでも、相手の心持がよくわかつた。

俄かに重たい足を引擦りながら、このまゝ電車の停留場へ行く、電車に乘る、別れ別れに下宿に歸る。その外には何の目標も無かつた。馬鹿々々しさと、氣疲れと、隙間の出來た心持は、肉體に迄もあらはれて、呂氣もきびしく堪へて來た。

だが、小脅根の心の中には、此の頃の惱みだつた實習を、御免かうむる時機が愈々到來したのだと思ふ安堵もあつた。ふたつの會社にかゝりあつてしまつた心苦しさもなくなるのだ。ちつとも働かないでやめるのなら申譯が無いが、兎に角やつて見るには見たのだから、それで出來ないのは自分の運が惡いのだ。力量が足りないのだ。爲方が無いぢやあないかと自分を慰めた。

「おい、どうだらう。」

相原が不意に立どまつた。

「もう一度丈やつて見ようぢやあないか。」

「駄目だよ。」

「駄目かもしれないが、あんまり癪だから、最後にひとつ大物にぶつかつて見よう。それがいけなかつたら斷然やめる。俺達に一番勝手のわかつてる學校附近で一口も出來ないとなりやあ外の土地へ行つて出來るわけはないや。だから絕對にこれつきりときめて、ぶつかつて見ようぢやあないか。」

「ぶつかるつて、何處にぶつかるんだ。」

「あれさ。」

相原の指は、向側の鞄屋を差した。

「駄目だ。あすこのおやぢと來たらとても凄いさうだぜ。祭の寄附もした事が無いつていふんだから。」
「だから金はうんとあるんだ。この界隈では實力第一だつていふんぢやあないか。」
「だらうとも。鞄屋はおもてむきで、本業は高利貸ださうだから。」
「さういふ奴がかへつてわかりが早くていゝんだ。あした死んでも十五萬圓とれるときいたら、喜んで保險に入るさ。」
「入るものか、自分の死んだ後で十五萬圓貰つたつて爲方が無いと思ふだらう。」
「さうぢやあないよ。あいつが死身になつて金をためてゐるのは、自分が道樂をし度いからぢやあない。たゞためるのが樂みなんだ。命と金とどつちがいゝと云つたら、きつと金の方をとる奴だよ。こいつあ存外いゝ鴨かもしれないぞ。」
「鴨ならいゝが、禿鷹だからな。」
店頭にいつも苦い面をして坐つてゐるおやぢの風貌を適切に表現した滿足で、二人は朗かに笑つた。
「最後の一戰だ。行かうぜ。」
桐原は力づける爲に友達の肩を叩いた。
「今日は。」
無理に元氣のいゝ聲をかけて、鞄屋の店に入つて行つた。
「いらつしやい。」
血色のよくない娘が、いつもはおやぢのゐる所に坐つてゐた。
「大將ゐますか。」
「はあ。」
品物を買つてくれる客では無いと見てとつて、用心深く身を構へた。
「ゐるんだつたら、一寸御目にかゝり度いんだが。」

娘は、何と答へていゝか迷つて、怖いものにつかまつたやうに立上らうとして立てない姿だつた。

「おたみ、おたみ。」

奥から最低音で呼びながら、常の主人が出て來た。

「なんだ、お客さまか。」

商賣馴た眼で、これがどういふ客か大概はわかつたらしかつた。

「お前奥に行つて、お母さんを見てゐてくれ。」

いふと娘は逃るやうに立つて行つた。

「病人があるものですから。」

それつきり、ぢいつと二人の顔に眼を据ゑた。用があるならさつさと云へといふ態度だつた。凸字形の頭の天邊は禿げてゐるが、それも赤々と光つたのでは無く、妙にくすんだ禿だ。廻りには少ない割に濃い毛が殘つてゐた。凹んだ眼、出齒の口が肉食鳥を想はせるのであつた。

「僕達學校のものですが、この夏休を無駄に過し度くないと思つて、保險の實習をやつてゐるんです。何しろ各學校から來てゐるので、僕達も出來ないと學校の名譽にかゝはりますから、特に學校附近の方に加入して頂き度いと思つて來たのです。」

相原は小倉根をかへりみて、力を貸せとめくばせした。

「あなた方に保險の必要を說くのは生意氣ですけれど、現在の社會に於て、殊に家族主義の日本では……」

「わかりました。昨日もそいつをさんざんきかされましたよ。」

一生懸命で喋らうとする小倉根の舌を引拔くやうに、おやぢは手を振つて遮つた。

「此間から保險の人がしきりに來るんです。あなた方みたいな素人ではなくて、髯の生えた人達ですがね。昨日なんざあ、

どういふ日柄だつたか、二人かち合ひましてね。」

その二人と眼の前の二人をいつしよにして嘲るやうに、黄色い不規則な歯を見せて笑つた。

「さうですか、本職の人が來るんですか。何といふ會社でした。」

「昨日來たのは帝都つていふのと皇國つていふのでしたかね。」

「へえ、皇國の人が來たんですか。實は僕達その會社の實習生なんです。」

「それで、どつちの會社に入る事になつたんです。」

二人は詰寄るやうに興味を持つた。

「私も保險は惡いものではないと思つてゐた。若い時に入るのは損だけれど、もう眊き保險のつけられない年になつたら、入つて置く方がいゝと思つてゐたので、どつちでも安い方、割引の多い方に入らうつて云つてやりました。」

「そんなら皇國の方がいゝぢやないかな。ほかよりも保險料が安いさうですよ。割引つて事は僕達知らないけれど、出來る事なら會社に行つて話してみます。未だ昨日の人に約束してないのなら僕達の手で入つてくれませんか。」

「こつちは誰の手でも同じだ。一番とくのいくやうにしてくれゝば。」

相原は小倉根をかりみて云つた。

「つまり僕達が會社から貰ふ手數料を全部あげればいゝんぢやあないかしら。」

「さうだなあ、一度歸つて會社で訊いて來ようか。」

「そんな事してゐると、外の人にとられちまやあしないか。」

いゝ智惠の無いのに當惑して、たゞ顔を見合せてゐるばかりだつた。

そこに一人の人物があらはれた。白洋袴、アルパカの上着、折鞄を抱へ、扇子を使ひながら入つて來た。

「いよう、これは、お客さまですか。」

帽子をとるか、膝の下迄手をさげて、二三度おじぎをした。髮をきちんと分け、チャプリン髯をはやした紳士は、頗る表情に富んでゐて、眼鏡の奥の細い眼は、始終微笑を漂はせた。

「昨日はどうもとんだ御邪魔を致しました。又伺ふのもどうかと思ひましたが、せめて熱心丈でも買つて頂かうと存じましてな、はははは」

口をちいさくして笑ふのが、ほほほほほと聞えるやうでもあつた。絶えず二人の學生の方にさぐりの視線をそゝぎながら、椅子にかけて、洋服の袖口から扇子の風を入れた。

「さ、どうぞ御用談をおすませ下すつて……」

あるじも學生も何もいはないので、突然侵入した事を詫るやうに、双方へ愛想笑を見せた。

「この方達も保險を勸めに見えたのですよ。」

あるじは紹介して、にたりと笑つた。

「へえ、保險を。あゝうちの會社で此の頃やつてる學生さんのお稽古ですな。この暑いのに御苦勞ですな。いかゞです、成績は。よなみが悪いから、なか〱むづかしう御座んせう。はゝゝゝ。しかしこちらさんに目をつけたところは中々立人ですぜ。油斷も隙もあつたもんぢやあない。ねえ、旦那。はゝゝゝ」

「あなたは皇國生命の方なんですか。」

相原は正にそれに違ひ無いと思つて訊いた。

「え、皇國？　あゝ、あなた方は皇國の方ですか。さうでしたか。驚いたねえ、これは。」

又しても笑ふのだつたが、忽ち表情が變つて、明かに敵意と輕蔑の色を濃くした。

「昨日もこちらで御社の方とたちあひましたがね、今日は學生さんを差向けるたあ、楠孔明はだしだね、成程、學校が御近所だ。理窟で爭ふよりも義理人情で行かうといふんだ。偉い。敵ながら天晴々々。」

冗談めかしくいひながら、露骨に挑戰の態度を執つた。

「僕達會社から差向けられたんぢやあないんです。自分で勝手にやつて來たんです。」

相原は正直に釋明したが、相手はあく迄も翻弄するやうに、

「さう、いかにもさうでせう。ですがね、今日のところは御引取を願ひ度いものですな。こちらさまは私の方がさきに伺つてるんだ。ね、いはゞ私の繩張でさあ。素人衆に繩張を荒されたとあつちやあ、私の立場がないや。第一あなた方のやうに親御さんから學資を貰つて、學問をしてる方が遊半分になさるのと、これで親子六人が喰つて行かうつてのとは違ひますあね。こちらさまに御願ひしようつていふ契約を、あなた方にとられて御らんなさい、親子心中のほかありませんぜ。由々しき社會問題ですよ。ねえ、旦那。さう云つた理窟ぢやありませんか。」

學生達はまくしたてられて、口を返す隙も與へられなかつた。

「あたしの方はそんな事はどうでもいゝんです。何處の保險會社でも、一番利得のいくところにつけようつて云ふんだから。」

あるじは相變らず苦り切つた顔つきで、うるさゝうに云ひ切つた。

「御尤で。つまり一番とくのいく保險ていふんだからいかにも合理的ですな。それには憚りながら帝都生命だ。相互組織で、契約者配當がたんまりあつて、保險金の支拂には一度だつてこだわつた事が無い。」

「ですが、保險料は皇國の方が安いんぢやあないんですか。」

口惜しさうに相原が口を挾んだ。

「え、保險料が安い？　よさうよ。はゞかりながら帝都生命の監督勝俣三次郎をつかまへて、保險の講義はないでせう。は、、、、」

「いゝえ、講義をするなんてそんなつもりぢやあないんですが、こちらの御主人は安い會社に入るつて云つて居るんだか

ら……」

「困るねえ、學生さんは生一本だ。保險料が安くたつて、配當が少なけりやあ結局高いものについちまうでしよ。皇國さんでは、どんな事を敎へ込んだか知らないが、百聞一見にしかずだ。旦那に御目にかける積で持つて來た比較表があるから見せて上げよう。」

いかにも貴重品を取出すやうに、折鞄からいろ〳〵の印刷物を取出した。

「よござんすか。これは六大會社の保險料と配當の比較表ですよ。假に年齢二十歳の人が各社夫々一萬圓宛契約したとしますね……」

帝都生命の監督は、口では學生達を相手に喋つてゐるものゝ、印刷物は彼が旦那と呼ぶ禿鷹の方へ展げて見せて說明をはじめたのである。

小倉根は臍を冷してしまつた。こゝにあらはれた人物が、帝都生命の社員だとわかつた時、自己の犯した罪科をあばかれたやうに參つてしまつた。自分の方では知らなくても、先方では自分がその會社の實習生の一人だと云ふ事を知つてゐさうな心配があつた。口をきいてゐるうちに、見拔かれはしないだらうかと云ふ恐怖があつた。

「今日は。」

突然聲をかけながら、勢よく入つて來た男があつた。白地の服に白靴で、左に折鞄右に扇子を持つた姿は、矢張保險會社員型であつた。

「やあ、帝都さんに先を越されてしまつたな。つい、二三軒廻つて來たもんだから。」

むかういきの强さうな中年の社員で、かんたんにあるじに挨拶し、二人の學生を無遠慮に見ながら、帝都生命の社員と並んで腰かけた。

この男が入つて來ると、今迄得意になつて自社の有利な事を說明してゐた帝都生命の監督は、あわて、印刷物を折疊ま

うとしたが、新來の客は見逃さなかつた。

「なんです、それは。例の魔表ですか。」

「魔表？　そんなものぢやありませんよ。は丶丶。實はあなたの方の實習生だつて方が見えてゐましてね、こちらの旦那の契約をとらうとしてゐるもんだから、一寸私の方の立場を説明してるたわけなんで。」

「へえ、あなた方はうちの會社の實習をやつてるんですか。およしなさいよ、學生は學生らしく勉强してゐればいゝんだ。月給無しで働かせようといふ會社の蟲のいゝ肚なんですぜ。帝都さんの方でもたしか同じやうな事をやつてるんでしたな。」

「全くつまらない事ですよ。吾々の商賣の妨害になりまさあね。」

「やり切れないなあ。吾々お互に競爭してゐるそばから、づぶ素人の書生さん迄地盤を荒しに來るんだから。」

相原も小倉根も、一人と二人でも太刀打の出來ない相手に、共同で對抗されては口をきく事も出來なかつた。さりとて退去するきつかけも惠まれないので、間の惡さを頭を搔いたり、にやにや笑つたりして胡魔化した。

「時に大將、いかゞでせう。今日は是非ともはつきりした御返事を頂かないぢやあ、お店からつき出される迄動きませんぜ。」

皇國生命の社員が先づあるじに肉薄して行つた。

「私はどつちでもいゝんですよ。とくのいく方に入らうといふだけなんだ。」

あるじは低く太い聲ではつきり云ひ切つた。

「いつたいこちらは私の方が先口なんだから、そこはちつと遠慮して頂かなくちやあ。」

帝都生命の社員が、顏丈は笑ひながら、どうしたつて讓步するものかといふけしきで云つた。

「それはいけませんよ。成程あなたは私より先口かもしれないが、うちの會社の牧口つて男が、もうせんから度々うかゞつてゐるんです。その男が地方駐在になる時、私に地盤を讓つて行つたんだから、どつちかといへば私の方が先口なんだ。」

「そんな昔の事を云つたつて爲方がない。第一その頃は、こちらの旦那保險嫌ひでゐらつしやつたんですからね。ねえ旦那さうでしたねえ。」

「どつちが先どつちが後なんて事はどうでもいゝのですよ。手取早く、どつちがとくだと云ふ事がわかれば三萬や五萬はお願ひしてもいゝと思つてゐます。」

あるじはあまりの長丁場に、段々辛抱しきれなくなつて來てゐた。

「どつちがとくと云つてこいつは一寸むづかしい問題なんですが、いかゞでせう、私も一歩讓り皇國さんにも讓歩して頂いて兩社半等に入つては頂けますまいか。こちらさまなんざあ、十萬でも二十萬でもお入りにならうと思へばなれるんだから。いかゞでせう、皇國さん。」

「私の方も別段異存はありませんがね。」

「それは私がいやだ。」

あるじは又はつきりと云ひ切つた。

「どつちも同じものなら半分してもいゝ、理屈だけれど、互に違ふ組立てゞやつてゐるとすれば、どつちかゞよくて、どつちかゞ惡い筈だからね。ちつとでも損するのは商人として冥利のつきた話です。」

「御尤で。ですから、私共としては、まあ帝都さんの方にも夫々御立場はあらうとは存じますが、何と云つても保險料の安いと云ふ事が一番お客樣に親切なんぢやあないかと思ひますので……」

「ですがね、保險料は安いとしても、配當つてものを考へなくちやあ。」

「配當々々つて二言目には仰るが、いつたいその配當つてもの程あてにならないものはないぢやありませんか。四分だ四分五厘だといふけれど、確定配當つていふわけではなし、第一此の頃のやうな不景氣がもう二三年も續いてごらんなさいな、有價證券の値下りで、配當どころか保險金の削減なんていふいためを見ないとも限りませんぜ。それよりは最初か

ら保險料の安いといふのが間違のない利益ぢやありませんか。」

「そんな事は斷じてありませんです。理屈の上であるかもしれない位の事を想像してみたつてはじまりませんや。何しろ過去數十年間、配當をつゞけて來て、その率が段々よくなつてるんだから間違ひ無しでさあ、私共の方は皇國さんとは違つて、年々累加配當ですから、失禮ながら長い間には大分の開きが出來る勘定です。」

二人は言葉丈は叮嚀だが、全く喧嘩面になり、顏と顏とをつき合せて、鬪犬のやうに爭ふのであつた。

「どうもそんな形の無い事を云つたところで、どつちがいゝのかわからない。それよりも、先刻あなたの出して見せた比較表つてものをもう一度見せて下さい。あれだと帝都の方が割がいゝやうだつた。」

あるじが早い結末を希望して證據の提示を求めた。

「冗談いつちやあいけません。あんな表があてになるもんですか。自分の方の都合のいゝやうに、馬鹿々々しいつくりごとをしてゐるんだから。」

皇國生命の社員の語氣は荒くなつた。

「何がつくりごとです。各社の料表をその儘寫したので、それに間違があれば間違つた會社が惡いんだ。」

相手も釣込まれて、技巧的な言辭をかなぐり捨てた。

「つくりごとさ。八十歳の時にはこれこれの配當だなんて、人を馬鹿にした話ぢやあないか。八十迄生きる人間はいつたい幾人あるんだ。」

「それは便宜上八十歳で說明してゐる丈で、六十にしたつて七十にしたつていゝんだ。保險料が安い安いといひながら、六年目か八年目から、しみつたれな配當をする會社とは違ひますからね。」

「何。しみつたれだ。しみつたれとは何です。保險料の安いと云ふ事は一番合理的なんだ。それが學者の定說だ。あてにもならない配當を、あてになるやうに見せかけて賣込まうとするのは詐欺だ。」

「詐欺だつて。ちつと言葉を愼んで貰ひませう。」

段々いひつのる聲が高くなつて來たので、往來の人が足をとめて、店の中をのぞきはじめた。奥からも、先刻の血色のよくない娘が心配さうに顔を出し、使ひさきから歸つて來た小僧は、面白さうに立はだかつて見守つてゐた。

「いつたい君の會社は怪しからん。殆んど眞面目な募集はやらないで、そんな魔表をつくつて他社を中傷して歩いてゐるんぢやあないか。」

「そんな事はお互さまだ。君の方だつて保險雜誌を買收して、他社の中傷をやるし、でたらめな配當表をつくつて持廻つてゐるぢやあないか。」

「そんな事は斷じてない。あるといふなら證據を出したまへ。」

「證據はいくらでもある。吾々の會社に來ればいつでも見せて上げよう。いつたい掠奪々々と騷ぐけれど、それは弱蟲の泣言だ。掠奪されるのは、そつちの保險が劣るからだ。斷然いゝものなら奪はれる筈がない。優勝劣敗さ。」

「馬鹿な事をいつちやあいかん。掠奪はあく迄も不正だ。そんな魔表をつくつて、素人を欺くんぢやあないか。勿論御承知だらうが、配當豫想表つてものは商工省で嚴禁してゐるんだぜ。見せたまへ。そいつを持つて、いつしよに商工省へ行つて見やうぢやあないか。」

「何を子供らしい事をいつてゐるんだ。役所は役所でやかましい事を云ふだらう。しかしお互は商賣なんだ。何處の會社だつて、みんな豫想表はつくつてゐる。」

「何。子供らしい事をいふなと。」

「子供らしい事ぢやあないか。」

「何が子供らしいんだ。」

竝んで腰かけてゐたのが、何時の間にか向合つて、支離滅裂な口爭ひにおちいつてしまつた。

あるじの禿鷹は默つて二人を睨んでゐたが、苦々しげに舌うちすると何もいはずに席を立つて奥へ引込んでしまつた。

相原と小曾根は、店にいつぱいに人立ちがして、内部にゐる自分達はすべて一味と思はれてゐるらしい景色に氣がつくとぎよつとした。

「かうなればうでづくでも負けはしない。斷じてきさま達にひけをとるものか。」

「ははははは、理屈ではかなはないから暴力で來るか。」

「口でいつてわかる相手ならいくらでも説得してやる。わからん奴はなぐるより外に方法がないぢやあないか。」

どこ迄行くか、今にも双方立上りさうな氣勢を露骨に見せて、互に口汚なく罵りつゞけた。

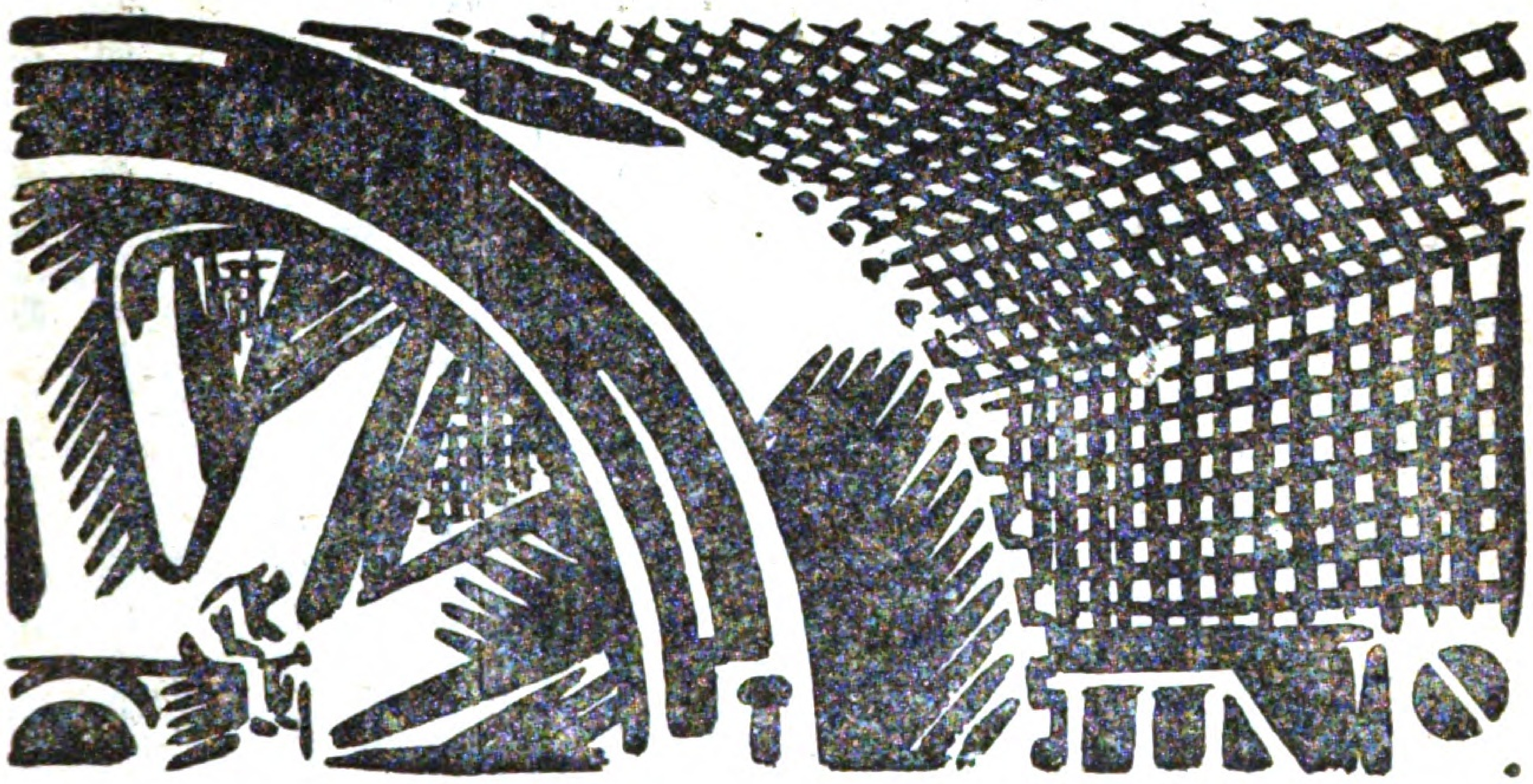
「おい、行かう。」

小曾根は相原の肱を突いて、そつと立上つた。あとからあとから彌次馬が殖え、川口の上潮時のやうに、店内にあふれさうに見えた。

二人はその人立ちを掻分けておもてに出た。ほつとして明るい往來を見渡した時、つい目の前に向ふからかけて來る巡査の白服が見えた。

「ひでえもんだなあ。」

二人は互に顔を見合せて苦笑した。その醜状を我身の事のやうに感じながら、俄に湧上る汗を拭き拭き、ぐつたり疲れた體と、反撥力を失つた心を重荷にして歩き出した。（昭和五年八月二十四日）



一つの性格

片岡鐵兵

どうかなる、と思つた。それが一生の失敗だつたのかも知れない。双方の親たちは、二人を結婚させたいと思つてゐるのだ。二人が親しくなつて行けば、かげで密かに頰笑み合つてゐたのに違ひない。親たちは二人の若い男女を近づけよう近づけようとして、様々の見え透いたトリックを用ゐた。二人はそれを十分に意識しながら、わざと親たちのトリックにはまつて行つた。まみ子の方は兎も角、奎吾はさうして行きながら――なに、いざとなればどうにかなる、と高をくゝつてゐたのだ。が――それがわるかつた。一生の失敗――とまでは云へないにしても、確かに禍根を殘した。

奎吾は、まみ子が氣に入つたし、まみ子は奎吾が好きだといふ、世にも珍しからぬ條件に二人はすぐ落込んでしまつた。氣がついた時に

は、もう抜きさしならぬ所まで、二人は來てゐた。
まみ子の家は四谷にあつた。大きな邸の中には欅の樹が逞しい邸の上に搾えてゐた。奎吾が訪れると、家の人たちはいつも氣を利かして呉れる。二人だけを、離れの二階の一室に殘して、まみ子の父も母も、召使までが寄り付かぬやうにした。その部屋の隣はまみ子の寢室兼化粧部屋だつた。紅いカアテンの垂れ下つた寢臺と、三面鏡とがあつた。三面鏡のスタンドには、香水ふきや、巴里グラン會社のクリイムや黑い假面を冠つた人形の型をした白粉の瓶などが竝んでゐる。
或日だ――
二人きりで部屋に坐つてゐるうちに、ぽつぽつ退屈して來た。奎吾は立上つた。隣の部屋との間に小さなドアがついてゐる。それが半開きのまゝになつてゐる所まで歩いて行つて、
「ほゝう」
「お覗きになつては厭。取り散らしてるんですもの」
「これが貴女の寢室？」
奎吾はかまはずに、隣室をぢろ〳〵覗き込んだ。
向ふに寢臺があるのだが、それはカアテンでかくれてゐる。三面鏡のスタンドは左手、庭に面した窓の下にあつた。
「いろいろのお化粧品ですね」
彼女は默つて笑つてゐた。
奎吾は突嗟に「どうにかなる」といふことを自分の氣持ちに言ひきかせた。
「入つても好い？」
「どうぞ」
今は大膽にドアをあけて、奎吾は中に入つて行つた。俺はすこしうろたへてゐる、と思つた。スタンドの前の桃いろの

天鵞絨の上に深々と坐り込んで彼は大仰に物珍しさうに部屋の中を見まはした。

「あちらへ參りませうよ」と女は安全な元の部屋へ歸らうとする氣配を見せた。

「あちら、でなくて貴女はそちらへ被在い――」

奎吾は寢臺の方を指した。

そして立上つた。

「誰か、參りますわ」

微かに云つた。

「ほら、足音が――」

笑ひながら囁き叱責した。

「許して……」

物を云はうとする彼女の唇が、奎吾の唇の中でうごいた。「そればかりは許して下さい」と云ひたいのが半分も云へず、しかし中途から一切の物言ふ意志を放棄したやうに沈默してしまつた。カアテンを引きひろげる眞鍮の輪の音が彼の腕の中の白い額が、びつくりしたやうに眼をあけた。その靜止した瞳孔の中に、奎吾は彼自身の額の筋を見たと思つた。ピクピクとふるへる青筋を――

それが失敗の歴史の、具體的な第一歩であつた。

失敗は失敗として、生活の歴史は積極的に進行させなければならぬ。

「僕はしばらく別居させて頂きたいのです」

奎吾は親の原本氏に斯う切り出した。

市會議員の原本氏は意外だといふ顔で、
「學校もまだ卒業しないで、自活が出來るかね」
「自活は出來ません。が、勉强したいんです」
「どうして宅では勉强が出來ないんだ？」
それに答へることは出來なかつた。父と相談づくで別居することは不可能だと感じられた。しかし、こゝで弱くなつてはいけないと思つて、
「ぢや、自分で自活の路が講じられたら別居を許して下さいますか？」
「勉强がしたいのなら、家から通學してゐるのが一番便利ぢやないかな。自活しながら何が研究出來るものか。お前の云ふことは矛盾だらけだよ」
「學校なんか、卒業したつて詰りません」
父とこんな話をやつてるのが憂鬱で、一時も早くこの場を切上げたかつたが、惰性でしどろもどろの言葉をつゞけなければならなかつた。父は其所をのがさず鋭く切り込んで來た。
「學校も卒業しないやうな奴は、うちの店にだつて使つてやるわけには行かない」
父の會社では、奎吾のために良い椅子が用意されてある。早くこの椅子に落ち着かせたら、それで安心だ。もう一つ、同じ市會議員の房田の娘のまみ子と結婚させること、それだけで、あとはたとへ野とならうが山とならうが、親の責任はつくされたと云ふものだ。それ以上は運命であつて、親としては息子の足場を作つてやるため、運命のスタアトに、能ふ限りの好條件を用意してやるため、最善をつくす他はない、と云ふのが原本氏の肚だつたのだ。
奎吾は、その日はそれきりで話を引込めたが、それは原本氏の心の底に或る不愉快な沈澱物を殘したのに違ひなかつた。その證據に、それから二三日してから奎吾は母親から次のやうなことを云はれた。

「先日、お父さまにどんな事申し上げたの？　大へん御心配のやうだよ。奎吾は思想が惡化してゐるんぢやないかつて――」

父母に對しては、奎吾は少しも惡意を持つてゐなかつた。一九二〇年のあらゆる息子がさうであるやうに、親に對して「舊時代」の極印を押し付けることに於て奎吾は誰にも劣りはしなかつた。しかし、父が自分の將來について色々と計畫したり心配したりして呉れることに對しては、煩い前に先づ親の「愛」といふものを感じずには居られなかつた子が家の名を汚さないのを念ずるのは親のイゴイズムであり、子の幸福をねがふのは親の打算であるとは思つても、しかしそれは半意識でのことであつて、自覺的には「善良な」父であり母であることを奎吾は疑はなかつた。奎吾の思想はたしかに「惡化」してゐた。けれども彼は自分の父がこの資本主義の機構の中で榮えることを祈る點では、少しも「惡化」してゐなかつた。彼は資本家の一人としての父を憎惡したことは一度だつてない。それはブルジョア息子の本能的な感情として彼自身肯定した。そして、それを否定することは傷口にさはるよりも彼にとつて恐しかつた。

「しかし、どうせ清算される日は來るだらう――それまでは中ぶらりんだ」

いつ清算される日が來るのだ？　彼の學問は彼にプロレタリアの味方らしい物の考へ方をさせる。けれども彼が鬪爭に何の關係もない限り、彼はいつまでだつて中ぶらりんだ。親が資本家であることを憎惡するやうになるのは「學問」をとほしては絕體に駄目だ。プロレタリアを搾取し、世界戰爭の勃發に助力してゐる親を本當に「敵」として感じるやうに彼を成長させるものは鬪爭の過程以外にはあり得ない。この事を奎吾はよく知つてゐた。知つてゐながら、彼は鬪爭に入つて行くだけの勇氣をまだ持ち合せてゐないし、また入つて行く路も知らなかつた。

第一、彼はいつのまにか、ずるずるべつたりに、戀愛さへやつてゐる。

「俺はプロレタリアートの陣營に飛び込まなければならぬ。血みどろにならねばならぬ。俺は、ブルジョアのノラ息子として一生を終るのは厭だ。死か鬪ひか……」

そんな元氣な氣焔をいつも獨りごとに吐いてゐる癖に、彼は死におくれるのに都合の好いやうな條件ばかり作つてゐるのだ。

美しい戀人があつたつて鬪爭に入る邪魔にはならぬと辯解してみることはあつた。けれどもそれは結局、彼に何ら鬪爭に入る意志のないことを物語るものにすぎない。彼はこれではならぬと思つた。が、どうにも仕樣がなかつた。

時折り彼は考へた。

「これは宿命だ。如何ともし難い宿命だ。俺が所謂ブルジョア息子であり、インテリゲンチャであることは！」

斯う考へると路は安らかだつた。安易な生活と消費の樂しみと、そして美しき女の抱擁とで前途は限りなく明るかつた。

「宿命に柔順であることは罪惡ぢやない。宿命は俺の知つたことぢやないんだから」

けれども「運命」はぢつとして居られなかつた。

一九三〇年は渦いてゐる。俊吾は普通の馬鹿息子とはちがつてゐた。彼は都會のジャズ的な享樂生活ばかりに一九三〇年の著しい現れを見るほどのろまではなかつた。階級鬪爭の激化——これが一九三〇年を特色づける渦巻きだつた。資本家的産業合理化による搾取の强化と大衆的失業、そして窮乏から、ストライキの波は異常にたかまつてゐる。ストライキのやり方も深刻になつた。資本家はストライキの波を昂めるやうな手段を取らないでは生産をつゞける事が出來ないのだ。今や資本家は覺悟してゐる。最後ののがれ道が××であることを。そして又覺悟してゐる。勞働者と正面衝突をすることを。一切は××が解決する！

彼らは勞働者彈壓の組織を益々かため、戰爭の準備に一生懸命だ。そして勞働者は知つてゐる、追ひ詰められてゐることを。起ち上らなかつたら——いや起ち上らうが上るまいが、もはやどつちにころんでもぢつとしては居られないこと

を。一切は暴力が解決する！

歴史は不可避的に來るところへまで來ようとしてゐるのだ。それは社會のあらゆる部面に鋭く、生彩を以つて反映してゐる。奎吾には歴史の足音が痛みを備えて耳に響いた。各地に起るストライキの形態だつて、以前と比べるとまるでちがつてゐた。其所には凄愴な空氣が滿ち溢れてゐた。どうして世間の人たちが平氣でゐるのか、奎吾には不思議でさへあつた。ストライキが少數の指導者の意志によつて整然と(?)動いてゐたのは昔のことだ。今は大衆のエネルギーとして盛上つて來てゐる。これは恐しいことだ。それだのに人々は平氣な顔をしてゐる。資本主義の永續をちよつとでも疑はうとはしない。みんな景氣の來るのを待つてゐる。いや、資本主義はやがて崩壞するだらうなど、常識的には知つてゐても、「兎も角その前に俺は一度好景氣の顔が見たいのだ」と云ひたさうな顔が、街にも、家の中にも一杯だ。

奎吾はぢつとしてゐられないやうな氣がした。だが、それでは何をなす可きか、何から始むべきか？　彼にはてんで見當がつかないのだ。

彼は度々友人の淸田のことを思ひ出した。淸田のことを思ひ出すと元氣になつた。淸田が一度來ればよいと思つた。彼が來ると、いつも救はれたやうな氣持ちになる。が、淸田はもう半年も姿を見せない。

淸田は大學で二年ばかり先輩だつた。或る社會科學の研究會の席上で度々出會ふうちに親しくなつたのだ。ちよつと見ると、細おもてのきやしやな身體に見えたが、腕まくりすると隆々たる筋骨だ。眉が太くて、眼鏡の奥でいつも眼をパチパチ動かしてゐた。右の拳をかためては、左の掌へ打つけながら唐手の自慢をする癖がある。彼は學校にはめつたに出て來なかつた。そのうち、三・一五事件があつた。それ以來、淸田は地下へもぐり込んでしまつたのだ。

地下へもぐり込んでからは、却つて會ふ機會が多くなつた。といふのは、淸田は度々奎吾の所を訪れては一泊して行くやうになつたからだ。官憲の目をのがれて一夜の宿をかるのには、奎吾の家などは最も安全であつたらう。

淸田がやつて來ると、彼らはいつも夜おそくまで愉快な雜談をした。

「どうだい、俺、何に見える？」

「縞の着物なんか着た身體をかへりみながら淸田はそんな事を云つた。」

「さうだね、矢張り勞働者かね。商人ではないし……」

勞働者に見えると云つてやる、と淸田はニコ〳〵した。そして卷舌なんか使つて奎吾を面食はせた。奎吾がふと言葉の中に英語なんかさしはさむと、

「俺にやア、そんな毛唐の言葉なんて分らねえや」などと怒つたやうに云ふ時もあつた。

實際、淸田は勞働してゐた。或る町の工場に入つてコツ〳〵働いて日給を貰つてゐた。一九二九年の四・一六事件を巧みに逃げた後間もなくの事だつた。季節は夏にならうとして、時折訪れて來る淸田はその度びに一種のやつれを增してゐた。けれども、却つて弱音を吐いたことのないのが淸田の著しい人柄だ。彼は、地下でどんな仕事をしてゐるか、それについては一度も語らなかつたが、四・一六で多くの先輩を引拔かれたあとの、或る重要な跡を彼が埋めてゐたことは確かだつた。次第に重い責任を背負つて行きながら、そして次第に自信を持つて行く淸田が、訪れて來る度びに感じられた。

そして去年の秋、淸田は暫く關西の方へ旅行して來ると云つてちよつと訪れて來た。その時は奎吾にも他に用事などがあつてゆつくり話し合ふ時間もなかつたが、淸田はそれつ切り顏を見せない。

生死のほども分らないで、半年たつてゐる。今度來たら、眞面目に淸田に相談したいことが澤山あるのに——と奎吾はこの頃になつてひとしほ淸田のことを思ひ出した。けれども、淸田のやうな人物は、こちらが彼を要求する時に誂らへたやうに姿を現はすなど〻云ふことはめつたにないのだ。

まみ子とは繁々來往した。

晝の光線をさへぎつたうす暗い寢臺の上に長々と横はつた若い女の姿は、これも一九三〇年の象徴であつた。その滑ら

かな脚、艶の好い皮膚、それはもつれる絹の間をしづかに流れる肉だつた。絹もやはり肉體の一部分だ。絹には體温があつた。皮膚にも絹にも柔らかな粘着力がある。それは閑の蓄積だ。この種の美も亦ブルジョア女が獨占するのだ。

「あたし、時々おもひますわ。今に貴方はあたしをお嫌ひになつてしまふのぢやないかと――」

鏡の前で顔を直しながらまみ子は云つた。

「と思つたつて、平氣でせう？」

「それやアね」

女は微かに鏡の中で笑つて見せた。黄色い花が崩れるやうな感じだつた。まひる擬裝から出て來た彼女は、いつも黄色い花の感じがした。

「しかし、もしさうなつたら怒る？」

「まあ、ひどいわ。ぢや、ほんとにお嫌ひになるおつもり？」

「それは分らない。感情の中で一番無責任なのは、好きと嫌ひとだもの」

「嫌になつたものは仕方がない、と仰言るんでせう。好いわ、あたしにも考へがある」

「その考へをきかして貰ひたいな。すぐ又相手を搜し出すつて意味なのか知ら」

「自分の捨てた女はみんな尼さんになつちまへと云ふのが、男の方たちの僞らざる告白なのでせう？」

「それや、それに越したことはない」

「勝手ね、ずゐ分！　でも今の女はさうさう思召し通りには參りませんからお氣の毒ですわ」

「今どころか、昔からさう行つたためしがないや」

「聰明でいらつしやいますこと。では、あたしをどうお考へになる？」

「あたりまへの女性だと考へてゐますよ。僕と別れたら、明日からでも他の男と此所で會ふ」

「明日から、とは氣ながね。どうして今夜からでも、と仰言らないの？」
「そんなに矢繼早の機會は豫想されないから」
「あら、どうして？　電話は、あたしの存じ上げてるあらゆる若い紳士のところへ通じましてよ」
「此の部屋へ入ることを、お母さんたちが許すんですか？」
「もし許さなかつたら、人智の及ぶ限りを盡して好い部屋を搜しますわ」
「いや、人智をつくさなくつたつて、逢引きに好い部屋のあり所なら若い人は幾つでも暗記してゐますよ。尠くともロアール河の支流の名を憶えることよりも、その方がずつと生活的ですからね」
そんな下らない會話のあとで、まみ子は眞面目な、昂然とした態度で宣告するやうに云つた。
「捨てられて口惜しがつたり、腹を立てたり、泣いたりする女と妾とを御一緒になすつたらアテがはづれますよ。失戀？　そんなもの、今の女には有りませんわ。戀愛がないのに、失戀の起りつこはございませんわ。ね、さうでせう？」
「有難う」
妙な有難うなので、瞬間、まみ子は眩しさうな表情をした。が、奎吾にとつては心からの有難うだつた。結婚する意志もないのに女の身體を愛撫してゐることに罪を感じてゐたのを、相手は巧みに解放して吳れた。この戯れは女にとつても一つの享樂以外の何物でもありはしなかつたのだ。嫌になつたら自由に別れたら好い、まみ子はさういふ單純な自由戀愛をちやんと肯定してゐるのだ。
奎吾は何となく氣持ちが輕くなつて云つた。
「ぢや、貴女には僕と結婚する意志なんか最初からなかつたんですね」
「それは、結婚したつて好いの。けれど、結婚しなけれや氣がちがふと云ふ程にならないだけの心構えだけは、妾、ちやんと用意しておきたいと思ひますわ」

「結婚しても好いと仰言ると、僕は貴女の御兩親が貴女に押し付けられた候補者だが、貴女はそれでも好い？」

「親たちの野心と妾の好みが偶然に一致したゞけのお話よ」

「實に稀なる一致だな」

二人は再び笑つた。まみ子から黄色い花の感じが消えて、いつの間にか彼女は紅い花びらにまみれて彼の前にあつた。

「疲れた。僕はもう少し晝寢がしたい」

奎吾は椅子の上で眼をとぢた。

「御安心なすつたでせう？ 急に氣がかるくなつて、ぐつたりなすつたのぢやない？」

まみ子は囁いた、柔い瀧のやうに男の上にのしかゝりながら。

しかし、まみ子の云つたことは奎吾に深い印象を與へた。自分がさうであるやうに、彼女も亦この戀愛を單なる享樂としてしか見てゐないのだ。彼女にとつて貞操なんか何でもないのだ。云ひ換へるなら、彼女は戀愛に少しも一生懸命ではない。およそ女が戀愛を眞劍な事業としないのなら、では彼女は何に向つて一生懸命にならうとするのだ？

何もない。

これらの若いブルジョア婦人たちは人生の目的を失つたニヒリストだ。享樂よりほかに追及する何物をも失つた生き物だ。婦人の一九三〇年型は進歩した。それは文化的であり輕快であり恐しく肉感的である。女性にとつて時代の尖端を行くとは、肉感の普遍的なバラ撒きに他ならない。慾望の解放を美德化することだ。「美德化」は要するに、或る事に對して意義を附與することだ。彼女らはその他に何も持つてゐない。何の目的もない。

「それで好いのだ」と奎吾は思つた。「男だつて同じ事ではないか。今の世の中で何が出來るのだ。何に一生懸命になれ

るのだ？　本能的になるより他に仕方がないではないか」

ブルジョァ倫理が一切の權威を失つた現代では、頭を痺らせてよりほかに生活することは出來なかつた。只、官能的な美の發見と、生活の方便に關してのみ頭を働かせて居ればそれで好いのだ。それ以上に考へ深くなれば――手も足も出なくなるだらう。

そして、充實した生活とは瞬間々々の享樂であると云ふ哲學が一般化した時代が、頽廢の時代でなくて何であらう。まみ子がどんなに尖端的な享樂性を持つてゐやうとも、其所には建設的な進歩性は少しも認められない。それを享樂してゐる奎吾自身も亦、沒落して行く階級の一員以外の何ものでもありはしないのだ。

「これ以上深入りしないうちに、別れてしまつた方が好いのだ」

どう考へたつて結論は其所に來た。まみ子自身が云つてゐた、別れたつて彼女に何の傷も殘しはしないと。別れるのが尠くとも主觀的には彼女に害惡を與へないとすれば、もはや問題はない。

もう決して彼女を訪れまいと決心して二三日たつ頃だつた。夜おそく、突然、奎吾を訪ねて來たものがあつた。

「本澤さんと仰言る方です」と女中が云つた。

本澤といふ知人はなかつたので、奎吾は不思議に思ひながら玄關に出て見た。清田が玄關の暗い電燈の下で眼鏡を尖らせながら立つてゐた。

「何だ、君か――」

と云つたが、久しぶりに無事な彼の姿を見ることは云ひ知れぬ感激だつた。奎吾は手をのばした。清田は無言で握手した。そのまゝ引張るやうにして彼を書齋につれて行つた。

「どうした、やつてるか？」と奎吾は訊いた。

「うん、今、大阪から歸つて來たところなんだ」

「今？」

「例によつて、一と晩なのむぜ」

「あゝ、好いとも。無事でよかつたな。心配してたんだぜ」

「なアに、俺アやられやしないよ」

彼は眼鏡の奥で眼をパチ〳〵とさせながら微笑した。

「大阪の方ではどうだつた。少し君から景氣の好い話をきかして貰はないと、僕ァ此頃萎れてしまつてゐんだからな」

「大衆のエネルギーの盛り上り方は素晴らしいぜ。もう全く生命がけなんだ。具體的に例をあげて話をしよう。斯うなんだ」

清田は主として總選擧當時の事件を中心にして血なまぐさい鬪爭のエピソードを物語つた。ビラ撒きの生命がけの活動、大衆の前に公然と立ち現れて「×××××から來た！」と叫ぶと、大衆は爭つてビラの吹雪の中に突進して來た。

「×××××から來たぞ！」

それはあらゆる大工場の大衆が聽いた聲だつた。

或る工場はバラツク建てだつた。一人の鬪員が石を抱えて屋根の上に匍ひ上つた。屋根は木葺きだ。彼は石を振り上げ、屋根を打ち割つた。俄かにあいた穴から工場を覗くと、機械が怒濤のやうに渦卷いてゐる間を、職工たちは忙しく立廻つてゐた。

「×××××から來たぞ！」

穴に口をあけて、彼は絶叫した。

瞬間、職工たちは顔をあげた。

「×××××の者だ！」

すぐその絶叫は下の人たちに理解された。一種底鳴りを打つやうなどよめきと一緒に、全工人は職場を捨て、穴の下に殺到した。ビラは一掴み、穴から投ぜられた。矢繼早にもう一掴み、又――

「だが、危險だな。そんな事をしてつかまりはしないかな」

「それは勿論、つかまるかも知れないさ。現に、F造船所や、その他でやられてゐる。しかし、工場内の細胞だつて、今では地下にばかりもぐつては居ないんだぜ。爭議が高潮に達すると、大衆の前に公然と名乘り出るんだ。勿論、つかまるよ。だが、さうしてこそ×は大衆の信頼を得ることが出來るんだ。そして、さうしてこそ、一人の犧牲者を出すことによつて三人の新たな細胞を獲得することが出來るんだ」

清田は力強く云つた。

奎吾は戰慄に似たものを感じた。彼の眼の前に白刄が閃くかのやうな感じだつた。奎吾のやうな位置にあつては、×の實行したそれら數々の英雄的行動を批判する力もないし、又よし力があつてもそれほど僭越なことも出來なかつたが、兎も角、素晴らしい一つの事實は、それらの英雄的行動に對して大衆が熾なる信頼の意を表したといふ事であつた。もはや大衆の意欲は、鬪爭の高い形態にある。彼らの信望は漸く眞の勞働者の黨に集中されつゝあるのだ。清田の話によれば神戸の××造船所七千人の勞働者の中から、×××への投票が三千票もあつたと云ふ事でも、この現象は說明されるのであつた。

「君は偉いねえ」

奎吾は讃嘆するやうに云つた。

しばらくして清田は呟くやうな早口で云つた。

「指導者ではない。大衆が偉いのだ。それを考へると、個人的な不幸なんて何でもありはしない。たとへ母親が自殺しようが……」

妙なことを云ひ出したと思つて、奎吾は相手のその呟くやうな、半分は獨りごとのやうな言葉に急に耳を欹てた。

「俺の母親は自殺したんだ」

早口で切り上げるやうに云ふと、清田はそのまゝ眼を伏せた。

「それ、ほんと？　何が原因で？」

「俺に後顧の憂ひを無くさせて、思ふ存分に働かせたいためかも知れない。それとも、母ひとり子ひとりのその息子が、飛んでもない惡人であることを嘆いたからか――ブルジョア新聞の記事で知つたのだからよくは分らない」

「世間や官憲の迫害がひどかつたんだよ、きつと！」

「だが、俺は忘れる。考へ出さないことにしてゐる。もうこの話はやめよう。なアに、何も彼もプロレタリアに捧げたんだ。」

彼は顔をあげた。再び明るい快活な輝きが顏中にあつた。

「ところで、君の方は近頃どうだい？」彼は話頭を轉じた。

ぐつと押へ付けられるやうに胸はつまつてゐたが、奎吾は懸命に微笑を作つた。

「何も彼も行詰りだよ。僕も生甲斐のある生活に入りたいんだが、どうして入つて好いのかサツパリ見當が付かない。君が來たら、その事も相談しようと思つてたんだよ」

「駄目だよ。今は昔とはまるで違ふんだからね。インテリゲンチカが入り込む隙なんか有りやしないよ」

清田は一笑に附して取り合はなかつた。

清田は翌朝はやくぷいと立去つてしまつた。

「インテリゲンチヤが入り込む隙なんか有りはしない」

満田のさう云つた意味は春吾にもよく分つた。今は一年前とはまるで違つてゐるのだ。なまはんかなインテリゲンチャの助力など蹴飛ばして、大衆は深刻な闘爭を、そしてより高い闘爭形態を展開してゐるのだ。それはもはや二三年前の合法政黨が華やかだつた大衆とは比べものにならない。今は大衆の壓力が、本當にインテリゲンチャの決意を促す時代だつた。大抵のインテリは逃げ出した。大衆の闘爭について行くことが俄におそろしくなつて、合法政黨にすべり落ちて行く卑怯者が續出した。それらのインテリの多くは、勞農黨華やかなりし頃、好い氣持ちで演説會や集會で氣焰をあげた連中だつた。情勢は華やかな闘爭の終末を促した。産業合理化による勞働強化、失業洪水、等々から窮乏のどん底に追ひ落とされた大衆は、そのどん底から立ち上つて自ら闘爭の形態を昂めるまでに成長したのだ。この勢ひに押されて眞のプロレタリアートの味方となるためには死を決意しなければならない。大衆はどしどし進んで行く。底知れぬ不景氣の斬り抜け策としては搾取の強化か、戰爭の開始かの他に何物をも持たないブルジョアも亦死物狂ゐだ。彈壓の武器を片手にして益々大衆が貧窮するやうな××をとる。特に彈壓に對して、インテリはおぢ毛を振はせた。地下にもぐつて永久に自己の世間的な存在を抹殺するか、でなければ社會民主々義に改宗するかであつた。けれども、今は社會民主々義の正體はその實踐をとほして、そして左翼からの執拗な暴露によつて大衆によく理解されてゐる。表面、合法政黨の傘下にある組合に屬してゐる勞働者は、たとへばストライキなど、いざ事あるごとに民主々義指導者に對する不滿を經驗した。その際に、左翼組合の手が下から伸びて行つた。大衆は、社會民主々義的指導者が懸命にせき留めるにも拘らず、高い闘爭形態を採つた。各所に毎日のやうに起つてゐるストライキ、全國的なストライキの波には、赤色テロが至る所で跳躍してゐるのだ。それは支配階級が隱蔽に努力してゐるにも拘らず、紛れもない事實だ。それが一九三〇年の階級闘爭だ。そこには、春吾などのやうな生やさしいインテリゲンチャの忍び込む隙なんか絶體に有りはしない。

プロレタリアートの陣營は、十分に鍛錬されたインテリのみが入ることを許されるのだ。プロレタリアートは、彼自身で積極的な歴史の推進力となる所にまで成長した。

そして、彼はその鬪爭を現實に展開しつゝある！

まみ子を訪問しなくなつて二十日はすぎてしまつた。

或日、手紙が來た。

どうして被仰して下さいませんの？　わたくしの豫感があたりましたつてわけなの？　もしさうでしたら、さうと仰言つて下さいまし。何だかこの頃は悲しうございますの。見捨てられるといふことは、矢張り氣持ちの好いことではございませんわ。

奎吾は返事も書いてやらなかつた。四五日して又、前のとほゞ同じやうな手紙が來た。それに對しても返事をしなかつた。すると、今度はまみ子が家に訪れて來た。いつもの習慣で、彼女は先づ奎吾の母の部屋にとほされた。母の部屋で華やかに笑つてる聲が中庭をへだてた書齋にまで響いて來たが、すぐ小間使がやつて來て、ちよつと來るやうにと云ふ母の傳言だつた。

「僕、今ゐないと云へ」

小間使は困つたやうな顏をした。

「さう云へば好いんだ」

荒々しくさう云つて小間使を追ひ出すと、奎吾は帽子をかむつて、そつと家を出て行つた。

「別に逃げ出す程のことでもなかつたかな」

少しをかしかつたが、彼はそのまゝ門を出ると、通りの方へ急いだ。

喫茶店によつたり、書店で雜誌の立讀みをしたりして兎も角一時間半ばかりの時を無駄に費した。もうぼつ〳〵歸つたつて好いだらう。まみ子は辭去してゐるに違ひないと思つて歸途についた。

門をくゞるとハッとした。母を先頭にした大勢の人に送られて、まみ子が今玄關を出て來るところだつた。

「まア、お歸りになりましたわ」

まみ子は明るく笑ひながら、うしろに見送つてる人たちを顧みて云つた。

奎吾は仕方なく歩をはやめてまみ子の眼前に立つた。

「しばらく」と彼女は頭をさげた。

「いらしてたんですか」

白つぱくれてさう云つたが、母たちが氣を利かして其所を立去つてしまつたのを見ると苦笑せずに居られなかつた。

「折角伺つたのにお留守で殘念でしたわ」ほかに誰もゐないと知ると、彼女はつと奎吾のそばに寄りそつて來た。

怨みを言ふかも知れないと、ひや〳〵してゐたのだが、彼女は案外機嫌よさゝうにニコ〳〵してゐる。

「お手紙、貰ひながら、無精なものだから……」

「好いの。それより、一度いらして下さらない？」

顏をあげて、哀願をこめた眼つきだつた。

「え丶。是非近いうちに……」

「きつと？」

「きつと」

「明日は？」

「明日？　斯うと……」

奎吾が考へるやうな顔をしてゐると、まみ子はそつと彼の手をとつて、力一杯握りしめた。

その時、玄關から聲がして、

「もう一度お上りあそばせ」と母が再び出て來た。

まみ子はつと男のそばから離れると反射的に、

「又出直して參りますわ、をばさま」と頭をさげてしまつた。

「ぢや、いづれ」と奎吾もほつとしてお辭儀した。彼女はもう一度、强い哀願的な眼を奎吾の方へ投げると、更らに再び母の方へお辭儀してくるりと身體の向きをかへた。そして、サツサと步き出した。

「本當に怒つてゐないとすると、あれも馬鹿にならない女だ」

奎吾は思つた。

わたしには戀愛はない、從つて失戀もない。さう云つた時のまみ子の颯爽とした姿が昨日のことのやうに思ひ出された。だから、奎吾がどんな不義理を重ねたつてまみ子が腹を立てないのは至極當然のことのやうにも思はれる。だが、それだからと云つて、彼女が本當に奎吾の無禮に對して感情を動かさなかつたとしたら、一種の尊敬に値ひするかも知れぬと考へられるのだ。

けれども、それでは何故彼女は今日こゝを訪れて來たのだらう。自分を見捨てようとしてゐる男を、なぜ彼女も冷笑して見捨てようとはしないのだらう。もしプライドがあるのなら、こゝにわざ〳〵來るだけでも大へん屈辱的な敗北ではないか。

そして、あの哀願的な眼！

彼女は怒つてはゐないのだ。怒ることも出來ないほど悲しんでゐるのだ。怒りを押へつけて哀願せずにはゐられない程

「だが、俺は無暗に手紙なんかやらないぞ。いくら書いたつて、俺の心持ちが分つて貰へる筈はないのだから、手紙を書くのは無駄だ。俺は不道徳で、ザン酷で、義理を知らない無頼漢にちがひない。人の貞操を享樂して、ウンともスンとも云はずに逃げて行つた男――だが、何とか物を云つて紳士的に別れたつて貞操を享樂した事實からは何物をも差し引くことは出來ないだらう」

彼は飽くまでウンともスンとも言はずに逃げた男に成り終せることに心を決めた。手紙なんか書くと却つて事を紛糾させるだけである。そして何よりもわるいことには、奎吾は決してまみ子を厭になつたのではなかつた。結婚して何所かの女を一生の性慾の道づれにしなければならないとすれば、彼は躊躇なくまみ子を選ぶだらう。それほど彼にとつてまみ子は好もしい女なのだ。では何故、まみ子と今まで通りの交渉をつゞけることが出來なくなつたのか？ どんな強い力が彼をまみ子から逃げさせるのか？ それは世界に對する漠然とした良心といふの他はないのだ。青春の盛りにゐる男の氣持ちとしては理解されないものだ。人は病氣と云ふかも知れない。然し、奎吾自身は「信念」だと考へてゐる。閑に任せて女の肉體を享樂することが、たまらなく嫌になつたのだ。

又二三日たつた。すると、今度は三錢切手を二枚も貼つた長い手紙が屆いた。

わたくしはやつと今になつて知りました。わたくしは少しも新しいタイプの性格ではないと云ふことを。いつぞやえらさうに申し上げたことは、みんな一種のポォズだつたことがやつと分りました。わたくしは、いつの間にか貴方さまに深く深く惹き付けられてゐましたのです。古い型の戀愛と少しも違ひません。毎日泣いて居ります。どんなに踏み付けられましても、どんなに誇を蹂躙されましても、貴方さまを忘れることは出來ません。卒直に申し上げます。卒直に申し上げるのを、まさかお笑ひ遊しもしませんでせうから――わたくしは貴方さまに飢えて居ります。今は最後の一とすじの望みに取りすがつて居ます。お前が厭だから別れる、とたつたひとこと仰言つて頂けましたら、それだけでもど

んなに乾きは潤ひますでせう。瞬間の潤ひの後なら、喜んで裁きにも服しませう。それほど貴方さまに飢えて居ります心が乾いて居ります。どうぞ、たつた一行でも宜しうございます。何か書いて下さいまし。

だいたいそんな意味のことが繰り返し繰り返し書いてあつた。奎吾は思ひ掛けもない女の純眞さに壓倒された。が、それだけに却つて返事を書かない決心を固めた。これが最後だ。このあとで、女はきつと怒るにきまつてゐる。彼女は馬鹿ではない。一人の男に感情の全運命を掛けるやうな事はしないだらう。新しい出立が――だがどうせ有閑婦人の享樂の――彼女に良いものを捜し出させるだらう。彼女が云つたやうに、彼女は只誰かの所へ電話を掛けさへすれば好いのだ。彼女たちに云はせれば「シイクな男」は世の中にザラにあるのだ。そして「シイクな男」のシイクである所以は、男の個性に宿つてはゐない。「シイクな男のシイクさ」は、シイクな男の共通點に他ならない。或女にとつて或男の個性が特に牽引力であるなどゝいふ事は現代では有り得ないのだ。あらゆる女にとつて、たゞ二種類の男のみが存在する。金と閑を持つた男と、さうでない男とが。

そこで、奎吾は頑固に沈默を守つた。

それつ切り、まみ子からは手紙が來なかつた。

そして、一ケ月すぎた。

或日、見馴れぬ若い男が奎吾を訪れて來た。淸田のレポを持つて來たのである。

レポには、或る橋の袂まで明日の正午に來て呉れと云ふ旨が簡單に書いてあつた。

翌日、定められた場所に定められた時間をまちがへずに行つてゐると、二分間も待たせないで淸田がやつて來た。淸田はサツパリした背廣を着て、新しくロイド眼鏡を掛けてゐた。

「大阪からこつちへ歸つたことが、もうスパイに分つたらしい」
橋の袂をはなれて、川岸を歩きなが清田は言葉せはしく話し始めた。
「だから、ウカ〳〵して居られないのだが――君に今日來て貰つたのは、一つ折入つての頼みがあるんだ」
「實は、本所の××町に早川といふ勞働者がゐるんだ、そいつに逢つて、今村と元公とが何所に居るかを聽いて來て貰ひたいんだがね」
「お安い御用だ。だが、その早川といふ人が僕を信用するか知ら？」
「本澤の使ひの者だと云へば信用することになつてゐる。たのむ」
「よし、今村と元公とのアドレスだな。元公で分るんだね？　そこで、返辭は？」
「明日の晩、僕が君んところへ行く。あ、忘れてゐた。早川の所へは晩方でないと、奴さん、工場から歸つてゐないよ。今地圖を書く」
歩きながら、清田は鉛筆を出した。ポケットに手を突込んで書くべき紙を搜してゐる模樣なので、奎吾は自分のポケットからエア・シップの箱を出してやつた。
エア・シップの箱の上に、早川の住所の簡單な地圖を書いて奎吾に渡すと、清田は腕時計をチラと見て云つた。
「ぢや、こゝで失敬――其所の角を、君は右へ廻りたまへ」
十歩ばかり先きを顎でさした。そして俄かに歩度をはやめた。

清田とすぐ別れてしまつたのが、奎吾には何となく物足りなかつた。いつも泊つて行く時には、熱心に雜談し、快活に冗談さへ云ふ清田が、今日は何といふ嚴肅な顏と簡單な言葉だけしか持ち合せてゐなかつたのだらう。奎吾は、清田の不

當の妻を初めて見たやうな氣がした。

それにしても、濟田は何故、今日のやうな用事をわざ〳〵俺にたのんだのだらうと、奎吾は一應不思議がらずには居られなかつた。早川といふ勞働者も、どうせスパイに眼を付けられてゐるのに違ひない。だから、濟田自身出向くのは無論危險なのにきまつてゐる。それは分るが、それならわざ〳〵奎吾をたのまなくても、もつと濟田の手近かな人物、たとへば昨日奎吾のところへレポを持つて來たあの若い男などを使つたら好いではないか？

奎吾は考へた、早川はひよつとしたらまだスパイから全然眼をつけられてゐない男かも知れない。そして、×内でも或る限られた少數者しか早川を知らない、又、他の者に早川の存在を知らせるのも、後の萬一の場合を考へると早川の工場に張つた根を破壞される端緒になる惧れがある。いつ捕まるかも分らない者を早川の所にやることは出來るだけ差し控へなければならぬ事情にあるのかも知れない。「ボルセヴィキは、拷問に對して口を割らない事を格別誇りとするものではない。××に對して物を云はないといふことはボルセヴィキの資格の初歩の初歩なんだから」いつぞや濟田はさう云つたことがある。しかし、それが眞實であるにしても、もしひよつとして重大な瞬間に初歩的な資格を取落とす者があるかも知れないことに對する用心は、又もう一つの必要であらう。

或は又、と奎吾は考へる、とひよつとしたら、濟田は俺を試めしにこんな用事に使つて見るのではあるまいかと。

だが、何故？

ひよつとしたら、濟田は俺を先づ何でもないレポから始めてだん〳〵訓練するつもりではあるまいか？

それは又何故？

今は人手が足りないのだ。人手が足りない時に俺が多少でも物の役に立つなら、俺を使ふことによつて濟田は過失を犯すことにはならないだらう。

奎吾はそんな事を考へてひとり昂奮しながら、往來を歩いてゐた。晩までは行先きの目當もない往來を。

本所の勞働者街は夜も煤煙の匂ひにまみれてゐた。夜は灰色の空氣を染めて濁つてゐた。奎吾は濟田に貰つた地圖をたよりに勞働者早川の家を探しあてた。が、その家に住んでゐるのは別の家族だつた。

濟田が地圖を書き誤つたのではないかと思つて長屋の人にきいてみた。すると、早川は四日程前に同じ本所の〇〇町とかに引越して行つたのだといふ話だつた。〇〇町のどの邊だらうと訊いても、誰も知らなかつた。

直ぐ〇〇町の方へまはつた。その町を片端しから尋ねてまはつたが判らなかつた。長屋の立ち並ぶ通りを脚を棒のやうにして歩いた。彼は疲れて來た。けれども、一人の有能な黨員が中央部と連絡が切れてしまふと云ふことは、この際濟田らにとつてどれだけ大きな痛手であらうと思ふと、疲勞など顧みてはゐられなかつた。

しかし、たうとう分らなかつた。奎吾はガッカリして大通りに出た。しばらく行くと、罷業中のモスリン會社のビラを貼つた電柱に出會はした。ビラは半分以上剝ぎ取られてゐた。いつもの奎吾なら、立上つてその刺激的な文字を貪るやうに見入るのだが、今日はそれだけの勇氣さへなかつた。通り掛つた圓タクに乘ると、彼は綿のやうになつた頭をクションの上で抱えた。

翌日は、濟田に會へると思つてゐた。だのに、夜おそくまで待つたが、濟田はたうとう出來なかつた。

その翌日も待つた。矢張り來なかつた。五日たつても、六日たつても、濟田は姿を見せなかつた。

奎吾は再び怠惰な生活に入つて行つた。無意味な、淋しい日がつゞいた。それが只一つの仕事である讀書さへこの頃は怠り勝ちになつてしまつた。

濟田から何のたよりも無いといふことは、奎吾の生活に殆ど致命的な間隙が出來るといふ事だつた。彼は思ふ、自分は資本家階級の影響下に有餘る閑を持ちあぐんでゐる一人の小市民にすぎない。自分の周圍には頽廢生活があるのみだ。彼

は只、清田といふ存在の仲介によつて時々プロレタリアの新鮮な××的エネルギーに觸れる。その瞬間、奎吾は心が潑溂として躍動するのだ。けれども、いつたん清田が彼から遠のいてしまふと、奎吾の心には再び懐疑と虚無とが襲ひかゝり、その視野の一面に泥沼のやうな小ブルジョア生活が展開されて來るのだ。彼は生氣を失ふ。彼は「無明」の中に在ることを感じる……

しかし、一人の小市民の悩みに對して階級鬪爭が無關心に進行し激化して行くことは、ブルジョア詩人の悩みに對して「悠久」なる自然が無關心であることにも増してゐる。一九三〇年は打續く大職場のストライキのうちにあはたゞしく經過してゐた。市電の大ストライキ、鐘紡、東洋モスの大衆の蹶起、それらは表面に報導されたストライキの波の一部分にすぎない。無數の中小工場が相應じて立つてゐる。それは恐慌の前夜にあり、又それ故に戰爭××に汲々としてゐる國にあつては、資本家階級自身から挑戰し誘ひ出さずには居られない必然の情勢なのだ。

けれども、ブルジョア新聞に申譯的に報導されるストライキの數々は奎吾を刺激するだけで、それは飽くまで他所ごとしか實感に來なかつた。それではプロレタリアの巨大な足音は奎吾の胸に生々とした反響で滿たし、若々しい生命を喚び醒ますことが出來ないのだ。却つてそれは奎吾の自身を取殘された者として感じさせた。

「俺も彼らにとつては憎惡すべきものゝ一人なんだ」

精神的に、自ら自殺へ自殺へと急いでゐるやうな自分を感じて、奎吾は云ひやうなく不愉快だつた。

秋になつた。

晴れた日の午後、奎吾はたつた一人で新宿の映畫館に入つて行つた。階下の見物席には空席があつたが、彼は案内の給仕女に斷つてぽつねんと背ろの壁に立つたまゝ凭れてゐた。そして、スクリインの繪をぼんやり眺めた。中途半端な時間に入つて來たと見えて、彼が途中から見はじめたフィルムが一本終ると、それが第一回の客の入れ替え時だつた。場内が明るくなり、多數の觀客は立上つて出口の方へ歩いた。そして、奎吾が凭れてゐる壁の出入口から外に出て行つた。

ぞろ〳〵と行くそれらの客の中に、ふと奎吾は一人の若い華々しい女を見出した。紛れもなくまみ子だ。親類の人と見える老婦人を伴つてゐる。老婦人をかばふやうにしながら群衆に押されて壁の方へ次第に近づいて來た。奎吾と間隔が二三間のまぢかになつた時まで、まみ子は奎吾に氣がつかなかつた。奎吾は一種の興味と恥しさとを感じた。群衆の中でもこんなに輝いて見える女——しかしさう思つた瞬間、まみ子の視線が偶然、奎吾の姿に衝きあたつた。

まみ子は格別おどろいたやうな顔もしなかつた。あら、とも何とも云はずに、やゝ微笑をふくんだ顔で、深々とお辭儀した。

奎吾も無言でお辭儀を返へした。まみ子はそのまゝ老婦人をかばふことに氣を取られるやうに脚もとに眼を伏せて扉を出て行つてしまつた。

奎吾は完全に自分から遠い所に行つたまみ子を感じた。ちよつと淋しかつた。しかし彼はぼんやり凭れたその壁から離れようともせず、新しい客で見る見るうちに滿されて行く空席を眺めてゐた。

翌日、思ひ掛けなく、まみ子から手紙が來てゐた。——

昨日は失禮いたしました。あたし、びつくりしましたわ。全く思ひ掛けないことでしたもの。でも騒がしい心をぢつと押へて外へ出ましたの。

あのキラビヤかな(?)シネマ・ホールの中で、あんなに淋しい貴方のお姿を見まして、あたしの心はちく〳〵痛んで居ります。群衆の中で、たつた一人で壁にもたれて——

今日までは冷酷なナラズモノ、感情の恥知らずとしての貴方として時々思ひ出して居ました。けど、これからは弱い

貴方、氣の毒な貴方としてもう少し度々思ひ出して差し上げませう。
わたしがこの手紙を差し上げるのを、下らない方へ誤解下さいませんやうにね。なぜなら、これは貴方に對するあはれみの情を示した紙片にすぎません……

何故か、この手紙は奎吾を不愉快にはさせなかつた。珍しいことに、彼は折返して返事を書いた。

仰言る通りです。僕は強い男でもなければ、感情の恥知らずでもありません。僕は只、取殘された男であるだけの事です。

簡單にそれだけ書いた。それ以上の感情が心の中では溢れてゐたが、表現すべきことではないと思つて書かなかつた。

奎吾は、この自分の返事に對して、まみ子が重ねて又何とか手紙を寄越して來るやうな事がないやうに祈つた。そんな事があれば、まみ子といふ女が臺なしになつてしまふ。そして二三日待つた。

果して、彼女は馬鹿にならない女であつた。それつきり、彼女からは何とも云つて來なかつた。奎吾は淋しくほつとした。

濱田から消息がなくなつて四五十日もした頃だつた。いつか濱田のレポを持つて來た若い男がひよつくりやつて來た。

「本澤さんの消息は分らないでせうか」

青年はさう訊いた。

「分りませんな。どうしたんですか」

「二三日前から連絡が切れてしまつたものですから――此方に来ると分りはしまいかと思つて伺つたのです」
「そいつは困つたな――やられたんぢやないでせうか」
奎吾は不安になつて、最悪の場合を想像した。
「さうかも知れません」
青年は眼をつぶつて答へた。ちよつと考へてゐたが、やがて無愛想に頭をぴよこんと一つ下げると、そのまゝ立去つてしまつた。
ところが、それから二三日たつて、意外なことに清田自身が突如としてやつて来た。
「よかつた！」
奎吾は思はず叫んだ。清田は黙々として書斎に導かれると、
「君、四五日泊めて貰へるだらうか？」
「好いだらう」
ふと、父や母の思惑を考へたが、親しい友人だと云へば何とか切り抜けられると思つた。
「よし、それで安心した」
やつと落ち着いたやうに、清田は椅子の中に深々と身を落し込んで云つた。
「僕、眠いんだ」
げつそり痩せて、眼がことさら光つてゐた。
「眠ると好いよ。今、こゝにベツドを運ばせるから――しかし、ずゐ分心配したぜ。二三日前に、いつかレポを持つて来た人がやつて来て、君との連絡を断たれて困つてると云つてたが――」
「なに、あの男が来たつて？」

うと／＼と眼をとぢかけてゐた清田はいきなり身を起し、眼を大きく瞠いた。

「そして？」

「ひどく心配して歸つて行つたつけ」

清田はぢつと考へ込んだ。

「それから、君とこの前最後に逢つた時たのまれた件だが——」

「あ、さう／＼、あの時は有難う。住所が分らなくて困つたらう」

「どうして知つてる？」

「君と逢つた日の翌朝、あの早川といふ男と別の方から連絡がついたのだよ」

「さうか、それは好かつた。兎も角、非常に疲れてるやうだね、眠つたら好いだらう」

ベルを押したが女中がなか／＼やつて來ないので、奎吾は立上つて扉のところまで行つた。何の氣もなく扉をあけた。すると、扉のの外からぐいと手を掴まれたと思ふまもなく、彼の身體は激しく何者かに引張り出された。間髪をいれず、十人ばかりの人間が、どつと室内に亂入した。

ドタッといふ音が一つして、あとは靜かだつた。奎吾は一切を理解して室内を覗いて見た。清田が十人の人間の中に兩腕を捉えられて椅子の上に押し付けられてゐた。奎吾がぎよつとした事に、清田の肩を押へてゐる男は一種異様の姿をしてゐた。よく見ると、何と！　それは萬一の×××を惧れての兜と、鎧の胴とであつた。

氣がついて見ると、奎吾自身も一人の男にしつかり腕を押へられてゐた。

ふと廊下の突きあたりを見ると、おびえ切つた顔が幾つも重なつてゐた。父と母との顔が、幻のやうにその中にあつた……

一人の刑事は、清田のポケットからいち早く抜き取つたピストルを、愉快さうに手玉にとつてゐた。

何日かたつて、奎吾のすつかり憔悴した姿は、警察の應接室のガラス窓から洩れる秋の日に弱々しく浮びたつてゐた。

テーブルを隔て丶、面會人の辯護士が座つてゐた。警官の同席のもとに、特に許された面會だつた。

彼らは先刻から手持無沙汰の沈默に陷つてゐた。辯護士と奎吾とはこれまでに一面識もなかつたから、この沈默には一層おも苦しいものがあつた。

「では、どうしてもお父さまたちの御苦衷を容れることは出來ないと云はれるんですね」

辯護士はやつとそれだけ念を入れるやうに云つた。

「さうです」

「もう一度申し上げておきますが、私は第三者として、心から貴方に御忠告したいのです。貴方のお心持ちはよく分ります。けれども、お父さんはすべての公職から身を退かれ、ひたすら謹愼の意を表して居られます。男子があらゆる公職から身を退いてまで！　この事を貴方は通り一遍に聞き流すことは出來ないはずです。私は貴方の冷靜な決斷を希望せずには居られません」

奎吾は默つてゐた。父があらゆる公職を退いたといふことは、彼の心を打たずにはゐなかつた。それは毆打されるよりも、もつと激しい痛みだつた。けれども、彼は默つて辯護士の云ふことを聽いてゐた。

辯護士の言葉はつゞいた。

「で、もし貴方が以後一切プロレタリアの運動に關係せず、そして、をとなしく房田さんの令孃と結婚されることを肯はれるのでしたら、多分、特別に××されないで濟むだらうと云ふのが此方の見込みなのです。貴方についての事件が世間に現れずに濟みます。さうすれば、お父さんは再び社會に立ち上ることがお出來になるし、貴方も幸福になられるでせうそれは兎も角として、お母さまのこともお考へになつて上げて下さい。お母さまは、あの時以來、あまりの驚愕で身體が

ふるえつゞけて居られます。いまだにその震へは止まらないで、お臥りになつて居るのです。どうでせう、お母さんの名に於てゞも……」

云ひかけてふと徹者突した辯護士は、救ひを求めるやうに幹部の方へ顔をむけた。

「君、好い加減に清算しようよ。どうせインテリは利用されるだけの話で惨めなもんだよ。それに、然はもうすつかり忘れてしまつてるし――君ひとり頑張つたつて、どうにもなるもんぢやない」

「貴方は、お母さんのことを考へても平氣でゐられるんですか」

さうだ。この通り平氣でゐる、と云はぬばかりに、奎吾は窓の方をうつろな眼で眺めてゐた。青い空が見えた。唐突に今日は絶好の野球日和だな、と思つた。

「僕は清田がつかまへられたら、もうプロレタリアとのつながりは切れちまつたのも同然です。それに、恐らく、プロレタリアの方から僕を要求するやうな事も有り得ないし」

奎吾はやつと云つた。

「さうです、さうです。だから……」

「いや、ちよつと待つて下さい。然し、僕は何らかの意味で、プロレタリアの運動に貢獻することは止めたくないのです僕には何一つ出來ないかも知れません。恐らく出來ないでせう。けれども、貢獻したいと云ふ意志を放棄することは出來ないのです」

「貢獻と云つて――たとへばどう云ふ形で？」

「具體的にどういふ形でか。それは豫想出來ない」

「けれども、それは非常に消極的な意志なんですね」

「今までだつて非常に消極的でした」

「然し……困るな。兎も角、事實の上に於て運動とは縁が切れたのだから――」

「いや、僕は機會さへあれば飛び込んで行くつもりです」

錦義士は默つてしまつた。再び氣味わるい沈默が訪れた。

「しかし、小兒病的な昂奮はなさらない方が好いと思ふんです」

やゝあつて錦義士はゆつくりなだめるやうな語調になつて云つた。

「何が小兒病です？」

「實行の伴はない强がりでせう」

「さうかも知れません」

奎吾はうなだれた。何の實踐の背景もない男は、何と罵られても仕方がなかつた。

「まア然し、もつと落ちついて考へて下さいませんか。そのうちに新しい別なお考へが出て來るかも知れません。貴方は今日は昂奮しすぎて被在る」

奎吾は笑つて、

「いや、冷靜でありすぎるんですよ」

「ぢや、どうしても、將來ます／＼プロレタリアの運動に近づいて行かれる、さうお父さんやお母さんに報告して宜しいですな」

「勿論です」

「お父さんが社會的に葬られても？」

「僕ばかりにお父さんがあるのぢやありませんから」

「お母さんが病氣でも構はないと仰言るんですね」

「プロレタリアもみんな、お母さんを持つてるんですから」

「宜しい。そこまでの御決心なら、致し方ないでせう」

辯護士は折鞄を引き寄せて歸り仕度に取掛る氣配を見せた。

奎吾は氣にとめぬ風で、窓の青空を眺めてゐた。丁度シイズンで、今日なんかリイグ戰をやつてるだらう。リイグ戰も久しく見ない、など、考へてゐた。春のリイグ戰の時も一度まみ子と一緒に見物したことを思ひ出した。まみ子はきつと新しい別の男とこの秋のリイグ戰を見に行つてるだらう……

聯想はまみ子との色々の場面を其所に描き出させた。體溫を持つた絹の下着にもつれる白い脚、彼女の喫ひさしの煙草を染めた口紅のあと——一切の快樂は、遠い遠い所に行つてしまつた。快樂から緣の切れた自分の肉體が、現實の個體であるとは信じられないやうな、不思議な氣持ちが湧いて來た。

「どうです、檻房生活は？」

辯護士はふと今までとは何の連絡もないことを云ひ出した。

「いや」と奎吾は笑つて見せた。

「蚤がゐますか」

「ゐます」

そして、辯護士は立上つた。

「ぢや、失禮します。呉々もお大切に」

それから警部の方へ丁寧に謝意を述べて彼は部屋を出て行つた。

奎吾は立上つた。警道も立上つた。

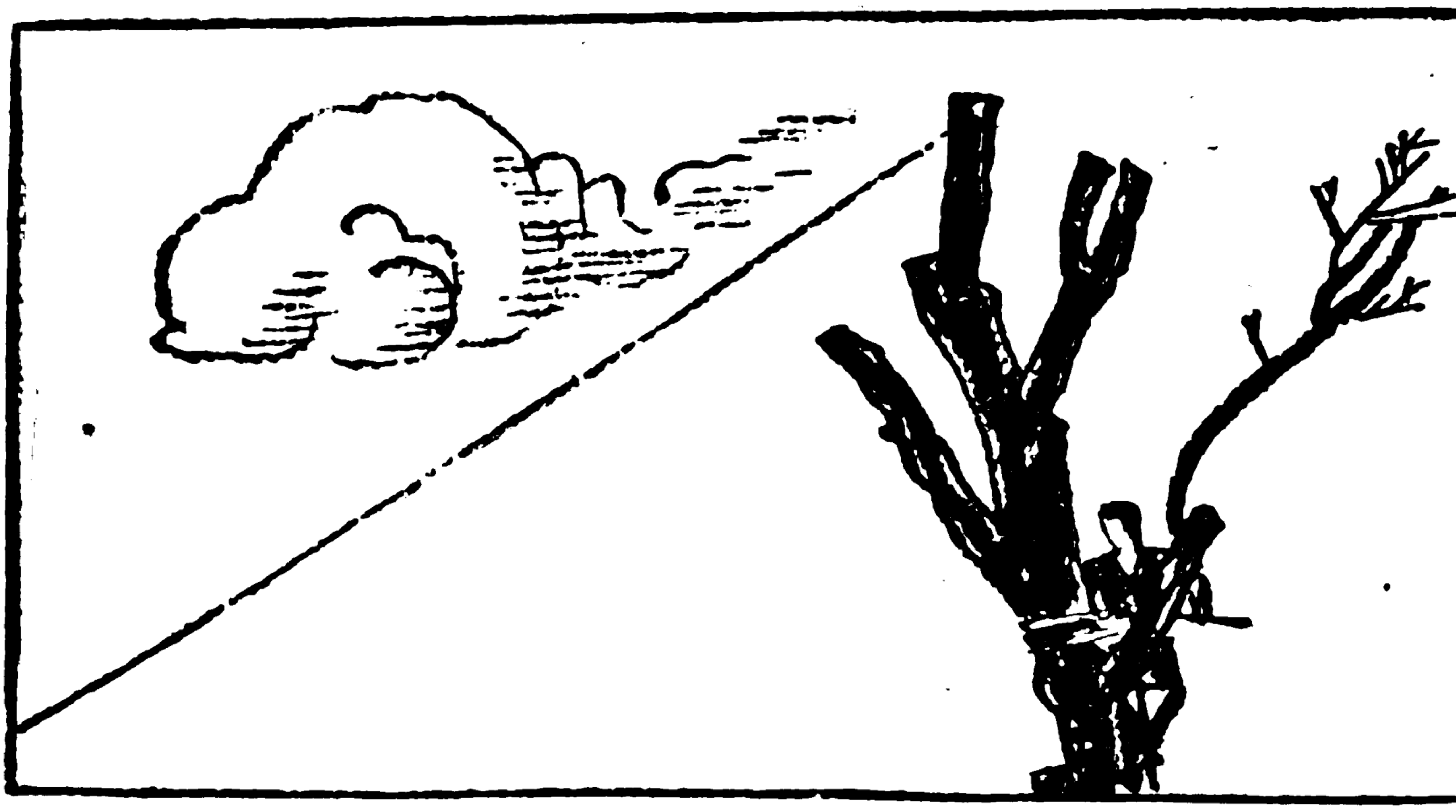
歩き出さうとする奎吾のうしろから、警部はポンと脊中を打つて、

「ふつふ、ふ。君もなかなか勇敢になつたね」

奎吾は何も云はずに歩き出した。

地下室の檻房へ——暗い、一切の自由を剝奪された其所へ。

——一九三〇年一〇月——



妻の死と百合公

岡田三郎

1

この四五日めつきり奥様はおよわりのやうでございます。くづ湯もおめしあがりになれません。おさとう湯をやつと二さじぐらひおめしあがりになるだけでございます。旦那様のお見えになるのを毎日お待ちしていらつしやるやうでございます。でもたぶんお仕事でおいそがしいのでしようとお氣にもかけないように笑つていらつしやいます。おいそがしいようでございましたらみそかのお金はわざ〳〵お持ち下さらないでもお送りしていたゞければけつこうですからとそう奥様はおゝせになりました。お聲がちつともおたちになりません。ずいぶんおやせになりました。鎌倉の方からまいります電車でも藤澤の方からまいります電車でも電車がまいりますたびにすぐそこの峰ヶ原でとま

けはしないかとお藥をめしあがつていらつしやいます時にはすいのみをお口からお放しになつて耳をすましていらつしやる奥樣のお心持がよくお察しできるやうな氣がいたします。夜もあまりおよられないやうでございます。夜なかすぎてだん〲波のおとが高くなると變な氣になるよといつかおつしやつたことがございました。笑ひながらおつしやるのでございます。そういつた奥樣のお氣持なぞ手前にはわかりかねますといつたやうにわざと笑にまぎらしてまいていたのでございますけれども本當は心が寒くなるやうな氣がいたしていましたのでございます。昨夜のことでございます。二時頃でもございましたでしようか。おえんがわの障子がすうとあくのを夢うつゝにきいたのでございます。奥樣かしらとぼんやりまだ夢でも見ていますやうに考へましたのでございますが急にバッと思ひつきますと一時に目がさめて胸ははやがねのやうに鳴りだしました。おとなりのお部屋にあかりがついていましてもおよれないとおつしやいますので電氣はけしてまつくらなのでございます。あまりあわてますと電氣のことなぞ思ひつくものではございません。ふすまにつき當つたりお夜具のすそにけつまづいたりいたしまして半分ころげなばかりにしてやつと奥樣にすがりつくことができました。おえんがわにつきました兩ひざはがく〲ふるえてどうにもとまりませんのでございます。さだやどうおしだえと奥樣はおかゞみになつてかすれたお聲でおつしやるのです。いゝえ奥樣どこへもいらしてはいけませんどこへもいらしてはいけませんと夢中で奥樣のお膝のあたりにしがみつきますとさだやどこへも行きはしないんだよあまりたび〲起こすのが氣の毒でひとりでおちようづに起きたんだよとおつしやるのでございますけれどもそのお言葉どおりにやす〲と信じられますでございましようか。そんなにさだやが云ふならいつそのこと明日の晩あたりそつと起きだそうかしらなどゝわざとおどかすようにおつしやるのでございます。でもねえさだやこゝの海はとお淺で駄目だそうだよとしみ〲おつしやるのには驚いてまたいつかのように胸がこほりつくほど寒い氣持がいたしました。夜なかにお手をおたゝきになりますのでおちようづ

でしようと思つてをりますと今夜は波がずいぶん高さうだね見ておいでとおつしやるのでございます。いたしかたなくおえんがわに出てかーてんのはしから海を見おろしました。空も海も暗い夜でございました。星がわづかばかり光つておりました。江の島の方から強い／＼風がふきつけておえんがわのがらす戸がなつています。岸にうちあげる波はものすごいほどに高くそれがなぎさいつたいにうすきみ悪く白くくだけて見えるのでございます。いゝえ奥様おとばかりで波はさほどでもございませんとおこたえいたしますと奥様はあゝそうかえいくら波が高いにしても今はちようどあけしお時だからしようがないんだよとおつしやるのでございます。これは十日ほど前のことでございました。何やかやとあさはかなことのみ申しあげてかえつておいそがしい旦那様に御心配おかけいたすようなことになりましてはと思ひまどひましたのではございますけれども昨夜のことやその外いろ／＼のことをあれやこれや思ひあはせますそこうしてぢつとしていますのさえ息苦しいおもひがいたします。ぜひ／＼お近いうちに一度おこし下さいますやうくれ／＼もおねがひ申しあげます。

三日留守の間しめきつてゐたらしく、部屋は濕氣くさく空家の感じだつた。

霧雨の降る蒼ざめた夕暮だ。ぼんやり緣側に出て硝子戸にむかつた。硝子のなかに暗い顔を見た。眉はしかめられるだけしかめられ、眼は三白の上眼にらみでおほきく、ぢつと動かない。冷酷さうにひきしめられた薄い上唇の兩端は、皮肉な微笑をふくんだやうにかすかにはねあがつてゐる。

いつたん眠るやうに輕く眼をつぶつて、額を硝子にくつつけてから、そつとまた眼をあけた。暗灰色の空をバックに押捺したやうな黝んだ常磐木の間に、高臺の家家のまばらな灯が見られた。

明日は二月二十八日だ。袋戸棚から雛祭の調度をとりだした。

今夜七里ヶ濱へ行くからと、私は梯子段のおりぐちから下の書生に聲をかけた。主人氣のぬけたやうな生返辭だつた。やうやく歸宅したかと思ふと、すぐまた外出だ。家で寢ることはまれだつた。主人が留守にばかりして面白くないと女中のよねは暇をもらつて行つてしまつた。

「お店へ行つて見て、都合で今夜やすんでもいいやうでしたら休むわ。……そしたらお宅へ行つてもいいでせう？」

數寄屋橋の手前で別れぎはにさう云つた百合だ。かどのビルディングに沿うて、裸の街路樹が影をおとしてゐる水溜の鋪道を綠色の蛇の目をかついで行きかけた百合が、高下駄であぶなつかしく、わざわざ小走りにひきかへして來ての言葉だ。

　女中の手紙を讀んで、雛祭の調度をとりだし、今夜七里ヶ濱へ行くと、前もつて書生に告げたのも、百合の來るのを確信してのことだ。

親王雛の桐の箱や、金屛風や燭臺のボール箱を大風呂敷に積みあげて、しつかりと結んだ。

坂の下から自動車が、うなつて砂利を嚙みながらのぼつて來た。

「どうぞおあがりください。……實はこれから、病人のところへ行かうかと思つてゐたところなんですが……」

「ま！」

　百合の顏は瞬間に緊張した。ハート型に塗つた上唇はほつかり開いて、金齒がのぞいた。私を見あげるつぶらな眼には不安が讀まれた。

「別に急に惡いとか、どうとか、そんなんぢやないんです。明日がみそかでせう。拂をしてやらなければいけないし、それに、辻堂の撮影所へもまはりたいと思ふもんですから……」

「ではまたおうかゞひしますわ。」

「いゝんです。おあがんなさい。……なんなら、どうせ東京驛まで行くんですから、御一緒にでも……」

「え」

文調でしら〴〵しく他人行儀の會話をかはしたあとで、二階へあがると、百合は首をちゞめながら舌を出して、眼をくる〳〵させるのだ。

頭髪は男そつくりのシングル・カットでオール・バックだ。錦紗の茶つぽい小粋(こいき)な瀧縞の袷に、黒地に、見えるか見えないかの程度の極めてほそい赤線で、おほきな六花の雪模樣を散らしたお召の羽織だ。睫毛はながく、そりをうつてゐるし、眼はくるつとしてゐるし、鼻梁(はなばしら)は眉のつけねまでどうやら恰好がついてゐるし、それが、坐ることが不得手なために、最初は横にだしてゐた足を、いつのまにか安座(あぐら)に組んで、緋縮緬の長襦袢の端を膝前からのぞかせながら、剽軽(へうきん)に首をちゞめ舌を出したのでは、混血兒(あひのこ)くさい腕白小僧の女裝ぐらゐにしか思はれなかつた。

「さあどうぞおあがりください。……東京驛まで御一緒に。……あの眞面目くさつた顏と云つたら……」

「馬鹿!」

「ずゐぶん我慢してよ。莽生さんがゐるんですもの。もうすこしで、ふきだすところだつたわ」

「病人のところへ行くところだと云つたら、急に顏色が變つたよ」

「うまかつたでせう?」

「ほんたうに病人が、いけないんだと思つたんぢやないのか?」

「まさか。……だつて、今日までちつとも、そんなこと云ひもしなかつたぢやありませんか。」

「今日までつたつて、百合公とばかりずつと一緒にアパートにゐたんぢや、僕にだつて解りつこないさ、——病人がよくなつてるのか、それとも惡くなつてるのか、……」

「さうねえ」

叱られでもしたやうに百合は急にてれて、眞顏になりながらもぢ〳〵と不器用に坐りなほした。

「ほんたうにお悪いの？」

「とにかく出よう。着換へて来る。」

立ちしなに、封筒から手紙を中味だけぬいで百合にわたした。

洋服に着換へて帽子掛をおがつて行くらしい、あわてたやうな[illegible]ざばかりの足音がした。ついで床の間の蓄音機の蓋がかちやつとあぐ音がした。

百合が後向きに爪だちをして、蓄音機のなかをのぞいてゐるのだ。

女中の手紙は、封筒と別々に机の上にのつてゐた。

「ずゐぶんでかいわねえ！」

わざとらしい感嘆の聲だ。

鼻をすゝりあげる音で、私は百合の短く刈りあげた、さすがに青白くほそ〴〵と、中筋の溝のやうにくぼんだ女らしい襟脚にぢつと見いつた。

「何かきかして下さらない？」

やはり向ふを向いたまゝでの、力のない聲だ。また鼻をすゝる音だ。指先を鼻にあてゝ、二度もながくつゞけざまに、膝をせりあげてすゝるのだ。

「行かう。自動車が来る」

「え」

蓄音機の蓋をしめると、百合はやつと私の方へ向きなほつて、眼をしばたゝきながら面映さうに微笑した。

私は風呂敷包をとりあげた。

「なあに、それ？」

「三月の節句だ。」

「お雛ッ様へね」

なみ／＼ならぬ息づかひと一緒に、百合の眼はぐつと見ひらかれた。睫毛はまだ濡れてゐた。悪意の眼か同情の眼か、見きはめのつかないうちに、百合は視線を横にそらした。

深い溜息をもらすと、百合はがつかり私に縋つて、胸のところへ頬をこすりつけるのだ。百合の髪毛は、ちやうど私の頸筋に觸れた。

「奥さん可哀さうだわ。」

また溜息だ。

「でも百合なんだつて、可哀さうでないこともないわ。」

百合は手探りに私の手をとつた。その手を×の下から導きいれて、××の上部に觸れさせるのだ。

「そつとさはるのよ。そつとよ。……ね？　しこつてるでせう？　そんなに壓しちや痛い!!」

百合のあいてゐる方の手は、私の背筋を、四本の指先の力でこねくりまはした。

「乳首も黒くなつてよ。……お奥さんとお風呂へ行つたの。さうだつて云つてゐたわ。……僕は大丈夫だよつて。自慢にも、ならないことを自慢さうに云つてゐたくせに!!」

百合は私の胸から顔をはなすと、冷い非難の流眄で私を見おげるのだ。

私は苦笑した。

病妻に會ふ私の氣持は、いつもほど平靜ではなかつた。

病床の横に膝をついて、私はきまりのやうに、「どうだね？」と言葉をかけて見た。

まばたきもしないで私を見あげてゐる妻の眼からは、見る／＼涙があふれて來た。

「隨分いそがしさうなのねえ！」

ほとんど聞きとれないかすれ聲だ。それも、努力で言葉をひしめかす度毎に、唇も、頬も、頭も、中風患者のやうに震へるのだ。兩手は絶えず、蠟細工のやうな血の氣のない痩せほそつた指々を鈎なりに曲げて、爪で掛蒲團の天鵞絨の襟を掻きむしつてゐた。

「みそかだと云ふのに、お金を送つてくれるものやら、くれないものやら。……さだやの手紙、見なかつたの？」

「見たよ。」

「見たらなぜ、返事くださらなかつたのよ。五日も前に出したのに。……いつ見たんです？」

「すぐに見たさ。」

「昨日あたり見たんでせう、きつと。」

「手紙なんか、いつ見たつていい。今までに一度だつて、みそかの拂ひを遲したことがあつたか！　僕の方にだつて、都合と云ふものがあるんだ。金がはひつたのは、昨日さ。だから今朝早く、かうして持つて來たぢやないか。みそかは今日だらう。みそかに拂ふ金は、みそかに持つて來ればちやんと間に合ふんだ。」

「口先ばかりは立派なことを云つて……」

蒲團の襟にかけてゐた左の手を中へいれたかと思ふと、その手をずつと私の股のところへよこして、服の上から肉を抓らうとするのだ。あわてて私はあとずさつた。

私に逃げられて、妻はぎりぎり齒を嚙みきしらせながら、疊を爪でひきかきまはした。

「今朝だつて、矢來のうちから來たんぢやないでせう？」

「馬鹿なことを云ふな。……これ、これを見るがいい。」

玄關の襖のかげから、風呂敷包を持つて來た。病妻の機嫌をとる手段のやうに自分にも思はれ、心にとがめてすぐには見せなかつたのだ。

「今朝出がけに、三月の節句だなと氣がついたもんで……」

風呂敷包をほどく私の手元を、妻は侮蔑的な眼でじろじろ見てゐるのが解つた。

「よねやが暇をもらつて出て行つたさうぢやありませんか」

どうして知つてゐるのかと、内心びつくりした。

「ああ、出て行つたよ。」

「出て行つたよもないもんだ！　自分が悪いくせに。……旦那様のお留守に勝手にお暇をいただいて濟みませんて、詫びの手紙が來たのよ。昨日よ。だらしがないと云つていいのか、恥づかしいと云つていいのか、奉公人にまで愛想をつかされて。……一體、幾日ぐらゐ、うちをあけてゐたんです？」

「幾日つて云ふほど、あけやしないさ。」

「嘘！……ちよつとお歸りになつたかと思ふと、すぐにまたお出かけになるんですつて、よねやの手紙に書いてあるわ。おうちでおやすみになることなんか、滅多にありませんて。……どこへとまりに行くんです？」

「とまりに行く？……人聞きの悪いことを云ふもんぢやない。撮影所へ行つてんぢやないか。今日だつてこれから行くんだ。ことによつたら、雲雀ケ岡へ引越すかも知れない。東京から通つたんぢやたまらない。」

「撮影所へ行つたら、そのたんび歸りに、藤澤から電車でここへ寄つて來れたつていいと思ふわ。」

私は默つてゐた。桐の箱から内裏樣(だいりさま)や后や翁と姥の雛をとりだして、顏をくるんだ薄紙をとりのけては、とみかうみしながら疊にならべた。

「お雛さんなんか持つて歸つて來よ！ いらない！ 男のくせに、よくお氣がつきましたね。今朝出がけに氣がついたなんて！ をかしい！……どこの誰の氣のながい人が、智慧をつけたのか解つたもんぢやないわ。」

「いらなかつたら、いらないでいい！」

かつとして、私は内裏雛を鷲づかみにして振りあげた。

妻は挑戰的にあざわらつてゐるのだ。

いたづらに病人を昂奮させるやうな自分の仕打を、はづかしく思つた。振りあげた手をずるずるにおろした。

「お前もよくない。僕もよくない。氣をたてては駄目だよ。いらいらは禁物ぢやないか。」

繭をつくる頃の蠶のやうに、すきとほるほど蒼白い顏だ。ただ兩頰は、葉脈よりもこまかい、蜘蛛の巣のからまつたやうな網目の血管が、うきあがつて、紅粉をはいたやうに赤く、ほてつてゐるのだ。

「氣がむかなかつたら、無理に飾らずともいい。病人にとつては節句なんか、かへつていまいましい材料に過ぎなかつたかも知れないね。おととしの春と、去年の春と、二度にお前が神樂坂で買ひあつめたものだから、節句の頃で、もしや思ひだしてゐやしないかと、氣をきかしたつもりで持つて來たんだが。」

部屋の隅へ雛を片寄せて、私は隣室の方の、あけてある緣側に腰をおろした。

暮雨だ。庭の竹垣は、冬から春への烈風に吹きよせられる砂に埋つて、渚へくだるスロープは庭つづきだ。

この砂丘地でいつもよく見かける、赭顏白髯の、がつしりしたフランス人の宣敎師が、ながい黑衣の裳を砂地とすれすれ

れに顔して、江の島の方へ大股に斜めにくだつて行つた。濡れて踏んだ砂に、宣教師の足跡は點點と白くのこされた。

病室で手が鳴つた。さだが行つた。妻の聲はしないで、さだの、はい、はい、と云ふ返辭だけがきこえた。

「眼越へお雛様の菱餅を買ひにまゐりますんですけれど……」さだが慇懃にかしこまつての言葉だ。「——どれくらゐの大きさでございますか、旦那様におきき申せとおつしやいますので……」

「妻を見れば解るよ。」

私は元氣よく立つて病室へ行つた。

「ぢや、買つてやらうかな。」

さだが出かけるとすぐに私は、妻が寢ながら顏さへ向ければ見られる位置へ、本箱や雜誌を適當に竝べて、赤いきれを段段にかけた。

かすれ聲がうしろでした。ふりかへつた。妻がにこにこしながら、手招きしてゐるのだ。

「なんだえ？」

機嫌がなほつたかと、安心してうつかりゐざりよると、妻はいきなり私の手首を握つた。手錠のやうな堅さだ。

一方の手で妻は×××を××のけると、すぐにその手を私の××に巻きつけた。鐵の鈎のやうだ。

妻の意圖を私は直感した。反抗して、上體をぐいぐいのけぞらした。私の××に巻きついた妻の×は、ゆるむどころかますます強く首筋を締めるのだ。

渾身の力で私は頭をのけぞらし、×を毀つた。私が起きあがると、妻も執拗に起きあがるのだ。歯をくひしばり、わなわな身慄ひしながら。

ぐつたりと妻は枕に頭をおとした。私はほつとして立ちあがつた。手首には赤く、指の跡が殘つた。

痰のからんだ咽喉をぜいぜい云はせながら、情慾にぎらぎら光る眼で妻は私を見あげるのだ。
「意氣地なし！　弱蟲！　そんなにこはいのか！」
ひしめく嗄れ聲で、口汚く妻は毒づいた。

3

雲雀ケ岡に移轉したことは、百合を失望させた。
「撮影さへすめば、また東京へ引越すから。」
百合は默つて横向いた。
反對に妻はよろこんだ。
「海岸までは十町ぐらゐあるんだ。松林のなかだ。六疊の間があるんだが、縁側が南向きだし、お前が寢てゐるにはちやうどいい。」
妻の眼はいきいきと希望に輝いた。
「海のすぐ近くより、少し離れたところがいいんですつて。松林をとほつて來る空氣が、一等いいんですつて、」
「さうかも知れないね。南湖院がさうだ。」
「五月頃になつたら、雲雀ケ岡へ行けるわねえ？」
「行けるとも。醫者に云はれたとほりに、よく藥を塗つて、早く咽喉をなほすんだ。」
妻は痛さうに顏をしかめながら、顎をつきだして生唾をのみこんだ。
「何も食べられないのよ。三日ばかりお湯もとほらなかつた。何度も何度もうがひをしてね、これならいいだらうと、た

めしに砂糖湯を飲んで見たの。とほつたわ。少し痛かつたけど。嬉しいつてなかつた。ひとりでに涙が出て來てよ。さだやも笑ひながら、涙をぽとぽとこぼして。…さだやはとてもいいひと！　さう思はない？」

「思ふよ。よくなつたら、恩がへしするんだ。…あまりしやべらない方がいい。安靜にして。」

「喜代だつていいこだらう？」

「いいこだとも。」

「こんな病氣になつて、いけなかつた？」

「もうしやべらないんだ！」

おとなしくうなづいても、ぢきにまたしやべりだすのだ。

「雲雀ヶ岡つて、岡なの？」

「岡ぢやないんだ。海岸からは少し高くなつてるけど、住宅地附近は平地さ。寢ながらだつて、見とほしがつくよ。うちの庭にも、苔のついた松が繁つてるし、垣根の向ふが、すぐ住宅地の遊園地で…」妻にしやべらせまいと、私はくどくど描寫をしてきかした。「——遊園地と云つたつて、誰も遊ぶものがないんで、テニス・コートも草蓬蓬だ。ふといアカシヤの樹が二本、生きたまま、幹だけ枝が綺麗にはらはれてね、そいつがブランコの柱になつてるんだ。愉快だらう。上には枝がしげつて、房房と新芽がふいてるんだ。」

「喜代ブランコうまいよ。」

「ぎつちんばつたんだつてあるし。…遊園地の先が麥畑でね、それからが一帶の松林なんだ。松林を越えて行くと海だ。周圍にはちつとも家がたてこんでゐないし、とても閑靜だ。」

「五月ねえ。五月になつたら、雲雀ヶ岡へ行くわ。…雲雀が鳴いてるの？」

「鳴いてるとも、――一日ぢゆう。朝、雨戸をくらないうちから。」

「いいわねえ。ここと來たら朝から晩まで、波の音と電車の音ばつかり。いやになる。」

「四月にはアカシアの花が咲くんだ。眞白な花だよ。うちから三町ほど撮影所の方へ行くと、白ペンキ塗の溫室だの、花壇だのある廣い庭園のなかに、バンガロー式の洋館が建つてゐる。アマチュア・ガーデンと云つてね。引越す前、今の家を見に行つたついでに、何氣なし這入つて見たんだ。溫室に案内されたよ。パンジーでもプリムローズでも、……雲雀ケ岡へ來るとお前の部屋には花をかかさずに摘む。」

妻は子供のやうに、口を半開きにして無邪氣に笑ふのだ。

「そのアマチュア・ガーデンの垣根に沿うて、アカシアの並木道があるのさ。ほそい路の兩側から、高く、ちやうど天蓋のやうに、――今はまだ、枝が頭の上にかぶさつてゐるきりだけどね、來月になつて御覧、眞白な花が一杯に咲くんだ。枝がたわたわもなつて。――札幌の街は大概アカシアの並木だ。綠の葉のしげみに單純な白い花、――綺麗だぜ。」

「見たいわさ……五月まで咲いてる？」

「咲いてるとも。……その並木の下をとほつて、撮影所へ行くんだ。」

「早く五月が來るといいな。」

「希望をかけて待ちこがれた五月より先に、――三月中旬だ、妻は花に埋つて雲雀ケ岡へ、アカシアと松の並木道を柩車にのせられて來た。

花電車がとほると云ふ、復興祭の銀座の夜だ。

表通のはなばなしい明るさと群衆の喧囂に影響されて、裏通はかへつて常よりも暗く寂しい。

ゴシック體で黒地に赤く電氣でＢＡＲと、軒先から街路樹の方へのりだしてゐるのが、暗い裏街を一層暗くする感じだ。紅殻色をした塗壁のフロントに、黒框のほそながい硝子窓が二つ、閉されたままで芝居の書割のやうでもある。

足元の植木鉢の蘭の葉が、夜風に揺れて葉先を壁に觸れながら影をうつしてゐるのを、私はしばらく眺めてゐた。

ドアを押して、のぞいて見た。煙だ。蒼い霧だ。客で一杯だ。奥の棕櫚の樹の蔭から、百合がまつすぐに見てゐた。黒天鵞絨の、胸前のあはせめだけ赤く縁どつた上着を着物の上に着て、すつと立つて。びつくりしたやうな眼を瞠つて、笑ひもしないで。

最後の客に殘されてある、スタンドの下の狹苦しい席につくと、お薬がやつて來た。いつもなら黑子のある口元に媚笑をふくんで、派手な姿態でむかへるのが、今夜は清教徒のやうに嚴粛だ。

おしかぶさるやうにして、私の耳にささやくのだ。

「百合さんはね、どう御挨拶をしていいのか解らないんですつて。こないだから、かう、しよつちゆう何を考へてゐるのか、ぼんやりしてゐますわ。あの日電話がかかつて來たでせう。——どなたからとかつて云つてましたわ。……さうさう山崎さん、ね？」

「葬式に來てくれたんだ。その時たのんだんだ。歸つたらアパートへ電話かけてくれつて。」

「下で電話をきいたら、百合さん息つかずに三階まで駈けあがつて來ましたわ。いきなりあたしのお部屋へ。——ちやうど、早番で、あたし出かける支度をしてゐたところですのよ。肩で息をしながら、いつまでもいつまでも、ぢつとあたしを見てゐるぢやありませんか。——どうしたのよ百合さん？　何かあつたのつて訊いても、ただ一度うなづいたきりで、

そのままぐつたり籐椅子へ腰をおとしてしまふんですの。」

レコードが終りに近づいてゐた。お葉は行つて、裏をかけなほして來た。

「複雑な心理だなんて云つては、生意氣かしら？……かうなのよ。今日はお店を休むと云ふんですのよ、百合さん。頭がくらくらして、眼がまはるやうだつて。すぐに自分のお部屋へ戻つて、寢てしまつたわ。ですから、あたし、ずつと寢てゐるものと思つて、——生憎一時すぎよ、お店から歸つたのが。だもんですから、何もないでせう、せめてお紅茶でも沸かしてあげようと、行つて見たら鍵がかかつてゐますの。あとできいたら、どうにも寂しくつて寂しくつて、たまらなくなつて、淺草へ行つたんですつて。そしたら、何活動を見ても、——喜劇でもよ、——泣けて泣けて仕方がないんですつて。おなかがすいたからつて、お壽司屋へ行つたら、見ただけでもう一杯になつて、箸もつけずに出て來るやら、——それは惡阻（つはり）のせゐもあるんぢやないかと思ふんですけれど……」

「まだそんなこと……」

「あら！」

お葉ははじめて、片笑窪を見せながら、色つぽい眼で睨むまねをした。

「お風呂で見ましたは。とてもう、……でも、百合さんあんまり小柄ですし、それにお丈夫でもないでせう、ですから一度お醫者に診てもらはないことには、安心がなりませんわ。——活動を見てから、本郷の姉さんとこへ行つて泊つたんですつて。姉さんにも云はれて來たさうよ、早くお醫者に診てもらひなさいつて。……」

よく酒場で顔をあはす友達に、私は街へ誘ひだされた。

銀座から日本橋、方々の酒場をまはつた揚句、一人になつて銀座裏へひきかへして來たのは、午前二時だ。

百合は奥の方で、椅子にあがつて窓をしめてゐた。黒天鵞絨の垂幕の間からは、お葉が化粧室で鏡に向つてゐるのが見えた。

電氣が消えた。垂幕の隙間からさして來るあかりだけが、牀石から壁に這ひあがつて、スタンドの棚の色さまざまな壜にくつきり竪に筋をひいた。

その光の筋を横ぎつて、百合は私の前に來た。

「今朝ね、病院へ行つて來たのよ。」

「お葉さんには云はなかつたのか？」

「まだ。だつて、かう云ふのよ。去年診てもらつた内科の先生にも診てもらつたの。保證は出來ないつて。」

「何が？」

「産後の母體がよ。」

「ぢや、どうするんだ？」

「中絶した方がいいでせうつて。」

「醫者がさう云ふのなら、さうするより外はないだらう。」

「さうした方がいいんでせう？」

「いいも惡いもない。」

私は靴音をたてて二三歩あるいた。百合が追つて來た。

「おこつたの？」

「おこる理由なんか、ちつともないさ。」

「だつて、百合公欲しいのよ、――一人だけは。」

「それぢや訊くよ。あれが死ぬ前から、欲しいと思つてゐた？」

「……」

「思つちやゐなかつたんだらう？……それはどうでも構はんが……」

「ランプラスもう濟んで？……行つてもいいんですか？」

化粧室から、お葉のかぼそい作り聲がした。オーヴァーの釦をいぢくつてゐた百合は、咄嗟にその手をひつこめた。

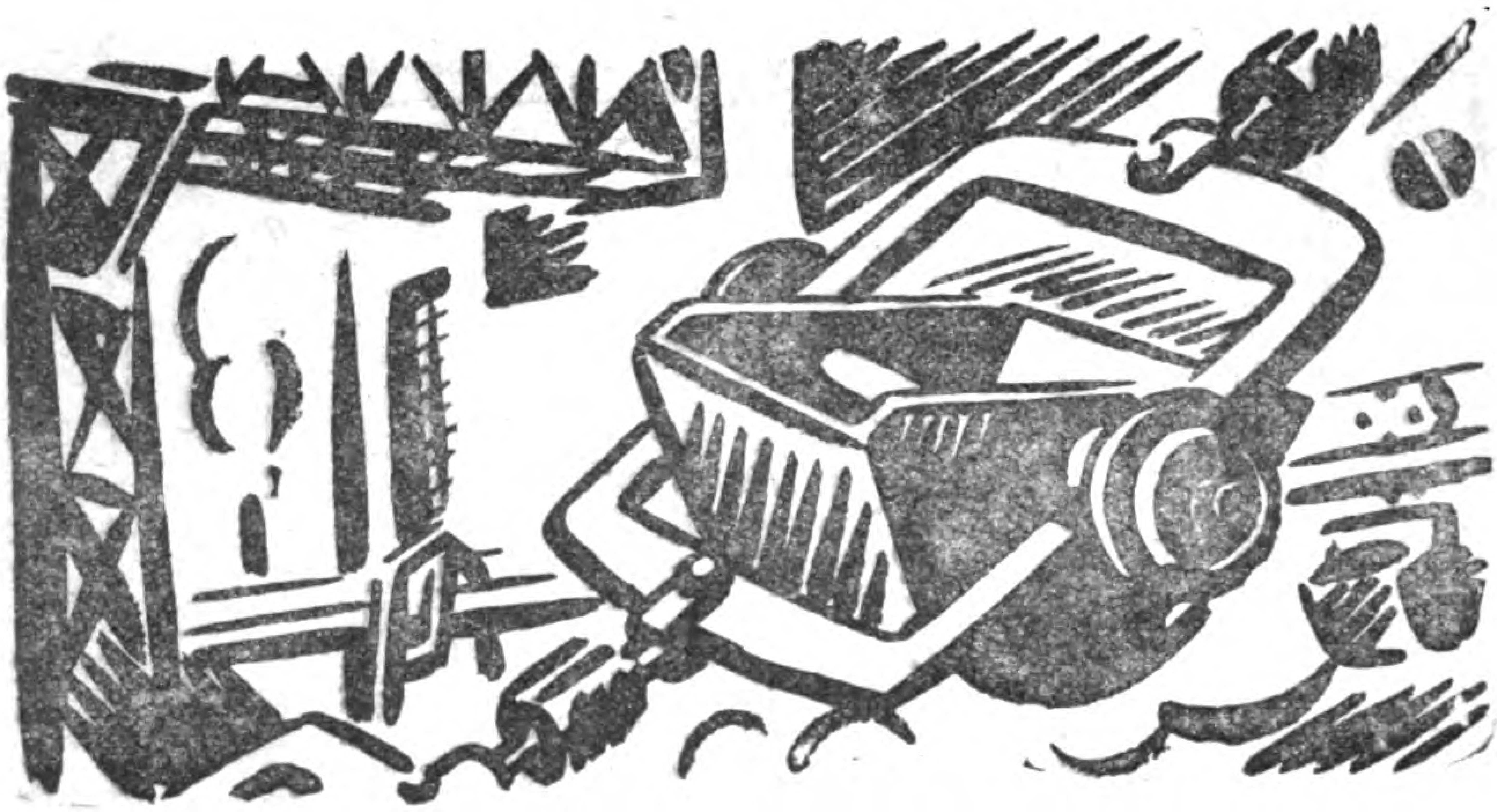
「お葉さんのエロ！……まだよ、まだよ。これからだわ。」

垂幕がひかれて、一時に百合と私は強い光にさらされた。

「出るには出られず、困つてゐたところよ。……消すわ。」

暗くなつた。曇硝子の窓から來る、街燈の蒼白い明るさだけだ。

二人の先に、私は街を出た。



炎の脈搏

細田源吉

一

街の朝靄も、今朝ばかりは白い蜘蛛のやうに動かない。
人々は靄の奥を焦々しく日戌つた。
電車は一臺も來ない。時たま、濕つたレールと、待ちぼけた人々を侮辱して、青バスが走つた。
二十分、三十分……。停留場には群集の波が寄せたり崩れたりした。
圓タク、圓タク、風を切つて行くどの圓タクの内にも、二三人の客が塡め込まれてゐる。
「市電のストライキだ」
「……これで會社までてくると四十分はおくれる！」
態ゝ見限りをつけた群集は、どこからか長い流れとなつて、アスファルトの河床を溢れた。早出のサラリーマンや、半纏や、職業婦人等々……。

T製菓の職工が、同じ河床で落ち合つた。二人は深川から出て來たのだ。一人は工場でも古参だつたが、もう一人の方は長いこと失業をしてゐて、つい二ヶ月ばかり前に入つて來た妻子持ちの臨時職工だつた。

「昨夜のうちに爭議指令が出たんだ。始發からやるつてふことだつたがね……いよ〳〵ゼネ、ストだ」

古参の方が昂然と云つた。昨夜彼は組合をつくるために、ある仲間の家で三四人集つたのだ。そこへ彼等の指導者として勞×黨から來た坂本といふ男が、そのニュースを持ち込んで、皆なを昂奮させたのだ。

「長く續くんだらうか」と、臨時職工の方が不安さうに相手を覗き込んで訊いた。

「さあ。今度の爭議は組織ががつちりしてゐるさうだからな……いよ〳〵つてば横濱も立つさうだ」古参は迅い足どりで歩きながら、「なんだつて組合からだ。組合が出來なけりあだめだよ。君なんかどう考へるね？」

「そりあ……組合が出來るに越したこたあないさ。前に働いてたとこでも、二三十人だつたけど、それをやりかけて五六人と纏らないで、そのうちに工場がつぶれちやつたもんでね……」

××町の車庫まで來ると、カーキ色の生ッ白い青年が詰めかけてゐた。腕に青色の腕章を巻きつけ、ゲートルの脚を自慢さうに踏み鳴らしたり蹴上げたりして、出勤を待ちきつてゐるのだ。

「スキャップ！」

製菓職工の古参は、その若々しい胸をむかつかせ、憤つて叫んだ。臨時雇ひは傍で小さくなつて足を運んだ。

T製菓會社の工場は、その朝誰もいひ合せたやうにサボつてゐた。七時を過ぎても、仕事にとりかゝる氣勢がなかつた。職長は焦れた。

「何時だと思つてやがる！」

「まだ來ない者があるんだ、十五六人……」

誰やらが不平さうに答へた。

「なにッ？　來ない奴にかまはずやれッ！　あらかた來てるぢあねえかッ！」

職長は呶鳴り散らした。

この朝まだ來ない職工は、その時刻までに三人くらゐのことだつた。それも仕事に差支えない臨時職工だつた。

「手が足りなくつてもやれとよッ！」

誰か職長にあてこすつて云つた。

そこで、古參の間から、

……今日は久助（註——くづ不良品のことだ）製造だぞ——と、合圖をした。カマ焚きはスチームをあけるな、混合やはふんだんに水を使つてどろ〳〵の種をあけろ、…型押しはでたらめに型を押せ、などと、口から口へ傳へて行つた。鐵骨の梁から梁をまたいでゐるシャフトの滑車が動き出し、幾條もの調帶が、混合機、自動流機、型押機、粉糖機等々にのしかゝつて、やがて緩漫なヒタ、ヒタ、ヒタと一定の調子を響かせ、第一工場の洋菓子部に仕事の雰圍氣を釀して行つた。

工場全體が、そんなことでその日の活動を起してから二時間とも經たない時分だつた。突然大音響が二百二十人餘りの職工達の耳を打つた。と、その刹那恐ろしい火焔が、第二乾燥室の出入口からハガシ場へ向つて奔出した。瞬く間にその場にあつたコンスターチに引火し、一面炎の海だ。

乾燥室の仲間のことが、誰の頭にも浮んだ。皆なその出入口へ殺倒した。

「誰と誰だ？」

「西尾と二宮だ！」

「もう一人は金蓮だ」

叫び合ひながら、消防に血眼だつた。

火の中から救ひ出された仲間は、三人が三人とも全身火のコンスターチに塗みれ、
「熱い！　熱い！」と悲鳴を上げた。
申譯ばかりの應急手當を施療室でやつて、三人は附近の病院へ舁ぎ込まれた。
三間四方の乾燥室は、火熱の漏れないやうに天井と四壁は厚い漆喰でかためられてゐて、その中央に大ストーヴが年中休みなしに眞赤に燒けたゞれてゐるのだ。そのストーヴの周圍に、タタキの床より一尺三寸ほどの高さ、二尺五寸幅のスノコが廊下状に張つてあつて、その上に菓子の種を流した「ツレ」を、四十枚づゝ積みかさねて乾燥するのだ。
なにしろ乾燥室は二百五十度以上の熱度だ。それにこゝではサボれないと來てゐる上に、三人とも疲れ出してゐた時だ。中でも西尾は腹がへつて破れたコンドームみたいな胃袋だつた。彼は踏みこたへが足りなくなつてゐたのだ。にも拘はらず「ツレ」を十八枚も肩にのせ、スノコの上へ踏み上らなければならなかつた。彼の肩の上には十四五貫の重味があつた。スノコは脚の下で挫け、よろ／＼と彼がよろけると、「ツレ」の一二枚が肩から上り落ち、コンスターチがぱつと炎となつて、彼の全身を包んだのだ。彼が死にもの狂ひで出入口へ飛び出して行くと、仲間の二人も運びかけてゐた肩の上の「ツレ」を一切に投げ出した。そこで十五六貫のコンスターチは、一瞬に燃え立つたのだ……。
生命は三人とも危篤……。
「三十年に一度あるかないくらゐの出來事ですから」と、職長が××署員の前で、慇懃に申しひらきをつゞけた。
工場の中は焦げくさい臭氣で一杯だ。ガラス窓も破れ、空箱も菓子もコンスターチも、ところ嫌はず散亂し、床にはびたく／＼に水が流れてゐた。
西尾と金蓮は獨身だつた。西尾の弟だといふ二十歲ぐらゐの勞働者が、どこからか呼ばれた。朝鮮から來た金蓮には、呼びよせる身寄りがこゝちにゐなかつた。二宮は妻子持ちの臨時職工だつた。今朝良人が歩いた道には、十分か二十分お

きくらゐにスキャップの電車が走つてゐたが、彼の女房はそれに乘つた。
いきなり△△病院へ來いと呼び出された彼女は、のろい電車の中でも、道を歩き乍らも、大きな不安で聲も出せないやうに押しつぶされてゐた。病院の中は靜かだつた。藥局と向き合つた待合室の窓からは、茂つた青桐の木立が見え、野薔薇の赤い花が目に染みた。看護婦が取次ぎに立つた後で、彼女はこみあげる悲みをどうにも出來なかつた。長い失業生活から、やつと今の製藥工場へ通ひ出したところへ、今またなんか生命に罹るやうな不幸に出逢つたのだ？…人違ひだつたら？　そんなことで會社が自分を呼び出す筈はない…。

間もなく看護婦が戻つて來て、二階へつれて行つた。

「二宮恒藏さんですか…その方はゐないんですが、附添ひの方がゐますから、その方にお逢ひになつて下さい」看護婦は云つた。

咄嗟に、…矢張り人違ひだと思つて、

「まあ…助かつた。助かつた。」と彼女は、この一二時間の家からこゝへ來た間の重い不安を投げ出したやうに呟いた。

看護婦が導いた室の扉口には、谷村千代松と書いた名札が出てゐた。

「あなたが二宮君の…」そこへ出て來て口疾に訊いたのは、會社の事務員だつた。彼は看護婦が出て行くと、不審さうに佇んでゐる彼女の耳許へ口を寄せ、

「この寢臺ですよ。…實は谷村つて男の保險證で入院させたんですから、内密にして下さい。二宮君はお氣の毒でした。ひどい火傷をしたんですよ。併し生命には別條がないさうですから…」

彼女は、ものごしの柔かな事務員を、この時かなり手賴りに思つた。健康保險に入つてゐない良人が入院するとしたら、とても莫大なもの入りで、二三日すらこんな病院へ入れられるものではなかつた。

「心配しないで下さい。保險證ですから入費は政府から出るんです。…あなたは谷村つて男を訪ねるやうにしてこれか

ら來て下さい」事務員が懇々と保險證の僞造を彼女にのみ込ませようとした。

それでも彼女はほつと吐息をし、ベッドの傍へ行つたが、地を匍ふやうな呻きと、オリーブ油の匂ひで、そこへ絶望的にへたばつて了つた。厚い繃帶にくるまれた良人は、石膏のやうな、むざんな恰好をしてゐた。眼と唇だけを現はしたその變り果てた姿に、彼女はどう言葉をかけていゝのかわからなかつた。

二

小火で濟んだ工場の一部は、すぐ新らしく手入れされた。相變らず乾燥室は一晝夜二百五十度以上の熱度で蒸し立てられてゐた。工場は殆ど密閉されてゐるので、どの室へ行つても百度以上の熱さだ。

職工達は褌一本だ。「ツレ」から菓子を選り出すハガン場で、全身の汗がコンスターチといつしよに床へしたたつた。眼がちくちくと疼いた。

手の閑な職長は、ハンケチで頸筋を拭き廻しながら、各室を見廻り、一人々々の職工の作業ぶりに眼を光らせ、混合場へ入つて來た。

隅で、混合主任の田村がアンペラを叩いてゐた。

「君、田村君、一寸！……フロレットの次はバナナだ。それで、バナナから割を五分おとしてやつてくれ！」

「割を五分……」と、田村は黒板の方へ歩み白墨をとり上げて「さうすると砂糖が六貫五百匁、澱粉が三貫五百匁……」

田村が書く傍で、

「その通りだ。……で、種をすこし固めにあげてくれッ」職長の守田が吩咐けると、一分も居たまらないやうに慌てゝ外へ出て汗を拭いた。

田村は、混合の出來た種に色着けするために立ち戻りながら、

……砂糖を五分おとせば、混合機一回——十貫目の上で、三圓五十錢違ふ。すると一日に六百貫出來るんだから、二百十圓の差だ。それで製品の値段が變らなかつたら、消費者こそいゝ面の皮だ。

「おい、また砂糖をおとすんだとよ」と、彼は傍の長谷川へ話しかけた。混合機から自動流機へ種を移してゐた長谷川は機械の廻轉を止めた。「いくらおとすんだ？」

「五分だ！　一日に、二百十圓にあたるぞ」

長谷川は凹んだ眼を瞠つた。

「べら棒な話だ。一言、あまをおとせつていへば、二百圓からの金がころりと懐へころがり込むんだからな」

「ばかにしてやがる！」長谷川は鼻の穴の中へ指を突つ込んで、コンスターチのかたまりをほぢくり出した。「今朝の新聞を見たか。うちの社でれい〳〵と廣告してやがるぢあねえか。——我社は益々品質の向上をはかり、名實共に内外の製菓界に誇り得る優良なる製品を出し、皆樣の保健と衛生、かねて美味の提供に努力する次第であります、だとよ!?……」

「なめてやがらあ！」

と、向側の佐藤といふ男が應じた。

その時、主任の田村は佐藤に注意した。

「なアおい！　うちの暴利ぶりを素破ぬけねえもんだらうか。こないだはその優良品てえのをつくり出す爲めに三人まで大火傷して死ぬか生きるかわからねえぢあねえか……」と佐藤が云つた。

そんな言葉を佐藤から豫期してゐなかつた田村は、長谷川へ思はず目くばせをした。

（ことによると、會社が佐藤をスパイにしてるかも知れないぞ。……こつちの組合のことがうす〳〵社長や職長の耳に入つたらうから）

火傷の人間を三人も出したので、組合のことを仲間に持ち廻るのは却つて效果的だつた。

佐藤の奴をもうすこし注意してやれ！ と田村は、どうかすると昂奮しがちな長谷川の方へ、そつと自分の心持を傳へたかつたのだ。

先刻から長谷川は昨夜病院へ三人を見舞ひに行つた話をしてゐたのだ。

「どうだ、驚いたな、あの朝、市電のストライキで歩いて來たんだよ、おれと二宮は。……ところが、あいつ目ばかりぱちくりさせてたが繃帶でもとつたらみぢめな面になつてるだらうからな……。それでさ、名前も谷村千代松に替へられてるんだ。あたまをおとしたり、名儀を替へさせたり、どうだあいつらのからくりは」

「ひでえ奴等だ。……」

と、佐藤が長谷川に合槌を打つた。

「君も行つてみろよ。ね、田村君、どうだ？ みんなして「谷村」の看板を見て來ることにしようぢあねえか……」

「あ……そいつはいゝだらう」

田村はもうこゝらで長谷川に切り上げさせたかつた。

職長はビスケット部へ廻つて行つた。

「おい、廣田！ 廣田！」と、二三度呶鳴つた。

見習の廣田は、職長に吩咐かつては、一日に何回も罐場通ひをした。火が强過ぎる、弱過ぎる、と職長の注意を傳へに……。するとその度に、火夫の山崎から、

「勝手な熱を吹きやあがる！ 手前が來て焚いてみろつて職長の野郎にさう云へッ！」と、呶鳴り返へされた。

「おい！ 廣田！」

職長はもう一度呼び立てた。機械から出て來た眞黒焦のビスケットを二ツ三ツつかむと、四邊かまはず、「なにしてゐるん

だ？」

「はい」

廊下を隔てた製品倉庫から、廣田が返事をしながら飛び出して來た。

「なにしてるんだ？　このざまなんだ？　なにィッ？　鑢場へ行つた？　うそつけ！」

「行きました！」

「行つた？　行つたですむか！　この野郎！」

職長の拳がいきなり廣田の横面へ飛んだ。不意を喰つた廣田は、どよどよと耐いなくよろけて行つて機械の歯車の角へ頭を叩きつけた。と、それなりぶつ倒れた。

箱詰めをやつてゐた仲間が、慌てゝ廣田をとりまいた。職長は、のそりと出て行つた。

「水だ！　水だ！　誰か、早く！　水を持つて來い……！」

「ひでえことしやァがる」

「だから、組合だつていふんだ。組合が出來てりあ……」と誰か云つた。

「さうだ。断然組合だ」と、相談會に集る一人の堀内といふ男が叫んだ。

水が持ち込まれたところへ、火夫の山崎が長身を現はした。

「おい、山ッ！　この野郎」と、堀内が迫つて行つた。「見ろ！　お前がむちやくちやに煽るから、チビの奴がこんなめに逢つて可哀さうぢやあねえか」

「あ、わるかつた、あやまる！」山崎は鑢換へをやつたらしく、灰だらけの顔を曇らせた。

「職長の奴、癪に障ること抜かしやがるから煽つたんだ。——チビ公、すまなかつた」

チビの廣田は、耳許で叫ばれると、

「う……う、う、う」と唸つた。瞼を微かに動かし、唇にあてがはれたコップから、二口三口水を飲み込んだ。

職長は包裝部へ現はれた。

その姿を認めた高瀨といふ職工は、自分の練り上げた種だといふことを見せるために

「職長さん！　どうです、この艶と來たら、たいしたもんですぜ」と、自分の製品が素晴らしい出來榮えを見せた時、なにものにも

「板チョコ」を包裝部の方へ持ち込んで來た。職工の本能は、自分の製品が素晴らしい出來榮えを見せた時、なにものにも換へられない悅びに打たれるのだ。自分の子供を產み出した母親のやうに。高瀨も今その悅びを職長にも味はせたいのだ。

しかし職長は、

「ん、よくあがつた」

と、口だけで云つて、義務的にとりあげた一つを、碌々見もしないで、もう終業際の女工達を調戲ふ方へ廻つた。彼はこの間際に女工達が「持ち出し」をやるので、監視もするのだ。

包裝に忙しい女工達は、もうてんぐ〳〵に四五本づゝエプロンの裏へ忍ばせて了つてゐた。彼女達の若い手首が、テーブルの上で練達した操作をくり返してゐた。セピヤ色の板チョコが、錫の伸板になつて次々と重ねられる。

「職長さん！」

と、中で口の輕い、しかし腕のいゝ女工のおはるが甘へた。「キヤラメル部で人べらしがあるつてほんとなの？」

「どうかな？」

「もつとはつきり云つたつていゝでしよ！」

「だが、知らんのだよ。それともおはるちやんの心配な人でもゐるのかえ」

「さうよ」と、わざとらしくおはるが答へた。「だから前もつて云つてよ」
「うるさいなあ……」
しかし職長は苦い顔ではなかつた。
「ひどいわ。……ねえ、ふうちやん、職長さんは人がわるいよ、あの手なんだよ」
ふうちやんと呼びかけられたお房は、職長の顔をじつと見た。この頃から、彼女の友達のお榮をこの職長が誘惑してゐることを呪ひたかつたからだ。その時、どうしたのか當のお榮は包裝部にゐなかつた。
職長はしばらくそこらを見廻しながら、ぐづ／＼と立ち去らなかつた。
彼の頭の中には、今夜、もう一度お榮をつれ出したい考へしかなかつた。もう一度……その後は、女と絶ちにくくなることを彼は充分考へてゐるのであつた。

終業のボーが鳴つた。
第三工場のキャラメル部は、同業の明字製菓でもキャラメルを賣り出したので、製品手控へで閑散だつた。機械の廻轉は、終業前にとまつてゐたくらゐだ。男工にまぢつて女工達も身づくろひをしにかゝつた。
脱衣場の片隅で、おきみが、お房を手招いてゐる。
「厭なこと話すけど、あんたたちの包裝部のお榮ちやんね、どうもをかしかない？　職長と。私ね昨夜××町の小さな宿屋へ入るとこ見たわ」と、鼻先のまるまつちいおきみが云ひ出した。「職長とならんで入口を入つたぢやあないの」
「それ、どうしたつてふの？」
と、お房がむつとして云ひ返した。一瞬、彼女には、薄い美人形の、細面で蒼白いお榮が、長患ひの母親と、二人の弟妹を抱へて工場通ひをする境遇が映つた。九十五錢の日給で、四人の口が過せる筈がないからだつた。

「あんた怒つたの」と、おきみは古参で頭のいいお房の氣をかねるやうに小さく云つた。「あんたのお友達だ！……氣をつけてあげたらと思つてさ……もう随分な噂だもの」

「そんなこと、なにもお榮ちやん一人に限つたことぢやあないわ。……安い日給で、一人口だつてなか／＼苦しいのにさ。うちの職長以外のところへだつて出て行く女があるぢやあないの！　私だつて、時と場合によつたらやるかも知れないわ。只、職長だからうるさいんなら、職長を呪つてやることだわ。あんな男にあんな位置を與へた會社を呪つてやるんだわ。……」お房が、そんなことで片隅へ呼ばれたことを腹立しさうに表情で見せた。

三

右翼派の千五百名今日より就業に決定
ゆうべ幹部と局長會見の結果罷業崩る

堀切市長並に掛局長と會見意見の交換を行つて考慮するといつて一たん引揚げた右翼派幹部は協議の後二十三日午前零時五十分赤坂車庫代表安井、青南代表葉場、柳島車庫代表甲藤の三氏は局長と會見、我々は協議した結果さきほどの市長並に局長の誠意を諒とし且つ全市民の交通不安を一掃するため、今廿三日より我々の所屬する従業員全部千五六百名は就業いたします、但し互の連絡が困難なため今朝發電車からの就業は全部間に合はないかも知れないが、その邊は諒解あり度いと右翼派として態度を明かにした。

二十三日の新聞を製藥工場でもあつちこつちで持ち廻つた「私達は市電罷業に際し二百萬市民諸君にいつまで交通不安を與へる事に忍びないから緊急の處置として市當局と交渉を開いた……」といふ右翼派の立場が、田村や長谷川や堀内などを飽き足りなく思はせた。

「ダラ幹」

「罷業破り！」

混合場で誰れ彼れなしに喚いた。そこでまた誰か讀んだ。

芝浦工場全員就業……即時七百五十名が無條件にて復歸就業云々、罷業第三日目で遂ひに罷業團の一角が完全に壞され、た……。

「右翼がきつとこんなことやると思つてた」

と、長谷川が言つた。勞×黨の坂本から爭議團の內幕を聞かされてゐたのだつた。

「罷業が破られることを考へると、それだけで苦しいなア……。罷業はやりたし破れる辛さ、だ」と、田村が自分達の上にも早晩こんな運命が落ちるだらうことを、健實な性分の彼は呟くのであつた。

而もこの日の新聞は更に職工達の顏を不快に顰めさせた。

朝鮮諸疑獄中の核心、釜山取引所疑獄は遂ひに廿一日東京地方裁判所野村判事の手で豫審終結決定し、前朝鮮總督尼越貫造大將外五被告共全部有罪と決定公判に回付され右決定書は翌二十二日午後六時を期して各被告に向けて發送された、云々。

收賄　東京市四谷區大番町三四　陸軍大將正三位勳一等　功二級前朝鮮總督　尼越貫造（六七）

それと列んで贈賄者とその幇助者が五人あげられてゐた。

「碌な日ぢやあねえや！」

長谷川が叫んだ。「上も下もかつぱらひだ……谷村千代松事二宮恒藏や金蓮や西尾の方が名譽の負傷者だ。功二級以上だ。

……三人とも全身燒傷三度――つて札を扉の右側にぶら下げられてるんだ」

ところが午前後になつて職長がいつにないゑびす顏をして田村達の前に現はれた。

「これから半日休むんだ。すぐ仕事を片づけて拭掃除を入念にやつてくれ！　午後一時から大臣夫人が五六人お揃ひで當會社を參觀にいらつしやるのだ……」

「半日休むと會社は大變な損ですぜ」

と、長谷川は皮肉に云つた。

「損ぢやあない！　また損でもお立派な方々へお見せするんだからよろしい。君達は早くそこらを片づけてくれ！」

「そんならもうすこし早く云つてくれりあい丶んだが……」と堀内が呟いた。

「早くわかつてたんだ。だが半日以上仕事は休めんからな……。もう一時間きり餘裕はないんだ。早く、早くしてくれ」

職長が出て行くと事務所から給仕が來た。

「どなたでも代表を一人よこして下さいつて？」

勿論仲間では代表といふ場合田村を擧げるのが例だつたが、田村自身、

「堀内君行つてくれ」と云つた。

そこで堀内が出かけて行つたが、戻つて來るとぷん／＼しながらとりついだ。

「表面は東京△△新聞社の主催つていふことだが、會社自身の頭をひねつた宣傳手段なんだ。今日の夕刊か明日の朝刊にでも今日の記事が掲載されたら廣告的效果は百％だからな。……大臣夫人達の街頭進出とかなんとかいふ見出しで、「工場視察」つてことださうだ。寫眞入りで大々的に報導されるんだつて……。社はまた社で、名流夫人の御感想を伺つたり、高貴なお姿をレンズの前に立たせたり、水莖の跡美はしい御筆跡をも利用して廣告圖案で他社を出しぬかうつてえ計劃ださうだ。事務の矢崎がさう云ふんだ。またそれに間違ひはねえんだ。……なんしろ内務大臣夫人・大藏大臣夫人、商工

大臣夫人、日銀總裁夫人てなところで、當會社が國產品に一大貢獻をしたとかいふんだ。どうだ、笑はしやあがるぢやあねえか、はッは、、、、へえだ！」

　とにかく堀内は工場全體を淸掃し、職工一同で整列して名流夫人を出迎へることを吩咐かつて來たのだ。女工の騷ぎはまた別の意味で賑やかだつた。

「どんな御人相かはつきり見てやらうよ」

　包裝部のおはまが、その場になつて怯むやうな意氣地なさをかなぐり捨て、云つた。

　工場は片端から掃除された。男工も女工も汚れた作業服を、會社の新しい白服に着替へさせられた。

「眞白で氣持がいゝけど、これも差つぴかれるんだわね」と、女工が云ひ合つた。

　ところが、全工場を擧げて歡迎しようといふのに、洋菓子部と乾燥室だけは、この光榮を頒けてもらへないことになつた。尤もこの例は前々からだつた。つまり百五十度以上の熱度を晝夜なしに充滿させてゐる場所へ、而も職工は褌一本で汗みづくになつてゐる光景の中へ、貴婦人を點景することは許されないことであつた。そこで、外部から紅白の幕を目隱しに張りめぐらして了つたのだ。

「なんでえ」と、誰かが憤る。

「人間外の扱ひしやがる」

　午後一時前後に會社の表玄關先へ數臺の自動車が緩かに乘り入れた。重役や事務員が最敬禮をした。職工達は工場の前の方で二側に整列しなければならなかつた。

　四月末の輝やかしい日光が、彼等の赭い顔を正面に照しつけた。

四

工場の横は運河が流れてゐた。對岸には、三輪土ゴム工場が、不規則な屋根をこの界隈特有の四月でも青黝い大空に描いてゐる。

今三輪土ゴムは爭議をやつてゐた。昨日までは、休みの合間といふとこの河を境に、双方で對峙しながら、

「ゴムゴム野郎」と、こつちから呶鳴り、

「裸虫!」と向ふから投げ返して來た。

ところが「ゴムゴム野郎」が職場を捨て、闘つてゐるのだ。煙の出ない煙突が大空に突き射さつて、愛嬌であつた。

こつち河岸を、工場から退けた田村と長谷川が歩いてゐた。キヤラメル部やチヨコレート部の女工達が、二三人かたまつたり、五六人一列にならんだりしながら彼等の前後を歩いてゐた。もの、二三丁も行かない間に、二人は誰からもおいて行かれた程、のろ〳〵と話しながら足を運んでゐた。

二人が研究會を持ち、工場内に組合を組織するための相談會を持つてから、もう五ケ月の上にもなつた。市電のストライキの前夜、やつと彼達は少數ながら十一人の組合をつくり上げ、役員も勞×黨員の坂本を顧問に田村が決定したのだ。勿論組合員の票決にはよつたのだが……。田村は表面に立たない方策で。

幹　事…………長谷川達太
副幹事…………堀内芳吉
會　計…………丸山政三
書　記…………尾崎由造

今二人の心持は稍ゝ焦つてゐた。三人の火傷者を出したことは、目のあたり效果の强いアヂの手段だつた。

「この月の中にもう三十人ぐらゐはどうだ」

すこし逸る性質の長谷川がもどかしく云つた。

「そりあ欲しいがね、併し自重しなけりあ駄目だ」

「勿論だ。だがね、君は自重し過ぎるよ。生きるか死ぬかつて犧牲者を小さな工場で三人も一時に出してるんだからな。……坂本さんも君のことを一寸云つてたぜ」

「どんなことを……?」田村も同年輩の、二十五くらゐの坂本に對し、一目をおいてゐるので拘泥つた。

「つまり君自身でよくいふ自重つてやつさ。×××で行かなきあどうにもならないンぢあないか」

「…………」

田村は坂本を指導者として扱ひながら、しかし長谷川の性分で坂本に引き込まれて行くのが不安でもあつた。運動に心を寄せた點で二人は前後してゐたが、電柱だの板塀だのに貼付けられた組合同盟や第二無產新聞や關東金屬のアヂビラから、いつかブハーリンの社會主義入門とかレーニンの勞働組合論とかへ傾倒した時、田村の方が長谷川を指導したものだつた。

職工の現在の心持からいつても、市電の爭議に對し、ブルジョア新聞の批判をそのまゝに呑み込んで、市民の足を奪ふやうな爭議は、正しくないなどと非難するものさへあつた。それは電車で來る職工だつた。溫情主義大家族主義の名の下に、狡猾な懷柔政策で長年職工の目隱をして來た鐘紡が、戰時手當四割削減問題でその欺瞞の面貌を剝ぎとられた大爭議でも、充分に批判の持てない者さへあつた。田村は二百二十人の兄弟が一人のこらず長谷川や自分達と一つ水準に來てゐないことを知り過ぎてゐるのだ。

夕方から長谷川の二階で二人は今夜の集りを待つてゐた。組合が出來てから二度目の會合だ。堀内だの丸山だのが七時過ぎから集つた。書記の尾崎が二十歲くらゐの組合員を、三人つれて來た。女ではお房とお粂とが加はつた。指導者の坂本の來る間、皆なの苦勞話――運動上のそれが出た。なんといつてもまだ彼等は外交的熟練を缺いてゐて、目星をつけた職工でも、それを獲得することがむづかしかつた。

「坂本さんはおそいな」誰も彼も待ちうけた。

そこで田村が長谷川を促がして議案のやうなものを持ち出すことにした。てんでの意見の中で、各部の××へ一回に四五名を限度として煽動宣傳の文書を送ること、但しその文書は絶對に勞働者的であること、それから最も肝要なことは各自が細胞として活躍する場合、その文書を受けとつた職工に對し、自分も同時にその文書を受けとつた態度で相談的に話し合ふこと、等々。それから、また雜談に入つて、保險醫の不親切なことや、工場の衞生設備の不完全なことや、職長の暴慢な行爲などを文書の中で具體的に暴露しようといふことも持ち出された。なにしろ指導者の坂本を缺いてゐてはどうにも裁決が出來なかつた。

坂本が來たのは十時半頃だつた。長い髮の毛を時々搔き分けながら、皆なの話し合つた文書の事などを批判して行つた。

「たとへばビスケットならビスケット、キヤラメルならキヤラメルの、砂糖がいくら、粉がいくら、飴がいくら、その他エッセンス、工賃、割り出された原價がいくら等々。それからその製品が卸賣の手へいくらで入つて行くか、會社の利益はどの程度か……それからこないだの工場設備の不完全さから出た犧牲者の例なんか、特にいゝと思ふな……」

それから坂本は今夜おそくなつた事情は、スパイをまくためだつたと云つた。話がそこへ行つた時、言葉を改めた。「××でなくつちや駄目だと思ふんだ。合法運動つて奴は、これから君達が作らうとしてる組合についていつてみれば、諸君の要求を會社へ要求書として提出する。會社で突き返す。そこで、合法的にはさうですかつていつて引込んでしまふ。こんな組合ぢあ仕事らしい事は一つだつて出來やしないよ。……僕達の勞×黨でも、非合法性が問題になつてるんだが」

彼はこゝで充分に黨内の空氣を、話すことがいゝかわるいか考へた。「なにしろ、僕だつて合法黨にゐることはゐるが、××の無力だつてことは云つていゝと思ふんだ。併し僕は、皆なにこれだけ自覺しといてもらひたいんだ……俺は目ざめた勞働者だ、俺は社會主義者だ、戰鬪的な勞働者だ、なんてことは、面付に出さないことだ。合法運動者なんか自分の名前を賣ればいゝくらゐな考へしかないが、僕達はもつと地下的に、鬪爭性を持たなけりあだめだ……もしだね、ストライ

キになつた場合でも、そのストライキを只一部分の勝利のために考へちあいけないんだ……小さな一部分の勝利よりも全體の解放が問題なんだ……」彼は沈んだ聲でつゞけた。

議案の文書のことなどが取り上げられた。まづ月二回、四頁くらゐの「工場新聞」を出すことが決定された。「俺達の新聞」として、愛され親しまれる讀み易い「新聞」を持つことを望んだ。その編輯は、田村と長谷川が交々當ることにした。近くの紡績會社の夜業が終つたらしく、職工達の歸る足音が溝板の上に續いたが、その内に疎になつた。

田村と尾崎は會を終つて同じ方向へ歩いて歸つた。田村は、内心の惑はしさから、

「……坂本さんは黨首の議會主義と矛盾する點をどう清算するんだらうか」と、大きな壁へぶつつかつたやうに呟いた。勞×黨の黨首は、議會の壇上から大衆へ向つて合法的な叫びを叫んだのだつた。

「勞×黨の内部に、何か意見の對立があるんぢあないか」尾崎は今夜投げつけられた不安をどうしていゝか分らなかつた。

二人はぢめついた小路をぬけ〳〵して行つた。米や石炭を沈むほどに積み込んだ船が、幾艘も浮いてゐた。どの艀の寢起きする「壺」も灯が消されて眞暗だつた。

五

「白井君、一寸！」ビスケットの大箱九貫目入りを倉庫に舁ぎ込んでは出て行く職工を、ある一人が呼びとめた。――其職工の處へ、「工場新聞」が送つてあつた。箱の小蔭の方へ白井を誘つた堀内は、ズボンのポケットから新聞をとり出した。

「それか、僕ンとこへも來たよ」

「さうか。誰が出したんだ？　讀んでみたが「T製菓罪惡史」なんかどうだ？　社長が個人經營時代からの慘酷な非行に肚が立つた。漫畫もうまく描けてる。何年か前に乾燥室から發火した時、女工が二人と男工が四人も燒死したが、碌な手當をやつてゐないちあないか……」

「女中を孕ませたつて、度々聞いてるよ。ハガシ機の齒車に腕を嚙みとられた男が發狂したつて、おれはそいつとすこし知つてたんだ。おれのこゝへ來て間もない出來事だからな。製品倉庫で積荷してる時、足を折ッぺしよつた男のこともおれは聞いてるよ。この新聞、岩城君ンとこへも羽入川君のとこへも來てる。……どうしたらいゝんだ？」

「極く内密に一度どこかで話し合つてみないか……おれの知つてる仲間も集めるから」或る一人がさゝやいた。

堀内も丸山も工場の内で機會を掴むことにぬけ目がなかつた。食事場では、いつかおのづからに出來てる自分の席を、その機會のために替へた。目的の職工の傍で、話題に注意しながら飯を喰つた。

「西尾なんか生命だけは助かつたさうだよ。もうかれこれ一ケ月近くなるだらうな……」

「三人ともいゝのか」

「うん、だが生命があつても不具者だから仕様がねえや……」その話の中へ、する〳〵と入り込む機會はすぐに來た。

お房も女工の間を歩いてゐた。彼女は製品倉庫の薄暗い二階へ、休憩時間といふと誰か誘つて行つた。「女工さん達よ」といふ刷物を、彼女はそこで誰れにも繰返して讀んだ。

「……女工さん達よ、未來は婦人のものだ」と、書き出してあつた。……私達無產階級の婦人は、毎日なんといふみぢめな取扱ひを資本家から受けてゐることでせう。朝の七時から夜の六時まで、不衞生な設備、暗いむし蒸しする牢獄のやうな工場の中に押し込められ、かよわい身體で十時間の上も働かされるなんて、實に怖しいことです。私達はよくそのために病氣します。だからその療治費は、全部資本家が出すのが當然です。

ところがどうですか。健康保險法などといふくだらない××が出來てから私達全國の兄弟姉妹達は否應なしにその健保組合へ加入させられ、工場では一日の私達の賃金の中から、一圓に付一日二錢づゝの割合で天引きして、健保へおさめるぢあありませんか。その積金のお蔭で、病氣の時は診察治療にあてゝくれるといふのですが、事實はどうでせう？病氣に

なつて醫者へ行くと、醫者は定つた金で、少ししか儲からないために、藥と云つたら碌なものを盛つてくれないのです。又診察だつて不親切です。だから私達は、折角の保險證も使はないで、別に自腹を切つて醫者に行かなければならないやうな始末です。なんといふばかな話でせう。

親愛なる姉妹よ。

會社では近く私達姉妹兄弟を馘首するといふではありませんか。理由は不景氣だ。儲らないといふのださうです。——景氣の好い時に、さんざんに酷き使つて、儲け放題に儲けておいて、不景氣になつたからつて、まるで古草履でも捨てるやうなつもりで、私達をおつぽり出さうといふのです。——この無法なことを資本家はずばずばやつつけるのです。私達はどうしたらいゝでせう? どうしたらこの我儘で横暴な資本家を懲すことが出來るのでせうか?!

それには姉妹兄弟達が××することです。皆なで一つの力に××合つて闘ふことです。

不當解雇絶對反對だ。八時間勞働制を採用しろ。健保の掛金は全部資本家が出せ。月經時は、四日間の休暇を與へろ。

このスローガンを戰ひとらなければなりません。——前にも書いてある通り、男工諸君と手を取り合つて、しつかりした勞働者の勞働組合を作つて自分達の階級を解放することをやらなければいけません。

…………。

「これ、ほんとうのことだと思ふわ。あなただつてきつとさう思ふわね!」お房は深く力を入れて云つた。

「さうだわ! 私もさう思ふわ」誰もさういはずにゐられないくらゐ動かされた。殊に月々の或る時機が來た時、從業中自由にならない身體を、どんなに苦しめるか。工場では、彼女達も、時間に縛りつけられた機械に過ぎなかつたからだ。

六

河岸には、石炭を積んだ古い木造船がいくつも横づけにされ、暑い日中を八九人の荷揚人足が、赤銅色に灼けたこぶ

くの逞しい肩に天秤をかついで、歩板を水面にヒタヒタ撓はせながら、追ひかけ合つてゐた。

彼等の「工場新聞」が出來て、運動は活潑になつた。一人の××は一人の同志を獲得せよ――このスローガンの下に組合は新しい加盟者を次々に數へて行つて、男工四十三人、女工廿一人にまでなつた。二百二十人ばかりの工場で……。

火傷した三人の仲間が退院して來た。ところが金蓮はまだ手足の屈伸の不自由な身體でどこかへ姿をくらました。彼は保險證を持つてゐたから、期間の二十九日分はいゝとしても、その後の六七十日分の入院費をどうしたらいいか。そいつを誰にも打ちあけずに心配した餘り風を喰つたのだ。逸り過ぎたのだ。二宮を僞名させた會社は、二宮と西尾の期限後の入院費を出したのだ。

「金蓮は身體の自由が利かないで、これからどこでどうするんだ」と、殘された相棒達は愛はしい顏をした。彼等は長い間横臥してゐたので、節々が他人のものゝやうに硬化して了つた。これからまだ一ケ月くらゐは、その方の療治をしないと動けないのだ。

組合事務所の長谷川の家で、役員達が寄り合つて、金蓮をどうして探し出すか、西尾達の今後の治療期間をどうするか、そんなことを相談してゐるところへ、お房がお粂とつれ立つて來た。

「會社で愈ゝ職工を内密に馘首するさうですから……」と、お粂が職長から聞き込んだ情報を持ち出した。職長から聞き込んだお粂を勇氣づけて來たのはお房だつた。

「工場新聞が會社の手へ入つたさうですよ。西尾さんや二宮さんのことで、ひどく會社が神經を立てゝるつてことを聞き込んだわ……」お房も二三の情報を持ち出した。

田村が大川端の祕密な二階へ坂本を訪ねることになつた。彼は二つも隔つた停車場で電車をおり、前後を警戒しながら、用のない郵便局へ入つて時計を合せたりした。

坂本は濛々とした煙草の煙の中で誰か仲間の一人と緊張した對談の最中らしかつた。

「この人が「黨」の日置さんですよ、あの有名な……。こつちがT製薬の田村君」

挨拶が濟むと、田村は先刻までの二人の啻ならない空氣の中へ卷き込まれたやうに呼吸苦しくなつた。併しすぐ坂本が、日置から田村の方へ向き直つて彼の持つて來た情報を聞いてくれたので、その對策を相談した。會社側が「工場新聞」に對して、どの手段で壓迫するか、A形か、B形か、C形か、D形か、それから馘首の場合どうするか、一つ〳〵坂本は紙の上に書きつけて行つた。

「その退院した仲間だね」と、坂本は云つた。「どうだらう、明日にでも工場へ訪問させるんだ。仲間が入院中見舞つてくれたお禮つてふことで。それから重役室だ。……その間、二三時間はサボつてみるんだ」

大體の方針を議了した後で、田村は先刻から坂本と日置の間に醸されてゐた空氣が氣になり、長居をしてはわるいと思つて起たうとした。しかし坂本の方が田村へ話しかけた。

「勞×黨も動搖してるんだ。君にだけ話したかつたが……それでどうも君の組合へ力づよく働らきかけられないでゐるんだが……昨夜はM鐵工場の細胞が、一昨日の夜はS印刷の細胞が來たし、明日の晩はA機械製作のが來るんだけど、今までの僕達「勞×黨」の非合法派は實は手も足も出なかつたんだ。だがね」

と、坂本はしばらく呼吸をおいた。「大阪の勞×黨支部がとても動搖して、、黨そのものの解消を叫び出したんだ。この春のゼネラル・モータースの大爭議の場合でも、岸和田紡績の場合でも、合法勞×黨の無力さを暴露したンだからね。全協系の徹底的な鬪爭力を見たら、まるでなつてゐないからね。……三四日前から大阪の同志が日置君あたりへ頻々と手紙を寄越すンだが、勞×黨の非合法派が勞×黨の解消鬪爭をやつてるんだ……解消鬪爭は斷然有利らしい。そこで僕達は、こつちで呼應して立たうと思ふンだ。いずれ勞×黨に對する僕達の態度が決定すれば、もつと積極的にやれるよ」

傍で、日置も二三の口添へをやつた。

それから三四十分してそこを出た田村は、彼等と手をつないで行く熱意におふれながら、六十人の組合員のことを考へ

ると、足の爪先きまで熱ばんで來た。「坂本さんがそこまで行くつもりなら、自分は勿論だ！」

家で待つてゐた長谷川達四五人と、萬事の打ち合せを終つたのが一時前後だつた。皆なを靜かに送り出しながら、

「おれ達の××はいまにはちきれるところまで行くぞ！。もうすこしだ！　見てゐろ！」田村の昂奮には底力があつた。仲間は煽られた。

一人になつた田村は、あけ放した窓のところで仰向けにころがつた。彼の頭の中には、無數の話對手が浮んでゐた。

——おれは坂本さんの矛盾はどつちにか片づけられるだらうつて思つてた‥‥でなかつたらどうなるんだ？

——もう安心ぢあないか。鬪爭へ、まつしぐらに突込んで行くンだ！

——それで大衆はいゝか？——おれがその一人ぢあないか！

裏口の方でなにか氣勢がした。田村は跳ね起きてその氣勢を警戒した。

「私よ」さう靜かに低く云つたのは、お房の聲だつた。「今、そこで皆なと別れたけど、なんか今夜もつと〳〵誰かと話したくつて、とても歸れないの‥‥。ね、田村さん、そこらをもう一時間ばかり話しながら歩かない？」

「あ、出よう！」田村は戸を引いてから、夜風の中へ出た。やたらに小蟲が顏へとびついて來た。

七

眉の燒け落ちた、蠟引きみたいに皮膚のてらてらした顏で、西尾と二宮の二人が杖にすがつて工場へ現はれた。

風あたりのいゝところを探し歩いてゐた職長は、汗の浮いた顏に苦々しい表情をした。

「よく來てくれたが、身體もわるさうだからこのまゝすぐ歸つてくれ！」と、彼は追ひ返さうとした。

蒸されきつた工場の中から、職工が我れがちに二人の方へ飛び出して來た。皆なは、二人をとりまいて喚き叫んだ。胸一本の職工たちは汗とコンスターチでベト〳〵した裸體をこすり合ひながら、足ぶみした。

「手をあげるなッ！……命令を聞かねえかッ！」職長はいきり立つた。「せつかくおれたちを訪ねて來たンだ！」誰も職長の命令を諾かなかつた。「手が曲らねえさうだ！」「まだ一ヶ月くらゐ働けねえつてよ」「その一ヶ月どうするンだ」職工の喚きがごうごうと起つた。女工達は、さすがにすこし距離をおいて、まるでどこかから降つて湧いたやうな面貌をした仲間を目戍つてゐた。

「事務所の方へ伺ひます」と、二宮が云つた。

「行かンでもいゝ。作業の邪魔をするから歸つて休養してくれ。見たところ、まだ歩けないやうだから」職長は、さも温情ぶつた口吻で遮つた。

わいわい立ち騒ぐ職工たちは、二人をとりまいたまゝ事務所の方へ向つた。事務所の入口には、早くも三四人の事務員が立ちはだかつてゐた。

「社長さんにお目にかゝつて一言お禮を申述べたいんで……」西尾達が云つた。

「今、お客さんで社長は逢へないから」

「それぢあ、一寸待たせてもらひます」

二人は、事務所の石段のところに、曲げにくい腰を曲げて、そつと身體をおいた。

そこへ職長が慌てゝ飛んで來て、肩先きを抓むやうにして二人を引き立てた。門衛も手傳つた。しかし二人はどつしり尻をおいて了つた。

職工は追ッ拂らはれた。その度に一應は退いたが、また遠巻きに二人を守護するやうに集つて來た。塀内がおもに職工の背後で差圖した。

その午後、十五六人の馘首が工場内に知れ渡つた。

「馘首はやめろ！」

「放り出すなッ！」

各部の職工が叫んだ。

「食事場へ集れ！」と、尾崎が工場中をふれ歩いた。六七十人が、一齊に二階の十坪ほどの食事場へかけ上つた。洋菓部の轟、北村、大野、ビスケツト部の堀内、白井、羽入田、岩城、チヨコレート部の齋藤、老川、キヤラメル部の關口　鹿倉石田等々それにお房達女工が集つて事た。罐場の山崎は先登を切つた。

「従業員大會」を待つことになつた。階段口を、宿直室から剝がして來た疊でふさいだ。

拍手が湧き立つた。田村が正面を切つて起ち上つたのだ。

「馘首は絶對反對だ。だが、諸君、馘首反對と同時に、おれ達の待遇手當をそのまゝに放つとくことは出來ないンだ‥‥」

そこで、彼は代表者を選び、嘆願書を出す提案をした。

忽ち田村の提案はそつくりそのまゝ大會が承認した。代表者を選出した。同時に委員も。その委員達が大會に集つた職工の「誓約」をとり集めに廻つた。

中で、「誓約」に躊躇する者もあつたが、湧き返つた多數の壓力が引つ張りつけた。

組合の幹部でかねて用意しておいた嘆願書が、やがて讀み上げられた。

拍手と歡聲が食事場を動かした。

大會が「嘆願書」を可決した。

北村、堀内、山崎、石田の四人が代表者として嘆願書を托された。堀内が呶鳴つた。

「諸君！　我々代表者が諸君の要求を彼奴等に叩きつけるんだ。彼奴等が承知するしないは諸君の×××如何によるんだ。諸君！　おれ達に諸君の團結力でこの職責を全うさせてくれ！」

「ようしッ！　しつかりやれ！」

「團結は强いぞッ！」

また拍手と喚聲だ。四人の代表者が階段をおりて行つた。五分間のアジ演說會になつた。

長谷川が最初に起つた。

「終業迄に會社は回答する」

その報告を齎して代表者が歸つて來た。

「回答のあるまで××だ」と、田村が叫んだ。

「サボだ。やるぞ！」

「サボだ」

「サボだ」

喚きながら、抱きつきながら、二階をおりた職工達は職場へなだれて行つた。その後からいつかお房と田村は涙ぐむやうな昂奮を抑へてゐた。

「これからが大事だ」

と、田村が腹から出る深い力で云つた。二人は力を信じ合つた。お房は內助者の溫かな手で田村の手を握つた。そこへ長谷川達五六人が近寄つて來た。いひ合せたやうに、交る〲田村とお房の手をとつて二三度振り〲した。彼等は×××を立てゝ考へを練つた。

終業のボウが殊更に長く鳴つた。

告

嘆願條項ハ全部拒絕ス

右告知ス

昭和五年八月　日

社長　廣川寅太郎

その告知書の傍に、一部の策謀家にのせられるなといふ長たらしい工場長の論告書が貼りつけられた。
「拒絶だ！」
「今度は××だ！」
と、その二つの貼紙の前で職工達は湧き返つた。
「誓約」を躊躇した職工は、
「それみろ！」と喚いた。
「なんだ！ それみろだ？ もう一度いつてみろ！」
誰かいきり立つた。
「止せ、止せ！ 仲間でやるなッ」
女工達は不安な顔を見交はした。
飛んで來た長谷川は、社長や工場長の掲示をびり／＼と××とつた。

嘆願書を叩きつけて、そいつを蹴られた彼等は、すぐに委員會を食事場でひらいた。
「要求書だ。そいつを突きつけて蹴られたらいよ／＼爭議だ」
そこで決議されると田村だけが大川端の坂本のところへ廻つて行つた。對坐すると、二人は今日の情勢から明日の××を攻究した。要求書も作成した。爭議に入るとすぐ着手出來るやうに、宣傳隊、各職場班隊、糾察隊、通信隊、見張隊等々の編成をも急いだ。
「なんてつたつて自然發生的な團員が多いんだからね、感情的形式で××するんだ。これから惡辣なデマが飛ぶから君はどこまでも頑張つてくれ！ それから會社との交渉は前から打ち合せてたやうに二宮の假名一件で會社を脅かすことだ

な。假名した場合十年の體刑だから社長はへこたれるよ」坂本はいよ〳〵頻繁になるレポの敏捷さを考へて、「明日こゝを越さう！　どつか君のいゝと思ふとこないか」
「見つけて知らせませう」
「こゝの出入りもいけなくなつて來たんだ」

八

その翌朝だ。
門衛所から事務所前へかけて、二十人ほどの知らない人間が集つてゐた。長谷川や堀内は職工が來ると食事場へ上つてくれと云つた。
「門衛所にゐた野郎はなんだ？」
「暴力團だ」
「8會か」
「もうそんな野郎を入れてるのか」
職工達は憤つた。狹苦しい食事場にぎつしりと皆な詰めた。
堀内が要求書を讀み上げた。
…賃銀は三割増しだ。臨時雇は三ヶ月以上本雇に直すことだ。退職手當は一年未滿工場で働いた者に一年一ヶ月分の手當だ。それ以上はそれに準じることだ。女工は月經時四日間休養のことだ。保健の拂込みは會社持ちだ…等々を、列記した通り聲に力を入れて職工達の胸を搖ぶつた。拍手だ。波のやうな歡聲が押し寄せた。衛生設備のことなどが次々と讀み上げられた。滿場一致で可決した。

田村、長谷川達が昨日の交渉委員を先頭に勞働歌を高唱しながら整然として階段をおり、事務所へ向つた。交渉委員が扉口から入えると、

「わつしよ！　わつしよ！」

「わつしよ！」

「わつしよ！」

待ち構へた職工達は熱狂した。暴力團との距離が狹められた。

「わつしよ！」

「わつしよ！」

交渉委員が十分とも經たないで入口に現はれた。堀内が先刻の要求書をふり廻しながら呶鳴つた。

「諸君、要求書は蹴られた。彼奴等はこの不景氣に贅澤をいふな、ストライキがやりたけりやおやれ、紹介所へ云つてやれば、一束いくらで勞働者が來ると吐かしやがつた……」

堀内の聲は終ひまで通らなかつた。職工達が憤慨から怒號へ爆發したのだ。その瞬間に他の側から二十人ばかりの人間が職工の間へ突入した。蹴つた、投げた、引つぱつた、喚いた、呻いた。女工達の鋭い叫びが起つた。どつちからも、怒號だ、怒號だ……。

××が乘りつけた。

××がはじまつた。

「檢束されるな！」と田村達が叫んで、さつと引き揚げにかゝつた。

灼かれた砂埃の街通りでビラを撒いた。

第一回の爭議眞相發表演說會を表通りの演藝場で開いた。火夫の山崎が司會者になつた。年少の爭議團員の後で尾崎が立つた。彼は二分間とも喋舌らない内に中止を喰つた。

「官憲横暴！」

「辯士、つゞけろ！」

聽衆が喧いだ。

堀内が三分と續けると、また中止だ。

「横暴！　横暴！」

床板を踏み鳴した。野次が湧いた。

控室の意見は、西尾と二宮に聽衆へ挨拶させることになつた。二人とも喋舌れなかつたから、朴吶に頭を下げた。聽衆は彼等の痛ましい外貌に唸り出した。怒濤のやうな喝采が起つた。その後でまた若い爭議團員が立つと、

「女辯士を出せ！」

「眞相がわからん！」

聽衆が喧ぎ出した。そのごう〳〵とした聽衆の聲が控室に詰めた爭議團員を當惑させた。肝腎の長谷川がゐないのだ。機密な打ち合せで坂本か田村のところへ行つたのであつた。

お房達がビラ貼りを終へて控室へ入つて來た。司會者は途方に暮れながら控室へ降りたが、

「ふうちやん！　君、すぐ出てくれ」

「だつて……！」

「なんだ、そんなこと恥しがる奴あだめだ！」

と、司會者の山崎が彼女を明るい舞臺の方へ押し出さうとした。そこへ、長谷川が驅けつけて來た。

「おい！　坂本さんと田村が檢束された」
「今かッ？」
「さうだ！　大事な指導者を失つた！」
長谷川は喘ぎながら吐くやうに云つた。
「聽衆へうつたへてくれ！　辯士のないとこだ。出てくれ！」山崎が長谷川を促した。
昂奮し易い長谷川は壇のところへ出た。いつもより一層口迅く熱中し、「注意！」を二度喰ひながら、爭議までの經緯と、たつた今、爭議團が指導者を奪ひ去られた苦痛と打撃をうつたへた。
「××と資本家はぐるだ！」
「辯士中止！」
聽衆は會場から街路へ溢れた。
アスファルトの舗道の上で爭議團員はあつちこつちにかたまつては警官に追ひこくられながら、幹部の出て來るのを待つてゐた。警官はいきり立つて彼等を追ひ散らさうとした。
出て來た幹部と××の間に口論が起つた。爭議團員は殺到して來た。××は手硬さうな男を檢束にかゝつたが、長谷川達はそれらの男を奪還しようとして爭つた。
長谷川もその場から檢束された。

八月二十日――第二回演說會ヲM演藝場ニテ開催ス。開會一時半ニシテ解散サル。爭議團員四名檢束。坂本、田村ノ拘留三日、未ダ何日出サレルトモ判明セズ。長谷川歸ル。（尾崎記）
八月二十一日――綿糸公園ニ集合シ、京街ヲデモ。會社ノ出張所ヲ襲ヒ窓硝子ソノ他ヲ××ス。工場へ向フ。暴力團ト××トガ協力シテ會社常備ノ非常用蒸氣ポンプヲ引キ出シテ防備ス。會社前ニテ二十名ノ團員檢束サル。檢束者ノ内、七名ヲ奪還ス。××黨、G組合[illegible]

リ應援ノ申込ミアリ、長谷川ノ意見ニテ拒絶。（尾崎記）

八月二十二日――本部ニテ對策協議中、無屆集會ナリトシテ解散サル。坂本ハ未決ニ廻ハサレタ。田村ハマダ拘留中。共產黨ノ關係ナリトイフ「デマ」飛ブ。田村ヲ中傷スルタメ、女工トノ情事巷間ニ傳ヘラル。爭議團ニ不利ナリ。夜、突如長谷川、堀内拘引サル。（尾崎記）

八月二十三日――尾崎、工場長ト接見、二宮ヲ偽名シテ入院セシメタルコトヲ頻ニ怒號シタリ。工場長ノ困惑ヲ認ム。（尾崎記）

八月二十四日――

尾崎も檢束された。

三日目の正午頃彼は出された。主腦部を失つた爭議團の足並みは、目に立つて亂れてゐた。

二十六日の新聞は彼を驚かした。勞×黨大阪支部分裂の兆といふ大標題の下に、左翼民主々義に對し解消同盟の結成を傳へた記事だつた。その解消派の主張するところは――現在の勞×黨の如き左翼民主々義は徒らに反動的役目を遂げるばかりで階級の利益を獲ることが出來ない。寧ろ大衆の成長を妨害するだけだ。階級的闘爭のみがプロレタリヤを××するものだ、全黨の解消へ――黨員を××主義の泥濘から救へ……云々。

長谷川の拘留はもう七日目だ。堀内は昨日出て來た。尾崎は堀内の顏を見守りながら叫んだ。

「おれ達はどこへ行くんだ。非合法か合法か……？　とにかくおれ達はどこへ行くんだ。坂本さんの言葉の矛盾は勞×黨内の矛盾だつたんだ」

その日工場へこつそり入つた職工が五六十人もあるといふ情報が來た。（終り）

定價		送料
一冊	八十錢	參錢
六冊	四圓八十錢	送料共
十二冊	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割增の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和五年十月十八日印刷
昭和五年十一月一日發行

（禁轉載）

編輯兼發行人　島中雄作

東京市牛込區榎町七番地
印刷人　竹內喜太郎

印刷所　日清印刷株式會社

東京市丸ノ內ビルヂング五八八區
中央公論社

電話丸ノ內（〇〇〇）五五三五・五五三六・五五三七番
振替東京三四番
同長野三二〇五番

世界經濟年報

—1930 II—

第十輯

震撼しつゝある日本恐慌・その運命を本年報にトせよ！

ヴアルガ著　經濟批判會譯　定價七〇錢　送料六錢

世界經濟恐慌を通じて本年報はマルクス主義經濟學の優越を目ざましくも立證した。合衆國高景氣の絶頂にあつて早くも恐慌の免れ難いことを豫言したのは本年報だ。最初の取引所恐慌のときに世界恐慌の襲來を斷言したのも本年報だ。現在、ブルヂョア的氣休め理論を一蹴して、世界恐慌の擴大と深刻化とを正しく説明してゐるものは、本年報を措いて外にない。殊に本輯は日本恐慌を取扱ひ、戰後景氣の型、恐慌繼續の問題に觸れてゐる點で最も注目に値する。

		定價	送料
(1)	—一九二七年上半期に於る	.九〇	.〇八
(2)	—一九二七年下半期に於る	一.〇〇	.〇八
(3)	—一九二八年上半期に於る	一.〇〇	.〇八
(4)	—一九二八年下半期	一.〇〇	.〇八
(5)	—一九二九年第一期四半年	.八〇	.〇六
(6)	—一九二九年第二期四半年	.八〇	.〇六
(7)	—1929 III—	.九〇	.〇八
(8)	—1929 VI—	一.〇〇	.〇八
(9)	—1930 I—	.九〇	.〇八

發行所　東京市麴町區四番町九　振替東京二四八八九九　叢文閣

CHUO KORON (*The Central Review.*) **Published Monthly.**
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. TOKYO JAPAN.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

宿直